俳諧歳時記

俳諧歳時記

冬

高濱虚子
志田義秀
國富信一
武田祐吉
山本信哉
寺尾新
牧野富太郎

改造社

例言

一、本書は「俳諧歳時記」冬之部とす。

一、冬之部に採用せる季題の選定併びに排列の順序は、專ら解説擔任者の意見に依りたるも、古書校註の部にのみ存する古季題は、編輯部に於て適當と認むる個所に插入せり。

一、冬之部收載季題の範圍を、他季との區別上便宜示せば、立冬より立春の前日迄を基準とし、これに陽曆十一月・十二月、及び陰曆、十月・十一月・十二月を割り當て按配したるものなり。隨つて陰曆十二月に屬する季題は、陽曆に換算すれば一月となるものも冬之部に入りたり。即ち現在行はれざる古季題、或は今日舊曆の十二月に行はれ居る行事等は之に屬す。但、陽曆一月の季題は新年之部に入るも、新年行事と關係なきものは冬之部に入りたるものあり。

一、冬之部の季題中、秋之部又は新年之部等に重出せるもの數ケ所あるも、これは便宜のため兩者に入れたるものにして、季の決定は兩者を對照すれば判明するよう心掛けたり。

一、本書收載の例句は、句作併びに鑑賞上の便を考慮し、名句集を兼ねしむるため、從來の例を遙かに凌ぐ句數の採擇を乞ひて收容せり。排列は擔任者の意向による。

一、參考の部分擔は別記の通りなるも、排列の結果、他の部門に屬する様なりたるものは、該部門の擔任者と區別するため、特に筆者の姓を文末に附したり。

一、插畫は高濱氏の選定を主とし、之に編輯部に於て追加せり。尚、牧野・寺尾兩博士の好意をも得たり。

一、本書の執筆分擔は左の如し。

季題解説・實作注意・例句　　高濱虛子

古書校註　　志田義秀

參考

　時候・天文　　國富信一

　人事　　武田祐吉

　宗教　　山本信哉

　動物　　寺尾新

　植物　　牧野富太郎

昭和八年十月

序

初め改造社から俳諧歳時記の春之部・冬之部の二册を編輯することの相談を受けた時分に、私は多忙でもあるし其任に非ずと云つて辭退した。けれどもたつてとの事であつたので、富安風生・山口青邨の二君の助力を俟つことによつて遂に承諾することになつた。兩君もそれ〴〵多忙な境涯に居られるに不拘、計畫・總攬・校訂・整理・選句等のことに任じて私の勞をして極めて尠からしめたことを深謝する。其他ホトトギス同人諸君を初めとして、幾多の人々の解説の勞を分擔せられた事を深謝する。又、井手原太郎君が事務・筆寫等の一切の煩勞を執られた事を深謝する。

尚、冬之部の解説に當られた諸君は概ね左の如くである。

東京　松藤夏山君
京都　池尾ながし君
東京　安田蚊杖君
北海道　石田雨圃子君
東京　鈴木花蓑君
堺　山本梅史君
東京　三宅清三郎君
大阪　皆吉爽雨君
船橋　齋藤雨意君
大阪　日野草城君
三河　岡田耿陽君
大阪　富岡犀川君
大阪　大橋櫻坡子君
京都　鈴鹿野風呂君
大阪　山口誓子君
大阪　田村木國君
神戸　岩木躑躅君

朝鮮　清原枴童君
大阪　藤田耕雪君
鎌倉　松本たかし君
丹波　西山泊雲君
東京　池内たけし君
滿洲　江川三昧君
臺灣　山本孕江君
臺灣　山本岬人君
下關　日原方舟君
門司　熊岸寸亭君
東京　石島雉子郎君
新潟　中田みづほ君
東京　佐藤漾人君
九州　杉田久女君
東京　中村草田男君
大阪　皿井旭川君
山陰　山本村家君

この他、二三項宛不明なものを依賴したもの、或は報告されたうちから採用したもの等は甚だ多數であつたため、芳名は省略する。

其他、新題の報告・舊題の參考・日々の自然現象の報告・希望・訂正など、各地から熱心に送つて貰つたものは夥しい數に上つた。これ亦一々芳名は記載しない。これらの取捨は全體との調和を考慮して決定した。

尚、「年中行事」「山茶花」「北海道樺太新季題句集」からは夫々挿繪・新題等二三採錄する便宜を得たことを附加し、共に深謝する次第である。

昭和八年九月十一日

高濱虛子

凡例

一、當方で解説を附した季題は總數六九二項、これを時候・天文・地理・人事・宗教・動物・植物の七部門に分類し、この配列の順序は所信に從つて決定した。新題、舊題の整理も出來るだけ行つた。

一、季題解説は凡て事實を根底とし、一應全國の同人に依囑し、集つたものを再訂三訂し、更に不明なものは何回でも問合せた。地方的なもの專門的なものは凡てその地方の人、專門の人の言を徴し、若くは實地到査した。この爲め古題は稍〻面目を新たにしたかと思ふ。

一、新題は北海道・樺太・朝鮮・滿洲・臺灣に亙つて、洽く檄を飛ばして蒐集し、嚴選した。その他、各地からの夥しい報告を取捨し、現行歳時記を渉獵し、新題で收錄すべきものは、一々各作家に解説を求めた。

一、例句は總數九千餘句、うち左の三十六家、約四千六百句は改造社より必ず加ふべき句として指定されたものであつて、當方の權限外である。

宗因　芭蕉　鬼貫　言水　素堂　來山　浪化　丈草　去來　其角
嵐雪　許六　惟然　北枝　支考　杉風　沾德　桃隣　千代　蕪村
太祇　召波　樗良　也有　蓼太　几董　白雄　曉臺　闌更　士朗
巢兆　成美　一茶　乙二　蒼虬　梅室

但しこれら古句は一句々々定本によつて校合した。
其他の古句は當方で選錄した。其等の句の出典は一々明にした。
尙、出典は概ね原書名通り明記したが、左の五書は長いため下の如く略記した。

同人俳句集は　同人
懸葵第一句集は　懸葵
ホトトギス雜詠全集は　ホトトギス
續ホトトギス雜詠全集は　續ホトトギス
同　全集以後は　ホトトギス誌

高濱虛子

凡例

一、擔當の古書校註の部分の編輯の方針及び引用書は、夏之部・秋之部と略〻變りはない。

一、引用書は凡て原本に據つたが、目次記事は珍書同好會複製本に據り、滑稽雜談は帝國圖書館本に據ると共に、國書刊行會印刷本を參酌した。

一、馬琴の俳諧歲時記と青藍の栞草とに就いては、俳諧歲時記として引く方がよいと思はれるものゝ外は、便宜上凡て栞草を引いて置いた。

一、通讀の便の爲め、送假名を施し、それは正しきに從つたが、原文の假名遣は、成るべく原文の俤を存する意味で、一切改めぬ方法を取つて見た。それ故假名遣の一致せぬ所があるが、それは判別がつく筈である。

一、原文に振假名のないものでも、取意上振假名のある方がよいと思はれる語には、成るべく振假名を施して置いた。

一、註は簡略に失する嫌があるが、成るべく考證的な方面を主として見た。

昭和八年十月

志田義秀

部類目次

目次

時候

天文

地理

人事

宗教

動物

植物

冬之部

時候

冬（ふゆ）

三冬（さんとう）　九冬（きゅうとう）　玄英（げんえい）　安寧（あんねい）　靜順（せいじゅん）　黑帝（こくてい）　玄帝（げんてい）　顓頊（せんぎょく）　玄冥（げんめい）　上天（じょうてん）　羽音（うおん）　律權（りつけん）

古書校註

【滑稽雜談】禮記に曰、冬の言たる、中也。中は藏也。註に、物の藏は、必ず外より內に入る。故に曰、中は藏也。（略）○蔡邕月令に曰、冬は終也。萬物是に於て終る也。（一）易の通統圖に曰、日北方黑道を行く。北陸と曰ふ。之を冬と謂ふ。（一）和訓栞解に云、（二）冬をふゆと訓せしは、ひゆといふ心也。天氣寒くてひゆる故なり。ひとふと相通ず。

【年浪草】漢書律曆志に曰、太陰は北方、北は伏也。陽氣下に伏す。時に於て冬たり。冬は終也。物終藏して乃ち稱す可し。尙書大傳に云、北方は伏す方也。萬物の方に伏す也。冬は中也。物方に中に藏する也。陽盛んなるときは、則ち萬物を呼茶して之を外に養ひ（夏と謂ふ）、陰盛んなるときは、則ち萬物を呼吸して之を內に藏す。故に曰、呼吸は陰陽の交接、萬物の始終なり。

註（一）なほ滑稽雜談には、異名として、玄英・玄冬（註に安寧・三冬・九冬がある）・靜順・貞冬・信冬・昵冬・嚴冬・陵冬・窮冬・闇冬・一冬・盛冬・大冬・黑帝等を擧げ、年浪草に揚げる顓頊・玄冥・上天・羽音・律權等も異名である。增山井には玄帝もある。（二）此の說を年浪草には日本釋名に依つて擧げてゐる。

季題解說

十一月初め立冬より二月はじめ立春の前日に至る間の季節を言ふ。三冬は初冬、仲冬、季冬の稱、九冬は冬九十日の稱である。（然し歲時記に於ては便宜上、十一月、十二月、一月を冬とする習慣になつてゐるやうだ。）

例句

冬

冬ざきや隱逸傳の翁ぐさ　宗因（梅翁宗因發句集）
石かれて水しぼめるや冬もなし　芭蕉（東日記）
冬庭や月もいとなるむしの吟　同（芭蕉翁全傳）
冬もまた松の木持てむかひけり　鬼貫（鬼貫句選）
何ふるとさだめぬ冬ぞたのもしき　同（俳諧七車）
冬見れば松にひきそふ茶臼山　來山（續いま宮草）
[illegible]たすむに聞のなき冬の嵐かな　同（同）
[illegible]かけ侍あれや堅田の冬けしき　其角（五元集）
夕日を惜む隙なし冬景色　支考（[illegible]）

起うきを起出て冬のいさみ哉　太祇（太祇句選）
針に苧を長く付たり冬の宿　乙二（をのゝえ草稿）
飴包む見世の木の葉も冬げしき　同（同）
踏まじよ冬の薺も昔めく　同（同）
蜷ほどな舟にも冬のうつりけり　同（同）
住はすむ七面の冬を背戸の口　同（同）
たのもしき垣根や冬の露の臺　蒼虬（蒼虬翁發句集）
冬されは蘆の花ちる遠干かた　智蘊（冬のすさみ）
煎餅干す日影短し冬の町　子規（子規句集）

草庵

冬さびぬ藪澤の竹明月の書　同（同）
のら猫の糞して居るや冬の庭　同（同）
筆ちびてかすれし冬の日記かな　同（同）
髯のある雑兵どもや冬の陣　同（同）

蕪村遺稿刻成

冬の部に河豚の句多き句集かな　同（同）
家よりも佛大事や母の冬　櫻坡子（ホトトギス）
薄らかに天蓋影や冬疊　蓼雨（同）
煮ゆるもの皆濃き湯氣や冬厨　意外（同）

母逝く

臨終や泣きつゝ走る冬廊下　和香女（同）
軒々に揚舟したり島の冬　萬[illegible]（同）
時化あとの浪のあをさや冬鷗　多洞（同）
日當れば藤棚影や冬の庭　たけし（同）
冬庭に舟を吊りたる耶かな　一竿子（同）
鐵瓶に茶巾干しかけ宿の冬　春梢女（同）
錢入れて出でぬ神籤や冬社　ゝ石（同）
須彌壇の裏ものおきや堂の冬　野影（同）
冬寺や薪を積みたる鐘樓堂　軒石（同）
手にとればさと薄曇り冬鏡　怒愛庵（同）
枕摺れしてゐる頰や冬鏡　寸七翁（同）
冬濱をかゆきかくゆき小犬かな　枴童（同）
拱きて立てる漁師や冬の濱　春夜妻（同）
松が根の纜ずれや冬の濱　木母寺（同）
冬雲雀西日に少し上りけり　默禪（同）
冬の蜘蛛足をたゝんで死にゝけり　田舍佛（同）
冬の蚊の落ちつゝ壁に縋りけり　素卿（同）
冬耕や痩せこけ馬をはげまして　雨意（同）
冬耕や印ばかりの馬の墓　巨青（同）

冬土や飜れ敷きたる梅擬　俳小星（同）
じやのひげの實られる冬の垣根かな　村家（同）
冬蜚や時計の下の三時ごろ　一水（ホトトギス）
大煙に透けて星あり冬の暮　寥々（同）
冬水や能の厠の手水鉢　喜太郎（同）
冬水や南天挿して生簀箱　橙黄子（同）
日あたりに鯉現れぬ冬の水　雨瀞（同）
唐崎にて
冬湖に竝び鎖せる艇庫かな　夢仙（同）
我のみに著きし汽船や冬の湖　都穗（同）
山影を眞つ逆さまに冬の湖　青史（同）
浮みたる煤が走りし冬の水　すゝむ（續ホトトギス）
橋裏の釣し竹瓮や冬の水　無厓（同）
冬の湖郵便船のはしるのみ　浮沈城（同）
冬耕や志賀の浦波しづかなる　七步（同）
干からびて赤き人手や冬の濱　的浦（同）
祇王寺
石舟を外れし筧や冬の庭　積翠（同）
冬の水浮む蟲さへなかりけり　盧子（同）

立冬（りつとう）

冬立つ（ふゆたつ）　冬に入る（ふゆにいる）　今朝の冬（けさのふゆ）　冬來る（ふゆきたる）

古書校註

【增山井】　立冬の節　十月の節也。

【滑稽雜談】　素問註に云、立冬の節、初五日水始めて氷る。次五日地始めて凍る。後五日雉大水に入つて蜃と爲る。（一）是十月の節の三候なり。

【年浪草】　孝經緯に云、（一）霜降の後十五日、斗、乾に指すを立冬と爲す。十月の節なり、冬は終也。萬物皆收藏する也。

【滑稽雜談】　「冬立つ」或は云、冬たつとは立冬のころ成るべし。

註（一）二十四氣の一

季題解説　陰暦十月の節であつて、陽暦の十一月八、九日頃に相當し、此日からその年の冬に入るのである　［季題］秋—霜降（サウカウ）

例句

立冬

あらたのし冬たつ窓の釜の音　鬼貫（俳諧七車）
冬來ては案山子にとまる烏哉　其角（五元集拾遺）
冬たつや御所柿の手にひゆる程　沾德（俳諧五子稿）
百姓に花瓶賣けり今朝の冬　蕪村（新五子稿）
梅も家も燒し四とせの冬は來た　乙二（をのゝえ草稿）
鷄頭はこけてしまひぬ今朝の冬　格堂（春夏秋冬）

初冬

初冬や又藪に產む鶏の癖　果采（ホトトギス）
初冬や龍膽の葉のうす紅葉　たかし（同）
初冬や山のやうなる利根堤　一宿（續ホトトギス）
稻架けて木曾路は冬となりにけり　朱朗（同）
初冬や再び遊ぶ高雄山　虛子（句集虛子）

冬淺し（ふゆあさし）

季題解說 「初冬」といへば時候そのものとなるが、冬淺しといへばそこに人間の心持が多分に含まれて來る。冬もいまだ寒氣が左程にきびしくならず、風物も蕭條の感を深めない。然し嚴冬を控へた營みは人事に動物に植物に進行してゐる。季節の推移を打眺めた而してどちらかといへば輕い心持をあらはした言葉である。**參照** 初冬（ハツフユ）　冬めく（フユメク）

冬めく（ふゆめく）

季題解說 戶外の風物も屋内の調度などもいかにも冬らしい感じを帶びて來て、いよいよ冬も來たなといふ感じを起させるのを言ふ。冬の印象である。印象を得て心が動くのである。いかにも冬らしくなつたとの感じである。**參照** 初冬（フユ）　冬淺し（フユアサ）

例句　冬めく

冬めくや引き捨てゝ積む葡萄蔓　月草（懸葵）
冬めくやあとかたもなき三輪の茶屋　行々子（ホトトギス）
冬めくや庵をめぐれる藪だたみ　止有（同）
冬めくや土龍の土のこゝかしこ　十蛙子（續ホトトギス）

冬の日（ふゆのひ）

季題解說 冬の一日のことである。冬になるとだんだん日脚が短くなつて慌しい氣がする、その日中もどんよりと薄闇くて益々氣が滅入る、さうした感じが冬の一日には伴つてゐるのである。特に冬の日を短日と言つて一つの季題としてある。

實作注意 冬の太陽を意味する冬の日と間違はないやうにしなければならない。**參照** 短日（タンジツ）　天文—冬の日（フユノヒ）

例句　冬の日

冬の日や落葉埋れに菊の吹く　六里巽（懸葵）
冬の日に甍連ねて円屋かな　三千里（ホトトギス）
冬の日に稻まだあるや山の寺　呂柚（同）
冬の日や推古佛のおん乳房　梅史（同）

短日（たんじつ）　日短し（ひみじか）　日つまる（ひ）　暮早し（くれはや）

古書校註

【年浪草】短日。月令廣義に曰、仲夏の日は長至なり、仲冬の日は短至なり。○又曰、漏刻晝四十一刻、夜五十九刻。（略）○（一）唐雑錄に曰、宮中に女工を以て日の長短を揆る。冬至の後日晷漸く長じて一線の長を増す。○杜詩に曰、寒日簷を經て短し、云々。

註（一）履襪を獻るを參照せよ。又、唐雜錄の文は、滑稽雜談には、「日、宮線を添ふ」の項に引き、荊楚歳時記の「晋魏の間、宮中紅の線を以て日影を量る。冬至の後日影長さ一線を添ふ」等をも引いて、「俗に云、冬至より日の長さ晝の節の長さを增すといへり。蘭に節なし、何を以ていへるにや。一說、一線の義を以て絲筋だけと云ふ。誤れりや。猶識者に尋ぬべし」と云つてゐるが、增山井には、「宮線を添ふ」の項に荊楚歳時記の文を引いて、「此方の世話にも、犬のふしだけづゝのぶるよしをいへり」とある。蘭の節といふのは、近代世事談に「疊の目の一節ともいふ」とある如く、疊に就いていふものか。それが日脚といふ語から犬のふし（くるぶし）とも誤られたものか。いづれにしても線（いとすぢ）から誤り云ひ出された俗說さあらう。

季題解說　冬の日の短かきを云ふ。冬になるに從つてだんだん一日の晝の間が縮り、日脚がいとゞ慌しくなつて、ふと仰ぐ軒端には早や夕闇が漂ひ、部屋内の電燈もいつの間にかぽかと光の無い赤さに灯つて、驚くばかりに暮れ易い。冬の日の晝過ぎから夕方、暮れ暮れへかけての感じである。〔參照〕冬の日八ノ二

例句

短日

鳴戸磯渦まく暦くれはやし　素堂（俳諧五子稿）
雁鴨の日さえみじかくなりにけり　乙二（をのゝえ草稿）
短日や箕に掃きとりしこぼれ粒　烏明（同人）
短日や物塞りし小抽斗　菁圃（同）
短日や八瀬へ使の片たより　句佛（懸葵）
短日の射垜に立ちし外れ矢かな　燕州（同）
短日や妙義へ逐ひし無宿者　謙亮（ホトトギス）
短日の磯を汚せし烏賊の墨　石鼎（同）
短日やまことしやかに萬年青の實　月舟（同）
短日の妻と代りし帳場かな　丈蘭（同）
短日の梢微塵にくれにけり　石鼎（同）

（吉野宮にて）
短日の吉野の菓を探しけり　雪溪（同）
あちこちと出せし使や日短き　都穗（同）
短日や干潟を違へる鑛綱　夜城（同）
短日やはだかり険る嵐山　花蓑（同）
暮れ易き黄穗の風や愛宕道　北人（同）

短日

短日や借來てともす佛間の灯　翠峰（ホトトギス）
短日や藪のひまゆく滑川　阿久里（同）
短日の壁にもたせ一節あり　旭川（同）
門を出し三千院や日短か　夏村（同）
短日や掃けば出て來る塵すこし　素風郎（同）
短日やばた〳〵閉すみやげみせ　播水（同）
短日や灯してつきしみどり丸　記光（同）
金泥の寫經の筆の日短き　月士（續ホトトギス）
短日の戻りてすぐに灯しぬ　芳子（同）
ハルビンにて
短日の窓にかけある茶巾かな　噐風（同）
短日や馬車を驅りたる小買物　虚子（句集虚子）

冬の朝（ふゆのあさ）

季題解説 冬の朝は寒氣凛烈、晴れた日は霜柱が立ち寒靄がひくくかゝつて寒さが膚を刺すが如くに覺ゆる。

例句 冬の朝

竈火燃えて鼠かくるゝや冬の朝　平安居（ホトトギス）
大鼠鼠捕器一ぱいや冬の朝　董糸（同）

冬の夜（ふゆのよ）

夜半（よは）の冬（ふゆ）　寒夜（かんや）

季題解説 夜半の冬といへば冬の夜更である。併し冬の夜といふのと殆ど同意義に使用されてをる。寒夜とはひしひしと身に泌みる寒い冬の夜を言ふ。

參照 霜夜（シモヨ）

例句 冬の夜

何となく冬夜となりを聞れけり　其角（五元集）
閑かさや二冬なれて京の夜　同（同）
冬の夜や古き佛を先ッ焚む　蕪村（落日庵句集）
鍋の音貧しさよ夜半の冬　同（蕪村句集）
飛彈山の質屋とざしぬ夜半の冬　同（同）
我を厭ふ隣家寒夜に鍋を鳴らす　同（同）
冬の夜や我に無藝のおもひ有　几董（井華集）
冬の夜や鵆の聲をきゝわぶる　白雄（白雄句集）
ふゆのよやまことしからぬ稻光り　曉臺（曉臺句集）
冬の夜や曉かけて山おろし　同（同）
鐵床の音も撓まぬ寒夜かな　同（同）
すみ〴〵にものおく冬の夜はをかし　成美（成美家集）

冬の夜やどこを明ても月はさす　同　（同）
ふゆの夜やきのふ貰ひしはりまなべ　一茶　（旅日記）
冬の夜や針うしなふておそろしき　梅室　（梅室家集）
冬の夜の星や落けん梅の花　乙由　（麦林）
人を噛む鼠出でけり夜半の冬　子規　（子規句集）
冬の夜や涙にくもる形見分け　青兎　（同人）
咲き継せて菊瓶にあり夜半の冬　意外　（懸葵）
冬の夜やもののゝけ通る枯木中　眞一郎　（ホトトギス）
戯曲よむ冬夜の食器浸けしまゝ　久女　（同）
よき母でありたき願夜半の冬　せん女　（同）
門出るや冬の夜深き影法師　宵曲　（同）
冬の夜の猫が開けたる襖かな　幼瞳　（同）

病床

枕邊のもの皆親し夜半の冬　春雪　（同）
空落ちの鼠落しや夜半の冬　双葉　（同）
梁の囓くを聞く寒夜かな　草子　（同）
親に似て尾長き猫や寒夜の灯　素月　（同）
灯ともせば佛もゐます寒夜かな　湘海　（同）

霜夜（しもよ）

季題解説　よく晴れて、霜が結ぶ寒い冬の夜。〔季冬〕冬の夜（五一）天文―霜（セン）

例句

霜夜

山犬を馬が嗅ぎ出す霜夜かな　其角　（五元集）
ひだるさに馴てよく寝る霜夜哉　惟然　（惟然坊句集）
（前書、霜月三日の暮がたにうちさきて）
さゝ忠にこもる霜夜の恨みかな　北枝　（北枝發句集）
埋火に酒あたゝめる霜夜哉　桃隣　（古太白堂句選）
我骨のふとんにさはる霜夜哉　蕪村　（蕪村遺稿）
句を煉て腸うごく霜夜かな　太祇　（太祇句選）
羊煮て兵を労ふ霜夜哉　召波　（春泥發句集）
織殿の霜夜も更ぬ女聲　同　（同）
霜の夜や鴫の羽かき尚さむし　樗良　（樗良發句集）
橋守へ橋よりもどりて霜夜哉　蓼太　（蓼太句集）
かきこぞ霜のひと夜をやどり哉　几董　（井華集）
若き人の經よみ習ふしも夜かな　白雄　（白雄句集）
行燈に薬罐釣りたる霜夜哉　曉臺　（曉臺句集）
雉も啼犬も霜夜の山邊哉　士朗　（枇杷園句集）
うなり出す三斗の釜も霜夜哉　成美　（成美家集）

霜夜　霜の夜や前居た人の煤下る　一茶（七番日記）
霜の夜や横丁曲る迷子鉦　同（九番日記）
里の灯も曉らしきしも夜かな　蒼虬（蒼虬翁發句集）
燈臺になくや霜夜の油蟲　常樹（覊旅随筆）
折くべる豆がらはしる霜夜哉　闌山（年尾）
炭竈の煙ゆかまぬ霜夜哉　水翁（新選）
蠟燭の片流れする霜夜かな　松鶴（新俳句）
赤貧にたへて髪梳く霜夜かな　蛇笏（ホトトギス）
もう〳〵と霜夜に烟る煙出し　鬼城（同）
みとりして一人めし食ふ霜夜かな　慶子（續ホトトギス）

冷たし（つめたし）　底冷え（そこびえ）

古書校註　【年浪草】つめたき。（一）苧環（ヲダマキ）に、凍の字を用ふ。○李白の詩に曰、長風短袖に入り、手を内（イル）れば氷を懷くが如し。

註（一）竹亭・和及編の季寄（元祿初年刊）。

季題解說　冬の寒さの感じを言ふ。寒さといふに比して感覺的な言葉である。感覺に訴へる寒さである。寒さが如何にも底の方から襲つて來るが如き感じを底冷えと稱する。寒さが擴がりを持つて押しよせて來る如き感じを冷え渡るなどと言ふのである。〔參照〕寒さ（サム）

例句　冷たし
つめたさに火を吹おこす大火入　鬼貫（俳諧七車）
膝がしらつめたい木曾の寢覺哉　同（鬼貫句選）
つめたいにつけてもゆかし京の山　同（同）
つめたさに箒捨けり松の下　太祇（太祇句選）
日のあたる石にさはればつめたさよ　子規（子規句集）
そこ冷の玄關に客を送りけり　よりゑ（ホトトギス）
そこ冷えの嵯峨にうつりし新居かな　芒趾（同）
日の落ちて頰に冷き手をあてぬ　あふひ（續ホトトギス）

寒さ（さむさ）　寒き夜（さむきよ）

古書校註　【御傘】寒（カン）、冬也。さゆるも同じ。連にさむきとさゆると云ひ替へて二句あり。冬の事也。誹には此の外にかんと聲にいひて今一あり。しかれば、冬にさむさ・さゆる・かんと以上三也。
夜さむ、秋也。夜さむき・寒き夜・よを寒み・夜のさむき、皆冬也。
朝寒、秋也。さむき朝・さむきあした・朝氣さむし・今朝さむし等、いづれも

冬也。

【増山井】寒き、夜を寒み。

季題解説「おゝ寒い」といふ寒さ。骨身に應へる寒さ。見るから寒さうだといふやうな客觀的情勢、それらに對する一切の感情。何となく寒い國・寒い家・寒い道・寒い山・寒い川・寒い人など數へ立てれば際限がないが、凡そ大別して、肉體に感ずる寒さと感情に映ずる寒さとに區分する事が出來よう。

寒き朝、寒き夜なども總て此の感じに包含されるものであるが、その綴を轉倒して朝寒、夜寒といふ風にするとそれは秋の季感になる。〔參照〕冷たし・冴ゆる・凍る

例句

寒さ

水寒く寝入かねたるかもめ哉　芭蕉　（[illegible]集）
寒けれど二人旅寝ぞたのもしき　同　（合歡いびき）
袖の色よごれて寒しこい鼠　同　（芭蕉句選拾遺）
鹽鯛の齒ぐきも寒し魚の店　同　（薦獅子）
葱白くあらひたてたるさむさ哉　同　（韻塞）
ともしびの言葉を吹す寒さかな　鬼貫　（俳諧七車）
あたゝかに冬の日なたの寒き哉　同　（鬼貫句選）
古寺に皮むく椶櫚の寒け也　同　（同）
袖ぬるゝ海士の子寒し汐かけ　言水　（俳諧五子稿）
我寐たを首上て見る寒さかな　來山　（續いま宮草）
中〳〵に火燵が明て寒さかな　同　（同）
御坐綿や寒き茶の間の吹通し　浪化　（浪化上人發句集）
松竹やおなじ寒さにおなじ色　同　（同）
水風呂の上ざめしたる寒さかな　同　（同）
うづくまる藥の下の寒さかな　丈草　（丈草發句集）
有明にふり向がたき寒さかな　去來　（去來發句集）
火いけ蟲背戸から寒し竈の前　同　（同）
寒き夜や思ひつゞける山の上　同　（同）
使者ひとり書院へ通るさむさ哉　其角　（五元集）
たかとりの城の寒さやよしの山　同　（同）
山鳥のねかぬる聲に月寒し　同　（同）
夢なほ寒し隣家に蛤をかしぐ音　同　（五元集拾遺）
大髭に剃刀の飛ぶさむさかな　許六　（五老井發句集）
大名の寢間にも似たる寒さかな　同　（同）
長いぞや曾根の松風寒いぞや　惟然　（惟然坊句集）
菜を煮る桶屋の弟子の寒かな　同　（同）
撫房のさむき影なり堂の月　同　（同）

寒さ

山颪来よ寒がりて明すべし　北枝（北枝發句集）
角つゝむ越後の牛の寒さ哉　同（同）
呵られて次の間へ出る寒さ哉　支考（蓮二吟集）
寒ければねられず寐れば尚寒し　同（同）
菜を刻む廣敷寒し吹く灯　同（同）
三日月の一點寒し嚴しま　同（同）
紋ところよごれ着物の寒さ哉　杉風（杉風句集）
髭そらぬ身はならはしの寒哉　同（同）
朝の日の裾にとゞかぬ寒さかな　千代女（千代尼發句集）
山彦の口まね寒きからすかな　同（同）
寺寒く樒はみこぼす鼠かな　蕪村（月並發句集）
痩臑や病より起・鶴寒し　同（蕪村句集）
嵯峨寒しいざ先くだれ都鳥　同（同）
漁家寒し酒に頭の雪を焼　同（同）
易水にねぶか流るゝ寒かな　同（同）
牙寒き梁の月の鼠かな　同（同）
皿を踏ねずみの音の寒さ哉　同（同）
借具足我になじまぬ寒哉　同（新五子稿）
井のもとへ薄刃を落す寒哉　同（同）
水鳥も見えぬ江わたるさむさ哉　同（同）
眞金はむ鼠の牙の音寒し　同（題苑集）
雪舟の不二雪信が佐野いづれか寒き　同（蕪村遺稿）
忘れ置佛のめしの寒さ哉　同（落日庵句集）
それ〳〵の星あらはるゝさむさ哉　太祇（太祇句選）
鳴ながら狐火ともす寒かな　同（同）
さむき夜や探れば窪き老が肩　同（同）
水指のうつぶけてある寒かな　同（同）
さす敵に矢をとり落す寒かな　召波（春泥發句集）
本陣に鼠の糞のさむさ哉　同（同）
孫晨も夜具一把たくさむさかな　也有（蘿葉集）
能ふ賣れる日を炭うりの寒哉　同（同）
萩かれて雪隱見ゆる寒かな　同（同）
朝めしに三度鼻かむさむさかた　同（同）
鷹匠の五十越したる寒さかな　同（同）
鷹匠も酒やへそれる寒さかな　同（同）
引越た鍛冶やの跡の寒かな　同（同）
据風呂のあつふて入れぬ寒かな　同（同）
我影の雪見て鷺の寒さかな　同（同）

虎の皮やめてふとしの寒さかな　同　（同）
月寒し人の手は袖にちゞむ時　同　（同）
伏せて有る据風呂桶の寒さかな　同　（蕪の落葉）
うづみ火を手して掘出す寒かな　几董　（井華集）
書寫いせ太神宮
有がたさ餘りて寒し神の場　同　（同）
背に比叡のはなれぬ寒かな　同　（同）
くらき夜はくらきかぎりの寒哉　白雄　（白雄句集）
あしろ家の人住と知りて月寒し　同　（同）
おもひ寒し峯の白雲吹わくる　曉臺　（曉臺句集）
寒しとも思ひわすれて谷の聲　同　（同）
辻能の矢聲もかるゝ寒さ哉　同　（同）
山寒しせめて火桶の燒蜜柑　同　（同）
山寒し出るより入日のあした　同　（同）
さむそらやたゞ曉の峯の松　同　（同）
寒きより枯竹藪に明にけり　同　（同）
屋根うらに鼠鳴夜の雨寒し　同　（同）
語り足らぬ朝戸出寒き山邊哉　闌更　（半化坊發句集）
かへらむとおもへば寒しやまの庵　同　（同）
鍋をかるも灰すも寒さかな　成美　（成美家集）
家さぶく桐の赤葉のひとつ哉　同　（同）
つたなさの寒さにつれてまさりけり　同　（同）
藤棚の下に米つく寒さかな　同　（同）
上野のふもとに、かりの庵を引結び
身にしむや元の主の寒さまで　一茶　（一茶終焉記）
井戸にさへ錠のかゝりし寒哉　同　（享和句帖）
あら寒し／＼といふも榮耀哉　同　（我春集）
かけ金の眞赤に錆て寒哉　同　（七番日記）
信濃路の山が荷になる寒哉　同　（同）
死こぢれ／＼つゝ寒かな　同　（同）
我宿は寒さまけせぬ菜畠哉　同　（同）
自嘲
ひいき目に見てさへ寒し影法師　同　（同）
ずん／＼とぼんの凹から寒哉　同　（同）
壹文に一ッ盃ふへさむさ哉　同　（一茶句帖）
椋鳥と人に呼るゝさむさ哉　同　（同）
しん／＼としんそこ寒し小行灯　同　（九番日記）
一人と帳面につく寒かな　同　（寂砂子集）
とゝかくさてふらやまれたる寒哉　同　（發句集）

次の間の灯で膳につく寒哉　一茶（發句集）
寒さにもなれて歩行や信濃山　同（嘉永板發句集）
寒い筈彌彦の道を軒の下　乙二（をのゝえ草稿）
編笠を著た人寒し衛より　同（同）
さむいにもよい程のあり掛枕　同（同）
宿かれば木綿の實をふむ寒哉　同（同）
竹の葉の世にうつくしき寒かな　同（同）
家ありときくも寒しや山の陰　同（同）
寒けれどたのもし月のもりし跡　同（同）
猶寒し茨の中の日のはじめ　蒼虬（蒼虬翁發句集）
寺へ來てこぶしを握る寒さかな　同（同）
寒けれど背きかねけり窓の月　梅室（梅室家集）
糊の干ぬ行灯ともす寒さかな　同（同）
鹿の影光りて寒き月夜哉　洒堂（古今句鑑）
高取の城高々と月寒し　雅因（新選）

翁の發句塚

月の影の悲しく寒し發句塚　史邦（小文庫）
美しう日のさす京の寒さ哉　雷師（題叢名）
田から吹く風の寒さや夕神樂　龍尺（焦尾琴）
石積みし船に霜見る寒哉　斗南（月夜）
石塔を馬につけ行く寒さ哉　左把（三千化）
我馬を楯にして行く寒さ哉　乙由（麥林集）
啼て寒く寒くて啼や群千鳥　柳居（古今句鑑）
皂角子の鞘鳴り寒し古屋敷　可圭（同）
枯て立つ蘆田鶴寒き入江哉　素然（素然永雄兩吟）
まのあたり鳥もふくるゝ寒哉　麥翅（新選）
乾鮭の戸に吹あたる寒哉　千仙（類題發句集）
柿一つ梢にのこるさむさ哉　白歌（皮こすり）
道ばたに多賀の鳥居の寒さ哉　尙白（猿蓑）
井の水のあたゝかになる寒さ哉　沽圃（續猿蓑）
鴨川の一瀬になりし寒哉　風國（類題發句集）
麓から日のくれて行寒哉　雁背（新選）
行燈のあたりから來る寒さ哉　胡仝（夜話狂）
摺小木にとりつく老の寒哉　野明（ありそ海）
御格子に切髮かくる寒さかな　子規（子規句集）
梅檀の實ばかりになる寒さかな　同（同）
牛燒の家に人住む寒さかな　同（同）
水涸れて橋行く人の寒さかな　同（同）

狼の糞見て寒し白根越　同（同）

梧桐子鐵材にかゝりて入院せるに遇す
寒からう痒からう人に逢ひたからう　同（同）
深川は埋地の多き寒さかな　同（同）
鴨河のからりと寒し京の町　飄亭（新俳句）
べんべらを一枚著たる寒さかな　漱石（春夏秋冬）
大いなる池に日當る寒さかな　癖三醉（同）
西風に海の濁りや日寒し　波靜（ホトトギス）
簪を買はず戻れば寒さかな　何女（同）
寒き灯に夫婦愁を異にせり　瓦全（同）
雀より小さき鳥や上寒し　禪寺洞（同）
御あかしを消さじと寒き詣かな　枴童（同）

小栗判官の墓
主從の墓かたまれる寒さかな　竹履（同）
この國の寒さ俄に來りけり　正蜂（同）
氷上にころがる煤の寒さかな　竹童（同）
大風の寒き涙や杉ひろひ　青邨（同）
佛飯をいたゞき申す寒さかな　貝城（同）
晩學の汚れて寒さ法衣かな　山彦（同）
ハルビンの痛き寒きに馴れにけり　牽牛子（續ホトトギス）
二三日寒さゆるみし子供かな　すゝむ（同）
庵主寒さに腹を立てにけり　枴童（同）
足早き提灯を追ふ寒さかな　虚子（句集　虚子）
寒江に綱うつこともなかりけり　同（同）

参考　太陽暦の冬季間即ち十二月・一月及二月の三ヶ月は本邦に於て最も寒き月であつて一年中の最低氣温は大低此の三ヶ月間内に起る。其の中でも特に一月と二月間が最も寒い。故に今迄各地に於て記録された最低極の氣温も大概此の兩月に起つて居る。今本邦各地中三十個所を選び其の一月に於ける平均氣温と氣象觀測開始以來其の地で記録した最低の氣温及其の起日とを表示して見る。

地名	一月の平均氣温	氣温低極	氣温低極の起日
臺北	一五度三	(−)〇度二	明治三四年二月一三日
仁川	(−)三度七	(−)二一度〇	昭和六年一月一一日
那覇	一六度二	四度九	大正七年二月二〇日
鹿兒島	七度一	(−)六度七	大正一二年二月二八日
福岡	五度〇	(−)八度二	大正八年二月五日
高知	五度四	(−)七度〇	昭和六年一月一一日
廣島	四度〇	(−)八度六	大正六年一二月二八日

岡山	三度七	(-)八度一	明治二八年一月二七日
潮岬	七度二	(-)三度六	昭和六年一月一〇日
大阪	四度二	(-)七度二	明治二四年一月二五日
京都	二度六	(-)一一度九	明治二四年一月一六日
金澤	二度五	(-)九度七	明治三七年一月二七日
名古屋	三度一	(-)一〇度三	昭和二年一月二四日
沼津	五度四	(-)八度一	明治二六年一月二六日
松本	(-)二度一	(-)二四度八	明治三三年一月二七日
新潟	一度四	(-)九度七	明治三五年二月一三日
東京	三度〇	(-)八度六	昭和二年一月二四日
八丈島	一〇度二	(-)一度三	大正一二年一月一二日
小笠原島	一七度六	(-)七度〇	大正七年二月一四日
水戸	二度〇	(-)一二度〇	昭和二年一月三〇日
山形	(-)一度七	(-)二〇度〇	明治二四年一月二九日
秋田	(-)一度六	(-)二四度六	明治二一年二月五日
石巻	(-)〇度四	(-)一四度六	大正八年一月六日
青森	(-)二度七	(-)二四度七	昭和六年二月二三日
函館	(-)三度〇	(-)二一度七	明治二四年一月二九日
札幌	(-)六度四	(-)二八度五	昭和四年二月一日
根室	(-)五度一	(-)二二度九	昭和六年二月一八日
大泊	(-)一一度六	(-)三二度七	明治四二年一月一一日
敷香	(-)一八度二	(-)三九度八	明治四三年一月一三日
奉天	(-)一三度〇	(-)三二度九	明治四一年一月二一日

以上の如くであるが表中氣溫は凡て攝氏を以て表はしてあり(-)なる符號を附したのは氷點下何度であるかを表はしてある。而して前表で見ても判る通り記錄破りの最低氣溫が現はれる日は大體一月末から二月初めであつて十二月に現はれる事は極めて稀である。卽ち之れから見ても一年中最も寒い時は一月末乃至二月初旬である。

三寒四温（さんかんしをん）

季題解說　滿洲・朝鮮の氣溫には三寒四溫といふ現象があつて、三日寒い日がつゞくと後四日間溫い日があるといふやうに、寒暖の變化が數日の週期を以て現はれ、特に冬季に於て著しく感ぜられる。極寒の四溫日和には小買物に街に出る人、牆に凭れて日向ぼつこをする人など、なごやかなものがある。

例句

三寒四溫　軒しづく頻りに落つる四溫かな　白樹（滿洲昭和俳句集）

冴ゆる　冴ゆる夜　月冴ゆる　風冴ゆる　鐘冴ゆる

古書校註

【御傘】さゆる。冬に一、他の季に一と定めて連に二句あれば、誹には三句あるべし。さやかなる心のさゆるなりとも三句の内成るべし。か樣の稀に出づる文字と、月の句などに二度結びいれんは、聞きにくき事成るべし。月のさやけき、秋也。月さえては冬也。

【增山井】さゆる、月さゆる。

【滑稽雜談】冱。月令に曰、冱寒、註疏に冱は閉也。謂ふこゝろは堅固の陰、閉藏陽處に通せざるなり。〔〕廣韻に云、冱は寒凝るなり。

【年浪草】冴、冴ゆる月。（略）鐘さゆる。山海經に曰、豐山の鐘、霜降つて自ら鳴る。〔〕霜夜などに鐘の音一入さえて聞ふるものなり。

註　○右によれば、月さゆるは冬とされてゐるが、是等は語義用法の變化によつて變つて來るものらしい。

季題解説　寒さの感じの一面を抽出した言葉で、寒氣が醇化せられて、そこの夾雜物は全く拭ひ去られて、萬象透き徹るが如く、心魂に直接に寒さが觸れるがごとく覺ゆるを指すのである。夜は殊にさういふ寒さの感じが强いので冴ゆる夜などと言ふ。月冴ゆるといへば冬の夜空に寒月が中天から拔け落つるが如く澄み切つて懸る有樣を言ふのであり、風冴ゆるといへば風がさういふ寒さの感じを伴ふて心氣に觸るゝが如く覺ゆるのを指すのである。鐘冴ゆるといふも同じく鐘の聲が寒さのために殷々とはつきりと徹るがごとく感ぜられるのを言ふのである。〔參照〕寒さ　凍る（冬）

例句

冴ゆる

神松のさえこむ影や禰宜の夢　丈草（丈草發句集）
篠原の月冴殘る兜かな　支考（蓮二吟集）
霜をける畠の冴えや鍬の音　太祇（太祇句選）
此かねや袖が摺てもさゆる也　几董（井華集）
風さえて今朝よりも又山近　曉臺（曉臺句集）
影冴て日にしむ月の白さ哉　風荷（たてなみ）
さゆる夜や田毎に月はうつれども　虚舟（安永六）
星冴て寒菊白う成にけり　唄子（新選）
琵琶を聴く
琵琶冴えて星落來る臺かな　子規（子規句集）
灯の冴ゆる机の上の夜半かな　四方太（春夏秋冬）
冴ゆる夜の港町行けば錨の鉦　指月戯（ホトトギス）
かしげ見し老婆の顔に冴ゆる月　友次郎（同）
風冴ゆる驛に入り來し移民汽車　掬二（[illegible]ホトトギス）

凍る　冱てる　鐘こほる　月こほる　凍港

古書校註

【年浪草】凍。呂氏春秋に曰、高祖韓王信が匈奴に降ると聞いて、上自ら將として之を擊つ。連戰勝に乘じ、北ぐるを逐うて樓煩に至る。天寒うして、士卒指を墮す者十に二三。○周常山が詩に曰。凌兢たる贏馬蝟毛縮まる、結屈たる微行蛇腹裂く。鞭を遺れ鞾を脫して初めより知らず、指僵りて墮ちんと欲し骨折れんと欲す、云々。○韓詩に曰、氣寒うして鼻嗅ぐこと莫く、血凍りて指粘ならず。

【年浪草】凍。字彙に曰、孟冬の地始めて凍る、云々。

季題解說　事物のこほることをいふ。いてるともいふ。然し實際は凍つてゐなくても周圍の寒さのために凍れるが如くに感じられる場合も、これを凍てたるものと强調し斷定して句を作る場合が多い。例へば「凍石」とか「凍月」とか「頰凍てる」とかの類である。凍上・凍道・凍港・凍鐘などいふ風に極めて效果的に用ひられる季題である。參照　冴ゆる

例句

凍る

すくみ行や馬上に氷る影法師　芭蕉（笈日記）
櫓の聲波を打つて腸氷る夜や涙　同（武藏曲）
池の面雲の氷るや愛宕山　去來（去來發句集）
みづますやおよそ氷らぬ水の筋　其角（五元集拾遺）
らうそくの涙氷るや夜の鶴　蕪村（蕪村句集）
氷る燈の油うかゞふねずみ哉　同（同）
手拭も豆腐も氷る横川哉　同（書翰）
御手洗も御燈も氷る嵐かな　太祇（太祇句選）
氷つく芦分舟や寺の門　同（同）
鐘氷尾上の寺や月孤つ　召波（春泥發句集）
おもかげや鏡に氷る手向水　也有（蘿葉集）
わぎもこが油こほれり玉櫛笥　几董（井華集）
かたぶきし水彌氷る盥かな　同（同）
梟も死なねば凍ぬ梢かな　白雄（白雄句集）
目出たくも酒はこほらぬためし哉　同（同）
氷る夜や諸手かけたる戶のはしり　同（同）
庭艸のよごれしまゝに風の凍　同（同）
氷りけり實のらぬ稻の臥しまゝ　闌更（半化坊發句集）
白浪のかけては氷る小ざゝかな　士朗（枇杷園句集）
柴の戶や氷しまゝに捨ておく　成美（成美家集）
我家の一つ手拭氷りけり　一茶（七番日記）
うちの戶や腹へひゞきて凍割るゝ　同（同）

門口に來て氷るなり三井の鐘　同　（同　）
下町に曲らんとして鐘氷る　同　（同　）
手拭のねぢつたまゝの氷哉　同　（九番日記）
人ともに氷ついたよ橋の月　同　（新　集）
鐘氷る川をうしろに寐たりけり　同　（旅　日　記）
氷る足ぬいて飛けり泊り鷺　梅室　（梅室家集）
すれ合ふて樋口に氷る薄かな　蒼虬　（蒼虬翁發句集）
ともし火に氷れる筆を焦しけり　大魯　（五車反古）
鐘氷る須磨に宿屋はなかりけり　葛三　（同　）
捨舟の內そと氷る入江哉　凡兆　（蕉門古人眞蹟）

亡き妻におくれし宿をとふ

色々に氷る泪や繪具皿　琴風　（草　稿）
靴凍てゝ墨塗るべくもあらぬかな　子規　（子規句集）

猩々死

猩々の三七日頃か鐘氷る　同　（同　）
凍土に喰ひ入る繩や芽水仙　手寒　（ホトトギス）
凍土に菊しがらみし小鉢かな　婆羅　（同　）
凍港や舊露の街はありとのみ　誓子　（同　）
凍道をカラコロ〳〵と來る子かな　虛吼　（同　）
諏訪の町湖もろともに凍てにけり　竹秋子　（同　）
一筋の瀧凍り居り奥の院　英女　（同　）
蟷螂の祈れる如く凍てにけり　鴻一　（同　）
冱瀧のちろろ〳〵と落ちにけり　嘉綠　（續ホトトギス）
冱土を曳きずられゆく煙鬼かな　幸叢　（同　）
凍港や濤立ちさわぐ沖の方　同　（同　）
凍海に船員遊ぶよき天氣　牛步　（同　）
逆立てる北斗に海は凍つたり　北湖　（同　）
凍港や赤露の船は久しぶり　帆影郞　（同　）
冱てる夜や見にも起きざる鼠捕　曉水　（同　）
氷りたる佛の飯を盜みけり　虛子　（句集　虛子）

冬ざれ　冬ざるる

古書校註

【御傘】春され・秋され・冬され・夕され、是ばかりにて、夏され・朝されと云ふ事は哥にもあるべからず。是は口傳の詞にて書きあらはす事ならず。只春なれば・秋なればと云ふ詞と心えよと、哥書の註に先達も書きをかれしなり。

註　（[illegible]に「冬され」を出し、「春され」の條に[illegible]と云つて、春されの條に右の

御傘の文（今原本に據つた）を引いてあるが、これは云ふまでもなく、冬ざれとは別なものである。但し增補雜言集に、道興の回國雜記の「嵐の声ははや出でがての冬ざれに筧の水も氷とぢけり」を擧げ、增山井に冬ざれを出し、貞門の俳諧にも冬ざれの句があるから、冬ざれの語は遲くも中世以來の語である。

季題解說　冬の風物の眺めの背景として荒れさびれたる有樣で、自然がその骨をあらはに見せてゐるやうな寂とした感じである。殊に土石の類について其感じが深い。

例句

冬ざれ

冬ざれや小鳥のあさる韮畠　蕪村（蕪村句集）
冬ざれて韮の羹喰ひけり　同（蕪村遺稿）
ふゆざれや韮にかくるゝ鳥孤つ　同（全集靈贊）
冬ざれや北の家陰の韮を刈　同（五車反古）

返景

冬ざれやきたなき川の夕鴉　定雅（續明烏）

佐倉

常盤木や冬されまさる城の跡　子規（子規句集）
冬されや狐もくはぬ小豆飯　同（同）
冬されや砂吹きつくる澪杙　碧梧桐（新俳句）
冬されて馬の沓賣る小家かな　可全（同）
冬ざれの樋に音する雀かな　梧月（ホトトギス）
冬ざれやしかと抱きたる鷄ぬくし　駝王（同）
冬ざれや兎の喰ひし桑の肌　寥々（同）
冬ざれやころゝと鳴ける檻の鶴　秋櫻子（同）
冬ざれのばら摘んでわが誕生日　よりに（同）
古坪や冬ざるゝなる菊莚　秀畝（同）
冬ざれや錠かゝりゐる壬生舞臺　洛月（同）
大岩の小石を食みて冬ざるゝ　青葩（同）
冬ざれやつかひ減らせし庭箒　瑩風（同）
冬ざれや飛鳥寺より畦づたひ　逸郊庵（同）
冬ざれの庭を見てゐて下り立たず　てい子（同）

唐崎

古宮を守る四五戸や冬ざるゝ　夕洋子（續ホトトギス）
冬ざれやつぎはぎしたる村の橋　夏山（同）
冬ざれの石に少し降りて止みにけり　虛子（句集虛子）

冬暖（ふゆあたゝか）

冬ぬくし（ふゆぬくし）

季題解說　冬季春の如く暖かなることあるをいふ。たゞ「暖し」といへば春の季題であるから、冬暖かとか冬ぬくしと稱して冬の暖かさを區別してゐるのである。暖しといふ春の季題はどちらかといへば感覺的な單純な感じ

であるが、冬暖しといふ季題になると嚴冬の中の一日二日の暖かさといふ意味であるから、暖しといふ季題に比して餘程內省的な分子が加つて味深い季題となつてゐるやうである。[参照]春—暖か（アタタカ）

例句

冬暖

鯛はねて難波の冬の暖かさ　一禮（小弓）
下總や冬あたゝかに麥出　子規（子規句集）
冬暖き曇りに菊の白さかな　涼斗（同人）
藁をうつ額の汗や冬ぬくし　岩水（同）
老の冬ぬくき一日を圖書館に　露泣（ホトトギス）
妻逝きぬ冬あたゝかにして憶ふ　右衛門（同）
冬ぬくし夕富士屋根に似て低し　霞人（續ホトトギス）
落初めし椿もありて冬ぬくき　秋皎（同）
揚げ舟に腰うちかけて冬ぬくし　風生（同）
冬ぬくし雪を見ずして梅を見る　虛子（同）

小春（こはる）

小春日（こはるび）　小春日和（こはるびより）　小六月（ころくぐわつ）　小春風（こはるかぜ）　小春凪（こはるなぎ）

古書校註

【山之井】小春は子にそへて、（一）天のはらも十月（トツキ）めにうむとも、年の內に（二）ういだちすなどもいひ、又、かへり花もかつ〳〵ひらき、初雪もやう〳〵とけて、名にあふのどけさなどもつらね侍る。

【年浪草】初學記に曰、十月天時和煖春に似たり。故に小春と曰ふ。六一居士の詞に、十月小春梅蕊綻ぶ、紅爐煖閣新粧遍し。

注（一）例句に「あまのはらも十月めにうむ小春哉」が擧がつてゐる。（二）初めて立つこと、年內立春のさきがけの意。

季題解說　陰暦十月を稱して小春と云ふのである。現行の太陽暦では、ほゞ一月遲れの十一月中と、極くそれに近接した前後の期間をも含めた時期に該當するであらう。恰度その頃は一年を通じて中でも氣候の和暖な時であつて、餘り烈しい風も吹かず、雨雪も少く、ぽつかりとした好い日和が續きがちで、あたかも春の如くなので、小春と云ふ愛稱の念の籠つた呼び名で稱するのである。陰暦十月には神無月などと云ふ傳說的神事によつて起つた面白い味のある異稱があるが、同じ月の異稱でも、小春と云ふのはその「小」といふ字の附いてゐるところに愛稱としての感じがたゞよつて居る。「あたゝかき十一月もすみにけり」草田男」この句は現代の太陽暦十一月を季題としてゐるが、十一月の句として解釋されると同時に、その落著いた平和な氣候の感じは確に小春の氣分と同じものを藏してをつて、「あたたかき十一月」とは取りも直さず小春に相違ないのである。小春は總稱であつて、小春日・小春日和はその時候の天氣の好い日のことを云ふ。秋晴と冬日和との間にはさまつた期間に在る好晴の日の感じである。[参照]神無月（カンナヅキ）

例句　小春

夕陽や流石に寒し小六月　鬼貫（鬼貫句選）
さゝ栗の柴にからるゝ小春哉　同（同）
團栗は小春に落る端山哉　吉水（俳諧五子稿）
茶の花の皺ものしたり小六月　浪化（浪化上人發句集）
ゆりすはる小春の湖つ墳の前　丈草（丈草發句集）
大名のしのび出立も小春哉　桃隣（古太白堂句選）
小春凪眞帆も七合五勺かな　蕪村（蕪村句集）
古家のゆがみを直す小春かな　同（落日庵句集）
虻の影障子にとまる小春かな　也有（蘿葉集）
木がらしの吹くたびれて小春かな　同（同）
張物に繩の小紋や小六月　同（同）
祖師達の忌日〳〵を小春かな　蓼太（蓼太句集）
葉を踏ておなじく惜む小春哉　同（同）
山は今樵夫の笑ふ小春かな　同（同）
冴返る日までよく似て小春哉　同（同）
身ひとつの覆なりけり小春凪　同（同）

淺艸寺前紫陌紅塵

十月の春吹風や海苔の屑　几董（井華集）
立出て鶏の雛見る小春かな　白雄（白雄句集）
魚つりの編がさひとり小はる哉　曉臺（曉臺句集）
海の音一日遠き小はるかな　同（同）
猿曳の小春機嫌に出にけり　成美（成美家集）
大名のもみぢふみゆく小はるかな　同（同）
小座敷の丁度半分小春哉　一茶（九番日記）
降雨も小春也けり智恩院　同（俳諧）
棒先の紙もひら〳〵小春かな　同（嘉永板發句集）
あたゝかなものよ小春の雑木山　蒼虬（蒼虬翁發句集）
日も永いやうぞ小春の稲に鶴　同（同）
藪掃て望みたりたる小はる哉　同（同）
羽をこぼす梢の鳶や小六月　同（同）
京の鐘聞ゆるさとの小春かな　梅室（梅室家集）
みの蟲に人だかりする小春かな　同（同）
水底の砂も小春の日なたかな　同（同）
城山に雉子出けり小六月　山店（小文庫）
不二見せて日は入にけり小六月　寶馬（古今句鑑）
冬枯の中に小春の柳哉　桃里（篠首途）
臼起す小春の草のほのか也　吟江（夢占）

廻廊に錢の落ちたる小春かな　子規（子規句集）
病後
蜻蛉に馴るゝ小春の端居かな　同（同）
賣り出しの旗や小春の廣小路　同（同）
大寺の緣廣うして小春かな　同（同）
畑の木に鳥籠かけし小春かな　同（同）
下總に一日遊ぶ小春かな　同（同）
のごゝゝし歸り詣や小六月　同（同）
圍かけて人居らぬ野や小六月　同（同）
湖を抱いて近江の小春哉　鳴雪（新俳句）
野の末に小さき富士の小春かな　四方太（同）
病間あり窓に小春の山を見る　桂堂（春夏秋冬）
古胡麻に十月の日を當てにけり　鈴和尚（同人）
山百合の珠掘りにゆく小春哉　桃丘子（同）
十月の春美しき産屋かな　一志（懸葵）
咲き殘る鷄頭黄なり小六月　他門子（同）
柴舟に山枯色や小六月　東洋城（ホトトギス）
小春日や石を噛み居る赤蜻蛉　鬼城（同）
十月の春を尋ねつ嵐山　菰翠窗（同）
稚松に二度の心ある小春かな　一轉（同）
野の川に眞青き芹や小六月　露山（同）
稻架けて故鄕の徑の小春かな　濱人（同）
小春日やさながら紅き山の萱　橙黄子（同）
鵞鳥の沓石にそろへる小春かな　みづほ（同）
ねこの眼に海のいろある小春かな　より江（同）
攝・文提寺
波しぶきあげて小春の垣根かな　泊雲（同）
草庵や小春貌して畑鶇　夢筆（同）
博多川鯎の遡る小春かな　清三郎（同）
山中湖風のあがれる小春かな　素十（同）
瀧に簾かけや小春風　若沙（同）
將門の昔へ駕籠つく小春かな　一亭（同）
篠の子の四五本伸びて垣小春　青夜（同）
博多灣昨日よりなる小春風　闌亭（同）
きのふにもまさる小春の一日かな　踏青（續ホトトギス）
王の如き小春日和を授かりし　たかし（同）
鐘樓は門の外なる小春かな　ながし（同）
小春日や海女連れだちて松葉搔　積翠（同）

小春　富士見えて稲田よき小春かな　虚子（句集　虚子）

神無月

時雨月　神有月　神たかり月　初霜月　孟冬　上冬　極陽
良月　大章　大月　陽正　吉月　陽月　小春　小呂　陰月　始氷
新冬　早冬　首冬　玄仲　應理　析木

古書校註

【御傘】　冬と冬、五句去なり。

【山之井】　十月をかみな月といふ事、説々あれど、まことや世俗には、今朝よりよろづの神たち、出雲の國にいますとかやいへば、神まふでする氏子もまれに、ほこらのかたすみも、うそさびしき氣色、又、雨の宮の留守に降りくる時雨をあやしみ、風の神無月にちりかふ木の葉をとがめ、(一)色葉のちりぬるを假名月とそへ、(二)霜柱をしらけたてしを鉋月などいひなし、猶、紙な月・髪な月など、其のえんによりてもいへり。

【滑稽雑談】　神名月。清輔奥儀抄に云、天下のもろ〳〵の神出雲の國へゆきて、こと國には神なきゆへに、かみなし月と云ふをあやまれり。○兼好つれ〳〵草に云、十月を神無月と云ひて、神事にははゞかるべき由はしるしたる物なし。本文もみへず。但し當月諸社の祭なきゆへに此の名あるか。此の月、萬の神たち大神宮へ集り給ふなど云ふ説あれども、其の本説なし。さる事ならば、伊勢はことに祭月とすべきに、其の例もなし。十月諸社の行幸其の例多し。但しおほくは不吉の例也。○詞林采葉抄に云、一天下の神無月をば、出雲國には神在月とも神月とも申也。我朝の諸神參り集り給ふゆへ也。その神有の浦に神々來臨の時、童の作れる如くなる篠舟、波の上にうかぶ事數もしらず。諸神は彼の浦の神在の社に集り給ひて、大社へ參り給はず。此の神在　社は不老山と云ふ所にたち給ふ。神を佐太明神と號す也。是則ち傳奏の神にてまします。日本の諸神は、天照太神をこそ宗廟の神なれば、尤も尊敬あるべきに、何とて此の大やしろを御祖神として參り崇め給ふぞと云ふ不審あり。それは子細深秘なるなり。○世諺問答に云、十月を神無月と申すは何のゆへにて侍るにや。答、此の月を神無月と申すは、伊弉冊尊崩じ給ふ月なれば申す也。又四方の木末散りすさむ頃なりとて葉皆月と申す人有り。いと覺束なし。また諸神出雲の大社に集り給へば申す共いへり。○細川玄旨の説に云、九までは數ありて十一と申す數はなき也。九を極數とする也。十は一と始めんため也。しかれば上無月と云ふ也。此の子細をしらず、神無月とする文字にあらはす也。又例證は、十一律の管にて、十調子を上無と云ふ也。○貞德の説に云、兼好時代までは、十月に諸神伊勢へ參り給ふとこそいひつらめ、今は出雲へこそ神の集り給ふと申せ、いふかしき事也。神無月と云ふ言葉は古歌にもおぼえあれば、なき事にては有るまじ。然らば吉田家の兼好のしられぬ事は有るま

じきに、つれ〴〵の説不審也。鬼神の二字を沙汰するに、鬼は陰の魄、神は陽の魂也。十月は極陰の月にて、天下に陽なし。八卦を見れば西北の陽を乾、皆連と號して九月十月の卦也。出雲國も日本の西北にあたる歟。かく様の儀に依つて十月を神無月と號し、出雲の神幸の説さも有るべし。（略）○藻鹽草に云、神無月、出雲には鎮祭月共云ふ也。又神在月とも云ふ也。聞馴れず。歌などにも如何。又神なし月と云ふはおもはしからざる歟。歌などもいかゞ。

【年浪草】（三）篤信が曰、倭俗十月を以て神無月と爲すの說、紛々として未だ其の至當を見ず。竊に謂ふに、此の月や卦に於て坤と爲す。純陰事を用ひて一陽未だ復せず、陽無きの月也。神は陽の靈、陽無き之を神無しと謂ふ、亦宜ならずや。聖人却つて之を陽月と謂ふは、純陰の月と雖も、陽未だ嘗て絶えざることを見る所以也。

【俳諧歳時記】荷田東麿翁の說に、神無月は雷無月也。六月を雷鳴月といふに對せりと。これ古人未發の論也。又安藤爲章の年山紀聞に云、十月を雷無月といふことは、（略）十月に至りて雷の聲收りはつる故に雷無月といふなるべし。

注（一）なほ滑稽雜談には、異名として、孟冬・上冬・初冬・良月・大章・六月・陽正・吉月・開月・小春・小六・陰月・始氷・極冬・中冬・首冬・玄伸・應鐘等を擧げ、なほ、神なかり月、神去月、時雨月、拾月、初霜月など詠んだ和歌を擧げ、年浪草及び俳諧歳時記には、此の外に、陽月・秦正とあり、兩書が冬の條に掲げる神本も十月の異名である。（一）例句に、「けふよりやいうはちりぬるかんなづき」（正章）を擧げてある。（二）例句に、「霜柱しらけたつるやかむな月」（正章）を擧げてある。（三）篤信は貝原益軒。この說は、その著、日本歳時記の所說である。

季題解說　陰曆十月は諸神が出雲國に旅せられるため神々が留守であるといふので十月を神無月といふ。出雲國だけは神有月である。神無月といふも神有月といふも、たゞ陰曆十月と稱するのとは餘程複雜な聯想を伴ふのである。〔參照〕小春。

例句

神無月

神無月火ともす禰宜の直垂哉　言水（俳諧五子稿）
[illegible]楯筒あけてえむらん神無月　來山（いまみや草）
繪馬にまた泣よるや神無月　去來（去來發句集）
神無月ふくら雀ぞ先づ寒き　其角（五元集）
楊弓に名のる女やかみなつき　同（同）
卵塔の[illegible]妻やけにも神無月　同（同）
高砂や禰宜の湯治の神無月　同（同）
御留守居に申し置く也神無月　同（同）
垣間見やたしか葉守の神無月　支考（蓮二吟集）
宗任に水仙見せよ神無月　蕪村（蕪村句集）
かみ無月霰なつかしき日ざし哉　太祇（太祇句選）

神無月

十月の笹の葉青し肴籠　太祇（太祇句選）
人顔も旅の晝間や神無月　同（同）
拍手もかれ行く森や神無月　也有（蘿葉集）
十月のあらいそがしや花もみぢ　蓼太（蓼太句集）
小笹吹風も何やら神無月　巣兆（曾波可理）
安蘇一見急ぎ申やかて神無月　一茶（一茶句帖）
くれがたや障子の色も神無月　蒼虬（蒼虬翁發句集）
十月や早珍らしき赤椿　蒼虬（同）
捨ぶねに雨たまりけり神無月　梅室（梅室家集）
松風やひとり宮守る神無月　心敬（心敬發句集）
禪寺の松の落葉や神無月　凡兆（猿蓑）
神無月紅葉をふける軒端哉　宗長（宗長手記）
何なるらん山木匂ひて神無月　秋風（眞木柱）
山妻や髪たぼ長に神無月　蛇笏（ホトトギス）
狂ひ吹く池のあやめや神無月　青芭（同）
國人や神在月の早火燵　冬水（同）
高張の神在月の大社かな　汀三（同）
おくれ居し競馬幸あり時雨月　伯洲（同）
本山へ傘の寄進や時雨月　赤南（同）

小雪（せうせつ）

古書校註

【滑稽雜談】小雪の節。素問の註に曰、小雪の氣、初の五日、虹藏れて見えず。次の五日、天氣上騰し、地氣下降す。後の五日、閉塞して冬を成す。（略）〇上の三事は、十月の中の三氣にて、皆冬をなすの氣候也。作意となす時猶考ふべし。

【年浪草】孝經緯に云、立冬の後十五日、斗、亥に指すを小雪と爲す。十月の中天地の積陰溫かなるときは則ち雨と爲り、寒きときは則ち雪と爲る。時に言ふこゝろは小とは寒未だ深からずして、雪未だ大ならざる也。

参照　立冬（リツトウ）

十一月（じふいちぐわつ）

季題解説　現代の俳句で十一月といへば陽曆の十一月を指してゐるのである。師走をあとに控へた初冬の第一月で、心慌しさもいまだ覺えず、しみじみと冬に入つたことの味はれる月である。参照　霜月（シモツキ）

例句

十一月

十一月九日柿に雪二寸　呂仙（ホトトギス）
南縁や十一月の青芭蕉　龍子（同）

霜月（しもつき）

あたゝかき十一月もすみにけり　草田男（續ホトトギス）

霜降月（しもふりつき）　露ごもりの葉月（つゆごもりのはつき）　神樂月（かぐらづき）　雪見月（ゆきみづき）　雪待月（ゆきまちづき）　神歸月（しんきづき）
仲冬（ちゆうとう）　辜月（こげつ）　天正月（てんせいげつ）　周寒月（しうかんげつ）　復月（ふくげつ）　周三至（しうさんし）　叶蟄至（けふちつし）　廣寒月（くわうかんげつ）　水（すゐ）
正（せい）　子月（しげつ）　黄鐘（くわうしよう）　周正（しうせい）

古書校註

【滑稽雑談】清輔奥儀抄に云、霜しきりにふる故に、霜ふり月と云ふを誤れり。

【俳諧歳時記】この月霜しきりに降る故に、霜降月といふ。又略して霜月と云ふ。

註 ○なほ滑稽雑談には、異名として、仲冬・暢月・辜月・天正月・一之日・周寒月・周三至・復月・叶蟄至・廣寒月・天正・子月・黄鐘等を擧げ、なほ、露ごもりの葉月・神樂月・霜見月・雪待月・神歸月などを詠んだ例歌を擧げ、年浪草及び俳諧歳時記には、此の外に、周正・雪見月を擧げてゐる。暢月は、梁元帝纂要に據れば十月、淮南子に據れば十一月であるが、問題のものらしい。

季題解說　陰暦の十一月を称するのであるから大體陽暦の十二月に當る。冬も大分深くなつて霜もきびしく降りる頃である。都會地では師走の慌しい氣分に日々を過しつゝあるのであるが、霜月といふとそれら生活の現實を離れて陰暦十一月の冬深む季節だけが表現せられるのである。參照 十一月

例句

霜月

霜月もこぼるゝものは松葉かな　梅室（梅室家集）
霜月は木葉のぬるゝ朝日哉　空我（桂葉）
田の畦に霜月の鶴並びけり　奇峰（新俳句）
霜月や壺に活けたる枝蜜柑　はじめ（ホトトギス）
霜月の篠伐り賣るや小百姓　霜樹（同）

大雪（たいせつ）

古書校註

【滑稽雑談】大雪の節。素問の註に曰、大雪の節、初の五日、冰益々壯んに、地始めて坼け、鶡旦鳴かず。次の五日、虎始めて交る。後の五日、茘挺出す。○大雪の節は十一月の節也。上に記するは例月のごとく節の三候也。

【年浪草】月令廣義に曰、孝經緯に云、小雪の後十五日、斗、壬に指すを大雪と爲す。十一月の節なり。言ふこゝろは積陰雪と爲つて、此に至つて栗烈として大也。參照 小雪

十二月（じふにぐわつ）

季題解說　一年中の月の極なるを以て極月とも言ひ又師走とも言ふ。然し

極月と言ひ又師走と稱すれば單に十二月と稱するのとは自ら季題としての味が違つて來る。たゞ十二月といへば、極月・師走などと稱するより餘程人生的な意味が稀薄となるやうである。〔參照〕師走。

例句

十二月

菜の花を活けて待合十二月　火蘭（ホトトギス）
温泉の宿に假の世帶や十二月　晃嶺（同）
蕾もちて枯れゆく菊や十二月　深叢（續ホトトギス）
賑ひも一筋町や十二月　素夕（同）

師走（しはす）

春待月　梅初月　年よつむ月　親子月　暮古月　極月　弟月
三冬月　季冬　抄冬　涂月　歳抄　餘月　嘉平　玄律　殷正　凋年
晚冬　臘月　大呂　蜡月　急景　窮月

古書校註

【滑稽雜談】清輔奥儀抄に云、僧をむかへて佛名をおこなひ、或は經をよませ、東西にはせはしるゆへに、師はせ月と云ふを誤れり。○（二）一說に云、四時のはつる月なれば、しはつ月といふなるべし。つとすと通ず。豐後に四極山あり。世俗極月をいへるがごとし。然れば四極月と云ふべきか。
【俳諧歲時記】貝原篤信云、豐後國に四極山あり。四波津山と稱す。その名も訓も證とすべしと。この說其の要を得たるに似たり。しかれども、四は數の四にあらず、としのとを略せるなれば、四波津と書くは可なり、眞名には年極と書くべし。

註 ○なほ滑稽雜談には、異名として、季冬・抄冬・涂月・歲抄・一歲・改歲・餘月（注に暮冬・窮陰がある）除月・嘉平・玄律・二之日・殷正・二陽・凋年・晚冬・小歲・臘月・大呂・蜡月等を擧げ、なほ、春待月・梅初月・年よつむ月・親子月・暮古月など詠んだ例歌を擧げ、年浪草及び俳諧歲時記には、此の外に、急景・窮月・霜蟾・極月・弟月・三冬月を擧げてゐる。但し霜蟾は、增山井に十二月の異名とせるは恐らく誤で、唯霜夜の月をいふなれば、秋冬の月をいふべきかと云つてゐる。（一）日本歲時記の所說。

季題解說 十二月の別稱であるが、單に十二月と稱するより餘程人生的な意味が加はつて來る。卽ち一年もこれで終りの慌しい人事往來を想像させる。本來舊曆の十二月であるべきであるが、霜月とか神無月とかのやうなものとちがつて、これは新曆の十二月としても習慣的に用ゐられてゐる稱呼である。〔參照〕十二月。

例句

師走

何に此師走の市へ行烏　芭蕉（伊駒堂）
たび寢よし宿は師走の夕月夜　同（熱田三歌仙）
月白き師走は子路が寢覺哉　同（泊船集）
かくれけり師走の海の鷉　同（新花鳥）
市に入てしばし心を師走かな　素堂（俳諧五子稿）

借ひとり師走の野道梅の花　來山（いまみや艸）
賣鴨の毛も撫つくす師走哉　浪化（浪化上人發句集）
酒ゆへと病を悟るしはすかな　其角（五元集）
妖ながら狐貧しき師走かな　同（五元集拾遺）
大庭をしろくはく霜師走かな　同（同）
荷よばりの小坊主にこそ師走聲　同（同）

歳暮

山伏の見ごとに出立師走かな　嵐雪（玄峰集）
老たもの丶顔を見あぐる師走哉　杉風（杉風句集）
炭賣に日のくれかゝる師走哉　蕪村（蕪村遺稿）
うぐひすの啼や師走の羅生門　同（蕪村句集）
蜉蝣ひとつ障子に羽打師走哉　同（發句題叢）
うき事は丶らじ師走の鳶烏　樗良（樗良發句集）
すさまじき物や師走の鏡磨　也有（蘿葉集）
師走の月鶏のものと成にけり　同（蘿の落葉）
金銀の氣に物こほる師走かな　蓼太（蓼太句集）
起されて見れば栗蒸師走かな　同（同）
水仙にたまる師走の埃かな　几董（井華集）
醉李白師走の市に見たりけり　同（同）
足袋賣の聲うち曇師走哉　同（同）
つくろはぬものや師走の猿すべり　白雄（白雄句集）
背戸に門に師走月夜の米俵　同（同）
さく／＼と栗搗師走月夜かな　曉臺（曉臺句集）
百姓の板戸負行しはすかな　同（同）
我菴はよし原霞師走かな　巣兆（曾波可理）
芦ばかりつらし師走の角田河　乙二（をのゝえ草稿）
俵なりのあとつく雪の師走哉　蒼虬（蒼虬翁發句集）
馬の背に鰤の寝て行く師走哉　青德（鶚隱筆）
猿引が馬で戻りし師走哉　素市（皮こすり）
町中の師走に交る雀哉　乙由（麥林）
うちこぼすさゝげも市の師走哉　正秀（小文庫）
松杉の上野を出れば師走哉　馬光（馬光句集）
硯水捨てゝ師走の心哉　雀角（反故集）
極月や長者の門に夜薪割ル　撰居（花笠）
夕霧より伊左さま參る師走かな　子規（子規句集）
王孫を市にあはれむ師走かな　同（同）
便船を師走の濱に尋ねけり　莫作（同人）
隅田川師走の塵を流しけり　蕪子（ホトトギス）

師走

正月の花桶にある師走かな　　蠍躅（ホトトギス）
人込に師走の月を仰ぎけり　　麻葉（同）
物忘れしてせはしなの師走妻　　くに女（同）
奉公に來て日の淺き師走かな　　凍月（同）
極月の雨見つゝ坐る帳場かな　　布堂（同）
極月や稻なほ殘る諏訪平　　致格（同）
極月や婢優しく己が幸　　せん女（同）
臺灣や極月にして蝌蚪の水　　秀女（同）
境內に襤褸市の立つ師走かな　　句樂（續ホトトギス）
野々宮の藪を通るも師走人　　巴湖（同）
極月や提げふるびたる旅鞄　　羊多樓（同）
能を見て故人に逢ひし師走かな　　虛子（句集 虛子）
寺と宮隣り合ひたる師走かな　　同（續ホトトギス）

冬至

朔旦冬至　冬至粥　冬至南瓜　一陽來復　一陽の嘉節

古書校註

【滑稽雜談】素問の註に云、冬至の氣、初の五日蚯蚓結ぶ。次の五日麋角解く。後の五日水泉動く。○孝經の説に云、冬至に三義有り。一に曰、陰極まるの至り、二に陽氣始めて至る、三に日南に行くこと至れり。

世諺問答に云、冬至と申す事の侍るは、何の故にて侍るにや。答、白虎通に、周の世には十一月を正月とす。是を曆家には天正月と云ふ。殷の世には十二月を正月とす。地正月とす。夏の世には今の正月を正月とす。人の正月といへり。十一月は陽はじめて生ずる月なれば、冬至の日より日かげのながくなると申すなり。

朔旦冬至　公事根源に云、是れ十一月朔日の冬至に當るを云ふ也。廿年に一度まはる事にて、めで度祥瑞なるによて、其の年は、主上南殿に出御なりて、(一)旬を行はる。公卿賀表を奉る事など有り。神龜二年十一月、冬至の賀辭をうけ給ふ由、國史に載せたり。我が朝のみにあらず、異國にもためし有る事也。

和朝又禪家におゐて、朔旦に限らず、毎年冬至を專ら賀す。前一日冬夜と稱して、弟子の徒師家を饗す。俗に冬夜振舞と云ふ。冬至の日師家又門弟に酒飯を送る。何れの祖より始れるにや。追考すべし。

【日次紀事】(二)此の月朔日、偶々冬至に當れば、則ち是を朔旦冬至と謂ふ。禁裏宜陽殿に平座の節會有り。諸卿文章を献じて之を賀せらる。(略)冬至の日、五山秉拂す。又前夜、禪家其の師化を饗す。蓋し來復の陽を以て出日の源に比する者也。

【年浪草】孝經緯に曰、大雪後十五日、斗、子に指すを冬至と爲す。十一月の中、陰極つて陽始めて至る。日南に至る。漸く長く至る也。

民間亦餅を製して一陽來復を賀す。此の義朔日冬至のみに非ず、毎歲十一月朔日此の儀有つて專ら奴僕を勞はるの日也、（三）一陽の嘉節、曹植の冬至の表に曰、千載の昌期一陽の嘉節、四時交泰して萬彙昭蘇す、（四）亞歲祥を迎へ（五）長を履んで慶を納る。

註（一）孟冬の句を參照せよ（二）十一月。（三）增山井に既に一陽の嘉節を出してゐる。（四）滑稽雜談に亞歲の項を掲げ、「宋書に云、魏晉冬至の日、萬國及び百僚の稱賀を受く。因つて小會す、其の儀、亞ぐ朔に亞ぐ也」とある。（五）履長を獻るを參照せよ。

季題解說　陰曆十一月の中、即ち大雪より十五日目、陽曆の十二月二十二・三日頃に當り、太陽冬至線上に直射する時であつて、晝が最も短く夜が最も長い時である。朔日冬至は冬至の十一月朔日に當つた時のことで、二十年目に一回あることになる。

この日特に粥を食べたり、南瓜を食べたりする、又柚子風呂を立てゝ入る習慣がある。兵庫縣武庫地方では「ん」の二つ重つたものを七種類食べる習慣がある、これは「運」が強くなるやうにとの意で、きんかん・かんてん・にんじん・れんこん・ぎんなん・なんきん（南瓜）・なんきん豆・うんどん（うどん）などから何れでも七種を選ぶのである。

朝鮮固有色辭典には「亞歲　冬至の日を亞歲といひ、小豆粥を炊き、團子を交へて食し、これを祠堂にも供へて禮拜する、この小豆粥を門扉に塗ると惡疫を攘ふともいふ」とある、これを冬至小豆粥と呼んでゐる。〔參照〕大雪

例句

冬至

挑燈に水菜揃へる冬至かな　許六（五老井發句集）
待らんに行はや我も冬至の日　支考（蓮二吟集）
貧乏な儒者とひ來る冬至哉　蕪村（蕪村遺稿）
書記典主故園に遊ぶ冬至哉　同（[illegible]）
新右衛門蛇足を誘ふ冬至かな　同（蕪村句集）
飯噴ふて除にしてみる冬至哉　太祇（太祇句選）
野の中に土御門家や冬至の日　同（同）
陰陽師歩にとられ行冬至哉　同（同）
雨ながら朔日冬至たゞならね　召波（春泥發句集）
よそながら冬至と聞や草の庵　同（同）
百姓に浴ほどこす冬至哉　同（同）
禪院の子も菓子貰ふ冬至哉　同（同）
鶯のうしろ影見し冬至哉　几董（井華集）
利にうときすね人醉り冬至酒　曉臺（曉臺句集）
冬至とて墨の量を試みけり　成美（成美家集）
冬至なりふたりのわつぱはや戻れ　同（同）
霜ふりがからり／＼と冬至哉　一茶（七番日記）
さほ一人と上堂に直す冬至哉　同（同）

冬至

日本の冬至も梅の咲にけり	一茶	（七番日記）
上加茂へふと參りたき冬至哉	蒼虬	（蒼虬翁發句集）
川畑栁をつたふ冬至哉	周不	（新選）
門前の小家も遊ぶ冬至哉	凡兆	（猿蓑）
物干の影に測りし冬至かな	子規	（子規句集）
佛壇の菓子うつくしき冬至かな	同	（同）
大鍋の冬至南瓜や煮えたちぬ	尾州	（同人）
山國の虛空日わたる冬至かな	蛇笏	（ホトトギス）
國許の僧が來りし冬至かな	綠翁	（同）
味噌汁にかぼちや浮きたる冬至かな	照葉女	（同）
へつついに冬至の柚子がのつてをる	風生	（同）

參考 二十四節氣中立春から第二十一番目の中であつて十一月中に相當する。太陽の黃經は二百七十度になる時刻で太陽曆では十二月二十二三日頃になる。太陽は此の時天球上最も南へ偏り其の赤緯南二十三度二十七分となる。故に正午に於ける太陽の高度は一年中で最も低い。又日出日沒の方向も一年中で最も南へ偏る。此の頃北半球では一日間の日照時間が一年中で最も少く、從つて地面が太陽から受ける熱量も尠い。東京では晝間九時間二十五分、夜間十四時間三十五分となる。併し此の時が一年中最も寒い時ではない。如何となれば地面が一日中に外界へ放散する熱量は太陽から地面が受ける熱量よりも尙多く、地面は未だ冷却しつゝある道程にあるからである。從つて一年中最も寒くなる時は地面が放散する熱量と太陽から受ける熱量とが等しくなつた時であつて、東京では一月末から二月始め迄の間に起る。

冬至の候に對し支那では蚯蚓結・麋角解・水泉動などの名稱を附してあるが、之れは冬極つて漸く寒さを增す事を示したもので、次に來る小寒・大寒の節氣への道程なる事を示したのは現在の氣象學上の統計から見た氣候と善く一致する。又冬至の頃は太陽が最も低くなる故、北緯六十六度三十三分以北では地平線上へ姿を見せぬ狀態となる。

節季（せつき）

古書校註

【年浪草】倭俗、臘月を節季と謂ふ。此の節、民間多く春時の用物を辨備して、或は節小袖（セツコソデ）と謂ひ、或は節薪（セツタキヾ）と謂ひ、或は節米（セツマイ）と謂ふ。

【俳諧歲時記】（一）二十二日より廿七八日まで。

註（一）十二月。

季題解說 十二月の末である。「年の暮」と等しいのであるが、節季といふ言葉は市井の商人とかその他の小市民の間に極く普通に用ひられてゐるか

蛤の生けるかひあれとしの暮　芭蕉（舊鄕子）
みなおがめ二見の七五三を年の暮　同（金蘭集）
ふる里や臍の緒になくとしの暮　同（曠野）
めでたき人の數にも入らん老の暮　同（陸奥衞）
年くれぬ笠着て草鞋はきながら　同（今日の昔）
わすれ草菜飯に摘ん年の暮　同（江戸蛇の鮓）
鎌とぐや伊駒あたりのとしの暮　鬼貫（俳諧七車）
としぞけふ朝日や後にくるゝらん　同（同）
月花も見かへすや年の峠より　同　鬼貫句選
年の淀春さへひとよ伏見まで　同（俳諧七車）
白晝に雉子拾ひけりとしの暮　言水（俳諧五子稿）
お奉行の名さへおぼえずとし暮ぬ　來山（いまみや艸）
としの瀨や濳ず排せず行ほどに　同（同）

風雅はおのづからの暮ともなれば間にこたへるたこそすれ
年のいそぎ昔とむなしや只の狀　同（同）
暮て行年の冠や半白髮　同（續いまみや艸）
かざれ〳〵明にこそ年の都入（けふ）　同（同）
下積の蜜柑ちひさし年の暮　浪化（浪化上人發句集）
追鳥も山へ歸るか年のくれ　丈草（丈草發句集）
年浪のくゞりて行や足の下　去來（去來發句集）
うす壁の一重は何かとしの宿　同（同）
千觀の馬もせはしやとしの暮　其角（五元集）
鳩部屋の夕日しづけし年の暮　同（同）
小傾城行てなぶらん年の暮　同（同）
子をもたば幾つなるべき年の暮　同（同）
行幸の牛洗ひけり年の暮　同（同）
置捨に笈の小文や年の暮　同（五元集拾遺）
流るゝ年の哀れ世に白髮さへ物憂　同　同
年中の放下見えけりとしの暮　同（同）

東潮が子もてるに申遣す
つき立の餅に赤子や年の暮　嵐雪（玄峰集）
錢ほしとよむ人ゆかし年の暮　同（同）
三盒子ことたらわすや年の暮　同（同）
蕎麥うちて鬢髭白し年の暮　同（同）
猿猴の手に手をかるやとしのくれ　同（同）
月雪もふるき枕にとし暮ぬ　杉風（杉風句集）
としの暮破れはかまの幾くたり　同（同）
川の音藪の起ふしとし暮ぬ　同（同）

包直し正月つかん座敷杖　同（同）
畢縮〻く心床しや年の暮　桃隣（古太白堂句選）
薄櫃の世はやるせなや年の暮　同（同）
夜に入て水貰来たり年の暮　同（同）
朝起もひとつに年はくれに鳬　千代女（千代尼發句集）
芭蕉去てそのゝちいまだ年くれず　蕪村（蕪村句集）
近江路や軒端によする年の波　同（全集）
怖す也年暮るよとうしろから　太祇（太祇句選）
黒に殘る親の若さよ年の暮　同（同）
居風呂の底ふみぬくや年の暮　同（同）
年の暮嵯峨の近道習ひけり　同（同）
笈はさむ下部の粟や年の暮　召波（春泥發句集）
竈塗の心しづかにとしの暮　同（同）
名も高き茶人も見けり年の暮　同（同）
常よりも遊ぶ日多しとしの暮　同（同）
白雪のつもる思ひに年くれぬ　樗良（樗良發句集）
ゐねぶれは誰やら起す年の暮　同（同）
質に泣く傾城もありとしの暮　也有（蘿葉集）
六の鐘十とはつかでとしの暮　同（同）
年の波紙衣でわたる淺瀨あり　同（同）
明日の事〳〵逆年暮ぬ　同（[illegible]の落葉）
若衆が晴着て出たり年の暮　蓼太（蓼太句集）
質にをく物に月より年の暮　同（同）
鼓屋と浮世かたらむとしのくれ　同（同）
年波の淀とこそ見れしゞみ汁　同（同）
とし暮る御方へ招かるゝ　几董（井華集）
年も良くだかけきそふ松の風　白雄（白雄句集）
年のいそぎ齊宮の繪馬やをしの縫　同（同）
としのくれ鏡の中にすわりけり　曉臺（曉臺句集）
歳の暮隱者かたぎの恥かしき　同（同）
年迫て風大虚を鳴らすかな　同（同）
としくれぬ松葉角力のあらそひに　士朗（枇杷園句集）
瓢箪で醉おさへてとしくれぬ　同（同）
年暮ぬ東市に甘なら則有酒　巢兆（曾波可理）
背をほすも入日がちなりとしのくれ　成美（成美家集）
としくれぬ頃もはたきぬ嵩からし　同（同）
はや暮よ三日ばかりは何にせむ　同（同）
流れ木のあちこちとしてとし暮ぬ　一茶（享和句帖）

年の暮

役どしと中間に暮にけり　一茶（同日記）
餅の出る槌がほしさよ年の暮　同（同）
としの暮亀はいつ迄吊さるゝ　同（同）
枕の貧汝がとしはどう暮る　同（七番日記）
めそ／＼と年は暮けり貧乏樽　同（同）
ともかくもあなたまかせの年の暮　同（おらが春）
影法師も祝へたゞ今年暮る　同（一茶句帖）
のら／＼もあればあるぞよ年の暮　同（九番日記）

酒後

手枕や年が暮よとくれまいと　同（一茶新集）
叱らるゝ人うらやましとしの暮　同（發句集）
驛見えてひと息つくや年のくれ　蒼虬（蒼虬翁發句集）
龜の尾のみじかく歳は暮にけり　梅室（梅室家集）
火燵から松風きくや年の暮　蓑里（三千化）
雪みぞれ降にまぎれて年暮ぬ　吟江（心花）
往來せで年くるゝ雪の山家哉　通助（五車反古）
葛飾や鶴の羽拾ふ年のくれ　東爲（明和二）
鰯さす豆がらふとし年の暮　白鱗（同）
米蟲の石臼めくる歳暮哉　楸下（其袋）
年のくれ杼の實一つころ／＼と　荷兮（曠野）
齒朶刈の椿見付し年の暮　双木（大三物）
年の暮氷を見れば靜也　蒼狐（古今句鑑）
小原女の楷子賣けり年の暮　醉雪（交車）
一つ家に米つく音や年の暮　斗石（同）
鬼にあひ佛にあひぬ年の暮　東鶯（小弓）
萬歳や百姓やめて年の暮　千翁（下かつら）
歌をよむ身の尊とさよ年の暮　文鱗（虛栗）
椀提げて乾鮭さげて年のくれ　狙醉（新俳句）
店先のツチオ講談年の暮　武一（同人）
御玉串淨火に焚きぬ年の暮　九萬字（懸葵）
大店の厨磨ぐなり年の暮　不羊（同）
いさゝかの金欲しがりぬ年の暮　鬼城（ホトトギス）
顧みす行人に年暮るゝかな　亞浪（同）
歳晩や薄雪ふりし町かざり　宵曲（同）
年暮るゝ終ひの能を見たりけり　たけし（同）
暮の金さゝらほさらに費ひけり　洞閑居（同）
陋巷や雪ちら／＼と年歩む　楊童（同）
歳晩の荷船の中の渡舟かな　子柳（同）

年の瀬や餅花賣の傘の雪　羽公（同）
佛賣る僧に會ひけり年の暮　水竹居（同）
叱られて佇てる乞食や年の暮　不知郎（同）
役つきし無人芝居や年の暮　みの介（續ホトトギス）
金剛の亂能を見る年の暮　洛山人（同）
窯元へ急ぎの文や年の暮　宿雨（同）
かへりみるこの一年のながれかな　もと女（同）
大原女に文ことづてや年の暮　虚子（句集虚子）

行く年（ゆくとし）

いぬる年（とし）

季題解説 歳暮のことである。一年の經過を振返つた心持のこもつた名稱である、（參照）年の暮（參照）

例句

行く年

行としのそらの隙さへいそがしき　鬼貫（俳諧七車）
寐よそれよ夢のゆくへの年をまた　同（鬼貫句選）
欄や髮の扇に年ゆく日　同（同）
行としや石噛あてゝ齒にこたへ　來山（續いま宮艸）
くれて行年のまうけや伊勢熊野　去來（去來發句集）
行く年や壁に恥ぢたる覺書　其角（五元集）
行く年も戸板めでたし餅の跡　同（五元集拾遺）
行年や多賀造宮の訴訟人　許六（五老井發句集）
七十の暮行としぞつれなきよ　杉風（杉風句集）
行としやもどかしきもの水斗　千代女（千代尼發句集）
ゆく年の瀨田を廻るや金飛脚　蕪村（蕪村句集）
行としのめざまし草や茶筌賣　同（蕪村遺稿）
行年や氷にのこすもとの水　同（春蔵且帖）
行年や齋藤太郎左門構　同（落日庵句集）
行としや月日の鼠どこへやら　召波（春泥發句集）
ゆくとしや六波羅禿おぼつかな　同（同）
行としやたゞならぬ身の妹分　同（同）
ゆく年や小櫃は餅の間に合ず　也有（蘿葉集）
ゆく年や尾も引たらず鶺鴒　同（同）
行としにはきさ物としる身哉　同（蘿の落葉）
行としや古傾城のはしり書　几董（井華集）
年なとし老ゆく宵の化粧かな　同（同）
行や年また逢ふよしもうるさき人　白雄（白雄句集）
行年やひとり嗣しる酒菅の味　同（同）

行く年

ゆくとしの廿九日も子の日かな　士朗（枇杷園句集）
ゆくとしのごそりともせぬ山家哉　同（同）
行としや千代の衛の須磨の浦　巣兆（曾波可理）
しづかさにおぼえられつゝ年ぞゆく　成美（成美家集）
晝襖の人にもとしのくれゆくか　同（同）
年はかく氷をはしる入日かな　同（同）
藪先や暮行く年の烏瓜　一茶（七番日記）
行く年や身はならはしの古草履　同（同）
行としもそしらぬ富士のけぶり哉　同（同）
年もはや穴かしこなり如來様　同（同）
年神が今行かしやるぞ御時宜せよ　同（同）
行く年や疊一つと書く附木　同（同）
行く年や庇の上におく薪　同（同）
ごろり寐や先はことしも仕廻酒　同（同）
せめてもの足六十よとしの坂　同（同）
行く年や氣遣舟の遊山幕　同（同）
行年や湯水に遣ふ金壺分　同（一茶句帖）
ひとつ橋あやうき老が年ぞ行　乙二（松のゝえ草稿）
ものいはぬ人のうへにも年ぞ行　同（同）
行年や伊勢の御燈の粘細工　琴風（千鳥掛）
牡蠣舟の灯もちら〳〵と年ぞ行　觀瀾（寶曆九）
行年や樂屋の窓の隅田川　樹人（ホトトギス）
行年や机の下のたゞの反古　脊曲（同）
行年や暮れて氣づける誕生日　行果（同）
行年や浮名も古りし夫婦仲　さくら女（同）
行年や肉親ながらかゝりうど　煤六（同）
行年の百眼の中の睡魔かや　曙剛（同）
行年や流しの尻の水仙花　一壺（同）
年行くや蝦夷のはてなる漁師町　慧月（續ホトトギス）
行年の松杉高し相國寺　虚子（句集虚子）
行年のともし火なりと明らせよ　同（ホトトギス）

年惜（としをし）む　冬惜（ふゆをし）む

古書校註

【年浪草】冬を惜む。向景明が除夜の詩に曰、今年今日留むべからず、明日明年更に愁ふべし。○君子は尺の璧を拗ち、寸陰を惜むといへり。一年の終り、老のまさに至らんとする處、千悔なを餘りあり。學者年を惜むの

意を詠ぜし和歌あり。（一）うつり行くかげだにうしと思ふ身の學べる道に年のくれぬる　師兼。

〔注〕（一）冬を[illegible]の[illegible]として描く記してあるが、內容は年を惜しむものになつてゐる。年を惜しむと冬を惜しむとは聊か意が異なるであらう。

季題解說　年の逝くを惜む意である。歳暮に迫れば時の歩みの速いことを特に感ずる。又、顧みて一年の追憶に感慨の新たなるものもあらう。年を忘れんとするのも人情であり、年を惜むのも亦人情である。〔參照〕年の暮

例句

年惜む

惜まじな[illegible]のつぼみとなる年を　鬼貫（鬼貫句選）
惜めども寢たら起たら春である　同（同）
醉をともに春待年ををしむ哉　白雄（白雄句集）
落る歯のはじめて年の惜き哉　曉臺（曉臺句集）
日本の年がをしいかおろしや人　一茶（旅日記）
おもしろや我は我等も卅九　同（七番日記）
年をしむ日もよき程ぞむぐさの屋　乙二（をのゝえ草稿）
百萬の能見て年ををしみけり　たけし（續ホトトギス）
年惜む心うれひに變りけり　虚子（同）

小晦日（こつごもり）

古書校註

【增山井】小つごもり（俳）。晦日の前日也。

【滑稽雜談】按ずるに、十二月廿九日を和俗の稱する所也。晦日を俗又大晦日と稱する故、けふをかく云ふ也。小は大に對する詞也。又按ずるに、中華において冬至の前日を小至など云ふ由見え侍る。是らに準じて心得べきか。猶ほ考ふ可し。

季題解說　舊暦の晦日の前日を小晦日といつたが、引いて新暦大晦日の前日卽ち十二月三十日をも斯く呼ぶやうである。〔參照〕大晦日三、

大晦日（おほみそか）

おほつごもり　大年（おほとし）

古書校註

【山之井】おほつごもり日は、一年のはてなれば、日くれ夜更くるにつきて、名殘ををしみ、わが數へはん年をわび、ながるゝ年はせくもせかれず、（一）ゆくとし[illegible]ときには、[illegible]てもたまらぬ心ばへなどいひ、又、をりかすゝばなも、屋うちのほこりもはきのごひ、鏡のあもゝ（二）尻もちもつきて、これは[illegible]、かや・かち[illegible]をうり、たてまつ・ゆづり葉もてありき、せきぞろのやかましく、借錢こひのせはしなくゆきちが

ふおほぢの氣色、うへつきぬときあらひ、正月小袖やりくばり、ゑずゑこ・あらめやうの物、鯛・鱧なとこうじそへ、其のほどゝの家々のまうけ、年わすれによひむかへ、としとりにゆきつるゝ人々のていなども、其のえんによりて、いひなすべし。

【日次紀事】　今日一年の終、俗に大晦（オホツゴモリ）と稱す、良賤互に相賀す、是を歳暮の禮と謂ふ。金銀・衣服・酒肴互に贈答の儀有り。又親戚の間、鏡餅互に相贈る。是を鏡を居ゑると謂ふ。

【滑稽雜談】　中華には除夜・除夕などいへり。本邦には大晦日或は大三十日（オホミソカ）・大年など云ふ。和俗すべて物の至極を大と稱す。故に今日は一とせの月日の至極なれば、此の晦日を呼んで大と稱す。さもあるべきにや。

【年浪草】　雜俎及び代醉篇に、元日を小歳と名づく、之に對して晦日を大歳と謂ふべき乎。

註　（一）例句に「ゆく年のやさきにはつくたてもなし」（利貞）が擧がつてゐる　（二）例句に「尻もちもつきてよろこぶしはす哉」（一に、歳暮哉、貞徳）が擧がつてゐる。

季題解説　もと舊暦十二月の晦日を大晦日といつたものだが、今は新暦十二月の晦日をも大晦日といふ。又、大年とも呼ばれる。參照　小晦日・年の夜（トシノヨ）　除夜（ヂヨヤ）

例句

大晦日

鶴おりて日こそ多きに大晦日　其角（五元集拾遺）
大年も雀の遊ぶ垣ほかな　杉風（杉風句集）
大卅日侮見て居るをそしらるゝ　一茶（享和句帖）
大年や風情の出來る日暮方　蒼虬（蒼虬翁發句集）
雁鳴や古き月夜の大三十日　若狐（古今句鑑）
十露盤の埃ぞ見ゆる大三十日　鶴介（安永六）
重ねおく袖の匂ひや大三十日　菜根（新選）
此家の古き行燈や大三十日　青々（春夏秋冬）
大三十日とおしつまりたる遊びかな　瀾水（同）
大歳の猫にとらるる鼠かな　百涼（同人）
大年の髮結ひ上げし女かな　蘇北（同）
古里や夜の嶺高く大晦日　手古奈（ホトトギス）
新繩にかへし撞木や大三十日　芒趾（同）
馬車つくや大つもごりの山ホテル　禪寺洞（同）
母人の起居の杖や大三十日　朱人（同）
大年や道をはさんで寺二つ　岫雲（同）
大年や浪をへだてゝ神戸の灯　竹の春（同）
湖に大年の日の沈むかな　耕雪（同）
提灯に大年の門洗ひけり　都穂（同）
大年や夜もすがらなる篝守　鷹兒（同）

大年の常にもがもな彌陀如來　茅舍（同）
大年の鏡のごとき硯かな　数十（同）
大年の夕日當れる東山　播水（同）
大年の塵をうかべて紙屋川　流枕（續ホトトギス）
大年や橋のたもとの屏風賣　笑人（同）
塵取に飾の屑や大晦日　涙石（同）
そこらまで萬年青を買ひに大晦日　躑躅（同）

年の夜（としのよ）

季題解説 除夜の別稱である。〔参照〕大晦日（おほみそか）、除夜（ぢよや）

例句

年の夜

としの夜もあかしおたやら須磨心　鬼貫（佛諸七車）
としの夜の鰤や鰯や三の膳　去來（去來發句集）
とし一夜榧殘さじ目の鼠　嵐雪（玄峰集）
としの夜やひきむすびたる纜守　惟然（惟然坊句集）
月雪や旅寐かさねてとし一夜　白雄（白雄句集）
鼠子も春待としの一夜かな　同（同）
いくたびかあぶるすゞりも年一夜　乙二（をのゝえ草稿）
年の夜や梅を探りに花屋迄　田女（續明烏）
年の夜や焚火のうつる鷄の顔　寛麗（古今句鑑）

除夜（ぢよや）

季題解説 十二月三十一日、大晦日の夜をいふ。別稱年の夜。夜半十二時を期して寺院では百八の鐘を撞く。年越蕎麥と稱して蕎麥を喰ふ習慣は相當廣く行はれてゐる。〔参照〕大晦日（おほみそか）、年の夜（としのよ）　人事　年越蕎麥（としこしそば）

例句

除夜

いざや寢ん元日は又あすのこと　蕪村（蕪村遺稿）
折て來て灯で見る除夜の柳哉　蒼虬（蒼虬翁句集）
人について吹しづまりぬ除夜の風　梅室（梅室家集）
面白う松風吹よ除夜の闇　青蘿（新五子稿）
花生ける大年の夜の火影哉　月斗（同人）
除夜の鏡像かけたる背後より　しづの女（ホトトギス）
門松や除夜の打水したゝかに　雨[illegible]（同）
除夜の爐火おとろへざまに眞赤なる　公羽（同）
何事もすみたる除夜の火鉢かな　竹人（同）
うばたまの除夜の社で額つきぬ　十字架（同）
つきゐたる鐘もありたる除夜詣　七堂（續ホトトギス）

除夜　山門のひらかれてある除夜詣　青火（ホトトギス）

年越（としこし）

【季題解説】年を越えて新年に移ることをいふのであつて、大晦日の夜のことをいふのであるが、別に立春の前夜即ち節分の夜のことを、またはその行事を年越とも呼ぶのである。

年越の獨歩は前者の場合に屬し、年越の豆は後者の場合に屬する。

【例句】

年越

あてなしに打越す年や雪礫　宗因（梅翁宗因發句集）

年こしやあまりをしさに出て歩行　北枝（北枝發句集）

餅たべて年うち越さん老の坂　支考（蓮二吟集）

もろともに年を越ばや巨燵の火　杉風（杉風句集）

年今宵越るや人の老のさか　同（同）

大神のみまへに年を送りけり　素逝（ホトトギス）

年を越す大きな錨おろしけり　黑潮（同）

年越の大戸おろしぬ一人者　無字（續ホトトギス）

父病みて年越榾もなかりけり　湘南（同）

年越しの老を圍みて兒孫かな　虚子（句集虚子）

私大（わたくしだい）

【古書校註】【栞草】奥州南部の人、十二月小の月なれば、翌朔日を以て晦日とす。故に私大と云ふとぞ。

寒の入（かんのいり）　寒固（かんがため）

【古書校註】【栞草】寒の入、大寒小寒、此の兩日小豆餅を食す。北越の俗、是を寒固（カンガタメ）といふ。

【季題解説】小寒に入る日のことである。即ち小寒・大寒を通し寒三十日に入る日のことである。北越地方では、この日に寒固といふて小豆餅などを食ふ習慣が殘つてゐる。【参照】小寒（ショウカン）大寒（ダイカン）寒の内（カンノウチ）

【例句】

寒の入

晴天も猶つめたしや寒の入　杉風（杉風句集）

ひく汐の淺くさすちや寒の人　成美（成美家集）

むつかしや今月が入寒が入　一茶（七番日記）

下馬先や奴が尻に寒が入　同（同）

うす壁にづんづと寒が入にけり　同（同）

うしろから寒が入る也壁の穴　同（一茶句帖）
鶺鴒の高股立や寒の入　同（同）
宵過や柱みり／＼寒が入　同（九番日記）
淺草や鳩や雀も寒の入　桂堂（春夏秋冬）
酒つくる町の燈や寒の入　秋葉（同　人）
杓の底ぬけて寒入る手水鉢　あふひ（ホトトギス）
寒に入りて朝な／＼の拾ひ掃き　千路（同）
水すはぬ鉢を日南や寒の入　かな女（同）
から／＼と寒が入るなり竹の宿　虚子（同）

小寒（せうかん）

古書校註

【滑稽雑談】小寒の節。素問の註に云、小寒の節、初の五日、雁北に郷ふ。次の五日、鵲始めて巣くふ。後の五日、雉雊く。○小寒の節は十二月の節也。俗に、寒の入也。

【年浪草】孝經緯に曰、冬至の後十五日、斗、癸に指すを小寒と為す。十二月の節なり。陽極まり陰生じて乃ち寒と為る。今年初つて寒尚ほ小さき也。

季題解說　陰暦十二月の節であつて、冬至の後十五日目、大抵陽暦の一月六・七日頃に當り、寒氣漸く強い。［參照］冬至　寒の入（カンノイリ）　大寒　寒の内（カンノウチ）

大寒（だいかん）　寒（かん）がはり

古書校註

【滑稽雑談】大寒の節。素問の註に云、大寒の氣、初の五日、鷄初めて乳む。次の五日、征鳥厲く疾し。後の五日、水澤腹く堅し。○是十二月中の三候也。俗に云、寒がはり也。

【年浪草】孝經緯に曰、小寒の後十五日、斗、丑に指すを大寒と為す。十二月の中なり。此に至つて栗烈として極まれり。

季題解說　陰暦十二月の中であつて、小寒の後十五日目、大抵陽暦の一月二十一・二日頃に當り、冬季中最も寒威の酷烈な時である。［參照］寒の入（カンノイリ）　小寒　寒の内（カンノウチ）

例句

大寒　大寒や八月ほしき松の月　一茶（發句題叢）
眼底に大寒の海狂ひゐる　涼斗（同　人）
大寒の冴るものもなき夜の空　桑陽（同）
大寒の波かぶりゐる小舟かな　吐牛（同）

大寒

大寒に狐の皮を晒しけり　鈴川（同人）
大寒の供養久しくもからざる　蓼花（ホトトギス）
大寒の釜山埠頭に上陸す　夏嵐（同）
大寒や書齋に荷を運ばする　碧雲（同）
大寒の對ありつゝと楞子かな　楊童（ホトトギス）
大寒にして暖や便り　茂葉（同）
大寒や水あげて澄む嵯峨の桶　鬼城（鬼城句集）

嚴寒（げんかん）　嚴冬（げんとう）

季題解説 冬の嚴しい寒さ。【參照】寒の内（カンノウチ）

例句
嚴寒
嚴寒や瀧見の椅子の厚ぼこり　播水（ホトトギス）
上堂のきびしき寒となりにけり　句一歩（同）

寒の内（かんのうち）　寒中（かんちう）　寒（かん）　寒九（かんく）　寒九の雨（かんくのあめ）

古書校註
【御傘】寒風・寒に入る・大かん・小かん・寒中・かんざらし・寒天・寒白・寒林等の類、冬也。寒山、冬也。但し、寒山寺・寒山拾得などの名所人名、薬の寒水石などは、冬にあらず。雜也。寒暑、雜也。中寒、冬也。冬寒に當てられて當座にわづらふ病の名也。傷寒（略）、素問に夫れ熱病者皆傷寒と有りと醫家に申侍る。かやうの冬にならざる寒の字、さむき・さゆるに三句去るべし。寒の字には面を嫌ふべき歟　他は之に准ず。
註 ○列擧してゐるものには、寒と寒さとの二様のものゝあることは、説明を要せないであらう。

季題解説 寒の入より寒明までの期間約一ケ月をいふ。寒中とも單に寒ともいはれる。大寒・小寒の別がある。【參照】寒の入（カンノイリ）　小寒（ショウカン）　大寒（ダイカン）

例句
寒の内
乾鮭も空也の瘦も寒の内　芭蕉（陸奥衛）
のら猫の聲もつきなや寒の内　浪化（浪化上人發句集）
海老焼てやまひに遊ぶ寒の中　樗良（樗良發句集）
寒日和木のゝき遠くたゝき居る　大木（懸葵）
寒の内春に似て柳煙るなり　竹の門（同）
何ともなき足大切や寒の内　かな女（ホトトギス）
捨水の即ち氷る寒に在り　たけし（同）
一はしり寒ゆるみたる簷しづく　靜雲（續ホトトギス）
御佛飯焼いていたゞく寒の内　雨圃子（同）

冬深し

季題解説 冬たけなはの意である。

日脚伸びる

季題解説 十二月二十二日前後冬至の日は晝最も短く、夜が最も長い。この頃午後四時にもなれば電燈をつけなければ用が足せないこともある。日が短いとかこつ。それからだんだんにいつとはなしに日が長くなつて行く。ふと氣がついて、日脚も少し長くなつたなと思ふことがある、さういふ感じを言ふのである。

春近し

春隣る　春を急ぐ　明日の春

古書校註

【御傘】 春をとなり・春ちかき・はるを待つなど、みな冬也。

【滑稽雑談】 春の隣、古今栄雅抄に云、一條禪閤御説に云、春の隣と云ふ事、隣はちかきと云ふ心也 秋の隣・夏の隣共云ふべき也。○藻鹽草に云、春の隣 歳暮也、但し晦日に限らざる歟。(略) 古今俳諧歌、冬ながら春の隣の近ければ中垣よりぞ花はちりける　深養父

季題解説 春近し　冬逝かんとして春の近きを待つ心持である。【季題】春待つ二

春来よとあふさゝ山のわかれかな　懐良（懐良発句集）
枯しとてからしそ柳春ちかみ　白雄（白雄句集）
ときすがまた冬といはれむあすの春　成美（成美家集）
人の子やはるを迎にゆくといふ　乙二（をのゝえ草稿）
春近く榾つゝかゆる菜畑哉　龜洞（あら野）
買ひ得たる蜆紫春隣　不人（ホトトギス）
塵取の水引屑や春隣　晨生（同）
室咲の木瓜の赤さや春隣　紫天（同）
一服の閑に在りけり春隣　鬼雨（同）
山々の並び宜しや春隣　耕雪（同）
鴉を見ぬ日數となりぬ春隣　しづの女（續ホトトギス）
藏あけて匂ふ林檎や春隣　小提灯（同）
水鳥の日向を見れば春隣　虚子（同）

春待つ

季題解説 冬も終らうとする頃、春の近きを想ひ期待する心持である。
【季題】春近し

例句　春待つ

珠數くりて春を待こそ仕事なれ　鬼貫（俳諧七車）
春待や年ある家の花ぶくろ　同（同）
君を月をまつ夜過こし春まつ夜　同（鬼貫句選）
灯の花に春まつ庵かな　同（同）
鏡を磨く春まつ老の若ざかり　同（同）
待春や乳に揃ふ歯の小口　浪化（浪化上人發句集）
いら鮭も梅も春まつ支度也　紙良（[illegible]和二）
[illegible]
春まつや第二の富の大そうさ　和風（同）
待つ春や千鳥染めたる大漁著　桃孫（ホトトギス）
春を待つ新の烏帽子の埃かな　拙童（同）
妹が眼にあやに春待つ簪かな　楞童（同）
春をまつ雪六尺の榾かな　果采（同）
春を待つ舞子の茶屋や松の中　鳳明（同）
挿す花もなくて一壺の春を待つ　二石（同）
池の底に在るもろもろや春を待つ　たかし（同）
春待つや薄紅したる茨の刺　清子（同）
ひたすらに春を待つなるみどりかな　奎子（同）
正月を待つ心にて稼ぎけり　草人（同）
病床に暦をかけて春を待つ　うとを（續ホトトギス）
嵐山の春を待つなる茶店かな　三社（同）
大いなる春を待つなる貧士かな　虛子（句集虛子）

三冬盡くる（みふゆつくる）　冬盡く（ふゆつく）

古書校註

【御傘】三冬つき春はくれ共とは、古哥詞也。春に成る也。

【滑稽雜談】簡説に云、御傘に云ふ古歌とは萬葉集の歌、春は來れどもと云ふ詞を結んでは、まぎらはしきゆゑに、春也と記するならし。只三冬盡くると計は冬也。作者心得べし。又(一)三冬月と云ふ。(二)見安に云、三冬のつきは、冬三月の盡くる也。（萬葉集十七、みふゆつき春は來たれど梅の花君にしあらねば折る人もなし　家持。（巖玉、豐なる時ぞとみえて三冬月ひそかにつもる雪ののどけさ　ていか。）

【年浪草】初冬・仲冬・季冬、之を三冬と謂ふ。季冬將に盡きんとする時也。故に或は三冬月と曰ふ。

註　(一) 萬葉集の歌の「みふゆつき」の語を誤り解して生じた語であらう。(二) 萬葉見安（著者不詳、慶安四年刊）。

季題解説　冬期の三ヶ月が終ることをいふ。冬を惜む意もあるであらうし、

人によつては春の近きを欣ぶ意もあるであらう。〔参照〕年の豆

節分（せつぶん）　せちぶ

古書校註

【山之井】夜にいれば、むくりこくりのくるといひて、せど門窓の戸など、かたくさして、外面には、いはしのかしらと、ひらぎのえだを、鬼の目つきとてさし出だし、うちには、ゑびす棚大こく柱のくまぐまに、灯をひまなくたて、沉香などかほらす。おほうちのなやらふは、晦の日あなれど、地下には、こよひまめをいりて、鬼はうち鬼はそとへとうちはやし、又、わがよはひをも、彼のまめをもてかぞへつゝ、いくつといふにひとつあまして、身をなづる事をし侍る。（略）されば、ひらぎの葉の、鬼のまなこもひらつき[illegible]、きとかりをいひたて、いはしのかしらも信じから、邪氣をはらふべき[illegible]さま、年々のまめざんように、つもるよはひを驚く心ばへ、などし侍りし。

【滑稽雑談】按ずるに、節分とは、俗に立春の前夜を云ふ。故に夜分とす。（一）羅山の所謂、民間皆其の夜儺名をまねぶ也。禁裏は宮中などにて沙汰なし。晦日の夜行はるゝ也。（二）節供、民間も改むべきと也、如何。

註（一）羅山文集に、「儺は皷に近しといへども、古の禮也、云々」とあるをいふ。（二）日本歳時記の所説。

季題解説 立春の前夜のことで、大寒より十五日目、大抵陽暦二月三・四日頃に當る。この夜神社、寺院などでは追儺の式を行ひ、民間では豆を撒く習慣がある。〔参照〕宗教・追儺・豆撒・柊挿す[illegible]

例句

節分　としひとつ積るや雪の小町寺　蕪村（蕪村句集）
節分やよい[illegible]女譽る[illegible]樂堂　召波（春泥句集）
節分をともし立てたり獨住　同（同）
節分の[illegible]大鳥居　石鼎（ホトトギス）
節分の厠灯してめでたさよ　温亭（同）
節分の[illegible]へさしたる窓あかり　蓮華（同）
節分の化けおほせたるおちよぼかな　夜半（同）
節分の[illegible]のまゝなる二三日　句冠子（同）
萬燈の灯かげを鹿の通りけり　三山（續ホトトギス）
新[illegible]註
節分の春日の巫女の花かざし　播水（同）

季題沿革 季節の轉移の意で、中右記に夏節分とも見える。後、主として冬より春に移る時をいひ、[illegible]となる。[illegible]月・[illegible]日・[illegible]日・[illegible]日にあたるこれに當る。門戸に[illegible]、柊の枝を挿すことは、古く土佐日

記に見え、煎豆を播き—鬼を攘ふことは、追儺と關係あるべく、何時から行はれたか分らないが、室町時代には既に行はれてゐたことが見える。大豆を用ゐるは、本草綱目に「主治殺鬼毒」とあり、支那に於いて大豆に破力ありとしたゝめに因る。江戸時代、幕府大奥にては嚴重に儀式を取り行つた。（武田）

年内立春（ねんたいりつしゅん）　冬の春（ふゆのはる）

古書校註

【山之井】年の内にくるはるは、空はまだかすみもやらず、鶯の聲もやうやうふくむまでなるけしき、又、軒端の梅はつぼみもやらねど、梢の雪に餅花のはるはしらるゝ心ばへ、猶、となりひとつのりこえてくるとも、（一）年のうちへふみこむなどもいへり。

【滑稽雜談】連歌新式抄に云、年内立春、冬也。古今には、（二）としの内に春は來にけり—とせた去年とやいはんことしとやいはん、春の歌に入る。連歌には冬也。（貞德師云、年内立春、歌の題には春の部にて、代々の撰集おほくは卷頭に入れらる。連歌には冬也。俳諧又冬に用ふ可き也。猶師説を聞く可き也。（これらの說にしたがふべし。十二月晦日前に有るを年内立春と申す也

註（一）例句に年の內へふみこむ春の日足哉」が擧がつてゐる。（二）在原元方の歌で、卷頭にある　春—立春參照

例句

年内立春

連哥師の去年とやいはん冬の春	許六	（五老井發句集）
年の內の春や夜市の鉢の梅	桃隣	（古太白堂句選）
としのうちの春やたしかに水の音	千代女	（千代尼發句集）
年のうちの春やしらずに行もあり	同	（同）
着よこしたなりに春とやとしの内	同	（同）
十のもの幾つの春ぞ年の内	同	（同）
春めかぬ詞つかひやとしのうち	同	（同）
ことしとも去年とも見ゆる柳哉	蓼太	（蓼太句集）
としの內に春は來にけり青筵	士朗	（枇杷園句集）
としのうちに作たちじる心を ふゆの春卵をのぞくひかりかな	成美	（成美家集）
年の內に春は來にけり雨の音	雅郊	（古今句鑑）

天　文

冬日（ふゆび）　冬の日（ふゆのひ）　冬日向（ふゆひなた）　冬日影（ふゆひかげ）

【季題解説】冬の太陽をいふ。冬の日は低く南の空にかゝつてその光鈍くかつ弱く、しかも曇りやすい、かつ寒い時候のことゝて日南ぼつこなどをする老幼に親しまれることが多い。その光も鈍ければこそ小手をかざしてうち仰いだことも出來るのである。しみじみとものなつかしく、情の深い感じのするも冬日である。

【作句注意】冬の一日も同じく冬の日といふから、句作上に當つて注意すべきである。これは時候の部に屬する。【参照】冬日和（時候—冬の日[illegible]）

【例句】

冬日

竹の葉やひらつく冬の夕日影　惟然（惟然坊句集）
稲ほしのもゝ手はたらく冬日かな　北枝（北枝發句集）
土壁に梅そふ冬の日向かな　沾德（俳諧五子稿）
身をよする冬の朝日の草のいほ　太祇（太祇句選）
冬の日のさし入松の匂ひかな　曉臺（曉臺句集）
借はぐる松よ古井よ冬日向　一茶（享和句帖）
かくれ家や村一番の冬日向　同（七番日記）
冬の日の小藪の陰に落ちにけり　子規（子規句集）
冬の日の落ちて明るし城の松　同（同）
一本の木にかゞやける冬日かな　青圃（懸葵）
小座敷の障子にのこる冬日かな　菊太（ホトトギス）
冬日向籬にかゝりし雀かな　伊小星（同）
冬日さすや喜び飛べる塵埃　濱人（同）
瓢亭の門の冬日やさねかづら　桃太（同）
門前の冬日畑を愛しけり　梅史（同）
大佛の冬日は山に移りけり　立子（同）
編み掛けし手をかざしたる冬日かな　米升子（同）
しばらくは冬日當れる貴船かな　比古（同）
山門の冬日は移りありきけり　まとを（續ホトトギス）
ぢつと見て居れば冬日のなくなりぬ　風史（同）
さへぎられつゝあたりくる冬日かな　冬男（同）
隣の木を落ちて藁屋の冬日かな　盧子（同）
[illegible]の南に傾き冬日かな　同（同）

冬日和（ふゆびより）　冬晴（ふゆばれ）　冬麗（ふゆうらら）

季題解説　冬はからりとうち晴れた日を見ることが少いとしなければならない。殊に裏日本は雨や雪の日が續いて晴天の日は殆ど無いといつてもよい。然し其中にある晴れた日は如何になつかしいものか。表日本は小春といつて冬日和の續く時もある。〔參照〕冬日和

例句

冬日和

天照や梅に椿に冬日和　　鬼貫（仏兄七車）
冬晴や富士おだやかに暮れて行く　　放也（ホトトギス）
冬晴や淺間の煙とこしへに　　無宇（同　）

冬の月（ふゆのつき）　寒月（かんげつ）

古書摘註

【御傘】冬の月とは、さむき・さゆる・時雨・霰・落葉等を結び入れたる月也。三日月・有明なくては、冬季の月は折をかへて只二句ありと知るべし。寒月など聲に云ひては、此の二句の内なり。

【山之井】さえたる影の水にまがひ、霜に似たる氣色、顏のしはすの月を、（一）冷まじき物といへる老女のけさうにもなぞへ、（二）臘月といひかけて、灯の光にもいひなし侍る。

【栞草】源氏朝顏の卷　冬の夜のすめる月に、雪のひかりあひたる空こそ、あやしう色なきものゝ、身にしみ、此の世の外のことまでおもひながされ、おもしろさもあはれさも殘らぬをりなれ。すさまじきためしに云ひをきけん人のこゝろあさゝよ、とてみす卷きあけさせたまふ。河海抄　眞日記に曰、しはすの望のころ、月いとあかきに、ものがたりしける人々て、あなすさまじの師走の月にもあるかなといへりければ、云々。枕草紙、すさまじきもの、おうなのけさう、しはすの月、云々。

註（一）栞草にも引ける枕草子參照。（二）側註に一ともさでもよき臘月の光と（哉）を學げてゐる。

季題解説　寒月ともいふ。冬の月は多く青白色を帶び、甚だ凄慘の感が深い。他の季節の月、例へば春の月や夏の月にしても、それを春らしいとか夏らしいとかいふのは、かなり滿月にちかい月に於てこれを感ずる樣に思ふ。然るに冬の月にあつては滿ちたると缺けたるとを問はず、明るければ明るい丈けに暗ければ暗いだけに冬らしい凄慘の氣を起さしめる。

例句

冬の月

いつも見るものとは違ふ冬の月　　鬼貫（鬼貫句選）
飯臺に鼠のあがく冬の月　　浪化（浪化上人發句集）
あら猫のかけ出す軒や冬の月　　丈草（丈草發句集）
雪よりも寒し白髮に冬の月　　同（同　）

砂に埋須磨の小家や冬の月　曉臺（曉臺句集）
冴きつて篁裂たり冬の月　同（同）
寒月の額にあかしをとこ山　同（同）
月寒く出る夜竹のひかり哉　同（同）
月の情冬を定めり樫木原　同（同）
たゞひとりすめる景色や冬の月　闌更（半化坊發句集）
寒くとも戸ざすな庵の松の月　同（同）
寒月や狐ながら啼地に倒る　同（同）
あくまでも閑に出たり冬の月　士朗（枇杷園句集）
さり〳〵と苔ふむ冬の月夜哉　同（同）
ひとつ灯にひかりかはすやふゆの月　成美（成美家集）
梅などもうめと見ゆるやふゆの月　同（同）
寒月や欅ノ梢のそらにとぶ　同（同）
寒月の柳などにはかたぶかず　同（同）
寒月やひとり破れしくすり瓶　同（同）
冬の月さしかゝりけりうしろ窓　一茶（享和句帖）
武士ばりし寺のそぶりや冬の月　同（同）
下駄音や庵へ曲る冬の月　同（七番日記）
ふんどしに脇ざしさして冬の月　同（同）
寒月や喰つきさうな鬼瓦　同（同）
棒突や石にかん〳〵寒の月　同（同）
寒月やむだ呼されし座頭坊　同（同）
寒月やしやきり張たる大男　同（同）
寒月や御鳳の宿もするあたり　乙二（をのゝえ草稿）
戸口から片の浪花や冬の月　蒼虬（蒼虬翁發句集）
此家も人も居るのかふゆの月　同（同）
寒月やありともきかぬ須磨の藪　同（同）
寒月の加茂にもひとつ小家哉　同（同）
脊高き法師にあひぬ冬の月　梅室（梅室家集）
在明て入る山遠しふゆの月　同（同）
寒月や雨さへもらぬやねをもる　同（同）
あらはなる渡り鳥や冬の月　吟江（古姿）
吹すかす梅の林に冬の月　帒布（年尾）
四辻にうどん焚火や冬の月　石友（續明烏）
から臼の音は隣か冬の月　鳥瀾（文車）

俳蕪會

車座に並び泣けり冬の月　宇白（礪波山）
屋根の上に火事見る人や冬の月　子規（子規句集）

くわらくと風呂焚く家や冬の月　寄堂（春夏秋冬）
冬の月かすかに霜のかゝりけり　秋花（同人）
氷上に遊び暮れたり冬の月　鼎々（懸葵）
門鎖せば堰音冴えて冬の月　糸瓢（同）
皮被ぐ山國人や冬の月　南浪（ホトトギス）
藁塚の蔭皆くらし冬の月　孟春郎（同）
夜々おそく歸るや冬の月まどか　宵曲（同）

一月三十日寸七翁氏永眠

せめてもやその夜の月のまどかなる　夕陽斜（同）
冬の月おぼろの一夜ありにけり　匪南（同）
寒月や里を離れて黄龍寺　梧月（同）
寒月や砂をつらぬく松の幹　果采（同）
この窓の寒月いつか彼の窓へ　蕪子（同）
海原や寒月照らす夜もすがら　海扇（同）
寒月や比叡より高き如意ヶ嶽　晴水（同）
寒月や見渡すかぎり甍　芋舎（同）
寒月に幻の影懸り失せにけり　女次郎（同）
雪やめば寒月かゝるすみだ川　笑人（同）
ふと見れば宵の寒月ありにけり　耕村（續ホトトギス）
寒月やまだ吠えやまぬ蒙古犬　沙村（同）
阿部樣の大椎の木や冬の月　あい子（同）

母逝く

母のゐる山の眞上の冬の月　千代香（同）

冬の空（ふゆのそら）　寒天（かんてん）　寒空（さむぞら）

季題解説　寒天又は寒空ともいふ。冬の空は多く灰色の雲が低くたれさがつて晴くて寒い。殊に北陸・山陰など所謂裏日本系に屬する地方では、三冬の間殆んどこの灰色の空の下で、一日中日の目を見ない陰慘な氣分に支配されるのである。

實作注意　冬空といへば陰晴に拘らず冬の空を詠ずべきである。

例句

冬の空

寒空に都を逃し物ぐるひ　鬼貫（俳諧七車）
寒空や筏にのせし鍋の跡　乙二（をのゝえ草稿）
冬空やすがもは江戸の北はづれ　巣竹（小文庫）
寒空に向ふや利根の大根船　吟江（夢占）
冬空の水より深き朝かな　月斗（同人）
冬の空月日も知らず籠り居る　蒼翠窟（懸葵）
山の眉左上りや冬の空　鳳躅（ホトトギス）

冬の空

冬空や他國より來て墓參　うしほ（ホトトギス）
帆柱に鐵刀の旗や冬の空　指月城（同）
冬空やかゝりひきつたる天の川　虚子（句集虚子）

冬の雲（ふゆのくも）

季題解説　冬は一般に曇日が多い。從つていつ大空を仰いでも暗澹たる雲が垂れこめてゐる。冬の雲は常に團々として凝滯して陰慘な氣分をもたらすものである

寒雲　凍雲（いてぐも）

寒い空に滯つていつまでも動かぬ雲のことを凍雲といふ。

例句

冬の雲

冬の雲山の姿を險しくす　涼舟（同　人）
冬雲のかゝる笠置へ庇かな　余子（ホトトギス）
冬の雲白きに木の葉とびにけり　法師（同）
冬雲や雀とまりて桑の先　又新（同）
冬雲の炭り移りや天王寺　征史（同）
鐵枴や冬雲負うて日當れる　啼魚（續ホトトギス）

冬風（ふゆかぜ）

季題解説　冬の空が晴れ渡つて風のない穩やかな日のことをいふ。冬はとかく風が強く吹きすさぶ日が多く、從つて波の荒れることが常であるが、その中にすつかり忘れたやうにふと風ぎ渡る日を惠まれるものだ。さういふ日は久しぶりに濱へ出て漁りのさまを見たり、千鳥や鷗や沖の島々を眺めわたす心持にもなる。殊に海上生活者にとつては天が與へてくれ安樂日ともいふことが出來やう。〔參照〕寒風（カンナギ）

例句

冬凪

冬凪の海渡り行く歸省かな　靜兒（ホトトギス）
冬凪や岩に取りつき海苔採女　鶯石（同）
冬凪の礁畠を打ちにけり　煤煙（同）
冬凪や陛下も濱に出で給ふ　水竹居（同）
冬凪の郵便船の通りけり　平和堂（續ホトトギス）
冬凪で浪はうねりとなつてをる　愛星（同）

寒凪（かんなぎ）

季題解説　寒に入つて寒さが一層冴えわたる頃、ふと空も晴れ微風もなく凪いだ日和にあふことがある。寒凪である。海上などにもほつ／＼と漁り舟が漕ぎ出されて、沖の島も今日ばかりは霞さへ立つてゐる。めでたくのどかな風光である。しかし寒さは嚴しい、空氣も澄んで日光も冷たく冴えて

ある。舟の中や渚では漁夫達もすつかり着ぶくれてゐるのである。【參照】冬凪は

【例句】

寒凪　瀬戸の島舳に展け寒凪げる　南英史（續ホトトギス）

凩（こがらし）　木枯（こがらし）

【古書校註】

【御傘】連に一句の物は誹に二なれども、かやうの永き名は耳に立つ物なれば、名所の木枯の森と二句すべき事也。木枯に木の字二句去る也（略）木枯は冬なり。秋の句にもあるは、秋よりも吹くゆえなり。

【滑稽雜談】韋氏叢林に云、六朝の書に云、風の冬木葉上に振ひ枯らすを號と曰ふ。（或は云、和俗、木加羅志と云ふ。）〇八雲御抄に云、木がらしは秋冬の風、木枯也。但し、こがらしの秋の初風とも讀めり。（略）〇連歌新式抄に云、木枯に、木一句也。（略）〇一說に云、木がらしは木鳴らしなり。

【年浪草】連歌新式に曰、凩の字也。木がらしの色としても冬也。もと秋といふ說も有り。（略）〇八重垣に曰、木を吹きからす風也。又秋の木がらしともよめり。〇消え侘ぬうつろふ人の秋の色身をこがらしの森の下露　定家。是、秋のこがらしをよめる也。木枯の森は駿河の名所なり。

【栞草】凩。和訓栞　木嵐の義なるべし。木枯にはあらじ。嵐をからしとよむは音便なり。五十嵐をいがらしとよむも同じ。字書に、風の木上を過ぐるを颾（ハツ）と曰ふといふ。颾も同じ、凩は倭の俗字也。

【季語解說】凩は木を枯らす風といふ意であつて、初冬に吹く強風で、寒林を吹きさらして落葉を誘ふ風をいふのである。
こがらしの語原は木嵐にある。嵐をあらしと讀むのは五十嵐をいがらしと讀むやうなものだといふ說がある。【參照】乾風（あなぜ）　北風（きた）　空風（からかぜ）

【例句】

凩、

木枯に岩吹とがる杉間かな　芭蕉（笈日記）
京にあきて此木がらしや冬住居　同（きれ〴〵打込）
こがらしや頰腫れ痛む人の顔　同（猿蓑）
木枯や竹にかくれてしづまりぬ　同（鳥の道）
狂句木がらしの身は竹齋に似たる哉　同（冬の日）
凩のはては有けり海の音　言水（俳諧五子稿）
木からしや[illegible]のおもて哉　鬼貫（[illegible]）
木からし[illegible]山の宿を[illegible]　淡化（[illegible]）
木がらしの身は猶かろし夢の中　丈草（丈草發句集）
凩のあたり處やとぶ柳　同（同　）

凩

木がらしや劍をふるふとなみ山　去來　（去來發句集）
木からしの空見直すや鶴のこゑ　同　（同）
凩や沖より寒き山のきれ　其角　（五元集）
凩や勢田の小橋の塵も渦　同　（同）
凩に氷るけしきや狐の尾　同　（同）
木がらしよ世に拾はれぬみなし栗　同　（五元集拾遺）
凩となりぬ蝸牛のうつせ貝　同　（同）

四七日題二翁三句一

木がらしの猿も馴染か蓑と笠　嵐雪　（玄峰集）
木がらしに梢の柿の名殘かな　同　（同）
木がらしのわづかにまねく庭木哉　同　（同）

芭蕉翁回紀

凩の吹ゆくうしろすがたかな　同　（同）
凩や刈田の畔の鐵氣水　惟然　（惟然坊句集）
凩の風に葉は窓をうがつて去る　杉風　（杉風句集）
おしげなく吹とも松の木枯や　同　（同）
凩に何やら一羽寒げなり　同　（同）
木枯の根にすがりつく檜皮哉　桃隣　（古太白堂句選）
こがらしや鶴見る窓に朝の月　同　（同）
こがらしやすぐに落付水の月　千代女　（千代尼發句集）
木枯や鐘に小石を吹あてる　蕪村　（蕪村句集）
こからしや岩に裂行水の聲　同　（同）
こがらしや畠の小石日に見ゆる　同　（同）
こがらしやひたとつまづく戻り馬　同　（同）
凩やこの頃までは荻の風　同　（同）
凩に鯉吹るゝや釣の魚　同　（同）
木がらしや釘の頭を戸に怒る　同　（書翰）
木がらしや小石のこける板びさし　同　（新五子稿）
こがらしや野河の石をふみわたる　同　（蕪村遺稿）
こがらしや炭賣ひとりわたし舟　同　（同）
こがらしや廣野にどうと吹起る　同　（同）
凩や硯て迯る淵の色　同　（同）
凩や荻も薄もなくなりー　同　（落日庵句集）
凩や碑をよむ僧一人　同　（同）
木枯や大津脚伴（絆）の店ざらし　太祇　（太祇句選）
木がらしや手にみへ初る老が皺　同　（同）
ぬれいろをこがらし吹や水車　同　（同）
木がらしや柴負ふ老が後より　同　（同）

こがらしのふく〳〵や[illegible]の穂をさへ　成美（成美家集）
木がらしになに事もなし豆腐槽　同（同）
木がらしや西といふは淡路島　一茶（享和句帖）
木がらしや壁の際なる馬の桶　同（同）
木がらしや小溝にけぶる竹火箸　同（旅日記）
木がらしやこんにやく桶の星月夜　同（同）
木枯や千代に八千代の門榎　同（発句集）
木からしや雀も日につかはるゝ　同（同）
木がらしにしく〳〵腹のぐあい哉　同（七番日記）
木がらしや鎌ゆひつけし竿の先　同（同）
木からしや菰に包んである小家　同（同）
凩や木の葉にくるむ塩肴　同（同）
凩や行ぬけ道の上総山　同（一茶句帖）
木からしや凧に乗行く火けし馬　同（同）
木がらしを踏ばり留よ石太郎　同（同）
凩の吹き草臥し榎かな　同（同）
木がらしや菜葉並べる煙草箱　同（同）
木枯やから呼ひされし按摩坊　同（おらが春）
木枯や折助かへる寒さ橋　同（同）
木枯や二十四文の遊女小屋　同（同）
木がらしや一二三四五ばん原　同（九番日記）
木がらしの吹込く布子一ツかな　同（同）
木がらしや護持院原のあまざけ屋　同（一茶新集）
けふも〳〵ただ凩の茶屑哉　同（発句題叢）
こがらしのいぬるにさりぬ世捨人　乙二（をのゝえ草稿）
木がらしやねぐらの鶴の声もるゝ　蒼虬（蒼虬翁句集）
凩の日をけづり行膝のうへ　同（同）
こがらしの吹もへらさず彌彦山　同（同）
凩や猪の来てふむ背戸の芝　同（同）
こがらしの浪吹わけてかねが崎　同（同）
こがらしの中にも須磨の夕かな　同（同）
凩の日に松うゑる長者かな　梅室（梅室家集）
日暮るゝに凩ふくに磯の鶴　同（同）
木枯の野に住吉の宮居かな　同（同）
凩や雨もあるかの夜の音　鼓舌（新選）
凩の雲より落つる木葉哉　左次（泊船）
凩や晩鐘一つ馬十疋　楚常（卯辰）
凩やつゞいて啼きし猿の声　その（類題発句集）

凩や身ごもる犬の眼に涙　蛾眉（新選）
凩に吹き出されたる野寺哉　止角（同）
凩や窓に吹きこむ鶺鴒　蘭芳（小文庫）
凩や松一本あれば松の風　殘夢（續明鳥）
凩に障子明るき梢哉　米車（[illegible]筆）

四ツ谷門の[illegible]にて

凩に買はぬ柴たく庵哉　幸山（俳諧[illegible]和）
凩や箱根の海の陰陽　東鷲（小弓）

[illegible]旅行

凩やいつこを鳴らす琵琶の海　牧童（卯辰）
凩や襟にかけたる珠數の音　牝玄（雑談）

深川夜泊

凩や夜の木魚に吹やみぬ　芦下（續虚栗）
凩に笠とられたる餌さし哉　朴人（八仙[illegible]）
凩の一日吹て居にけり　涼菟（類題發句集）
凩や葎を栖に家鴨二羽　子規（子規句集）
凩や鐘引きすてし道の端　同（同）

[illegible]一周忌に寄す

凩の浄林の釜恙なきや　同（同）
凩夜を荒れて虚空火を見る淺間山　同（同）
凩や燈爐にいもを燒く夜半　同（同）
あか〳〵と凩やんで入日かな　墨水（新俳句）
夜明くれば凩はたとやみにけり　花笠（同）
市中や凩吹いて晝の月　紅綠（同）
凩のあるゝが中に入る日かな　非風（同）
凩にふかれて行くや五六人　一々（同）
木枯に破鐘撞くや寺の火事　瀾水（春夏秋冬）
木枯や人の聲する籠堂　秋千（同人）
凩や酒に燃えたる銅子の胸　松[illegible]樓（ホトトギス）
凩や胸をかゞめて飛ぶ鶏　天牧子（同）
凩や手して塗りたる窓の泥　鬼城（同）
凩や水高低に沼二つ　濱人（同）
凩や温室にいれば花の呼吸（イキ）　ノヤスケ（同）
凩に帆柱毎の燈かな　沾露（同）
凩や翠[illegible]暗き東山　草城（同）
凩や日落つる頃の忘れ風　凌華（同）
凩や梁走る[illegible]鼠　[illegible]山（同）
凩やすでに上れる月一つ　互江（同）

凩やどう〳〵火吐く瓦竈　公圭（ホトトギス）
凩や軒に[illegible]に[illegible]の妻　[illegible]（同）
凩やしらみ渡れる沼の面　董路（同）
凩や爐に燃え落つる梁の煤　刀泉（同）
凩やあふれこぼるゝ手水鉢　御巣（同）
凩や木にくゝられし小煙突　白天（同）
凩をくらつてこぼす涙かな　句入道（同）
凩や潮さしにごる多々良濱　柿巷（同）
凩のまつたくやみし月夜かな　如意（同）
（[illegible]山上にて）
凩の夜の使の悲しけれ　貞子（續ホトトギス）
（落洲にて）
凩は岩のうしろに聞えけり　天易兒（同）
木枯や鞭につけたる赤き切れ　虚子（句集虚子）

乾風（あたじ）

季題解説　戌亥の方から吹いて来る風、即ち西北の風をいふのである。風力強く吹き荒るゝことも多く、今でも関西の船人は「あなぜ」といつてこの風をいたく怖れる。謡曲船辨慶で、大物の浦で義経の一行が宗盛の亡霊になやまされる時に吹き下ろした烈風はこの方位の風であつたらしい。〔参照〕凩（こがらし）　北風（きた）　空風（からかぜ）

北風（きたかぜ）

朔風（さくふう）　寒風（かんぷう）　冬の風（ふゆのかぜ）

季題解説　冬は北寄りの風が多い。北風は強く寒冷で道行く人を虐げる。まともに向つて歩く時には、鼻も耳も吹きちぎられるばかりで、言語を發することさへ出來ない。その烈しく吹きすさぶ折は、風浪從つて高く、渡舟や港では舟航を休止するの外なく、漁撈も生業をやすむに到るのである。

實作注意　北風とか朔風とかいふ方が冬の風の感じが出る。冬の風といふと調子がなまぬるくつて却つて冬の風の感じが出ない。〔参照〕凩（こがらし）　乾風（あたじ）　空風（からかぜ）　隙間風（すきまかぜ）　虎落笛（もがりぶえ）

例句

北風

寢られずやかたへ冷ゆく北下し　去來（去來發句集）
原中やうしろ歩みに冬のかぜ　杉風（杉風句集）
砂を吹く家の棟川や冬颪　几董（井華集）
北風や浪に隱くるる佐渡ケ島　月斗（同人）
（[illegible]）
冬風に下駄も結べる鶴籠かな　蛇笏（ホトトギス）

連日天氣が善い。斯様に冬季表日本に吹く乾燥した風を空つ風と稱する。
又「ならひ」と稱するのも此の風である。

空風（からかぜ）　からつ風

季題解説　雨をも雪をも交えないで強く吹く北風をいふ　昔から江戸の名物とされてをり、砂塵をともなつて巷々をひゆう〳〵吹きまくる凄じい風である。俗に空つ風といふ

實作注意　空風・北風共に冬季に属するが、空風の方は吹きまくる強い心持があり、北風の方は寒氣凛烈なる風を思はせる。〔参照〕凩、乾風、北風

例句　空風

から風の吹からしたる水田哉　　桃隣（古　白室句選）
からつ風月の土塀に添ひ歩るく　　宿の春（ホトトギス）
から風にとびこんで来し使かな　　稲女（同　）
から風に金光教の人通り　　志流（續ホトトギス）

隙間風（すきまかぜ）

季題解説　寒氣のはげしい時、壁又は戸障子の隙間又は破れ目から洩れ入る風であつて、なかなか堪へ難いものである。〔参照〕北風

例句　隙間風

退屈をして隙間風ありにけり　　みづほ（續ホトトギス）
隙間風寝るほかはなき夫婦かな　　泥中（同　）

神渡（かみわたし）　神立風（かみたつかぜ）

季題解説　神無月卽ち陰暦十月に吹く西風の稱。この月、諸の神が出雲の大社へ集まられることから起つた言葉である、神立風なども言ふ。颯々と吹き渡る風に、旅　神々の飛翔を思ひ描くことが出来る季題である。〔参照〕宗教―神の旅

虎落笛（もがりふえ）

季題解説　冬の烈しい風がものに吹き當つて笛の音のやうな音を立てるのをいふ。
もとは紺屋の物干をもがりといひ、其れに當る風をもがり笛といつたものらしいけれど、必ずしも其れに限らなくてもよい。〔参照〕北風

例句　虎落笛

四人目の嬰兒生きてあり虎落笛　　禪寺洞（ホトトギス）
夕づつの光りぬ果きぬ虎落笛　　青畝（同　）
風邪のいよ〳〵倦きし虎落笛　　里鴻（續ホトトギス）

この不運いつまでつゞく虎落笛　流枕（同）
ほてりたる爐邊の湯呑や虎落笛　夏山（同）

季節風（きせつふう）

季題解説 十二月上旬から翌年三月に亙り、高氣壓の關係で、臺灣海峽から臺灣近海にかけて吹く强烈な北東季節風である。この風の影響で、北部臺灣は概ね曇雨、所謂北部の雨季に入るわけで、基隆地方が世界有數の雨量を示し、雨港の異稱があるのはこの爲めである。之に反し南部地方は概ね快晴、甚しいのは冬季間一滴の雨量をも齎さぬことさへあつて、所謂乾燥季に入るのである。

鎌鼬（かまいたち）

鎌風（かまかぜ）

古書校註 【三才圖會】按ずるに、勢州・尾州・濃州・驒州、不時に暴風至ること有り。俗之を一目連と稱し、以て神風と爲す。其の吹くや、樹を拔き巖を仆し屋を壞ち、破裂せずと云ふ者無し。惟、一路にして他處を傷けず。勢州桑名郡多度山に一目連の祠（ホコラ）あり。相州に之を鎌風と謂ふ。駿州に之を惡禪師の風と謂ふ。相傳へて云ふ、其の神の形久の如くにして褐色の袴を着す、云々。蝦夷（エゾ）松前に臘月嚴寒而も晴天に凶風有り。行人之に逢ふ者卒然として倒仆し、其の頭面或は手足五六寸許り傷を被る。俗に之を鎌閉太知と謂ふ。然れども死に至る者無し。急に萊菔（ダイコン）の汁を用いて之に傅くるときは即ち愈ゆ。黄金瘡の如し。津輕の地にも亦（マヽ）間之有り。蓋し極寒の陰毒也。（此と一目連とは似て同じからず。皆惡氣の風也）。

季題解説 人の身體に不意に冷風が觸れたと感ずると同時に、丁度鋭利な鎌で切られたかのやうな疵口が出來て出血することがある。古來これをカマイタチといふ鼬に似た一種の妖魔の仕業たと信じた事から起つた名である。此事、奥羽・北國邊に多く、江州北部・越前などでも見聞する。切られた時には一種の冷凄な氣が背筋を走る丈けで痛みは何等感じないといふ。これは氣候の變動によつて空氣中に眞空を生じた際、人體の一部がこの眞空部に觸れれば、體外の氣と體内の氣とが平均を保つ爲めに體内の氣が外部に迸出しようとして皮肉を破裂せしめるものだといふ事である。冬季に起ることが多い。

例句

鎌鼬

鎌鼬蓬負ふ人の倒れけり　秋櫻子（續ホトトギス）
三人の一人こけたり鎌鼬　たけし（同）
御僧の足してやりぬ鎌鼬　虚子（ホトトギス）

初時雨（はつしぐれ）

【季題解説】その冬はじめて降る時雨で、時雨は季秋からも降つて古今集にも「惜しむらむ人の心を知らぬ間に秋のしぐれと身はふりにける」とある通りだが、實際時雨の趣は初冬からで、「神無月降りみ降らずみ定めなき時雨ぞ冬の初めなりける」と後撰集にある通りだ。【季語】時雨。

【例句】

初時雨

初しぐれ猿も小蓑をほしげ也　芭蕉（猿蓑）
旅人と我名よばれん初霽　同（續虛栗）
初時雨舌打海瞻の味もこそ　言水（俳諧五子稿）
夜着ふとん有のまゝなり初しぐれ　浪化（浪化上人發句集）
賑やかに菊は咲けり初しぐれ　同（同）
雷落し松はかれ野の初しぐれ　丈草（丈草發句集）
かはらけの烏帽子の上や初時雨　去來（去來發句集）
鳶の羽もかいつくろいぬ初しぐれ　同（同）
御など天窓は寒き初しぐれ　同（同）
新わらの家根の雫や初しぐれ　許六（五老井發句集）
簑笛の古實聞たし初時雨　支考（笈二吟集）
はつ時雨まだ朝がほの花ひとつ　杉風（杉風句集）
晴てからおもひ付けり初しぐれ　千代女（千代尼發句集）
柳にも雫みしかしはつしぐれ　同（同）
日の脚に追はるゝ雲やはつ時雨　同（同）
その中に唯一つ雲あり初時雨　同（同）
まだ鹿の迷ふ道なり初しぐれ　同（同）
京へ出て目にたつ雲や初時雨　同（同）
田はもとの地に落付や初しぐれ　同（同）
みのむしの得たりかしこし初しぐれ　蕪村（蕪村句集）
初しぐれ眉に烏帽子の雫哉　同（同）
たえだえの雲しのびずよ初時雨　同（蕪村遺稿）
炼のあはれわすれんとすれば初時雨　樗良（樗良發句集）
はつしぐれやむやしばしのから錦　同（同）
降そめてふりもさだめずはつ時雨　同（同）
閼伽棚に菊の殘りや初しぐれ　也有（蘿葉集）
屋根いかに板葺ならば初時雨　同（同）
今幾日ありて蕎麥刈初時雨　同（蘿の落葉）
けふと成て植たき樹あり初時雨　同（同）
岩もまたうりみうらずみ初しぐれ　同（同）
秋風は蓑にのこりて初時雨　蓼太（蓼太句集）

植ながら松にしのぐや初しぐれ　同（同）

傘たゝむ音にこそ知れ初時雨　同（同）

[illegible]の樹の容(カクチツクリ)すはつしぐれ　几董（井華集）

雪見ゆる峯をかくして初時雨　同（同）

吹上るほこりの中のはつしぐれ　同（同）

野風ふく室町かしら初時雨　同（同）

初しぐれ今日菴のぬるゝほど　同（同）

はつしぐれたがはぬ空となりにけり　白雄（白雄句集）

一袋松かさ得たりはつしぐれ　同（同）

初しゝ小町の[illegible]にはなかりけり　同（同）

鱗のこゝろはふかしはつしぐれ　暁臺（暁臺句集）

行雲のはし亂ッ、初しぐれ　闌更（半化坊発句集）

驚かぬ網引のさまや初しぐれ　同（同）

土山や唄にもうたふはつしぐれ　同（同）

はつ時雨野守が宵のことばかな　士朗（枇杷園句集）

柴の戸に夜明烏や初しぐれ　巣兆（曾波可理）

影ぼうしの宵に似たり初時雨　一茶（享和句帖）

古郷に高い杉ありはつしぐれ　同（同）

茶の水の川もそこ也初しぐれ　同（同）

こんにやくにかゝらせ給へ初時雨　同（旅日記）

初時雨俳諧流布の世なりけり　同（七番日記）

あれみさい松かニ本初しぐれ　同（同）

[illegible]宣に日くはつ時雨　同（同）

やぶしばらく[illegible]だまされ初時雨　同（同）

米と銭貰ひ分けゝり初時雨　同（同）

義仲寺や拙者も是にはつ時雨　同（同）

義仲寺はあれにいはつ時雨　同（同）

御寶前にかけ奉をはつしぐれ　同（遠碧）

丈たけの笠をかぶる子やはつ時雨　同（九番日記）

はせを翁の像と二人やはつ時雨　同（同）

雀ふむほどは炭もあり初時雨　同（発句題叢）

初時雨ゝ顔に出たりけり　同（発句集）

山人は木葉[illegible]はつしぐれ　乙二（をのゝえ草稿）

米山のふる道ゆかむはつしぐれ　蒼虬（蒼虬翁句集）

はつしぐれけふ汐窓も薄烟り　同（同）

降にけり紅葉のうへのはつしぐれ　同（同）

はつしぐれしばらく有て波ひとつ　同（同）

葉に[illegible]たらぬ[illegible]也はつしぐれ　同（同）

初時雨

稲垣の見ゆるところや初しぐれ　蒼虬（蒼虬翁発句集）
家間に野水の見えて初しぐれ　同（同）
芥火の細口あけてはつ時雨　同（同）
三日月もあるやまことの初時雨　梅室（梅室家集）
柳にも歸り花あり初時雨　羅雲（其雪影）
枝おろす木の口白し初しぐれ　吟江（推蔵日記）
梅もどき小粒に赤し初時雨　青蘿（新五子稿）
何を取る船とも見えず初時雨　甘谷（綾錦）
初しぐれ小鍋の芋の煮加減　馬莧（續猿蓑）
鶏頭を伐るにものうし初時雨　子規（子規句集）
郁子の實の葉陰に赤し初時雨　月斗（同人）
蓑祭る庵の行事や初時雨　瓦全（ホトトギス）
支木に舞子の松や初時雨　恒（同）
山茶花の蕾そろひぬ初時雨　青邨（同）

時雨

朝時雨　夕時雨　小夜時雨　村時雨　北時雨　横時雨　片時雨
月時雨　山めぐり　泪の時雨　川音の時雨　松風の時雨

古書校註

【御傘】時雨、秋に一、冬に一、初時雨としても、月に結びても冬也。木の葉の時雨・川音の時雨・泪の時雨、皆冬也。露の時雨は秋、時雨の露は冬、蟬の聲の時雨は夏。連哥には一座二句、誹には季をかへて三句有る可し。時雨に時の字・暮の字付けても苦しからず。誹には、時雨に降物二句去也。雨の類には三句去る也。

【山之井】しぐれは、定さだめなく、はるゝと見ればぐれりと曇り、ふるとおもへばさゝらげもあらぬ氣色。足ばやに通りゆくさまなどいひて、月は出とするさよしぐれ、時雨のあめや下り坂などもつらね、めぐるといふにつきて、地獄めぐり・山めぐり・どゝめぐりなどのことばをもとめ、(一)たがまことよりとよめりしによりて、雪中のばせをではなしとも、うそさむしたがまことにやなどもいへり。

【滑稽雜談】順和名に云、甕雨、（略）漢語抄に云、之久禮。（略）○連歌本意抄に云、時雨は秋の中よりふる物なれども、秋の詞入らざれば冬に成る也。只しぐれ計は十月・十一月迄によし。時雨ふる時は、いかにも物淋しく曇りがちにして、軒にも雫の絶えぬ體、秋のしぐれは、夜にも木の葉艶して冷じき體よし。晴るゝ事はやし。（二）ふりみふらずみさだめなきなどよめり。（略）○按ずるに、時雨の二字しぐれと訓ずる事、出所未考。時珍本草に云、液雨、立冬の後十日を入液と爲し、小雪に至つて出液と爲し、雨を得て之を液雨と謂ふ。（略）○楊升庵文集に曰、集韻、凇は凍洛也。三

蒼解話、液雨也。（略）和俗、液雨を以てしぐれと稱す。按ずるに、時珍の云ふ人液・出液の義、時節相應なれども、（三）楊成齋が湫の説又異也。識者究むべし。

【年浪草】倭俗、液雨をしぐれと訓ずること、時節を取合せて云ふ也。又爾雅に時雨を樹雨と曰ふといへども、本邦に云ふ時雨にあらず。○雅章卿口決に曰、時雨と出したる題は、かならず冬の題也。哥には秋の紅葉より讀みならはせども、冬の題なるべし。秋のものによそへ侍らば秋の時雨なるべし。只讀めば冬の時雨也。（略）○泪の時雨・袖の時雨は、涙の雨などいふに同じく、袖は濡るゝといふ緣語にや。○村時雨は、むらむらふる也○川音・松風等は、時雨に音を聞きなしたる也。

【註】（一）定家の歌、「僞りのなき世なりけり神無月誰が誠よりしぐれそめけむ」（續後拾遺集）（二）讀人しらずの歌、「神無月ふりみふらずみ定めなき時雨ぞ冬の始めなりける」（後撰集）。（三）楊升庵文集の楊升庵

【季題解說】しぐれのあめともいふ。秋冬の候、陰晴時なく降りみ降らずみの雨が降る。時には陽がさしながら降る。時には時雨移りと云つて山や森を移つて行く雨。秋季に降るのは秋時雨といつて冬の時雨と區別してゐる。時雨は以上秋にもないことはないが、先づ舊曆十月（新曆十一月）をしぐれつきといふ異稱がある位で、古今集にも「神無月時雨もいまだ降らなくにかねてうつらふ神奈備の森」「たつた川錦おりかくかみな月しぐれの雨をたてぬきにして」の如く十月の時雨と續くのが常用である。朝時雨・夕時雨・小夜時雨・村時雨・北時雨・横時雨・片時雨・月時雨。泪のしげきことを泪の時雨、溪流などの瀨々として時雨ときき成すのを川音の時雨、同じく松籟の颯々たるを時雨と聞きなして松風の時雨ともいふ。山めぐりは時雨の異稱である。【季題】初時雨（ハツシグレ）　冬の雨（フユノアメ）　液雨（エキ）　秋、秋時雨（アキシグレ）

【例句】

時雨

やどれとは御身いかなるひと時雨　宗因（梅翁宗因發句集）
是は扨さつてのやどの蓑かな　同（同）
やよ時雨紙子と申し足袋といひ　同（同）
客人やさらりとたつた一しぐれ　同（同）
いとま申しかへる山々しぐれ哉　同（同）
屋根や時雨谷深うして耳遠し　同（[illegible]）
新藁の出そめて早き時雨かな　芭蕉（芭蕉翁全傳）
人々をしぐれよ宿は寒くとも　同（同）
馬かたはしらじしぐれの大井川　同（渡船集）
一尾根はしぐるゝ雲かふじのゆき　同（同）
しぐるゝや田のあらかぶの黑む程　同（同）
宿かりて名をなのらする時雨哉　同（[illegible]）
山城へ井出の駕籠かるしぐれ哉　同（[illegible]）

時雨

鶏の聲にしぐるゝ牛舎かな　芭蕉（もとの水）
笠もなき我を時雨るゝか何とゝ、　同（熱田三歌仙）
しぐれ行や船の舳綱にとり付て　同（桂 琴）
草枕犬も時雨るゝか夜のこゑ　同（曠 野）
此海に草鞋すてん笠しぐれ　同（續 其 袋）
一時雨礫や降て小石川　同（江戸廣小路）
行雲や犬の逃ぼえむらしぐれ　同（江戸新道）
夜あらしや時雨の底の旅まくら　鬼貫（俳諧七車）
むかしおもふしぐれ降夜の鍋の音　同（同）
火も見ぬしぐれふる夜ぞ定なき　同（同）
時雨もて雫みじかし天王寺　同（鬼貫句選）
おとなしき時雨をきくや高野山　同（同）
絲に唯酔のこぼるゝしぐれかな　同（同）
傘提てしらぬ翁ぞ村時雨　言水（俳諧五子稿）
網さらす松原ばかりしぐれ哉　素堂（同）
時雨るやしぐれぬ中の一心寺　來山（いまみや艸）
宿老に夜番の供やしぐれ降　同（同）
嘯ば時雨に香あり菊屋酒　同（同）
律儀の鼠ぬれ行しぐれかな　同（續いま宮艸）
干網に入日染つゝしぐれつゝ　同（同）
ちひさげな舟はしぐるゝ岡の松　同（同）

芭蕉翁追悼
かなしさやしぐれに染る墓の文字　浪化（浪化上人發句集）
牛馬のくさゝもなくてしぐれかな　同（同）
雪雲は愛宕にたはふしぐれ哉　同（同）
入月や時雨るゝ雲の底光　丈草（丈草發句集）
もたれたる柱も終に磯しぐれ　同（同）
鍋もとにかたぐ日影や村しぐれ　同（同）
風雲や時雨をくゞる比良おもて　同（同）
幾人かしぐれかけぬく瀬田の橋　同（同）
屋根葺の海をふりむく時雨かな　同（同）
月代やしぐれの中の蟲の聲　同（同）
一方は藪の手つだふ時雨かな　同（同）
黒みけり沖の時雨の行處　同（同）
こがらしの地にも落さぬしぐれかな　去來（去來發句集）
一時雨しぐれて明し辻行灯　同（同）
いそがしや沖の時雨の眞帆片帆　同（同）
しぐるゝや紅の小袖を吹かへし　同（同）

夢うつゝ三度は袖のしぐれかな　同（同）
山雀の里かせぎするしぐれかな　同（同）
塗桶の上にちよぼ／＼しぐれ哉　同（同）
食時にさしあふ村の時雨かな　同（同）
牛賣て伯父と道きるしぐれ哉　同（同）
あれきけと時雨來る夜の鐘の聲　其角（五元集）
三尺の身を西河のしぐれかな　同（同）
松陰の硯に息をしぐれかな　同（同）
間紫の引窓つたふしぐれかな　同（同）
釣柿の夕日ぞかはる北しぐれ　同（同）
吹井より鶴をまねかん時雨かな　同（同）
むら時雨三輪の近道たづねけり　同（同）
八疊の楠の板間をもるしぐれ　同（同）
蓑を着て鷺こそ進め夕しぐれ　同（同）
しぐるゝや此も舟路を墓參り　同（同）
けふもまたうとんのはいる時雨哉　同（五元集拾遺）
松原のすき間を見する時雨哉　同（同）
島むろに茶を申こそ時雨哉　同（同）
しぐるゝや有し厠の一つ松　同（同）
神鳴のまことになりし時雨哉　同（同）
今熊をしぐるゝ頃はあれぞかし　同（同）
柴はぬれ牛はさながら時雨哉　同（同）
七とせとしらずやひとり小夜時雨　同（同）
村雨のとぎれ／＼や曾根の松　同（同）
深谷やしきる時雨の音もなし　嵐雪（玄峯集）
今市の市日といへばしぐれけり　許六（五老井發句集）
あたらしき紙子にかゝるしぐれ哉　同（同）
有明となれば度々時雨哉　同（同）
しぐれけりはしり入けり晴にけり　惟然（惟然坊句集）
雨袖にたゞ何となく時雨かな　同（同）
十月に降は時雨と名を替て　北枝（北枝發句集）
しぐるゝや夕日のこれる原くらし　同（同）
ひえながらうちねて時雨きくばかり　同（同）
池の星またはら／＼と時雨かな　同（同）
澁にたる實みやしぐるゝ具足山　同（同）
川上の煎酒にほふしぐれかな　支考（蓮二吟集）
金堂に雷鳴なり夕時雨　同（同）
音信るしぐれや我が病ムまくら　杉風（杉風句集）

時雨

山下や牛にもはこぶしぐれ水　杉風（杉風句集）
碁にまけてつれなく見ゆる時雨哉　同（同）
羽折かきむ月にかゝれる村時雨　同（同）
時雨浪に音昆布の若やの夜すがらな　同（同）
僧うかれけり松はひとりに里時雨　同（同）
しぐれつゝ雲にわたれる入日哉　同（同）

翁の像を畫に

侘られし佛畫くしぐれ哉　同（同）

はせを翁像

細工笠世〳〵の時雨に殘るかな　同（同）
客とめむ時雨の雲の通る内　同（同）
いくしぐれつくりかけたる庵あり　同（同）
時雨日や鹽魚附し戻り馬　桃隣（古太白堂句選）
屋根葺のそしらぬ貝や村しぐれ　同（同）
きのふけふあしたは只のしぐれ哉　千代女（千代尼發句集）
仰向て見る人もなきしぐれかな　同（同）
水鳥の背の高う成しぐれかな　同（同）
松風のぬけて行たるしぐれかな　同（同）
しぐるゝや我も古人の夜に似たる　蕪村（蕪村句集）
夕時雨蟇ひそみ音に愁ふ哉　同（同）
蓑笠の衣鉢つたへて時雨哉　同（同）
時雨るゝや蓑買ふ人のまことより　同（同）
楠の根をしづかにぬらす時雨哉　同（同）
蓑蟲のぶらと世にふる時雨哉　同（小摺物）
化そふな傘かす寺のしぐれかな　同（同）
時雨音なくて苔にむかしをしのぶ哉　同（えぼし桶）
朔日のことがましきしぐれかな　同（題苑集）
一わたしおくれた人にしぐれ哉　同（新五子稿）
來迎の雲をはなれて時雨かな　同（同）
禪寺の廊下たのしめ北時雨　同（同）
窓の灯の佐田はまだ寢ぬ時雨哉　同（同）
水ぎはもなくて古江の時雨哉　同（同）
釣人の情のこはさよ夕しぐれ　同（同）
榎時雨して淺間の煙餘所にたつ　同（同）
時雨るゝや用意かしこき傘二本　同（蕪村句集拾遺）
古河をふみわたる身にしぐれかな　同（全集）
夕しぐれ車大工も來ぬ日かな　同（同）
手にとらじとても時雨の古草鞋　同（同）

下戸ならぬこそ宵〳〵のしぐれ哉　同　（同）
子を遣ふ狸もあらん小夜しぐれ　同　（同）
時雨るゝやとあるところに鷺一つ　同　（同）
鷺ぬれて鶴に日のさすしぐれ哉　同　（蕪村遺稿）
海棠の花は咲ずや夕時雨　同　（同）
雲のひまに夜は明て何しぐれ哉　同　（同）
子を結ぶ竹に日ぐるゝ時雨哉　同　（同）
もの置て堅田へ歸る時雨哉　同　（同）
蓮かれて池あさましき時雨哉　同　（同）
半江の斜日片雲の時雨かな　同　（同）
目前を昔に見する時雨哉　同　（同）
しぐるゝや長田が館の風呂時分　同　（同）
古傘の婆娑と月夜の時雨哉　同　（書翰）
窓の人のむかしがほなる時雨哉　同　（同）
老が戀わすれんとすればしぐれかな　同　（同）
木菟の頬に日のさす時雨哉　同　（同）
修行者のしぐれをはづす逕哉　同　（落日庵句集）
しぐるゝや堅田へおりる雁ひとつ　同　（同）
辛崎を夜にしかねたる時雨哉　同　（同）
遠山に夕日一すぢ時雨哉　同　（同）
御手洗に見こす山邊やいく時雨　太祇　（太祇句選）
しぐるゝや筏の棹のさし急ぎ　同　（同）
濡にける的矢をしはくしぐれ哉　同　（同）
玄関にて御傘と申時雨哉　同　（同）
生て世に寐覺うれしき時雨哉　召波　（春泥發句集）
三度まで時雨れていとゞ黒木馬　同　（同）
傘の上は月夜のしぐれ哉　同　（同）
しぐれする音聞初る山路かな　同　（同）
夕しぐれ古江に沈む木の實哉　同　（同）
雲母行豆腐にかゝるしぐれ哉　同　（同）
江戸住やしぐれ問こす人ゆかし　同　（同）
衰やしぐれ待身となりにける　同　（同）
喘息に寐つかぬ聲や小夜時雨　同　（同）
焚木とる内侍の尼のしぐれ哉　同　（同）
むらしぐれ古市の里にしばしとて　同　（同）
寺深く竹伐音や夕時雨　同　（同）

瀬田にて
日は落て波をあかしの夕時雨　稀良　（稀良發句集）

時雨

此ごろの野邊にまたるゝ時雨かな　樗良（樗良發句集）
吸物を出せば晴行しぐれ哉　同（同）
ゆふべより降まさりつゝ小夜時雨　同（同）
立臼のぐるりは暗し夕しぐれ　同（同）
雨にわかち風にまぎるゝしぐれかな　同（同）
きのふけふ我身になるゝ時雨哉　同（同）
ふたり來て一人のはなし時雨かな　也有（蘿葉集）
來て下すはどこの時雨ぞ山がらす　同（同）
相傘に片袖づゝをしぐれかな　同（同）
傘持て出たれは逢はぬしぐれかな　同（同）
二三枚繪馬見て晴るしぐれかな　同（同）
逢ふた時笠着るみちの時雨かな　同（同）
五六度の後は下駄はく時雨かな　同（同）
一本は染る鞠場の時雨かな　同（同）
よけて來た駕に日の照る時雨哉　同（同）
寐覺れば月寐覺れば時雨かな　同（同）
蔦染て腹いる松のしぐれかな　同（同）
しぐるゝや乞食とふたり松の蔭　同（同）
裾ばかり染ふと富士の時雨けり　同（同）
駒とめて拂はぬ袖のしぐれかな　同（同）
顏見ねばしんきしぐれの傘の下　同（同）
けふの袖忝さにしぐれけり　同（同）
供つれて走らぬ人にしぐれけり　同（蘿の落葉）
今朝見れば松の葉つもる時雨哉　蓼太（蓼太句集）
市中は胡蘿染てしぐれかな　同（同）
しぐれ來て園のにしきを踏日哉　几董（井華集）
疊屋のいなでぞありぬ夕しぐれ　同（同）
錦織家見によればしぐれ哉　同（同）
しぐるゝや南に低き雲の峯　同（同）
羽織着て出かゝる空の時雨かな　同（同）
杉たつる門に蚊の鳴しぐれ哉　同（同）
しぐれ過て草に落來ぬ松の風　同（同）
難波女の駕に見て行しぐれ哉　同（同）
今年きく上野の鐘も時雨けり　白雄（白雄句集）
琴箱を荷ひゆくなり夕しぐれ　同（同）
見てたつやしぐるゝ櫓角やぐら　同（同）
椎柴に間なき時雨のはこび哉　同（同）
猪に誰かけられし夕しぐれ　同（同）

刀根の二瀬しぐれわけたる渡り哉　同（同）
時雨るや舟まつ岸の戻り馬　同（同）
芝うらや時雨て歸る牛の角　同（同）
宵闇を時雨わかるゝ小舟かな　同（同）
行しぐれ裏着て追んおもひあり　同（同）
松のほど時雨の皆となる菴　同（同）
しぐるゝや闕折鍋を炉にかけて　同（同）
宿の時雨さつき時雨とうたひけり　同（同）
畑にのほゝ花かき交て一しぐれ　曉臺（曉臺句集）
鳥羽田には時雨ふるらし水菜船　同（同）
沖の雲しかゝれて歸れ後背山　同（同）
時雨ねはものゝあらたまる日もあらず　同（同）
鴫の巣のあらはなるよりしぐれそめ　同（同）
さし越スや深山時雨のぬれ筏　同（同）
夕川や霧のしらみを行時雨　同（同）
つら〱と杉の日面行しぐれ　同（同）
しぐれけり尾根のすがひにわらび焚　同（同）
鐘の音やしぐれ降行あとのやま　同（同）
しぐれ行果は一むらのけぶり哉　同（同）
一むらの烟はなれて行時雨　同（同）
しぐれそめてばせを葉を繕はず　同（同）
合りうれし時雨乾かす我衣　闌更（半化坊發句集）
朔日や日の有うちを夕時雨　同（同）
時雨るゝや角まどへある野への牛　同（同）
時雨るや竹かつぎゆく鳥羽繩手　同（同）
時雨るゝや牛に付たる油筒　同（同）
しぐるゝや宮に兀たる鬼女の面　同（同）
鳴海にてしぐれぞめし草鞋の緒　士朗（枇杷園句集）
さゝ竹にさや〱と降しぐれ哉　同（同）
獨居や古人がやうの小夜しぐれ　同（同）
一雲に夜はしぐれけり須磨明石　同（同）
月時雨さりとては古きけしきかな　同（同）
山茶花に手をかけたれば時雨けり　同（同）
窓ぶたになるやしぐれの松のかげ　同（同）
夜しぐれに小鮎焼なる匂ひかな　同（同）
兎さ角と覓さしよ[illegible]　巢兆（曾波可理）
尼達の旗寐催すしぐれかな　同（同）
暮夕の木に[illegible]けふもぬ時雨かな　同（同）

時雨るや一降ふつて峯の松　巣兆（曾波可理）
市人の廻楽ぜにしぐれかな　同（同）
人は寢て鼠の樽にもるしぐれ　成美（成美家集）
青草のすこしもあれば時雨けり　同（同）
梟の身をまかせたるしぐれかな　同（同）
人ゆけばやがてしぐるゝ野中かな　同（同）
犬吼る聲も淺野のしぐれかな　同（同）
宵の中上野淺草としぐれけり　同（同）
目ざす敵は鷄頭よ横時雨　一茶（七番日記）
西念が家の奉加や村しぐれ　同（同）
惣〆て只三軒のむら時雨　同（同）
又犬にけつまづきけり小夜時雨　同（同）
夜あんまやむだ呼されて降る時雨　同（同）
寢筵にさつと時雨の明り哉　同（同）
しぐるゝや軒にはぜたる梅もどき　同（同）
しぐるゝや迎に出たる庵の猫　同（同）
日本と砂へ書たる時雨哉　同（同）
ちんば鷄たま〳〵出れば時雨けり　同（同）
捨杖よ時雨るたしになりもせよ　同（同）
罠ありとしらでしぐるゝ雀哉　同（同）
大時雨小しぐれ築るもむつかしや　同（同）
科札に天先づ時雨給ひけり　同（同）
須磨時雨河内時雨に追つきぬ　同（同）
時雨せよ茶壺の口を今切ぞ　同（同）
しぐれ込む角から二軒目の庵　同（同）
しぐれ鶴見て居て卵とられけり　同（同）
一時雨行あたりけりうしろ窓　同（同）
繼ツ子や指をくわへて行く時雨　同（同）
しぐれねば夜も明ぬ也片山家　同（發句題叢）
山の家たがび違びに時雨哉　同（享和句帖）
我上にふりし時雨や上總山　同（同）
城きづくつくりの松に時雨哉　同（同）
時雨雲毎日かゝる榎哉　同（同）
時雨雲かゝるにはやき木曾ぢ哉　同（同）
牡にもれし鹿かよ夕時雨　同（同）
我と山とかはる〴〵に時雨哉　同（旅日記）
盗人おのれが古郷に隠れて縛られしに
三介がたゝく木魚もしぐれけり　同（おらが春）

時雨

業の鳥罠を巡るやむら時雨　同（同）
重箱の錢四五文や夕時雨　同（同）
小夜時雨啼くは子のない鹿に哉　同（同）
俗のつく鐘も時雨るゝさがの哉　同（一茶句帖）
泣な子等時雨雲から鬼が出る　同（同）
番町や最合番屋の北しぐれ　同（同）
椋鳥の我を呼ぶなりむら時雨　同（同）
泣な／＼鬼がさらふぞ小夜時雨　同（同）
庵迄送りとゞけて行時雨　同（七番日記）
山梨の秤にかゝる時雨哉　同（同）
いざこざを雀もいふや村しぐれ　同（同）
豆腐煮る傳受する也小夜時雨　同（同）
鳴鳥こんなしぐれのあらんとて　同（發句集）
蛤のつひのけぶりや夕しぐれ　同（同）
子を負うて川越す狙や一時雨　同（嘉永版發句集）
しぐれせよ翁の夢のきえしほど　乙二（をのゝえ草稿）
時雨まつのみをのゝえの朽法師　同（同）
いつの旅も時雨さそはぬ事ぞなき　同（同）
一しぐれするや素堂が嫁菜まで　同（同）
野しぐれやさはこの御温泉に降つゞく　同（同）
月越の松風ぬらすしぐれ哉　同（同）
とにかくに篠屋はむすべしぐれ人　同（同）
時雨てや大分見ゆるさくらの木　同（同）
時雨鷹箕手にならぶ時もあり　同（同）
しぐれけりほち／＼高き竹のふし　同（同）
しぐるゝや山鳩取が來るところ　同（同）
燒帛にさめ／＼と降しぐれ哉　同（同）
たぐゐなくしぐるゝ名なり艸枕　同（同）
萌におく霜を法ふや一時雨　蒼虬（蒼虬句集［illegible］）
しぐるれば出る事にして左位の[illegible]　同（同）
ひと艸は汐汲で居るしぐれ哉　同（同）
一しぐれすかさず啼や山の雉子　同（同）
柚が火のけぶり行あふしぐれかな　同（同）
白菊の殘る畑迄あるしぐれかな　同（同）
しぐるゝや絕ず網打川むかひ　同（同）
時雨るゝや手もへうつゝ[illegible]影　同（同）
鶴[illegible]もとてにはたゞなしぐれ　同（同）
下京はしぐるゝはづよ塔ひとつ　同（同）

時雨

斧の音とゞきて雲のしぐるゝか　蒼虬（蒼虬翁發句集）
しぐるゝや一隅うごく池の水　同（同）
まな板の音時めかすしぐれかな　同（同）
橋筋は夜の賑ふしぐれかな　同（同）
夕山や紅葉に翌の時雨雲　同（同）
砂清し時雨過行鳥居さき　同（同）
心せよ時雨も早し東山　同（同）
ひとしぐれ塚をめぐると見る斗　同（同）
突出した舟はのがるゝ時雨かな　梅室（梅室家集）
しぐるゝやしぶとく青きたばこ莖　同（同）
義仲寺のふみ濡て來る時雨かな　同（同）
沖見ゆる障子の穴もしぐれけり　同（同）
洩るまでは聞すましけりさよ時雨　同（同）
しぐるゝや屎駄賃のまけをしみ　同（同）
おとゝしの竹色かへぬしぐれかな　同（同）
ながらへるはづよ時雨もゝらぬ松　同（同）
しぐるゝや椿立なりの筏さし　同（同）
時雨し一入かはりけり池の鳥　同（同）
笠に着た黑木は賣てしぐれけり　同（同）

なにはわたりにて
松風にかねもしぐるゝ夕哉　宗祇（大發句帳）
どこからか月のさしけりしぐれけり　樹栖（筵犬）

六條道場にて
時宗寺の時雨の亭や雨やどり　貞徳（犬子集）
立よれば松に日のもる時雨哉　買山（春遊）
松に日は照て野末の時雨哉　端兒（恒誠）
馬かりて竹田の里や行しぐれ　乙州（猿蓑）
しぐるゝや黑木つむ家の窓明り　凡兆（同）

芭蕉翁
竹の縮をかけて悲しき時雨哉　孤屋（枯尾花）
大根の大根になるしぐれ哉　尚白（末若葉）
石に置て香爐をぬらすしぐれ哉　野荻（續猿蓑）
紫賣の濡たるを見よ山時雨　流也（鹽分船）

和歌浦
浦の波紀三井寺よりしぐれけり　尺草（句兄弟）
鍋尻のもえてはもゆる時雨哉　馬光（馬光發句集）
渡し守ばかり蓑きるしぐれ哉　傘下（曠野）
一しぐれ過して出るや松葉かき　吟江（夢占）

時雨

於文珠寺句會

橋立の片波高き時雨かな　泊雲（ホトトギス）
時雨るゝや鍛冶の構火うまきうな　月僊（同）
傘に音なくなりし時雨かな　芒月（同）
乾きてはぬるゝ鞄や旅時雨　常山（同）
時雨るゝや火を吹きおはす竈の神　里石（同）
時雨るゝや韮韮の花の濃紫　ながし（同）
行く母に時雨るゝ程に光悦寺　三四郎（同）
巖かげに時雨やどりの樵かな　俳子（同）
時雨來と屏風の歌仙隱りけり　青畝（同）
草むらに墓のありたる時雨かな　あふひ（同）

嵐光眈

翠黛の時雨いよ〳〵はなやかに　素十（同）
かぐはしや時雨すぎたる繭朶の谷　茅舍（同）
しぐるゝや目鼻もわかず火吹竹　同（同）
時雨るゝと念珠かざしぬ案內僧　櫻朶（同）
時雨るゝや光りこそすれ石だゝみ　草田男（同）
時雨るゝやいよ〳〵まろき鷹ケ峰　梅史（同）
つくばひにしぐれてゐたり其角堂　枴童（同）
祇王寺の厠を借ればしぐれけり　有閑（同）
時雨るゝや藪にかくるゝ吉野川　無涯（同）
落柿舍の緣ぬらしたる時雨かな　千里（同）
時雨るゝや竹の中なる石蕗の花　としを（同）

京都光悅寺

鷹ケ峰しぐれのあしのかゝりそむ　夢香（同）
衣笠やしぐれながらにいかのぼり　秀好（同）
大阿蘇の根子岳見えず片時雨　水竹居（同）
折からの石水院の時雨かな　長（同）
時雨るゝと杖をかつげる羊守　北望（同）
時雨來と金堂の扉に靠れけり　墨石（續ホトトギス）
皆がさす橋寺の時雨傘　洛水（同）
しぐるゝや暗くなりたる三笠山　秋濤（同）
龍膽に日のさして居る時雨かな　泊月（同）
來るたびに時雨にあひぬ光悅寺　桂樹樓（同）
しぐるゝやかたりとゐざる鍋の蓋　砧女（同）
飛鳥野や稻架の上ゆく時雨傘　圭草（同）
落葉籠背負うて時雨宿りかな　琴女（同）
蝶うせて時雨の空となりにけり　過去（同）
時雨來て去來の墓へ急ぎけり　宇洞（同）

亭

濡縁に花椿ふる緑や朝時雨　風生（同）
しぐるゝや塔の中なる佛の灯　虚子（句集虚子）
湊かむや時雨日和をめでながら　同（同）
二三子や時雨るゝ心親しめり　同（同）
ぬれ縁の濡れてゐたりし時雨かな　同（續ホトトギス）

參考　冬季山地に於ては晝夜の別なく、又晴曇の別なく急雨がバラ〳〵と降ることがある。之れを時雨・液雨或は「しぐれ」と稱する。此の雨は初冬に多く、強い風を伴ひ短時間に降るものであつて我國では京都の如き地形の處に多い。之れは北西の季節風が連山に當つて吹き昇るとき冷却して雲を生じ雨を降らすものであらうと考へられて居る。京都でも北西風の強い時に限り時雨が降る樣である。

冬の雨（ふゆのあめ）

季題解説　冬の雨は小暗く寒い感じを伴つて降る。降りしきるといふこともなく、大粒を落してくるやうなこともなく、細く冷たく、時折の風に音を消しながら注ぐ。さび果てた地上にびしよ〳〵と灑ぐ雨も、雪の上に音もなく降りかける雨も、いづれも詫しい。枯枝や幹の雫も凝つたやうな鈍い光をして靜かにふくれては落ちてゐる。〔參照〕時雨・寒の雨カンノアメ

例句

冬の雨

面白し雪にやならん冬の雨　芭蕉（千鳥掛）
宵やみのすぐれてくらし冬の雨　太祇（太祇句選）
垣よりに若き小草や冬の雨　同（同）
冬の雨しぐれのあとを徹夜哉　召波（春泥發句集）
水音の野中にくれて冬の雨　支朗（笠）
サフランの花に重たし冬の雨　新月（葵）
冬の雨塵運び去る草かな　雪蝶（ホトトギス）
楪の太き落葉や冬の雨　果采（同）
硝子戸を一滴走る冬の雨　緑風（同）
代赭の柔に歯や冬の雨　泊雲（同）
雪の上にひねもす細し冬の雨　濱人（同）
末黄ばむ竹屋の竹や冬の雨　宵曲（同）
明かき方向いて髪結ふ冬の雨　温亭（同）
庭石の忽ち濡れぬ冬の雨　草千（同）
忽に青みし麥や冬の雨　玉虬（同）
冬雨や簑笠立ちて淡し守　同（同）
冬の雨濡れ出でたり枯葎　浪の穗（同）
冬雨や道にさばしる轍の火　隣史（續ホトトギス）

冬の雨温泉の宿なればなつかしき　きくえ（續ホトトギス）

戸を少しあけて藁打つ冬の雨　都美女（同）

いつまでも下る千生瓢冬の雨　青邨（同）

降り出でてはや風添ひぬ冬の雨　虚子（句集虚子）

寒(かん)の雨(あめ)

季題解説 時候が寒に入つてから降る雨である。冬の雨の中に當然抱括されてゐるものであるが、特にこの時季の雨が抽出呼稱されてゐるのは自ら冬の雨と異つた感じをうけるからである。冬の雨といふより一層冴えた嚴しい寒さがひしひしと迫つてくる感じがする。冬も最中の、すべてがしんしんと乾びきつて凍ててゐる地上に降るこの雨は、詫しいといふよりむしろ身のひきしまる嚴しさを覺える。〔參照〕冬の雨(フユノアメ)

例句

寒の雨

雁さはぐ鳥羽の田づらや寒の雨　芭蕉（西美集）

腰前や馬も通らず寒の雨　子規（子規句集）

御停止やしよぼしよぼ寒の雨が降る　三川（新俳句）

寒の雨月や出でつる薄明り　月斗（同人）

一字缺けし廣告燈や寒の雨　桃里（同）

桃の木に紙屑の穢や寒の雨　泊雲（ホトトギス）

神垣の根の青苔や寒の雨　杉麓（同）

友引の大戸おろすや寒の雨　ひろ女（同）

溫室の花盛なり寒の雨　冷石（同）

鶯の糞すこしみたるゝ寒の雨　青邨（同）

子をかばひ行く錢湯や寒の雨　稻香女（續ホトトギス）

白人に步き負けたり寒の雨　三海風（同）

液(えき)雨(う)　入液(にふえき)　出液(しゆつえき)

古書校註

【增山井】液雨、入液。立冬の後十日入液也。其の比液雨降る（本草）。

【滑稽雜談】時珍本草に云、液雨。立冬の後十日を入液と爲し、(一)小雪に至つて出液と爲し、雨を得て之を液雨と謂ふ。亦藥雨と云ふ。百蟲之を飮んで皆伏蟄し、來春雷鳴るに至つて乃ち出づる也。（略）和俗、液雨を以てしぐれと稱す。

【年浪草】倭俗、液雨をしぐれと訓ずること、時節を取合せて云ふ也。

〔參照〕時雨。

註 (一) 二十四氣の一、立冬の次に來る。

霰（あられ） 初霰（はつあられ） 夕霰（ゆふあられ） 玉霰（たまあられ）

古書校註

【御傘】霰、只一、霰はしり一、霰の松原一、此外に餅のあられ又あり。皆折をかゆるなり。あられ地の錦・霰釜・餅のあられ、皆雑なり。

【山之井】あられは、板びさし・根篠のうへなどに、音してふれる心ばへかきみだれてふりしけるまゝに、庭のつちべも玉しくと見え、わらやの屋ねも玉殿となれるけしき、又、（一）あられのさけをもいひなし、（二）あられ釜をもつらね侍る。

【増山井】あられ、玉あられ、霰酒。あられ消ゆるも冬也。

【滑稽雑談】霰（略）（三）是らの説をみれば、霰にみぞれは近き也。あられは雹なるべし。

（雹あられ）（一）陸佃云、陽、陰を散ずれば霰と爲り、陰、陽を包めば雹と爲る。時珍本草に云、（略）五雷經に云、雹は乃ち陰陽不順の氣結んで成る、亦蜥蜴鱗甲の内に有つて、寒凍して氷を生ず。雷の發する所たり。飛走して墮落す。大に生る者は斗升の如く、小なる者は彈丸の如しと。又、蜥蜴水を含むも亦能く雹を做すと。未だ果して否なるかを審にせず。（二）五雜組に云、雹は是れ霰の大なる者に似たり。但、霰を雨らすときは寒くして、雹を雨らすときは寒からず。霰は晴れ難くして、雹は晴れ易し。（三）顧の和名に云、雹、和名、安良禮（略）按ずるに、あられには雹の字勿論也。萬葉、我が袖に雹（アラレ）たばしる卷き隱し消たずもあらむ妹が見む爲め　柿本人丸。

【年浪草】〔雹（アラレ）〕左傳に曰、凡そ雹は皆冬の愆れる陽、夏の伏せる陰也。（略）（一）歷代の雹災を考ふるに、漢の文帝後元年雹を雨らす。大なる者五寸。永初三年夏、河西縣大に雹を雨らす。大さ鷄子の如く、深さ三尺。三年秋、雹を雨らす。大なる者五寸。梁の紹熈の大さの如く、或は斗の如し。漢の武帝元封三年冬、雹を雨らす。大さ馬首の如し。宣帝の神爵四年夏、山陽雹を雨らす。大さ鷄子の如く、深さ二尺五寸、人を殺し、飛鳥皆死すと云ふ。是を以て考ふれば、雹は和俗に云ふ雹、四季にあり、霰は倭俗に云ふ霰、冬ふるもの也然れば霰は冬とし、雹は雜なるべし（二）倭名抄に曰、雹、和名、安良禮（三）萬葉、我が袖に雹たばしる卷き隱し消ずともあれや妹が見ん爲め　柿本人丸。冬の部に出づ。又然るときは、霰雹通用して冬とするにや。

【月令博物筌】〔霰〕三冬。〔雹〕は皆冬の陽をあやまり、夏の陰に伏するなり。

註（一）年浪草には、[illegible]に[illegible]いて、[illegible]・[illegible]の[illegible]・[illegible]・[illegible]の四項があり、[illegible]には、[illegible]みな[illegible]して[illegible]て、[illegible]に[illegible]の[illegible]・[illegible]の[illegible]に[illegible]はなるらし。古[illegible]

詠めば、自ら霰の季が含まれて來る。（二）例句に、たけびざいてんより ふるや霰ぞ、の句が暴がつてゐて、これから詠めば季が含まれて來る。（三）霰に「みぞれ」・「あられ」の兩訓を認め得る中、著者自ら列擧した支那の資料によれば、霰を「みぞれ」と認める方が有力であるといふのであるが、同書が霰の項に引用した「八雲御抄に云、霰是な眞葉（十六）にみぞれ共いへり。」「仙覺抄に云、霰（みぞれ、あられ）兩訓有り。但し公任卿朗詠集にあられに用ひらる〻と云々」などの見方から、霰が「あられ」と決定されるに至つたものであらう。（同・以下引用の三書で見ると、支那の資料では、雹は夏の季となるべき性の強いものであるが、吾が國で早く霰雹混一して「あられ」とされた爲め、雹を「あられ」と讀むと共に冬の季として來たらしい。斯くて、中谷無涯氏の新修歳時記（夏之部、明治四十二年刊）あたりで、雹が夏の季と定められて今日に至つたものと思はれる。尚夏之部―雹參照

季題解説　寒くけはしい雲が走つてくると見る間に、ばらばらと霰がほとばしつてくる。土に庇に幹に心よい音をたて、互に跳ねあひながら、細かく美しい粒は忽ち地上を白く埋めてしまふ。長く降りつゞけるやうなことはなく、さあつと來てあたりが見えなくなるほど降りしきると見る間にからりと晴れてゆく。時にはそのあとが雪や霙に降りかはることがある。大小の粒々は眞に美しい。玉霰などと美稱される所以である。〔參照〕夏―雹へ

例句

霰

よむとつきじ人丸つらゆき玉霰　宗因（梅翁宗因發句集）
雜水に琵琶きく軒の霰哉　芭蕉（有磯海）
霰せば網代の氷魚を煮て出さん　同（花橋）
いかめしき音や霰の檜木笠　同（陸奥衛）
石山の石にたばしるあられ哉　同（麻生）
琵琶行の夜や三味線の音霰　同（後の旅）
あられきくやこの身はもとのふる柏　同（續深川）
いさみたつ鷹引据る霰哉　同（同）
いざ小供はしりありかん玉霰　同（木葉集）
雪雲の引のき際をあられかな　浪化（浪化上人發句集）
飛かへる岩のあられや窓のうち　丈草（丈草發句集）
老武者と指やさゝれん玉あられ　去來（去來發句集）
みがゝれて木賊に消るあられ哉　其角（五元集）
海へ降るあられや雲に浪のおと　同（同）
武藏野や富士の霰のこけ所　同（五元集拾遺）
藤葺やあられにやどる不破庇　同（同）
取次へ霰をはじく長柄かな　同（同）
武士の足で米とぐあられかな　嵐雪（玄峰集）
きつとして霰に立や鹿の角　支考（蓮二吟集）
あられにも怪我せぬ雀かしこさよ　杉風（杉風句集）
水にうくものとは見えぬ霰かな　千代女（千代尼發句集）
玉霰漂母が鍋をみだれうつ　蕪村（蕪村句集）

岩に篠にあられたばしる小さゝ原　同　（月並發句帖）
深草の笠しのばれぬあられ哉　同　（新五子稿）
一しきり矢種の盡るあられ哉　同　（蕪村句集）
むさし野や笠に音聞霰かな　同　（落日庵句集）
壁までが夜であられの山居哉　太祇　（太祇句選）
町中のあられさはがしひとの額　同　（　）
ぬらさずに傘もどすあられ哉　也有　（蘿葉集）
漏る事もわすれて走る丸雪哉　同　（　）
黒木ゆふ袖にたばしる丸雪哉　同　（蘿の落葉）
中空に降きゆるかと夕あられ　白雄　（白雄句集）
つぶ〳〵と露の葉に降夕あられ　同　（　）
小夜あられ起見んばかり降にけり　同　（　）
薄暮やあられ興ずる樟ひろい　同　（　）
匂ひなき冬木が原の夕あられ　同　（　）
うき雲や霰月夜を鳩の啼　同　（　）
玉あられ鍛冶が飛火に交りけり　曉臺　（曉臺句集）
たまあられ水に沈めば消ぬべし　同　（　）
靜さや枯藻にまろぶ玉霰　同　（　）
玉霰思ひまをけし竹柱　同　（　）
冬の情月明らかにあられふる　同　（　）
あられ降軒は黄めり正木つら　同　（　）
あやなくも霰降かつ小雪哉　同　（　）
絹ふしに霰はさまる垣根かな　同　（　）
氣たるみし鷹の面うつ霰哉　同　（　）
伊勢の御師の折敷に溜る霰哉　巢兆　（曾波可理）
枯菊をまたもてはやすあられかな　成美　（成美家集）
掘かけし柱の穴をあられ哉　一茶　（旅日記）
わやくやと霰を佗る雀哉　同　（七番日記）
十月の中の十日の霰哉　同　（同　）
去程に鈴からおつるあられかな　同　（同　）
一筵霰もほして有りにけり　同　（同　）
盛任が横面たゝくあられ哉　同　（同　）
霰ちれく〳〵ゝり枕を負ふ子ども　同　（同　）
來よ〳〵とよんだる霰ふりにけり　同　（同　）
悪形の紋當顔を[illegible]られ哉　同　（同　）
かき守[illegible]おせん川て見よ玉霰　同　（同　）
たまれ霰たんまれあられ手にたまれ　同　（一茶句帖）
遠乘や霰たばしるかさの上　同　（同　）

霰

あられごと掴み込たり錢叺　一茶（一茶句帖）
起よ〳〵ころぶも上手玉あられ　同（同）
夕霰ねん〳〵ころり〳〵哉　同（九番日記）
玉霰峯の小雀も連に來ぬ　同（新句題集）
こぼるゝとのみ申たし降霰　乙二（をのゝえ草稿）
野の末の雲に音あるあられ哉　蒼虬（蒼虬翁發句集）
五六間飛や霰の網の魚　同（同）
二三合蜆にまじる丸雪かな　梅室（梅室家集）
鵜はしづみ鷺は雲井に霰かな　同（同）
薄雪の上に霰のころ〳〵と（付句）　濁子（蕉翁俳諧集）
鵲の橋よりこぼす霰かな　禾蜂（猿蓑）
呼かへす鮒賣見えぬ霰哉　凡兆（同）
枇杷の葉に霰落けりとまりけり　巴水（俳諧古選）
水仙の根に降たまる霰哉　吟江（推敲日記）
かきよする馬糞にまじる霰哉　林斧（あらの）
甲板に霰の音の暗さかな　子規（子規句集）
鍋焼の行燈を打つ霰かな　同（同）
藁灰にまぶれてしまふ霰かな　同（同）

琵琶を聽く
四弦一齊霰たばしる疊かな　同（同）
ロこはき馬に乘たる霰かな　同（同）
築山の小笹に走るあられかな　天歩（新俳句）
月の夜を槇の葉に降る霰かな　臾柳（同）
霰降りし青き空なる日暮かな　菖帖（懸葵）
揚舟や枯藻にまろぶ玉あられ　蛇笏（ホトトギス）
夢殿は梅の枯木に霰かな　はじめ（同）
髪の毛にいつまで消えぬ霰かな　牙集（同）
菊の紅かすかに月の霰かな　石鼎（同）
草の根に走り溜れる霰かな　菰聖窟（同）
枯萑掻いくゞり落つ霰かな　青邨（同）
足許に來たる霰に歩むかな　小舸（同）
霰降り月はかゞやくばかりなり　抜山（續ホトトギス）
庭の面やあられふりいでおもしろし　てい子（同）

參考　白色不透明な小さな雪塊樣のものであつて、大きなものには直徑三粍を越えるものさへある。霰は雹の小さなものと區別が着きかねるが、前者は柔かく後者は堅く又前者は冬寒冷な時に降り後者は夏に多い故區別はつく。霰は上層の雲を構成して居る小さな氷の結晶が落下して來る途中氷點に冷えた寒冷な水滴に會ひ氷結して出來たものと考へられて居る。

霙が降るときは氣温が極めて低い時よりか氷點に近い時の方が多く、一日中でも早朝と夕刻に多く日中と夜間には少ない。又一年中では冬季に最も多いのは當然であるが、南國では三月に多く、寒國の海岸では十二月に多い。又霙は我國では日本海岸に多く太平洋岸は少い。例へば福井では一年中霙の降つた日が四十八日もあるが、太平洋岸の濱松では僅かに六日しかない程である。霙は時雨の如く、驟かに降つて忽ち止むと云ふ降り方をする。故に一般に降る量は少い。併し日本海岸の方では可なり長時間に亙つて降り續く事がある。

霙（みぞれ）

古書校註

【御傘】みぞれ、雪に七句、雨に五句。問うて云、五句の物は三句なるに、此のみぞれと雨とを何故三句にせざるや。答へて云、餘のかろき露・霜等は三句去、雨は重き故、連と同じく五句去也。

霙に雪、雨を嫌ふ。但、誹には七句隔つべし。雨は五句去也。

【山之井】みぞれは、おほく（一）酒によせつゝ、篠の葉・杉葉をさかばやしといひはやし、天水などを酒壺とも見なせり。又、みぞるゝといふ詞にもそへ、溝れなどもいひかく。

【滑稽雑談】尚齊に曰、霙は霰也。廣雅に云、霙は雨雪雜り下る也。○衛雅の註に曰、氷雪雜り下る也。又霖に作る。○順の和名に云、霰。和名、美曾禮。又云、霙、文選の雪の賦、師說に云、三曾禮。○和訓義解に云、みぞれは水あられ也。（略）○八雲御抄に云、霰、是を萬葉（十六）にみぞれ共いへり。○仙覺抄に云、霰を[illegible]訓有り。但し公任卿朗詠集にあられに用ひらるゝと、云々

註（一）[illegible]酒に寄せるといふので、犬子集の[illegible]の句六句全部が直接間接に[illegible]酒に寄せたものであり、[illegible]句中の[illegible]の句十句の中、九句までが同様に[illegible]酒に寄せたものである。その中、本文の例句となるべきものを示せば、篠の葉にふるや[illegible]の[illegible]酒（作者不知）、天水の[illegible]やあま酒[illegible]酒（[illegible]）、村の内の[illegible]やみぞれの酒ばやし（正直）、[illegible]やざゝんざとふる[illegible]酒（一村）などがある。なほ同じ酒を指して[illegible]酒・[illegible]雨等に云ふのは、もと[illegible]二字が混一して使はれ、我が國でも[illegible]に雨[illegible]のあつた[illegible]から生じたものであらう

季題解說

冬の雨脚は地上の冷氣に會つて雪とも霰とも霙ともなる。霙は雪が半ば融けて水氣をふくんで降るものである。だから雪片のやうに舞ひ落ちるといふのではなく、薄白い線を引いて速く斜にほたほたと落ちて來る。その感じは雪や霰よりも一層寒く暗い。動詞として「みぞるゝ」「みぞれけり」などと使はれた句も多い。〔參照〕春—春霙（ハルノミゾレ）

例句

淋しさの底ぬけて降みぞれかな　丈草（丈草發句集）

枯杉にすくひ上たるみぞれ哉　去來（去來發句集）

霙

みぞれにも身は構へたり池の鷺　其角（五元集）
みぞるゝや鷄覗くとまり時　支考（蓮二吟集）
古池に草履沈みてみぞれ哉　蕪村（蕪村句集）
霙して海老吹寄る汀かな　召波（春泥發句集）
頭巾くれし妹がりゆく夜霙ふる　几董（井華集）
雪がちにみぞるゝ鷺の篠屋かな　白雄（白雄句集）
筵戸やみぞれ一時人こもる　同（同）
みぞれてもしらぐつもる穂垣哉　同（同）
酒莚の戸口明りやみぞれふる　一茶（享和句帖）
飯の湯のうれしくなるやちるみぞれ　同（旅日記）
大菊のさんだらぼしをみぞれ哉　同（七番日記）
門番は足で掃寄るみぞれ哉　同（同）
荒神の松も買れぬみぞれ哉　乙二（松のゝえ草稿）
庭白し霙やつもる夕月夜　宗春（三籟）
夕されば松の葉白き霙哉　宵柏（大發句帳）
みぞれふる晉や朝飯の出來る迄　晝好（古今句鑑）
大船の楷子をあげる霙かな　子規（子規句集）
棕櫚の葉のばさりぐとみぞれけり　同（同）
夜の霙渡し出すぞと叫びゐる　鈴和尙（同人）
傾きて船の入り來し霙かな　海扇（ホトトギス）
新蓑をパリく著るや夕霙　四字路（同）
夕霙詞をつくし泊め申す　柹大（同）
みぞるゝや軒に釣りする鰌筊　無角（續ホトトギス）
みぞるゝや打かたまりて神の鹿　春聲（同）

參考　氣溫が高い時に降る雪は雪片が途中で融解して落ちて來る。時には雨が雪に混じて降ることもある。之れを霙と稱する。故に霙は特別な性質を有するものでは無い。初雪の頃或は春季終雪の頃に降る雪には霙が多い。和漢三才圖會には「雨雪相雜也蓋其雪淡而不甚白」とある。

霧氷（むひょう）　木花（きばな）　樹華（きばな）　樹霜（じゅさう）　樹氷（じゅひょう）　粗氷（そひょう）

季題解說　空中に濕氣の多い時、溫度が甚だしく下降すると、濕氣が樹枝に結氷して樹木は水晶華を附した樣になる。これを霧氷と云ひ、概ね夜陰、曉に現はれ頗る壯觀である。霧氷を生じた後の天空は所謂蒼穹の名にふさはしいものと化し去るのである。霧氷とも樹華とも云ふ。樹木の霧氷もさることながら、氷柱などの霧氷も甚だ捨て難い美觀を呈する。これに三種類ある。

（一）樹霜（ジュサウ）　氷點以下に冷却してゐる水蒸氣が昇華によつて結晶して樹木などに氷結したもの。顯微鏡で見ると一つ一つ六角柱或は六角板の結晶をしてゐる。信州に生ずる木花は此の種である。

（二）樹氷（ジュヒョウ）　氷點以下に冷された水滴が氷結し、同時に昇華の現象が加つたもので、此の時は氷點以下に冷却した霧が本體となる。そして風の方向へ發達する。九州溫泉嶽の花ボロは之れである。

（三）粗氷（ソヒョウ）　氷點以下に冷却してゐる大粒の水滴が氷結して出來たもの、昇華の現象は少しも加つてゐない。參照　雨氷（ウヒョウ）

例句

霧氷　日の出でゝ色のかはりし霧氷かな　ふみ女　（續ホトトギス）

雨氷（うひよう）

季題解説　冷却された雨が地上の木々に降りそゝぎ、それが直ちに氷となつたものである。この現象は極めて珍らしいので、さうしば〳〵見ることは出來ない。東京では大正十一年の二・三月頃一度あつた。木といふ木が枝も葉も氷で包まれて、それに朝日が當つた時などは燦然と輝いて、素晴らしい景觀を呈した。特に枯木や松の葉などが美しくて、悉く硝子細工で出來てゐるやうな觀があつた。霧氷と混同しないやうにしなければならない。參照　霧氷（ムヒョウ）

初霜（はつしも）

季題解説　その年はじめて見る霜である。おほむね晩秋初冬に見られるのである。美しい日輪がさしのぼる朝、ふと見る庭面などに「おや初霜だな」とつぶやくことがある。屋根、垣根、枯草、芥の上などに白く降りてゐるのを見かける。

初霜の置きそめるのは土地と年に依つて違ふのであるが、官報の觀象欄に氣をつけてゐると、早くも九月下旬頃、滿・鮮・樺太・北海道などの初霜

が報ぜられる。中央氣象臺の調査に依る各地の初霜の期日を抄出すると次のやうなものである。それから内地の測候所所在地で秋に初霜の置く地方が四〇ヶ所、冬のところが五〇ヶ所、全く降霜のない處が長津呂・室戸を始め六ヶ所ある。〔參照〕霜　春　忘れ霜

地名	平均月日	最早年月日
東京	一一・二一	明治四二・一〇・二一
落合	九・三〇	大正二・八・二六
長春	九・二四	明治四三・九・一二
中江鎭	九・二五	大正一三・九・一四
帯廣	九・二六	大正二・九・一四
大泊	九・二六	大正二・九・一四
札幌	一〇・二	明治二一・九・九
紗那	一〇・三	明治三七・九・一
旭川	一〇・三	大正二・九・一四
根室	一〇・一〇	明治二六・九・二四
盛岡	一〇・一三	昭和三・一〇・五
函館	一〇・一三	明治三一・九・二六
京城	一〇・一四	昭和三・九・二六
長野	一〇・二一	明治二六・一〇・七
秋田	一〇・二二	明治三九・九・二七
青森	一〇・二三	明治三八・一〇・一
高山	一〇・二五	明治三九・一〇・八
福島	一〇・二七	大正三・一〇・一三
宇都宮	一〇・二八	大正一一・一〇・一三
温泉嶽	一〇・二九	昭和二・一〇・一八
京都	一〇・三〇	明治二五・一〇・二
大連	一一・一	大正元・一〇・九
名古屋	一一・六	明治三三・一〇・一三
釜山	一一・七	大正一一・一〇・一一
熊本	一一・七	昭和二・一〇・一五
天津	一一・八	昭和三・一〇・一八
福岡	一一・一[illegible]	明治三六・一〇・二一
境	一一・一二	明治三三・一〇・二三
松山	一一・一三	大正七・一〇・二六
大阪	一一・一四	明治二一・一〇・二三
金澤	一一・一六	明治二四・一〇・二一
廣島	一一・一六	明治一八・一一・三
上海	一一・一九	大正一〇・一一・九

新潟	一一・二〇	明治	二三・一〇・二五
高知	一一・二三	明治	三八・一一・六
鹿兒島	一一・二五	大正	一五・一〇・二〇
下關	一二・二	明治	三九・一一・四
潮岬	一二・二〇	大正	六・一一・一七
臺北	一・四	大正	一一・一一・二七
相川	一・四	大正	二・一一・三〇
八丈島	一・一三	大正	元・一二・一四

例句

初霜

初霜や菊冷初る腰の綿　芭蕉（荒小田）
はつ霜の泥によごれつ草の色　丈草（丈草發句集）
濱にて
初霜に何とおよるぞ舟の中　其角（五元集）
初しもや鐘樓の道の杏のあと　許六（五老井發句集）
はつ霜や小笹がしたのゑび蔓　惟然（惟然坊發句集）
はつ霜や芦折違ふ濱つゝみ　支考（蓮二吟集）
初霜や砂に鋼の反かえり　同（同）
初霜やわづらふ鶴を遠く見る　蕪村（蕪村遺稿）
初霜やさすが都の竹箒　太祇（太祇句選）
はつしもや飯の湯あまき朝日和　樗良（樗良發句集）
はつ霜や野わたしに乘馬の息　几董（井華集）
初霜や田の土とりて竈をぬる　巣兆（曾波可理）
初霜や乞食の竈も一ながめ　一茶（一茶句帖）
初霜や鳥居の笠木岩の角　雅郊（古今句鑑）
南へ
初霜の沙汰や頃日葱叢　笠齋（同）
初霜や唐招提寺志す　花蓑（ホトトギス）
初霜や吉田の里の葱畑　虚子（句集虛子）

霜（しも）

三つの花（みつのはな）　さえひこめ　青女（せいぢよ）　大霜（おほしも）　強霜（つよしも）　霜朽（しもくち）　はだれ霜（しも）　今朝（けさ）の霜（しも）　朝霜（あさしも）　霜日和（しもびより）　霜（しも）の花（はな）　霜（しも）の劍（つるぎ）　霜（しも）の鐘（かね）　霜（しも）の聲（こゑ）　霜（しも）だたみ

古書校註

【御傘】霜、冬也。きゆるとしても冬也。餘の降物に二句去也

【山之井】霜の花といひては、みのらぬあだ花にもよせ、日影にきゆる朝顔のながめにもくらべ、霜柱といひては、(二)かさゝぎの橋ぐいかとも、(三)音せぬ、霜つき堂などもいひなす。霜夜はことに寒さえて、月の光りもさむげなた、風もみにいりて、ねびえねどろく心ばへ、しづのめにきるゝ

ひゞ・あかゞりも、霜の劒のしわざにおほせ、このてがしはも霜ばれをいたみ、松のふぐりも霜風をおこすなど。

【滑稽雜談】大戴禮に曰、霜は陰陽の氣也。陰氣勝つときは、則ち凝りて霜となる。○釋名に曰、霜は喪也。其の氣慘毒して物皆喪す。（略）○順和名に云、霜。和名、之毛。說文に云、霰（ハツシモ）、早霜也。丁念反。和名、八豆之毛。○和訓義解に云、しもは下にあるの義也。霜天に滿つなどいへども、いろをあらはす事地下に有り。○八雲御抄に云、霜、はつしも・夕霜・はたれ、薄垂也。但し春も少々詠めり。つるのいましめ・おくれ霜・かねのこゑ・さはひこま。○藻鹽草に云、さはひこめ、霜の異名、藏玉に有り。（略）（按ずるに、霜は秋よりあれども、初霜と云ふも冬也。○連歌本意抄に云、霜は秋の半より降る物也。秋の詞入りては秋也。只霜と計は初霜も冬也。中の春迄は降る物也。私云、俗に名殘の霜と云ふ。春也。歌にも春の霜を云ふ。

青女。淮南子に云、秋三月に至り、（略）青女乃ち出でゝ、以て霜雪を降らす。注に云、青女は天神、霜雪を主る也。

【栞草】今朝の霜・朝霜・霜夜・霜日和・霜解・はたれ霜。（略）○青女・さはひこめ・三つの花等の異名あり。

霜の花。筆談 天惟中青州盛冬には、濃霜を屋瓦におく、皆百花の狀をなす。

霜の劒（ツルギ）。（略）○霜を劍にたとへていひ、又劍を霜にたとへてもいふ也。

霜の鐘。（略）霜ふるときは金氣應ずるなり。

霜の聲。匠材集（略）寒時しん〳〵と聲あるなり云々。

霜だゝみ。古式に載せず。按ずるに、霜柱に對して、一面におきわたせる霜をいふにや。

三つの花。霜の異名なり。博物筌 水の花の轉音とも、又雪を六つの花といふゆゑ、霜を三つの花ともいふにや、云々。秘藏抄 さはひこめおくわが宿のませのうちにかはら蓬はうたてかりけり。

註（一）例句に「かさゝぎの橋ぐひなれや霜柱」（西武）が擧がつてゐる。（二）同じく、「をのづからかねつき堂や霜ばしら」が擧がつてゐる。

季題解説　空が星屑で滿たされ、冬に入つた寒さが夜氣の中に張りきつてゐるやうな夜が明けると、地上はすべて霜に覆はれてゐる。さうした朝はきまつて天氣がよい。きら〳〵と薔薇色に輝いた日が上る。日に染つてゐた軒や木の枝の霜はやがてけむりを立てゝ解けはじめる。濃い緣取りをしてゐた草や木の葉の霜も露の玉をしたゝらせる。大霜・霜晴・霜解といふやうな言葉となつて句に詠まれてゐる。參照 初霜（ハツシモ） 時候―霜夜（ヨシモ） 春―春の霜（ハルノシモ） 秋―秋の霜（アキノシモ）

例句

霜　里人のわたりゆか橋の霜　宗因（梅翁宗因發句集）

葛の葉のおつるがうらみ夜の霜　同（同）

夜すがらや竹こほらするけさのしも　芭蕉（芭蕉翁眞蹟集）

ひつぢ田に霜の花見る朝かな　同（もとの水）

有難やいたゞいて踏む橋の霜　同（芭蕉句選）

葛の葉のおもて也けりけさの霜　同（雜談集）

藥のむさらでも霜の枕かな　同（笈日記）

さればこそあれたき儘の霜の宿　同（曠野）

から〳〵と折ふしすごし竹の霜　同（芭蕉句選拾遺）

霜をふむでちむば引まで送けり　同（茶草子）

貧山の釜霜に啼聲寒し　同（虛栗）

霜をきて衣かたしく捨子哉　同（坂東太郎）

爐の炭の寢もとはゝは夜半の霜　言水（俳諧五子稿）

芭蕉いづれ根笹に霜の花盛　素堂（同）

朝霜や茶湯の後のくすり鍋　丈草（丈草發句集）

朝霜や人參つんで墓まゐり　去來（去來發句集）

馬道や茨をはなれて霜の屋ね　同（同）

婆に逢にかゝる命やせたの霜　其角（五元集）

蠟の手に匂ひのこるや霜の菊　同（同）

鍬鍛冶に隱者尋ねん畑の霜　同（同）

石菖の露もかれ葉や水の霜　同（同）

あな寒しかくれ家いそげ霜の螢　同（同）

栗飯の焦て匂ふや霜の聲　同（同）

此宿を御師もたづねて杉の霜　同（五元集拾遺）

さめよとの千手陀羅尼や霜の聲　同（同）

酒くさきふとん剝ぎけり霜の聲　同（同）

金藏のおのれとうなる霜の聲　同（同）

鬢の霜無言の時のすがたかな　許六（五老井發句集）

鴨や霜の術に鳴わたり　惟然（惟然坊句集）

一つ葉や一葉〳〵の今朝の霜　支考（蓮二吟集）

影むらさき霜を染なす風かな　杉風（杉風句集）

あけぼのや霜にかぶ菜の哀なる　同（同）

露の道松寒うして霜白し　同（同）

霜解や都に出し下駄の跡　沾德（俳諧五子稿）

眞直に霜をわけたり長慶寺　桃隣（古太白堂句選）

朝風や霜の手を吹く渡し守　同（同）

霜百里舟中に我月を領す　蕪村（蕪村句集）

たんぽゝのわすれ花あり路の霜　同（同）

置霜の朝日くろふや牧の駒　同（月並發句帖）

衞士の火もしら〳〵霜の夜明かな　蕪村（蕪村句集）
松明ふりて舟橋わたる夜の霜　同（蕪村遺稿）
野の馬の韮をはみ折る霜の朝　同（同）
腰かける舟梁の霜や野のわたし　太祇（太祇句選）
今更にわたせる霜や藤の棚　同（同）
ひとの子の悪處戻りや門の霜　同（同）
行舟にこぼるゝ霜や苫の音　同（同）
笘ぶねの霜や寐覺の鼻の先　同（同）
日三竿檜原に耐ぬ霜の色　召波（發句集）
霜さむや小鳥の足も地につかず　樗良（樗良句集）
姨捨の名を野にかなし草の霜　也有（蘿葉集）
雪國の人に恥かし霜の菴　同（同）
長生キの笠に霜ふる案山子かな　同（同）
朝霜や誰おくられし下駄のあと　同（同）
菜も蒔ぬ畠の霜やきくのあと　同（同）
世の人の忍ぶは枯れず塚の霜　同（同）
水仙に晝見る露やけさの霜　同（同）
鉞立の門たゝくなり霜の聲　蓼太（蓼太句集）
結構な天氣つゞきや艸の霜　几董（井華集）
草の葉の霜より明て山かづら　同（同）
霜いたし草鞋にはさむうつせ貝　同（同）
人をして哭しむ霜のきり〴〵す　同（同）
みちのくの空たよりなや霜の聲　白雄（白雄句集）
鬼薊も蘇鐵も霜の旦かな　同（同）
燃てたつ燐に霜のけむる哉　同（同）
夕霜の眼には見えで老が膝　同（同）
朝夕や鶴の餌まきが橋の霜　同（同）
何に身を寄すともなしや霜の鴈　同（同）
霜滿る夜たゞ樟の匂ひかな　曉臺（曉臺句集）
つや〳〵と柳に霜のふる夜哉　同（同）
霜冴て雀ひそかに鳴夜かな　同（同）
蕣の花つむしもの鼠かな　同（同）
霜にふして思ひ入事地三尺　同（同）
日じるしの枯木たふれて霜の月　同（同）
雨袖に泣子やかこふ閨のしも　同（同）
曉や鯨の吼るしものうみ　同（同）
夢人の浮橋かゝれ霜の閨　同（同）
霜に行草鞋のつまを焦しけり　同（同）

文字摺石

草よくも生たり霜のすり衣　同（同）

しる人はしるらし霜のぬれ頭巾　同（同）

霜にぬれてもみぢ葉かつぐ小雀哉　同（同）

霜満て竹静なる夜也けり　闌更（半化坊發句集）

山里や焚木の霜のもゆる音　同（同）

赤〳〵と霜氷りけり蕎麦の茎　同（同）

霜氷る岩の下道踏目かな　同（同）

橋の霜誰が落してや炭二ツ　同（同）

山吹の實や霜寒き枕もと　士朗（枇杷園句集）

これ見よと霜の田芹を[illegible]の窓　同（同）

旅人の捨た箸なり曉のしも　成美（成美家集）

亡[illegible]墓まうでして

塚の霜われも苔にはちかき身ぞ　同（同）

一人前茶も青みけりけさの霜　一茶（享和句帖）

[illegible]花寺

朝霜やしかも子供の御花賣　同（同）

霜どけやとらまる枝は茨也　同（享和句帖）

深川や霜げたやうな玄關番　同（七番日記）

霜おくや此夜はたして子を捨る　同（一茶句帖）

霜掃て鹽花まくや這入口　同（同）

起番の貧乏圖や夜の霜　同（九番日記）

知己のけふもへりけり門の霜　同（同）

小松菜の一文把や今朝の霜　同（嘉永版發句集）

小鳥井の小磯といはめ霜日和　乙二（松の〻え草稿）

正月がいつ來る事ぞ霜の齒朶　同（同）

行水のとゞまる霜のわら家哉　蒼虬（蒼虬翁發句集）

むつまじき煙こそたて霜の家　同（同）

へつたりと寐さゝれけり霜の家　同（同）

臂に網かけて過るや橋のしも　同（同）

霜拂ふ音は入江の小舟かな　同（同）

塚の霜とけるを見てもなみだかな　梅室（梅室家集）

よく見れば葭のふしにも今朝の霜　同（同）

さむしろの霜も世にふる宿りかな　同（同）

霜きえて松の葉けぶる旭哉　宗祇（大夢句帳）

霜に久菊さかりなるまがき哉　玄仍（同）

草の市馬に嗅れて消にけり　寸陰（皮こすり）

刈蕎麥のあとの霜ふむ雀哉　桐賀（炭俵）

霜の朝せんだんの實のこぼれけり　杜國（あらの）

置く霜や掘りあらしたる芋畑　荷浄（類題發句集）

法隆寺

もろこしの鐘も聞えぬ霜の夜半　蝶夢（五車反古）
まだ起ぬ家のあはれややねの霜　寶馬（句鑑）
ほつかりと日の當りけり霜の塔　子規（子規句集）
石蕗の葉の霜に尿する小僧かな　同（同）

凱旋

兜脱げ酒ふるまはん鬢の霜　同（同）
狼の小便したり草の霜　同（同）
霜の蟹や玉壺の酒の底濁り　同（同）
霜降るやほのかに赤き蕎麥の莖　墨水（新俳句）
板の間に置く提燈や霜の聲　柳下（同人）
霜の鐘忽ち遠くなりにけり　裸馬（同）
爐の中の灰くづれけり霜の鐘　伏兎（同）
今朝の霜桑の葉落つる風立ちぬ　琅玕（懸葵）
霜を踏む草鞋も藁の新しき　草城（同）
參籠や霜さびの松に日の當る　三幹竹（同）
棧橋に躍り出る旭やけさの霜　竿晴（ホトトギス）
うら〳〵と日いづる霜の林かな　蛇笏（同）
ぺちや〳〵と霜解ける音の甘たるき　月舟（同）
鳥啼く時舌赤く見ぬ棟の霜　泊雲（同）
霜解や舟の形の支那の靴　木母寺（同）
ひし〳〵と霜の草鞋穿きにけり　如水（同）
霜うけていたみし菊やさしにけり　大牙（同）
霜すでにおりし月夜の籬かな　不彩（同）
舷の霜あたらしき渡舟かな　聖城（同）
菊畠に再び霜の來たりけり　互籟（同）
焚付に折る枯菊や霜ながら　光波（同）
霜白き樒を剪るや開山忌　萩塘（同）
奉る霜燒菊も名殘かな　二九（同）
月高し今宵も霜の下りぬべし　汀舟（同）
菊畑に霜置きそめぬ籬にも　和香女（同）
弧まだ青きに霜の到りけり　迦南（同）
いちめんに霜のつぶやきそめにけり　豐水（同）
霜どけのはげしかりける百花園　春汀（續ホトトギス）
霜の畑いちごの紅葉いぢらしく　くに女（同）
霜降れば霜を楯とす法の城　虚子（句集虚子）
屋根薄く梁に霜置きぬらん　同（同）

一本の薬しべの霜濃かりけり　同　（同　）

しん／＼と日當りそめし霜の音　同　（ホトトギス）

參考　天氣の晴れた夜には地物は外界へ熱を放散して冷却するが、其のため附近の空氣も冷却し遂に其の温度が露點に達すると露を生ずる。併し此の時氣温が低く冷却した空氣が氷點下とならば、其の中の水蒸氣は露點に達すると共に水滴にならず、直ちに結晶して地物へ附着する。之れを霜と稱してゐる。斯樣にして生じた霜は顯微鏡で見ると無數の結晶が集つてゐる事が判る。

併し霜の一種として、一旦露となつて地物へ附着したものが更に氣温の降下につれて氷結したものもある。此の樣な霜は顯微鏡で見ると無數の小さな氷球が集合して居ることが判る。即ち霜の出來方には以上二種あることを知る。而して前者は氣温が氷點下十度より低いときに生じ、後者はそれより暖かいときに生ずる。

霜と類似したものに霧氷がある。寒地で霧があつた朝など木の枝などに霜の樣な氷の結晶が附着したものである。霧氷には通常三種のものがある。粗氷・樹霜及樹氷が之れである。

粗氷は氷點以下に冷されて居る水滴が冷たい樹枝などに凍りついたものである。樹霜は非常に寒い時に空氣中の水蒸氣が凝結して水滴とならず直ちに結晶して樹枝などに附着したものである。之れは即ち極めて低温なときの霜である。樹氷は過冷却即ち氷點下に冷されて居る水滴が氷結すると共に昇華作用即ち水蒸氣から直ちに結晶する現象も伴つて出來たものである。之れ等霧氷は寒地に生ずるものであるが所によつて其の名が多少は異つてゐる。信州で木花と稱するのは樹霜又は樹氷であつて長崎縣温泉岳の花ボロは樹氷か粗氷であらうと云はれてゐる。又滿洲や朝鮮で樹掛（しか）と云ふのは霧氷の事である。支那では之れを霧淞と稱してゐる。

霧氷は風と密接な關係があり、風の吹いて來る方向に發達する。冬季富士山頂などでは著しく美事な霧氷が風の方向に發達して美觀を呈するものである。

霜が始めて降りた日を初霜日と稱する。毎年の初霜日を觀測して之れを平均すると平均初霜日が得られる。平均初霜日を見ると樺太は九月中旬から下旬の間、朝鮮北部も九月下旬であるが其他は十月に入つてからである。即ち北海道は中部が九月末であるが他は十月初旬、朝鮮は南部が十一月初めで北へゆく程早くなる。本州では奥羽地方と日本アルプス地方が十月末であるが他は十一月に入つてからであつて、太平洋岸は十二月初旬になる。四國・九州に入つては何れも十一月中旬から十二月初旬にならねば霜は降らず、臺灣内陸の山岳地方では十二月下旬乃至一月初旬に降る。併し八丈島・小笠原島・沖繩島等の離れ島では霜を見ることがない。

以上は平均の初霜日であるから年によつて多少の遲速はあり、例へば東京

では平均十一月十一日に霜を見るが、明治四十二年には十月二十一日に降つたことがあり之れが東京に於ける最早初霜日の記錄となつてゐる。

露凝る（つゆこる）　露こほる（つゆこほる）

季題解說　秋の朝毎に白露でちりばめられた草や木の葉も、枯れ〳〵になつて、落葉ばかりが寂然と敷かれるやうになる。その頃も何ひそかに置いてゐる露を見ると、秋の頃のやうにきら〳〵と輝き誘ひ合ふては流れ落つる趣もなくなつて、玉の一つ一つは凝結したやうに固まつてゐる。身じろぎもせずに枯れたものの上にすがつてゐる。參照　秋　露（ロ）

初雪（はつゆき）

季題解說　その冬初めて降る雪である。冬枯のすべてが灰色に沈んでゐる頃、ちら〳〵と今年初めて見る雪片が舞つてゐたり、繰り開ける朝戸に思ひがけなく降り積つてゐたりする。遠い山や山脈の奥に覗いてゐる峯に來る初雪にも强い感じを受ける。初雪を見るのは地方によつて日を異にする。北國などでは紅葉狩や稻刈の最中に、既に遠嶺には初雪が輝いてゐよう。今中央氣象臺調による各地で初雪の降る平均月日、最も早期に降つた年月日を掲げて置かう。參照　雪（ユキ）　人事—初雪の見參（ハツユキノゲンザン）　春—雪の果（ユキノハテ）

地名	平均月日	最早年月日
東京	一二・二五	明治三三・一一・一七
長春（滿）	一〇・一六	昭和三・九・二四
安別（樺）	一〇・一七	大正一五・一〇・六
敷香（同）	一〇・一八	昭和三・九・二六
中江鎮（朝）	一〇・二一	大正一一・一〇・一〇
旭川（北）	一〇・二四	明治三一・一〇・二
紗那（千）	一〇・二九	大正一二・一〇・一一
札幌	一〇・三一	大正一三・一〇・一七
伊吹山	一一・一	大正一一・一〇・一一
函館	一一・五	大正元・一〇・二二
根室	一一・六	明治三二・一〇・一九
大連	一一・六	昭和二・一〇・一二
青森	一一・八	大正元・一〇・二二
秋田	一一・一二	明治三二・一〇・二一
高山	一一・一三	大正七・一〇・二五
盛岡	一一・一五	大正一三・一〇・二九
長野	一一・一八	昭和三・一〇・三一

京城	一一・一八	大正一〇・一一・三
福島	一一・二五	明治三七・一〇・二一
新潟	一一・二八	大正七・一一・一一
天津	一一・二九	昭和三・一一・七
温泉岳	一一・二九	昭和四・一一・一八
相川	一二・一	大正元・一一・二五
金澤	一二・三	明治四一・一一・一一
境	一二・九	大正一三・一一・九
京都	一二・一〇	明治三七・一一・六
廣島	一二・一〇	大正一〇・一一・八
名古屋	一二・一五	明治三七・一一・七
宇都宮	一二・一五	明治三七・一一・七
松山	一二・一九	明治三二・一一・一四
釜山	一二・二〇	大正一三・一一・九
熊本	一二・二一	大正一一・一一・二六
福岡	一二・二二	大正一一・一一・二六
大阪	一二・二三	明治三四・一二・四
下關	一二・二三	明治二四・一一・二五
高知	一・一	大正一三・一一・九
上海	一・二	大正一一・一一・二五
鹿兒島	一・四	明治二四・一二・四
潮岬	一・八	大正一一・一二・五
宮崎	一・二二	明治一八・一二・一九
八丈島	一・二三	明治三九・一二・二三
長津呂	二・一八	大正一三・一・二七

例句

初雪

はつ雪やかけかゝりたる橋の上　芭蕉（其便）
はつ雪や聖小僧の笈の色　同（勸進牒）
はつ雪やいつ大佛の柱立　同（笈日記）
初雪や水仙の葉の撓むまで　同（陸奥衛）
初雪や幸ひ庵に罷有る　同（續虛栗）
この雪か降ふ〱と師走まで　鬼貫（鬼貫句選）
我宿の雪のはしり穗見にこされ　同（同）
はつ雪や菅笠とつて櫻川　言水（俳諧五子稿）
初雪や四五里へだてゝ比良の嶽　去來（去來發句集）
初雪に人ものぼるか伏見舟　其角（五元集）
はつ雪や内に居さうな人は誰　同（同）

初雪

初雪にまくずがはらの姿かな　其角（五元集）
はつゆきや雀の扶持の小土器　同（同）
はつ雪や湯のみ所の大銅壺　同（同）
初雪や十に成る子の酒のかん　同（同）
初雪や門に橋ある夕間ぐれ　同（同）
初雪は盆にもるべきながめかな　同（同）
はつ雪や大り面出す杉の垣　同（五元集拾遺）
はつ雪に此小便は何やつぞ　同（同）
初雪や裾へとゞかぬ白丁花　嵐雪（玄峰集）
初雪や拂もあへずかたつぶり　許六（五老井發句集）
初雪や先馬屋からきへ初る　同（同）
初雪や松にはなくて菊の葉に　北枝（北枝發句集）
はつ雪や竹に雀のかざるほど　支考（蓮二吟集）
はつ雪やふところ子にも見する母　杉風（杉風句集）
はつ雪を持つちからなく落葉かな　同（同）
はつ雪や鑓の稽古に雉子眠る　沾徳（俳諧五子稿）
はつ雪や筆捨山の右ひだり　桃隣（古太白堂句選）
初ゆきや落葉拾へば穴があく　千代女（千代尼發句集）
はつ雪やほむる詞もきのふけふ　同（同）
初雪や鴉の色の狂ふほど　同（同）
はつ雪や見るうちに茶の花は花　同（同）
はつ雪は松の雫に殘りけり　同（同）
はつ雪や根の付さうな竹の間　同（同）
はつ雪は朝寐に雫見せにけり　同（同）
初雪や上京の人よかりけり　蕪村（新五子稿）
はつ雪や消ればぞ又草の露　同（續明烏）
はつ雪や町に居あはす桑門　太祇（太祇句選）
初ゆきや酒の意趣ある人の妹　同（同）
はつ雪や醫師に酒出す奥座敷　同（同）
初雪や旅へ遣たる從者が跡　同（同）
初雪に人寒からぬ御宴かな　召波（春泥發句集）
はつ雪や酒をまつ間の氷室守　也有（蘿葉集）
初雪やなじまぬうちは竹も寢ず　同（同）
初雪やしぐれの雲の古ふなる　同（同）
初雪や信濃へむける遠眼鏡　同（蘿の落葉）
初雪のしるしのさほや艸の蔓　几董（井華集）
はつゆきや青物市のよめがはき　同（同）
はつ雪や人のくれたるひの木笠　士朗（枇杷園句集）

急がねば初雪のふる旅路かな　巣兆（曾波可理）
初雪や關の清水の埋れむ　同（同）
はつ雪や石に敷たるさんだはら　同（同）
はつ雪や灰にかいたる梅のはな　成美（成美家集）
初雪や誰ぞ來よかしの素湯土瓶　一茶（享和句帖）
初雪のふは／＼かゝる小鬢哉　同（同）
はつ雪や其角が窓も見えて降る　同（旅日記）
初雪や古郷見ゆる壁の穴　同（同）
はつ雪やけぶり立るも世間向き　同（同）
初ゆきや椽から落し上草履　同（嘉永板發句集）
はつ雪や梅久が世にありし時　同（七番日記）
はつ雪のひッつき易い皺手哉　同（同）
むつかしや初雪見ゆるしなの山　同（同）
はつ雪やちりふの布の錢叺　同（同）
はつ雪やとある木蔭の神樂笛　同（同）
はつ雪や息を殺して相借家　同（七番日記）
はつ雪を敵のやうにそしる哉　同（同）
初雪やとの給ふやうな佛哉　同（同）
はつ雪を見よや奴が尻の先　同（同）
はつ雪やどなたが這入る野雪隱　同（同）
初物ぞうすつぺらでもおれが雪　同（同）
初雪といふ聲今年よわりけり　同（同）
はつ雪や松にかけたる手提灯　同（同）
はつ雪の降り捨てある家尻哉　同（おらが春）
はつ雪やおしかけ客の夜番小屋　同（一茶句帖）
初雪を着て戻りけり秘藏猫　同（同）
初雪や御駕へ運ぶ二八そば　同（同）
はつ雪や御きげんのよい御鳥　同（九番日記）
はつ雪やといふも家にあればこそ　同（同）
はつ雪を降らせておくや鉢の松　同（同）
初雪や右ぬる湯左あつ湯桁　同（同）
初雪や俵の上の小行燈　同（發句集）
はつ雪や今行く里の見えて降る　同（同）
はつ雪や萱降もつとおもはせて　乙二（をのゝえ草稿）
はつ雪のひるにもなるか粹の香　蒼虬（蒼虬翁發句集）
はつ雪や人の底意はいとけなき　梅室（梅室家集）
初雪や今年のびたる桐の木に　野水（あらの）
初雪や植木車の途中より　萬室（古今句鑑）

初雪　初雪や稲の古株一つつゝ　蒼狐（古今句鑑）

（有馬[illegible]）初雪やならぶ伊丹の瓦葺　朱袖（同）

初雪やきのふ遊びし東山　乾什（古今句鑑）

初雪の雑木につもる小山かな　把栗（春夏秋冬）

初雪のたちまち松につもりけり　草城（ホトトギス）

初雪や伸とめある金閣寺　泊月（同）

初雪の菊に先立ち來りけり　手寒（同）

初雪のさらりとかゝる鉢木かな　清風（續ホトトギス）

初雪の恵那のおもての囮かな　爽雨（同）

雪

六花　不香花　雪の花　銀花　雪空　雪もよひ　雪催　雪明り

雪の聲　雪煙　大雪　深雪　小雪　粉雪　小米雪　綿雪　牡丹雪

吹雪　はだれ雪　かたびら雪　しづり雪　もち雪　衾雪　明の雪

朝の雪　今朝の雪　晝の雪　暮の雪　宵の雪　夜の雪　雪の宿

古書校註

【御傘】雪、連に春の雪と入れても一座四句、物とす。誹には、せつと聲に云ひても以上五句すべし。（略）富士の雪は雜なり。消ゆるも初雪も、皆夏にするなり。（一）富士のねにふりつむ雪は六月の望の日きえて其の夜ふるなり、と侍る上は、今みる人の日に相違する共、上代の哥を用ひる、此の道の本意なり。（略）雪に、ふぶき・みぞれ、連には面をきらふ。誹には七句去る也。雪に霰は近代付けずと申せども、是れ非義なる故に、誹には付けて少しもくるしからず。雪の花、ふり物也。植物にあらず。六の花・不香花、かやうの雪の異名、皆五句の内なり。

【山之井】かんじきやそりにのるらんこしの旅人をおもひやり、ふすま雪をかぶり、かたびら雪をかづきありくおほぢのていをながめ、友をたづねし王子猷の其のむかし、簾をかゝげたる白居易のふるごと、庭のしろたへに、かひのしらねを思ひ、おまへにつもれるを、富士に作りなし、住吉の姫のなさけ、源氏のみやびなどをも思ひよせ、猶、雪ころばかし・雪うちに、手をふきあへぬ人の形勢、雪やこんこといひはやし、空にむしわくとみはやすわらはべの分野どもをも、つらねなす。

【黒甜子】はだれ雪、帷子雪、みな大ひら雪の事をいふと也。

【滑稽雑談】春秋元命包に云、陰陽凝って雪と爲る。雪は五穀の精たる也。（略）○八雲御抄に云、淡雪は冬のはじめつかた、春の雪也。但し（二）萬の八に十二月にあはゆき、ふるといへり。はだれ雪はうすき也。○藻鹽草に云、薄太禮と書く。まだらの義也。されども、まだら雪とは聞きなれず。

又はだれと計よみて、雪となき歌もあり。
【年浪草】はだれ雪、枝折萩に曰、斑雪と書く。所々ふりたる雪也。又殘雪の事にも聞ゆ。
かたびらゆき・たびら雪。夏衣にかけて薄き雪をかたびら雪と云ふにや。たびら雪はかたびら雪を略していふにや。
もち雪。見たてゝいふにや。發句に、雪は今朝庭の木にもち岩に花、といふ心なるにや。
富士の雪。御傘に萬葉を引きて雜とす。然れども一般ならず。初雪共に冬とするもあり。是は新古今集によれるにや。
【栞草】雪の聲。新選朗詠 若庭木落ちて紅跡無く、雪碓月晴れて（　）雪聲有り　藤原明衡。（略）○青藍云、月令博物筌に、靜に窓などへあたる音をいへり、云々　愚按ずるに、さては月晴れていへるに合はず。樹木或は竹などへ積りたる雪の、風のために落つる音をいふにや。
衾雪、氷の水を蔽ひたるを氷の衣といふに同じく、雪の物を厚く蔽ひ包みたるを、衾にたとへていふなるべし
はだれ雪。眞淵翁云、はだれはまだらといふに同じ。萬葉には雪　みならず霜にもはだれとよむ。
もち雪。青藍云、もち雪といへる詞、增山の井をはじめ、後に撰める諸抄、みなもちと假字をもて書けり。故に、名義明かならざるにより、月令博物筌に、雪の石又は木などへふりつもりたるをみたてたるなり、雪をもつといふ心なるべし、などいへる推量の說おこれり。もち雪といふは、粉雪・小米雪などいへるに同じく、餅にみたていふなり。
粉雪、雪は米をふるひたるに似たればいふなり。
小米雪。見てゝいふなり。
富士の雪、御傘には、（略）萬葉の歌を引きて雜とす。無言抄には、赤人の田子の浦の歌、新古今冬の部に入りたりとて冬とす。何體にもよるべし。但し、毛吹草 はなひ草 のたぐひ、すべて冬季に入れたるかた多ければ、これにしたがふべし。
【栞草】「雪空」雪の降る空をいふ。
雪氣・雪催ひ。雪げは雪を催ほす也。雪催ひ同じ。
【御傘】「吹雪」ふゞき、雪吹と書く也。（略）ふゞきとは、ふりふくと云ふ詞の略なり。雪ふり風ふくなり。
【俳諧初學抄】「同」ふゞきだほれ。此等北國に有る事也。
【年浪草】「同」枝折萩に曰、雨吹と書く。雨風也。○八重垣に曰、雪風。○[illegible]草に曰、雪、たけふゞき雪を吹く也で　しかれは、雪と風となり。雪風相交はるを雪吹といふと心得べし。
唐天寶の初、[illegible]天運に命じて勃律を伐たしむ。（略）城を屠り、三千人を虜にして還る。行くこと數百里、忽ち風四に起り、雪花翼の如く、四萬人一

時に凍死す、云々。（四）増山井に曰ふふゞきたふれ是れ也。雪國に有り。

【滑稽雜談】（五）〔しづり〕漢書五行志に曰、雨木氷る、名づけて木介となす。介は甲、甲は兵象也。（楊竹菴が説に云、俗に霧淞と云ふは、曾子固が云ふ鬚鬆なり。齊の地寒甚しく、霧氣木上に凝る。（略）〇八雲御抄に云、しづり、木雪落つる也。〇これらの所説、各ゝ同じ物なるべし。八雲御抄は少し違ひたるやうなれども、しづりは樹介又は鬚鬆の雪枯の類也。又枝雪零と書きてしづりとよめば、八雲御抄の説によく叶へり。〇五雜組に云、春秋に雨木氷と書く。蓋し陰霧樹上を凝封して、連日開かず、凍て氷と成る。人折りて之を取れば、枝葉皆具す。之を樹介と謂ふ。亦之を稼と謂ひ、俗に木稼と言ふ。

【栞草】しづり雪。木の葉などにつもりたる雪の、下とけておつるをいふといへり。

〔注〕〇なほ諸書共に雪の異名を多く載せてある。滑稽雜談の例を取れば、異名の項目として、六出花・頃刻花・不香花・銀花・円窓埋・瓊堆・鹽片等を擧げ、なほ不香花の條下に無影月、銀花の條下に、玉屑・玉英・玉塵・氷花・粉花・天花・楊花・玉雨・玉粉・六葉・六出・飛花・瑞葉・銀雨・雲英・雲花等の異名を擧げてある。（一）赤人の歌、「富士のねにふりおける雪はみなづきの望にけぬればその夜ふりけり」（萬葉集卷三雜歌）貞徳の引けるは舊訓であらう。貞徳はこの歌が禁歌にあるを準據とするのである。（二）萬葉集卷八、紀少鹿女郎の歌、「しはすには沫雪ふると知らぬかも梅の花さくふふめらずして」。（三）引いてゐる新撰朗詠集の詩句は、詩題が「仙宗秋色多」で、「雪有聲」の雪は仙樂の絳雪であるから、雪の聲の典據とはなり難い。（四）「雪吹。ふゞきたふれ、俳」とあるをいふ。（五）「しづり」は霧氷をも混同して考へてゐるらしい。霧氷參照。

季題解説　雪に關しての詩材はまことに豐富である。我國は南北に長いから、一年中雪を見ないといふ所から、一年のうち一二度ちらちらと降るところ、四五寸積ることが三四度あるといふところ、積雪十數尺に達するといふところまで廣範に亘るのである。そしてその場合々々によつて雪に對する感じ、感興も異るのである。所謂雪國と稱せられる地方では、一年のうち四五ケ月といふものは雪に交渉を持つてゐるのであつて、雪に影響せられるところ極めて多いのである。住居の構造も服裝も何もかも影響を受けるのであつて、よく觀察すれば人間の性質にまでも深く影響を及ぼしてゐる。いぶせき賤ケ家も一夜のうちに金殿玉樓となり、橇が走り、スキーが出來、ラッセル車が動き、吹雪がまき起り、雪倒れが出來、雪搔をせねばならず

饅くらて其後雪の降にけり　鬼貫（鬼貫句選）
酒買にあの子傘かせ雪のくれ　來山（いまみや艸）
是はとは朝戸〳〵に雪の聲　同（同）
客盡て歸るや雪の比丘尼船　同（續いま宮艸）
誰が文ぞゆかし茶の事雪の事　同（同）
白妙の橋に瘤あり雪の鷺　同（同）
餘のものにいたまぬ松を雪の膝　同（同）
見あくほど見ても初嶋雪の降　同（同）
盜人の錢おく雪のやどりかな　同（同）
茶碗竈煙や雪の坪のうち　同（同）
大雪や隣の起る聞あはせ　浪化（浪化上人發句集）
夜の雪晴て藪木の光かな　同（同）
有明と氣のつく雪の明さかな　同（同）
有し世の櫻木は雪を持通し　同（同）
入跡の光や雪の宵月夜　同（同）
西行も雪の降夜は菜飯哉　同（同）
六つ過の雪のくらみや本ゝの明　同（同）
狼の聲そろふなり雪のくれ　丈草（丈草發句集）
村雲の岩を出るや雪吹の根　同（同）
柴の戸や夜の間に我を雪の客　同（同）
山雲のあまりをやれば京の雪　同（同）
さかまくやふりつむ峰の雪の雲　同（同）
狐なく岡の晝間や雪曇り　同（同）
ふりかへて山から見たし雪の窓　同（同）
應〳〵といへどたゝくや雪の門　去來（去來發句集）
ひつかけて行や雪吹の豐嶋御蓙　同（同）
暖簾や雪吹わたす旅籠町　同（同）
旅人の外は通らず雪の朝　同（同）
綿の中に居て見る雪の山路かな　同（同）
せめよせて雪のつもるや小野の嶺　同（同）
雪うちややりてをかへす小忌衣　其角（五元集）
戸障子のおとは雪なり松の聲　同（同）
かはかうや竹田へ歸る雪の暮　同（同）
半衿の洲崎もありや雪の松　同（同）
松の雪蔦につらゝのさがりけり　同（同）
叡覽の人になりつゝけふの雪　同（同）
きぬ〳〵に犬を拂ふや袖の雪　同（同）
わらつとや雪の玉水十とよむ　同（同）

すてゝあるといふ小袖を、何の題にして

おもはめや捨てあるかは雪の宿　　同（同）

雪を汲て焦ぶ茶を煮けり太山寺　　同（同）

馬かたに貧しきはなし雪の宿　　同（同）

ねる恩に門の雪はく乞食かな　　同（同）

我雪とおもへば輕し笠のうへ　　同（同）

門の雪權ありやとはれけり　　同（同）

雪買ひに雪を沽ばや鶴の雪　　同（同）

雪の日や船頭どのゝ顔の色　　同（同）

黒染に御弔や雪うづら　　同（五元集拾遺）

我や騎牛に雪吹黒木茶屋　　同（同）

詩をあさる成らん雪の樽小舟　　同（同）

長橋や勢田にあひ見んふゞき松　　同（同）

鉦俺屋へ行く念佛なり夜のゆき　　同（同）

雪の日は蘗計り賣るくろ木かな　　同（同）

我出して雪うち拂ふ柄袋　　同（同）

雪おもしろ軒の掛茶にみそさゞゐ　　同（同）

門の雪因とたらひのすがたかな　　嵐雪（玄峰集）

竹の雪百歩の馬屋見すかせり　　同（同）

菓子盆やそもそめいろの雪ならば　　同（同）

藪有りと知たる雪の光かな　　同（同）

鍛冶の火も殊さらにこそ笠の雪　　同（同）

明星は乞食も見るか雪のうへ　　同（同）

雪はまうさず先ツ紫の筑波山　　同（同）

此雪にむかひにおこす人も人　　同（同）

あそびやれよ遊ぼぞ雪の徳者達　　惟然（惟然坊句集）

旅宿にて

時もわらん宿かさ雪のしづかさは　　同（同）

朱の盃や佐野のわたりの雪の駒　　北枝（北枝發句集）

何の其それにまう〳〵見出す雪の門　　同（同）

異雪かと見ればおそろし風の音　　同（同）

おら蒸のかけもらしてや前の雪　　同（同）

堅横に跡そせて見ほゞ雪の原　　支考（[illegible]二吟集）

馬の尾に雪の花散る山路かな　　同（同）

關の手に今ふる雪や渡し便り　　同（同）

降たら跡見ゆどや鶯見の池の雪　　同（同）

ふたつ子も草鞋を出すやけふの雪　　同（同）

降る雪に凄路は夢の心地也　　同（同）

竹ゝの音もひゞ竹に積る雪　　同（同）

傳ひ來る高根の雪や小松まで　支考　（二十吟集）
竹の子に裝着ぬ庭の雪景色　同　（同）
鷄の音の隣も遠し夜の雪　同　（同）
雪の冬菜男鍬ついて立りける　杉風　（杉風句集）
雪の日やとしのいそぎも忘けり　同　（同）
雪や散る笠の下なる頭巾まで　同　（同）
こゝろえず月に見付し雪の萩　同　（同）
たま〳〵に降たはみけりもみの雪　同　（同）
降かゝす小家は雪のすがたかな　同　（同）
ふる〳〵とおもふ寐覺に月と雪　同　（同）
鼻かんで名所な捨そ雪の暮　沾德　（俳諧五子稿）
昔いつ武士六七騎門の雪　同　（同）
二筋と今朝は父みん道の雪　同　（同）
幸の塀にもたるゝ竹の雪　同　（同）
足元も遠山も見よ雪の松　桃隣　（古太白堂句選）
繕はぬ窓や吹込今朝の雪　同　（同）
雪積て揚ぬ筏や神田川　同　（同）
聞き夜や雪の枯江に汐の音　同　（同）
市中や泥龜釣す雪の軒　同　（同）
雪の日や唯白更の麥畑　同　（同）
たゝかれて明るもつらし門の雪　同　（同）
聲なくば鷺うしなはむ今朝の雪　千代女　（千代尼發句集）
そつと來る物に氣づくや竹の雪　同　（同）
しなわねばならぬ浮世や竹の雪　同　（同）
吹事をわすれて見るや竹の雪　同　（同）
青き葉の目にたつ比や竹のゆき　同　（同）
花となり雫となるやけさの雪　同　（同）
雪の有ものにきかすな松の聲　同　（同）
つめたさは目の外とにあり今朝の雪　同　（同）
取あへず塵に敷けりけさの雪　同　（同）

五百川御宗東御門跡へ上る

葉も塵もひとつ臺や雪の花　同　（同）
池の雪鴨やあそべと明て有　同　（同）
拂はぬはをのが羽とや雪の鷺　同　（同）
雪白し加茂の氏人馬でうて　蕪村　（蕪村句集）
雪の暮鴫はもどつて居るやうな　同　（同）
愚に耐よと窓を暗す雪の竹　同　（同）
焚火して鬼こもるらし夜の雪　同　（新五子稿）

いさり火の燒のこしけむ巖の雪　同（同）
烈々と雪に秋葉の焚火かな　同（同）
山里や雪にかしこき臼の音　同（同）
念比な飛脚行深雪かな　同（同）
雨の時貧しき蓑の雪に富り　同（同）
雪消ていよ〳〵高し雪の亭　同（四季文集）
つなぎ馬雪一双のあぶみ哉　同（落村遺稿）
住吉の雪にぬかづく遊女哉　同（同）
雪國や粮たのもしき小家がち　同（同）
嵐雪にふとんきせたり雪の宿　同（同）
樂書の壁をあはれむ今朝の雪　同（同）
邯鄲の市に鰒見る雪の朝　同（同）
木屋町の旅人とはん雪の朝　同（同）
古道と聞ばゆかしき雪の下　同（同）
雪の旦母家のけぶりめでたさよ　同（同）
遙拜や我もふしみの竹の雪　同（小摺物）
鍋提て淀の小橋を雪の人　同（若艸集）
雪を踏て熊野詣のめのと哉　同（青萄）
風呂入に谷へ下るや雪の笠　同（全集）
祈成をいなすや雪のかくれ簑　同（高）
雪拂ふ八幡殿の内參　同（落日庵句集）
宿かせと刀投出す吹雪哉　同（夏よ）
宿かさぬ火影や雪の家つゞき　同（同）
大雪と成けり關のとざし時　同（新選）
うつくしき日和になりぬ雪のうへ　太祇（太祇句選）
降覺ぬ雪におかしや後と笠　同（同）
見返るやいまは互に雪の人　同（同）
千人の日用そろふや雪關す　同（同）
里へ出る鹿の背高し雪明り　同（同）
小在雪に埋てかくしけり　同（同）
雪をつむ障子の帯の香通ス　同（同）
まそれはき家よともいわ[illegible]主哉　同（[illegible]）
わとつ雪たがひに杖ではらひけり　同（同）
竹を持て出けり雪の中　同（同）
長橋の行先かくす雪吹かな　同（同）
宿とりて山路の雪を眺けり　同（同）
空階の竹も突も雪吹かな　同（同）
旅人の鐵砲さつぐ雪の中　同（同）

雪

雪の朝童子茶臼を敲く也　召波（春泥發句集）
夜着を着て障子明たりけさの雪　同（同）
雪の日や隣家の童子欠木履　同（同）
都邊や坂に足駄の雪月夜　同（同）
山買ふて我雪多きあるじ哉　同（同）
物焚て夜すがら雪の乞食哉　同（同）
ぬけがけの手綱ひかゆる雪吹哉　同（同）
客去て寺しづか也夜の雪　同（同）
何を釣沖の小舟ぞ笠の雪　同（同）
羽織着て門の雪掃く女房哉　同（同）
袖を出る香爐も雪の衞哉　同（同）
よきほどを越えて雪ふる夕かな　樗良（樗良發句集）
雪ふかし野寺の鐘の聲のみに　同（同）
枯杉の赤葉ざまくに雪うすし　同（同）
立山や雪に分入鷹の影　同（同）
白妙や雪もろともにふじの雲　同（同）
心細し雪やは我を降うづむ　同（同）
なた寺や池の毘沙門松のゆき　同（同）
角立て居風呂のぞく雪の鹿　同（同）
あし跡をかぞへて雪のわかれかな　也有（羅葉集）
もふ起ふ〳〵とて雪の朝　同（同）
雪の夜や窓たてる音あける音　同（同）
上はぬりの晴にあたらし富士の雪　同（同）
雪に傘梅尋ねにか酒屋へか　同（同）
匂ふのはたもとに降りて富士の雪　同（同）
雪のくれ烏帽子にかへむ笠もなく　同（同）
もし鷺の居るかも知らず雪の中　同（同）
敲いたる手を先あぶれ雪の門　同（同）
雪の夜や鐘つく人もあればある　同（同）
松までは紙燭とゞかず夜の雪　同（同）
雪の日や白ふよごれる手習子　同（同）
孟宗が目は屆かずや雪の梅　同（同）
富士に雪見る日や笠は重からず　同（同）
雪の橋雪から雪へかけにけり　同（同）
鐘つきのおこしてゆくや雪の竹　同（同）
隣から起て戻るや雪の竹　同（同）
起て掃より朝寝せよ雪の門　同（同）
うちとけよ雪の咄も雨の庵　同（同）

やね葺にとへばけさから山の雪　同（同）
寐た竹にねたがる雪の雀かな　同（同）
花に似ていやとやこぼす松の雪　同（同）
雪の暮どこの巨燵に待人ぞ　同（同）
さりながらころばぬ鶯か雪に枝　同（同）
水のうへに積るや雪の鷺一羽　同（同）
雪のふる迄は墨繪の野山かな　同（同）
柏手やこだまこぼるゝ松の雪　同（同）
孫康が窓に釣てや雪の下　同（同）
雪の朝や町に鐘樓の峯ひとつ　同（同）
小丁稚や使にいさむ雪の朝　同（葉の落葉）
浮世かな掃けど驕來る町の雪　同（同）
はづかしき飯くふ雪のあした哉　蓼太（蓼太句集）
蓑脱てひとり湧けり雪の友　同（同）
遙かなる火にあたりけり夜の雪　同（同）
白雪の中に灯ともす野守かな　同（同）
雪折の起つ棹さす小舟かな　同（同）
暮て行く雪のかつらやひとつ松　同（同）
降くらす雪の相手や水くるま　同（同）
ともしびを見れば風あり夜の雪　同（同）
幸のこぼるゝ雪や草の戸に　几董（井華集）
商人のよき藏いやしけさの雪　同（同）
たゝずめば猶降ゆきの夜道哉　同（同）
富士に添て富士見ぬ空ぞ雪の原　同（同）
鮮き魚拾ひけり雪の中　同（同）
鳥羽殿へ御哥使や夜半の雪　同（同）
池水にかさなりかゝる深雪哉　同（同）
隣の戸も右も左もみゆきかな　同（同）
いたく降と妻に語るや夜半の雪　同（同）
隱栖、妻子を養つて老の後を樂しまるゝを、竹によ [illegible]
杖と成たかうな得しや雪の中　同（同）
足跡の梅花なつかし雪の朝　同（同）
旅人に我糧わかつ深雪哉　同（同）
樵の角をかくすや今朝の雪　同（同）
しなのおぢや小田は粉雪に蕎麥畑　同（同）
川ぞひや背ぐゝまり行雪の人　白雄（白雄句集）
見もしらぬ人にものいふ門の雪　同（同）
おもしろや旅に傘して雪の宿　同（同）

雪

降晴て雪氷るかに光さす　白雄（白雄句集）
引すてし車の数よ夜の雪　同（同）
園の雪門の雪とて見はやしぬ　同（同）
雪の人桑たち丈にすゝみゆく　同（同）
雪の野に雪をさゝけし荊棘哉　同（同）
灯ともさん一日に深き雪の菴　同（同）
吹こしの雪音たてゝ降夜かな　同（同）
橋の雪舟遣り過し顧る　同（同）
潮ぐもりみそれの色を濁の雪　同（同）
かいきへてまたあらはれつ雪の鹿　同（同）
飛たつは夕山鳥かゆきおろし　同（同）
雪の薜篠三葉四葉のうごき哉　同（同）
雪中に梅あり我にしのぶ草　曉臺（曉臺句集）
雪深く人は世渡る桥をたえて　同（同）
蓑の裾に小魚付たり市の雪　同（同）
雪はふる流るゝは漁父か火影かも　同（同）
月もれて雪のふる迄も見ゆる哉　同（同）
積雪や紅粉吹かけし小傾城　同（同）
鉢の僧歸り來よ雪に物問む　同（同）
不破の雪さながら書の色ならず　同（同）
降行や又みえそむる雪のひと　同（同）
日くれむとして又雪の降初る　同（同）
猪突の控に立る深ゆきかな　同（同）
雪はやみて猶ふる雪のあらし哉　同（同）
鳥の殺叫徊やよるのゆき　同（同）
鴈は悲し罟するは哀れ雪の人　同（同）
青雲や大虛に雪の降のこり　同（同）
ゆき空やおのれさかしき卵子うり　同（同）
雪もてる雲の尻兀ちからなし　同（同）
薄雪や草の節さへをれかゞみ　同（同）
白妙は遠山而已ぞ小雪ちる　闌更（半化坊發句集）
薄雪やまたかたちよき峯の松　同（同）
所〳〵雪の中より夕けぶり　同（同）
おなじ色を重〳〵と雪の山　同（同）
更行や雪に羽叩く鳥の音　同（同）
田のうへを啼迷ひけり雪の雁　同（同）
住はすむ事ぞ谷間に雪の里　同（同）
沈ムほど積らぬもの歟雪の舟　同（同）

猪の倒ふしけり雪のはら　同（同）
角振てあゆみもやらず雪の鹿　同（同）
雪ちら〳〵日に降暮て月に降　同（同）
此ために根はしがらむか雪の竹　同（同）
北山は小雪散らん軒端吹　同（同）
夕暮や雪を抓て枝の鳥　同（同）
北の雲黒きより雪の降初る　同（同）
見るうちに降うしなふや雪の梅　同（同）
曙や所〳〵に雪の塔　同（同）
舞扇雪にかざすや下川原　同（同）
日比見し松も深雪の高根哉　同（同）
踏分て何見る人ぞ雪の山　同（同）
閑さや垣の外なる雪の舟　同（同）
驚てたつ日も遅し雪の山　同（同）
降ふるや雪をたぐりて渡し守　同（同）
青天に雪の遠山見えにけり　士朗（枇杷園句集）
曙やあらしは雪に埋れて　同（同）
さはつても雪は降なり奥山家　同（同）
小雪せよ笠着て舞ん神の前　巣兆（曾波可理）
雪明りあかるき間は父寒し　同（同）
しばらくは雪にかくれん市の門　成美（成美家集）
から家とおもへば煙る雪のくれ　同（同）
あさのゆきおなじ文こす友ふたり　同（同）
のけぞりて雪の上なる雪の山　同（同）
魚くふて口なまぐさし晝のゆき　同（同）
さゝやくもたま〳〵見えて雪の人　同（同）
雪になほけしきもてとや鐘がなる　同（同）
ゆきの日は腹たつ人も來ざりけり　同（同）
大雪や我を山家に庭の松　同（同）
雪の日や古郷人のぶあしらひ　一茶（[illegible]日記）
寢ならぶやしなのゝ山も夜の雪　同（同）
ふるは雪隣りも同じ手鍋也　同（同）
それがしも雪を待夜や欠土鍋　同（同）
只居れば居るとて雪の降にけり　同（同）
心からしなのゝ雪に降られけり　同（同）
降雪もはりあひなれや葉竹賣　同（同）
大雪や印の竿を鳴く鳥　同（七番日記）
大雪の山をづか〳〵一人哉　同（同）

雪ちるや七十貝の夜そば賣　一茶　（七番日記）
雪ちるやきのふは見えぬ明家札　同　（同）
汚れ雪それも消るがいやぢやげな　同　（同）
ても花の都ではや汚れ雪　同　（同）
人の親のまだ夜なべなり夜の雪　同　（同）
是がまあつひの栖か雪五尺　同　（同）
うまさうな雪がふうはりふはり哉　同　（同）
兩隣おのが雪とてさわぐ哉　同　（同）
山に雪降る迚耳の鳴にけり　同　（同）
御用の雪御傘と申せおさむらひ　同　（同）
一吹雪尻つんむけて通りけり　同　（同）
我門や此界隈の雪捨場　同　（同）
むさし野や雪につくばふ御士　同　（同）
とくとけよ貧乏雪とそしらるゝ　同　（同）
ちよんぼりと雪の明りや後架道　同　（同）
門の雪汚れぬ先にとくきえよ　同　（同）
杖かりし夜はおとゝしよ門の雪　同　（享和句帖）
雪ちるやおどけもいへぬしなの山　同　（おらが春）
雪するや脇から見たら榮耀駕　同　（一茶終焉記）
外は雪内は煤ぶる栖かな　同　（一茶句帖）
裄なりに吹込雪や枕もと　同　（同）
菱形に雪が降入る疊かな　同　（同）
風の子が摑みなくすや窓の雪　同　（同）
里の子や雪待かねし棒角力　同　（同）
雪の日やこきつかはるゝおしなどの　同　（同）
雪蕪や投込んで行とゞけ狀　同　（九番日記）
旅人や人に見らるゝ笠の雪　同　（同）
ちとたらぬ僕や隣の雪もはく　同　（同）
山里や風呂にうめたる門の雪　同　（同）
來る人が道つける也門の雪　同　（同）
佛にもならでとけゝり門の雪　同　（同）
雪ちらり/\見事な月夜哉　同　（同）
野ら雪や蕪にくるんで捨ル菴　同　（一茶新集）
ほちや/\と雪にくるまる在所哉　同　（發句集）
犬どもがよけてくれけり雪の道　同　（同）
雪に撫ろ翁もひとり蓑と笠　乙二　（をのゝえ草稿）
降雪を仕事にはくやかゝりぶね　同　（同）
琵琶形に雪の降けり家の跡　同　（同）

山鳥のおのがすそ野も雪ふりぬ　同（同）
晦日の又も過けり雪どころ　同（同）
鳴けば名の聞きたくなるや雪の鳥　同（同）
けさ迄はしらぬ芦あり庵の雪　蒼虬（蒼虬翁發句集）
につと日の出る山間やけさの雪　同（同）
鳥の道ばかり有る也雪の山　同（同）
負出せば負出す雪の降かな　同（同）
芦に舟雪に見るもの揃ひけり　同（同）
何となく明るさかひや雪のうへ　同（同）
やゝありて一枝ちりぬけさの雪　同（同）
ゆき近し水田にうつる松の影　同（同）
松明買ふて出にくうなりぬ雪の家　同（同）
雪の眼を休むる麥の堅田かな　同（同）
よき流れ持て暮るゝや雪の里　同（同）
大雪と成けりけさは鶴のこゑ　同（同）
木つゝきの一雪かぶる木の間哉　同（同）
雪花やまづ行先は淺草寺　同（同）
吹て來て袖に付けり竹の雪　同（同）
降たらぬ雪を明石の姿かな　同（同）
かく降れば雪ものどけし庭の松　同（同）
垣根かと見るとき雪の日くれ哉　同（同）
大雪の降とは見えず浦のさま　同（同）
雪ちるや何處で年とる小田の鶴　同（同）
見る日より雪の願ひや與謝の海　同（同）
松の雪猶豫し過てかぶりけり　梅室（梅室家集）
埋まれたふりしてゐるや雪の鴨　同（同）
朧すて〻見れば恐ろし雪の蓑　同（同）
宵に來た人もめづらし雪の朝　同（同）
雪ちらし〳〵寢に入森の鷺　同（同）
ゆき持て水にひたりぬ沼の家　同（同）
跡先に人なし雪に撓む松　同（同）
海苔柴や遠淺かけて雪の花　同（同）
雪ふるや行灯むける戻り馬　同（同）
松の雪物たしなみのよいあるじ　同（同）
明る戸にのさばりこむや雪の竹　同（同）
袖のゆき見せて侘人起しけり　同（同）
ゆきの竹撓むもしらぬ宿鳥かな　同（同）
白絲の雪より出たり後夜の月　普成（[illegible]）

風そふて木の雪落る夜半の音　（同）
遼東の雪に馴れたる軍馬かな　（同）
大雪や石垣長き淀の城　（同）
ちら／＼と雪降る庭の篝火哉　梅雲　（新俳句）
雪の中湖眞黑に暮れて行く　牛伴　（同）
戸をあけて驚く雪のあした哉　漱石　（同）
背戸に來て千菜食みけり雪の鹿　露月　（同）
南天の雪水仙に落ちんとす　虛吼　（同）
あまたゝび鷄追ひ下す雪の緣　左衞門　（同）
雪の朝大きな鷄とんで行く　紅緑　（同）
風呂敷に顏包み行く吹雪哉　愛松　（同）
願くは吹雪の山を越えんかな　梅屋　（同）
何處とも知らず鳥鳴く雪の原　裸馬　（同人）
雪かいて鷄のわなをかけにけり　青風　（同）
背を向けて吹雪に步み止めにけり　隆路　（同）
新十駄二駄まだつかぬ吹雪かな　句佛　（懸葵）
雪の空枯芒より暮れにけり　地頭方　（同）
日の當る山門高し雪の朝　自天　（同）
大屋根の雪あびて居る小家かな　しげ草　（同）
藤棚のずりこけてあり雪の池　夜濤　（同）
此五尺幾人雪に救ひけむ　雉子郎　（ホトトギス）
家根の雪雀が食うて居りにけり　鬼城　（同）
雪國の犬を恐れぬ女かな　霄月　（同）
大雪に浪はなれども鷗かな　衣沙櫻　（同）
月出でて雪山遠きすがたかな　蛇笏　（同）
干網に目ざせば狂ふ粉雪かな　泊雲　（同）
犬があけし戸をしめに出る雪夜かな　越水　（同）
凍雪に桑々々雪來りけり　としを　（同）
雪空のほのかに續けて暮れにけり　都穗　（同）
提灯の中に吹き込む粉雪かな　十七星　（同）
牡丹雪たはたび落つる軒端かな　まき女　（同）
大雪の北見のはての家並かな　青眼子　（同）
提灯を置く／＼深雪の扉かな　北湖　（同）
雪中に榛の小枝の現れし　あふひ　（同）
浪花津やあとかたもなき今朝の雪　左遷　（同）
明るむと手術は進む深雪かな　みづほ　（同）
火の山も眞白になりぬ昨日の雪　微雪子　（同）
一坊へ道埋れたる深雪かな　青耕　（同）

濱の雪波紫によせにけり　鹿車（ホトトギス）

[illegible]
雪深し先達すこし待ち給へ　微笑子（同）

雪の原妙にも月のうこんかな　句入道（同）

松の雪落す指圖や老の杖　雄月（同）

大雪のどうなることか彌陀まかせ　土筆園（同）

古里の眞夜の雪路をたどりをり　ひとし（同）

堤ゆく人も眺めや雪見舟　佛維摩（同）

青紅の聖なる硝子雪の堂　蓍子（同）

向ふ家も雪見の障子開きたり　有杜史（同）

月の面へ列ね上りけり雪の竹　雨聲（同）

土間に人々雪まみれなる湊かな　猪城（同）

雪風呂といふもてなしに預りぬ　一徑（同）

橋立や深雪の上の散松葉　橋華（同）

八瀬に來て雪のありたる京都かな　青雞（同）

いつの間に降り代りゐる牡丹雪　青坡（同）

棺桶に合羽掛けたる吹雪かな　鬼城（同）

泊船や吹雪の中の信濃川　鐵鈴（同）

鎌倉と話す電話や吹雪きをり　たけし（同）

初雪の吹雪となりし山家かな　虛吼（同）

三寒の學の窓の吹雪かな　淸子（同）

父の梶たちまち見えぬ吹雪かな　九年母（同）

しん／＼と雪降る空に鳶の笛　茅舍（續ホトトギス）

降る雪や明治は遠くなりにけり　草田男（同）

傘さして薄紫の夜の雪　秀好（同）

まのあたりあららぎの雪落ちにけり　咲青（同）

ふる雪に隣ほしりぞきはじむなり　左右（同）

內陣のきらびやかなる深雪かな　句一步（同）

提灯の燃えし匂や雪の道　あさみ（同）

夜の雪雨戶をくぐりゐたりけり　旭川（同）

積む雪にきたなくはねし雪雫　風生（同）

雪嶺をかへり見立てり渡舟中　同（同）

上の橋下の橋あり雪の町　青邨（同）

ふゞきつつ靜に晴くなりにけり　鴻乙（同）

吹雪ゐし亞庭の海に日射したり　北鳴（同）

白樺の皮飛んで來し吹雪かな　無外（同）

夜晴れて朝又降る深雪かな　虛子（句集虛子）

身一つを先づもたらしぬ雪の國　同（同）

【參考】空氣が次第に冷却すると其の中に含まれてゐる水蒸氣は遂に凝結して水滴となり雲を生ずるが、此の時外界の温度が氷點以下であると水蒸氣は直ぐ結晶して氷晶となる。斯樣な氷の結晶が澤山集合したものを雪雲と呼ぶ。氷晶は通常六角の板狀或は柱狀をして居るが、此の雲の温度が氷點近くなると氷晶の表面は融解して互に融合密着し美しい雪華になる。それ故降雪を顯微鏡で見ると六角柱或は六角板が澤山集合して美しい形を成してゐる事が判る。

雪の結晶形は極めて多種多樣であつて古來此の形を模寫して研究した人々も頗る多い。我國でも文政年間古河城主土井大炊頭利位が洋人マルチネット氏の格致問答によつて雪華圖譜を刊行し其の中に自ら檢出した數種の雪華圖を載せてある。

東洋では雪を昔から六花と稱し、韓詩外傳にも「凡草木花多五出雪花獨六出」など記されて居るが雪が六花と稱せられる如く六方へ枝を出して居るのは氷の結晶が六方晶系であつて元來六角形として居る上に其の主軸の方へ他の氷晶が附着して來るからである。更に雪華が澤山集つたものは雪片と稱して居る。氷晶は結晶體であるから低温度では全く固體として乾燥したものである。故に極めて寒い時或は寒い頃に降る雪は氷晶自身が降り目に見えぬ程の小粒がキラ〳〵と降るのみである。

然るに温度が高まり氷點近くなると氷晶同志が融合して雪華となつて降る。更に温度が昇り氷點附近になると雪華同志が融合し合つて大きな塊となつて降る。之れが雪片である。故に氣温が高い時に降る雪程雪片は大きく、低温度で降る雪程小さい。又大きな雪片は雪が融けかゝつてゐる故濕り氣が多く、低温度の時の雪はサラ〳〵と乾いて居る。初雪の頃或は春先に降る雪は氣温が高い故雪片も大きく且融け易い。之れに反して嚴寒の頃に降る雪はサラ〳〵として居て善く乾いて居り融け難いから善く積るのである。

雪達磨・雪兎・雪釣りなどをして遊ぶには暖かい時に降る雪が善いがスキーなどには乾いた粉雪が適してゐる。白居易の詩に「雪似鵝毛飛散亂」の一句があるが此の雪は雪片となつたものである。雪片には可なり大きなものがあり、千八百八十七年一月二十八日米國フォート・ケオに降つた雪には長さ三十八糎、幅三十糎もあつたと云ひ、我國でも明治四十一年一月七日午前十時頃横濱に降つた雪は長徑二寸短徑一寸位のがあつたと云ふ。

雪片が空中を落ちて來る所を見ると平らな面を水平にして常に最も抵抗を多く受ける様な状態をなして來る。之れは紙片を落して見ても同じ事で物理學上普通の現象に外ならない。又雪片も曲りくねつて居る事はなく不規則な形をして居るが空氣の抵抗を受ける事が各部分一樣でなく、從つて雪片は落下に際して廻轉しながら落ちて來る。故に雪片の落下經路は螺旋狀をなすものである。雪片が卍狀をなして降るのは此のためである。

雪の降る速さ即雪片の落下速度は大さ、重さ及形によつて異る故一概に論ずることは出來ないが[illegible]米九位のものである。次に雪の色は大抵白いものと決つて居るが個々の結晶を一つ〳〵採つて調べて見ると無色透明である。然るに雪華或は雪片となると多數の氷晶が集合して無數の面をなし、且其の間には空氣が存在して居るため、之れに入射した光線は四方へ散亂して白く見えるのである。從つて雪の本來の色が白いのではない。

雪の中に種々な不純物が混ずると色々な色彩を呈する事がある。即ち黑色の雪、或は紅い雪などが降つたと云ふ例も尠くない。我國でも滿洲方面から黄沙が風に乘つて來ると、雪中に之れが混じ紅或は代赭色を帶びることがあるし、火山の噴火の際の火山灰を混じても代赭色を呈する。又煙突から吐き出された煤煙などを混ずると、黑色を呈することがある。又時によると附近の小山から飛ばされた土砂が混じて、黄色を呈した雪が降ることもある。

初雪は其の年で初めて降つた雪を云ふ。此の頃は氣温が未だ低くない故雪片も濕り氣の多い大片のものである。初雪の降つた日の早晩によつて其の年の寒暖を決める人もあるが之は一概に夫れと斷定出來ない。如何に其の年が寒くとも降水が無ければ雪が降らぬからである。毎年初雪の降つた日を記錄して置いて其の平均値をとると其の土地の平均初雪日と云ふものが定められる。

平均初雪日を調べて見ると樺太では十月下旬、北海道は十一月上旬、奥羽地方が十一月上旬から中旬、關東北部が十二月中旬、東京は十二月下旬で東海道沿岸凡て此の頃である。更に南九州では一月初旬にならねば初雪はなく八丈島では二月中旬に初雪があるが小笠原島は全く雪を見ることとなく、沖繩・臺灣でも平地に雪を見ることは無い。更に朝鮮では北部に於て十一月初旬、南部に於て下旬に雪を見る、更に北方滿洲に於ては十一月初めに初雪が降る。

斯様に初雪は其の土地の緯度・地勢等によつて期日が異るが又標高によつても大に異り山岳地方にては一體に初雪が早い。特に高山の山頂附近では著しく早く雪を見る。只高山の初雪は降雪中は雲に蔽はれて居て山頂が見えぬ故、雲霽れて後始めて雪を見る有様で、數日間山頂が雲に蔽はれ居た後雲が霽れて始めて初雪のあつた事を知つた場合には夫れが何日降つたのであるか判定出來ない。

今富士山の初雪を長年月に亘り觀測した結果によると甲府から見たのと沼津から見たのと多少の差はあるが前者では九月二十二日となり後者では九月二十八日となる。即ち甲府から見た方は平均にして六日早い結果となつて居る。之れは甲府側が日陰となつて居るためと考へられる。

雪が降るときには一種の音を立てゝカサ〳〵と降るが氣温が高くて雪片が大きいときには音が聞えない場合が多い。故に此の音は雪華が觸れ合つて

發する音と考へられる。俳諧で云ふ雪の聲は之れとは大に異り樹枝などに積つた雪が落ちる時の音を云ふ様である。又積雪面を靴などで歩むとキユツキユツと音を發するが之れは寒い土地或は寒い地方に降つた雪に限られる。即ち乾いてサラ〳〵した雪でないと斯様な音は發しない。又雪の降る時には遠雷の様な音を聞く事がある。之れは「雪起」或は「雪下」（ユキオロシ）と稱する。遠くの山地などに降雪ある場合に聞く音で恐らく遠雷の響と思はれる。

雪が地上に積んだものを積雪と云ひ、これが永い間融けずに残つて居るものを臥雪或は根雪と云ふ。臥雪は氣温も地面の温度も氷點下の處でなければ見られない。積雪面は水平なる可き筈であるが多くは波狀をなして起伏が多い。之れは土地に凹凸がある爲めにもよるが風によつて生ずる場合もある。高山の上では積雪が夏になつても融けずに残つてゐる事がある。之れを萬年雪と稱する。更に高い山では之れが氷河に變つて残される。

積雪面に強い風が吹くと積つてゐる雪を吹飛ばし空中に亂散せしめる。此の現象を吹雪と稱する。故に吹雪は寒い土地或は寒い處の乾いたサラ〳〵とした粉雪の積んだ時でなければ起らない。古書には之れを雪吹（フブキ）と書いてある。一般に降雪が強風を伴ふものを「フブキ」と云ふ様であるがそれは誤りであつて、此の方は風雪と稱して居る。故に吹雪は寒い時に限つて起るが風雪は氣温に關係なく風さへあれば起るものである。

吹雪が起ると積雪面には起伏の著しい波形を生ずる。之れを雪浪と名付けてある。雪浪は古い根雪が固まつてゐる上に更に新らしく粉雪が降り積んだ時などに起り易いものである。

積雪面に強い風が吹き付けると雪面所々に枕の様な圓筒形の圓塊が出來、風に押されてコロ〳〵と轉がり廻る。之れは恰も道普請に用ふる石轆（ローラー）の様な形をなして居るので雪轆（ユキマクリ）と稱する。秋田縣大曲附近には此の現象多く方言之れをユキマクリと名付けて居る

屋根或は塀などに降り積んだ雪が奇妙な形をする事がある。塀或は木の枝に細長く積つた雪が霽れた後日光に照され、塀や樹枝と接してゐる部分が融けると滑り出し、紐の様に垂れ下ることがある。之れを雪紐と名付けて居る。氣温が氷點に近く濕つた粘着性の強い雪が降ると其のあと天氣になつたとき雪紐を見る事が少くない。

雪が門柱や杭の上などに降つて其の上に積ると、それが次第に大きくなり遂には帽子の様な形になることがある。之れを雪冠と稱してゐる。此の現象も氷點に近く比較的暖かい時に限つて見られるもので濕つて粘着性のある雪でなければ見られない。

山腹に積つた雪が重量に達し多量に滑り落ちる現象を雪崩と呼んで居る。雪崩は其の原因から分けて風雪崩、底雪崩、表雪崩の三種に分けてある。風雪崩は積雪が風によつて動かされ山腹を滑り落ちるものであつて、古い

臥雪の上に新らしい柔雪が多量に降り積みたれが大風に遭つた場合などに起る。底雪崩は冬季山腹に降り積んだ雪が春の暖氣に遭ふて土地との接觸面から解け、山腹を滑り落ちるものである。之れは春先に多い現象で本邦でも日本海岸には春季に屢々起る。

氷雪崩は氷河の一部が崩解して山腹を滑り落ちるものであつて時としては其の上に積つた萬年雪を併せて滑り落ちる。之等雪崩は何れも多大の被害を與へる事が有り恐る可きものである。雪崩にはナダレ或はアハと稱する。又處によつては「をほて」「わや」「はわたり」などの名稱を用ふる。

雪崩は山腹から雪が滑り落ちるものであるが、雪が融解して水となつたものが一時に山麓へ流れ出すものがある。之れを雪汁と稱する。我國でも山地には極めて多く見らるゝもので、富士山の雪汁は毎年五月頃に落ち、「富士の白雪朝日に溶けて」の俚謡にも知らるゝ如く極めて有名なものである。

雪女郎　雪女　雪鬼　雪坊主　雪の精

古書校註

【増山井】雪女とは、山中の雪の中にある化相の物也。

【年浪草】深山雪中、稀に女の貌を現はす、之を雪女と謂ふ。雪の精と謂ふべし。

季題解説

雪深い山國ではかういふ妖怪味たつぷりの俗説があり得るのである。信州立山の奥、みちのく、えぞの國などではよくこれに關した說話が傳へられて居る。若い美しい男が杣小屋で雪女郎に殺されたといふ話、又或る男は雪女と一所に一冬暮したといふ話。毎日しんしんと降る雪の中に生活してゐるものに取つてはかういふことは可なりの眞實性をもつてゐるのだ。或る杣人は吹雪に襲はれて呼吸がつけなくなつて死んだ、或る男は雪の中に一週間埋もれてゐて夢中で救はれた。かういふことがも少しロマンチックに色づけられて、爐邊の語り草となつて代々傳へられて來たのである。

實際白皚々の雪の中を歩いてゐると、錯覺とか幻覺とかによつて俄かに眼の前に黑い影法師が現はれることがある。そんなものが或る時は雪鬼とも雪坊主とも見え、又雪女とも見えるのであらう。　參照　雪

例句

雪女郎

黑塚のまことこもれり雪女　　其角（五元集拾遺）

大夜著に今宵待けり雪女　　言花（江戸廣選）

雪嶺ののぞいてゐるよ煙出し　　南花（ホトトギス）

雪をんな今宵の爐邊の語草　　草徑（同）

雪女吾妹が寢息やすらかに　　鬼淵（續ホトトギス）

みちのくの雪深ければ雪女郎　　青邨（同）

雪晴（ゆきばれ）

【季題解説】雪のやんだ翌朝はすばらしい快晴になる、蒼天は海の如く深く、地上の雪に朝日が反射して眩しいばかりである。この天氣を通俗に「雪の揚句の裸坊の洗濯」と云つてゐる。

俳人所謂雪國ではこんなことは先づめづらしい。鈍しく暗い雲がふと割れて、帶のやうな青空を見せる。おゝ日がさした、雪晴れだとよろこびながら、炬燵から出て障子をあけ、まぶしい庭をながめる。がそれも束の間に日がかげつて、ふたたび元の暗さがかぶさる。日が消えたかと思ふと雪がちらつきはじめることとさへある。もし晴れ間が少しでも續くなら、大急ぎで縁側の干物を外へ出したりする。（[illegible]雪）

【例句】

雪晴

雪晴れて蒼天落つるしづくかな　普羅（ホトトギス）
雪晴れて満月遊ぶ八ヶ岳　蝸雲（同）
晴雪や眉描きたる犬の面　左右亭（同）
一院や深雪晴して裏比叡　北人（同）
啄木鳥や深雪晴れたるしづけさに　眉峰（同）
雪晴やつや／＼青き水馴棹　紅陽（同）
雪晴や雁の一群蛇山より　一我（同）
深雪晴して本坊の磬聞ゆ　春王（同）
雪晴や口笛吹いて牛乳配り　白萍（同）
雪晴や嶺にうまれし雪崩あと　爽雨（同）
雪晴や澪につき出し老虎岩　よしこ（[illegible]ホトトギス六）
雪晴や宿より詣る大社　泥中（同）

しまき　雪しまき

【古書校註】

【御傘】しまき、冬也。ふり物に二句、風躰に三句なり。是をふぶきと同じやうに心得て雪と雨を嫌ふは誤也。しまきとは時雨に風のそひたるを云ふ也。雪のそふをばゆきしまきと云ふ。是ふぶきとにたる物也。ふぶきは雪と風とばかり、雪しまきは時雨と雪とかぜと三色也。それは雪と雨と三色まじるをいふ也。されはしまきは時雨に折を嫌ふ可し。雪には嫌ふ可からず。雪しまきとあらば三色に嫌ふ也。よく／＼分別すべし。

【滑稽雜談】[illegible]草に云、しまきよこぎるなど云ふ也。風の字なく只しまきと云ふは、雪風と書きてしまきと俗に用ひて、貞徳の説に違せり。考ふ可し。

【註】しまきには、[illegible]恐らく誤であらう。しまきは恐らく本來は風卷であらうが、季題として用ひるものは雪しま

きなるべく、從つてその意味ではしまきと云つてよいであらう。

季題解説 時雨に風の烈しく加はつたものを云ふので、北海道地方などでは概ね十月中旬から十一月中旬に起る　併しこの地方では内地でいふ時雨といふやうなものは乏しいため、自然しまきも珍らしい現象である　然し雪に旋風の加はつた所謂雪しまきは北海道や東北地方では常にあることである。【參照】雪。

例句

しまき

しまき來る雪の黑みや雲の間　丈草（丈草發句集）
あるかひも術は志卷のやれ簾　白雄（白雄句集）
ともづなをもやひ終りししまきかな　憲三（ホトトギス）
五日月現れてゐるしまきかな　卜居（同）
しまき雲何にも降らさず走りけり　月尙（續ホトトギス）
雪しまき今濃き比叡の表かな　泊月（同）
藪疊雪しまき來るきりもなや　駝王（同）

風花（かざはな）

季題解説 晴天にちらつく雪、或は風の吹き出る前若くは風の吹き始めに少し降る雪を云ふ。【參照】雪

例句

風花

風花や寒風山を艫がくれ　南蠻寺（續ホトトギス）
風花や將白銀に將佘に　百合（同）
風花や山下りて來る二三人　雨圃子（北・樺新季題句集）

雪起し（ゆきおこし）

古書校註 【年浪草】北地、雪將に作らんとする時、必ず雷の之に應ずること有り。これを雪おこしといふとぞ。

季題解説 雪の降る前に鳴る雷のことである、【參照】雪、夏―雷

例句

雪起し

納豆するとぎれや嶺の雪おこし　丈草（丈草發句集）

冬霞（ふゆがすみ）　寒霞（かんがすみ）

季題解説 冬に立つ霞である、冬のとある日、空も凪ぎわたつて暖く、俄に春が立つかと思はれるやうな日がある。さうした日、野を見渡すと藁塚の間や遠い山甫にはうす／＼と霞がこめてゐる。短い日脚に追はれて間もなく消えてゆくのであるが、枯れ果てた野山に立つ冬の霞は、何となく春の

暖雨氣の混合により直ちに氷結した氷晶となつて氷霧を生ずる。故に氷霧が出來るのは濕潤な地方でなくてはいけない。而も北海道などでは氷霧が河川上に生じ夫れも頗る濃いものであつて往々にして太陽を見えなくなるさうである。之れを同地方では「モロク」と稱してゐる。

お講凪（かうなぎ）　御講日和（おかうびより）

季題解説 十一月、親鸞忌即ち御講の行はれる頃は天氣穏和な日が續くことが多いのをいふ。〔参照〕宗教—御正忌（ごしやうき）

例句

御講凪　肩衣をかけてあそべりお講凪　志保女（稿ホトトギス）

御影講荒（おえいかうあれ）

古書校註 【日次紀事】（一）今日より明日に至り、日蓮宗寺院御影講を修す。又會式と號す。今明日おほく風烈し。俗に日蓮御影講荒と稱す。〔参照〕宗教—御命講（おめいかう）

註（一）十月十二日。

鰤起し（ぶりおこし）

季題解説 鰤の漁期十二月、一月頃の雷鳴を云ふ。〔参照〕夏—雷

例句

鰤起し　わだつみへさかまく雲や鰤起し　翠城月（ホトトギス）

名殘の空（なごりのそら）

季題解説 大晦日の空を言ふ。年も今日一日に押し迫つて、世上の事、身邊の事に忙殺されてゐる。その慌しい中で、ふと過ぎ去つた一年をふりかへり、自身を省みるやうな靜かな心になることがある。さうした時人は思はず空を仰ぎ見る。年の瀬の空は、輝いてゐる日も、流れる雲も年と共に古びつくしてしまつたやうな思ひがする。しかしこの一歳を人の世の上にひろがつて來た空である。何か回顧的な心もちを托したいやうな氣持がしないでもない。名殘の空は古く靜かに過ぎた一年の日を想ひ起させ、來るべき希望の日を物語つてゐる。〔参照〕時候—大晦日

冬の山　冬山の扉の裾に伏す宮津かな　泊雲　（續ホトトギス）
冬山や醫師の馬の口をとる　疑陶　（同）
海神の廟あらはなる冬の山　よしこ　（同）

山眠る（やまねむる）

季題解説　眠る山（ねむるやま）

山が冬に入つて、恰も人間が蒲團をかぶつて眠りに就いてゐる如く寂然と横はつてゐるのを言つたのである。冬の山といへば單に冬の季節の山といふに過ぎないが、この擬人法を用ひた「山眠る」といふ題になると、默々としたその姿と共に、靜寂極りないその生命といふ風な主觀的な感情が伴つてくるのである。〔参照〕冬の山フユノヤマ　春　山笑ふヤマワラフ

例句

山眠る　妹山に誘はれ眠る背山かな　十二星　（同　人）
大原路や比叡より眠る嶺つゞき　北人　（ホトトギス）
眠る山門下す詩仙堂　青蛾　（同）
鷲ケ嶽眠り九頭龍涸れにけり　小照　（同）
月の出に眠る山々蒼きまゝ　花蓑　（同）
市中は烈しき風や山眠る　草城　（同）
御大禮終りて京の山ねむる　岳左　（同）
眠りたる山の間の渡舟かな　龍水　（同）
高浪に志賀の島山眠りけり　水貝　（同）
山眠る中に秩父の祭かな　一宿　（續ホトトギス）
　叔父の臨終に侍りて
山眠る如くみまかり給ひけり　稻水　（同）
山眠る大和の國に來て泊る　青邨　（同）
山眠る如く机にもたれけり　虛子　（句集　虛子）
眠る山の裾にたてたる障子かな　同　（同）
田の中に眠れる岡といひつべし　同　（ホトトギス）

冬の野（ふゆのの）

季題解説　冬野（ふゆの）・冬の原（ふゆのはら）

冬の野原である。「枯野カレノ」「朽野クダラノ」と同意義の季題であるが、細かい感じの相違から言へば、これら二者は草木すべて枯れた野といふやうに目に訴へた感じの名稱であるが、冬野と言へば、冬といふ大きい時候の下にある野といふ風に、冬といふ季節感を主とした言葉といふことが出來る。
〔参照〕枯野カレノ・朽野クダラノ

例句

冬の野　捨人やあたゝかさうに冬野行く　其角　（五元集）
生て世に古錢掘出す冬野哉　召波　（春泥發句集）

伯樂が鉄に血を見る冬野哉　同（同）
大佛を見かけて遠き冬野かな　几董（井華集）
土までも枯てかなしき冬野哉　同（同）
冬の野や何と臥べき岬の萱　闌更（半化坊發句集）
人をとふ我も冬野のきり〴〵す　成美（成美家集）
師走野のあしもとにある畑かな　乙二（松のさえ草稿）
冬野道やがて三條通かな　洸心（ホトトギス）

枯野（かれの）

枯原（かれはら）　枯野道（かれのみち）　枯野人（かれのびと）　枯野宿（かれのやど）

古書校註

【御傘】枯野、冬也。くだら野といふも冬野の名なり。冬野・枯野に折を嫌ふ也。枯野の薄、秋也、かれ〳〵の露氷るといひ、雪などむすびたらば冬成るべし。露にかぎらず、枯野に、蟲・露・色など結び入れても秋也。枯野、植物に二句嫌ふべし。くだら野は露をむすびても冬也。

【滑稽雜談】八雲御抄に云、枯野・くだら野、冬の野也。

【年浪草】朽野。冬野也。腐とも。（略）〇一説、百濟野、攝津の名所。くだら野。（略）冬野の枯れくたれたるをいふ。百濟野と混ずべからず。

【栞草】千草の枯れたる野をいふ。露を結びても冬也。

季題解説　霜が降り、霜柱が立ち、寒い風が吹き、草は蓬々と枯れ果てゝ地に委し、夏野の深々と茂つてゐたのにひきかへて、今はまことに蕭條たる景色である。見まはせば周圍の山々は力なく眠つてゐることもあらう。又輝かしく雪に蔽はれることもあらう。又遠く荒海が見えることもあるであらう。野面を貫いてある何々街道といつたやうな道はことさら白く廣々と眺められる。行人は吹くものにくるまつて歩いてゆく。人家もぽつ〳〵と見える。お寺詣りなどをして人の出入も稀だ。かうした情景から枯野人・枯野宿・枯野道といふやうな言葉となつて句に使はれる。〔参照〕冬の野など枯野、

例句

枯野

旅に病で夢は枯野をかけ廻る　芭蕉（枯尾花）
鷹の目の枯野に居るあらしかな　丈草（丈草發句集）
かまきりの尋常に死ぬ枯野かな　其角（五元集）
血の附し鼻紙寒きかれのかな　許六（五老井發句集）
野は枯てのばす物なし鶴の首　支考（蓮二吟集）
茅萃や枯野の口の小商ひ　桃隣（古太白堂句選）
碑に名なしかづらも枯野哉　同（同）
枯野行人や小さう見ゆるまで　千代女（千代尼發句集）
鷺の雪降さだめなき枯野かな　同（同）
むさゝびの小鳥はみ居る枯野哉　蕪村（蕪村句集）

枯野

大とこの糞ひりおはすかれ野哉　蕪村（蕪村句集）
子を捨る藪さへなくて枯野哉　同（同）
息杖に石の火を見る枯野哉　同（同）
蕭條として石に日の入枯野哉　同（同）
馬の尾にいばらのかゝる枯野哉　同（同）
眞直に道あらはれて枯野哉　同（拾[illegible]集）
畠にもならで悲しきかれ野哉　同（蕪村遺稿）
山をこす人にわかれて枯野哉　同（新五子稿）
石に詩を題して過る枯野哉　同（同）
野は枯てことに尊き光堂　同（落日庵句集）
夕陽に枯野の末の天守哉　同（同）
行々てこゝろ後るゝかれ野かな　太祇（太祇句選）
塀越の枯野やけふの魂祭　同（同）
意趣のある狐見廻す枯野かな　同（同）
なつかしや枯野にひとり立心　同（同）
關屋より道のさだまる枯野哉　召波（春泥發句集）
枯野のや蓑着し人に日の當る　同（同）
上京の湯どのに續く枯野哉　同（同）
枯野して松二もとやむかし道　同（同）
枯野していづこ〳〵の道の數　同（同）
青い物着た人ひとり枯野かな　也有（蘿葉集）
四五寸の綿は殘る枯野かな　同（同）
五六羽の鴉下り居る枯野かな　同（同）
豆ほどに人を見送る枯野かな　同（同）
草といふ名ばかり跡に枯野かな　同（同）
しらぬ火の頃日見えて枯野かな　同（同）
名を問へば夏來た村の枯野かな　同（羅の落葉）
牛の尾の外はうごかぬ枯野哉　蓼太（蓼太句集）
馬と見て一里は來たり枯野原　同（同）
皮剝の業見て過る枯野哉　几董（井華集）
鰒喰し犬狂ひ臥かれ野かな　同（同）
擔ひゆく沽鯛のぞく枯野かな　白雄（白雄句集）
七ツ子に逢ふて淋しき枯野哉　同（同）
馬の跡枯野の野越いそがるゝ　同（同）
小ともしや枯野の末を人の行　同（同）
地車の轄(クサビ)ぬけたるかれ野かな　同（同）
猪の篠根掘喰ふかれ野哉　同（同）
馬附の琴侘しらに野は枯ぬ　同（同）

龍膽の何おもひ艸野は枯ぬ　同（同）
仕合のうしろ風かな野は枯ぬ　同（同）
ぬつくりと夕霧くもる枯野哉　曉臺（曉臺句集）
かれ〳〵し野中に松のあらし哉　闌更（半化坊發句集）
枯て猶淸き野守が鏡かな　同（同）
むつましう住やかれ野のひとつ家　士朗（枇杷園句集）
丈山のさたもくれゆく枯野哉　同（同）
かれ〴〵や野邊に出向ふ庵の犬　同（同）
ざぶり〳〵〳〵雨降る枯野哉　一茶（享和句帖）
鳥をとる鳥も枯野のけぶり哉　同（同）
蟲除の札のひよろ〳〵枯野哉　同（同）
がい骨の笛吹やうな枯野哉　同（七番日記）
戸口迄ついと枯込む野原哉　同（同）
枯野原俵かぶつてとほりけり　同（同）
終の身も見事なりけり枯野原　同（一茶句帖）
藁苞の豆麩かついで枯野哉　同（九番日記）
吹風に聲も枯野の烏かな　同（同）
麥餅の幾日になりぬ枯野原　同（發句題叢）
親の日の朝日を拜む枯野哉　乙二（をのゝえ草稿）
ものたらぬ月や枯野をてる斗　蒼虬（蒼虬翁發句集）
行雲の家より低き枯野かな　同（同）
時めいて來るや枯野の柱賣　同（同）
はなしあふ背中のぬくき枯野哉　同（同）
折節は高うもなるや枯野の灯　同（同）
酒しほに醉て見に出るかれ野哉　同（同）
鷄の道も一すぢ出來るかれの哉　同（同）
すみれ吹ばかりに成し枯野かな　梅室（梅室家集）
霜白く枯野の暮寒の花月夜　翠紅（慶栗）

金山
空高く鳶見失ふ枯野哉　淡々（淡々發句集）

奈良
小男鹿の重なり伏せる枯野哉　土芳（猿蓑）

角筈
四ッ谷から藪のつゞく枯野哉　青峨（五車反古）
角力取故郷へ歸る枯野哉　白羽（續選）
潮のうき上りたる枯野哉　鱸釣（鴫立）
桑つんで實一淋しき枯野哉　倘白（類題發句集）
練塀の内迄も來る枯野哉　移竹（新選）
けふはさて然のやうなる枯野哉　才牛（金毘）

枯野

とりまいて人の火を焚く枯野かな　子規（子規句集）
松杉や枯野の中の不動堂　同（同）
旅人の蜜柑くひ行く枯野かな　同（同）
信長の榎殘りて枯野かな　同（同）
枯野原團子の茶屋もなかりけり　同（同）
めい〳〵に松明を持つ枯野かな　同（同）
足もとに青草見ゆる枯野かな　同（同）
わらんべの犬抱いて行く枯野かな　同（同）
大鷲の捕はれて行く枯野かな　香墨（新俳句）
枯れ〳〵て海より低き野面哉　其日庵（同）
馬荒れて人と爭ふ枯野かな　凡水（同人）
屋根越えに白浪見ゆる枯野哉　紀日（同）
いづこ迄臼こかし行く枯野かな　水巴（ホトトギス）
酒倉の土間に日當る枯野かな　零餘子（同）
雨風に石ころ殖ゆる枯野かな　斷腸花（同）
迷ひ居れば月が出たる枯野かな　鳳山（同）
道端の池に舟浮く枯野かな　綠童（同）
荷馬怒り馬子も怒るや枯野道　一路（同）
枯野路のはたと戻りし行手かな　左還（同）
日あたりて暫く溫き枯野かな　牧春（同）
緣に出て道をしへる枯野かな　村家（同）
潮騷の眼にも見え來し枯野かな　鹿郎（同）
しばらくは虹美しき枯野かな　孕江（同）
照り戻る雲のけはしき枯野かな　伐桂郎（同）
枯野來て竈火のうつる障子かな　果堂（同）
おほわたへ座うつりしたり枯野星　誓子（同）
淺間山夜目にもしるき枯野かな　眉峰（同）
銃煙一抹浮ぶ枯野かな　一坡（同）
幽かにも畝の跡ある枯野かな　田宇（同）
あを〳〵と海よこたはる枯野かな　房之助（同）
荷がくれに上りし鞭や枯野馬車　幸叢（同）
大石に道まがりゐる枯野かな　其昔（同）
豊の月色づきそめし枯野かな　草洲（同）
山々の浮びつれたる枯野かな　兆二（同）
樽前の怒の灰の枯野原　手寒（同）
抱いて行く鷄の溫みや枯野道　渠水（同）
うす〳〵と青嶺つゞける枯野かな　たかし（同）
城門の中に見えたる枯野かな　夏井（同）

新郎となりて枯野の馬車に在り　百里（同）
上手らに千鳥あがりし枯野かな　櫻坡子（同）
枯野來し提灯いたくまたゝけり　慶一（同）
枯野人籠に一ぱい烏貝　呂柚（同）
大いなる道の貫く枯野かな　未曾二（同）
むぐらもち晝につりあり枯野茶屋　こんも（同）
蒙古路の夕燒したる枯野かな　一良（同）
鴨綠江を見失ひたる枯野かな　盆城（同）
苞の鯉背に動きし枯野かな　夏井（同）
人里も枯野の色もわかちなし　沙美（續ホトトギス）
ふとぬくく枯野の村に入りにけり　風磯（同）
墻外に墓があるなり枯野宿　榮郎（同）
大連に富士の山ある枯野かな　幸叢（同）
風呂敷をこぼれし猫や枯野道　清吾（同）
遠山に日の當りたる枯野かな　虚子（句集虚子）

朽野（くだらの）

季題解説　「くだら野」と訓む。字義通り萬物の朽ちた野原であつて、枯野といふのと全く同意義のものである。［參照］冬の野ノユ　枯野カレノ

例句

朽野
くだら野の鶴にもまけし脚二本　乙二（たのゝえ草稿）

水涸るる（みづかる）

川涸るる　沼涸るる　池涸るる　瀧涸るる

古書校註

【栞草】續猿蓑（一）水かるゝ池の中より道ありて、といへる句、冬氣につれられたれば、冬季勿論なるべし。

註（一）同集上巻にある歌仙「松露の巻」の第三で、支考の附句。その前句である脇句は、「日はさけれ、靜なる洞　曾良」

季題解説　冬季には河川や沼池の水が涸れ涸れになつて、あらはな底を露出することが多い。單にかかる池なども特に細つてあはれな姿をさらすものである。［參照］冬の川カフユノ

例句

水涸るる
涸れ瀧に來れば稚鴨や日向かな　凌青子（［illegible］）
かれ瀧やとざして住める一茶亭　夏竹（ホトトギス）
涸瀧や枯木をわたる［illegible］　一歳子（同）
溫泉の華を結んで涸るゝ女瀧かな　月桃（同）
瀧涸れて人の住へる茶店かな　京童（續ホトトギス）

水涸るる　逢坂の蟬の小川は涸れにけり　　野呂子（續ホトトギス）
　　　　　流村のかゝりしまゝに水涸るゝ　　憲郎（同）

冬の川（ふゆのかは）　冬川（ふゆかは）　冬川原（ふゆかはら）

【古書校註】【栞草】水の涸れたるさまをいふ。

【季題解説】冬の山野や町の中を流れてゐる川である。氷を着た巖々の間を流れてゐる川。廣く川床を殘して、涸れ〴〵の痩せた姿で流れてゐる川。大きい川も今はめつきり水準を下げて、鐵のやうに重く沈んだ色をしてゐる。村の間を流れてゐる小さい川は葱や菜屑を浮べて流れてゐる。【參照】水涸るる

【例句】冬の川

冬川や筏のすわる草の原　　其角（五元集）
冬川や木の葉は黒き岩の間　　惟然（惟然坊句集）
鷺かぬこゝろや冬の大井川　　桃隣（古太白堂句選）
冬川や孤村の犬の獺を追ふ　　蕪村（蕪村遺稿）
冬川や佛の花の流れ來る　　同（同）
冬川にむさきもの啄む烏哉　　几董（井華集）
やすき瀬や冬川わたる鶴の脛　　同（同）
夕川や動かぬものゝ又寒し　　曉臺（曉臺句集）
冬川や簸に捨てやる鳥の羽　　同（同）
川中に川一筋や冬げしき　　同（同）
冬川を二度こす事がおもひかな　　成美（成美家集）
冬川の菜屑啄む家鴨かな　　子規（子規句集）
冬川に鴨の毛かゝる芥かな　　同（同）
冬川や魚の群れ居る水たまり　　同（同）
冬川や家鴨四五羽に足らぬ水　　同（同）
冬川の砂とる土手の普請かな　　同（同）
冬川の家鴨よごれて集ひけり　　碧梧桐（新俳句）
水涸れて轍のあとや冬の川　　漱石（同）
冬川を前に宿屋の行燈哉　　麹車（同人）
冬川に青々と見ゆ水藻かな　　鬼城（ホトトギス）
舷をありく烏や冬の川　　白貧（同）
冬川を渉る一つ灯はたと無し　　梅史（同）
寒江や白褌持ちて渡守　　綠童（同）
蔦おちて冬江の波を掴みけり　　董糸（同）
夕焼の水とび〳〵や冬河原　　孕江（同）
川波といふも激しや冬大河　　寄石（同）

冬川や出ればすぐ著く渡舟　墨石（同）
冬川にかくも生ひたる青藻かな　湖村（同）
冬川の鏡のごとき一ところ　枴童（續ホトトギス）
渡り石踏み濡れてあり冬の川　躑躅（同）
冬川に道のついたる鳥居かな　虚子（句集　虚子）

冬の海（ふゆのうみ）

【解説】冬の北海は暗澹として荒涼そのものである。雪雲が終日低くたれこめて、眞黑い波が隆々ともり上つて來ては牙のやうに頂を崩して押し寄せる。時折洩れわたる日影にその白波は海一面に散らばつて見える。さほどの風のない日でも、波は大きくうねつて、巖や防波堤に濃霧のやうな飛沫をあげる。出舟も少い、捕鯨船がかゝつた日、巨きい船が通るばかりだ。磯の家々は揚げ舟をめぐらせ、高い波除垣を結うてその脅威から身をすくめてゐる。しかし南國の海になれば又趣が異る。大方は日和がつゞいて海面はきらきらと輝く。濱には出漁の賑かさも見られる。だが尖り合つてゐる波や、紺青に澄みわたつた色合は、やはり冬の姿でなければならない。［同意］冬の波（ふゆのなみ）　寒潮（かんちょう）

【例句】冬の海

蘆の葉を手より流すや冬の海　其角（五元集）
冬の海見よむさし野の北企野より　白雄（白雄句集）

昭和前期

灰色の外國船や冬の海　衣沙櫻（ホトトギス）
北國の北のくらさや冬の海　月尚（同）
暮あふち冬海見えて曲馬團　指方城（同）
冬海へぬくきもの捨つ厨夫かな　帆影郎（同）
島裏に來て冬海の荒びをり　草葉子（續ホトトギス）
冬の海大うねりして凪ぎにけり　南村（同）
眞黑き冬の海あり家の間　虚子（同）

冬の波（ふゆのなみ）

【解説】海の波も、川の波も、また沼や池に立つ波もあらう。が何れもとげとげしく立ちさわぎ、暗く寒い波である。海では大きく打ちよせて高い飛沫と怒號を上げる。川では背高く溜つてゐる舟などに騷がしい音を立てる。沼や池では鋭く尖り合つて、枯萱や蘆むらをゆすぶつてゐる。［illegible］

冬の海は　寒潮は

【例句】冬の波

陰を持つて高まり來るや冬の浪　冬青（ホトトギス）
ともづなに或は高し冬の浪　成外（同）

冬ノ波

冬浪の汀はるかにたちくづれ　まさを（ホトトギス）

寒の浪舷門の灯にうねり去る　粗骨（續ホトトギス）

冬波のおだやかなれば春のごと　まさを（同）

寒潮（かんてう）

季題解説　嚴冬濱邊に立つて、ざあと礁に碎ける潮を見る時、又稍ゝ沖の烏帽子岩に白くぶつつかる怒濤を見る時、いかにも寒々と感ずる、と同時にいかにも凜烈な感に打たれるであらう。又北國の黯々とした黒い海を見る時、しみじみと海の凄愴を知るであらう。参照　冬の海（フユ）　冬の波（フユ）

霜崩（しもくづれ）

季題解説　強い霜にあふと地層の脆い土はその霜結の力のためにむくむくもり上り、それに今度は日が當つて霜がとけると、ぼろぼろと崩れる。田の畦を崩し、山みちの小徑の崖がゆるんで崩れたりすることもある。参照　霜柱（シモバシラ）　天文―霜（シモ）

霜柱（しもばしら）

季題解説　嚴寒には地上の水分が凝つて脹れあがり霜柱が立つ。恰ゝ劍の盾を押し並べたやうになる。二三寸から五六寸位にもなる。漢字では冰箏と書く。参照　霜崩（シモクヅレ）　天文―霜（シモ）

例句

霜柱

三年も夢と立けり霜ばしら　也有（蘿葉集）

石寒し四十七士が霜ばしら　几董（井華集）

妙義山

たゝはたに蓬がもとの霜ばしら　白雄（白雄句集）

白雲や芊は岩に霜柱　闌更（半化坊發句集）

土とともに崩るゝ畦の霜柱　子規（子規句集）

梅龕の墓に花無し霜柱　同（同）

霜柱ざつくと梯子立てにけり　唐淵（ホトトギス）

汀まで鹿の足あと霜柱　唯史（同）

伏樋の溫泉のひゞきや霜柱　南葉（同）

霜柱こゝ櫛の齒の缺けにけり　茅舍（續ホトトギス）

霜柱傾く音の日ざしかな　茂葉（同）

やはらかき土をかぶりて霜柱　俊子（同）

初氷（はつごほり）

季題解説　初めて水の氷ることをいふ。

人は初氷や初雪を見てはじめて寒氣來の現實に呼びさまされるものである、〔一〕例 氷は。

例句

初氷

芹燒やすそわの田井の初氷　芭蕉（其便）
初氷何こぼしけん石の間　蕪村（落日庵句集）
手へしたむ髮のあぶらや初氷　太祇（太祇句選）
今朝は先消てみするや初氷　同（同）
とする間に水にかくれつ初氷　同（同）
初氷許由此朝掬すれば　召波（春泥句集）
諏訪の湖狐に告よはつ氷　也有（蘿葉集）
山寺の硯に早しはつ氷　同（蘿の落葉）
障子はるこゝろの水やはつ氷　蓼太（蓼太句集）
山茶花の花びらのせて初氷　三豆（ホトトギス）

氷（こほり）

薄氷（うすらひ）　厚氷（あつごほり）　氷面鏡（ひもかゞみ）　氷の劍（こほりのつるぎ）　氷の楔（こほりのくさび）　氷の襞（こほりのひだ）　氷花（ひようか）　氷の衣（こほりのころも）

古書校註

【山之井】氷はつるぎといひて、寒の水のきたひ、朝日になまる心をいひ、波の鼓をれ皮となり、瀧の糸もまむすびにむすぶけしきをつらね、池の魚の天井はり、水鳥の床板となるありさま。又、蛇かごのつの、鬼がはらのきばにみなして、つらゝをも。

【御傘】氷のひまとくる・ながるゝ、皆春なり。殘氷、春に非ず。薄氷・薄ながれ行く氷・氷もくだくるも皆冬也。

【滑稽雜談】和訓義解に云、ひはひゆるの略、こほりはこる也。○八雲御抄に云、うすらひはうすき氷也。つらゝ・たるひ・むまこほり・こほりのくさび、凍て固ちたる也。海はこほらぬ物也。河・池・瀨等は皆氷る。瀧をも猶氷ると讀む。藻鹽草に云、氷のくさび、氷とけたるなり。○今按ずるに、夫木集の歌、冬來ては田川にたてる水車氷のくさび蒿添へてけり　爲家歌、是等を以て、八雲の御說信ずべし。

氷面鏡　色葉抄に云、紐鏡とは氷なるべし。（略）萬葉十一の〔一〕歌は、のどかの花間也。氷の鏡は[illegible]なるゆへ也。○藻鹽草に云、ひもかゞみ、紐鏡と書く。氷の鏡のごとくなるを云ふ也。又藏玉に云、氷面かゞみ美と書けり。詞に云、日の影に氷のとけるをいへり。氷の異名也。○今按ずるに、[illegible]式部のいへる氷鏡は[illegible]なれかし。

【年浪草】初氷・初氷解　月令に曰、孟冬の月水始めて氷る。（略）霜・雪・氷の消ゆる・解くる、打まかせては春也。初雪・初霜の消ゆる、初氷の解くるは冬也。

氷[illegible]障子氷を描く文に曰、[illegible]

[illegible]

の辭を作す。

氷花。（二）（略）酉陽雜俎に曰、開成の末河陽の魚池、氷、花を作す、繡の如し。

氷の衣。韓詩に曰、肌膚鱗甲を生じ、衣被刀鎌の如し。〇神異記に曰、鼠有りて氷の下に在り、其の鼠毛長さ八尺、布を織る可し。

【黒冊子】氷の衣といふ事は、氷のうちにかひこ有りて糸をなすと、無き事を佛道にいひたるより出でたる也といへり。

【栞草】氷の聲（略）一説に、大寒の時、氷に音あるをいふ。

氷の衣。毛吹草　水張にはるは氷の衣かな。玉海集　水干の衣といはん氷かな。遠近集　氷もや羅綾の衣下紅葉。〇青藍云、すべて物を蔽ひ包む物を衣といふに同じ。氷・水を蔽ひたるさまをなぞらへていふ也。さるは上に出せる句意を推してしるべし。但し、年浪草に出せる説は附會といふべし。

注　（一）「紐解のとかの山も誰故か君來ませるに紐解かず寐む、柿本人丸。」（二）栞草に「氷の花」として出し、同文を引いてゐる。

季題解説　水が氷點以下の寒冷に會ふと凝結して氷となる。嚴寒時には室外のあらゆる流動しない水は氷となるが、凜烈な寒氣は流動してゐる水と雖も、又河川・沼池・湖海の如きものも凍結してしまふことがある。その寒冷の度合によつて指頭でも脆く破れる程薄い氷もあれば、又人馬が之を渡渉しても毫末も龜裂を來さないほど厚いものもある。その氷の厚薄と氷面の廣狹によつて色々の情景を生み出す。例へば手水鉢の水が古い落葉をとぢこめて凍つてゐるのも、田の面のわづかな水が眞白に凍つて學童がちかみちをするのも、また大河や湖沼が凍つた上を車や人馬が往還する有様も、山中の瀧が凍つて一本の氷瀑と化したのも、或は大海が凍結してそのはるかかなたに波のうちあがつてゐるのも、とりどりに嚴冬酷寒の風趣である。

氷面の鏡のやうになつたのを氷面鏡といふ。**参照**　初氷（ハツゴホリ）　氷柱（ツララ）　夏—夏氷（ナツゴホリ）

例句

氷

一露もこぼさぬ菊の氷かな　芭蕉（續猿蓑）

瓶わるゝ夜の氷のねざめ哉　同（筑摩集）

水よりも氷の月はうるみけり　鬼貫（鬼貫句選）

うすら氷や鐙長なる橋ばしら　其角（五元集）

汀氷

鴨おりて水まで歩む氷かな　嵐雪（玄峰集）

水草の菰にまかれんうす氷　惟然（惟然坊句集）

かれ蘆を手がゝりにして氷かな　北枝（北枝發句集）

田にそひて谷なき程を氷哉　沾德（俳諧五子稿）

品川や武家の汀の氷水　同（同　）

薄氷や鶺鴒走る浮芥　桃隣　（古太白堂句選）
齒豁に筆の氷を噛む夜哉　蕪村　（蕪村句集）
山水のへるほど減りて氷かな　同　（夏より）
眞夜半や氷の上の捨小舟　同　（發句題叢）
文机の脇も氷のひゞきかな　同　（蕪村遺稿）
川水の盡んとすれば氷哉　同　（落日庵句集）
くらがりの柄杓にさはる氷かな　太祇　（太祇句選）
あるほどの水を入江の氷かな　同　（同）
うすら氷や格子の透の器　召波　（春泥發句集）
神前に手も清まらぬ氷かな　也有　（蘿葉集）
僧はたゝく茶に汲む水の氷かな　同　（同）
飛鳥川けふもきのふの氷かな　同　（同）
逆さまの影もうき世ぞ氷面鏡　同　（同）
川中に柄杓一本氷かな　同　（蘿の落葉）
鴨遠し夜半の氷いづこまで　蓼太　（蓼太句集）
出る日や風に吹るゝ薄ごほり　几董　（井華集）
あかつきや氷をふくむ水白し　白雄　（白雄句集）
鷄の背に氷こぼるゝ菜屑かな　同　（同）
薄氷雨ほち／＼と透すなり　同　（同）
はかなしや童文字書うす氷　曉臺　（曉臺句集）
氷なみだ御簾にしむな山おろし　同　（同）
更行や氷を渡る獺の聲　闌更　（半化坊發句集）
折沈む竹のうへなる氷りかな　同　（同）
切くだく上は氷の假山かな　同　（同）
不二見んと氷に立や諏訪の海　同　（同）
星きら／＼氷となれるみをつくし　同　（同）
氷捨てたゞ何となくあはれなり　成美　（成美家集）
我やどは氷をつるすあたりかな　同　（同）
梅の咲をりもあらうか厚氷　同　（同）
せゝらぎや氷を走る炊ぎ水　一茶　（一茶句帖）
繩附て子に引せけり丸氷　同　（同）
氷とも知らで渡りし潮水哉　同　（同）
子ども達江戸の氷は甘いげな　同　（七番日記）
茶漬に一味付し氷哉　同　（同）
葭垣や立かけておく丸氷　同　（同）
ざく／＼と氷かみつる茶漬哉　同　（同）
木馬のしやん／＼渡る氷哉　同　（九番日記）
手にのせて氷見る間を朝こだま　乙二　（をのゝえ草稿）

氷

桐の實のこぼれそめけり厚氷　蒼虬（蒼虬翁發句集）
友鶴の氷にあさる山田哉　心敬（心敬發句帳）
寒菊の色をうつして氷哉　近林（桃首途）
松笠の落て久しき氷哉　雨什（文車）
行道の音面白き氷かな　孤白（卯辰）
染汁の紫氷る小溝かな　子規（子規句集）
溝川に竹竈れかゝる氷かな　同（同）
ひびわれる音や旭のさす田の氷　同（同）
鶺鴒の刈株つたふ氷かな　同（同）
汐落ちて氷の高き渚かな　同（同）
日かげやく諏訪の氷の人馬かな　同（同）
上げ汐の氷にのぼる夜明かな　同（同）
森の中に池あり氷厚きかな　同（同）
水鳥の浮木に並ぶ氷かな　同（同）
水鉢の氷捨てたる葉蘭かな　同（同）
古池に鼠の走る氷かな　古白（新俳句）
大船に氷りつきたる小舟かな　極堂（同）
はりつめし氷の中の巖かな　露月（同）
踏みみれば鮮走らせぬ田の冰　茗圃（同　人）
船の苫捲けば音ある冰かな　南鄰（同）
落日に氷上大魚荷ひ來る　烏不關（懸　葵）
氷上に墨吐く烏賊を並べけり　三幹竹（同）
松風や氷の上の塵芥　九品太（ホトトギス）
池冰るひゞき障子にありにけり　萩雨（同）
氷上に薄影出來て消えにけり　ミサヲ（同）
青ぞらを風流れゐる氷かな　石鼎（同）
旭のつと池の薄氷さゞめける　泊雲（同）
氷上や日もはる〴〵と通ひ路　若沙（同）
薄氷に潮せゝり來る滑川　阿久里（同）
船客に四顧の氷原街見えず　誓子（同）
氷上に焚火の跡のありにけり　富峰（同）

五稜郭氷伐
大鋸に凭れ憩へる氷伐り　羊耳（同）
かりうどの汚して渉る氷河かな　句狂子（同）
左右の田の氷明りの夜道かな　武（同）
まだ青き菅をとぢたる氷かな　拓水（續ホトトギス）
氷江にいだかれねむる牡丹臺　清郎（同）
氷上にちらばつてゐる氷かな　すゝむ（同）

擲巻の遊び娼婦や結氷期　帆影郎（同）
氷上の古きみちとはなりにけり　同（同）
氷山のとゞまつてゐる碧き海　四葉（同）
月蝕の夜を氷上に遊びけり　誓子（ホトトギス）
馬叱る聲氷上にありにけり　虛子（句集虛子）

氷柱（つらら）　垂氷（たるひ）　銀竹（ぎんちく）

古書校註

【御傘】垂氷、水邊にあらず。雫の氷りたる也。

【滑稽雜談】垂氷。連歌新式抄に云、たるひ、水などの雫の氷りたるを云ふ也。○師説に云、したゝる水のながく氷るをつらゝと云ふ。雫の氷るをたるひと云ふ。氷柱、東坡の雪の詩に曰、空しく氷柱を吟じて劉叉を憶ふ。（略）○山谷の詩に云、雪後簷を排す凍銀竹。○類書纂要に曰、簷溜簷下に凝るを氷箸と日ふ。（略）○羅山子が日、銀竹は雨を言ふ也。李白が詩、白雨寒山に映じ、森々として銀竹に似たり。○和俗多く氷柱・銀竹の字を用ふ。然れども出所未詳也。東坡が詩に云ふ所是なりや否。銀竹は雨に決す。或は日、凍銀竹の三字をつらゝに用ふ可しと。只氷箸の字よく形を云ふ、專ら用ふ可き也、又氷筋の字亦得たり、猶識者に決す可し。

【年浪草】氷柱。開元遺事に日、冬日雪霽る、寒結んで簷溜皆氷條と爲る。是を氷筋と謂ふ。

【栞草】つらゝ・垂氷。友人介我云、つらゝはつら〳〵のつゞまり、つらつらは氷のすべる形容なりと。○尾張の家苞にもみえて、氷れる形容（カタチ）をいふ。○源氏末摘花　朝日さす軒のたるひはとけながらなどかつらゝのむすぼるゝらん。此の外證哥多し。たるひは落つる雫のたれ氷りたるをいふ。俗つらゝといふもの是なり。[新古今] 立ちぬるゝ山のしづくも音たえて槇の下葉もたるひしにけり。この哥どもにて辨ふべし。さるをつらゝとたるひのけぢめなく古人も句作せるは、俗談平話にしたがふ故なれば、強ひて改むべきにもあらず。○銀竹、垂氷の異名といへり。

季題解説　屋根、樹の枝、岩石などから下垂する氷をいふのである。雨雪の多い裏日本では軒なみに大屋根小屋根にかゝつた氷柱を朝夕仰ぐことが出来る。その長大なものになるとよく屋根から地上まで達するものがある。又寒地の山中に入るならば、樹の枝や岩石などに滴り落つる水が凍つて氷柱に化したものが見られ、谿谷などの断崖から簾の如く垂れさがつてゐるものも見られる。[illegible]

例句

京な
いけはしに猿の折たる氷柱かな　鬼貫（俳諧七車）
井のもとの草葉にかゝる氷柱哉　同（鬼貫句選）

氷柱

朝日かげさすや氷柱の水車　鬼貫（俳諧句選）
何ゆへに長みじかある氷柱ぞや　同（同）
松吹に横につらゝの山邊かな　來山（續いま宮草）
水窓の網手もきるゝ氷柱かな　其角（五元集拾遺）
花ならで子供の手折る氷柱かな　也有（蘿葉集）
一雫しては入日の氷柱かな　蓼太（蓼太句集）
氷柱なき軒にふたゝび入日哉　闌更（半化坊發句集）
數十丈見上れば岩の垂氷哉　同（同）
鉄壺に濃を負せん氷柱かな　巣兆（曾波可理）
夕風や社の氷柱灯のうつる　一茶（一茶句帖）
かくれ家に氷柱廻りて這入けり　同（九番日記）
一方は氷柱でもちし草家哉　同（同）
かた〳〵は氷柱をたのむ屑家哉　同（同）
おそろしき柳となりて垂氷哉　同（花實發句集）
藁家の二軒鎖して氷柱かな　翠柳（新俳句）
日のさゝぬ槇の下葉の氷柱かな　雅翠（懸葵）
さか鉾の氷柱の谷に通ひ路　橙黄子（ホトトギス）
筧水吹き散る篠の氷柱かな　春葉（同）
温泉煙のうち寄する戸に氷柱かな　白天（同）
軒氷柱四温の月のかゝりけり　左人（同）
見て居ればひようと笛ふく氷柱かな　ゐち呂（同）
みちのくの町はいぶせき氷柱かな　青邨（同）
草の戸のけぶりて垂るゝ氷柱かな　把水（同）
ふるさとの星かがやける氷柱かな　漾人（續ホトトギス）
裏山のせまりし軒の氷柱かな　三木（同）
絶壁のうしろに垂れし氷柱かな　徳十（同）
月まはり來て照したる氷柱かな　青邨（同）
垂れ下る氷柱の紐を結ばばや　虚子（同）

冬田（ふゆた）

冬田道（ふゆたみち）

季題解説　稻を刈りとつた後、しばらくの間は稻が生ひ出でたり、まだ刈株が多少の生色を帯びたりしてゐるが、嚴冬に入ると共に滿目荒涼たる冬の田が眺められる。缺けたところもある畦にわつかの青色をも認められず、鴉がわがもの顔に畦の上を歩いたり藁塚にとまつたりしてゐるのも、却つて蕭條たる趣を添へるものである。それが二三枚の峡の小山田であらうと、廣漠たる廣野の田であらうとを問はない。

例句

冬田

たのみなき若草生ふる冬田哉　太祇（太祇句選）

雨水も赤くさび行冬田かな　同　（同）
冬田刈夕ぐれ人のひとり哉　曉臺　（曉臺句集）
汽車道の一段高き冬田かな　子規　（子規句集）
道哲の寺を過ぐれば冬田かな　同　（同）
この秋の出水あらはに冬田かな　念腹　（懸葵）
荒海に日上り冬田小さゝよ　石鼎　（ホトトギス）
大石に鷺下りて居る冬田かな　流石　（同）
はりついて青き草ある冬田かな　柿秋　（同）
竹藪のごう／＼鳴つて冬田かな　三青子　（同）
みづうみの高浪寄する冬田かな　鹿郎　（同）
大阪も東の果の冬田かな　東千房　（同）
遠方に黄菊かゞやき冬田かな　木雨　（同）
海荒れの千鳥ちらばる冬田かな　きよし　（同）
行く我に星も隨ふ水田かな　泊雲　（同）
水田行くや夕明りして空と水　土音　（同）
冬田打つ霞ケ浦の漁師かな　雨意　（續ホトトギス）
斑鳩の村かたまれる冬田かな　東風　（同）
閉されて水田に映る二階かな　漾人　（同）

狐火（きつねび）

季題解說　昔は狐火を獨立して冬の季題とはしなかつた。「王子の狐火」を冬の季としたことから單に狐火といふのも冬の季とするやうになつたものと思はれる。冬季山野に見ゆる燐火をいふのである。狐の口から吐く氣だとか、又は狐が人獸の骨を銜へ其骨が燃えるのだなどと言つてゐるが、蓋し燐化水素が空中に燃えるのである。　參照　宗教——王子の狐火（ワウジノキツネビ）

例句

狐火

狐火や髑髏に雨のたまる夜に　蕪村　（蕪村句集）
狐火やまこと顔にも一くさり　青畝　（ホトトギス）
狐火に河内の國のくらさかな　夜半　（同）
狐火の減る火ばかりとなりにけり　たかし　（同）
狐火の見えゐる風呂を貰ひけり　茨雲洞　（續ホトトギス）
狐火や水の近江の蘆枯るゝ　蘇城　（同）
狐火の雨降り出でて無くなりぬ　虚子　（句集虚子）
狐火の出てゐる宿の女かな　同　（ホトトギス）

不知火（しらぬひ）

季題解說　不知火は舊曆七月晦日と舊大晦日の夜に出現するものと云ひ傳

へられてゐる。九州有明海一帶の沖に出るもので、大牟田港側から眺め渡すと、遠干潟をへだてゝの肥後と干潮に名高い此の地方は、舊大晦日の夜頃になると數十町の沖合迄干潟がひろごること眞夜中、はるか海上に現はれやがて海上一面となるといふ。

古來「西遊記」で有名で、從來の歳時記には皆秋季として取扱はれてゐるが、これは八代の不知火であつて、宇土八代近海は七月に現はれるからである。然し大牟田附近のは大晦日の方が多く、この地方で大騒ぎをして見に行くのは大晦日のものである。

むかし景行帝の八月朔日に現はれて、筑紫の枕詞となり、肥前・肥後（火前・火後）の語源とまでされたこの怪火も、今では單に近海に貝を捕る漁火であると斷定されてしまつたが、一千年來の傳統的神祕として云ひ傳へられて來た「不知火」は俳句の上だけででもそのまゝ生かして置き度いと思ふ。同地方でも、漁火では名物でもなくなるので矢張むかしのまゝの傳說として殘して置くのであるといふ。〔參照〕秋―不知火

例句

不知火

不知火や語り漕ぎして老船頭　　靜村（ホトトギス）

不知火や港のうらの廓町　　速水（同）

不知火を漕ぎかくしゆく船もあり　　はる吉（同）

人事

冬構（ふゆがまへ）

古書校註 【滑稽雑談】 寒氣を防がん料に、風のかよふ所をふさぎ、戸障子のやぶれを修補しなどする也。

【栞草】 寒氣を防がん料に、風のかよふところをふさぎ、砂よけ風よけとて、北の方に筵など張りまはし、すべて冬向きの便利を構ふるなり。

季題解説 冬の風雪、寒冷に對して施す住家の設備をいふので、主に家の外面に就いてであつて、屋内の事ではない。北窓を塞いだり、風除を設けたり、庭樹を圍つたり、又雪國では所謂雪圍ひをするなどの事である。（參照 北窓塞ぐ（ふさぐ） 雁木（がんぎ） 目貼（めばり） 風除（かぜよけ） 雪圍（ゆきがこひ））

例句

冬構

山畑や青みのこして冬がまえ　去來（去來發句集）
路のとう其根うゑおけ冬構へ　其角（五元集）
越人は斷ても經けり冬がまへ　曉臺（曉臺句集）
道灌に蓑かし申せ冬構　一茶（七番日記）
古寺の簀子も青し冬構　凡兆（猿蓑）
柴買ふて門ふさげたり冬構　闌更（三晴集）
一むしろ芋ほす寺や冬構　萬倍（東明集）
藁を打つ音や小村の冬構　狸作（新俳句）
冬構うしろに比叡の落葉かな　鳴雪（同）
新しき筧設けつ冬構　肋骨（同）
倶利伽羅の四軒の茶屋や冬構　花笠（春夏秋冬）
蕭藁に蓋し厚し冬構　胡村（懸葵）
冬構たゞ桑畑の垣根かな　草城（同）
雪除けの萱簀立てたり冬構　靜流（同）
鷄小屋を作く枯當や冬構　南嵒（ホトトギス）
比叡晴つゞける冬を構へけり　うたゝ（同）
赤ちやけし杉の垣根の冬構　禾風居（同）
濃陰の芒枯や冬構　賓水（同）
みちのくの餘戸の鄕や冬構　蛙水子（同）

[illegible]

泉水をよごせる塵や冬構　雪幽子（ホトトギス）

冬構　陸橋のよく掃かれたる冬構　鹿郎（續ホトトギス）
冬構魚見櫓のいたゞきも　きゆう（同）
垣結ひて大百姓の構かな　秋紅（同）

雁木（がんぎ）

季題解說　越後あたりの雪の多いところには町に雁木といふものがある。高田をはじめ長岡にも柏崎にも直江津にもある。軒の外に別に突出したものである。試に高田町についていふならば――

今から三百二十年前卽ち慶長十九年、高田開府の際、片庇を卸してこの雁木造を創めた。その構造は母屋の屋根を葺き下し、幅凡そ四尺若くは三尺あつて、柱は細い臭樌を用ゐる、之を造込雁木と云ふ。之は今僅かに裏町に片影を殘してゐるに過ぎない。維新後は之を落雁木に改め、幅は六尺に廣めた。今の本町通りの雁木は落雁木で、幅もあり高さもあり、通路には石を敷いて氣持よく通行が出來る。雁木下は元は私有地であつたが、維新役地檢改正の際公道となつた。冬はどうしてもなくてはならない通路である。大道は辻道を除く外は雪の積捨場となり、交通が全く杜絕するから人の通行は雁木によるのである。向側との連絡は雪隧道を設ける。この雁木は町並をつくつてゐる商人町のみである。武士の居つた屋敷町には雁木はない。之は家の前が廣いので、雪がいくら積つても出入に不自由がないからである。

冬の眞盛りに、下駄履きで大した雨具もつけず、元氣よく通つてゐる情景は面白い。暗い雁木を通つて居る時、向側から雪のトンネルを通つて來た舞妓などに出會つた時などには言ひ知れない明るさと親しみを感じる。

參照　冬構

北窓塞ぐ（きたまどふさぐ）

古書校註　【滑稽雜談】北窻とづるも、北は陰の方にて、冬の風はげしく吹き入らんといとひて閉づるならし。

【年浪草】當に塞向に作るべし。（略）○漢志に曰、大陰は北方、北は伏也。陽氣下に伏す。時に於て冬と爲る。仍つて以て寒し、云々。故に塞向する也。

季題解說　冬の用意の一つである。北側の窓は夏は必要なものの一つであるが、冬には寒い風が吹き込むので甚だ厄介である。この寒い風の吹き込むのを防ぐために北側にある窓をしめ切つてしまふのである、そして目貼を施す家もあり、掛け板戶をなし又は筵類で覆ふ家もある。

參照　冬構

【例句】北窓塞ぐ

北山に紙張る窓の寒かな　也有（蘿葉集）
六月の狀で窓張るさむさ哉　同（同）
棕梠高く剝ぎて北窓塞ぎけり　葵郷（懸葵）
在鮮十七年
北よりも西窓早く塞ぐなり　綠童（ホトトギス）
家ごとに北を閉ぢたる娼家かな　鬼灯（同）
御陵の見ゆる北窓ふさぎけり　たけし（續ホトトギス）
北窓を塞ぎて暗き佛間かな　蒲川（同）

目貼（めばり）　隙間張（すきまばり）

【季題解說】滿洲の建物は極寒の候に備へるためみな二重窓である。初冬になると窓の隙間に綿類をつめて紙其他でその上を貼る、これを目貼りと云ふ。ロシア建は窓の外側と内側との扉の間が五六寸もあいてゐるので、其の下部に砂・木炭・鋸屑などを置いて、窓から落ちる雫を吸ひ取るやうにしてゐる。

東北・北海道あたりでも隙間風や吹雪の吹き込むのを塞ぐ爲めに、窓隅其他家中の隙間をこまかく紙張りするのである。【同題】冬構（ふゆがまへ）

【例句】目貼

好晴の光りとび來ぬ隙間張る　蛙水子（北・樺新季題句集）

風除（かざよけ）　風圍ひ（かざがこひ）

【季題解說】冬期、北西の風を防ぐ爲めに、葭・蘆・芒・藁などを用ひて家の北側に高く塀のやうに作つたものである、冬構の一つである。【同題】冬構（ふゆがまへ）

【例句】風除

風除の中にあまたの土方ゐし　ちかし（續ホトトギス）
風圍ひみな椰子の葉を以てせり　岬人（同）

霜除（しもよけ）

【季題解說】主として庭木、草花などの植物を霜害から防がうとする防寒設備である。葭・藁・繩を以てする場合が多い。松・棕梠・芭蕉などは新卷鮭のやうに堅く藁卷にされ、又牡丹・芍藥などは祭笠のやうな派手な藁細工や覆面のやうな菅笠のやうな藁帽子を冠らされる。霜除は離宮の林泉・公園・植物園・料亭の前栽・なにがしの邸内などで見ることが出來よう。霜除を見るとつい植物の寒がりを笑ひたくもなる。とまれ霜除は日本人の誇るべきガーデニングの技法である。【參照】天文―霜―

例句

霜除

蘇鐵にも厚手當や霜覆　桃隣（古太白堂句選）
霜よけのたらぬ所へかゞし哉　一茶（七番日記）
母親を霜よけにして寐た子哉　同（發句集）
大寺や霜除しつる芭蕉林　鬼城（ホトトギス）
霜除や南蠻鐵の手水鉢　曉山（同）
霜除やこゝろにくゝも蝶の影　青畝（同）
燈籠に霜よけのあり灯り居り　薊花（續ホトトギス）
霜除を結ひたる繩の紺の色　暮情（同）
霜除にかゝる落葉もなくなりぬ　濱子（同）
霜除のかたち〳〵や霜待てり　一壺（同）
霜除にこよひの雨のあたゝかさ　虚子（同）

雪圍（ゆきがこひ）　雪垣（ゆきがき）　雪除（ゆきよけ）

古書校註

【初學抄】（一）雪垣かこふ。北國には、十月の比より、家のめぐりを、こもにてつゝむ也。

【増山井】雪垣。北國などに、大雪降りて家損ずべき用意也。

【滑稽雜談】雪垣といふは、信濃・越後及び北陸の諸州、雪の深き所には家の軒口に丸太柱を立てゝ、其の内に柴薪を積み置く也。一丈餘も降る時、家の破風の窓より階をさして出入する事也。是を雪垣といふ。件の柴は、すなはち雪のとける迄の日用たくはへ置く物也。

【篗纑輪】北國大雪降る所、十月初めより用意して、人家軒まはりに、逞しき丸太材を立て掛け、横を結び、簀を編み付けて垣とす。深雪の内、其の陜（アイ）を道として隣家へ通ずる也。町續きの所は、町中軒下の通路あり。依つて雪垣を大切にせりとぞ。

註（一）初冬の部にある。

季題解説　降雪深い北國で、雪を防ぎ寒氣に備へるため家を圍ふのである。農家などでは、杭・長木を軒に渡して蓆を掛け、又は藁・萱などで編んだ大筵を以て家の外面を覆ひ、又窓には掛け戸をする、家の出入口には萱筵などで高い風雪除を設ける。是等はまた雪垣などとも稱される。又庭木をいたはるため、長木・柴などを組んで外圍を作ることもある。雪が解け春がくれば悉く之を撤する。**參照**　冬構（フユガマヘ）　天文—雪（ユキ）

例句

雪圍

草津路や雪よけ垣を結ひつらね　三木（ホトトギス）
雪圍しかけし庭や狼藉と　磊々（同）
永平寺深雪の中の雪構　桑陰（同）
雪圍いときびしくぞ結はれける　雨圃子（同）

雪圍したる燈籠灯りけり　越央子（續ホトトギス）
みちのくの雪圍せる旅籠かな　漾人（同）
雪除の裾沁み出づる廚水　泊雲（同）

墓圍ふ（はかかこふ）

【季題解説】北海道など寒氣の強いところでは、冬季に積雪及び・温變化によつて墓石が破損するので、初冬、主として筵をもつて墓を圍ふことである。自分の家の墓を自ら圍ふこともあり、共同墓地などでは墓守に依賴して圍つて貰ふこともある。

【例句】

墓圍ふ

墓圍ひ居れば鴉が鳴きにけり　東光（北・樺新季題句集）

雪竿（ゆきざを）

【古書校註】

【初學抄】（一）雪ざほの事、竹に一尺二尺のすをきざみ置きて、年々の雪のふかさ・あさゝをためす。哥にも讀めり。

【増山井】雪の何尺降ると斗り見るもの也。或は十一月。

【滑稽雜談】竹に一尺・二尺の印を付け置きて、家の邊に立てゝ、雪の深さをみる物也。海川に立つる水木（ミヲ）のごとし。夫木、越の山立てをく竿のかひぞなき目をふる雪にしるし見えねば　大炊御門家佐。

【篗纑輪】雪の淺深を量る丈尺の竿也。又深雪の内、物のしるしに立て置くをも雪竿と云ふ也。

【年浪草】雪深き國にて、人家を離れたる道は、竿を立てゝ雪中往來の便とす。之を雪竿と云ふ。仙臺などにあり。

註（一）中冬の部にある　但し以下の四書にはいづれも十月の部にある

【季題解説】信州・越後・北陸などで、一丈ばかりの竿に寸を刻み、降りつもる雪の深さをはかる――その竿である。北越雪譜「高田御城大手先の廣場に木を方に削り尺を記して建て給ふ、是を雪竿といふ。長一丈なり。雪の深淺公私に係るを以てなるべし。」【参照】天文―雪

藪巻（やぶまき）

【季題解説】雪が積るやうになると庭園の樹木が雪折などで損傷される、それを防ぐ用意としてあらかじめ筵や桟俵などで枝葉を包み、又は繩を卷いて押へて置く、之を藪卷といふのである。【参照】天文―雪

雪吊（ゆきつり）

【季題解説】雪が降り積ると、得て庭木や果樹などの枝を折られることがあ

る、それと未然に防ぐために降雪前あらかじめ繩又は針金などで枝を吊つて置く、それをいふのである、庭の松など、一本の支柱から細い繩を幾本も出して枝を吊つてゐるのなど、冬枯のさびしい庭に風情を添へるものである。【参照】天文―雪吊

敷松葉

【古書校註】

【嬉遊笑覽】庭に松葉を敷くこと、今人は霜障のためと思へり。もとさにはあらずと見えて、御傘に、(一)爐次に松葉まくも、赤葉なれども、其の志は、松を愛してすることなれば、植物になるなり。

註　(一) 御傘の松蔭の項中に見える文。

【季題解説】松の枯葉の奇麗に洗ひたのを茶席の庭に敷いたのをいふのである。初冬から春に至る間、即ち霜の期間に露地の土凍、霜柱などで見苦しくなつたり又苔などの弱るのを保護する爲めのものである。冬の初めには薄く敷き、寒さがつのるにつれて厚く敷き、又寒さの和らぐに從つて薄く敷く、敷き方は多くは庭の全部ではなくて或部分に敷く。然し目的以外に又庭の風致となる樣にしくのである。

【例句】

敷松葉

物ぐさや松葉敷きさす霜柱　桃隣（古太日堂句選）

よく見れば時雨れてゐるや敷松葉　蚊杖（ホトトギス）

金閣寺

敷き直す松葉色濃きところかな　圭州（同）

松葉しく庭師かきてる竹の箸　あい子（續ホトトギス）

草行の御飛石や敷松葉　三平（同）

まろ〳〵と苔のこれる敷松葉　風生（同）

沓脱の飾草履や敷松葉　木母寺（同）

フレーム

溫床

【季題解説】冬季植物の寒害を防いだり、或は蔬菜花卉などの促成栽培を行ふ目的で、四角又は長方形の土臺枠の上に斜面になるやうに堅枠を作り、その斜面の天井に硝子障子又は油障子を覆うて中に植物を入れるのである。室內の溫度を高める爲め種々工夫をしたものがある。

【例句】

フレーム

フレームの障子閉づべき時刻かな　筑生（昭和八）

雪搔

除雪夫　雪搔人夫　排雪車　ラッセル車

季題解説　降り積つた雪を搔き除けて道をつけることである。南國では見られないことであるが、北國地方では一寸降つたかと思ふと直ぐ五六寸も積り、一夜のうちに何尺といふ大雪の積ることも珍しくない。履物が沒する位降ると、家毎に門口や通路は勿論、街道の雪を搔き除けて道を開く、搔き除けた雪は通りの兩側に一時積み上げて置いたり、橇や車で運んで河や海に捨てたりする。

排雪車、例へばラッセル車の如きものは鐵道線路の雪を排除するために機關車の前方に排雪装置を施したもの、除雪夫・雪搔人夫は雪を搔き除けるために傭はれる人夫のことである。

參照　雪卸（ユキオロシ）　天文—雪（ユキ）

例句

雪搔

門〳〵や積も定めず雪搔す　白雄（白雄句集）
雪掃やわがあとへ來て啼雀　士朗（枇杷園句集）
まばゆさにまけて雪掃戸口かな　梅室（梅室家集）
雪掃に埋み生垣もなくしけり　同（同）
通路の雪はる〴〵とかゝれたり　たけし（ホトトギス）
雪の上に雪[illegible]投げてありにけり　博亮（同）
釣橋の雪奔流に搔き落し　審雨（同）
高垣の雪かぶりつゝ搔きにけり　翠陽（同）
まだ降るや再度門の雪を搔く　光頭（同）
雪搔ける交番を見てゐる慈かな　藤孤（同）
搔き溜めし雪に上りて指圖かな　句杖（同）
あちこちの雪崩の音や雪を搔く　柳星（同）
大原女の雪搔いてゐる行手かな　ながし（同）
宇治橋の雪を搔きゐる雜仕かな　紫人（同）
三井寺や雪除けてある堂のみち　湖石（同）
除雪隊雪にもたれて憩ひをり　宵火（續ホトトギス）
家ありて雪搔かれある畔かな　迷子（同）
雪搔を指圖してをり二階より　青[illegible]（同）
雪搔をかついで行くや墓參　山梔子（同）
湯女出でて門道の雪を搔きそめぬ　四明（[illegible]句選集）

雪搔　除雪夫をのせて戻りし列車かな　紫燕子（朝鮮俳句選集）
雪げむり立ててラッセル發ちにけり　龍峡（北・樺新季題句集）
ラッセル車山を隔てて聞えけり　可南（同）

雪下（ゆきおろし）　雪卸（ゆきおろし）

季題解説　雪深い國の村里や町で見られることである。幾日も雪が降りつづくと、屋根の雪のために戸や障子の開けたてが重くなつて開かないものなども出來てくる。時には屋根が落ち家が崩壞することなどもある。屋根へ上つて何尺と積つた雪を、雪搔又はショベルなどで搔き下し、拗ひ投げる。道の上へ、庭へ、隣家との間へと、どこでもかまはずどん／＼と響を立てて落すのである。朝晴れの空の下などで、どの屋根でも雪下しをしてゐる景色は爽快である。下した雪は固く嵩むから、通行人はその上に道をつけて、屋根ほどの高さを通るといふやうなこともある。深い眠りにある人々を、町の巡査や消防夫などが「危いから早く下すやう」などと、家々を起して廻ることなどもある。雪國らしい情景である。　參照　雪搔（ユキカキ）　天文—雪（ユキ）

例句
雪下　雪卸しやめて通せる妓かな　爽雨（ホトトギス）
屋根の雪九頭龍川に卸しけり　北人（同）
おろしたる雪に埋れし梯子かな　月尙（同）

雪踏（ゆきふみ）

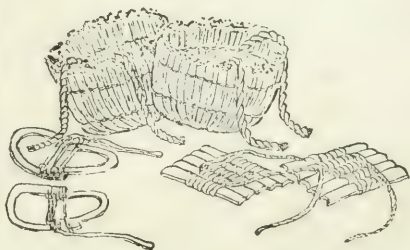
季題解説　日々降り募る雪を踏み固めならすこと。つまご・樏又は大藁靴狀のものを穿き或は筵を足に捲きつけて踏む。又筵を雪の上に擴げて踏み固めるなどさまざまである。雪が多いために踏みかためでもしないと除雪の場所がないからである。　參照　天文—雪（ユキ）

例句
雪踏　雪を踏む一つ筵に二人かな　地藏尊（北・樺新季題句集）

碎氷船（さいひようせん）

季題解説　冬期氷結した港に、船の自重を以て氷を割りつゝ出入することが出來るやうに特別の裝置をした汽船を云ふ。

【例句】　碎氷船左にかしげ右にゆれ　雨圃子（ホトトギス）

風切鎌（かざきりがま）

【季題解説】冬季、風の方向を知るために竿の先に古鎌を結び、垣根・屋上などに立てゝ置くもののことである。多く農家の間に行はれ、鍋の廢物なども利用される。

採氷（さいひよう）

【季題解説】川・湖沼・池などの結氷を採るのを云ふ。清冽な氷をつくるために特に採氷場を設けて採氷する方法もある。

寫眞は大同江の採氷である。採氷は牡丹臺から十五六町上流の水の最も澄んだところのものを、道廳の衛生課に於て試驗の上、營業家などに採氷せしめるのである。運搬は主にトラック・牛車・橇などで、採氷の時期は一月初旬から二月中旬迄が最も盛である。大同江の氷は夏期、平壌市街は勿論、鐵道沿線の奥地へも供給されるのである。平壌には人造氷はない、みなこの大同江の天然氷を使用するのである。
東北地方でも採氷する。〔一月〕氷引と

氷引（ひびき）

【季題解説】 湖水に張りつめてゐる氷に穴を明けて、網を下して魚を捕へることである。その方法はよくわからない。【參照】 採氷（サイヨウ）

冬休（ふゆやすみ）

【季題解説】 大方の學校は十二月二十五日頃から正月の松の内頃まで休暇をする。暑中休暇と違つて期間は短いが、その代り正月がある爲めに歸省して郷里で新春を迎へる樂しみがある。期間の短いところに却つて冬休らしさがある。【參照】 夏―夏休（ナツヤスミ）

【例句】

冬休

冬休み腫物持つて歸りけり　草駄　（同人）
校僕のこそ〳〵用や冬休　巴城　（ホトトギス）
大原の小學校も冬休　たけし　（同）
懸菜して農學校や冬やすみ　微笑子　（同）
桃われに結はせもぞすれ冬休　諾人　（同）
かりそめの紅白粉や冬休　多美雄　（續ホトトギス）
門しめて名主の瀧の冬休　古松　（同）

冬籠（ふゆごもり）

【古書校註】 【滑稽雜談】 定家僻按抄に云、冬籠とは冬とてこもるなり。ことなき草木も花もはゝなく、霜雪に埋もれたるを冬籠といふなり。昔のさくや此の花冬ごもりより讀み出でたり。○或は云、誠は冬木籠なり。こを略していふなり。萬葉集に冬木成など讀めるに同じ心なり共いへり（師説）。○按ずるに、これらの說侍れど、俳におゐては、冬籠の詞らへ物に構ひなしとは、人の寒さを凌ぎて籠居するを冬籠とも云ふにや。【年浪草】 俳諧には、人の一間に籠り、寒を厭ふを云ふ也。（略）○又、萬葉に冬木成（フユコモリ）と訓ぜり。或說に、委しくは冬木籠也、之を略せると也。【栞草】 寒風をふせぎて居宅に籠るをいふ。（略）○草木の凋み、冬枯れたるをも冬籠といふ。

【季題解説】 冬の寒い間、防寒の用意をして家の内に引籠つてゐることは東北地方や北陸、北海道のやうな寒國にして初めて充分味はれることであらうが、必ずしも寒國に極つたことはない。冬の間は兎角外出することが億劫になつて家居がちのものである。堅く閉ざしたガラス戸越しに、庭へやつて來てゐる鵯鳴をぢつと眺めてゐたり、火鉢に炭をついだりすることも自ら起居の中に靜かな冬籠の心持はあるものである。

冬籠

難波津や田螺の蓋も冬ごもり　芭蕉（市の庵）
折々に伊吹を見てや冬籠　同（笈日記）
金屏の松の古さよ冬籠　同（炭俵）
先祝へ梅を心の冬籠り　同（曠野）
冬ごもり又よりそはむ此はしら　同（同）
眼ばかりは達磨にまけじ冬籠　來山（續いま宮艸）
算用に猫もはひるや冬ごもり　浪化（浪化上人發句集）
鶏の片足づゝや冬ごもり　丈草（丈草發句集）
白粥のあまりすゝるや冬ごもり　去來（去來發句集）
霜月や日まぜにしけ／＼冬ごもり　同（同）
舟に寐て荷物の間や冬籠　同（同）
放すかと問るゝ家や冬籠　同（同）
墨染に眉の毛長し冬籠　同（同）
鼠にもやがてなじまん冬籠り　其角（五元集）
諸人や嵐芝居を冬籠り　同（同）
雜炊の名どころならば冬籠り　同（同）
つく／＼と壁の兎や冬籠り　同（五元集拾遺）
冬ごもり人にものいふとなかれ　惟然（惟然坊句集）
此里は山を四面ンや冬籠り　支考（蓮二吟集）
冬ごもりこの水仙や老が友　杉風（杉風句集）
冬籠目のくたびれる明り窓　同（同）
諸の中にかくれて冬ごもり　同（同）
山雀もこもりの籠冬ごもり　同（同）
山鳥の尾に見る藪や冬籠　桃隣（古太白堂句選）
ひとりうつ痛き肱や冬籠　同（同）
冬ごもり燈下に書すとかゝれたり　蕪村（蕪村句集）
勝手まで誰が妻子ぞ冬ごもり　同（同）
冬ごもり佛にうときこゝろ哉　同（同）
いねぶりて我にかくれん冬籠　同（同）
冬籠母屋へ十歩の椽づたひ　同（新五子稿）
桃源の路次の細さよ冬籠　同（同）
賣喰の調度のこりて冬籠　同（同）
松島で死ぬ人もあり冬籠　同（同）
屋根ひくき宿うれしさよ冬籠　同（同）
[illegible]是一にはじめなりけり冬籠　同（同）
月に次の寢かへる音の冬籠　同（其雪影）
冬籠り壁を心の山に倚　同（月並發句帖）

冬籠燈光虱の眼を射る　蕪村（五車反古）
苦にならぬ借錢負うて冬ごもり　同（落日菴句集）
ひとり行德利もかもな冬籠　同（同）
變化すむやしき貰ひて冬籠　同（同）
冬ごもり心の奧のよしの山　同（蕪村遺稿）
冬ごもり妻にも子にもかくれんぼ　同（同）
信濃なる下男置けり冬ごもり　同（同）
來て留守といはれし果や冬籠　太祇（太祇句選）
いつまでも女嫌ひぞ冬籠　同（同）
僧にする子を膝もとや冬ごもり　同（同）
尻重き業の秤やふゆごもり　同（同）
なき妻の名にあふ下女や冬籠　同（同）
冬ごもり古き揚屋に訊れけり　同（同）
身に添てさび行壁や冬籠　同（同）
京の水遣ふてうれし冬ごもり　同（同）
雉子一羽諸生二人の冬ごもり　召波（春泥發句集）
仕つかぬ歌舞妓役者や冬籠　同（同）
思ふ事戸に書れたり冬籠　同（同）
冬ごもり五車の反古の主哉　同（同）
仁齋の烟燵に袴冬ごもり　同（同）
風あらき曉よりぞふゆごもり　樗良（樗良發句集）
夜ル〳〵のおもしろければ冬籠　同（同）
左り字の交見る窓やふゆごもり　也有（蘿葉集）
風に留守つかふ編戸や冬ごもり　同（同）
梅さかば告よ出て見ん冬籠　同（同）
根深煮る色こそ見えね冬籠　同（同）
冬籠こもらぬ人を待日あり　同（蘿の落葉）
おもひかねて月見に出たり冬籠　蓼太（蓼太句集）
灰占に先何待んふゆごもり　同（同）
短檠は二尺のものでふゆごもり　几董（井華集）
さかしらいふ隣も遠く冬籠　同（同）
書棚に聽辛壺や冬籠　同（同）
俳諧の三神こゝに冬ごもり　同（同）
金屏に旅して冬を籠る夜ぞ　白雄（白雄句集）
捨られぬものはこゝろよ冬籠　同（同）
冬ごもり流水の音夜に入ぬ　同（同）
冬ごもり籠兼たる日ぞ多き　同（同）
世を蟻のすさび悟らん冬ごもり　曉臺（曉臺句集）

冬籠

[illegible]

薪をわる妹一人冬籠　子規（子規句集）
一村は青菜つくりて冬籠　同（同）
冬籠顔も洗はず書に對す　同（同）
冬ごもり世間の音を聞いて居る　同（同）
縁側へ出て汽車見るや冬籠　同（同）
老僧の爪の長さよ冬籠　同（同）
十年の耳ご掻きけり冬籠　同（同）

[illegible]を懷ふ

侃々も諤々も聞かず冬籠　同（同）
冬籠和尚は物をのたまはず　同（同）
雜炊のきらひな妻や冬籠　同（同）
宿替の蕎麥を貰ふや冬籠　同（同）

即事

冬籠る部屋や盥の浮寢鳥　同（同）

札幌より林檎一箱送られて

一箱の林檎ゆゝしや冬籠　同（同）
青山の學校にあり冬籠　同（同）

京の俳人に寄す

先生の筆見飽きたり冬籠　同（同）

[illegible]州の人日々來りて俳句のつくりやうを問ふ、俳句は即景をよむべしといふことを即事

蕪村の蕪大祇の炭や冬籠　同（同）
信州の人に訪はれぬ冬籠　同（同）
どうしても笑はぬ人と冬籠　燗腸（新俳句）
冬籠われ老いたりと思ひけり　牛伴（同）
菊枯れて爐に冬籠るべくなりぬ　露月（春夏秋冬）
冬籠勃々として句一念　規水（同人）
筆かめば首が落ちけり冬籠　二月堂（同）
この夜頃月の美し冬籠　月斗（同）
淨火磨る木の香古びぬ冬籠　神櫻（懸葵）
商衆とりに一ト日出でけり冬籠　栖乙（同）
風垣の内夜々の月さす冬籠　梅の門（同）
地の底に釣瓶の音や冬籠　はぎ女（ホトトギス）
換へ惜む机上の花や冬籠　吐天（同）
鏡とりて我に逢はばや冬籠　月舟（同）
瓦斯つける袂の燐寸冬籠　宵曲（同）
筆を擱く音折々よ冬籠　あきら（同）
古疊新たに焦げぬ冬籠　杜鵑花（同）

筆硯の中の耳掻冬籠　たけし（同）
水甕の丹塗の蓋や冬ごもり　緑童（同）
湯に入りてはなやぐ顔や冬籠　龍男（同）
爐のほとり羽ばたく鷄や冬籠　無錫（同）
冬籠つや／＼青き火吹竹　野風呂（同）
佛書より好きな俳書や冬籠　月尚（同）
炊きたての飯ありがたや冬籠　蘆馬（同）
席題を貼りつ放しや冬籠　寸七翁（同）
窓際の煤け芭蕉や冬籠　布山（同）
おきものの雉子うつくしや冬籠　羽公（同）
抽斗にうごく時計や冬籠　草秋（同）
家に古る寒暖計や冬ごもり　清三郎（同）
一經をやゝに解して冬籠　白蝶（同）
父に似てはらわた弱し冬籠　長春花（同）
灰かぐらあらをかしさの冬籠　無門（同）
冬籠る我に薪割る力かな　活刀（同）
病みがちの妻をたよりや冬籠　鯨波（同）
年上のきびしき妻や冬籠　田々子（同）
冬ごもり妻も覺えし正信偈　渭波（同）
指折つて句つくる尼や冬ごもり　只管（同）
百歩の風呂をたのしみ冬籠　刀吟（同）
好みたる薬湯や冬ごもり　ひろ子（同）
圍ひたる四季の屏風で冬籠　春草女（同）
大江のほとりに冬を籠るべし　秋林（同）
三軒家生死もありて冬籠　鬼城（同）
三渡竹田
かもじ造る音せねば淋し冬籠　左衛門（同）
冬籠るや痛は胸に妻は化粧に　はじめ（同）
實朝の忌日なりけり冬籠　たけし（續ホトトギス）
男の子出來てめでたし冬ごもり　三木（同）
灯を入れて俄に夜や冬籠　素仙（同）
朝からの書齋の友や冬籠　虚子（[illegible]）
形あるたび出づる冬籠　同（續ホトトギス）

寒さを避けて籠り居るをいふのであるが、古語で冬ごもりといふは、冬の終頃の季節をいひ、これとは別である。

冬の燈（ふゆのひ）　寒燈（かんとう）

我々が日常生活の上に燈火の恵みを受けることは、どんな天恵的

にも劣らない。實用的にばかりでなく、燈火は人間世界を美化する上にも大きな役目を果してゐる。平常闇に親しんでゐるけれども、一たび心を止めて燈火の上に眼を注ぐならば何かしら感情の動くものがあるであらう。そこには季節的の變化に從つて自ら違つた感じを受けるであらう。冬の燈と言ひ、寒燈といふ、何かそこに冬でなければならない感じを受けるであらう。

【例句】

冬の燈

うちふるふともしびや冬の心花　鬼貫（俳諧七車）
笹窓のけぶり短檠の下に釜睡　杉風（杉風句集）
冬あかし家にそふ木と土手の草　沾徳（俳諧五子稿）
灯の影は冬こそよけれ鹿のくる　乙二（松のゝえ草稿）
冬の灯や獨向へる將棋盤　耕雪（ホトトギス）
トランプの卓辷り落つ冬灯　同（同）
冬の灯に花鳥色濃き襖かな　誓女（同）
吊草鞋選るや冬灯に一廻し　素風郎（同）
寒燈や一盃の眠り酒　李耳（同）
寒燈に花なき壺の光りけり　韮城（同）
寒燈やきしみ開けたる小抽斗　耕雪（同）
寒燈の下に餅燒く妻と我　水竹居（續ホトトギス）
寒燈にたまさか話す夫婦かな　龍史（同）
寒燈の油を惜む尼の君　虚子（ホトトギス）
寒燈に柱も細る思ひかな　同（同）

冬座敷（ふゆざしき）

冬館（ふゆやかた）

【季題解説】 裝飾的にも、防寒的にもいろいろ冬の設備をした座敷を云ふのである。卽ち冬は襖・障子などをしめきるとか、屛風を立てるとか、火鉢を置くとか、暖爐を設けるとか、カーテンを取替へるとかする、さう云ふ座敷を云ふのである。【參照】夏―夏座敷（ナツザシキ）

【例句】

冬座敷

桶とりてなじむたよりや冬座敷　浪化（浪化上人發句集）
何なりと薄鍋かけん冬座敷　召波（春泥發句集）
日當りに一まどろみや冬座敷　蛇笏（ホトトギス）
床緣の出合もく目や冬座敷　月生（同）
二三日花なき床や冬座敷　波津女（同）
冬座敷灯ればありし林檎かな　亞名（同）
　二十五年振りに米國より叔父夫婦歸省す
大いなるトランク著きぬ冬座敷　穰葉子（續ホトトギス）
冬座敷とき〴〵阿蘇へ向ふ汽車　汀女（ホトトギス誌）

たゞ暗し折曲りたる冬座敷　虚子（ホトトギス）
踏石に緣の低さよ冬座敷　同（同）

屏風（びやうぶ）

金屏風（きんびやうぶ）　金屏（きんぺい）　銀屏風（ぎんびやうぶ）　繪屏風（ゑびやうぶ）　賀の屏風（がのびやうぶ）　枕屏風（まくらびやうぶ）　腰屏風（こしびやうぶ）
風爐先屏風（ふろさきびやうぶ）　讃所屏風（さんじよびやうぶ）

季題解說　屏風は遠く上古に支那から輸入されたものと云はれてゐる。尤も當時の屏風といふのは日本の衝立のことで、銅板・木板などで造つたものを硬屏風といひ、紙製のものを軟屏風と云つた、それから意匠を得て、木で骨格（ほね）を作り紙又は絹を貼り蝶番で二枚乃至六枚を繫ぎ合はせ、折り疊みの出來る現今の屏風が創製され、一般民家の間にも弘まつたのである。種類もいろ〳〵あり、大きさも中古以後に至つて高さ五尺が普通となり、小さいのは一尺六七寸位のものもある。又連結した數によつて六枚折又は六曲、四枚折又は四曲、二枚折又は二曲などとも呼ぶ。尙これらの屏風はそれぞれ用途の一定したものもあるが、俳句の季題としての屏風は、冬季室內に立てゝ風を遮ぎり寒さを防ぐために用ふる家具の一つとして扱ふのである。

例句　屏風

屏風たゝむ風に打たれし面かな　帆彩郎（ホトトギス）
倒れんとしたる屏風をさゝへけり　沈丁（同）
冷え渡る屏風の裏へ廻りけり　温亭（同）
屏風たてゝ貧乏かくしや客まうけ　峰雪（同）
なつかしき小屏風なれば枕邊に　筑前郎（同）
忘られて屏風の裡に病みにけり　北鳴（同）
浪速艦航行之圖や古屏風　綠朗（同）
接客や猫を屏風のもとに置く　ゐの吉（同）
御佛のましますかたの屏風かな　百日紅（同）
くらがりに七賢人の屏風かな　蕾子（同）
はね炭の千々に碎けし屏風かな　鈴狂（同）
下京わらさゑ
ともしびを剪れば明るき屏風かな　風生（同）
今消ゆる夕日をどつと屏風かな　青邨（讀ホトトギス）
父の世のはなやかなりし屏風かな　鴻乙（同）
元祿の昔つ春の屏風かな　たま（同）
山莊の部屋々々にある屏風かな　鴻乙（同）
開くより平氏の春や古屏風　仙者（同）
錢左から出たりしといふ屏風かな　月尙（同）
舊屏風の胡粉はげたる山ざくら　無門（同）

[illegible]　風音の屏風の内に聞えけり　　虚子（句集 [illegible]）

障子（しやうじ）

さうじ　冬障子（ふゆしやうじ）

【[illegible]】 古名さうじ。屋内の室と室との仕切又は外氣との堺に立てる建具で、細い木を格子に組んで骨とし、紙一重を張つて明りを通し、且つ風を防ぎ寒氣を防ぐ用をなし、冬の住居に必須の建具である。然し之を冬の季題として取扱ふやうになつたのは大正九年頃、ホトトギス雜詠に句が載つて以來のことである。普通障子と云へばこの明り障子のことであるが、昔は衝立障子・襖障子など用ひられた時代もある。一【[illegible]】秋―障子洗ふ

【[illegible]】 障子

庇なく縁なき寺の障子かな　　九品太（ホトトギス）
冬障子暫く應へなかりけり　　歌村（同）
ぷつすりと吹矢立ちたる障子かな　　素月（同）
藁塚の大きな影や冬障子　　草人（同）
案内乞ふ障子眞近に人ありぬ　　夏山（同）
抱へ來る薪に破りし障子かな　　義朗（同）
三方に障子さしあり芭蕉庵　　蕪日（同）
お障子や上り口なる石一つ　　巨江（同）
壇の内障子を締むる音すなり　　古村（同）
御佛の在しますなる障子かな　　三四郎（同）
しはぶきて開かぬ障子や大虚庵　　言子（同）
道の邊に白々とある障子かな　　同（續ホトトギス）
故里の暗き障子になれにけり　　筍吉（同）
納屋の戸を障子に替へて冬仕事　　二葉（同）

炭（すみ）

木炭（きずみ）　黒炭（くろずみ）　白炭（しろずみ）　堅炭（かたずみ）　軟炭　消炭（けしずみ）　土竈炭（どがまずみ）　炭斗　炭の香（すみのか）
鞍馬炭（くらまずみ）　小野の炭（をののすみ）　佐倉炭（さくらずみ）　炭火（すみび）　炭部屋（すみべや）

【[illegible]】

【御傘】 炭やき、冬也。炭と斗りも冬也。

【三才圖會】 本綱に云、木久しければ則ち腐る。而して炭土に入つて腐らざるは、木は生性有り、炭は生性無ければ也。葬家炭を用ひて、能く蟲蟻をして入らず、竹木の根自ら回らしむるも、亦生性なき耳。古へは、冬至と夏至との前二日、土と炭とを衡（ハカリ）の兩端に垂れて、輕重勻しからしむるに、陰氣至れば則ち土の方重く、陽氣至れば則ち炭の方重き也。按ずるに、播州一庫（ヒトクラ）・轟（トドロキ）の兩村燒く所の者を池田炭と名づく。皆櫟（クヌギ）木也。之を輪に切れば則ち理孔（キメアナ）の形菊花の如く、以て上品と爲す。

堅炭。紀の熊野・日向の五島・平戸、皆樫の木也。故に堅炭と稱す。武州八王寺・秩父・野州及び常奥甲信の諸國、皆堅炭を出す。阿波の炭は之に次ぐ。山茶・榎也。藝州の廣島・豫州を下品と爲す。多く雜木を燒く。

【年浪草】雍州府志に曰、炭所々に出づ。然れども、山城國に於て鞍馬山幷に小野の里の産を宜しと爲す。是を俗に燒炭と稱す。又茶亭爐中に用ふる所の炭、是を切炭と謂ふ。攝州池田・丹波一倉の土人之を燒く。柞木樫木其の木の狀に隨つて、長三尺許りに之を伐り、皮を連ねて之を燒き、而して後或は五寸或は三寸、心に任せて鋸を以て之を截る、是を切炭と謂ふ。其細く大なる者を胴炭と謂ふ。之を爐の中央に置き、是より左右小炭を比並す、猶人身の胴に手足を附ふるが如し。或は其の大なる者は薄く之を切る、其の狀車輪の如し。是を輪炭と號す。或は半ば割りて之を用ふ、割炭と謂ふ。

季題解說　冬から翌春にかけて楢・櫟・樫など特殊の炭材を山間の炭竈で炭化したもの。炭竈、溫度並に消火方法の如何によつて上質の黑炭と、石竈の白炭とに大別出來る。概括的に云へば、白炭は黑炭よりも質が堅いので白炭を堅炭と云ひ、黑炭を軟炭と云つてゐる。木炭は俵かまたは俵のまゝ原産地から市場に運搬され、[illegible]炭商の手を經て一般消費者の手に渡る。木炭は炭材・製炭法・原産地等によつてその種類が極めて多い。用途は主として燃料。家庭用としては、平素炭納屋などに貯へ、適宜炭斗に出して置き、火鉢に熾して暖を取り、湯・茶・煎茶などの煮焚に用ふる。又消炭は火つきが早いから急に火を欲する場合に便利である。工業用としては石炭に壓倒されて仕舞つた。木炭は時に爆跳して疊を焦し、時に立消えて火鉢を荒涼たらしめる。關西では攝津・池田・伊丹・丹波などが古來よい炭を産出し、京大阪の需要に應じて居り、關東東北方面では岩手縣の炭が多く、東京の需要に應じて居る。

茶家の用ふる幾多のこちたき炭には必ずしも冬としての季感がない場合がある。〔一口〕白炭、枝炭、花炭、毬炭、炭頭、黑炭、炭斗、炭竈、炭俵、炭竈、炭火、炭團。

例句

炭

小野炭や手習ふ人の灰せゝり　　芭蕉（[illegible]）
けし炭に薪わる音かをのゝおく　　同（續深川）
とてもならかの一車とのゐ炭　　其角（五元集）
炭屑にいやしからさる木のは哉　　同（同）
茶の[illegible]炭の黑人を佗[illegible]なり　　同（五元集拾遺）
[illegible]炭[illegible]も火害を[illegible]の[illegible]なり　　同（同）
炭や岩間こかしの清水とくとくと　　同（同）
炭[illegible]火にならぶきんか[illegible]な　　北枝（[illegible]）

炭

片眼山嘶や炭のもゆるまで　沾德（俳諧五子稿）
庵買て且うれしさよ炭五俵　蕪村（新五子稿）
たそかれに吹おこす炭の明り哉　太祇（太祇句選）
末摘や炭吹おこす鼻の先　同（同）
草の庵童子は炭を敲く也　同（同）
炭を挽く下部ゆがまぬ心かな　召波（春泥發句集）
消炭に薄雪かゝる垣根哉　同（同）
うき人の顔にもかゝれはしり炭　同（同）
更る夜や炭もて炭をくだく音　蓼太（蓼太句集）
賣よりも買人寒し炭二升　同（同）
まらう人に炭挽すがた見られ鳧　几董（井華集）
炭なしといふ聲小夜も更にけり　成美（成美家集）
木のはしの法師も炭により給へ　同（同）
炭つむも物氣に入らぬ浮世かな　同（同）
鐘なるやすみのはねしも宵のこと　同（同）
起てから烏聞く也おこり炭　一茶（享和句帖）
くわん／＼と炭のおこりし夜明哉　同（同）
炭の火のふく／＼しさよ藪隣　同（同）
ちとの間は我宿めかずおこり炭　同（旅日記）
うれしさやしらぬ御山のくぬぎ炭　同（七番日記）
おもしろや隣もおなじはかり炭　同（同）
おり炭の打残たる肱哉　同（同）
そとずればぐわくりと炭のくだけけり　同（同）
すりこ木も炭打程に老にけり　同（同）
朝晴にぱち／＼炭のきげん哉　同（同）
炭舟や筑波おろしを天窓から　同（同）
かた炭やいふ事きかぬくだけ様　同（同）
一茶坊に過たるものや炭一俵　同（同）
分てやる隣もあれなおこり炭　同（同）
埋めたり出したり炭火一つ哉　同（同）
京住や五文が炭も日にかける　同（一茶句帖）
炭もはや俵たく夜に成にけり　同（九番日記）
炭迄も鋸引や京住居　同（同）
炭の火や朝の祝儀の咳拂ひ　一茶（おらが春）
炭の火や齡のへるもあの通り　同（發句題叢）
炭の火に栗の松瓜通ひけり　同（一茶發句集）
炭の火に月落烏鳴にけり　同（同）
いたゞいて御文置間やはしり炭　乙二（をのゝえ草稿）

風吹けばふり込雨や炭けぶり　同（同）

すみの香や夜の心を富貴にす　蒼虬（蒼虬翁發句集）

松風やこたつの底の炭の香　梅室（梅室家集）

炭もえて今宵まで殘るけむりかな　同（同）

かた炭や藥所婆々がひとり言　同（同）

炭わりし勇氣暫く殘りけり　同（同）

漱石の遷座の硯に

來山は消し炭淡々はいぶり炭　子規（子規句集）

炭の香や青き疊に蠅も來ず　黒潮（懸葵）

炭切るや心惑へる師の一語　濱人（ホトトギス）

物問へば炭を落して拾ひけり　卜雨（同）

炭つぎしその手を髮へなよやかに　橙子（同）

炭をつぐ妻淋しさや肩のあたり　水子（同）

おだやかな火色となりぬ櫻炭　草城（同）

炭ほこり睫毛にかけて盲かな　四方塚（同）

學問のさびしさに堪へ炭をつぐ　誓子（同）

看病やをりをり炭をつぐばかり　手古奈（同）

いつよりぞ炭ひく音のきこゆなり　等子（同）

弟の下宿おとづれ炭をつぐ　稍女（同）

炭をつぐ妻にどこやら老の來し　清女（同）

したゝかに法事の炭を掩きにけり　紅醉（同）

炭舟や正月すぎし熊野川　山不鳴（同）

炭馬の萱がくれ來る端山かな　夜潮（同）

大原路やうしろ見せゆく炭車　耿陽（同）

奔流や舳落しに炭荷舟　長船（同）

はかり炭買ひゐるところ見られけり　曉水（同）

傘さして炭背負ひ來る女かな　杜泉（同）

炭揚げて熊野灘の汚れたる　三山（續ホトトギス）

枯菊にさし向ひをり炭をひく　たかし（同）

炭負うて三ッ峰道を下りくる　迷子（同）

嫁馬と云ふ炭負ひの道具あり　林王（同）

炭出しに出てはつき來る駒可愛　風生（同）

炭ついでかそけき音のたちそめし　つや女（同）

炭をつぐ[illegible]な音のして居り[illegible]　よし子（同）

兄入院

炭一つ落ちてひゞきし廊下かな　[illegible]女（同）

俵より炭うつす大火鉢かな　虛子（[illegible]）

[illegible]の山よりおろす炭　同（同）

白炭

古書校註

【三才圖會】　白炭。泉州横山、同横尾山中之を出す。山茶の枝を焼き、再び焼きて赤からしめ、灰の中に埋むれば則ち白色となる。池田より出づる者は、躑躅の根也。共に茶會の用と爲し、加久伊炭と名づく。蓋し茶會を爲すの處を圍（加古伊と訓ず。久と古と通ず）と曰ふ。總州久留利の炭之に次ぐ、又石灰を塗つて白炭と僞る者有り。

【滑稽雜談】　泉州府志に曰、横山炭、和泉國久鬼村より出づ。本朝茶家者流、世々之を賞す。之に河内國香瀧炭と謂ふも亦、北山の東北より出づる也。○雍州府志に曰、香瀧炭、是を白炭と稱す。細炭とも謂ひ、茶炉中の飾と爲す。○和俗、是を枝炭、又は飾炭と稱す。茶人の用ふる所也。

【年浪草】　本朝食鑑に曰、白炭は、躑躅の古木及び蟠屈の魁根を焼きて炭と爲し、再び其の炭を以て紅に煆きて灰中に埋るときは、則ち白霜を生じ、脂粉を傳くるが如し。此を白炭と稱すと云々。

季題解説　黑炭に對して白炭といふ。石竈で焼いた堅炭のことである。石竈といふのは石と土で築いた竈で、其の中に炭材を詰めて點火、炭化し、それを千度或はそれ以上の高温度に白熱したものを竈外に出して土を被せて消火するのである。炭は外面が灰白色になるので白炭の名がある。土地によつては白炭のことを白消とも云ひ、又石竈で焼く爲め石竈炭とも言つてゐる。

白炭の最上のものは姥芽樫の備長炭で世界無比の良木炭である。落せば金屬性の音を發し熾せば高熱の焔を立てる、元祿の頃紀伊の備後屋長右衛門が創製したので此名がある　産地は紀伊であるが伊豆からも少し出る。白炭は硬炭とはいふものの雜木を焼いたものは樫や椚の堅木の黑炭（軟炭）よりも軟かである。そして雜木の白炭は輕くて立消えになり易い。白炭の主要産地は秋田・山形・新潟・長野・高知・大分・宮崎などである。

又別題枝炭のところにある通り、茶の湯用の枝炭のことも白炭と云ひ、和歌などにも詠ぜられてゐるが、特別な表現をしない限り一般に白炭と云へば本文の黑炭に對する白炭のことゝ解すべきであらう。　**参照**　炭、枝炭

例句

白炭　　白炭や彼うら島が老のはて　　芭蕉　（六百番發句合）

枝炭

横山炭　飾炭

季題解説　枝などを焼いた細丸の木炭を云ふので、商賈上、中粉とか品等の上から等外などとも呼ばれてゐる。七輪用として家庭に使用される。然し一般に枝炭と云へば——昔から歌や俳句等に詠まれた枝炭と云ふのは——

茶の湯に用ひる枝炭のことを指すのである。躑躅の枝を焼いた直徑一分二厘内外、長さ四寸位の二股か三枝の炭で、普通それに石灰を眞白に塗つてある爲めに白炭とも云ひ、泉州横山に産するところから横山炭とも稱はれてゐる。　**參照**　炭、白炭、花炭

例句

枝炭
枝ずみのことしは折れぬこぶし哉　一茶（旅日記）
枝炭のきん〳〵鳴つて火となりぬ　具圓（同人）
枝炭の火となり長し灰の中　泊雲（ホトトギス）

花炭（はなずみ）

季題解説　花炭は茶の湯の飾り炭として使はれるものであるが、今は一般には使用されてゐない。
花炭は慶長年間、奥州伊達家の御用炭焼が焼方を考案したもので、創業から十七世になるといふ。維新後も引續き高貴の方から御用命を受けたとの事である。製法は祕法としてあるので判然しないが、多分炭竈の燒の處に置いて燒くものらしく、草木の枝に葉や蕾・實などといふ自然の儘炭化して、チョークを塗つたものである。原料は何などでも出來るが、樹木の方が完全に燒ける。明治四十年頃、伊達家から内國勸業博覽會に出品したものを帝國大學に寄贈されてあるが、それは椿の枝葉蕾・伊吹木の枝葉・梅の枝蕾・南天の枝葉實・柾の枝葉實・山茶花の枝葉蕾などで、隨分凝つた風雅なものである。
寫眞は帝大教室備品、三浦博士寄贈、向つて右から椿（葉蕾）、伊吹、南天、[illegible]炭、枝炭。

廻炭（まはりずみ）

廻炭　廻花

古書校注　【年浪草】凡そ茶會の炭・花は、其不知の人に隨つて、見る所の善惡有り。

故に、未續の人常に數回之を習ふ。故に同士相集つて、上座より下座に至るまで、交〻炭を置き花を挿むの業を學ぶ。之を廻炭、又廻花と謂ふ。

註（早く「増山井」などにも見えるが、季題として集つたのは誤であらう。）

季題解説　茶の湯の用語であるが、これも殆ど現在用ゐられてゐない。大勢のお稽古の時など、炭手前を習ふ爲めに正客から御詰まで次々に炭つぎのことなどをするのを云ふのである。冬は爐、夏は風爐で行はれる。

炭頭（すみがしら）　燻炭（いぶりずみ）

古書校註

【年浪草】炭頭と稱する者は、一俵の內僅に十或は二十許り、其の大なる者を以て之を炭頭と謂ふ。

【栞草】炭頭。［玉海集］（貞室撰）けぶりしは香をとめぬるや炭がしら　宗方。［青藍云、伊豫の産某云、我國にては、炭のいまだ燒き盡さず煙る（ケブ）を炭がしらといふ、云々。　宗方の句、此の意に合へり。年浪草に、一俵の內にて大なる炭をいふといへるは、理り聞えたれど、さては風情うすし。

季題解説　粗悪な黑炭の中によくあるもので、燒方が不完全な爲め炭化しきれないで燻ぶる炭を云ふのである。炭をついだあとで鼻を突くやうな臭ひと盛んなくすぶりを立てゝ人を面喰はし、一風景を點出することがある。が、中には節色をしたり甚だしいのは端の方は木のままで一見炭頭といふことが明かなのもある。近頃は炭竈も改善され檢査も八釜敷いので、昔のやうに買炭の中に發見することは甚だ稀になつた。東京では炭頭とは云はないで燻炭（イブリ）と呼んでゐる。　參照　炭（スミ）

例句

炭頭　池田炭や名のる天下の炭がしら　宗因（梅翁宗因發句集）

獸炭（じうたん）

古書校註

【増山井】羊琇といふ者、獸の形に炭さして酒をあたゝめし故事也。（一）朗詠集。

【滑稽雜談】語林に云、晉の羊琇、（略）性豪俊、洛下林木少く、炭貴くして粟の如し。琇乃ち小炭を擣ちて屑と爲し、物を以て之に和して獸形を作る。後に何邵の徒共に集る。乃ち酒を温むるに、火に猛獸を然（モ）すことを以てす。皆口を開き人に向つて赫々然たり。諸豪貴皆之に效ふ。○和朝にも製する事久し。古歌にも之を詠めり。文明十一・十八、終夜人こそとはね獸ものゝ炭の火をのみ我が友として　道興。

【栞草】［國老談苑］宋の太祖、嘗て冬月獸炭を徹つ。左右啓して曰、今日苦（ナ）寒（ム）し。上の曰、天下の民寒き者衆し。朕何ぞ獨り温（アタ）（ヽカ）ならんや。

注 ○白氏文集の賣炭翁の詩（新樂府）に、一賣炭翁、薪を伐つて炭を南山の中に燒く、滿面の塵灰煙火の色あり、兩鬢蒼々として十指黑し、炭を賣つて錢を得る何の營む所ぞ、身上の衣裳口中の食なり。憐れむべし身上の衣正に單なることを、心に炭の賤しきことを憂へて天の寒からんことを願ふ云々」などを引くべきである

季題解説 都會では大抵炭は炭屋から取るのであるが、田舎では山から炭賣がやつて來て、冬中つかふだけの炭を買ひ込んで置く所が多く、自然その炭賣は、毎年の商ひであるから顔馴染が出來て、親の代から來馴れてゐる炭賣が今もきまつて還つて來るといふやうな事が多い。從つて外の商人とはちがつて何となく親しみがあり、概して山家育ちの純朴な爺さんが多いのである。 参照 炭。

例句

炭賣

炭賣りは炭こそはかれみやこ鳥　其角（五元集）
炭うりに鏡見せたる女かな　蕪村（蕪村句集）
炭賣は櫻に來つる便かな　同（落日庵句集）
炭賣よ手なら顔なら夕まぐれ　太祇（太祇句選）
炭うりや京に七ツの道入口　召波（春泥發句集）
すみ賣にそばえて猫のよごれけり　也有（蘿葉集）
炭うりや跡から白き豆腐賣　同（同）
炭賣の翁や袖は染もせで　同（同）
何事もいはず炭賣翁かな　闌更（半化坊發句集）
炭賣は小野で別し碁打かな　巢兆（曾波可理）
遠緣といふ炭賣に逢はゞやな　禪寺洞（ホトトギス）
炭賣女吉野樗と云ふを穿く　早茅（續ホトトギス）

炭俵（すみだはら）　炭叺（すみかます）

季題解説 炭俵といふやうなものでも仔細に觀察すると、なか〳〵風趣がある。木炭は大別して白燒（堅炭類）と黑燒（切炭類）の二種があつて、白燒の方は普通萱で作つた炭俵に入れてあり、黑燒の方は藁で作つた炭俵に入れてある。支那炭は籠に入れてあるのでこれは一向に炭俵といふ感じがしない。

炭俵は萱のものにも藁のものにも必ず口蓋が附けてある。口蓋は椿・櫟・うまべ・櫻などの小枝を葉のついたまゝわがねて丸く扁平にしたもので、山では俵は俵、口蓋は口蓋でそれぞれ別の職人が專門に作つてゐる。それから空俵は竈に焚く鉋屑を容れる用に使はれ、不用になつたものは焚いて藁灰にする　特に萱製の炭俵を焚いて作つた藁灰は火持ちがよいといふので珍重されてゐる。 参照 炭。

例句

炭俵

冬構へ一にたはらや炭俵　宗因（梅翁宗因發句集）

炭燒（すみやき）

古書校註

【御傘】炭やき、冬也。〈略〉炭竈は山類也。炭やきは山類にあらず、人倫也。

【三才圖會】凡そ炭を燒く窯は、瓦窯の如くにして木を積み、一口より火を燃し、火相通じて後口を塞ぎ、一小窓を明けて煙を出す。火青色を帶びて烟徹れば即ち窓を塞ぐ。如し早ければ、則ち火未だ徹らざる者有り。如し遲ければ則ち性虛にして惡し。蓋し窓を塞ぐ三四日、熱して後之を取出す。

【滑稽雜談】今世炭竈を構ふ所々多し。山州小野、或は丹州にも同名有り。泉州光の瀧、若州若川等也。其の産稍々略也。其の外、西國・四國・東國等おほく侍るなり。

季題解說　炭燒の時期は現今では何時とは限られてゐないが、昔は農家で冬籠の間の副業として炭を燒いたもので、沿革的に冬の季題として今日も殘つてゐるのであるが、炭が冬である以上炭燒も炭竈も冬の季題として季感を失つてゐない。炭燒は山の立木を伐採して材料とするので、立木を伐採し製炭するに便宜な位置を選び、山峽とか澤合ひとかの傾斜面に炭竈を築く。そして其近傍に掘立小屋を作り、そこに寢泊りして生活を營み乍ら炭燒に從事するのである。炭を燒くには炭竈の中に炭材を仕込んで蒸し燒にするのであるが著火後四五晝夜を要する。炭燒の話によると煙筒から揚る煙の色で燒け工合を判斷するのださうである。黃色、黃褐色、褐色、青色薄淡黃と段々に變化し、燒け終る頃には煙の色が透明になると云ふ。消火後二三晝夜の後竈から炭を出して俵に詰め、馬・馬橇などで搬出する。かうして一山の炭燒を終へると他の山に移動するのである。炭燒には大抵竈主があつて炭を燒く者は雇人である。妻子ある者は家族を引つれて板小屋に移住し、山間の侘び住ひを忍び乍ら炭燒に從事する。炭燒の子供等は毎日山を下つて程遠い小學校の分教場に通ふ。

炭燒と言へば炭を燒くといふ意と、炭を燒く男といふ意とがある。參照　炭（すみ）　炭竈（すみがま）

例句

炭燒

炭やきの獨りごあらん釜のきは　其角（五元集）

炭燒に汁たうべてし峯の寺　蕪村（夏より）

明ぼのを結びながすや炭けぶり　巢兆（曾波可理）

炭燒の顏洗ひ居る流かな　鳴雪（春夏秋冬）

炭燒の妻のちひさき鏡かな　船山（同）

中腹に月の山影炭を燒く　梅東（ホトトギス）

人の居る炭燒小屋を覗きけり　風生（同）

葛城のしもとの炭を焼きにけり　義甫（同）

註　しもととは葛城山中に生ずる樹の名なり古歌にもあり

炭焼や炭の上なる花がるた　翠鳥（續ホトトギス）

炭焼が通り獵夫が通りけり　東洋（同）

炭焼とわかれて萱を背負ひけり　羽公（同）

炭團（たどん）　煉炭（れんたん）

古書校註

【三才圖會】按ずるに、炭團造る法は、炭の末を用ひ、海蘿（フノリ）汁を以て捏ね圓め、或は方或は圓、意に任す。凡そ炭の細なる者を炭灰と名づく。而して松葉の炭最も佳し。犬蓼の莖・蜀黍（カラキビ）の莖、炭に焼きて炭團と爲す。並に能く燼を保つ。

【滑稽雜談】（一）此のもの古代より有る事を聞かず。近世埋火の用に、炭の錬屑を細末にして、海蘿汁を以て、大さ鷄卵ばかりに丸くして、干しかわかし用ゆ。硬炭の粉を用ゆるもの、久しく火を養ふ。榎炭の粉を用ゆるものは、火ひさしく有りがたし。又、近來有明炭團といふ物を製す。廻り二寸許りの竹のごとく、長さ一寸ばかりにして、只閨中烟盆の小爐に便あり。寢に望む時是を活くるに、明旦に至りて火猶殘れり。よて有明といふならし。此のもの、又炭の類にて、專ら埋火の用なれば、冬の季とすべし。

註（一）本書は其諺の編に係るもの。

季題解説

消炭又は粉炭を臼で搗き、三分の一ほどの葉灰をまぜ、布海苔（フノリ）又は黄蜀葵汁にて練り固め、固めて日に乾かしたものである。炭團法師と云ふのは、炭團の形を僧の頭に擬して言つたもので、蕪村の「炭團法師火桶の窓から窺けり」から出てゐる。特に煉炭といふのは石炭を材料としたもので、大規模のものは炭礦で機械を使用して澤山製造して居り、小規模のものでは石炭問屋などが石炭屑などを集めて都會の裏町などで職工の手でささやかに作られてゐるといふものもある。形も大きさも色々である、船艦用・工業用・家庭用と用途も色々である。炭團も煉炭も火の保ちがよく、色々便利に使へるので近頃家庭でもてはやされてゐる。（三重炭）

例句

炭團

雪の降夜握ればあつき炭團哉　鬼貫（鬼貫句選）

炭團法師火桶の窓から窺けり　蕪村（新選）

さむしろに炭團の跡や梅の花　宜麥（蕉門[illegible]）

むつかしく炭團に炭をつぎかけし　子規（子規句集）

寄り合うて焔上げゐる炭團哉　月斗（同人）

まつたくの火の移りたる炭團かな　道（ホトトギス）

枯菊の影ひきそふや干炭團　玉城（同）

[illegible]　夜までも去年の炭團の火を埋りし　虚子（ホトトギス）

參考　好色一代男に、うるみ朱の[illegible]に、炭團の埋火たえず。

助炭（じよたん）

古書校註

【年浪草】夏・秋、茶炉を覆ふ。之を守洞と謂ふ。即ち氣爐也。冬・春、地炉を覆ふ。之を助炭と謂ふ。助炭は[illegible]に似たる者也。

季題解説

火鉢又は爐の上を掩つて火氣の散逸を防ぐもので、火爐の大小により木の枠を作り、天井・周壁を紙でもつて張つて作る、更に渋などを上ワ張りして保温の助けにするやうなこともする。（[illegible]）火鉢。

例句

助炭

火起りて晝の助炭に映りけり　伊勢寺（ホトトギス）
大助炭團十郎の江戸繪かな　蝶芴（同）
張りし夜をほのぼの匂ふ助炭かな　王城（同）
祇王寺は助炭を貼つて居られけり　秋琴女（同）
ほんのりと音のかわける助炭かな　一樓（同）
焦色となりし助炭の江戸繪かな　雄月（同）
靜かさや助炭の内に物煮ゆる　五郎（續ホトトギス二）
ぬくもりし助炭の上の置手紙　つる女（同）
浮世繪の顔かこけゐる助炭かな　蝶々（同）
鉛筆で助炭に書きし覺え書　虚子（同）

埋火（うづみび）

古書校註

【山之井】うづみ火は、ゆるりと足をあぶるとも、みつがなわにゐて、あたるなども云ふ。

【年浪草】菅三品詩に曰、看るに野馬無く、聽くに鶯無し。爐裏風光火に迎へられたり。此の火は應に花樹を鎖して取るなるべし。對へ來れば終日春情有り。○後拾、埋火のあたりは春のこゝちして散りくる雪を花とこそみれ　素意法師。

季題解説

爐や火鉢の灰に埋めた炭火のことである。とつぷりと灰の中に眞紅な火が埋まつて居るのを掘り返した時など嬉しい感じがする、頼もしい感じがする。

例句

埋火

埋火や壁には客の影ぼうし　芭蕉（續猿蓑）
埋火もきゆやなみだの烹る音　同（曠野）
埋火もしらぬ命に息かけん　來山（[illegible]いま宮草）

埋火　埋火をかき起したる猫かた　狐草（ホトトギス）
　　　埋火や客に乏しき夜のもの　杳波（同）

石炭（せきたん）　すみ

季題解説　石炭の成因は太古の植物が地中に埋沒し炭化して出來たもので、年代又は地方によつてその品質も異り隨つて其用途も色々である。全世界の產額の約四割は北米が占め、本邦の產額の約四割は九州が占めてゐる。本邦に於ける石炭の發見は文明年間九州三池近傍と傳へられて居り、始めは「燃ゆる石」と唱へた。石炭の呼稱も九州だけでも「たきいし」「いしずみ」「馬石」「臭石」等々數十種に及んでゐる。坑內から採掘された石炭は選炭場で挾石（ボタと稱す）・劣等炭などを選別し、更に水洗機によりて水選され、所謂「黑ダイヤ」の面目を整へるのである。

石炭風景は矢張り需要期の冬季に於て味ふべきものが多い。つゞれ帆に灰色の海行く運炭艀、雪積る貯炭の山、霙の中の沖仲仕の船積作業（艀から人間の長いつながりが甲板迄つゞいて次々に籠で運ばれる、石炭が機械のやうに動くので「ヒユーマン・エレベーター」の稱がある。）または教會で說教に氣兼ねしながら、からからと入れる煖爐の石炭などとりどりである。

石炭の豐富な地方では日常の燃料に主として用ひる爲め、これを「すみ」と稱し、一般「炭」と稱するものを特に「木炭」と呼んでゐる。〔季題〕炭

例句
石炭　石炭を運びこぼしぬ海深し　零餘子（ホトトギス）
　　　春迎や石炭がくれ石炭夫　竹公（同）
　　　石炭の雪にまみれてこぼれたり　漁火（同）
　　　なりあひに石炭盜む老婆あり　桂宇（同）
　　　石炭に汚れたる帆をかゝげたり　正蜂（同）
　　　石炭の山の間の運河かな　東子房（續ホトトギス）
　　　石炭を運ぶ港の女かな　四佛（同）
　　　石炭車門司に入り來る長々と　橙黃子（同）
　　　旗を振る後尾車掌や石炭車　同（同）
　　　石炭をはみし煖爐の口はあり　虛子（同）

參考　內地石炭生產高、昭和五年三一・三七六・〇〇〇瓲。世界に於ける第七位を占む。我が國石炭の元植物は、主として蘆荻類にして、繁茂し枯死すること數千萬回に及んで、その殘骸の堆積して生じたもの。

焚火（たきび）

庭焚火（にはたきび）　山焚火（やまたきび）　野焚火（のたきび）　朝焚火（あさたきび）　夕焚火（ゆふたきび）　焚火跡（たきびあと）

季題解說　暖を取る爲めに戶外で焚く火である。大工・土方・樵夫・漁夫、さ

うした寒い時でも外で仕事をしなければならないものが、朝のうちだけでも焚火をして暖を取るのである。一體火といふものは一方怖ろしいものであるが、一方また親みのある懐しいものである。二三人寄れば、あたりの木屑を集めて焚火をして圍む、さうしてあたりながら世間話をする。一つ焚火が出來ればそれに加はるものがある、かうして暖を取る以外に團欒の氣持を樂しむのである。だから焚火は庭に焚かれることもある、普請場に焚かれることもある、町中に焚かれることもある、山道に焚かれることもある、氷の上に焚かれることもある、大きい焚火もある、小さい焚火もある。兎に角、焚火は冬の一つの美しい色彩である。

例句

焚火

祇王寺の尼と語らふ焚火かな　黄石（同人）
東西に焚く火淋しや須賀の浦　躑躅（ホトトギス）
須磨寺の焚火にあたる朝散歩　同（同）
霜天に火柱揚げて焚火かな　たけし（同）
鍬とれば焚火の醉のさめにけり　泊雲（同）
大いなる芹籠青き焚火かな　果采（同）
焚火人面罵に堪へてゐたりけり　橙黄子（同）
焚火燃え盡きて山影を正しうす　蘭夢（同）
梢なる殘り葉さわぐ焚火かな　俳小星（同）
雨に映りて燃え上りたる焚火かな　かな女（同）
雪山へ焚火の眼上げにけり　青燒劒（同）
焚火すや何時も來てゐる番鴨　冬魚（同）
野々宮や鳥居の前の焚火跡　一水（同）
火になりて樹隱見ゆる焚火かな　禪寺洞（同）
山賤のふぐりをこがす焚火かな　筑紫郎（同）
海女去りしあとの焚火に寄りにけり　雁來紅（同）
一煙仙洞御所の焚火かな　暮情（同）
氷上の破れ跡とて焚火あと　若沙（同）
手にしみし焚火のにほひ儚なれや　菁果（同）
流氷に旭の當りきし焚火かな　紫燕子（同）
いぶかしく焚火あがれる端山かな　秋櫻子（同）
老尼出て焚火の子等をいましめし　萍子（同）
荒浪に火屑飛び散る焚火かな　曉水（同）
叱られてなか〳〵燃ゆる焚火かな　湯雨（同）
浪頭來つゝとゞかず磯焚火　花谷（同）
焚殼はたきあひたる別れかな　雲泉（同）
夜の暗に人かくれゐる焚火かな　念腹（同）
清流の崎の上なる焚火かな　不乾（同）

焚火

都鳥二三羽とべる焚火かな　枴童（ホトトギス）
潮たるゝ焚火の蜑の腰ごろも　松籟（同）
もえさかる焚火の色の變りけり　蒼苔（同）
鞍馬山見上げて門に焚火かな　泊月（同）
鶺鴒の遊べる焚火ほとりかな　木母寺（同）
朝々の焚火に焦げし籬かな　愁去子（同）
うしろより旭射し來し焚火かな　たもつ（同）
焚火あと火づたひ消ゆる松葉かな　清三郎（同）
（舊臘例會）
養船のとほる景色の焚火かな　秋櫻子（同）
焚火する人輪の中の盲かな　青甫（同）
雨つぶのぼつ〳〵はじく焚火かな　村家（同）
焚火すや輝きそめし露の玉　橙雨（續ホトトギス）
煙る木は滬に蹴込む焚火かな　白雲（同）
峠路や焚火のあとのまだ溫くし　石竹（同）
焚焚宮居をこゆるかしこさよ　夏山（同）
鶏頭を目がけ飛びつく焚火かな　たかし（同）
つはの葉に焚火ぼこりの下りるなり　みづほ（同）
枯菊をあつめし今朝の焚火かな　たまゑ（同）
青き葉の火となりて行く焚火かな　同（讀ホトトギス）
夕靄の暮かゝりたる焚火かな　虛子（句集虛子）

榾（ほた）

ほだ　根榾（ねほた）　榾火（ほたび）　榾の宿（ほのやど）　榾の主（ほたのぬし）

古書校註

【滑稽雜談】和訓義解に云、ほたは火たもつの略也。○寒國往々に之を用ふ。四時不斷にして、其の火先祖より子孫に相繼ぐなど俗に云ふ。然れ共、其の事の用ふる所、寒を禦ぐの具也。

【篗纑輪】材に伐り取りたる木の根を掘り出したるもの也。關東にて根骨（ねこつ）といふ。山家玄冬の爐に晝夜之を焼いて、寒を凌ぐもの也。

【年浪草】文房淸事に曰、骨薫炭（かつくんたん）、云々。榾炭也。榾炭は、攝陽群談に云、河邊郡一庫（ひとくら）村の山林、豐嶋郡池田山村の山家、歷木の根を掘り採りて竈に焼き、能く火を持つこと久し。又榾とばかりは、炭に焼かぬ以前、根を掘出したる處を云ふ。是亦埋火の用とすと云々。

季題解説　山家の冬は爐を中心に營まれる。家族や客が皆めぐることの出來る程の大きい爐には、榾がさかんに焚かれる。榾は多く根榾と言はれる木の根の乾かされたものが用ひられる。秋の頃から用意され蓄へられてあるそれらの榾は、めら〳〵と燃え急ぐやうなことはなく、靜かに力强く永い

榾火を噴いて、長い夜をすごす人々に何よりの恵みを與へる。榾の宿はさうした火の燃えてゐる家の事であり、榾の主は榾をくべながら何くれと一座の世話をしてゐる家の主を言ふのである。（鳴雪）

例句　榾

はづかしや榾にふすぼる煙草頬　鬼貫（鬼貫句選）
榾の火や曉がたの五六尺　丈草（丈草發句集）
榾の火に親子足さす侘寐かな　去來（去來發句集）
父と子とよき榾くべしうれし顔　太祇（太祇句選）
榾けぶる住居侘しや疊なき　召波（春泥發句集）
榾の火にあやしき僧の山居哉　同（同）
榾の火やこたつは京の物語り　也有（蘿葉集）
榾の火や家につたはる老ひとり　蓼太（蓼太句集）
榾の火や祖師の胡座の黒びかり　同（同）
いちはやくもへて甲斐なし榾の蔦　白雄（白雄句集）
をかしげにもへて夜深し榾の節　同（同）
妻も子も榾火に籠る野守かな　同（同）
曉や榾焼そへる山おろし　曉臺（曉臺句集）
親と子のうき世やかたるほたの影　同（同）
雉子兎釣しかけたり榾あかり　同（同）
榾焚てよしつね殿をこひき哉　巣兆（曾波可理）
翁さびうしろをあぶる榾火哉　一茶（一茶句帖）
大名の一番立のほた火かな　同（同）
榾の火に背中向けり最明寺　同（同）
子寶がきやら〳〵笑ふ榾火かな　同（おらが春）
榾の火や目出度御代の顔と顔　同（[illegible]）
君見よや榾代出す窓の先　乙二（[illegible]）
庭中の夜に逢ふ寺や榾あかり　同（同）
一里ほど見かけて來たり榾明り　梅室（梅室家集）
ほだ焚やけむりの中に嫁が顔　同（同）
點出せとすゝめる榾の[illegible]かな　同（同）
鹽賣の赤手さし出すほた火かな　同（同）
雛や榾焼く夜の火のうつり　酒堂（桃の實）
榾の火に黑の色もかはりけり　探志（[illegible]）
榾焚て妻や待らん[illegible]　草紗（[illegible]）
更くる夜のところ〳〵と榾火かな　[illegible]（[illegible]）
ところ〳〵と榾火消ゆく[illegible]かな　[illegible]（[illegible]）
榾明り藁打石が見えにけり　石居（同人）

榾割れは榾蟲雪にころげけり　竹石（雪笑）
芝壁のまつくなるまで榾火かな　篤王（ホトトギス）
しぶ〳〵と燃えて一笛吹く根榾かな　へき生（同）
雪にやけ日によごれ榾や夫婦かな　石嘯（同）
文讀んで烈火の怒榾を焚く　蛇笏（同）
天井を這ふ梁や榾の宿　胡刀（同）
寢てあればきやすに燃ゆる榾火かな　義朗（同）
榾の火にあたれや子等よ雨が降る　併小星（同）
人ほけて年月もなし榾の宿　蕪村（同）
預け兒の榾に眠り居たりけり　突面（同）
榾の宿内輪話の影法師　旲籠（同）
榾折るや老の力の一杯に　十七星（同）
榾主の座右に置いて三世相　鳴子（同）
榾埃かゝる蒲團に病みにけり　布山（同）
榾主の木もて肩うつ疲れかな　双葉（同）
榾焚くやわらぢばきなる厨妻　穗洋（同）
榾主は眠たき合點々々かな　三千穗（同）
うれしさは榾火にかざす山の幸　三山（同）
賑はしき榾のほこりの上り下り　先頭（同）
榾主のそびらに灯る佛かな　樫子（同）
榾の宿豺面なる犬蓄へり　烏頭子（同）
賴母子のあとのばくちや榾の宿　夜野火（同）
榾の宿學問をする童あり　仙者（同）
老眼の愚にうるむ榾火かな　公圭（同）
榾煙しみ出る雪の扉かな　光葉（同）
すゝけたる泥繪草紙や榾の宿　竹秋子（同）
酒甕の腹にうつれる榾火かな　峽洞（同）
干榾に鳴き居る鷄追ひにけり　楊童（同）
榾主の居眠つてゐるねずみかな　紅醉（續ホトトギス）

孤獨生活

朴の葉にのせて味噌燒く榾火かな　野風呂（同）
くらがりや榾をはなれし煙草の火　水堂（同）
熊笹の山ふところや榾の宿　虚子（ホトトギス）

爐（ろ）

圍爐裏（ゐろり）　煁　爐明

古書校註

【三才圖會】煁（比太岐）、又圍爐裏と名づく。（略）按ずるに、爐は、本、盧の字也。後に火を加へて爐に作る（俗に炉に作る）。火を居く所也。山家には

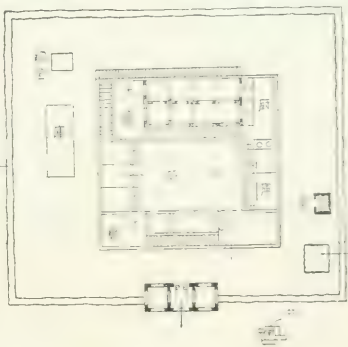
爐ほとりや[illegible]茶一把　雨石（ホトトギス）
父死してより用ひざる大爐かな　倖堺（同）
爐の端にかしこまり[illegible]かな　長猗（同）
爐の香のこの[illegible]、法話かな　勝雲（同）
いとゞしき獄夫の狐臭爐のほとり　誓子（同）
爐の兄に聲とがらして斧を置く　楙童（同）
圍爐裏火や母の膝邊をちろつける　夏山（同）
篠竹の燃えて笛吹く圍爐裡かな　軒月（同）
家路なく小家の障子爐火映ゆる　揖岑（同）
爐ほとりの著物綺なる小座ぶとん　葉舟（同）
燒岳の山鳴りしげき爐べにあり　夢朗（同）
はるばると來し故里の大爐かな　一笑（同）
のりのみちよろこびあへる爐邊かな　積翠（同）
爐話に輪袈裟はづして隨德寺　月倚（同）
朔日の神の灯ともる圍爐裏かな　虹乙（同）
閻王の前の圍爐裏を焚きにけり　南浦樓（同）
北温泉にて
白樺の榾ばかりなる大爐かな　一宿（同）
しぐるゝと圍爐裏離れぬ男かな　あふひ（續ホトトギス）
炭つぎて暫く爐火の暗さかな　ゝ石（同）
小窓より峠の見ゆる圍爐裏かな　京童（同）
あひつれて煤踊りそめ爐火おこる　青畝（同）
般若湯・人たのしむ爐べりかな　白濤（同）
爐火赤くくるゝに間ある閑居かな　虚子（句集虚子）
水させば自在の釜の小搖れかな　同（續ホトトギス）

ストーブ　暖爐（だんろ）　煖爐（だんろ）

季題解説　冬季用ふる暖房裝置で、普通は石炭・コークス・薪を焚く場合が多いが、便宜上から「電氣ストーブ」「瓦斯ストーブ」「石油ストーブ」も用ひられる。**參照**　爐。　スチーム　溫突（オンドル）

例句
暖爐
消燈の鐘鳴り渡る暖爐かな　子規（子規句集）
ストーブにあさましき縮のかゝりけり　一轉（ホトトギス）
ストーブや金の鳥啼く置時計　喜太郎（同）
復讐の心暖爐の燃ゆるなり　丁駿（同）
港町こまごまと見えて暖爐かな　千葉城（同）
ずぶ濡れの裳ひとまらぬ暖爐かな　松毬路（同）

いふのである。朝鮮式の家屋は殆ど全室この設備を有つてゐる。設備は或一室或は二室に施されるのではなく、その家屋全部に行はれ、たゞ僅かに一ケ所位大廳といつて板の間があり[illegible]部を整へたり夏季食堂にしたりする箇所（上流の家屋には大廳二ケ所のところもある）かこの裝置を有たない。この裝置がある間を溫突の間ともいふやうであるが、家屋全體を溫突と云つてゐる。一方に焚口から、床下に煙道を設けて焚口から火煙を通じて室を溫めるのである。その裝置の大略をいふと、屋の或る一方に焚口を設け、地面はそこから向ふ上りの緩勾配がつけられ處々に石を置き、その上に扁平な石（朝鮮の天然産）を載せ、更にその上に土を厚く塗り、乾かして、その上に油紙（或はアンペラ）を布き居室とするのである。この石を置く構造は稍ゝ原始的のもので、現在最も普遍的なのは緩勾配の地面に粘土と石片などを交互に重ねた壁を築いて溝を設け、これを煙道としたもので、煙道の溝の上は例の扁平な石で蓋をなし、その上に土を塗り、油紙などを布く、この煙道は焚口から放射狀をなしてゐる。最近土管を以つて煙道としたものもあるさうである。焚口には多く竈が築かれ、こゝで煮炊の用を辨ずる。燃料は草や松葉、或は薪などであるが、濟洲島などでは乾いた牛馬糞も燃料とする。屋後に煙筒の設けあること勿論であるが、時として數間離れたところに設けられてゐることもある。以上は床下の裝置の大略であるが、尚その家屋は三方は厚い壁をもつて圍まれ、一方に觀音開の障子があり出入口となつてゐる。他方に高い窓やうのものがついてゐるのもあるやうである。樣式は家の大小に依つて多少異つてゐるが大體に於て一定してゐる。屋根は瓦もあるが、多くは藁葺である。

溫突は夏期に於ても一ケ月に二度或は三度焚いて煙道に煙を通す。これは濕氣を攘ふこと及び蜘蛛などに依つて煙道を塞がれるのを防ぐためである。又家鼠などに依つて煙道が毀たれることがあり、毎年又は隔年或は三四年毎に改築するのである。尙、夏時に於ける煮炊は別の設備に依るといふことである。

圖中、厨のところに[illegible]があるのは竈で溫突の焚口である。厨に接近した間が内房、大廳は内地建物の廊下とも見ることが出來るもので、來客と遊ぶところでもあるらしい。【參照】ストーブ　ペーチカ

つく〳〵とものゝはじまる火燵哉　鬼貫（鬼貫句選）
火燵出て古郷戀し星月夜　言水（俳諧五子稿）
古火燵また足はさむわかれかな　來山（いまみや艸）
打綸であげた魚見る火燵哉　同（續いま宮艸）
八疊のすみに目をもつ巨燵かな　浪化（浪化上人發句集）
下京を廻りて火燵行脚かな　丈草（丈草發句集）
草庵の火燵の下や古狸　同（同）
影法師の横になりたる火燵哉　同（同）
ほた〳〵と側目さし込火燵かな　同（同）
紙子着てよれば火燵のはしり炭　同（同）
守り居る火燵を菴の本尊かな　同（同）
眞夜中や火燵際まで月の影　去來（去來發句集）
看病も一人前の火燵かな　同（同）
火燵から靑砥が錢を拾ひけり　其角（五元集）
寐心やこたつふとんのさめぬ中　同（同）
火燵のうたゝ寐夢に眞桑を枕とす　同（五元集拾遺）

[illegible]
つとめよと親もあたらぬ火燵哉　嵐雪（玄峰集）
婆婆に獨淋しさおもへ置炬燵　支考（蓮二吟集）

尼になりし時
髮を結ふ手の隙明て炬燵かな　千代女（千代尼發句集）
腰ぬけの妻うつくしき炬燵哉　蕪村（日發句集）
巨燵出て早あしもとの野河哉　同（蕪村句集）
宿かへて炬燵うれしき在どころ　同（新五子稿）
いんで來る人むつまじき火燵哉　同（落日庵句集）
宿替にすぼりとはまる火燵哉　同（同）
下戸ひとり酒に逃たる火燵哉　太祇（太祇句選）
恥かしやあたりゆがめし置火燵　同（同）
草の戸や巨燵の中も風の行　同（同）
淀舟やこたつの下の水の音　同（同）
火を運ぶ[illegible]の巨燵や夕嵐　同（同）
巨燵してくれる隣の罪業哉　召波（春泥發句集）
山鳥の病妻へだつ巨燵哉　同（同）
侘しさや巨燵に焦る蜘の絲　同（同）
巨燵にも眼よくなりぬ女夫　也有（蘿葉集）
足までは屆かぬ春や置炬燵　同（同）
皮足袋はむいて只で炬燵かな　同（同）
子に逃て[illegible]こたつかな　同（同）

炬燵

かくて又夏まつ山か置ごたつ　也有（蘿葉集）
雪見とて寐ころぶ所こたつかな　同（同）
鎧着て須磨へみさこの巨燵かな　蓼太（蓼太句集）
長居して巨燵も闇になる夜かな　同（同）
俳諧の道へふみ込むこたつかな　同（同）
講義をして皆足出さぬ巨燵哉　几董（井華集）
夜着かけて容いぶせきこたつ哉　同（同）
人老て巨燵にあれる賤かな　白雄（白雄句集）
思ふ人の側へ割込む炬燵哉　一茶（一茶句帖）
づぶ濡の大名を見るこたつ哉　同（同）
南天よ炬燵やぐらよ淋しさよ　同（享和句帖）
炬燵より見ればこそ不二もふじの山　同（七番日記）
雀来よ炬燵櫓も是に有　同（同）
へらず口のみ上りけり常炬燵　同（同）
斯う寐るも我火燵ではなかりけり　同（發句集）
出た跡をふさぐも巨燵思ひかな　梅室（梅室家集）
寐くたれて踏飛したき巨燵かな　同（同）
鐘の聲背中にひゞく火燵哉　春波（類題發句集）
肱かけて草子反りたる巨燵哉　立志（小弓俳諧集）
縫物をたゝみてあたるこたつ哉　菊梧（曠野）
うかれ女に取まかれたる火燵哉　乙由（麥林集）
二人に成て淋しきこたつ哉　梅史（俳諧古選）
物かくに少しは高き巨燵哉　猿雖（類題發句集）
泣て居る笑ひても居る巨燵哉　一林（小弓俳諧集）
わびしさは夜著を懸たるこたつ哉　少年 桃先（續猿蓑）
巨燵して語れ眞田が冬の陣　子規（子規句集）
いくさから便とゞきし巨燵かな　同（同）
縫物の背中にしたる巨燵かな　同（同）
人老いぬ巨燵を本の置處　同（同）
並べけり火燵の上の小人形　同（同）
他愛なき夢や揚屋の置巨燵　左衛門（新俳句）
母の膝爭ふ子供置火燵　栖庵（同人）
機下りて暫し溫もる火燵かな　雲山（同）
早船のどてら掛けたる火燵かな　蘭村（ホトトギス）
火燵とも申しかねつゝ消りけり　菊太（同）
妻よりも姉美しき火燵かな　武治（同）
飼犬を甘つたらかす火燵かな　虚吼（同）
美しき蒲團かけたり置火燵　鬼城（同）

火鉢（ひばち）

季題解説　炭火を埋して暖を取る道具である。木製もあり、金屬製もあり、陶製もある。一人の家につきづきしきものは竹に繪描きたる火桶云々と枕草紙にもある如く、火鉢は座敷の風致を添へる調度の一つでもある。現今では陶製の外に紫檀・黑檀其他諸木を用ひ、又銀製・銅製に彫刻を施したる如き雅致あるものも出來てゐる。〔季題〕助炭。爐。火桶。火吹達磨。手焙。

例句

火鉢

黑塚やつぼね女のおく火鉢　言水（俳諧五子稿）
忠度と灰にかゝれし火鉢かな　其角（五元集）
白河の波をかゝばや桐火鉢　同（同）
ぼんのくぼ夕日にむけて火鉢哉　一茶（享和句帖）
町内の一番起の火鉢哉　同（同）
とるとしや火鉢なでゝも遊ばるゝ　同（七番日記）
くりぬいて火鉢となさん木の根かな　三川（新俳句）
恥知らぬ人と向へる火鉢かな　柳水（同人）
草の戸や火鉢へ盛りし焚きおとし　俳小星（ホトトギス）
皇孫に獻ずる鼎具を見奉る
枕邊の火なき火鉢に坐りけり　たけし（同）
店頭に馬恐しき火鉢かな　南國子（同）
火鉢抱いて瞳落すところ只疊　石鼎（同）
對ひ坐して讀むもの異に大火鉢　梅史（同）
盛んなる送別會の火鉢かな　静兒（同）
焚落し入れてくれたる火鉢かな　芋人（同）
鐵瓶の沸き止りたる火鉢かな　温亭（同）
うつそ身をおしかぶせたる火鉢かな　寸七翁（同）
おとなしく叱られてゐる火鉢かな　東白子（同）
貧しさの火鉢なれども押しすゝめ　静清（同）
老の手のわなゝきかざす火鉢かな　たかし（同）
もてなしや二人がかりの大火鉢　よりに（同）
うろくづのこびりつきたる火鉢かな　耿陽（同）
松島の遊覽船の火鉢かな　杜陵（同）
抽斗のせんぶり匂ふ火鉢かな　秋洋（同）
大阪の宿の火鉢に二三日　青郁（同）
火鉢の火一つに移し集ひけり　九里香（同）
三昧のふりし針屋の店火鉢　辰之丞（續ホトトギス）
極樂と母の眼あけし火鉢かな　静雲（同）

世の中に妹二人ある火鉢かな　　虚子（ホトトギス）
雨膝と火鉢の間の闇の濃き　　同（續ホトトギス）

参考 古く火爐・火桶といひ、後火鉢といふ。江次第十九に火鉢の語見ゆ。三十二番職人歌合に火鉢うり「風呂火鉢瓦灯ぬり桶水こぼしよきあきなひと奈良の上かな」當時奈良より産出せること知らる。

火桶　ひびつ

古書校註

【山之井】 孫もたぬ姥御前は、火桶を側にだいていね、老の友なきおほぢごは、せうになりたなすみかしらをも憐む心などすべし。

【滑稽雑談】 清少納言枕草紙に云、人の家につきづきしき物、ちくわうゐがきたる火桶。〔春曙抄に云、ちくわうゐとは、竹鶯畫也。桐火桶などに、竹に鶯など繪にかきし也〕〔按ずるに、火桶の製久し。舊名は火置也。置と桶と和訓近きゆゑに火桶と云ふ。其の後、火鉢の名出でたり。製も又略也。今世に及んで、二物ともに金銀銅鐵瓦石の類は謂ふに足らず、漆器・金具の結構、稱計すべからざる歟。

【年浪草】 清少納言枕草紙に曰、人の家につきづきしきものは、竹鶯ゑがきたる火桶と云云。火桶、古制の圖に、内は眞鍮等のかねにて張り、外は桐の木をくりたるを室とし、或は木地或は箔にてだみ、其の上に彩色の繪をかきたる物也　源氏物語幻の巻に曰、火桶まいらすと云々　鼠江人楚の註に云、火桶は火取の大なる様の物なり　五節火桶などいふて圖あるもの也　十月更衣に、扇子を火桶にかへて奉ると也。

季題解説 火桶については古典を見る必要がある。貞丈雜記に「火桶は内を眞鍮等のかねにて張り外は桐の木をくりたるを室とし、或は木地又は箔にてだみその上に彩色繪を書きたるものなり」とあり、松屋筆記に「火桶は十月より翌年三月晦までのよし御傳記に見ゆ」とあり、嬉遊笑覽に「一ひびつとも言へり」とある。貞丈雜記は火桶の構造を說明し、松屋筆記は使用の季節を言ひ、嬉遊笑覽はその別名を擧げてゐる。思ふに火桶は今日の桐火鉢のことであらう。そしてその形は圓形のものに限つたらしい。文化の進むに從つて單に桐製圓形のもののみでなく他の諸木をも用ひ、その他銀・銅・鐵・陶器などの製品も出來、その形も色々に考案せらるるに至つたもので、名稱も火鉢といふやうになつた。〔参照〕火鉢

例句　火桶

霜の後撫子咲る火桶かな　　芭蕉（勸進牒）
あらかねの土より出る火桶かな　　同（もとの水）
細工者を目に見せたる火桶かな　　来山（續いま宮草）
朝夕にとりまはしよき火桶かな　　浪化（浪化上人發句集）
小野の炭匂ふ火桶のあなめ哉　　蕪村（蕪村句集）

火桶

われぬべき年もありしを古火桶　蕪村（蕪村句集）
裙に置て心に遠き火桶かな　同（同）
火桶炭團を喰ふ事夜毎〳〵にひとつヅヽ　同（夏より）
桐火桶無絃の琴の撫ごゝろ　同（雁風呂）
侘しらに火桶張うよ短册で　同（落日庵句集）
草の屋の行灯もとぼす火桶哉　太祇（太祇句選）
火桶はる暦わびしき月日かな　召波（春泥発句集）
炭をふく紀の闇守が火桶かな　同（同）
山伏も舞子も住て火桶哉　同（同）
一日の炭撫減らす火桶かな　也有（蘿葉集）
こぼれ居る宮女の中に火桶かな　蓼太（蓼太句集）
火桶抱て卿の戸に入あるじ哉　几董（井華集）
守武の水洟おとす火桶かな　同（同）
人とひぬ火桶眞りて粥たかん　白雄（白雄句集）
語る夜のつき〴〵しさよ桐火桶　同（同）
捨られし人の泪に兀火桶　曉臺（曉臺句集）
うき人の額にあてる火桶かな　同（同）
更行や机の下の桐火桶　闌更（半化坊発句集）
草の戸やどなたが來ても缺火桶　一茶（一茶句帖）
貧乏らしといひし火桶を抱けり　同（同）
簾のかげ火桶にうつるあしたより　乙二（をのゝえ草稿）
ひと廻しまはしてあたる火桶哉　蒼虬（蒼虬翁発句集）
腸もにえよと抱く火おけかな　梅室（梅室家集）
又出たとはじめはうとむ火桶かな　同（同）
西山の薄日にほすや張火桶　同（同）
門番の歌よみ顔の火桶かな　呼丁（類題発句集）
繪屏風の倒れかゝりし火桶かな　子規（子規句集）
火桶張る昔女の白髪かな　同（同）
火桶張る嫗一人や岡の家　同（同）
酒を置いて老の涙の火桶かな　碧梧桐（春夏秋冬）
白檀を削つて炷きし火桶哉　月斗（同人）
死病得て爪美しき火桶かな　蛇笏（ホトトギス）
嘲に應へず火桶火吹きにけり　はじめ（同）
こま〴〵と抽匣もてる火桶かな　青畝（同）
日のあたる椿見て抱く火桶かな　村家（同）
老比丘や居あれて抱く桐火桶　楚江（同）
たう〳〵との計火桶ひき寄せなまいだぶ　靜雲（同）
祇王寺の縁に出されし火桶かな　凡平（同）

絲纏く立ちそめて桐火桶　明朗（同）
桐火桶引寄せて聞く佳話かな　蝶六（同）
あそびめの號をあてがふ火桶かな　夜半（同）
しみ〴〵と佳句にうたるゝ火桶かな　草餅（同）
落葉かく音のしぞめし火桶かな　王丘子（同）
つれ〴〵の手のうつくしき火桶かな　草城（同）
火桶抱けば添水聞えぬ詩仙堂　王城（同）
牡丹見せて障子しめたる火桶かな　水巴（同）
大鼓の調べ緒たるゝ火桶かな　まさを（雑ホトトギス）
みづうみの今日靜かなる火桶かな　踏石（同）
年々に花鳥うするゝ火桶かな　濱子（同）
艶さましつゝ塗る火桶をすゝめけり　白芽子（同）
火桶抱く浮世話の尼ぜ達　秋紅（同）
尼君の寒がりおはす火桶かな　虛子（ホトトギス）
もろともに手をかざしたる桐火桶　同（雑ホトトギス）

火吹達磨（ひふきだるま）

【季題解説】火鉢などの炭火をおこす爲めに、達磨の形を爲したものに水を入れて火のそばの灰の中に埋めて置くと、熱して水蒸氣を吹き出し火をおこす仕掛になつてゐるもので、一時はかなり流行つたが今は廢れたやうである。〔一〕〔同〕火鉢。

手焙（てあぶり）　手爐

【季題解説】手を焙るに用ふる小形の火鉢の類で、金屬製のものと陶製のものとがある。竹の籠を以て火器を掩つたものもある。蔓の手又は打紐などつけて持ちあるきに便するものもある。手許に置き又は膝の上に載せて手を焙る。手爐ともいふ。〔一〕〔同〕火鉢。

【例句】

手焙をのせたる老の膝長き　うしほ（ホトトギス）
手焙の出されてありぬ金龍寺　蕉蔭（同）
かの巫女の手焙の手を戀ひわたる　誓子（同）
つゝましく手焙いただきて當直かな　亀汀（雑ホトトギス）

行火（あんか）　ねこ　電氣行火

【季題解説】寢るときの家具、高さ、四方、共に一尺内外の箱の形に作られた土

器で、底は扁平、上部は稍開く、周圍の三方に孔を穿ち、他の一方は火入れ用の鉢を出し入れするための口になつてゐる、主として手、足、床などを暖めるに用ひられる。これは行火よりも稍小さい不恰好な土器製のもので上部に蓋があり、そこから炭火を入れ灰を被ぶせ、專ら老人病者などの床の裾に入れて暖を採るもので、行火にも代用される。近來は電熱器の装置してある便利なもの、たとへば電氣布團の類が出來てゐる。〔參照〕炬燵、火籠吹

例句

行火
土間際に障子たてたる行火かな　静山（ホトトギス）
馬車出んや行火をさげて馭者乗りし　清美（同）
行火さげて寐に立つ祖母の灯さびし　婉外（同）

火籠（ホエロン）

季題解説 臺灣人は冬季室内で暖爐や火鉢は餘り用ひない、彼等は蔓付の粗末な籠に小さな丸い土燒鉢を入れ、これに火を入れ、小蒲團で覆ひ手を溫める。火籠（ホエロ）と云つてゐる。外出の時も之を提げて歩く。〔參照〕行火（アンカ）

懐爐（くわいろ）　懐爐灰（くわいろばひ）　懐爐燒（くわいろやけ）

古書後註 【年浪草】懐爐は湯婆・溫石の類なり。病身虚弱の人、冬日懐を煖むるの爐也。

季題解説 鉄力で作つた別珍、紀州ネルなどを張つた容器に、室の花などといふ灰を入れるものが最も普遍的に用ゐられてゐるが、その外にニツケル製の容器に揮發油を綿に滲ませて入れるハクキン懐爐、丸い容器に扁平な練灰を入れるミカサ懐爐及びそれの渦巻線香型のもの、それから湯たんぽ懐爐、長方形のキボウ懐爐などいろいろ變つたものが出來てゐる。それから常に懐爐を入れてゐる人は、局部に火傷の痕が出來て、黒痣の様になつてゐるのを錢湯などでよく見受ける事がある。乃ち懐爐燒けといふ季語が一つ生れてもいゝかもしれない。〔參照〕足溫め（アシヌクメ）　溫婆（タンポ）　溫石（オンジャク）

例句

懐爐
常闇を火の渡り居る懐爐かな　余子（ホトトギス）
古妻の懐爐臭きをうとみけり　草城（同）
懐爐して腸くさる思ひかな　眞竿（同）
玄海に懐爐の灰を捨てにけり　掬華（同）
受けとりてほと〳〵ぬくき懐爐かな　曉水（同）
痩腹の脊骨に通る懐爐かな　東華（續ホトトギス）
うつしみの枚のごときに懐爐かな　眞小男（同）

湯婆

傾城のはじめて見たる湯婆かな　也有（蘿葉集）
夢よりは先へさめたる湯婆かな　同（同）
茶筌髪湯婆たゝきて寝ぬ人か　白雄（白雄句集）
一夜ふた夜のちはたんほゝ頼し　同（同）
先よしと足でおし出すたんぽ哉　一茶（七番日記）
松かぜや湯婆のさめる夜にも似ず　乙二（をのゝえ草稿）
冷え盡す湯婆に足をちゞめけり　子規（子規句集）
目さむるや湯婆わづかに暖き　同（同）
古庭や月に湯婆の湯をこぼす　同（同）

病中有感

遼東の夢見てさめる湯婆かな　同（同）

不折の畫室開に

湯婆燈爐臥床あたゝかに讀書かな　同（同）
祝宴に湯婆かゝへて參りけり　同（同）
宿かりて湯婆いたゞく勿體なや　躑躅（ホトトギス）

悼彦坂大八

ごぼ／＼と湯婆こぼす涙かな　鬼城（同）
枯菊に古き湯婆を捨てにけり　其月（同）
緣にある死人の湯婆おそれけり　念腹（同）
大風の夜すがら吹ける湯婆かな　畔爐（同）
湯婆に足遊ばせて病快し　靜雲（同）
兩親に一つづゝある湯婆かな　鬼城（鬼城句集）
そばの湯を貰ひて湯婆入れにけり　青光（續ホトトギス）

温（をん）石（じやく）

古書校註

【栞草】「大和本草」山東通志に云、披縣（エキケン）より出づ。色青白を兼ね、潤膩（ツヤ）玉の如し。味甘く毒なし。藥物に備ふべし。日本に温石といふ物あり。色白くして少し青し。やはらかなり。是れ山東通志にしるせる温石と同物なるべし。

註　○この説明では日本の温石の説明は盡されない。

季題解説　手ごろのなめらかな石又は臘石などを火の中に入れてあたゝめ、布ぎれに包み腹にあてゝ暖を取り、又腹痛の時など患部を暖めるのである。今は懐爐が出來た爲めに用ふることも少くなつた。〔參照〕懐爐（クワイロ）

例句

温石

温石やかくて世を經る宮仕　松堂（續ホトトギス）
温石にすぐれ給はぬ尼ぜかな　定女（同）
温石に病みたる腹のへりにけり　仙者（同）

飯櫃入（おはちいれ）

飯櫃套（おはちふご）

季題解説 ふごとも云ふ。藁で編んだ蓋付の圓筒狀容器、飯櫃を入れ、飯の冷えるのを防ぐ。飯櫃の大小に應じて大小がある。（尤も最近はキルク製の近代的な飯櫃入も出現して來た）多くは農家の副業として製造され、荒物屋の店頭に陳列され、或は戸別に賣り歩かれる。熱い飯櫃を入れる爲め、濕氣を吸ひ黴を生じ易いから時々日光に當てねばならぬ。

例句

飯櫃入

飯櫃入二つながらに古びけり　しぐれ　（ホトトギス）

吸入器（きふにふき）

季題解説 冬になると誰も彼もが風邪をひく、時あつてか流行寒冒が家庭を脅かす。外出にはマスクをかける、寝室には湯氣を立てる、含嗽だ、吸入だと騒ぐ。近頃では大抵の家で吸入器位は備へて置くやうになつた。銀色をした吸入器――どこかロマンチツクな醫療器械、アルコール・ランプに燃え立つうす青い焔、アトマイザーから勢よく流れ出る白い湯氣の氣流、湯氣の前には或る時は子供の顔、或る時は皺苦茶のお婆さんの顔、或る時は青女房の顔、或る時は八字髯の顔……。吸入器を中心にしての家庭の小さな騒ぎは冬の情景として一季題をなす價値がある。〔参照〕湯氣立て　風邪

例句

吸入器

ころ〳〵と鳴り出す釜や吸入器　青邨　（續ホトトギス）

吸入器地獄のごとく激すなり　誓子　（同　）

醫の家の機械細しき吸入器　同　（同　）

湯氣立て（ゆげたて）

季題解説 寒い時はよく風邪をひく、扁桃腺を侵される、ひどくなると肺炎になる。さういふ時、病室は適度の濕度を必要とするのであつて、その爲めに火鉢に金盥をかけてさかんに湯氣を立てるのである。

實作注意 かういふ季題は時に季題としてはつきり區別しないことがある。單に湯氣とか、湯氣が立つなどといふだけではぴんと來ないことがある。どこまでも風邪・肺炎などで、病室で湯氣を立てるといふことを一讀して解かるやうに句作しなければならない。〔参照〕吸入器　風邪

例句

湯氣立て

孫守りてよき嫗さまや湯氣立てる　たけし　（ホトトギス）

湯氣たちておのづからなるもつれかな　たかし　（同　）

湯氣たちて起居忘れし如くなり　同　（續ホトトギス）

湯氣立てゝ一俵の炭またゝくま　阿乎美　（同　）

火事（くわじ）　火災（くわさい）　火難（くわなん）

季題解說　火事は冬季に多い。火事に關しては多くの語句がある。村火事・廓火事・船火事・山火事・大火・小火・全燒・半燒・類燒・延燒・火事場・火事跡・火元・飛火・火の手・近火・遠火事・鎭火などの類である。又變つたところでは「炎上（エンジヤウ）」城廓・殿堂・寺院などの場合などいふのもある。夫々の場合で夫々の趣がある。〔參照〕火事裝束・火事見舞・火の見櫓・火の番

例句

火事

夜の火事馬ひき出して來りけり　奇骨（同人）
店の者火事見に行きて誰もゐず　北强（同）
山火事に藪戸ほのかや鷄歌ふ　蛇笏（ホトトギス）
高張に火事遠かりし寺門かな　村家（同）
玲瓏と狐火の裡の大廈かな　瓦全（同）
生魂の少し東に火の手かな　普羅（同）
山火事を消しに登るや蜜柑畑　木國（同）
寄生木やしつかに移る火事の雲　秋櫻子（同）
火事の鐘遠くなりたる花合　一水（同）
文樂の燒けゐる話電車かな　兎月（同）
火事の空うつりかはりし梢かな　秋津（同）
桑原に火事の提灯飛ぶを見よ　八重井（同）
炎上や塔頭の鐘ことごとく　羊子（同）
火事近く母は佛に灯すなり　鯨波（同）
かたまりて娼婦出てゐる近火かな　春洋（同）
廓火事屢〻火の手揚りけり　牽牛子（同）
類燒をのがれし家や商へり　たけし（同）
今宵またありし堺の女夫火事　うてな（同）
大木の穹眞赤なる火事明り　白文地（[illegible]ホトトギス）
類燒の琴の骸を舁き出づる　黑星（同）
畏れつゝ火迫る佛抱きにけり　山彦（同）
船火事のふなばたを人走りをり　御舟（同）
山火事に鹿現れて走りけり　靜石（同）
浦火事の空にあがりし千鳥かな　耿青（同）
竿のものとりこむ母に遠山火　楞童（同）
遠火事にしづかにたるゝ柳かな　[illegible]波伎（同）
泣きぬれて火元の妻の見舞受　江女（同）
火事見舞提灯の火をもらひけり　因洲（同）
藪の穗に村火事を見る渡舟（ワタシ）かな　虛子（句集　虛子）

火事装束（くわじしやうぞく）　火事羽織（くわじばおり）　火事頭巾（くわじづきん）

季題解説　消防夫、鳶職が火事場に向ふときに纏ふ装束で、江戸時代から今日迄引つゞき用ゐられてゐる。現在鳶職が用ゐてゐるものは紺木綿に刺子縫ひを施した股引、やゝ長目の法被、頭巾の揃ひに地下足袋草鞋といつたのが普通のやうである。刺子の法被の下にはたゞの法被を重ね腹當を掛けるやうである。尚、現今消防署の消防夫の被服は同じく刺子であるが、法被でなく外套仕立になつて居り、又頭巾も兜式に出來てゐてそれを洋服の上から纏ふのである。刺子の木綿を用ふるのは、それが火事場で水を吸つて膨脹すると猛火の中でも十分活動が出來るためである。〔參照〕火事

火事見舞（くわじみまひ）

季題解説　火災のあつた場合に知人の安否をたづね見舞ふことである。この場合、類焼と近火とがあるのは勿論である。それ火事といへば直ちに見舞客が提灯をかゝげて混亂の火事場を右往左往するのが見られる。鎮火したあとも急造の煮〆や握り飯を運び込んだり、酒やビールを見舞品として持ち込んだりすることは一般に行はれるところである。〔參照〕火事

例句

火事見舞　門の前たてゐた婦に火事見舞　清河（ホトトギス）

火の見櫓（ひのみやぐら）　火の見（ひのみ）　火の見番（ひのみばん）　半鐘臺（はんしようだい）　火の見臺（ひのみだい）

季題解説　八百屋お七で人口に膾炙してゐる火の見櫓は、太鼓を吊つた黒塗の櫓だつたが、今日では火事を知らせに太鼓を打つといふやうな所は都會では殆ど無く、大抵は半鐘だが、それもだん／＼用がなくなつて消防自動車のサイレンが之れに代つてゐる。從つて火の見櫓の形も次第に變化しつゝあるが、明治時代には梯子を突ッ立てゝ尖に半鐘を吊した半鐘臺といふものが黒塗の櫓に取つて代つたが、近頃は鐵骨の望樓でホースの干場を兼ねたたゞの高い櫓であり、稀に交番うしろなどに半鐘臺の突つ立つてゐる所もある。

それから東京では震災後殆ど見られなくなつたが、大阪では今でも船場あたりの大きな家の屋根に火の見臺のあるのが見られる。〔參照〕火事

火の番（ひのばん）　火の用心（ひのようじん）　夜廻り（よまはり）　夜番（よばん）　火の番小屋（ひのばんごや）

季題解説　火廻り・火の用心・夜番、夜廻り・夜警などといろ／＼名前がある。昔は町に番太或は番太郎などゝ云つてゐた位に各々常置附のものであつた。今でも町内で番人を常置してゐる所も相當あり、大きな邸や工

場などでは單獨に夜番を常置してゐる向が多いが、夜番を置いてゐない町では、青年團などが師走で世間の忙しい時分などに奉仕的に團員交代で夜警を勤める事がある。然し斯ういふのは夜廻り・火の廻り・火の番などといふ言葉にはふさはしくない。やはり夜警とか自警とか云ふ樣な言葉が適切なやうである。火の番といへば專ら夜中の火を警める爲めの番であつて、拍子木を打ち金棒をひき、火事裝束をした勇ましい消防手又はよぼ〳〵歩いてゐるさびしい老人の姿などを思ひ出す方が自然である。それから又火番・夜番のゐる場所を番屋・番小屋・夜番小屋などと云つて冬の夜の情趣をそこからも見出す事が出來る。町内のものが交替で夜番をする時は自身番といふ。【參照】火事々

例句

火の番

起されて夜番の札を受取りぬ　余之叙（同　人）
夜番小屋時計の顏の古びたる　誓　子（ホトトギス）
夜番の灯須磨の浦曲に現れぬ　同（同）
夜番の灯相國寺門出て來たる　三　山（同）
東山に月の上りし夜番かな　久　規（同）
おはします天皇陛下夜番の柝　暮　情（同）
山科の藪風つよき夜番かな　蒲人子（同）
濱に出てひきかへしくる夜番かな　清　河（同）
火の番のゆきすぎしかは一時打つ　耕　平（同）
荒まさる風に出てゆく夜番かな　俳小星（東　炎）
笛吹いて通る京都の夜番かな　漾　人（續ホトトギス）
大風の爐にかたまれる夜番かな　歌　村（同）
はし少しこげてゐるなり夜番帳　一　路（同）
築の音ざあ〳〵とある夜番かな　了　咲（同）

根木打（ねつきうち）

ねつき　箆打（へらうち）　釘打（くぎうち）　杙打（くひうち）

季題解說　手頃の棒切の一端を削り鉛筆の先のやうに尖らし、雪の上又は粘土質の地面に打ちつけてつつ立て、他の子供が同じ形の棒杭をこれに打ちつけて若し對手のものが倒れ、自分のものが立てば勝つたので對手の棒を分捕するのである、これを交互に行ふのである。子供等の遊戲である。地方によつては箆打と云つて竹べらでやる所もあり、釘打と唱へて五寸釘でやる所もあるが、大概ねつきと言つて稻を刈つたあとの田とか、春先の田とか、田が空いてゐて而かも棒のよくつゝ立つやうな頃に遊ぶのである。

例句

根木打

根木にす雪の椿を切りにけり　黃　爐（同　人）
根木打つ男まさりの女の子かな　素　方（續ホトトギス）

背の子の顔さしのぞく根木打　夏井（同　）

竹馬（たけうま）　高足（たかあし）　たかし　鷺足（さぎあし）

古書校註

【嬉遊笑覽】古の竹馬は葉の付きたる生竹を弄べり。古畫にみえたり。又福富草子に童子の持ちたるは二本にして、今の製に近く、但し木にて作りたる物とみゆ。

註　竹馬は、もと兒童の手に拘らぬ遊戲であつたので、之を專ら雪中の遊戲として季題としたのは實からしく、古歳時記類には見えない。

季題解說

節の揃つた二本の竹竿の各に、七八寸位の長さに切つた雜木を二つ割りにしたものの一端を竹に直角にくゝりつけて足がかりを作り、足を乘せ兩手は竹の上端を持つて步むのである。高足又は鷺足などともいつてゐる。足掛りは多くは竹の二三節目に結びつけるのであるが、巧者になるにつれて七八節以上にも及ぼして得意に步むのである。又多く幼兒の遊戲用として、竹竿の先に馬の頭の玩具をつけたもの等に跨つて騎馬を眞似るものもある

例句

竹馬

竹馬にのり居る婢見られけり　感來（ホトトギス）

竹馬や使風呂敷首に卷き　稻女（同　）

松とれて竹馬の町となりにけり　播種郞（櫻ホトトギス）

竹馬やモンペイはいて女の子　茂十（同　）

參考

西行上人歌集に「竹馬を杖にも今日はたのむかなわらはの遊びを思ひいでつゝ」袋草紙に「壬生忠岑、幼童の時、內裏より有レ召、無二乘物一て離レ參之由を申に、竹馬に乘て可レ參之由有二御定一、仍進二此歌一て　竹馬はふしがちにしていと弱し今夕かげに乘りて參らむ」。古くは竹の葉附きのまゝにて跨りて興じ、後に頭に馬頭の形を附け、尻に車を附けたる製あり、更に今日の製に至る。但し今日の製は、もと田樂の高足より出で、西行の時代にも既にかくの如きもの行はれたるかに見ゆ。

雪遊　雪投　雪礫　雪轉　雪まろげ　雪團、雪[illegible]

古書校註

【增山井】雪ころばし、（一）同。

【[illegible]】源氏物語、朝顏の卷に云、雪まろばし云々。河海抄に云、雪團、（二）寬和二年閏正月二十日、右衛門尉為則をして、雪を增し蓬萊山を作らしむ。

【年浪草】雪團、又雪轉に同じ。

【栞草】雪佛、雪丸げともいふ

【年浪草】雪礫。和俗、小石を取つて遠くなげうつを礫と云ふ、雪礫も、小石の如く握り堅めて投ぐるを云ふべし。

【栞草】雪礫・雪打。小石の如く雪を握りかため、投げ打ち合ふを云ふ。雪中の戯れなり。

註 （一）同とあるは、その前掲のものに倣とせるに同じとの意。（二）應和三年の雪賞は、村上御記に見えるもので、これは禁中雪山の起原として引くべきもので、雪礫に引くは誤である。

季題解説 雪でもつてする遊び事を總稱したものである。雪が積つて喜ぶのは子供達である。雪のやんだ朝や晴間などには、いち早く戸外へ飛び出して、雪だるまや雪兎を作つたり、山や城を築いたり、雪まろげをしたり雪投げをしたり、手に息を吹きかけながら嬉々として遊びまはる。親たちも軒下へ出て來てその遊びを眺めてゐたり、時には中に交つて遊んだりしてほゝゑましい情景を見せる。〔參照〕雪達磨(人事) 天文―雪

例句 雪遊

坂くだる菅の小笠や雪こかし　宗因（梅翁宗因發句集）
萬にひとつ屆けやつとぞ雪礫　同（同）
君火をたけよきもの見せむ雪まろげ　芭蕉（續虛栗）
軍兵を閑炭でまつや雪礫　其角（五元集）
雪中に雪を投込むあそびかな　嵐雪（玄峰集）
よき君の雪の礫に預らん　召波（春泥發句集）
竹の寐た夜着もたゝむや雪丸げ　也有（蘿葉集）
雪うちや七つの年を身のむかし　白雄（白雄句集）
三弦のばちでうけたり雪礫　一茶（七番日記）
親犬が尻でうけゝり雪礫　同（同）
かんざしでふはと留たり雪礫　同（九番日記）
ふり向ば大年増なり雪礫　同（同）
霜やけの手を吹てやる雪まろげ　羽紅（猿蓑）
雪の上にころがり遊ぶ子供かな　李江（ホトトギス）
雪礫しきりに塀を越えて來る　としを（同）
雪兎同じ容の二つかな　漂舟（同）
雪なげをすれば鳥がなきにけり　蚊杖（續ホトトギス）
解けそめて盆を滑りぬ雪兎　天魚（同）

雪達磨（ゆきだるま）

雪佛（ゆきぼとけ）　雪布袋（ゆきほてい）　雪獅子（ゆきじし）

古書校註

【增山井】雪佛は雪にて作れる佛也。猶、雪達磨・雪布袋・雪の獅子など、みな雪にて作る事也。

【滑稽雜談】新拾遺集に云、雪にて丈六の佛を作り奉りて供養すとてよめ

る　いにしへの鶴の林のみゆきかとおもひとくにぞあはれなりける　鷺西上人。

張文潜が戯れに雪獅を作る詩に曰、六出結び成す百獣の王、日頭出でゝ後便ち郎當、眉を挿へ眼を挂げて人誰か怕れん、想ふ女應に断腸を熱すること無かるべし。（此の外、雪達磨・雪布袋など、戯れに作るなるべし。

季題解説 雪で達磨の形を作つて、木炭の目鼻をつけなどしたものである。

関聯 雪遊ニ　天文―雪ニ

例句 雪達磨

此下にかくねむるらん雪ほとけ　嵐雪（玄峯集）
掃よせん君いざつくれ雪達磨　蓼太（蓼太句集）
狗の先つくばひぬ雪佛　一茶（七番日記）
とる年もあなた任せぞ雪佛　同（同）
彼是といふも當座ぞ雪佛　同（おらが春）
月さえて二日に成ぬ雪佛　蒼虬（蒼虬翁句集）
降雪をいとふ御顔やゆき佛　梅室（梅室家集）
ふりつむや丈六尺の雪佛　元儀（毛吹草）
雪だるま笑福亭の門前に　素十（ホトトギス）
雪達磨轉がる嵯峨の門田かな　静兒（同）
清水の舞臺の上の雪達磨　播水（同）
長堀や船のうへにも雪達磨　未行（同）
夜を歸る租界々々の雪達磨　一我（同）

玉栗

傍題 きんこ　かちあひ　かちあはせ

季題解説 北陸地方に行はれる雪中の兒童の遊戯で、上越地方ではかちあひ・かちあはせと云ひ、中越地方ではきんこと言ひ、一般には玉割と云ふ。玉栗は雪玉の名稱である。

雪を手毬大に握り固めその上に更に幾度も雪を加へて杜などでたゝいて固め、その上に人が乗つても潰れない程に堅く握り固める。じやんけんで順序を定め、石の上に相手の雪玉を置いて、われの雪玉を力まかせに打ちつけて勝負を爭ひ、雪玉の砕けた方が負である。

青寫眞（あをじやしん）

日光寫眞（につくわうしやしん）

季題解説 いろんな繪を焼き付ける子供の遊びで、秋から冬にかけて盛に行はれるが、特に冬に多いやうである。小春日和の時分に町中の空地などを通ると、枯草の中に小さな枠に嵌めた青寫眞が干されてあるのを見受ける。繪は多くは軍人、芝居と同様に時代物の映畫から取つたものが多いやうである。

スケート　氷滑

季題解説 何世紀か昔のこと、北歐の湖沼地方に於て狩獵者か凍つた湖上を滑走する爲に、動物の骨で作つたものを靴に締著した。之がスケートの原始形態である。其の後鐵がこれに代り其の用途もスポーツに迄發達した。日本でも古くから下駄に竹片を附けた下駄スケートがあり、鐵具をプリズム型の下駄の稜にうちこんだ下駄スケートがある。靴スケートの移植は明治廿年代のことであるといふ。

スケートは其の目的によつて、スピード（競速）スケート・フィギュア（描型）スケート・ホッケー・スケートの三種類に分れる。夫々目的に適ふやうに、形態・長短・金屬材料を異にするが、何れも爪先近くから絹上げになつてゐるスケート靴の裏面に釘著してある。

服裝は初歩入門者はともかく、高等スケート術をやるには、黑いタイツ（黑い毛絲の股引）にベレー風の黑い帽子、それに黑いスェーターか黑い上著の黑裝束。スピード・スケーティング（競速氷滑）はスピードを競ふもの、フィギュア・スケーティング（描型氷滑）はスケートの滑面の兩刃を巧みに使つて氷上に種々の型を描くもの、スクール・フィギュア（基準滑型・8字型・S字型・3字型等）とフリー・フィギュア（自由滑型・螺旋型・旋回型・跳躍型等）とがある――アイス・ホッケーは氷上に於けるホッケー。競技會は之等に就て行はれる。

因にスピード、アイス・ホッケーには旺盛な體力と強靱な脚力とを要するが、フィギュアには尋常の體力と要領のいゝ頭腦があれば足りる。シーズンになれば、毎日の新聞のスポーツ欄とラヂオが湖沼の結氷量を報道する。東京・大阪などの都會に、人工的な屋内スケート場があり、快適な音樂の演奏につれて（スケーター・ワルツといふ曲があるが）リズミカルなスケーティングを娯しむことが出來る。靴に車を著けた街頭のスケート即ちローラー・スケートには季感がない。

參照 地理 氷

例句

スケート　氷上に張りし天幕やスケート場　金童（ホトトギス）
スケートや連れ廻りをりいもせどち　花蓑（同）
スケートや諏訪の旅籠の蜆汁　一紫（同）
スケートや雪になげある裘　墨石（同）
スケートやたそがれちかき塔の下　鳥城（續ホトトギス）
スケートの眞顏なしつゝたのしけれ　誓子（同）

スキー　雪艇

季題解説 北歐とか瑞西とか積雪の深い國々に於ては、古くから庭球のラ

ケットのやうな橇とか、木製の長い露式橇とかであつた。かういふものが漸次發達して變形したものがスキーである。殊に露式橇を細くスマートにし、多少機械化すれば忽ちスキーとなる。之がスキーの進化小史である。スキーはだから、最初交通用として存在したが後に其の性能を認められて、軍事用にもなり、更にスポーツ用にもなつた。日本では大正の初期には既に墺國から移植されてゐる。

スキーは細長く扁平な木製の雪橇。ヒツコリー（さわぐるみ）・イタヤ・アッシュ（とねりこ）などを用材とし、靴を締著する締金が中央部に裝置してある。長さは使用者が直立して手を擧げた位の高さが適當である。之に、上端に手革を、下端に雪輪を、尖端に金屬を附した二本の竹製のスキー杖（シュトック）が要る。スキーの用具としては尚この他に、スキー帽、雪眼を豫防する雪眼鏡・手套・頑固なスキー靴・凍傷を豫防する靴下・スキー服と迄云はずとも防寒・防水の服裝などを準備しなければならない。さて背後にリュック・サックを負へば外觀的にはもう十分にスキーヤーとして通用する。我國のスキー術は歴史的にはノールウェー式が古いが、登山用スキー術として發達したアルペン式乃至アールベルグスキー術が我國の山嶽的地勢と相俟つて最近のスキー界を風靡してゐる。何れにしても、斜面を登行し、滑降し、廻轉し、ジャムプする。

尚スキー競技會に於ては、長距離・短距離・複合・リレー・ジャムプなどが行はれてゐる。シーズンになれば毎日の新聞のスポーツ欄とラヂオが代表的スキー場の積雪量・天候を報道し、鐵道省は各驛に魅力あるスキー場ポスターを掲げ、スキー列車を臨時に運轉して都會のスキーヤーをスキー場へ搬ぶ。

尚、砂丘のスキー、サンド・スキー並に之に類似する似而非スキーには季感がない。〔參照〕天文—雪

例句

スキー

雪原の蒼茫たりやスキー行　誓子（ホトトギス）
スキー宿月に出て行く一人あり　煤六（同）
柚が戸を叩くスキーの怪我の人　其行（同）
見はるかす檜原の雪やスキー行　羽公（同）
山の日の雪にするどきスキーかな　佐濤（ホトトギス）
玄關にスキーあふれてスキー宿　一石（同）

雪見（ゆきみ）

雪見の宴　雪見酒　雪見舟

季題解説　雪見の名所といふと松島とか、天の橋立とか、いろいろあるが、雪見といふものは、本來の性質にそんな遠方へ出掛けて行くのでなしに、東京なら上野とか、京都なら東山、大阪なら生國魂といふ風に、手近な所へ

出掛けて行つて、湯豆腐ぐらゐで雪見酒を傾けるといふ程度の遊びである。

從つて場所はどこでもいゝわけだが、東京では向島が駄目になつてから、上野の不忍あたりが代表してゐるやうだが、赤坂山王の山の茶屋なども靜かでよささうに思はれる。大阪は高津の湯豆腐屋、天王寺の雲水などへ出掛けるが、場所が狹いので、近頃は郊外へ遠出をする者が多い。そこになるとさすがに京都は今でもその條件が失はれてゐない。東山は勿論のこと、西では嵐山の雪見舟など外では見られない。

だが雪見といふと何となく隱遁的な年寄臭い感じがするのは昔も今も同じであらうと思ふが、殊に近來はスキー熱か熾んな爲め、雪が降ると直ぐスキーを擔いで廣場や公園へ出掛ける者が多く、池の端あたりで雪見酒を傾けるといふやうな人は追々少くなる傾向のやうである。 参照 天文―雪キユ

例句

雪見

いざ行む雪見にころぶ處まで　芭蕉（曠　野）
思はずの雪見や比叡の前うしろ　丈草（丈草發句集）
窓錢のうき世を咄すゆき見哉　其角（五　元　集）
鴨川の鴨を鐵輪に雪見かな　同（同　）
覺悟して風引に行雪見かな　杉風（杉風句集）
出ることは翌と我家の雪見哉　桃隣（古太白堂句選）
ゆきをみる人さわがしや夜の門　太祇（太祇句選）
御次男は馬が上手で雪見かな　同（同　）
雪見とて出るや武士の馬に鞍　同（同　）
村人に雪の見所習らひけり　召波（春泥發句集）
巨燵賣る茶屋あらば野の雪見せん　也有（蘿　葉　集）
跡つけぬ足を巨燵に雪見かな　同（同　）
つもらせて蓑に我身を雪見哉　同（蘿の落葉）
盤銅の火は炎〳〵と雪見かな　几董（井　華　集）

探梅の遅るゝ杖を運びけり　南想子（續ホトトギス）
乾きたる道に出でたり探梅行　韓石（同）
探梅やふたゝびかへす三輪の茶屋　杏史（同）
探梅や日は南に御室山　康之（同）
探梅や布忍(キノセ)の池は波立てる　旭川（同）
縣道に出てしまひたる探梅行　虚子（句集 虚子）
この道をわれらが往くや探梅行　同（同）
探梅行花なき梅を仰ぎ居り　同（續ホトトギス）

狩(かり)

狩猟(しゆれふ)　遊猟(いうれふ)　勢子(せこ)　猟人(かりうど)　猟犬(れふけん)　狩座(かりくら)　狩場(かりば)　狩の宿(やど)

古書校註

【御傘】狩とばかりは、冬也　四季に文字かはりて狩はあるなれど、狩場・かり人など、皆冬也

【増山井】狩。狩場の雉・かりばの鳥・ぬす立つ鳥。鷹の鳥とは雉の事也、冬也。

【栞草】鳥獸に限らず、凡て求むるを狩と云ふ。但し、爰に出せるは、專ら鷹狩としるべし。

註 ○古く狩といふは鷹狩を意味し、鷹狩以外、一般の事とするは、栞草あたり以後であらう。

季題解説　多く猟銃を用ひて山野に鳥獸を狩猟することである。昔は鷹を用ひて猟をしたので、狩と言へば鷹狩のことであつた。今は銃猟のことである。この狩の場所を狩場といひ、その補助者を勢子といふ。狩座・猟人・猟犬・狩の宿などの言葉も用ひられる。

例句

狩

艸の戸に茶ひとつ乞り狩の君　召波（春泥發句集）
蒐蒻に馬の踏こむ狩場哉　巣兆（曾波可理）
狩小屋の夜明也けり犬の鈴　一茶（享和句帖）
勢子の役忘れしかに深き眠りかな　濱人（ホトトギス）
狩犬に結飯(むすび)を割きてころがしぬ　あきら（同）
秋風嶺に下りたる狩の人數かな　韮城（同）
綺羅星に峡は明けゆく狩くらや　秋櫻子（同）
山の背をのぼる猟人見ゆるかな　手古奈（同）
夜もすがら猟犬さわぐ宿の月　素十（同）
逸る犬爐邊にしづめ狩支度　光葉（同）
猟人の犬に餅やる茶店かな　多津櫻（同）
遠くよりかゝげて見せぬ狩の幸　軒水（同）
しのゝめの松うつくしき狩の道　正乃（同）
龍膽の花踏まれあり狩の場(には)　誓子（同）
狩くらや霜折したる萱の徑　野風呂（同）

獵人や銃の煙のなかにあり　木國（同）
狩舟の漕ぎ隔してが撃ちにけり　左右（同）
今すぎし獵夫の笛の木靈せり　吾亦紅（續ホトトギス）
狩の犬炭竈の戸を嗅ぎにけり　みつほ（同）
むさゝびの翅ひろげしが撃たれけり　馬醉木（同）
うたゝねのかりうど起し寢せにけり　夏山（同）
獵師達かどでの熱茶すゝりけり　同（同）
怪我犬を負うて戻りし獵師かな　いとし（同）
一しぐれありたるあとの狩場かな　慧月（同）
狩の傷蓬をもんでつけにけり　一杉（同）

參考 狩は未開人の生活上必要にして且最好む所の業たり。文字は景行紀に宣出、雄略紀に安野、天智紀に蒲生野など見え、狩とのみ云へば、主として鳥獸を狩る意に用ゐる。弓・羂・鷹を用ゐること古くより行はれ、今日では銃獵を主とする。

捕鯨（ほげい）　鯨突（くぢらつき）　勇魚取（いさなとり）　捕鯨船（ほげいせん）

古書校註

【三才圖會】 其の狀略々鮪に似たり。故に海鰌と名づく。（略）凡そ鯨に（一）六種有り。（略）之を捕るに、鯨を刺す鉾を森と曰ふ。樫の木を用ひて柄と作し、鉾の頭に纜を着けて船柱に繋ぐ。其の鉾鯨に中れば、則ち柄を脫して肉に入り、鯨の動作に隨って、深く肉中に入って拔けず。鉾の柄脫すと雖も、纜を着くる故に失はず。（此の外に、森の製數品有り）。一船の進退を掌る人、呼んで羽指と曰ふ。長袖短衫を被て、宛ら軍配の如し。近頃は專く大纜の網を用ゐ、鯨の之を纏いで森を擲つ。故に百に一失無し。

【本朝食鑑】 大和本草に云、海鰌、昔はくじらを矛にて突かず。弓にて射る。死して浦による。（略）海鰌　魚の最大なる者、日本に其の品六種、其の肉大小有り。慶長年中筑紫の浦の漁人、初めて矛を以て突き得て、油を取って肉を捨つ。其の後肉を食し腸と骨をすつ。其の後腸を食す。其の後頭骨を食す。（略）鯨の髭とは鰓の下なる鰓也　器用とす。（略）（二）和漢連此の者を得る。其の取る者俗にやすと云ふ。猎也。其の突くの數、二の數、乃至十番餘に至って魚死す。其の猎に漁者の名を印して、其の鯨肉をわかつに、一二の甲乙を定むといへり。世人大魚と稱し、俗家には年始に之を賞す。然れ共高貴の家に用ひず。本に異し難し。毛吹草に云、鯨突・鯨船・初鯨、霜月部に之を載す。鯨と叫ぶ稱也云々。尤も此の說を用ふべし

註（二）謂く・背美・座頭・長須・鰯鯨・小鯨の六種を擧げて、詳しく說明してある

季題解說 我國で捕鯨の起原は今から三百年以前にあるのであって、紀州の漁場が最も早く開け、土佐・肥前・壹岐・長門の地方に普及したのである。漁場はこの外伊豆・安房・銚子沖・金華山沖などである。

鯨が我近海に出没するのは、秋の中頃から仲春ごろまでで、之を捕獲する方法には網取法・突取法・銃殺法の三つがある。網取法は我國に最も古くから行はれた唯一の方法で、沿岸に來た鯨を適當の位置に追ひ來り、網の中へ追ひ込み、一番銛と稱する重量二百匁、長さ二尺ばかりの銛を投げ、次で二番銛、三番銛と續々投射してつひに死に至らしめるのである。一隊の船數四十艘以上に達し、最も勇壯な漁獲法で古來錦繪などに描かれたのはこの方法である。突取法は漁船三乃至五艘を以て一隊を作り、一艘の乘員七名乃至十名位、銛を以て突きとる方法である。銃殺法は最近最も多く行はれる方法で、これにノルウェー式捕鯨法と米國式捕鯨法とがある。何れも汽船から鯨を大砲によつて射殺して捕獲するのである。［參照］動物―鯨(クヂラ)

【例句】

捕鯨

突とめた鯨が眠る峯の月　蕪村（新五子稿）
既に得し鯨は迯て月ひとつ　同（同）
山颪一二の銛の幟かな　同（題苑集）
手取にやせんと乘り出す鯨舟　同（蕪村遺稿）
一番は迯て跡なし鯨突　太祇（太祇句選）
鯨舟新島守を慰めつ　召波（春泥發句集）
鯨つく日や七浦にかへり花　也有（蘿葉集）
捕鯨船嗄れたる汽笛(フエ)をならしけり　誓子（續ホトトギス）
高浪のかげをゆくなり捕鯨船　眞琴（同）

夜興引(よこひき)

【古書校註】

【滑稽雜談】　師說に云、夜興引といふは、獵人の冬月に至つて、夜に入り獸をとりに山へ犬を引きて行く也。是を夜興引とは申し侍る、其の所謂は、猪・鹿・猿・兎・狼なども、冬は肉美にして、皮骨もすぐやかなる時なれば、此の節に狩り取るにや。中華に所謂冬月の獸狩は、春苗を害する難を除くにや侍る。和國の夜興また其の義有るべし。田獵するに時ありと、古賢の制也。獵、識者に尋ぬべし。

【年浪草】　千梅が篗纑輪に曰、冬の夜、山中に獸を獵るに、犬を引くゆへ、獵師の詞によこ引と云ふ也。獵の内にも狸狩を云ふといへり。○今式にも、犬を率きて山に入り鹿を逐ふと也。

【季題解說】　冬の夜、獵師が山中に入つて獸類を狩ることをいふ。又その人をいふ。
夜興引といふのは畿内の獵師の言葉で、狩の中にも特に狸狩にいふといふことである。［參照］動物―狸(タヌキ)

【例句】

夜興51

夜興引ク途人犬やたつた山　其角（五元集拾遺）
犬引て豆腐狩得たり里夜興　同（同　）
夜興引や犬のとがむる塀の内　蕪村（蕪村句集）
夜興引の袂侘しきはした錢　同（題苑集）
咳氣引て來る淵もあり夜興曳　也有（蘿葉集）
つもる罪しらでや雪に夜興引　同（同　）
夜興引や犬心得て山の道　子規（子規句集）
夜興引の面あらためし若裳かな　暮情（ホトトギス）

熊突（くまつき）

【季題解説】 蟄居期、獵師が連れだつて山中に至り、穴居中の熊を誘ひ出して突き捕へるのである。熊の穴を探して目標をしておき、熊が穴から出る前、穴に到り、穴口に丸太を立てならべ、穴の前の雪を除ける。熊は前足を内方に引き、外方へ押すことが出來ないから、丸太を抱へて穴の内へ引き込まうとする、そこを突いて殺すのである。又前述のごとく裝置して穴の口から木の枝を挿し入れてやれば熊はそれを後方へ引き入れる、それを何遍もすれば遂に熊は穴の口の方へ自然に出されてしまふ、それを突くのである。常に穴居してゐる羆をもかういふ方法で狩る場合がある

【參照】 動物「熊」「羆」

【例句】

熊突　熊突や毒矢持ち立ちぬアイヌ　青眼子（ホトトギス）

猪狩（ゐがり）

猪追

【季題解説】 狩獵の目的でするのと、畑を荒されるのを防ぐために農山村で大勢の村人が出て狩るのとがあるが、山城の六ヶ畑御料場などで行はれるのは前者の場合で、大勢の「勢子」や「一員犬」が狩り出すので、そこを撃ちと

める。狩獵の中でも最も大掛りなもので、それだけになかなか壯觀である。雪が多いと猪は餌に困つて次第に人里近くへ出て來るから、これを狩獵する。手負猪は非常に猛烈で、かむしやらに突進して、自ら岩などにぶつかつて倒れることがある、いはゆる猪突である。［參照］動物―猪　秋―猪

例句

猪狩

銃ぐちや猪一叢の草による　石鼎（ホトトギス）
猪打に蒜臭き泊かな　不爲（同）
猪獵や猪撃ちとめし夕餉　風可（同）

兎狩（うさぎがり）　兎網（うさぎあみ）

季題解説　雪中、山地で兎を狩ることで、要所々々に網を張り、大勢してこれに追ひ落して網の目にひつかゝつたところを捕へる、草山や雜木山でやる場合が多く、大勢が手に手に竹や木片をもつて、四邊を叩き、大聲をあげて兎を追ひ出す樣は中々壯觀である。學校や青年團などでもよく行ふ。

［參照］動物―兎（うさぎ）

例句

兎狩

宿を出る手に〳〵棒や兎狩　泊露（ホトトギス）
まつ先に少年立ちつ兎狩　牧春（同）
兎狩吾等兄弟網の番　萱山（同）
網近く追はれ居すくむ兎かな　洛水（同）
兎まだ出でず雉子の翔つばかり　北湖（同）
眞青なる竹の呼子や兎狩　孫次郎（續ホトトギス）
兎汁山河たちまち夜となりぬ　北人（同）

橇（そり）

雪車（そり）　雪舟（そり）　馬橇（ばそり）　うまぞり　犬橇（のそ）　いぬそり　手橇（てそり）　橇醉（そりゑひ）　橇（そり）の宿（やど）

古書校註

【滑稽雜談】　和朝北越の地におゐて、雪車或は雪舟など云ふ者、橇也。橇は泥行の具也、和俗是を造りて、雪中に駕して道路の難をすくふ。おのづから中華の橇の製に似かよひたるにや、猶考ふべし。

【年浪草】　本邦に用ふる所の雪車は、舟に似たる者乎。北國の山人、雪中に用ふ。

【栞草】　北越雪譜　そり〳〵此の轌（ソリ）といふ物、雪國第一の用具なり。人力を助くること、船と車に同じ、且つ作ることいと易きは、圖をみてしるべし。（形、輪なき地車の如し。大小定まりなく、載する物にしたがひて造る。木材は堅木を用ふ）。我國の雪、冬は凍らざるゆゑ、冬に轌（ソリ）をつかへば、

雪に落ち入りて、摘く事ならず。蕨は春の雪鐵石のごとく凍りたる、正・二・三月の間に用ふべきものなり。其の時にいたるを、里俗雪道になりしといふ。俳諧の季寄に、雪車を冬とするは誤れり。されば迚て、雪中の物なれば、春の季には似氣なし。古哥に多く冬によめり。實にたがふとも冬として可なり、云々　山中樵るところの薪を雪車に積み引き歸る。或は山に曲りあるは、件の如くに縛したる薪の轎に乗り、片足を遊ばしてこれにて舵をとる。船を走らすがごとし。此の術學ばずして、自然に得るところなり。轎を引くには、かならず歌を謠ふ。これを雪車歌といふ。則ち樵歌なり。漸くその家にちかづくとき、その妻子その歌を聞いて、夫の歸れるを知り、出迎へたすけて家に至らしむ　南藍云。俳諧藏に、近來雪車の句作あるをみるに、多くは雪車に乗るといふ。雪車は薪を積むのみ、人の乗りありくものにはあらず云々といへり　されども、堀川後百首は

つみゆきふりにけらしなあらち山越のたび人雪車に乗るまで。曠野集　衣をこめて雪碕に乗りたるよあけかな　此の外、先吟あまたあれば、たとへ實事にたがふとも、くるしからず。

季題解説　雪國の冬の交通機關はこの橇である。山毛欅・椈などの木をまげたもの二本を臺に一尺五寸位の高さに横木を渡して床をつくり、臺下の雪に接する處に鉄金を打ちつけて滑りをよくしたりする。馬に曳かせるものが馬橇で、丸太を運ぶもの、客を運ぶ、この穀物を運ぶものとそれぞれに適當な備へ、形を有つて居り、長さは六七尺もあつて相當に物が乘せられる。雪路がせまいので同志がおはし合ふのに苦心する事がある。郵便橇の如きは赤い旗を立てゝ同僚に標示して行くのもある。街の中など、これらの橇の往來に馬の首にさげた鈴の音が入りまじつて賑やかである。二頭曳・一頭曳によつて親棒のつくりがちがつてゐる。犬に曳かせるのが犬橇である。橇を曳かせる犬は樺太犬などの特別に大きいもので普通どの犬でも曳くと云ふわけではない。手橇には小包など配達する時のもの、子供の橇滑りのためのものであり、小形で、荷などを結ひつけておいてその中に子供を入れたり物品を入れたりする。橇にのると船酔によく似たいやな酔ひを感ずるが、之も

體質によつて醉ふ人と醉はぬ人がある。
人力車の代理をするものに人力橇と云ふものがある【季題】天文―雪

【例句】

橇

いざ雪車にのり旅人とく來ませ　蕪村（武藏氏短冊）
雪車負て坂を上るや小さい子　一茶（七番日記）
狗も走りくらする小雪車かな　同（一茶句帖）
雪舟引や屋根から呼ぶ屆ケ狀　同（文政版發句集）
雪車負ふて歸るにしりぬ遠い道　乙二（をのゝえ草稿）
峠より雪車乘おろす鹿木哉　鼠彈（あらの）
橇馬に秣桶の屑を與へけり　榛山（同人）
爐に倚つて連山あかし雪舟の醉　蛇笏（ホトトギス）
犬橇の犬吠ゆれば町の犬吠えぬ　地藏尊（同）
雪舟暮れて淋しがる馬に唄ひけり　水子（同）
雪少しかゝれる橇を掃きにけり　旭山人（同）
醫師の橇雪をかづきて著きにけり　手古奈（同）
事務長や船を留守なる犬橇の輿　誓子（同）

母逝去

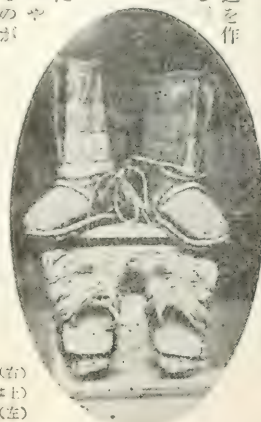
傾きて柩の雪舟の門出でぬ　宗軒（同）
庵主にておはせしことよ橇の客　月尚（同）
乳呑兒も頬被して橇の中　盆城（同）
雪の上に橇干してある山家かな　春王（同）
雪の上に並べし酒壺や橇の宿　三昧（同）
雪國にはるばるきつる橇にのる　三丘子（同）
橇降りて顧みすれば河北の灯　雨石（同）
父の橇見えずなりたる窓を去る　富士郎（同）
雪蟲のそこらを飛べり橇用意　夢城（續ホトトギス）
橇の座やあをあをとして葦疊　沙美（同）
立乘りて少年犬橇を驅りにけり　千代吉（同）
肩越に後なる橇の馬の顔　七石（同）
橇の馬引出したる雪あかり　清一（同）
石狩の渡舟を待てる馬橇かな　一泉（同）
先頭が立てば皆立ち橇の犬　都穗（同）
押してゆく橇の中なるお年玉　雨圃子（同）
途中より橇にのせたる柩かな　耕水（同）

雪沓（ゆきぐつ）　藁沓（わらぐつ）　深沓（ふかぐつ）　爪籠（つまご）

【古書校註】

【滑稽雜談】公事根源に云、春雪も沓のはなかくるゝ程なれば、所の衆以

下、必ず參內して、雪山をつきけるとぞ。（略）○これらの故實は因みに註し侍る。今又、和俗の雪沓と稱する者は、是等の義にあらず。其の製、革をもつて之を造る。綱貫或は雪沓など稱す。又、藺或は藁にて之を造る。共に雪踏の具也。

季題解説 雪を踏み固めて道を作る時或は雪道を歩くに用ゐる、藁で作り、爪先を覆ふだけのスリッパの樣なものや又長靴の樣に深く編んだものなどがある。後者を深沓といふこともある。(圖參照) 又特に爪籠と言つて前はゞ編上靴のやうに藁紐又は眞田紐で結ぶものがある。

雪沓には色々の種類があり、編み方も異り用途も色々である、が夫々に趣のあるものである。〔同類〕綱貫、すつぺ、[illegible]、雪下駄 [illegible] 天文—雪

高田地方の雪沓 (右)
(上は深沓・下は雪沓)
北海道地方の雪沓(左)

例句 雪沓

雪沓をはかんとすれば鼠行　蕪村（蕪村遺稿）
雪沓の替へしろ背に括りけり　椿山（同　人）
雪沓の解け緒結べる繭の僧　念腹（ホトトギス）
雪沓の大いなるかな穿きにけり　平凡（同）
雪沓を干しならべたる娼家かな　春王（同）
雪沓を穿き重めたる[illegible]かな　二葉（同）
雪沓をはきて出あるく歸省かな　嶋峰（同）
穿き下すつまご比べて右左　金甲子（同）
[illegible]
雪沓や提灯つけてわたさるゝ　漾人（續ホトトギス）
[illegible]
雪沓をこじみ穿く時涙かな　同（同）
藁沓の[illegible]のうしろに添へる　綠節（同）
切株に乾されてありし爪甲かな　露草（[illegible]）

綱貫

古書校註 【滑稽雑談】當世卑賤の者の著く所の綱貫と稱する者は、往昔に云ふたちはの遺風を傳ひて、牛皮を以て之を[illegible]。[illegible]に[illegible]を以て之に釘する者也。又云、中華或は[illegible]國に釘を用ゐ。其の製、和邦の綱貫に似たりと云ふ。

猶尋ぬべし。〇前說に云、萬葉集十六長歌に、飛鳥壯(ヲトコ)がながあいみ縫ひし黑沓と云ふも、太知波女の沓にやと、云々。

季語解說 一つなぬき一は雪沓の一種であるが、伊賀地方にのみ用ゐられて他國では用ゐられない。伊賀は山國で冬期は寒さ嚴しく、殊に降雪が甚だしい爲め防寒用に案出せられたものだと云ふ。此の地方では古くから綱貫が使用せられてゐるが、其の起源は明かでない。德川中世期頃からとも傳へられ、或は戰國時代からだとも云ひ傳へられてゐる。綱貫は是非必要なものであり、販賣業者も相當多かつたが近時長靴に征服せられた形で、山間僻地の一部にその影を止めてゐるに過ぎない。綱貫は豚・猪の皮で作り、他の獸の皮では作らない。靴と草鞋とを折衷したやうなもので、適當の大きさに皮を切り、足形に折り曲げ穴をあけて紐でくゝる。綱貫は使用に先立つて水に浸し皮を柔らかくする。皮に毛を存して防寒に役立たしめるものもある。**參照** 雪沓(ユキグツ)　すつぺ　天文―雪(ユキ)

參考 義經記、義經吉野山を落ち給ふ條に、「熊の皮のつらぬきはきて、きのふふりたる雪を落花の如く蹴散らし。」又義敎公元服記に、『手蓋、つなぬき仕、先規か。』

すつぺ

季語解說 中越地方で用ゐられる雪沓の一種である。藁を編んで造り、足袋のカバーのやうなもので、素足又は足袋を穿いた上に穿き、藁紐で結ぶのである。**參照** 雪沓(ユキグツ)　綱貫　天文―雪(ユキ)

樏(かんじき)　かじき　すがり

古書校註

【三才圖會】 虞書に云、禹王山行に乘る所の者なり。鐵を以て之を爲る。其の形錐に似て、長さ半寸、之を履下に施す。以爲へらく、山に上るに蹉跌せざるが爲也。按ずるに、越州の如き北地には、雪深くして、橇に乘らざれば行くこと能はず。樏を著けざれば、山に上り得ざる也。南方の人は未だ嘗て見ざる者也。

【滑稽雜談】 和邦において、高山險岨、雪月に及びて、岩斂と稱して、履下に之を著く。嘗て蹉跌せず。其の製、欙(一)に同じ。上の二物(二)和俗用ひる所に依りて季とす。

【栞草】 北越雪譜　かんじきは古訓なり。里俗かじきといふ。たて一尺二三寸、横七寸五六分云々。ジヤカ[illegible]といふ木の枝にて作る。鼻は反らしてクマイといふ蔓又はカツラといふ蔓をも用ふ。山漆の肉付の皮にて巻かしむ。(略)沓の下にはくものなり。雪にふみこまざるためなり。さがりは、竪二尺五六寸より三尺餘、横一尺二三寸、山竹をわためてつくる。かじき・

すがりの二つは、冬雪のやはらかなる時、踏みこまぬ爲に用ふ。はきつけぬ人は、一足もあゆみがたし。なれたるものは、これをはきて獣を追ふなり。

註（一）古代のもので、履下に半寸ばかりの鐵釘を打つたもの。三才圖會に圖が出てゐる。（二）雪車と橇との二つ。

季題解説 蔓或は山竹をまげ、二本あはせわがねて卵形の枠をつくり、トド（海馬）の皮を紐に割き（或は麻縄で）これを結び、卵形の短かい方の徑に三四本張り渡し、兩端に紐を殘し、雪沓の底に結びつけて、雪が深く道の無い處を踏んで埋れない様にするもので、獵師・樵夫・農夫など冬期山に行くものの必需品である。（圖參照）

スキーの發達によつて少しは減少して來たが仕事をするにはまだ必要な様である、もと兵士などが背に負うて行軍してゐたのを見たものであるが今は殆どスキーになつてしまつた。徑一寸位、長さ一尺三四寸位の棒を十本ばかり紐であみ、これを穿いて雪道を固めることがあるがこれも一種の樏である。

夏山の雪渓を越したり氷の崖を攀ぢ上るに氷樏と云ふものがあるが、金屬製で氷にさゝる様に出來てゐて、この樏とは趣を異にするが念のために附記して置く。**參照** 雪沓（ユキグツ） スキー 天文―雪（ユキ）

例句

樏

城うらや橇（カンジキ）の道に星光る	白雄（白雄句集）
橇やことにをかしき野夫の様	闌更（半化坊發句集）
かんじきや庵の前を踏序	一茶（一茶句帖）
出ぬけたか橇ながら小さゝ原	乙二（をのゝえ草稿）
雪も夜ぞて峠の茶店かな	手古奈（ホトトギス）
樏を橇にのせある草家かな	秋人（同）
かんじきに雪踏み固め案内かな	潺々（續ホトトギス）
かんじきを穿いて樏罠打しけり	九江（同）
樏をはいて一歩や雪の上	虚子（同）

雪下駄（ユキゲタ）

季題解説 東北地方・北海道など雪國特有のもので、雪がかたまつたり解けたものが凍つたりして道がつるつる滑つて危険である、その滑るのを防ぐ爲めに下駄又は足駄の歯に金具の滑り止めをつけて穿いて歩るがこれを雪下駄と云ふのである。下駄の歯の幅よりも狹せまい金の歯に三本程の釘を出して雪に喰ひ入る様にしたものを各の歯に皆打ちつけるのである、かういふ特別な金具を賣つてゐる。踏まれて氷の様な路に滑り止めの跡の一列ついてゐるのなど北國の情趣である。停車場の跨線橋が一冬

で一面穴たらけになつたりするのは滑止めのためである、爲めに板を敷いて一冬局に取替へる。雪國ならでは見られぬ様である。【參照】雪沓 天文―雪

爐開

茶事の爐開　爐開會（爐開茶會）　防寒の爐開　圍爐裏開く

古書校註

【山之井】口きりのていたらく、ひらくゐろりの火花をめで、しろずみと雪のまかふをあやしみ、炭とりを鳥に取りなして、羽箒を羽がひといひ、火ばしをはしに用ひなす心ばへ、（略）老の友なきおはぢごは、（一）ぜうになりたるすみがしらをも憐む心などすべし。

【日次紀事】開爐節。（一）今日中華の有司暖爐の炭を進る。民間亦置酒して暖爐會を作す。故に本朝亦開爐節と謂ひ、或は暖爐節と稱す。諸寺院及び市中亦各ゝ爐を置きて寒を禦ぐ。來年三月晦日に至れば則ち止む。

【滑稽雜談】爐開。一日。（略）○夢華錄に曰、十月朔、有司暖爐の炭を進る、民間皆置酒して暖爐會を作す。（略）○今和俗に、おなじ爐開と稱して一日に賞するは、茶道によれば、四月朔日より九月晦日迄風爐を用ひ、今日より地爐を開きて茶を煮る也。中華の故事におゐておのづから合する歟。久俗間の火達を切るは、今日に限らず、亥の日に多く明くる。

〔註〕（一）俳句の中に「ぜうになるや雪よりしろし炭頭」の句が見えてゐる。（二）十月朔日。

季題解説　夏の間は風爐に釜を掛けて居るが、段々寒さに向ふに連れ風爐を撤して爐を開いて釜を掛けるのである。時期は秋の末即ち冬の初めで以前は舊十月の亥の日、殊に中の亥の日と云つて中旬の亥の日に開くのを古い慣例として居たが現今は十一月の初旬、明治節頃に爐を開く。丁度前年の爐開から用ゐて來た茶が盡きる頃であるから、爐開と同時に新茶の壺の口を切り之れから新茶を用ゐるのである。

以上は茶式に依るものであるけれども、單に防寒の爲めの爐開も時季は凡そ同一である。京都では大抵十一月の亥の日に炬燵を入れ始める、東北地方では十月の末であらう。亥は極陰の動物であるから火災を防ぐといふ意を偶して居る。〔參照〕爐。塗爐縁。木地爐縁。春―爐塞

例句

爐開

爐開や左官老行く鬢の霜　芭蕉（炭俵）
爐開きや汝をよぶは金の事　其角（五元集）
爐ひらきの日をしめし野の土茶哉　嵐雪（玄峰集）
爐びらきや雪中庵の霰酒　蕪村（蕪村句集）
爐開きや裏町かけて一住居　同（夏より）
爐開や世に遁たる夫婦合　太祇（太祇句選）
爐びらきやけふも灯下に老の日記　召波（春泥發句集）
爐開や庭はあらしの樅を吹　同（同）

爐びらきや紅裏見ゆる老のさび　几董（井華集）
爐開やあつらへ通り夜の雨　一茶（一茶發句集）
爐開や障子の穴の日のこぼれ　東耕（今日の昔）
爐開や咳でうつむく額の紅　附鳳（焦尾琴）
爐開に一日雇ふ大工かな　子規（子規句集）
爐開やお詰に侍る陶物師　樵青（同人）
高山と荒海の間爐を開く　末灰（ホトトギス）
逗留の僧の一偈や爐を開く　拙童（同）
昨日より俄に寒し爐を開く　四十雀（同）
山莊の廣間の暖爐開きけり　玉骨（同）
開かれし爐にあり父に似たりけり　左右（ホトトギス）
三山のかなへの中や爐を開く　綱城（同）
爐開きに參る時雨の雨やどり　虛子（句集虛子）

塗爐緣（ぬりろぶち）

季題解說　爐緣には塗・木地兩方あるが廣間（薄茶の席）には多く塗爐緣を用ゐる。塗爐緣と云へば黒塗の意で普通は黒塗であるが又他の色の事も稀にはある。黒塗には蒔繪のあるものと無いものがある。爐開に關聯した季題である。【参照】爐開（ロビラキ）

木地爐緣（きぢろぶち）

季題解說　茶席の所謂小間（濃茶の席）即ち四疊半及び其れ以下の席の爐に用ゐる。澤栗・紅梅・黒柿・縞柿・赤松・欅木・北山丸太などで作る。寸法は一尺四寸四方、高さ二寸二分、天の廣さ一寸二分、其二分を內側で面取とする。古來宗入・久以などの作品がある。濃茶の時は「わび」を主とするので、木地爐緣を用ゐるが、薄茶の時には塗爐緣を用ゐて華やかにするのである。何れにしても爐開から爐塞までに關聯しての季題であつて、從來、木地爐緣だけを特に冬の季題として取扱つたものがあるのは何かの間違ひであらうと思ふ。少くとも千家の茶式に於ては、小間と廣間との別以外に春と冬との別は古來ないことである。【参照】爐開（ロビラキ）

壺の口切（つぼのくちきり）

口切茶事　口切茶會　茶の口切　口切

古書校註
【日次紀事】（十）此月、貴賤各〻茶會を催し、親戚朋友を饗す。是を壺の口切と謂ふ。今月茶壺を開く。凡そ親戚を會客と稱し、家の尊卑に隨ひ、其の器を求めて之を[illegible]し、[illegible]に至るまで、之を一稱す。（略）凡

そ茶事に用ふる所の物、口切前處々より茶壺を賣る。(略)凡そ茶壺の蓋の間に、糊を以て紙を封貼す。是、風濕をして茶を浸さしめざる也。初冬に至り、小刀を以て貼る所の紙の合縫の所を截りて蓋を開き、茶を取る。是を壺の口切と謂ふ。又點茶を立茶と謂ひ、又手前と謂ふ。

【滑稽雜談】和俗の茶を嗜む事、世間に蔓し、就中足利將軍義政公より茶道并に器物漸く備れり。其の後織田信長公又茶を愛す。又太閤秀吉おなじくこれを翫ぶ。又其の時代、千宗易利休、或は堺の紹鷗などいへる茶人ありて、いよいよ此の道に長じて、宮門跡を始めて、攝家清華の諸家、武家町人俗をわかたず、貴賤を言はず、茶を嗜むによて、毎年茶を詰めこたくはへ置き、此の壺の口を開きて賞味する事、當月におゐて專ら也。是を茶の口切と稱す。冬月に至つて茶を賞する事、中華なをしかり。按ずるに、只爐火に幸ありとも云ふ。猶、水の性全きを得るの時なればともいへり。茶道博識に尋ぬ可し。

季 (一)十月。

【[illegible]】其の年の製茶期に製した新茶(精製した葉茶)を袋に入れ各品名を記し壺に詰め壺封の上封印を施し濕氣を防いで夏の間保存して置いたのを開爐と同時に壺から取り出し茶臼で挽き、初使をするを云ふのである。客をする其日に挽いて挽きたてを用ゐるを御馳走とする。口切の茶事と稱し茶人では最も嚴肅な催で、席の疊・障子等總て替へ其他樋・垣等も盡く青竹にする、尤も茶事は平常でもかうするのが普通であるが口切茶事には殊に嚴重にする　口切の茶事は其日の入用たけを壺から出して挽き用ゐて又もとの如く封して置くから何回でも催すものである　然し一定の時期を過ぎてからは勿論口切とは稱さない。　一[illegible]夏　夏切(一茶俳句)

【例句】

壺の口切

口切に堺の庭ぞなつかしき　芭蕉(深川集)

はせを翁三廻忌
口切さけふに成たる茶湯かな　浪化(浪化上人發句集)

口切りや袴のひだに綠蘿蔔　其角(五元集)

口切や箪取當て匿頭巾　桃隣(古太白堂句選)

口切に千眼茶磨滞[illegible]にれ　同(同)

口切や五山衆なんどほのめきて　蕪村(蕪村句集)

口切や小城下ながら只ならね　同(同)

口切や湯氣たゞならぬ臺所　同(新五子稿)

口切や喜多も召れて四疊半　同(蕪村遺稿)

口切や梢ゆかしき塀隣　同(同)

口切の隣も飯のけぶり哉　同(同)

口きりやこゝろひそかに箏撰ミ　太祇(太祇句選)

口切のとまり客あり峯の坊　同(同)

花と稱して、舞臺に積み重ねたり。誠に奢侈の至れる也。近年公廳を憚りて、三ケ津共に此の義を停止し侍るならし。

丈右補。顔見せ、大かた霜月朔日に始むるを規矩とす。若し延引すれば三日五日の内に始むる也。其より前、十月に入つて、各座交代の役者諸役と定まりて、其の交名を一紙に辞行して市中を賣りありく。是を極早番附と云ふ。卷端に根本極と題す。又座中役者定まり、其の芝居本より座中の役者を誘引し、東山の座敷に於て饗應す。酒宴に臨んで役者各〻已が得たる所の藝能を施す。是を足揃と云ふ。又京都へ江戸大坂より登り、江戸大坂へ京都より下る役者着する日、其の座本芝居本、其の外因あるもの路次へ迎に出で、着する役者駕籠を走らせて芝居の内へ直に入り、舞臺に登る時、座本其の外各〻出でゝ參着を賀し、盃を取りかはし、壽祝をのぶ。是を乘込と云ふ。是等の噂皆顔見せの事にして、皆冬の季に作意するなり

【栞草】十一月朔日、京・江戸・大坂芝居顔見也　この顔見といふことは、三代目中村勘三郎工夫を以てこれをはじむといへり。又大阪にて夜芝居をなすことは、寶永のころ、嵐三右衞門といふ戲子、小夜嵐といふ狂言、甚だ繁昌して、見物夜中より群集し、後には初夜より來りけるゆゑ、これを嘉例として、顔見には夜芝居興行すとなん。凡そ俳優一年の座組、この狂言に定む。故に顔見、面見の稱あり。又晦日の夜、茶店の軒に種々の造り物を出す。これを顔見の飾物といふ。或は最負の花主より、酒樽・醬油、或は炭の類、何くれとなく山の如く積みあげ、大小の札を出し、進上某丈の文字を書く。これを積物といふ。これらを見物せんとて、諸人群集すること更にいふべからず。凡そ俳優家十一月朔日を以て相祝ふこと也。元日のごとし。よりて芝居の正月と云ふ。

【東都歳事記】三座芝居顔見狂言興行。臘月十二三日頃に至りてこれを止む。十月晦日曉八つ明より、太夫元若太夫吉例の三番叟を勤む。終りて、前夜の人々を入れかふる。夜七つ時より、前狂言脇狂言、色子・子役、大勢の大踊り、終りて後、新狂言顔見せの始りなり。都て、芝居にあづかるものは、大晦日に事を極め、十一月朔日を以て、元朝のこゝろになせり。

【季題解説】 （一）十一月。 歌舞伎足揃ともいふ。 略して顔見世・足揃、又は面見世ともいふ。顔見世とは一座の役者がその顔ぶれを見せるための總出で、初見參するのである。昔は毎年十月に劇場に於て役者の交迭を行つたから、十一月一日からの興行をかくよんだのである。昔は三都ともに前から酒樽や炭俵を贔屓から贈り、劇場や茶屋の前に立てゝ景氣を添へ、役者も大に緊張して霜月一日を元旦の如く心得て居り、從て、芝居正月ともいふ位である。「顔見世や一番太鼓二番鷄」「顔見世や北斗に競ふ炭俵」とあるやうに早朝から行はれたもので、朝の四つ時には三番叟をふんだものである。「十月の無くなり際とは夜明を示したものである。芝居年中行事には「十一月朔日顔見せは明ケ七時翁渡吉例なり」とある、今日では三都ともに故實はすたれてしまつた。現今京都四條南座では同じ顔見世と名のるが、十二月一日から興行をしてゐる。翁行燈・首足盥日も廢つたが、昔ながらの竹矢來・招看板が師走氣分をみなぎらせる。京の女は毎年此の顔見世興行を見ねがすまいと、平素はつましくして觀劇にそなへるのである。俳優は雁治郎一座に東京俳優が加はる。そして晝夜二回の大興行をなすもので、晝の部は凡そ午前十時開幕となつてゐるが、部屋入は六時といふことである。夜の部は五時開幕である。入場券は一週間もさきから前賣をするが、それでも幟幕が北風にあふられて寒い街頭に長く列をひいて入場券を求める人がつゞいて居るといふ景氣で、こゝばかりは師走のいそがしさをよそにしてゐる。【類題】歌舞伎囃子 柳樽「… 芝居は正月…」

【例句】 歌舞伎顔見世

顔みせや曉いさむ下邳の橋　其角（五元集）
かほ見世や既うき世の飯時分　蕪村（蕪村句集）
貌見世や夜着をはなるゝ妹が許　同（同）
顔見世や蒲團をまくる東山　同（同）
顔みせの幕に夜半のあらし哉　同（新五子稿）
旅人や貌見世の火も見ゆるより　同（蕪村遺稿）
顔みせの難波のよるは夢なれや　太祇（太祇句選）
顔みせや獄を出しあふ宇津の山　同（同）
積物や我つむ年をかほ見せに　同（同）
顔見せや伏見くらまの夜の旅　召波（春泥發句集）
顔みせや空灶ものゝ舟一片　同（同）
顔見せや宿にさかりの男郎花　也有（蘿葉集）
かほみせや[illegible]　蓼太（蓼太句集）
かほみせや矢倉に[illegible]　几董（井華集）
顔見せや北斗に競ふ炭だはら　同（同）

歌舞伎顔見世

顔見せやしばらく冬の初日影　几董（井華集）
世の中や[illegible]顔見せになにはから　一茶（七番日記）
顔見せに夜設せよ大挑燈　東子（家つと）
顔見せや桟敷に灯す蠟燭　百萬（古今句集）
顔見世や夜はほのぼのと芝居前　耕村（春夏秋冬）
顔見世やお茶子溜りの大火鉢　二月堂（同人）
顔見世の花道歩く舞妓かな　五傳（ホトトギス）
顔見世のビラ書やおちよぼまで　夜半（同）
顔見世や木偶の口上一わたり　季好（同）
顔見世のお茶子の背に紋どころ　華女（同）
顔見世の幟の上の東山　鹿郎（同）
年々や顔見世たけは観ることに　野風呂（續ホトトギス）
顔見世の序幕をへたる朝餉かな　長之丞（同）

参考 昔時、毎年十月に各座の俳優の更迭を行つたので、十一月の興行を顔見世芝居といひ、その一年間出勤俳優の番附を顔見世番附といふ。重井筒に「なんと顔見世見やつたか、札買ひやるを錢やろうか」とある。又俗つれづれに「此の度の顔みせ、舞に花を降らせんと、一筋に思ひ入り」と。

芝居の正月　歌舞伎正月

古書校註【俳諧歳時記】十一月朔日、京・江戸・大阪、芝居顔見せ也、（略）凡そ俳優家、十一月朔日を以て相祝ふこと也、元日の如し。よりて芝居の正月といふ。 参照 歌舞伎囃子初　歌舞伎顔見世

餅搗芝居

季題解説 東京などでは落語家などが年末芝居をすることがある。其れを餅搗芝居といふ。田舎では素人の芝居などがある。それも餅搗芝居といふ。餅を搗く時分の芝居といふ義であらう。 参照 餅搗

新嘗祭　しんじやうさい　大嘗祭　だいじやうさい　卜食　日蔭の鬘　日蔭の絲　摺衣

古書校註【滑稽雑談】公事根源に云、新嘗會、中卯日。是は神今食に同じ。ひらての数十三也。其の外はかはらず　是は今年のはつ稲を神に奉らせ給ふ義也。代の始には大嘗會といふ。年毎のをば新嘗會と申すなり。卜食の人に摺衣日蔭を著す。用明天皇二年四月より新嘗の事は始まる。大かたは神代

より事おこれり。

【年浪草】江次第に曰、令に云、謂く、新穀を嘗るは以て神を祭るの儀也。朝には則ち諸神の相嘗、夕には則ち新穀を至尊に供する也。

季題解説 昔は十一月中の卯の日、現今は十一月二十三日に宮中で行はせられる祭事で、今年の初稲を神に奉らせ至上にもきこし召される御儀であるが、民間でも此日夕刻から各氏神に於て祭事がある。その祭人は卜食の人と云ひ、祭服は摺衣、冠は日蔭の鬘・日蔭の絲（白い絲を冠に掛けるから）といふ。**參照** 豐明節會トヨノアカリノセチヱ 神樂カグラ 相嘗祭アヒムベマツリ

例句

新嘗祭 新米や國太平に父母は無事 翠竹（春夏秋冬）

參考 新嘗祭は毎年十一月二十三日、宮中神嘉殿に於いて、皇親ら行はせ給ふ御祭典なり。古くは十一月下の卯日（但し三卯の時は中の卯日へ）を用ひしが、明治六年以後現制の如くなれり。にひなへは新津火の義、火は火食を謂ふ。即ち天皇新穀を喫し給ふに當り、先づ之を天神・地祇に供し給ふ御祭儀にして宮中恒例の祭祀中大祭に屬す。而して天皇即位初度の新嘗祭を特に大嘗祭と稱す。

大嘗祭の御儀は十一月卯の日より午の日に至る四日間行はる。先づ二月以後九月に至る間に國郡卜定とて悠紀・主基兩國を卜し齋田を作りて稲を植ゑ、八月下旬兩國に拔穗使を派して稲穗を拔採せしめ、之を豫め卜定せる北野の齋場に納めしむ。是より先、奉幣使をして伊勢大神宮以下五畿七道の大小神社に遣して奉幣せしむ。又宮城内大極殿龍尾道の前庭に大嘗宮を建つ。十月下旬に至り天皇親ら河上（賀茂川邊）に臨御ありて祓禊を修し給ふ。十一月卯日、即ち大嘗祭の當日に至り、悠紀・主基兩國供神の諸物を齋場より大嘗宮に運致し、夜に入りて天皇御沐浴の後ち大嘗宮に臨御ありて悠紀正殿に入御し給ひ、親ら神饌・神酒を供し、亦親らも御饌を喫し給ふ。之を夕御饌と云ふ。了りて還御の後ち更に御沐浴ありて主基の正殿に入御し給ふ。其の儀悠紀と全く同じ。之を曉の御饌と云ふ。辰の日、豐樂殿に於いて悠紀節會を行ふ。白酒・黑酒を天皇に供し、又群臣百官に賜宴あり。巳の日には同じく主基節會を行ふ。午の日に至りて悠紀・主基の帳を撤し、高御座を裝飾し、皇太子・親王及び群臣百官を會して更に宴を給ふ。之を豐明節會と稱す。國栖奏を始め種々の舞樂を奏す。次いで翌未の日には祭事に與る諸人の敍位賜祿を行ひ、又晦日には朱雀門にて大祓を行ふ、之を解齋大祓と云ふ。以上を以て大嘗の祭儀全く終了す。

此の如く大嘗祭は、天皇一代一度の大禮にして歴朝不刊の大典なるに拘はらず、中世以後は用途の缺乏、宮城の荒廢或は戰亂等の爲め、儀式漸く簡略となり、遂には中絶の已むなきに至れり。然るに東山天皇貞享四年に行はれたりしも簡略なりしが、櫻町天皇元文三年に將軍吉宗之を憂へ一切の用途

を進獻せしに依りて再興せられたり。

扨て次に新嘗祭の御儀に就いて述べむに十一月二十三日の早旦、神嘉殿の敷設を爲し御殿にて解除を行ふ。午後二時、式部職官員御殿の裝飾を奉仕し、四時神座を設け、五時四十分齋火の御燈を點し、庭燎を燒き、六時皇太子・親王以下諸官の着床あり。次で陛下出御、まづ隔殿の御座に着きたまふ。此間神饌の行立あり、伶人神樂を奏す。旣にして陛下本殿の御座に進御、御手づから神饌を供進し、御禮拜ありて御告文を奏し給ふ。次に御直會の事あり。終つて神饌を撤し給ふ。其後皇太子・親王の拜禮ありて陛下入御、其後諸員の拜禮ありて御儀全く終る。之を夕の御次第となす。翌二十四日午前一時、曉の神饌を供す。その儀夕の御次第に異なることなし。

新嘗祭の御儀は、獨り天皇行ひ給ひしのみならず、皇太子・大臣及び庶人に至るまで悉く行ひしものなり。而して太古、天照大神の之を行ひ給ひしは天皇御親祭の起原にして、天稚彥の之を行ひしは庶人新嘗の初見なり。さて又皇極天皇の頃までは大嘗・新嘗の區別も明かならざりしが、是より以後は祭月一定し、必ず十一月を以て行ふことゝなれり。此の儀式は後花園天皇寬正以後中絕せしが、東山天皇貞享五年に新嘗御祈といふ事起り、爾來每年吉田の神祇官代に於いて此の事あり、朝廷にては之に對し僅かに神饌を奉らるゝに過ぎざりき。然るに櫻町天皇元文五年、關白一條兼香等の盡力に依りて復興し、爾來今日に及べり。

豐明節會　悠紀の節　主基の節

古書校註

【御傘】　冬也。霜月の中辰日也。五節の舞、此の時にあり。又、日本紀に宴の字を、とよのあかりとよめば、何體により、いづれの節會をも、とよのあかりといへば、冬にならぬ句も有るべし。去り乍ら、大法は豐明の節會、霜月を本とす。卽位有りて御代の始めの冬のとよのあかりは、大嘗會と云ふ也。每年行はるゝは新嘗會と云ひ、にひなめのまつりと讀む也。當年のよねを始めて大神宮へそなへ奉れる故なり。又、諱に節會とばかりするは雜也。豐明の節會とするは冬也。おせちとばかりするは春也。これは天下の地下人、正月に親類ども振舞を申し付けたる俗言なれば、是非に及ばず春に用ゐる。

【初學抄】　(二)同中の辰日也。大嘗會御程に之ある事也。禁中方の御事は、委くは記しがたき儀也。

小忌衣、同をみの袖、山あひの袖、何れも同前也。五節の舞人の着する物也。賀茂祭又大嘗會の時、用ふる物也。

【滑稽雜談】　公事根源に曰、是は今年の稻を神に奉らせ給ひて、今日君もきこし召し、臣下にも給ふ。故に節會行はる。新嘗の祭に參りたる上卿・宰

相・辨、小忌を著る。餘人は諸司の小忌を束帶の上に著たるを、けふはうるはしく青摺を用ふる。上卿・宰相・外辨の上首を勸む。南殿の廂に兀子をまうけて、内辨以下座に著く。白酒・黒酒の盃をとり、大歌の別當大辨も催して、舞姫のぼり、五度袖をかへしてかへり入る。事にたへたる上達、五節の所とぶらひて催馬樂などうたふ。節會の儀常のごとし。節會の程露臺の亂舞也。びんたゝらうたふ。殿上人たち遊びなど有り。昔は節會の座にて御遊ある事有り。事に堪へたる人々を、御帳の東にちかく召して此の事有り。ふんのつかさに（註略）御琴めす。御手ならしと云ふ（註略）。十六日の節會などにも、時にしたがひて此の事はありし也。今日の辰の日の節會は、大嘗會の時は辰の日を悠紀の節會、巳の日を主基の節會と申すにや。

註（一）十一月

季題解説 新嘗祭の翌日、宮中に行はせられる御儀式である。新嘗祭に神に奉らせられた初穂を群臣に賜はる御宴で、上卿・宰相・辨等皆小忌衣を著して參列し、五節の舞姫が上殿して舞をつかまつる。**参照** 新嘗祭（註付） 五節の舞（ゴセチノマヒ） 小忌衣（ヲミゴロモ）

五節の舞（ごせちのまひ）

五節帳臺試（ごせちちやうだいのこころみ） 殿上の淵醉（てんじやうのえんずい） 五節御前試（ごせちごぜんのこころみ） 猗の使 童女御覽（わらはごらん）

古書校註

【帳臺試】 五節の（一）中丑日。（略）公事根源に云、中丑の日をば五節帳臺試といふ。常寧殿にて主上御覽あり。五節舞姫は五人也（註略）まいり、儀式有り。うちうちまいるをば晩座と云ふ。昔參りとゝのほりて、帳臺に出御也。殿上人ども脂燭にさぶらふ。主上御直衣に御指貫にて御沓をめさる。主上の御指貫を召さるゝ事は、此の時の外なし。但し、御輸の時は、帳臺試に准じてめさるゝ也。帳臺におはします程、亂舞有り。びんたゝらなどうたふ。大歌・小歌などいふ事有り。（一）或書に云、舞妓裝束次第、丑の日は赤色の唐衣、寅の日は青色の唐衣、辰の日は青摺の唐衣、赤縄紐・日蔭等也。青摺とは小忌の事也。

殿上淵醉 寅日。公事根源に云、寅の日は殿上の淵醉也。朗詠のいまやうなどうたひて、三獻果てゝ亂舞あり。次第に沓をはきて、北の陣をめぐりて五節所にむかふ。其の後所々に參りて推參などあり。郢曲の輩をしてまいらんなどうたふ。后宮女院など淵醉あればけふあすの程也。けふ御前の試あり。御殿の廂にて亂舞有り。くしなどをおかる。昔は年々に行はる。今は大嘗の時より外はなきにや。

五節御前試 同日。江次第に曰、清涼殿の東廂に御簾を垂る。（略）舞姫參り畢れば、次第に几帳より出でて御前の座に着す。主殿寮濃口より入り、炬を擧げて庭中に列立す。大歌等を發し、舞姫舞ふ。内侍御歌を返すべきの

由を示す（扇を以て長押を叩く）。藏人頭之を聞き、仰せて曰、御歡返せ。次に事畢つて藏人頭同ひて曰、譴そ。大歌人等各々其の名を稱へ、退出。次に舞姫退下（是を御前の試と申す也。（公事根源に云、初々五節の舞姫のおこりは、むかし天武天皇よしの宮にましまして、琴を彈き給ひし時、まへの峯より天女あま下りて、天の羽衣の袖を五度飜して、をとめどもをとめさびすもからたまをたもとにまきてをとめさびすもとうたひけるとかや。しかるを天平五年五月にまさしく内裏にて五節の舞はありけるとぞ。

狩の使。公事根源に云、昔は狩の使などいふ事有り。それはけふ五節所にたまはらん爲に、交野の雉子などをめされしに使のありしを、狩の使とは申す也。○藻鹽草に云、狩の使、鷹狩の使也。又鹿狩の使とも云へり（註略）。只鷹狩の儀用ふ可し。或は云、假の使と云々。是もいはれざるかと云々。これらの義等によらば、狩の使冬也。又巡狩をも狩の使と云ふ。辨ふ可し。

【年浪草】童女御覽。公事根源頭書に曰、卯日、童女御覽の事、雲圖抄に詳か也。吳竹臺の圖の下、下仕參上の道也。承香殿西橋より庭上に降り立ちて南行す。但し、竹臺の下に到りて、下仕竹臺の西の頭りより歩ましむ。藏人、東の頭りより行き合ふ故實也。近代案内を知らず云々。

註　（一）十一月。○豐明節會・小忌衣參照。

參考　五節の舞は天武天皇の故事に出づといふ。この事、年中行事秘抄に引ける本朝月令に見ゆるを初見とする。曰く『五節舞姫者、淨御原天皇之所レ製也。相傳云、天皇御二吉野宮一日暮彈レ琴有レ興、試樂之間、前岫之下、雲氣忽起、疑如二高唐神女一髣髴應レ曲而舞。獨人二天瞻一他人無レ見、擧レ袖五變、故謂二之五節一云々』として、嬢子どもをとめさびすも唐玉を手本に纏きて嬢子さびすも』の歌を掲ぐ。この歌の二句、琴歌譜には□をとめさびすと二とあり。但し五節とは左傳に『公曰、女不レ可レ近乎。醫和曰、節レ之二先王之樂所三以節二百事一也。故有二五節一』とあるに出づといふ。この五節は五聲の節をいふ由である。古くは五節の舞は、毎年新嘗祭に行はれたが後には大嘗會の時のみ行はれることとなつた。十一月に行はれるを例とするが、續日本紀天平十五年五月に、皇太子（後の孝謙天皇、時に內親王）親ら五節を舞はれたと見えてゐる。その時の元正太上天皇の御製の歌『そらみつ日本の國は神かくし尊くあるらしこの舞見れば』。

小忌衣（をみごろも）

小忌（をみ）の袖（そで）　靑摺（あをずり）の衣（ころも）

季題解說　大嘗・新嘗・豐明等の節會に齋戒する事を小忌と云ひ、その際用ゐる衣を小忌衣と云つて、白い布に山藍で紋樣を靑摺にして狩衣のやうに作り、二條の赤紐を右肩に附け兩袖の中央に紙捻を垂れたものださうであるが、民間では各神社の新嘗祭の時に神主が著る衣裝の事を云つていふ譯である。【參照】豐明節會（トヨノアカリノセチエ）　五節の舞（ゴセチノマヒ）　神樂（カグ

明治節（めいぢせつ）

【季題解説】明治年間は日本の國が最もめざましい飛躍を遂げた輝かしい時代であつた。さうして明治天皇は全く御一人で此の時代をお作り出しになつたと申上げてよい位に總てに大御心を垂れ給ふた現し世の神帝にあらせられた。その御聖德とその時代を稱へ偲ぶ爲めに制定せられたのが明治節であつて、明治天皇のお生れになつた十一月の三日と定められた。此日は宮中でも御儀式があり、全國津々浦々でその時代を記念する催が行はれるのを例として居る。【參照】明治神宮祭（メイヂジングウサイ）

【例句】明治節

宴毎に菊挿しにけり明治節　飛雨（同人）
思出の昔ありがたし明治節　杏人（同）
校庭に隣る草家も明治節　墨石（續ホトトギス）

【參考】昭和二年三月三日、勅命を以つて毎年十一月三日を明治節の祭日と定められる　十一月三日は、御生誕の九月二十二日を太陽暦に換算した日である。

氷魚の使（ひをのつかひ）

【古書校注】【滑稽雜談】延喜式（内膳式）に曰、山城國・近江國・氷魚の網代各一處。其の氷魚、九月に始まつて、十二月晦日に至るまで之を貢ぐ。按ずるに、山城は宇治、近江は田上川なり。昔は此の所より、日次に氷魚を貢調せし由、諸書に見え侍る。此の御調の使を氷魚の使といへり。【參照】動物　氷魚

孟冬の旬（まうとうのじゆん）

氷魚を賜ふ

【古書校注】【滑稽雜談】日本紀に曰、天武天皇五年、冬十月乙未朔、置酒して群臣に宴す。公事根源に云、旬、朔日。十月朔日、天皇南殿に出御有りて節會あり。是を孟冬の旬と申す也。三獻の後氷魚を群臣に給ふ。大かたの儀は（一）孟夏に同じ。近頃は宜陽殿にて平座あり。氷魚を賜ひ、鹽を添へて給ふを、鹽にさしてくふなり。【參照】夏―孟夏の旬（マウカノジユン）

註（一）孟夏の旬

爐炭を進る（ろたんをたてまつる）

煖爐會

【古書校注】【滑稽雜談】呂原明が歳時雜記に云、京人、十月朔、酒を沃ぎ、乃ち炙肉を爐中に [illegible]、圍座して飲み啗ふ。之を暖爐と謂ふ。（）夢華錄に曰、十月朔、有司爐炭を進め、民間皆置酒して煖爐會を作す。[illegible]今、和俗に

おゐて、爐開と稱して(二)一日に賞するは、茶道によれり。(略)中華の故事におゐておのづから合する歟。

註 (一)増山井や年浪草の「孟冬の旬」(例出参照)の條に引いてある如く、拾芥抄の十月一日の旬の下に、「自時平座、今日より明年二月に至るまで、毎日晩頭平座、兵庫寮鼓を發し、主殿寮炭を進る」とある。此日の長官に相當はあるが、主殿寮が炭を進ることとは、支那の有司暖爐に炭を進ることを先蹤とするものかも知れぬ。(二)十月一日。

冬の更衣(ふゆのころもがへ)　後の更衣(のちのころもがへ)

古書校註

【日次紀事】更衣の式。諸公家、(一)今日より來年三月晦日に至るまで、各々冬袍を著せらる。

【滑稽雜談】公事根源に云、十月一日は先づ御衣更あり。掃部寮夏の裝束を撤して、冬のにあらためかふ、云々。(一)正徹記に云、十月しらがされ。冬の更衣の頃也。表裏ともに白し。菊の心か。或は露霜の色に是を用ひる也。(一)今按ずるに、更衣とばかりは、初を以て正とすれば、夏也。御傘にも、冬の更衣といへり。年中行事に、十月更衣と云ふ。心得べし。參照 夏―更衣(コロモガヘ)

註 ○なほ滑稽雜談には、各月に「衣類」の項が見え、十月の條には、しらがさね・枯野の色。殘りの菊、十一月の部には、氷がさね・はつ雪・紅梅、十二月の部には、雨・雪の下・つばき、以上の如く見え、それぞれ解說が附してある。(一)十月一日。

射場始(いばはじめ)　弓場始(ゆばはじめ)

古書校註

【增山井】(一)五日。左右の衞門弓場(ユバ)の埒(アヅチ)をつくは三日也。射場莚と年中行事の歌合に有り。

【滑稽雜談】江家次第に曰、射場始(藏人式七日、五日は殘菊の宴に當るに依りて也)、十月五日、(略)公事根源に云、射場始、五日。先づ此の月の三日に、左右衞門、弓場の埒(アヅチ)をつく。(一)其の日は、天子弓場殿(ユバドノ)に出でさせ給ふて、弓を御覽ずるなり。公卿以下、束帶にて是を射る。天子御射席をしかれて、弓矢を御座の左右のわきにたてらる。これ群臣とひとしく弓を射給ふよし也。誠に文武ふたつの道は、一をかくべからざるが故に、いま天子も弓場殿へ出でさせ給ひて、武道をならはせ給ふ。參照 新年　射始(イハ)

註 (一)十月。(二)五日。

殘菊の宴(ざんぎくのえん)

古書校註

【蓬蒲輪】殘菊の宴　五日、群臣に宴盃を賜うて詩を作らしむ。然れば、初心佯子、殘る菊として、十月と覺えたる族有り。殘る菊は九月十日の菊

のこと也。混ずべからず。
【年浪草】菅家文章(第五)に曰、残菊を惜む、各一字を分つて制に應ずるの序に云、黄華の重陽を過ぎたる、世俗之を残菊と謂ふ。(一)公事根源に云昔、菊花のえんは九月九日にて、又残菊のえんとて十月五日に行はれし也、是も群臣詩を作りて、酒を賜ふ事、重陽に同じ。参照 觀菊御會(クワンキクギヨクワイ) 秋―重陽

下元(げげん)の節(せつ)　水官(すゐくわん)厄を解(げ)す

古書校註

【増山井】下元の日。十月十五日の事也。

水官厄を解す。正月上元には、天官福を賜ふ、七月中元には、地官罪を赦す。十月下元には、水官厄を解す云々(書言故事)。又云、水官主錄百司、人間の禍福善惡をけみして、天闕に申して厄を解す云々。

【日次紀事】(一)今日、下元の節と謂ふ。

【滑稽雜談】和朝において、上元・中元の故實は侍るといへども、下元の儀未だ考へず。

水官厄を解す。(略)○これらも上の條に同じ故事にて、和朝に沙汰なし。近世俳書に之を載す。故に亦註し侍る。

註 (一)十月十五日。

郁子(むべ)の貢(こう)

古書校註

【日次紀事】(一)今日、江州高島郡奥濱より郁核を禁裏に獻ず。郁核、倭名宇倍。然るに今其の獻ずる所の物を考ふれば、則ち通草の實にして、其の氣味形色、郁核子と大に異也。按ずるに、上人此の獻物を以て名を稱せず、專ら御貢と謂ふ。御貢と郁核と倭語相通し、故に誤つて通草を稱して宇倍と謂ふ者乎。枯柴を以て小籠を造つて之を盛る、其の體朴古を存す。

註 (一)十一月一日。

履(くつ)・襪(したうづ)を獻る

古書校註

【増山井】履を獻る(クツタテマツ)、襪をたてまつる(シトウヅ)。もろこしには、冬至の日、人の親たるもの、くつ・しとうづを舅姑にたてまつれり。長至を踐むの義也と、崔浩が女儀にあり。

【滑稽雜談】按ずるに、襪の類、晴夜など、押し出して冬に用ひがたし。冬至の心など侍らば勿論也。○五雜組に云、昔宮中の女工、至後、(一)日一線を長うする故に、舅姑に是の日を以て履襪を獻ずるは、女工の始を

表する也。

註（一）宮々を誂ふを參照せよ。

御髪上

古書校註

【日次紀事】（一）此の月吉日を撰びて、禁裏に御髪上行はる。極﨟之を奉る。主殿の官人松明を執り、衛士之を勤む。往昔、多く午の日を用ひらる。院中・院廳之を勤む。

【滑稽雜談】公事根源に云、御髪上、下午日。藏人御ぐしのけづりくずを給はりて、主殿寮にむかひて燒くなり。此の外ことなる事なし。（按ずるに、民俗御ぐし上と稱して、一年の麻・札守を燒く。或は小社などに之を納む。是の意考ふべし。

註（一）十二月。

忌火の御飯

忌火の御飯を供す

古書校註

【滑稽雜談】公事根源に云、十二月朔日。六月に同じ。【參照】夏　忌火の御飯

御體の御占

古書校註

【滑稽雜談】公事根源に云、（一）十日、是も六月に同じ。上卿、陣の座につきて御卜を奏す。御卜御所にとゞまる。明年六月までの事をうらなふ。其の方の神の祟りあらば、祈り申すべき由など載する也。

【年浪草】江家次第に曰、御體御占は、六月・十二月十日、此の日官奏有るべからず。（略）弘仁官式に云、凡そ御體の卜は、神祇官の中臣、卜部等を率ゐて、六月・十二月一日、齋を始めて之を卜し、九日卜し竟りて、十日に之を奏す。云々。

註（一）十二月。夏之部—御體の御占參照。

着駄の政

古書校註

【滑稽雜談】（一）公事根源に云、五月におなじ。【參照】夏—着駄の政

註（一）十二月の部にある。

曆の奏

古書校註

【俳諧初學抄】曆奏、十一月一日也。欽明天皇御宇に始る也。

河原撫子から引いてある昭和三年の實質である（季題を參照）。遊びとしての事由は、宇津保物語、其の上の巻に見えるのが古いものであらう。

神宮競技（じんぐうきやうぎ）

季題解説　明治節前後には、大帝の御偉德を記念する意味で色々な催しが全國的に行はれるが、中でもこの神宮競技は青年日本を代表するスポーツの綜合競技であつて、明朗な年中行事として期待せられる。十月三十日から五日間、明治神宮外苑競技場を中心として行はれる。初冬、天候はまさに極まる。劍道・柔道・相撲・陸上・水上・漕艇・庭球・野球など、これらの競技のために練りに練つた全國の若人達が故郷の名譽の爲めに中原に覇を爭ふのである。そして各種の記錄は華々しく新聞などに報道され、又神宮記錄として選手達の憧憬の的となる。或る意味で現代の一つの象徴であらう。　**參照**　秋—神宮競技（ジングウキヤウギ）

陸軍大演習（りくぐんだいえんしふ）　大演習（だいえんしふ）

季題解説　每年十一月に入ると陸軍の大演習がはじまる。陸軍訓練の總決算であつて、普通、秋季演習と呼ばれてゐる。大概、刈上後の空田が利用される。

初め聯隊演習から旅團演習・師團演習となり、師團對抗演習で終る。この間には、三日間位の不眠不休や、困苦缺乏や、徹夜行軍、强行軍、急行軍など、實戰そのまゝが想定される。大抵十一月十五日が觀兵式である。特に二師團以上の聯合演習で、天皇陛下御統監の下に行はれる場合はこれを特別大演習と云ふ。

飛行機の飛翔、爆音、砲聲、銃聲、喊聲、靴の音、馬蹄の響。天は既に寒い、その背景には、時雨があり、落葉があり、枯野があつて、疲勞と叱咤と嚴肅と壯烈とを包んでゐるのである。　**參照**　秋—陸軍大演習（リクグンダイエンシフ）

例句

陸軍大演習

大演習火砲のもとにまどろめる　　誓子（ホトトギス誌）

雨の稻架大演習は砲を擊つ　　同（同）

大演習刈田の畦に戰やむ　　同（同）

觀菊御會（くわんぎくぎよくわい）　觀菊御宴（くわんぎくぎよえん）

季題解説　每年十一月中頃、大抵は東京の新宿御苑で觀菊御宴の御催があつて、兩陛下の御成があり、宮中諸官・内閣大臣・外國使臣・華族其他の諸官・功勞者など全國から數千名の者が選ばれて御召にあづかるのが恆例になつてゐる。　**參照**　殘菊の宴（ザンギクノエン）　秋—觀菊御宴（クワンギクギヨエン）

正倉院曝涼（しやうさうゐんばくりやう）

【季題解説】奈良東大寺構の正倉院は勅封であつて、明治二十年以来、毎年十一月一日から十五日迄の間、晴天の日のみに曝涼が行はれる。御開扉のときには侍従が勅命を奉じて御勅使として立たせられ、帝室博物館長の立會の上に開扉され、侍従は直ちに復奏され、十五日には勅使が御封を奉じて再び博物館長と共に立會の上閉扉される。この間、奏任官以上の者及び其の妻に拝観を許される。併し拝観が主でなく、曝涼を兼ねてのことであるから、時雨などの場合には「御閉扉、御閉扉」と渡らせられて厳重に閉され、拝観中の者も退下せしめられる。拝観は十月中旬官報に告示され、宮内大臣宛に願書を出せば拝観許可證を送附して来る。拝観は禮服であることを要し、懐中電燈を持参すれば便利であり、大型レンズを持てば更に便利である。毎日殆ど外人の拝観しないことはない。【句例】秋―正倉院曝涼[illegible]

事納（ことをさめ）

【古書校註】【栞草】事納。（一）八日。「用捨箱」無住雑談集に云、むかしは寺々只一食にて、朝食一度しけり。次第に器量弱くして、非時と名づけて日中に食し、後には山も奈良も、三度食す。夕のをば事と申すにはいへり。未申の時ばかりに非時して、法師ばら坂本へ下り出ぬれば、夕方寄合ひて、事と名づけて我々世事して食すといへり、といふ事を載せたり。按ずるに、十二月は日の短き頃にて、年の暮は事せはしくなる故に、八日を限り二食となるが、當時の僧家の風俗にして事納ととなへ、二月は日も漸くながくなれば、八日より三度食する、事始めといひしにはあらずや。江戸鹿子（貞享）二月八日事始、十二月八日事納。今の俗二月を事初とおもふもあるめり。正月の式にかゝはりし事にはあらず、云々。○金公事をつくづくにして事納　山店。此の外、十二月を事をさめといへる證句多し。今日いとこ煮を食す。[illegible]料理物語（寛永二〇）云、いとこに・あづき・牛蒡・芋・大根・豆腐・くわゐなどいれ、中味噌にてよし。おそく煮申すにより、いとこにか、とあり。追々に煮る、甥々に似る、ことばの通ふを以て御事汁となづけしなるべし。「用捨箱」八日に籠をつるは、方相の目になぞらへ、邪気をはらふ事なり、云々。一説に、（二）おことに籠をつるは、九字のかたち也、云々。春のこの部、事始の條をもかよはしみるべし。【参照】

【註】（一）十二月。（二）東都歳事記に「正月事始と[illegible]付けて屋上に出す。二月八日のごとし」とある。

事始（ことはじめ）　事始の餅（ことはじめのもち）

古書校註

【日次紀事】　事始日。（一）今日、正月万事の經營始めて之を修す。俗に是を事始の日と謂ふ。正月用ふる所の物、亦多く之を買ふ。

【滑稽雜談】　正月事始。十二日。（略）○和俗、正月事始とて、十二月十三日より來陽の諸事を祝し營む也。按ずるに、朝廷にも此の日元日の庶事を定めらるゝよし也。民間にも又之に准ずるにや。

註　（一）十二月十三日。

季題解説　十二月十三日、京阪神地方では此日から正月の諸準備にかゝる。劇界・花柳界・床屋・湯屋などの人氣商賣方面ではこの日、藝妓は姉藝妓のうちへ、お弟子はお師匠さんのうちへ、又分家・別家をしてゐる人達は主家へ、一年の挨拶にゆくとともに鏡餅を供へる。これを事始の餅といふ。老鋪や姉分の藝妓などは此の供へに來る鏡餅の多いのを大慶とし、床や奥の間に飾り、數の子・たゝき牛蒡・ごまめなど三種の肴を出して御馳走する、又酒も出る。近親の間柄へ年中無沙汰の詫びに廻るのも、歳暮御祝儀を始めるのも此の日である。

事始の起原は隨分古く、支那の陰陽學から來てゐるらしい。十三詣りなどの風習と共に「十三」の數をめでたいものとして起つたものであつて、德川時代には最も盛んに行はれたが、關東方面ではいつか廢れて今は全く行はれなくなつてしまつた。又舊十二月八日を事納めとし二月八日を事始めとするといふ說も見えるが、改曆後はつきり十二月十三日を以て事始めとしてゐるのである。

事始といへば新年はじめて業務に就くことをもいふやうである、自ら區別がある。【參照】事納（コトヲサメ）　新年―事始（コトハジメ）

例句

事始

鴛鴦の契りをこゝに事始　圭岳（同人）

いさゝかの塵もめでたや事始　曉水（ホトトギス）

銀行の圓柱太し事始　黄砂（同）

冬奉公（ふゆぼうこう）

古書校註

【東都歳事記】　（一）當月より、越後・信濃・上總等の賤民、江戸へ出て奉公す。これを冬奉公人といふ。越後・信濃は雪國にして、冬のたつきなし。故に、其の間江戸へ出て奉公するなり。俗間稱して、むくどりといふ。多く群りて出づるといふ意なり。【參照】春―出代（デガハリ）

註　（一）十一月。

柚湯（ゆずゆ）　冬至風呂（とうじぶろ）　柚風呂（ゆぶろ）

季題解説　冬至の日に柚の實を風呂の湯に入れて入浴する習慣がある。錢湯でも家庭でも行つてゐる。柚は刻んで入れることもあり又そのまゝ投入れることもある。柚のよい香りがして心地よく又身體がよくあたゝまる。

【季節】時候、冬至。

例句

柚湯　柚子の香の仄かにありぬ仕舞風呂　蒼虬　（ホトトギス）
病みほけし身を沈めたる柚子湯かな　都穂　（同　　）
仕事著をぬぎて柚子湯に浸りけり　馬[illegible]　（[illegible]ホトトギス）

參考　東都歲事記曰、冬至今日錢湯　風呂屋にて柚湯を焚く（ー）とみゆ。

七五三（しちごさん）の祝（いはひ）　しめ祝（いはひ）

古書校注

【日次紀事】　禁裏、院中、(一)此の月吉日を涓（エラ）ばれ、三歲の諸王子、御髮上（カミアゲ）・御色直。五歲の宮方、御深曾義・著袴（の）事。九歲の御方、御紐直(二)。凡俗幼兒の間帶を闘らさず、衣領の中間に紐を左右に着け、左に兩袖の下より左右之を背後に貫きて之を結ぶ。高貴の息及男共、多く九歲の霜月吉日を撰んで衣の紐を解き捨て、代へて帶を闘らす、是を紐直と謂ふ。地下の息五歲にして紐を捨つ（古は七歲）。十三歲の姬宮方、齒黑の儀有り。

【滑稽雜談】　近年民間にも是を學びて、頂上少しばかりは産毛を剃りのこし置く、之を待る也。常に之を髮置祝の事とはなし。只、武門庶人のみ也。其の作法、大家には古風より傳はれる儀式あり、家によりて様々替り有る由也。およそ綿帽子の長け黄尺なるを兒にかぶらしめ、是を白髮綿と號す。其の壽ならん事を祝する物也。其の綿の垂れたる中を、金箔を以て彩りたる太き元結を以て結ぶ、是を靈頭結と云ふ。又蜜柑子と云ふ赤き實有る物を其の緒に結付くるも有り。末廣扇を兒に持たしめ、此の月吉日を撰び、産砂の神へ詣る事にて侍る也。赤き餅を出して其の日の祝物とす。抑も本朝の庶人髮を剃る事、何の代よりかはじまると云ふ事書に見え侍らず。昔の幕頭は山海經の註に見え侍れば、いと久しき事成るや。月代の字さかやきと訓ずる事、古き物語にも見えたり。月額と書きてさかやきと拾芥集に讀ませたり。

【年浪草】　袴初は、五歲或は七歲の女子に、初めて被衣を著らしむ。被衣は衣を被いて、帶せざる也。官女より庶人の婦人に至るまで、外に出づるに、單衣を頭に被き、其の長を身に等しくして、兩腕を通はさざる也。被衣の制は布を以て、紫色・紋定まることも無く、禮服ならざる故に、貴家に入れば中門にして之を脫ぎ去る。

【東都歲事記】　霜月始めより下旬迄、但し十五日を專らとす。專ら町家によ

り分限に應じて、各々あらたに衣服をとゝのへ、産土神へ詣し、親戚の家を廻り、その夜親類知己をむかへて宴を設く。女兒の祝ひに白髮又たすきがけと號して、麻苧・眞綿に末廣・松梅の作り花を五彩の水引を以て飾り結びかつがしめて、生土神へ詣るよし、江戸砂子に云へり。此の事、近年市中に少し。

註（一）十一月。（二）以上に就いて年浪草に「所謂坤下の髮置・袴著・帶解是也」と記してゐる。即ち髮置が御髮上に當り、帶解が御紐直に當るのである。

季題解説　十一月十五日、童男童女の祝である。男子は三歳・五歳、女子は三歳・七歳にあたるものが祝ふのである。即ち男子、女子三歳の祝は髮置と言つて、今までくりくり坊主に剃つてゐた頭に初めて髮を置く、即ち伸ばすといふ祝儀である。男子五歳の祝は袴著と言つて、初めて袴を穿くといふ祝儀である。又女子七歳の祝は帶解と言つて、今まで附紐のある著物を著てゐたのを、この歳から附紐を除いて初めて帶を締める祝儀である。當日は子供は美々しく裝つて兩親乳母などが附き添ひ、産土神社へ參詣し、親類緣者の間を廻禮し、又招いて饗應し、近隣にはお詣りの土産物などを配るのである。東京では神田明神などこの祝の爲めに參詣するもの多く、長壽に因み、千歳飴と稱して大きい長い鶴などの彩畫のある袋に入れた棒飴を賣る店が出來る。京都でも八阪神社・稻荷神社・北野神社など賑ふやうである。

以前はみんな和裝で、女の子は振袖を著て自分の丈よりも大きいやうな美しい帶を竪矢の字に結び、男の子はきちんと袴を穿いたものであるが、近頃では男女とも洋服の子が多くなつた。〔參照〕帶解（オビトキ）　袴著（ハカマギ）　髮置（カミオキ）

例句

七五三の祝

七五三妻も大人となりにけり　　筍吉（續ホトトギス）

七五三祝ふ今日なる菊日和　　長（同）

參考　古昔、男女とも三歳にして髮置、男兒五歳にして袴著、女兒七歳にして帶解の儀を行ひ、これを祝つたから出る。七五三は陽數で、これを喜び、足利時代以來賓客を饗するにも七獻五獻三獻などがあつた。

帶解（おびとき）

季題解説　十一月十五日、女子七歳の祝である。之まで紐附の著物であつたのを、紐を除いて初めて帶をさせるといふ祝である。子供を吉方に向はせ

髮置

髮おきやうしろ姿もみせ歩く　太祇（太祇句選）
かみ置やかゝへ相撲の肩の上　同（同）
髮おきやちと寒くとも肩車　同（同）
髮置や大道直き神並木　蓼太（蓼太句集）
髮置や淺黄頭巾の供男　春郊（古今句集）
髮置や父に似そむるうしろ附　昇夕（同）
髮置や頬に出て消えし神酒の際　桃孫（ホトトギス）
髮置の白粉の兒に觸れし幣　樂天（同）
髮置やとゝのはざれど一揃ひ　とほる（續ホトトギス）

夷講（えびすかう）　夷切（えびすぎれ）

古書校註

【滑稽雜談】 先代舊事本紀七七に曰、神武天皇二年の紀に曰、天皇問うて曰、汝神は是奇しくして測らざる神也。誰そや聞かんと。趣ち對へ奏して曰、吾實は、是去來諾尊・去來冉尊の、其の始めに生める兒、豐蛭兒太神なり。海には畋を守りて幸を得、軍には戰を守りて幸を得、市には買を守りて幸を得、朝には事を守りて幸を得、田には種を守りて幸を得、天下の富持の神なり。往きて廣田の國に住まん。如若奏して飛び去る。此の時卵を生む。卽ち生めるを子と成す、得幸乘命是なり。得火柄神、人の家を守りて富を爲す、其の事の本也。○これらの義によて、和俗の商賈の輩、殊に此の神を市に祟め祭る也。就中、毎年今日、夷講と稱して、商家に悉く祭り、酒飯魚肉を調へて客を饗す。攝州大坂には、正月十日夷を專一として、十月廿日之に亞ぐ。京都には今日を專一にし、十日夷の沙汰なし。總て此の神を十日・廿日に祭る事、是いにしへの市の日取なりといへり。又別に神緣のある事にや、考ふべし。

【年浪草】 商家十月廿日を以て蛭子神を祭る。之を夷講と謂ふ。廿日を用ふること未だ其の據るところを知らず。或は云、十月廿日古へ市の日取也。此の神は卽ち商賈鎭護の神也。故に此の日を用ふと、云々。（略）○今正月十日に之を祭るを十日夷と謂ひ、十月廿日之を祭るを夷講と謂ふ。專ら祟め祭りて市の神と爲す。

【栞草】 この月廿日、或は家例によりて日定まらず。商家の徒西宮大神宮をまつる。本朝通紀、推古天皇九年三月、聖德太子始めて市を設けて、商買ををしへたまふ。このとき蛭子神にちかひて、商買鎭守の神としたまふ、云々。又此の神鈎垂るゝ像を設くるは、日本紀に載する所、事代主命遊行して、出雲國三穗の崎に在し、鈎魚を以て樂とするによれり。この故に今日かならず鯛を供するなり。又蛭子の像前において賓主相混じ、盃盤器物にいたるまで、假に價を定む。或は千兩、或は萬兩、賣る者諾するときは

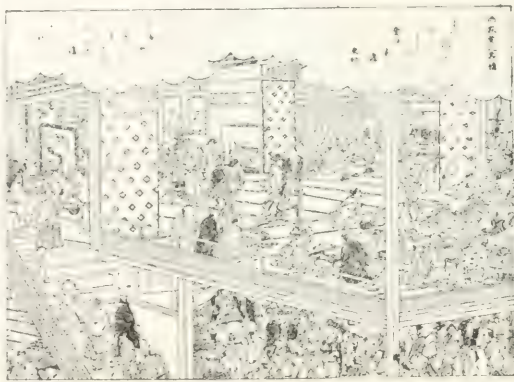
かならず手をうつ、これを夷講の賣買といふ。一時酒興の戯なり。

季題解説 夷講は十月十九日、二十日（此の二日間、京都建仁寺町松原四條間には徹夜で各商店で大賣出しがある）に行はれる行事で、その夷講賣出し（呉服商では端切の呉服類を此間賣出して夷切といふ）はたま〳〵誓文拂賣出しと一所になつて、大抵十月十五日頃から二十一日まで一週間行ふ。そして二十二日は時代祭であるので店員の慰勞を兼ねて休業して平日にかへるのである。

恵比須（夷又は蛭子）は又、夷三郎といつて七福神の一で、福の神として大黒と共に商家に多く祀られてゐる。諾冉神の第三子で蛭子神、又、事代主神とも云ふ。

此の神を十月二十日祀り、酒肴を以て客を饗應するのを夷講（えべすこと）といふ。京都では多く四音でよんでゐる」といふ。神前には生鯛を供へ、あゝ・おこしなどの菓子も供へる。尚酒肴を饗する時は主客相混り、主は假に賣買人となつて、杯盤器物まで總て千兩・萬兩などとてつもない値をつけて假に賣出し、買つた者は値を呼び、賣つた者は諾する時必ず手を打つて酒興の戯れとし、商賣繁昌を祝しあつた。これを夷講の賣買といふのである。今は京都では此の事も絶えたが、此日は前日から建仁寺町の蛭子神社に參詣し、人氣筒を買ひ、當日は葱に牛べいの汁を作つて食ふ。十年程以前までは十九日の夜「あゝやおこし」とその供物の菓子を賣り歩いたが近年は絶えた。

もとは此の二日間、夷講賣出しとして京都では各商店共大賣出しを催したが、近年は一日一日と伸ばし、前記の通り一週間賣出す家が多い。呉服商で端切（反物でない端物）を賣るのを夷切と云ひ、京の著倒れで、賣出し中各家庭の女は、一年中の臍繰金をはたいて買物に急がしい。恵美須神社は建仁寺町松原上ル西側にある神社で、[illegible]西國商の勸請するところであるといふ。

昔は江戸では此日から足袋を穿かしめ、古[illegible]では此日に火[illegible]を具へたといふ。

此の神を祀るのに特に神無月の十月を選んだに就ては諸説がある。東京のべつたら市は此の夷講の器物・鯛鰹などを賣る市で、十月十九日に行ふが、今は淺漬澤庵を賣るやうになつた。處によつては一ケ月遅れでこの行事を行つてゐる。【季語】誓文拂（せいもんばらひ）　新年—十日夷講　秋　べつたら市（いち）　恵比須講（えびすかう）

例句

夷講

振賣の雁あはれ也ゑびす講　芭蕉（炭俵）
ゑびす講酢賣に袴着せにけり　同（續猿蓑）
行がゝり客に成けり蛭子講　去來（去來發句集）
まな板に小判投げけり夷講　其角（五元集）
源氏もの季吟の家の夷講　同（同）
福天の床机にするや仕切帳　同（五元集拾遺）
子は衣裳親はつねなり夷講　同（同）
關守へ膳おくり來つゑびす講　太祇（太祇句選）
蛭子講火鉢られしとこぞりぬる　召波（春泥發句集）
前髪に戀はありけり夷講　同（同）
あきなひや店へ酒出すゑびす講　樗良（樗良發句集）
貞柳が哥よまぬ日や夷講　几董（井華集）
元服の面起すやゑびす講　同（同）
堂上に御沙汰ありけりゑびす講　曉臺（曉臺句集）
屋敷から梅もらひけりゑびす講　同（同）
梅さげし人しばしとやゑびす講　一茶（旅日記）
杉ばしで火をはさみけり戎講　同（七番日記）
ぼて振や歩行ながらのゑびす講　同（一茶句帖）
鶴龜に見せたきものよ蛭子講　乙二（をのゝえ草稿）
逢坂を雪踏でこすや蛭子講　蒼虬（蒼虬翁發句集）
鯛くはぬ乞食もなし夷講　梅室（梅室家集）
伊勢浦や舟に客よぶ夷講　吟江（多占）
ぬつくりと膳にすはるや夷講　秦夫（年尾）
大阪に人となりけり蛭子講　淺茅（春夏秋冬）
大根干済めば忽ち夷講　青邨（ホトトギス）

誓文拂（せいもんばらひ）

古書校註

【日次紀事】四條京極冠者殿社參詣。俗傳に、此の神僞盟の罪を免れしむる故に、商賈此の社に詣でて、欺き賣るの罪を祓ふ。故に、（一）今日の參詣を誓文祓と曰ふ。然れども、此の社實は何の神たるを詳かにせず。世或は、土佐房昌俊と爲す。昌俊義經の前に於て、僞りて追討使たらざることを誓

ふ。此の神罰に因りて果して殺さる。故に、他人僞誓の罪を救ふと云ふ。未だ然るか否かを知らず。

【滑稽雜談】神社便覽に云、官者殿、京極四條に鎭座。擧世所謂此の神は誓文起請赦免の社也、云々。此に依りて考ふれば、則ち唯一に傳ふる所の起請返しの神乎、(略)(略)又遊女の輩は、渡世の爲め誓紙を數通書する者、毎年此の祓を行ふなど、誠にわらふべし。箇樣の異儀異風の趣、皆俳士の嘲ぶ所也。今世十月廿日毎に、京城の賈人、誓文祓と稱して、參詣群をなすは、當社に限れり。當社の神、正純に非ず。牛王地後見殿、當社と三社、皆祇園社中の傳受口決ありて、外人しる物少なし。元來幣・別也。官者殿を冠一字に改む。

註 (一)十一月二十日

季題解説 十月十五日から二十一日まで、京阪地方の商家或は百貨店などに於て行はれる賣出である。遠く德川初期に起源を有してゐる。當時京都の商賈集合地たる御旅所附近から發祥したもので、即ち御旅町（現在京都市四條寺町東入）に在る冠者殿に參詣し、以て一ケ年中の商略上の譃言の罪を謝し、（顧客に對しては同じ意味により自己の商品をその期間に限り特に廉賣して罪亡しを爲すと稱することから起つたのである。冠者殿はいつしか、往時義經を起請文を以て欺いたと傳へられる土佐坊昌俊の靈を祀れるものといひならはし、それで誓文拂の名が起つたのである。又賣出しも追々變化して、後には自己の手持品で滯庫となつたものを見切つて賣盡すこととなり、現在に於ては又別義を有する商略とも混同し藏ざらへなどと稱し、各商店の秋期定期的宣傳賣出しの名目としてのみ殘り、其賣品も亦特に誓文拂用に低價にこしらへたものを賣るやうになつた。

京都附近の市町村では十一月、又は十二月上旬に行ふところもある。昔は陰暦の十月であつたから、凡そ一月おくれにして行つてゐるのである、秋季季題としても冬季季題としてもよいのであるが姑く冬季にも入れることにする。【參照】秋—誓文拂—

歳暮賣出（せいぼうりだし）

季題解説 十二月初めから歳末まで、各種の商店「歳暮大賣出し」の文字を染抜いた赤旗などを店頭に掲げ立て、福引・割引などを呼びものにして客を迎へる。【參照】時候—歳の暮—

年の市（としのいち）　何やかや賣

古書校註

【日次紀事】(一)此の月、市中神佛に供する所の器皿、同じく神の折敷等。并に中木・杓・白衣・頭巾・烏帽子・兩襟・扇子・草鞋、同じく犢鼻・雪駄・草履・雷盆・膳皿・箒・[illegible]、[illegible]・木皿・[illegible]折敷・[illegible]・太箸・米籠・[illegible]・[illegible]・

眞那板・膳組・若水桶・柄杓・加伊計・浴桶・盥盤、並に毬及び毬杖・都里々々・羽古義板、其の外、鮪魚・鯛魚・鰈魚・章魚・海鰕・煎海鼠・串石決明・數子・田作の類、蜜柑・柑子・橙・柿・栗・搗栗・串柿・海藻・野老・榧子・山椒粉・胡椒・糊・牛蒡・大根・昆布・熨斗蓍穀の物、悉く之を賣る。是、皆來年春初めて用ふる所也。

【滑稽雜談】（三）何やかや賣に按ずるに、俗に、何やかやとは、蓬萊に用ゐる所の果類をさして云ひ習はせり。故に、蓬萊の具を賣る物、果類の名を呼ばずして何やかやと云ふ。都て是をいはゞ、正月に取用ゐる所の商ひ物を云ふなるべし。其の品甚だ多し。

【東都歳事記】（三）今明日、淺草寺年の市。今日寶前には修法なし。堂前にて、大黒天開運の守を出す。當寺境内は云ふに及ばず、南は駒形より御藏前通り、淺草御門跡前より下谷車坂町・上野黒門前に至る迄、寸地を漏らさず假屋を補理し、新年の儲けとて、注連飾りの具、庖厨の雜器、破魔弓・手鞠・羽子板等の手遊び、其の餘種々の祝器をならべ售ふ聲は巷にかまびすしく、都鄙の諸人是を求るを恆例とし、陰晴を嫌はず群集する事、更に晝夜のわかちなく、大路に駢闐して東西に道を分け兼ね、縱橫に目も配りがたし。

語 （一）（二）十二月。（三）十二月十七日・十八日。

季題解釋 正月に用ふる品々、注連飾とか若水桶とか、羽子板とか盆栽とかを賣る市である。

東京では深川八幡とか淺草觀音とか、神田明神とか愛宕權現とか、平河天滿宮とか又銀座通りなどに十二月半頃から大晦日まで例年順次年の市が立つ。この頃は三越や松坂屋などの百貨店でも年の市と稱して正月用品を一纏めにして賣出してゐる。然しやはり神社の境内とか道路の兩側とかに店を張り品物を飾り立てて賣るのが年の市らしい。晝間よりも夜に入つてからの方が客足が多くなり賑やかになる。大きな聲で客を呼び大けさに値段を負けたりして景氣を附けてゐるのは、如何にも歳末らしい光景である。

參照 羽子板市（ハゴイタイチ） 時候―歳の暮（クレ）

一休が土器買む年の市　芭蕉（もとの水）
年の市線香買に出ばやな　同（續虚栗）
山を出て何を尊に飾賣　鬼貫（俳諧七車）
神鳴もさはぐや年の市の音　去來（去來發句集）
年の市たれをよぶらん羽織との　其角（五元集）
年の市や馬士によみやる注連の狀　召波（春泥發句集）
多ひ手の隙な蛸ありとしの市　也有（蘿葉集）
田作りに似たもの賣らむ年の市　同（同）
牛の背にあられ走るや年の市　同（同）
米つけて隙ゆく駒もとしの市　同（同）
野送りの買ものも寒しとしの市　同（同）
藪を見て脇へそれけり柴竹うり　同（同）
竹賣の竹にもしばし雀哉　一茶（旅日記）
年の市葉一把にもかけ直かな　梅室（梅室家集）
年の市梅さし上て通りけり　雨什（發句題叢）
年の市朝熊の猿の眞柴哉　乙由（麥林）
鴨一羽帶にはさむや年の市　涼莵（[illegible]とすい）
寺からも買に出けり年の市　正名（續明烏）
松賣や大原あたりの詞つき　素郷（素郷發句集）
年の市おし合ふ年の帶かな　良子（同人）
飾賣脊ひきずつて[illegible]ひにけり　大春（[illegible]）
さわ〳〵と[illegible]いたりぬ年の市　禪寺洞（ホトトギス）
年の市柳屋小さん歩きをり　たけし（同）
年の市注連[illegible]ひながら商ひぬ　殘雪（同）
年の市佛の[illegible]も買ひにけり　清河（同）
雪の上に炭火旺んや歳の市　碁雪（同）
山家より娘[illegible]連れなる飾賣　默禪（同）
香るなる居村の飾買ひにけり　青畝（同）
手桶提げてこま〳〵と買ふや年の市　鬼城（同）
心ざす何も無けれど年の市　史川（續ホトトギス）
農具店遲れて出し年の市　[illegible]躅（同）
山雀の藝こぞり見る年の市　喜太郎（同）
筆硯の店に立ちけり年の市　寿居（同）
大道へ炭火ぼん〳〵飾賣　作小星（同）
苞提げて何見歩き[illegible]の市　同（同）
裏白に沈みて注連の賣れ[illegible]な　一右（同）
ぬかるみに[illegible]まれし藁や年の市　水巴（水巴句集）

羽子板市（はごいたいち）

季題解説 羽子板を賣る市である。東京では本石町十軒店と人形町通りに十二月始めから特に大きな市が立つ。その外三越・松屋・松坂屋・白木屋などの百貨店でも催してゐる。そこではいろいろの役者の似顔の押繪の羽子板を店一杯に目覺むるばかりに飾り立てゝ賣つてゐる。そして老若の女客が立ち寄つていろいろと品定めをしてゐる風情はゆかしくもまた美しいものである。
京都でも矢張り十二月上旬から、この市が立つ、各百貨店と四條・新京極などである。〔参照〕 年の市（トシノイチ） 新年ー羽子板（ハゴイタ）

例句
羽子板市
あを／＼と羽子板市の矢來かな　夜半（ホトトギス）
羽子板の大一番や吹きざらし　照葉女（同）
平内は羽子板店のうしろかな　夜詩櫻（同）
仁王尊羽子板市に隠れけり　秀好（續ホトトギス）
羽子板のもとの賣子もうつくしき　りよ女（同）
うつくしき羽子板市や買はで過ぐ　虛子（同）

才藏市（さいざういち）

古書校註
【栞草】（一）江戸日本橋の東二町ばかり、四日市にあり、三河萬歳江戸に來りて、脇士の才藏を傭ふなり。毎年四日市にて、この價をさだめて傭ふといふ。これを才藏市といふとぞ。
【東都歳事記】才藏市は當時なし。近き頃迄は、（二）下旬の夜、日本橋の南詰四日市にありて、三河萬歳江戸に下り才藏を傭ふ。才藏は安房・上總、又は下總古河の邊より出づる。太夫、才藏の功拙をえらび、價を定めて雇ひ、正月になりて出入の家々をまはりしなり。
註 （一）十二月の條にある。（二）十二月。

参考 三河萬歳が江戸に出て、毎年十二月末日の夜、日本橋の南詰に集つて、才藏を選んで抱へるのをいふ。〔参照〕 新年ー才藏（サイザウ）

疊替（たゝみがへ）

季題解説 年末近くなつて新春の用意のために疊表を新らしく取替へることを言ふ。

例句
疊替
衣笠の山庭にあり疊替ふ　梅史（ホトトギス）
古びたる大衝立や疊替　言子（同）

歳暮祝（せいぼいはひ）　お歳暮　歳暮禮　歳暮賀　餽歳　鏡据

古書校註

【滑稽雜談】　餽歳。風土記に曰、吳蜀の風俗、歳晩相與に餽問す。之を餽歳と謂ふ（略）（二）或は云、和俗の（一）當月下旬の内、親戚に送物して歳暮を賀す。又しれる所の鰥寡孤獨貧窮困苦の者にも、我が力に隨ひて財物を賑ふべし。或は我に昔、恩德の有る人、師傅と成る人、或は病を療せし醫師などにも、各々分に隨つて厚く物を送る。是を俗に歳暮と稱す。是を以て、上に註する餽歳の說をみれば、中華にも歳暮に物を親戚鄉黨に送ると見えたり。

【東都歳事記】　歳暮賀。當月下旬、知音親戚に往來し、又歳暮となづけて餅・乾魚等送る。初生の嬰兒へは、破魔弓・羽子板等を送る。

註　（一）十二月。

季題解説　年末、一年中の交誼を謝する意味で、親戚・知己互に訪ね挨拶を述べ物品の贈答を行ふ。商家また華客をまはり同樣のことを行ふ。昔は事始めの日即ち十二月十三日に煤掃の餅を搗いてそれを贈答したものであるが、今でも或る地方の花柳界では鏡据ゑと唱へて、十二月十三日に藝妓・舞妓が師匠や三味線の師匠の宅へ鏡餅を持つて歳暮のお祝ひに行く。師匠の方では其日は朝早くから神棚に灯をともし、豫め鏡餅を並べる棚を設けて皆の來るのを待つてをり、座内は白襟紋附で男衆に鏡餅を持たせた藝妓・舞妓が行交ふて年の暮らしい感じを漂はせる。京都では大晦日の夜、親族・知己を訪うて「無事御越年を」と云つて廻禮する。〔參照〕時候「歳の暮」

例句

歳暮祝

口上のせいぼ使や古男　　召波（春泥發句集）
お歳暮や少しばかりの田地持　　鬼城（ホトトギス）
兎角して母へ歳暮の爲替かな　　韮城（同）
母そばへ佐渡の歳暮はつるし柹　　慶子（續ホトトギス）
北見より歳暮の鮭の屆きけり　　一秋路（同）

衣配（きぬくばり）

古書校註

【增山井】　（一）衣くばり。來正月の料に衣をつかはす事也。源氏玉かづらの卷にあり。

【滑稽雜談】　（二）衣賦、（略）藻鹽草に云、絹くばりは、女樂をせられんずるとて、先づ絹をくばらるゝを云ふ也。源氏には紫のうへあづま琴をひき給ふ、云々。○源氏小鏡（玉かづら）の衣くばりと云ふ事あり。極月のすゑに、源氏の御方より方々へ正月の裝束をくばり給ふ。紫の上のかたへ、あかいろのきぬ、御むすめのあかしの上の腹の姫君のかたへは白き小袖、花

然れば中宮にも煤掃あり。

【小女庫】　煤掃之說（芭蕉）　明けぼのゝ空より、物のはたはたと聞ゆるは、疊をたゝく音なるべし。けふは師走の十三日、煤はきのことぶきなり。げにや雲井の儀式、九重の町の作法は、皆例ある事にして、唯なみなみの人のすゝはく體こそいと面白けれ。

【東都歳事記】　煤拂、貴賤多くは（三）此の日を用ゆ。大城の御煤拂の例は、寛永十七年庚辰十二月十三日に始りし由、前夜の冊子に見えたり。家内に煤竹を入れ、すゝ餅を祝ふ。新宅に三年すゝ竹を入れざる事は東鑑に見ゆ。

註　（一）十二月。（二）同紀事。十二月二十日の條に、同日に於ける知恩院煤掃（法然上人像）・京極誓願寺彌陀像煤掃に就いて述べてある。（三）十二月十三日。

季題解說　行事としては煤掃といふのが正しい。歳末、新春を迎へる爲めに屋内の煤埃を隈なく掃ひ清めることをいふのである。謂はば歳末の衛生掃除である。

煤掃は鎌倉時代の中期には既にあつたと傳へられてゐるが、後世江戸時代には、江戸城内に於て之を十二月十三日に行ひ、一般民衆は之に倣つた。尙當日は家々にある神棚のお札を納めるのが例であつたといふ。今日に於ては他の季節に於ける衛生掃除が嚴格に施行されるに至つたので、行事としては廢絕し、別に期日を定めず各戸に於て適宜之を行ふこととしてゐる。（尤も寺院例へば萬葉山萬福寺とか東西の兩本願寺など、今日に於ても一定の日に行事として行ふところがある）天井と云はず梁と云はず壁と云はず、竹•箒を扱いて煤を落し、又はたきを振つて調度の塵を掃ふのである。顏は頰冠に包まれても煤に汚れ、鼻腔は黒く彩られる。歳末に於ける諧謔的風景。煤拂がすめば集めた煤埃に火を點けて焚き、又は水に流す。

【參照】　煤籠（スヽゴモリ）　煤湯（スヽユ）

例句

煤掃

民の家も又あらた也煤はらひ　宗因　（梅翁宗因發句集）

さゝ竹をふる宮人や煤はらひ　同　（同　）

煤掃は杉の木の間の嵐哉　芭蕉（己が光）
煤はきは己が棚つる大工かな　同（炭俵）
これや世の煤にそまらぬ古合子　同（勧進牒）
旅ねしてみしやうき世のすゝ拂　同（曠野）
すゝはきや暮ゆく宿の高鼾　同（小文庫）
煤掃や山風うけて吹通し　丈草（丈草發句集）
煤掃てねた夜は女房めづらしや　其角（五元集）
童にはしころ頭巾や煤拂　同（同）
すゝはらひ暫しと侘て世捨藏　同（同）

畑中によし野靜やすゝ拂　嵐雪（玄峰集）
煤掃や折敷一枚ふみくだく　惟然（惟然坊句集）
煤掃や笑はせものは田[illegible]笠　支考（蓮二吟集）
すゝはきや何を一つも捨られず　同（同）
煤はきの塵もたすな梅の花　沾徳（俳諧五子稿）
煤掃やよごるゝ貝の晝下り　桃隣（古太白堂句選）
けふばかり背高からばや煤拂　千代女（千代尼發句集）
煤掃て調度すくなき人は誰　蕪村（新五子稿）
すゝ拂や塵に交る夜のとの　同（全集）
夢殿の戸へなさはりそ煤拂　太祇（太祇句選）
聲立て池の家鴨やすゝ拂　同（同）
煤を掃く音もあまり來ぬ市の中　同（同）
すゝ掃の埃かつぐや奈良の鹿　同（同）
としぐ〵や煤よう掃て手向水　同（同）
樓に可舞妓の眞似や煤拂　同（同）
狐なく霜夜にいづこ煤はらひ　同（同）
煤拂のあら湯へ入る座頭かな　同（同）
わびしさや思ひたつ日を煤拂　同（同）
すゝ拂てそろりとひらく持佛哉　同（同）
すゝはきや挑灯しらむ門の霜　同（同）
門口に歩ミつ板や煤拂　召波（春泥發句集）
煤拂あやしの頭巾眉たれけり　同（[illegible]）
平仲が貝ともはやせ煤拂　同（[illegible]）
すゝ掃や情のきむしる大書院　同（[illegible]）
煤掃やいつかも見えぬ[illegible]のふた　同（[illegible]）
き[illegible]も[illegible]け[illegible]煤拂　同（[illegible]）
煤にきや青衣が[illegible]下　也有（[illegible]）
煤掃の日に髮ゆふて訪らるゝ　同（同）

煤掃

すゝはけは春待人に似たるかな　也有（蘿の落葉）
煤拂や揃ふ小はしの久し振　同（同）
袖の香の箕にもゆかしすゝ拂　蓼太（蓼太句集）
うそ寒う昔めし喰ぬ煤拂　几董（井華集）
掃かゝにおどろかれぬる菴の煤　白雄（白雄句集）
煤はきや餘の鳥うる數のかげ　士朗（枇杷園句集）
煤竹もたはめば雪の雀かな　巣兆（曾波可理）
まがはしや小家／＼の煤はらひ　成美（成美家集）
すゝはきや水うちかけし松の色　同（同）
煤はきや火のけも見えぬ見世女郎　一茶（七番日記）
夕月や御煤の過し善光寺　同（同）
庵のすゝざつとはく眞似したりけり　同（同）
門雀米ねだりけり煤いはひ　同（同）
煤掃んそこのき給へ御雀　同（同）
浴るともあなたの煤ぞ善光寺　同（同）
隱家の犬も人數やすゝ祝　同（同）
我家は團扇で煤をはらひけり　同（同）
我家や初氷柱さへ煤じみる　同（同）
ほの／″＼と明わたりけり煤の貝　同（同）
煤の手でうけとりにけり小重箱　同（同）
庵の煤風が拂つてくれにけり　同（一茶句帖）
隅の蜘あんじな煤はとらぬぞよ　同（同）
大犬の胴づかれけりすゝはらひ　同（九番日記）
煤過やそろりとのぼる朱蠟燭　同（同）
すゝ掃やはたして居らぬ池の鴛　蒼虬（蒼虬翁發句集）
煤掃の中からたつや木賃客　梅室（梅室家集）
すゝ掃や取かへされし鶴の雛　同（同）
すゝ掃や馬も嘶藪の中　乙由（麥林集）
水仙や煤拂てから猶白し　鳥久（類題發句集）
すゝ拂の竹切にやる伏見哉　白穆（小弓俳諧集）
夫婦してはづれぬ戸あり煤拂　乙由（故人五百題）
我釣て棚の高さやすゝはらひ　伯兎（八仙傳）
月影や三千坊の煤おろし　不言（明和二）
君が代や江戸の師走の煤日和　佐尺（明和二年）
煤掃いて樓に上れば川廣し　子規（子規句集）
煤掃の埃しづまる葉蘭かな　同（同）
煤掃いて水仙の花活けんとす　寸木（新俳句）
煤掃やきのふもけふも雪が降る　可全（同）

でなど、歳暮に用ひ來れり。其の中に古暦、あたらしき暦出でゝ後の事なれば春には成るべき事なれども、歳暮に用ゐる事いかゞといふ人あり。此の事を師に聞く。近來俳諧に、古酒・古茶・古米等を季に入れたる有り。是れ新酒・新茶など季を持つに對していふなるべし。然れども、是は其の理なし。古暦も、其の格を以て、新出で古有りの儀によりて春には成るべしといへる也。古酒・古茶等と古暦とは格別也　古酒・酒・古茶などは、新物出でゝも其の古きを捨てず蓄へ置きて、有る限りは用ふる物也。故に一昨年の物も古米といひ、三年五年のものを古酒と申す也。暦はそれとは違ひて、元日より大晦日、日々用ひ來りて、はや大としの日は、明日元日の暦をこてみるべけれ、ことしの暦は、はや無用の物と成りゆく也　二度用ゐらるゝ物にあらず。明日元日となりては、去年の暦は古きと云ふ沙汰にも及ばぬ反古也　今日迄用ゐて明日則ち古く成るゆゑ、古暦を歳暮に用ゐたる物也、云々。右師説の趣也。連歌に用ゆるも、定めて其のごとく成るべし。猶、其の宗匠によりて辨ふべし　俳諧に右の心得にて可也　古茶・古酒・古米等は、必ず季に用ゆべからず。

【年浪草】　古暦・卷納・卷返の事、大抵古歌に讀めり　〈新撰六帖、一とせのこよみの奥に卷きよせて殘る日數のほどもすくなき　知家卿　〈同、卷きよする暦の心はづかしくのこりのひらに老見えにけり　惠慶法師　〈家集行くとしを暦の袖に卷きよせて老いはてにける身をなげくかな　源仲正。

註　○増山井、十二月の部に、暦の末・古暦を出してゐる　滑稽雜談の古茶・古酒・古米等は季に用ひるなとの説は、一家言に過ぎぬ。季に用ひてよく又用ひられてゐるのである。唯古米は、最近季題に用ひぬかと思ふが、これも俳壇の約束によつては季に用ひてよいものであらう。

【季題解説】　年末も近くなつて暦もいよいよ果つるの意である。古い時代の暦は軸物になつてゐてだんだん一方へ卷いて行つたものであるから暦の終といふ感じが深かつたのである。今日でも剝ぎ取りの暦などはさういふ感じを深く與へる　「曆尾」古暦ノ一ナリ

【例句】
暦の果
よる波のこゝぞ暦の軸はづれ　乙二（をのゝえ草稿）
柱暦四五日剝がず果てにけり　明風（ホトトギス）

【参考】　本邦古く行はれたのは具注暦であつて、干支並に日の吉凶等を記したもの。現存せる最古の物に天平年間のがある。後假名でこれを記した假名暦が起つた。昔は暦の餘白にその日の記事を記して日記としたものである。蜻蛉日記に「御こよみも軸もとになりぬ」と年の暮れたのを敍してゐる。現時に行はるゝは、神部署にて頒行するものである。

古暦（ふるごよみ）

【季題解説】　暦は日讀の義。古暦は一年中使ひ古した暦のことで、去年の暦を指すのでなく、年の終りになり翌年の新暦が出來れば、其れに對しての古

暦賣

橋々や暮いそがしき暦賣　孤屋（泊船集）
來年の暦を賣れる日本橋　晴江（ホトトギス）
暦賣ふるき言の葉まをしけり　たかし（同）
歩み來し人に寄り添ひ暦賣　無門（同）
またもとの垣にもたれて暦賣　南風（續ホトトギス）
人波の流れやまぬに暦賣　風生（同）

日記買ふ（につきかふ）

新日記（しんにつき）

季題解說　年末近くなると書肆の店頭には大衆雜誌の思ひ切つて早く發行せられる新年號と並んで、翌年の日記帳が山のやうに積まれて賣り出される。一册二三圓もする豪華な日記帳から一册三十錢・五十錢の普及版もある。當用日記・家庭日記・文藝日記・短歌日記・俳句日記・英文日記・自由日記・懷中日記・卓上日記などの種類がある　慌はしい師走の人の流れがその日記の山に寄つていろいろと品定めして買つてゆくのはたしかに年末の町の一風景である。新しく買つて來た日記をもう殘りの頁のいくらも無い古い日記と並べて春を待つ心持は明るいものである。然し中老の人のたゞ事務的に日記を買ふ心持、別に生活に疲れたわけでもないが年を迎へることに對してそれ程の感慨も覺えぬやうになつた人の日記帳を買ふ心持も亦別にあるのであらう。

賀狀書く（がじやうかく）

季題解說　十二月も半を過ぎると新年の賀狀を書かねばならない。年賀狀を書くといつても、各自の好みに好みの文字を印刷した葉書やカードに宛名を書くのである。それらの名前は皆色々な意味で親しみを持つてゐるものでなければならない。何かあわたゞしい雰圍氣の裡で、勤務先から歸つた夜など筆を執ると、その一つ一つの宛名は皆それぞれ異つた感慨や記憶を思ひ起させるであらう。　**參照**　新年―年賀狀（ネンガジヤウ）

除隊（ぢよたい）

除隊式（ぢよたいしき）　除隊兵（ぢよたいへい）

季題解說　現役の兵役を終へた兵士は多く十一月三十日（昭和七年は**十一月二十日**）に除隊歸鄕の命令を受けて除隊する。そして家族や友人や近隣の人々に迎へられて、二年間住みなれた兵營に別れを告げ賑やかに歡迎旗を押し立てゝ鄕里に歸るのである。　**參照**　初年兵入營（シヨネンヘイニフエイ）

例句

除隊

人込みに母を見つけし除隊哉　初紅（同人）
除隊日の卓や林檎の赤々と　春葉（懸葵）

初年兵入営 若兵の闇おらうれしく泣きにけり 播霞 （[illegible]十・六）

野砲兵第三聯隊に入営す

新兵のはやしからりれてゐたりけり 素逝 （同 ）

鶏舎(とや)あたゝむ

季題解説 嚴寒の時分、鶏舎に炭をおこしたり、電燈を入れたり、或は暖爐を焚いたりして産卵を多からしめるのである。

馬下(うまさ)げる

馬下(うまさげ)

季題解説 十勝地方は冬期降雪が少ない爲め、馬は年中放牧する。故に同地方は夏山牧場、冬山牧場の別がある。冬山牧場は傾斜した山地で熊笹の多いところを選定する。放牧馬は牧場の枯草・笹などを雪の中から掘り出して食ふのである。しかし十一月下旬十二月頃は年によつて大雪があることがあり、此の時は積雪のため笹も草も埋れて食を求めることが出來ず餓死する恐れがあるから、馬を山から下げて一時舍飼するのである。之を馬下といふ。

掛乞(かけこひ)

掛取(かけとり) 書出(かきだし) 附(つけ)

古書校註 【栞草】（一）貞享式 掛乞を冬とさだめたれど、今の例によらば、秋のかたにもつれぬべし。

【俳諧古今抄】 再撰貞享式。近代の式目より、雨乞を夏とさだめ、掛乞を冬とさだむれど、これらも（三）今の例によらば、秋のかたにもつれぬべし。掛には（三）二度の節季あればなり。

註 （一）十二月の條にある。（二）前に二季に亘る時の例を擧げてゐるのを指す。（三）盆と暮との二度の節季。

季題解説 商取引の掛賣は近來漸次毎月末決濟といふことになつて來たやうであるが、依然盆暮の二回の決濟にしてゐるところも相當あり、又長いのは年末の一回決濟のものもあるやうである。掛乞又は掛取は季題としてはそれら各種の決濟方法に拘らず專ら年末に掛賣代金を集めること及び掛乞に從事する人を指すのである。年末の集金は取る方も取られる方もいゝ加減ではないのであつて、大晦日の夜更まで集金して一夜明くればゆつくり春を迎へるといふやうな心持が多分に含まれてゐる。書出し又は附けは掛乞の請求書を指すのである。〔參照〕秋―盆の掛乞（かけこひ）

例句 掛乞

掛乞や雪ふみわけて妹が許 召波 （春泥發句集）

書出しに小町が返事なかりけり 同 （同 ）

掛乞や笑ふ門へはかどたがえ　也有（鶉衣集）
掛乞に水など汲んで貰ひけり　一茶（七番日記）
掛乞の內へ入ても頭巾哉　吟江（心花）
貧乏は掛乞も來ぬ火燵かな　子規（子規句集）
掛あけて奈良を見て來し番頭かな　暮情（ホトトギス）
掛乞の女に惚れそ店の者　草千（同）
掛乞の雪まみれなる裳かな　木國（同）
掛乞や障子一重の母の咳　月尙（同）
掛取れぬこゝな女房つべこべと　よしの（同）
掛乞や消えし灯を借る臺所　花夢（同）
掛乞に來し萬亭のお糸かな　鄕穗（同）
掛乞に置ける火鉢や天龍寺　同（同）
茶屋の附お輕の手紙ほど長し　暮情（同）
大いなる掛を殘して拂ひけり　美入野（同）
蓮の掛慈姑の掛やを乞ひにけり　菖蒲園（同）
掛拂ふたのみすくなくなりにけり　鷗汀（續ホトトギス）
書出しを膝に起きゐる夫婦かな　曉水（同）
菊水の仲居二人や掛集め　濱子（同）
二三人掛乞の來てしまひかな　寸七翁（寸七翁句集）

注連作（しめつくり）

【考證解說】大阪市西淀川區花川町は淀川の下流對岸にあり、もと海老江村といつて、現在も百姓家が多く古から正月用の注連を作るので知られてをる。年末になると、百姓家でない內でも藁を買ひ入れて注連を作るといふ程である。
注連には種々ある、牛蒡に似たのを「牛蒡注連」または單に「牛蒡」ともいふ。牛蒡注連に大牛蒡・中牛蒡・小牛蒡の三種があり、長い注連は「一蛇」といつてをる。其他種々ある。
方法に先づ藁束を「藁そぐり」にかけて藁の外皮（藁袴といふ）をとり除け、「青い藁のみを選りわけ、一寸水に浸し、槌でやはらげた後注連とすべき束に分けて置き、藁袴即ち藁屑を中に入れて之を綯ふ。三重綯ひを「三子」といひ二重綯ひを「二子」といふ。出來た注連は屋根又は壁に立てかけて乾し、乾した後生じた毛は鋏で摘みとり、屋敷內に蓄へて置き歲晚市中に出てこを賣る。
伊豆西方の漁村では、秋の取入れの時分に貯へて置いた新藁を歲末に取出して海水で清め、汚れてゐない堤防・岩・[illegible]・渚などを選んで新春使ふ注連を作るのである。
東京府下でも今尚注連を作つてゐる。【參照】新年　注連飾。

法連作　法連作草履さがして出てゆきぬ　東子房（續ホトトギス）
うらじろを積みたる納屋に法連作　止有（同）
揚舟のかけにも法連を作り居り　耿陽（同）

年忘（としわすれ）　別歳（べつさい）　忘年會（ばうねんくわい）

古書校註

【滑稽雜談】日本歳事記に云、十二月下旬の内、年忘とて、父母・兄弟・親戚を饗する事あり。是一年の間事なく過ぎにし事を祝ふ意なるべし。蘇子瞻が別歳詩の小序に、蜀俗歳晩に酒食相邀へ、呼びて別歳と爲す。又琅琊代醉編にいはく、淮人、歳暮に家人宴集し、潑散と曰ふ。此等の説ひとしき事の侍るなり。

【栞草】歳の暮に親戚・朋友を會め宴を設く、これを年忘といふ。是、年中の勞を忘るゝ意なり。

【東都歳事記】別歳。當月下旬、親戚知己を邀へて饗する事あり。一年の間、事故なく過して、新年を向ふるを祝するの意なるべし。

[illegible]　往時は歳暮、家庭に於て家族・奉公人などを集め又は親戚・朋友などを呼び、互に一年の勞苦を忘れ無病息災を祝し合ふ酒醼を年忘と稱した。時には弦曲・歌舞を添へ歡を盡したと云はれてゐる。今日忘年會と稱するのは多少之と異なり、主として料亭に於て會社關係・同業關係・出身校關係・趣味關係など平素より何かにつけ關係深い範圍の者相會し、過ぎにし一年を回顧しつゝ互に酒を勸むるうち、いつしか大醉して日頃の不平不滿を口にして憚らす、終には前後不覺、人事不省、年を忘れおのが身を忘れるに至るといふのが多い。酒を好む會社員などは忘年會を以て歳暮の書入れ時とし、却てその度數の多いのを喜ぶといふ始末である。

例句

年忘

そばきりのまづ一口やとし忘　宗因（梅翁宗因發句集）
せつかれて年忘するきげんかな　芭蕉（小文庫）
魚鳥の心はしらずとしわすれ　同（同）
人に家を買はせて我は年忘　同（猿蓑）
半日は神を友にやとし忘　同（物の親）
年わすれ三人寄て喧嘩かな　同（もとの水）
槃特が愚痴も德ありとし忘　言水（俳諧五子稿）
羽衣や松に忘るゝ年の皺　同（同）
人やしる冬至の前のとし忘　素堂（同）
年わすれ十ヲも十五も兒を見て　來山（續いま宮艸）
二夕唐人見し世がたりをとしわすれ　同（同）

はしこかす屏風のうちやとしわすれ　浪化　（浪化上人發句集）
雲井にも菜食の嗅や年忘れ　同　（同）
行燈を消せば鼠のとし忘　丈草　（丈草發句集）
年忘れ劉伯倫はおぶはれて　其角　（五元集）
乳母ふへてしかも美女なし年忘　同　（同）
家の子等けふを忘るな年忘れ　同　（五元集拾遺）
誰れいふとなしに大殿とし忘れ　同　（同）
小僧等に法問させてとし忘　蕪村　（新五子稿）
靈運もこよひはゆるせとし忘　同　（蕪村句集）
大名に酒の友あり年忘れ　太祇　（太祇句選）
とし忘損もひとには情進日　同　（同）
とにかくにたらぬ日數や年忘　同　（同）
家中衆のしづ〳〵や年忘　召波　（春泥發句集）
王子吸ふ女も見えつ年忘　同　（同）
宮方の武士うつくしや年忘　同　（同）
國樂は舞子が好で年忘　同　（同）
貝で呑む人をあふぐや年忘　同　（同）
腰越や鎌倉は嘸年わすれ　同　（同）
醉臥の妹なつかしや年忘　同　（同）
燭まして夜を續にけり年忘　同　（同）
とし忘れ廣野の鶴を見に行ん　樗良　（樗良發句集）
指おらじ梅は祈とも年忘れ　也有　（蘿葉集）
夜半にくむ年わすれ井は誰が家　蓼太　（蓼太句集）
年忘洩來る榎の木の間より　同　（同）
春の日をかりて遊ぶや年わすれ　同　（同）
わかき人に交りてうれし年忘　几董　（井華集）
あたゝかに着てはづかしや年忘　曉臺　（曉臺句集）
おもひ出しこいふ事なかれ年わすれ　同　（同）
とし忘れけふ白髮の伸き入　同　（同）
年忘れ不二をとりまく座敷哉　同　（同）
わんといへさあいへ犬もとし忘　一茶　（七番日記）
深川や身も一組とし忘　同　（同）
山の手や連茶すゝりて年忘　同　（同）
いくつやら燈え[illegible]上にとし忘　同　（文政板發句集）
御中間に猫も箸とるや年忘　同　（一茶句帖）
寒なしや今夜も人の年忘　同　（同）
よふ所ない用事迄とし忘　同　（八番日記）
往のえの帶に行てふとし忘　乙二　（をのゝえ草稿）

年忘

生けて見ん年忘れ草梅椿　子直（安永四）
家の子に酒許しけり年忘　士喬（續明烏）
年忘橙剝いて酒酌まん　子規（子規句集）
我昔揚屋に年を忘れける　左衛門（新俳句）
來る程の盞干しつ年忘　仙洞（同人）
東京の年忘して歸省かな　一水（ホトトギス）
おもかげやおどろきあうて年忘　月尙（同）
門前の椎に雨降る年忘　花笠（同）
後添を娶りて年を忘れけり　右衛門（同）
フロリダへ誘はれよりぬ年忘　薊花（續ホトトギス）
註、フロリダは赤坂溜池の舞踏場
木屋町も久しぶりなる年忘　桂樹樓（同）
年忘柱にもたれ話しけり　虚子（句集虚子）

參考　御湯殿の上の日記、慶長八年十二月九日『大御ちの人より、御年忘れにて、供御參る。』關八州古戰錄九に、『其の家の吉例として、毎年臘月晦日の夜、群臣を集めて連歌の會を促し、百韻興行して、是を年忘れと號し、酒宴曉天にいたるを定式とす。』

年末賞與（ねんまつしやうよ）　ボーナス

季題解說　官公署・學校・銀行・會社などの勤人に對し、年末近く十二月廿日前後に俸給以外に支給せられる手當金である。その額は好況時代は相當多額であつたこともあつて月給の百割以上といふやうなものもあつたが、現今では教員官吏の十割前後から銀行會社員の五十割前後を最高とするやうである。これは手當といつてもその人の執務の成績及び銀行會社に於てはその銀行會社そのもの〻營業成績によつてその度毎にその額に多少相違がある。年末に近づくに隨つて賞與金の支給額如何は俸給生活者間ではどこでも話題になるのである。年の瀨を無事越すことが出來るかどうかは一に賞與金の如何に懸る場合が多いのであるから、俸給生活者にとつては最大の關心事である。賞與金は普通六月・十二月の二回に支給せられるが稀には年一回年末だけに支給せられるところもあつて、年末賞與が專ら季題として用ひられてゐる。

例句　年末賞與

ボーナスにいさゝか不平ありにけり　佐海（ホトトギス）
ボーナスをふところにしてつとめけり　泥子（同）
ボーナスや支那傭人に至るまで　青眼子（續ホトトギス）
坑内に賞與の電話かゝりけり　北鳴（同）
旅客機にのりてボーナスつかひけり　都波伎（同）

年貢納（ねんぐをさめ）　年貢米（ねんぐまい）　年貢（ねんぐ）　小作納（こさくをさめ）　地子（ちし）

古書校註

【滑稽雜談】（一）秋收とて、此の事昔は秋月に侍るならし。當世おほくは天領・私領・寺社領にいたる迄、冬月迄に皆濟を了する事也。總べて一年の内に貢する物數種也。貢調とばかりは冬にあらず。作者考ふ可し。

【栞草】靑藍云、年貢納といへること、増山の井及び亭環にこれを載せず。しかりといへども「炭俵集」に、〽今の間に雪のふかさをさしてみる、といへる前句に、〽年貢すんだとほめられにけり　芭蕉、又、〽千鳥なくひとよ〳〵に寒うなり、といへる前句に、〽未進の高のはてぬ算用　芭蕉、云々、いづれも冬季につれられたれば、冬季として子細あるまじ。

註（一）十二月の條にある。

季題解說　小作人がその年の秋の收穫米を冬になつて（年内に）年貢として地主に納めるのを言ふ。

例句

年貢納

羽織著て馬追ふ年の貢哉　白圖（類題發句集）

つみあげて庄屋ひれふす年貢かな　子規（子規句集）

いち先に檢査濟しぬ年貢米　菊明（同　人）

庭川に年貢舟つく耶かな　蜆兒（ホトトギス）

兄弟や年貢納の馬曳いて　路石（同　）

老僧の出でゝねぎらふ年貢かな　鹿郎（同　）

深吉野の渡船に積みし年貢かな　藤園（同　）

年貢馬ならぶ間のゆきゝかな　古鐘（續ホトトギス）

嫁ぎ來て小作納めは恥しや　汀石（同　）

年貢馬羽織引かけ曳きにけり　晒井（同　）

藏著（くらつけ）

古書校註

【日次紀事】（一）此の月、士民年貢を納む。（略）秋米を（二）本所に收納するを年貢を進ると謂ひ、其の始めて其の家に運漕するを藏著（クラツケ）と稱す。倉庫に納め著くるの謂也。

【滑稽雜談】按ずるに、和國の風俗に、藏著と稱して、公家・武門・寺社家に至る迄、年の終りに各百姓年貢を始めて納むるの日、飲食をあたへて其の勞を慰す。周禮等にいへる勞農の事、又似通ひたるにや。作者趣向の一助にやと、因みに註し侍る也。

註（一）十月、（二）前に掲げる文に、「民間、其郷の家を謂つて地頭と稱し、又本所と謂ふ」とある。

御用納（ごようをさめ）

【季題解説】諸官署・學校などでは十二月二十八日迄事務をとり、それより一月三日迄は休暇とするを通例とする。十二月二十八日にその年の事務を終へるのを御用納と言ふ。數日前からせつせと殘務も處理して各〻御用納の日を待つのである。机の上もきちんと取片附けお互に年末の挨拶を交して別れるのである。

【例句】御用納

旅立ちや御用納もそこ〳〵に　帆影郎（ホトトギス）

髮結うて御用納の女かな　一路（同）

大疑獄さばきて御用納かな　葉舟（續ホトトギス）

門すでにさしたる御用納かな　青蘿（青蕾）

終相場（しまひさうば）

【季題解説】十二月二十八日を以て各取引所の相場を終り、一月四日まで六日間休む。二十八日の相場立を終ひ相場といふ。

書納（かきをさめ）

【季題解説】書を書くものが年末に當つてその年の最後の揮毫をするを言ふのである。然しもつと廣く考へて、文筆にたづさはるもの、書畫をものする人の書き納めとしてもよからう。

斧仕舞（をのじまひ）

【季題解説】年末、樵夫など斧を使用するものが仕事納をすることである。

車藏ふ（くるまかこ）

【季題解説】北海道や樺太・裏日本など雪國では、冬季約半歳、車が使へないので藏つてしまふのである。

【例句】車藏ふ

洗はれて吊り藏はれし車かな　悠々子（北・樺新季題句集）

節料物（せちれうもの）

節料米（せちれうまい）　年取米（としとりまい）

【考證】【滑稽雜談】節料米　日本歳事記に曰、十二月上旬、或は中旬の中、臘月の節に入つて、多く米を舂き貯へて以て正月の用にすべし。唐にも冬舂米とて有りとなん。○按ずるに、和俗の節料米と稱する者、是らの事に同じ

く、中頃に俳事に極月の部に之を記す。猶考ふべし。近年ことし米といふ類ならし。

【季題解説】年末に當り新年に用ふる品々を買ひ込み貯へ置くを言ふ。新巻の鮭とか酒とか又は野菜ならば人蔘・牛蒡・蓮根・黒豆・氷蒟蒻などの類である。年初は初賣迄は商人も薪菜を休むし、御用聞も三ケ日はやつて來ないので、新年の酒肴や食料として特に平素よりも多く品々を揃へ置くのである。さうした節料物が臺所ににぎやかに置かれてゐるのは年末年初の一添景と言つていゝ。

昔は米屋がお千であつたので、正月用として年内に米を搗いて置いたもので、之を特に節料米又は年取米と言つたのであるが、今はさういふことも少い。

【参照】年用意。

【例句】

節料物　澤山に並べてつむや年の米　止啓（花笠）

年用意（としようい）

【季題解説】來るべき新年を迎へる爲めの用意のことである。正月用のいろいろの物品の購入、或は食物の用意、例へば大家内の所などでは膾に使ふ大根・人蔘等を多量に洗つて置くとか、又それぞれの調度などを取り出して揃へて置いたり、店頭や室内の装飾、住居の飾り附け整頓、さては特殊な職業や儀式の爲めの用意、或は又僻地の生活に於ての、薬を打ち縄をなひして注連や飾其他のものを手造りにするなど、凡そ其類ひの年を迎へるに就ての用意を云ふのである。【参照】節料物・年設（としまうけ）

【例句】

年用意

年のいそぎ聖の衣みじかしや　召波（春泥發句集）

世の外の寺は買はぬ年用意　也有（[illegible]）

菊僧やかさ[illegible]こそりと年用意　芽舍（ホトトギス）

年籠りすがり[illegible]しきよ古柱　[illegible]の吉（同）

縄の[illegible]こ[illegible]つてゐる年用意　素十（ホトトギス）

ひそやかに年の用意や忌籠　牛涎（同）

年取（としとり）

【季題解説】年の暮もいよいよ大晦日になつて一夜明くれば年を一つ増すので、之を年取るといひ、大晦日の晩又は[illegible]、年取の祝儀を行ふ處がある。[illegible]を年取といひ、[illegible]。【参照】年守る・晦日・大晦日等。

【例句】

年取

[illegible]年取もの[illegible]一把　[illegible]蕪（[illegible]）

年をとる[illegible]に[illegible]　其角（[illegible]）

年取

草の戸のとしとる物や墨と筆　杉風（杉風句集）
年とりて内裏を出るや小挑（禿）灯　太祇（太祇句選）
年とるもわかきはおかし妹が許　同（同）
死ぬとしもひとつ取たよ筆の跡　同（同）
年とるや帆柱の數ありそうみ　同（同）
はづかしやまかり出てとる江戸のとし　一茶（おらが春）
膳先の猫にも年をとられけり　同（九番日記）
どこでとしとつてもそちはらくだ哉　同（同）
みだ佛のみやげに年を捨ふ哉　同（發句集）
行舟やいづれの海に年とらん　孤屋（續虛栗）
國の母年取る豆を送り來ぬ　まさを（同人）
道のべに年取物を商へる　夢香（ホトトギス）
調へし年取物や笊の中　甲子（續ホトトギス）
桂川年とるものを洗ひ居り　耿陽（同）

年守る（としまもる）　としもる　守歳（しゅさい）

古書校註　【年浪草】月令廣義に曰、除歳、旦（アシタ）に達して眠らず。之を守歳と謂ふ。

季題解說　年の夜、卽ち大晦の夜を眠りに就かないで明けるまで打守つて居ることを云ふのである。農家などでは、あかあかと燃える大圍爐裏を取かこみ、一家團欒して賑やかに語り興じながら行年を守り明すと云ふこともあるであらう。或は獨り燈火の下に坐して、去り行く年の足音の、その幽かな氣配を感じながら靜かに夜を徹する者もあるであらう。それらも亦年守る思ひの一つである。京都では大抵白朮詣をする。〔參照〕年取（トシトリ）　時候―大晦日（オホミソカ）

例句　年守る

年守や乾鮭の太刀鱈の棒　蕪村（蕪村句集）
とし守夜老は尊く見られけり　同（同）
柳いけてつくづく年を守夜哉　呑溟（安永六）

分歳（ぶんさい）　除夜（ぢょや）の宴（えん）

古書校註　【年浪草】周處が風土記に曰、除夜其の先祖を祭り、長幼聚り飲み、祝頌して散ず、之を分歲と謂ふ。〇月令廣義に曰、除夜の祭祀は、卽ち眞像を家庭に懸け、供奉して以て拜節す。

註　〇周處の風土記の文は、旣に日本歲時記に除夜の魂祭と併せ引き、滑稽雜談及び年浪草の同じ項中に引用してゐる　卽ち分歲は、我が國に古く行はれた除夜の魂祭の先蹤である。

掃納（はきをさめ）

【季題解説】大晦日に掃除をすることをいふ。その年の掃除納めであるからかくいふのである。その年の最後のことと思へば箒一つ手にとるにも雑巾一つかけるにも多少の感懐はある。なほ夜に入つて箒の音をきくといふことも大晦日に限られてゐる。それは元日には箒を持たないといふので大晦日の夜遅く掃くのである。已に正月を迎へる支度が内外ともにすつかり整へられてから、最後の掃除がなされるといふことは感じが深い。

【例句】

掃納

結ひ立ての髪に埃や掃納　羽公（ホトトギス）

加茂川へ掃納めたる座敷かな　都穂（同）

仲見世や客の絶間に掃納　菊甲（續ホトトギス）

水引の屑も塵なり掃納　丹楓（〃）

【参考】往時掃くことを忌む風あり。家内の福を掃き出す感ある爲であらう。故に元日は箒を取らないので、大晦日の夜に掃除をして新年を迎ふるのである。

岡見（をかみ）　逆蓑（さかさみの）

【古書校註】【増山井】岡見する、堀川百首に、こと玉のおぼつかなさに岡見すと梢ながらに年はこすかな、云々、しはす晦日の夜、高き岡にのぼりて、蓑をさかさまにきて、はるかに我家を見れば、あくる年有るべき吉凶の事見ゆると也。こと玉とは、明年の吉相をいふ也。

【例句】

岡見

此村に長生多き岡見哉　召波（春泥發句集）

千葉笑（ちばわらひ）

【古書校註】【下總國俗誌】下總國千葉郡千葉寺にて、毎年十二月晦日の夜、諸人あつまり、面をかくし、頭を包み、聲をかへて、所の奉行・頭人・庄屋・年寄、依怙贔屓を嘗いて、大きに笑ひ褒貶せり。諸役人此の笑に逢はじと常に謹む也。又行跡あしき人、親・主人不孝不忠の輩、此の笑ひに逢ひては自今を謹む自然のよき教訓也。是を千葉笑といふ。

鶫を食ふ（つぐみをくふ）　鶫鳥を食ふ

【古書校註】【日本紀事】一此の日、良賤津久美鳥を燒いて之を食ふ。言ふこゝろは、

身を繼ぐの意に取りて之を祝ふ。又長閑と稱す。是れ則ち長久の意に取れる也。質を取るの實は加志鳥を喫ふて言ふこゝろは、金銀を他人に借して其の利を取らんと欲する也。

圖 (一)十二月晦日。

【解説】鶫そのものは秋の季題となつてゐるが、大晦日にこれを炙つて食べて年越の祝とする習慣があるので、鶫食ふは冬季人事となるのである。「つぐみ」は身を繼ぐにかけてのことである、今は廢れてしまつた。

晦日蕎麥（みそかそば）　年越蕎麥（としこしそば）

【解説】商家をはじめ一般の家庭では、大晦日の晩に蕎麥を食べる風習がある。東京ではみそか蕎麥、上方ではつもごり蕎麥といつて居る。蕎麥の如く長壽なるを願つて祝はふのである。又一說には金粉が散つた時蕎麥粉を撒いて掃き集めるので金を集めるといふ緣起であるとも言はれてゐる。

節季候（せきぞろ）　姥等（ちよろ）　胸敲（むねたたき）

【解説】

【日次紀事】(一)今日より、乞人笠の上に羊齒の葉を挿み、赤き布巾を以て面を覆ひ、纔に兩眼を出し、二人或は四人、相共に人家の庭上に入つて躍を催し、米錢を乞ふ。是を節季候と謂ふは、則ち節季歳暮の詞を告ぐれば也。倭俗、候の字を也の字に代へて之を用ふ。二十七八日に至つて止む。

【滑稽雜談】梨窓隨筆に云、十二月の風俗に、鄙人節季候と云ふ形を作る。其の法、赤色の覆面をかぶり、菅笠を戴きて、家々の内に入り、馳走動轉する物あり。是又惡鬼を驅出す事を行ふ形なるべし。(略)○日本歳事記に云、國俗、此の月中旬より後、乞人共絳絹にて面を覆ひ、又絳絹にて膝を蔽ひ、烏帽を着て、せきぞろと云ひて、いろ〳〵の祝詞をうたひ、舞ひありく事有り。せきぞろとは節季候と云ふ意なるべし。都鄙共にする事也。○愚按に云、(一)惠空の說する所、其の意を得たり。是、追儺の侲子を學ぶなるらし。諸書の說に、侲子は大舍人の長大なる者或は官奴等を取りて、八人或は二十人各々緋布朱額等を着すといへり。又節季候の絳絹を面に覆ひ、頭に戴く事、略々相似たれども、是民間家々の鬼を追ふ遺意なるべし。

【俳諧歳時記】むかしは、乞兒としのくれに人家の門にたち、膺をあらは

節季はやゝやむときはやむ物の聲　太祇（太祇句選）
恥しらぬ老の戯れや節季候　召波（春泥發句集）
節季候の跡閉て行く編戸哉　也有（蘿葉集）
せき候にふみ過らるゝ伏家かな　成美（成美家集）
せきはに市のかくれ家見られけり　同（同）
節季候はいかなる人のなりぬらん　同（同）
せきはよ名のため狂ふ人もあり　同（同）
松風や小野のおくさへせきはと　一茶（旅日記）
せきはやそれそこの梅の花　同（七番日記）
せきはや七尺去て小せきは　同（同）
せきはよ女せきはそれも御代　同（同）
それや梅がとやせきは　同（同）
木隱て又やせきはと　同（同）
子のまねを親もする也節きは　同（おらが春）
下京や夜は素人の節季は　同（一茶句帖）
やれもよい年をして節季は　同（同）
とし寄のせいにあれ節季は　同（同）
せきはの犬蹴とばしもせざりけり　同（九番日記）
門の犬じやらしながらや小せきは　同（同）
せき候や弱りて歸る藪の中　尙白（續猿蓑）

【参考】祝言を唱へて門戸に來る乞食の中、十二月二十二日より二十七八日に至る者を節季候といふ。もと三都共にあり、近代は江戸にのみ殘つてゐたが、今はその跡を絶つた。節季候の唱へる文句『せきぞろござれや、ハア、せきぞろめでたい。』『せきぞろほら、毎年、旦那のお庭へ飛び込めはね込め。』その扮裝にも沿革あり、もと齒朶の葉を笠の上に插んだといふは、山より來たことを意味するものと考へられる。

厄拂（やくはらひ）

【出典校註】

【山之井】やくはらひといふ物のありくに、(一)其のまめをとらせつれば、五百八十年七まがりと、ことぶきする事もあめる。

【日次紀事】(二)今夜乞人綿巾を以て頭面を覆ひ、自ら疫拂・疫落と稱し、夜街衢を往來し、曉に至りて止む。

同夜、四十二歳の男子、自ら犢鼻褌を落す。是を不俱里於登志と稱す。是亦疫を祓ふの一事也。

【滑稽雜談】日本歲時記に日、世俗に立春の前夜乞人家々に行きて厄拂厄拂とよぶ。其の翌年厄にあたる歲人、錢を出してあたふれば、祝詞を述べ、終りに鷄の鳴眞似をす。京都・武城に殊に多し。鄙にもする所多し。○或

は云、我が國俗、四十二歳を厄にする、蓋し四二の音死の字訓に同じ。故に之を忌む。甚だ笑ふ可し。これらの所說識者に明らむべし。厄落。今世和俗、厄年にあたる前年の節分、厄落しとて、自ら祕藏の衣服或は器物等を持出でて、山野或は街衢又は橋上に捨てゝ、是を厄落(ヤクオトシ)と稱す。按ずるに、祓除の法に形代(カタシロ)など云ふ儀に似かよひたるか。或は云、民間には下帶古特鼻褌などを厄落しとて、中華窮鬼を除くの日弊衣を捨つるの義おなじと云ふ。(四時寶鑑に曰、高陽氏衣幣を好みて糜を食ふ。正月晦日巷に死す。世[illegible]作りて弊衣に弃つ。是の日豐を祝ひ、窮鬼を除くと曰ふ。)按ずるに、上に云ふ(三)韓退之の送窮文、こゝに窮鬼を除くと云ふ者、皆和に云ふ貧乏神の類也、猶考ふ可し。

【栞草】唐土にも、丐者のやくはらひといふことすと見えたり。[夢華錄]此の月に入るより、貧者數十人群をなし、神鬼に裝ひ、男婦鑼鼓を以て門を巡り、錢を乞ふ。これを打夜胡と名つく。又驅祟の類。

註(一)追儺の豆、(二)節分の夜、(三)寶船敷くを參照せよ。

【[illegible]】節分の夜の一情景で、乞食が手拭で頰を包み、尻端折つて背ナに張ぼての籠をかつぎ、扇子を持つて、「厄拂ひませう」「拂ひませう」と町町を流して歩く。厄歳に當つてゐる人のある家では、それを呼んで豆や錢を與へると戸口に佇つて「アアラめでたいな／＼。めでたい事で祓はうなら、鶴は千年龜萬年、東方朔は九千歳、三浦の大助百六ツ、いかなる惡魔が來るともこの厄拂が引つ捕へ、ちくらが沖へ眞ッ逆樣にさらり。」といふ風な事を唱へてゆく。この文句にはいろ／＼作り替があつて一軒の家に五人も六人もの所望があると、これは主人の分、これは御寮人の分といふ風に文句を分けて、それに適合したのを選つてやるのであるが、冒頭の「アアラめでたいなめでたいな」と終りの「眞逆樣にさらり」だけはどれも同じである。大阪落語にはこの厄拂を題材にしたものがある。——[illegible]厄落(ヤクオトシ)

【例句】
厄拂
うとまるゝ身は梶原か厄拂　芭蕉（射水川）
聲よきも頼もし氣也厄拂　太祇（太祇句選）
大豆殼に七歩の吟ややくばらひ　蓼太（蓼太句集）
厄拂跡はくまなき月夜かな　同（同）
八方を塞げる厄を拂ひけり　休山（續ホトトギス）

【[illegible]】厄拂ひの文句は色々ある。何々づくしで拂ふともいふ。末句は『西の海へさらり』といふを常とする。

厄落(やくおとし)

ふぐりおとし　厄の[illegible]

【[illegible]】男の四十二歳、女の三十三歳の大厄をはじめその外色々の厄年が

ある、その厄歳の災難をのがれるために、節分の夜に厄落しの禁厭をするのであるが、方法は地方によつて又宗旨によつて一樣でない。その中で最も廣く行はれて居り、面白いのはふぐりおとしで、これは氏神樣へ參詣して人に見付からぬやうに褌を落してくるのであるが、それよりももつと普通的に行はれてゐるのは、割箸に何の年の男とか女とか自分の年齢干支を書いてそれをどんどに上げる所謂厄の箸で、その爲めに各神社では境内にどんどを焚いて厄の箸を授與してゐる。【[illegible]】厄拂(ヤクハラヒ)　時候―節分(セツブン)

例句

厄落

先生も人のすゝめや厄おとし　召波（春泥發句集）
厄落し石女年をあかしけり　同（同）
厄落し赤ふんどしを落しけり　稻村（春夏秋冬）
厄捨てし戻り聲するめでたさよ　青畝（ホトトギス）
樹の間もる月にさまよひ厄落し　王城（同）
笑止さや落しふどしに躓きし　夢仙（同）
あによめとおない年なり厄まゐり　頓兵衞（同）

貘(ばく)の枕(まくら)　貘(ばく)の札(ふだ)

古書校註

【滑稽雜談】日本歳時記に云、節分の夜、貘の形を圖きて枕に加え侍れば惡夢を避くるとて、今の世俗する事也。俗説に、貘は夢を食ふ獸なるゆゑこれを用ゐるといへり。夢くふと云ふ事いまだ其の説を見侍らず。且後漢書に、大儺の時、伯奇といふ神夢を食ふといふ事はべり。○按ずるに、此の事も和においに近來の事にや。古史等さらに沙汰侍らず。季物にも未だ載せず。

【年浪草】故事要言に曰、節分に貘と云ふ獸の形を畫きて枕に敷けば惡夢を見ずとて俗にすることとなり。俗説に貘は夢を食ふ畜なりと云ふ。然れ共節分に圖するゆゑ之を註す。

季題解説

節分の夜、七福神などをかいた寶舟を敷いて吉夢をむさぼらうとするが、その反對に惡夢を見た時、夢を喰ふと云ひつたへられてゐる貘を描いた紙をしく風習がある。今でも花柳界などではこの風習が依然として殘つて居る。實際に於ても貘の皮を敷くと邪氣を拂ふといふから、これからも來た習俗であらう。尙貘の札ともいふ。

例句

貘の札

うばたまの闇に敷寢や貘の札　野風呂（ホトトギス）

寶船(たからぶね)敷(し)く

古書校註

【山之井】舟を縮ぎきて、ふすまのしたに敷いていねて、其の夜の夢のよ

ものである。京阪地方を始め本邦隨處に行はれる。大寒の入りの日から行ふのが普通だが、小寒に入ればすぐ行ふところもある。

例句　寒施行

雪の上におく提灯や穴施行　三山（ホトトギス）
穴深く灯とゞく施行かな　弘（同）
野施行や半紙の上の供物　毬子（同）
寒施行子供の聲も聞えけり　典子（續ホトトギス）
眷屬の横穴ならぶ施行かな　提河（同）
野施行や石に置きたる海の幸　風生（同）

粥施行（しゆせぎやう）　粥やらう（かゆやらう）

季題解説　昔は貧民施行のため、熱い粥を四條河原などに炊いて給與したものであるが、後各町内などで有志が「粥やらう」と桶に入れてよびあるき、その町内の貧者に給與したもの。今日ではその風は見られない。

避寒（ひかん）　避寒旅行（ひかんりよかう）　避寒宿（ひかんやど）　避寒地（ひかんち）

季題解説　冬の寒氣を避けて氣候の暖かい地方に赴くことを言ふ。避暑とか海水浴とかゞ如何にも賑やかに中流階級の人々に普遍的に行はれてゐるのと違つて、之は相當高貴の人とか又は病弱の人とかの間に行はれてゐるだけのやうである。東京でいへば先づ湘南・伊豆の温泉地、海岸などに避寒をする人が多い。そこに別莊を持つてゐる人は別莊に、又別莊を借りたり、温泉宿とかたゞの旅館とかに逗留して冬を過す。それらの人の生活は餘程靜かなものであるにちがひない。いつ來ていつ去るといふはつきりしないやうな客もあるであらう。

例句　避寒

避寒宿の大蘇鐵今年枯れてあり　破苦醉（懸葵）
海鼠まだ〳〵紅し避寒宿　秋皎（ホトトギス）
門内の大さぼてんや避寒宿　水風子（同）
支那服を著なれし避寒夫婦かな　楠畝（同）
避寒宿菜の花活けてありにけり　耿陽（續ホトトギス）
砂濱にかげるものなき避寒かな　爽雨（同）
砂山の蓬の青き避寒かな　里石（同）
砂寄せて門の埋もれし避寒かな　秋櫻子（葛飾）

寒見舞（かんみまひ）

季題解説　寒中知人の安否をたづねるのが寒見舞である。近年は年賀狀と

か暑中見舞と同じやうに、寒中見舞の書狀又は葉書を印刷して友人知己に發送するといふやうなことも一部では行はれてゐる。寒中に知人の安否をたづね訪れるとか叮嚀な見舞狀を送るとかいふことは暑中見舞などと違つて環境がしづかであるだけ、又普通の年中行事として一般にゆき渡つてゐないだけに形式的な分子が少く、見舞ふ人の心持と見舞はれる人の生活とが滲み出るごとく感ぜられるのである。

【例句】 寒見舞

美しく[illegible]活一と束や寒見舞　山堂（同人）
寒見舞小庭掃かれあり竹も石も　はじめ（ホトトギス）
寒見舞心にかけて怠りぬ　碧若子（同）
生みたての鷄卵十個や寒見舞　殘雪（同）

雪見舞（ゆきみまひ）　雪消（ゆきげし）

【古書校註】 【日次紀事】「雪消」（十二）斯の月多く雪降る。貴賤糕餅丼に菓實等の物を以て、互に相贈る、是を雪消と謂ふ。言ふこゝろは、之を食して以て寒氣を忘るゝの謂也。

註（十二）十二月

【季題解説】 雪國で大雪があつたとか、雪崩があつたとか、又は久しく深雪に閉ぢこめられてゐるとかいふ場合に、親戚・友人・知己の安否をたづね見舞ふことである。

寒稽古（かんげいこ）

【季題解説】 劍道・柔道等を修むるものが寒の間特別に猛烈な練習をつゞけるのが寒稽古である。武德殿などの大がかりのもの、學校の道場の寒稽古、さては町の小さな道場の寒稽古など、また暗い早朝とか又は夜更けまで、嚴寒に心身をおとしめての鍛錬である、極めて日本的なゆかしいものである。

【例句】 寒稽古

寒稽古済みし竹刀を愛すかな　[illegible]（ホトトギス）
大雪の轟き障子や寒稽古　一大（同）
寒稽古夜更けて殘る二人きり　花蓑（同）
面著けてするどき眼やな寒稽古　凍月（同）
一人減り二人減りたる寒稽古　石羊（ホトトギス）
くゞり門押せば開くなり寒稽古　野風呂（同）
寒稽古書き塾に[illegible]たる　草城（同）
行く我に戻る君あり寒稽古　虚子（ホトトギス）

相撲寒取（すまふかんどり）　寒相撲（かんずまふ）

[illegible] もと寒中に相撲の稽古をすることを言つた。處がたまたま現今では東京相撲の春場所が一月十日頃から約十日間、兩國國技館でひらかれるので之を寒相撲といつてもよからう。一[illegible] 秋—相撲（スマフ）

寒復習（かんさらひ）　寒習（かんならひ）

[illegible] 日本の音曲・聲曲にいそしむものが、寒中朝未明に又は夜間などつゞけて平素よりもはげしく復習をすることを言ふのである。この練習をすれば藝がぐんと伸びるといふ信仰が傳統的にあるために、特に藝者・雛妓・藝人などがはげんでするやうである。[參照] 寒聲（カンゴヱ）

[illegible]

寒復習

まゝつ子や灰にイロハの寒ならひ　一　茶（九番日記）

いとけなき聲はり上げて寒ざらへ　秀　好（ホトトギス）

美き聲の從れて高し寒復習　虛　子（同　）

寒聲（かんごゑ）

[illegible]

【埒山井】聲つかふ。（一）同。

【滑稽雜談】聲は肾臟より出づる也、四序の冬における、水輪に屬し、五臟におゐて肾は冬を主どる、故に嚴冬にのぞんで聲音を發して是を貫するならし。歌舞を嗜む者は、貴となく賤となく、二寒に卅日、曉天に庭場に臨んで諷詠し、或は鼓舞す是を俗に寒聲と稱する也、有識者に尋ぬべし。

【栞草】音曲に遊ぶ者、寒中朝暮、大に聲を發す。これを寒聲つかふといふ。或は寒習（カンナラシ）と云ふ。

[註]（一）その前書に非とせんに同じとの意。

[illegible] 日本の聲樂に携るものが寒中に、朝早くとか夜分とかに、極端なのになると屋外に出て、平素の練習よりも一段と猛烈な强行練習をして聲を練磨する習慣がある。その寒稽古を仕おほせるのはなかなかに難事で大決心を要するものであつて、時には寒稽古をあまりに爲しすぎたために聲がつぶれることなどもあるが、それがかへつてその人の聲を一層立派なものに飛躍させるといふやうな信仰もあるのである。凜烈な寒さのなかでふりしぼる聲は如何にも碣々しく冴えてひゞく、而もその聲には傳統と信念の裏付けがあるので一しほ滋味あるものになるわけである。僧侶が寒中に讀經の練習をするのもまた寒聲の中に包含せられる。[參照] 寒復習（カンサラヒ）

[illegible]

寒聲

寒聲や南大門の水の月　其　角（五元集）

寒聲は葬禮がきて仕舞けり　許六（五老井發句集）
寒聲や古うた諷ふ誰が子ぞ　蕪村（蕪村句集）
寒聲や親かたどのゝまくらもと　太祇（太祇句選）
寒聲や京に住居の能太夫　召波（春泥發句集）
寒聲をあくる日とへば咳氣かな　也有（蘿葉集）
寒聲や酒屋を出て遠からず　同（蘿の落葉）
寒聲やあはれ親ある白拍子　几董（井華集）
寒聲を鬼もきけとや羅生門　成美（成美家集）
寒聲やイ組ロ組の喧嘩買　一茶（七番日記）
をかしさは寒聲に聲枯しけり　達非（恒誠）
寒聲の娘に粥を焚きにけり　穗艸（同人）
寒聲や月の叡山聳えをり　王城（ホトトギス）
寒聲や障子の外の隅田川　蕪子（同）
寒聲の二朝三朝つゞきけり　月何（續ホトトギス）
寒聲に嗄らせし喉を大事かな　虛子（句集虛子）

寒彈（かんびき）

季題解説 義太夫・長唄・淸元・常盤津などの師匠の家では、寒の内は毎早曉から弟子達を集めて寒彈をやる。斯うして寒氣と闘つて修業を積んで置かぬと、いざといふ場合に根氣が十分利かないといふのである。遊里などでも同樣寒中は朝早くから三味の稽古をする。其他一般に三味線をたしなむ者は皆それぞれこの修業をする樣である。

例句 寒彈

寒彈のすみし一人や拭掃除　白川（ホトトギス）
寒彈の絲きれはねしひゞきかな　流水（同）

耐寒飛行（たいかんひかう）

季題解説 朝鮮平壤飛行聯隊を根據地にして、毎年寒の内に演習がある。内地の所澤其他からも參加する、昭和八年も一月十日から十日間位練習した。

寒紅（かんべに）　丑紅（うしべに）

季題解説 寒中に製した紅をよいといつて婦女子が購ふ。殊に寒中の丑の日のはよいとて此日に買ふ。之を丑紅とも寒紅とも云つて居る。又寒中丑の日に紅をさせば口中の蟲を殺すといふ俗說もある。

例句 寒紅

笑み解けて寒紅つきし前齒かな　久女（ホトトギス）
寒紅を賣つてをりたる草家かな　ひさ女（同）

寒紅

寒紅の中将といふさしにけり　桑弧（ホトトギス）
寒紅をときて染めたる薬指　青都（續ホトトギス）
寒紅をつけて立はたらきにけり　菁子（同）
丑紅を皆濃くつけて話しけり　虚子（句集虚子）
土産には京の寒紅伊勢の箸　同（續ホトトギス）

懐手（ふところで）

〔季題解説〕 懐手は源氏物語などにも「いとはしたなきわざ」としてたしなめてある通り、両方の手をふところに入れてゐるのは男でも女でも何となくたらしのない有閑的な感じのするものであるが、片方だけの場合はさうでもない。殊に遊女などが片手をふところに入れて伏目勝に佇んでゐる姿などは嬌やかな感じがする。だが、此處にいふ懐手は寒さの爲めに無意識にする懐手が主で、日本の衣服に特有な季節感を伴ふものである。

〔例句〕 懐手

懐手して雪掻の群に在り　青眼子（ホトトギス）
水汲みを頼まれゐるや懐手　巖角（同）
船頭につゞく船子も懐手　舟遊子（續ホトトギス）
伊良湖道懐手して海女來る　多霞子（同）
火なぶりを叱りに出たる懐手　北鳴（同）

日向ぼこり（ひたたぼこり）　日向ぼつこ（ひなたぼつこ）　日向ぼこ（ひなたぼこ）

〔古書校註〕 【嬉遊笑覧】著聞集に、或る田舎人、京上りして侍りけるか、宿にて天道（テンタウ）ぼこりして居たりける云々とあり。日なたの暖なるにあぶる意にや。燒くことを、ほこらすといひ、其の塵をほこりといふ是なり。
【永正五年正月二日狂歌合】一番、左 今朝てらす日なたぼかうに貧乏の神代の春や立ちかへるらん。

註 ○日向ぼこを冬の季題としたのは遅かるべく、古歳時記にはない。江戸時代には語が「日向ぼこ」と約つてゐる

〔季題解説〕 冬の日のぬく〳〵とさす太陽の光に當つて暖をとることである。從つて場所は何處でも、人は誰でも、職業が何であらうとそれらは問ふところでない。〔分類〕時候—冬暖か（フユアタタカ）

〔例句〕 日向ぼこり

三巡りの日向ぼこしに出たりけり　一茶（七番日記）
盆梅の講釋を聞く日向ぼこ　竹樓（同人）
わが前に顫ふ薔薇赤し日向ぼこ　土秋（ホトトギス）
またも來し雲の一つや日向ぼこ　煤煙（同）
日向ぼこしてさへをればよき身かな　都穗（同）

雪落つる光飛び来ぬ日向ぼこ　花蓑（同）
日向ぼこ老のてのひらかざしけり　水風子（同）
霜どけのさゝやき聞ゆ日向ぼこ　萱山（同）
日向ぼこ一人となれば唄ひけり　夏竹（同）
手拭を花見被りや日向ぼこ　寸七翁（同）
檐にゐて聞ゆ法話や日向ぼこ　大郷羅（同）
小つむじの遊びに来たり日向ぼこ　紫月（同）
居こぼれて日向ぼこりの尼ぜかな　青畝（同）
日向ぼこ淡路の人家まのあたり　墨石（同）
松葉杖置いて二人や日向ぼこ　凡九郎（同）
萩叢を刈ろと思へど日向ぼこ　禪寺洞（同）
天つ日に盲目となりぬ日向ぼこ　無涯（同）
舟人や座取置いて日向ぼこ　東江（同）
み佛に壁を一重や日向ぼこ　豆花（同）
日向ぼこ何やら思ひ出したる　枝鳥（同）
日向ぼこかたへの魚籠の魚啼きぬ　湯雨（同）
お法話や磯上の日向のありがたき　奏鳳（同）
山の色けふむらさきや日向ぼこ　鳥頭子（同）
波立てる河をながめて日向ぼこ　三昧（同）
日向ぼこしても居れじと思ひつゝ　きゆう（同）
縁先の引上げ舟や日向ぼこ　風生（續ホトトギス）
父母の膝の我子や日向ぼこ　俚人（同）
裏山は鳴き風あり日向ぼこ　刀己知（同）
うと／＼と生死の外や日向ぼこ　鬼城（鬼城句集）
日向ぼこ我を亂さぬ客ならば　虚子（句集虚子）
陽炎を見つけてうれし日向ぼこ　同（續ホトトギス）

息白し（いきしろし）

【季題解説】大氣寒冷な頃、殊に朝夕など、人畜、自他の呼氣が白く見えるのをいふ。かういふ時、大自然中の生き物の意識が強い。

【例句】
白き息はきつゝこちら振返る　草田男（續ホトトギス）

綿（わた）

【古書校註】
【御傘】冬也、衣類の沙汰之無しといへども、うち綿を嫌ふべき歟。綿にとしたらば、三句去るべし。綿ぼうしは衣類にはなるべからず、冬には成

るべし。（略）綿と號・こんわた、付句嫌ふべし、綿やとあらば雜なるべし。居所也。木綿も冬也　綿打は人倫なり。冬の用意にうつものなれば秋なるべし。（略）わたともめんは付けてもくるしからず　唐わたともめんはきらはずも、もめんと木わたは折を去る也。問うて曰、綿にもめん同字なるに、付けてもくるしからずとは如何。答へて曰、蠶の綿に似たりとて、木わたは類に成る也。

【俳諧古今抄】　再撰貞享式。古抄に綿の事は分明ならず。或は眞綿も木綿も總て冬なりと云へれど、さるは附合の害あらん　綿は本より雜にして、綿入は綿拔の對なれば、入字を添へては冬と定むべし　或は棉打を秋と云へれど、綿を摘むと云ひ、棉をば打つと云ふ。打つは木棉にして、決して冬と定むべし　棉取・新棉の外は秋には非ず。或は綿帽子は衣類に非ずと云ひ、綿に海鼠腸を嫌ふの類は、古今の違なれば論に及ばず。然るを綿と木棉とは附けても苦しからずと云ひて、蠶綿と木棉との釋文あれど、綿と棉とは英堅の切にて、音訓ともに替らぬを、何故に附句を嫌はぬや。

【滑稽雜談】　按ずるに、（一）貞德は綿打を秋とす。（二）重頼は冬に入れらる。好む所にしたがふべし。（略）綿打は、草綿俗に云ふ木綿の事也。

【栞草】　其の實を拔去るを繰といふ。弓弦にかけてこれを打つを綿打と云ふ。紡車を以て絲とするを紡ぐといふ。その外肱綿・莚綿・束綿等は、作る所の狀を以てこれをいふ。唐綿は（三）古終、俗に云ふ木綿なり。

註　（一）御傘の説。（二）毛吹草の説。（三）大草綱目に「木綿、草木二種有り。木に似たるものは古貝と名づけ、草に似たるものは古終と名づく」とある。

〔季題解説〕　棉は錦葵科の草本である。秋、蒴果を結び熟すれば開裂して白色の毛狀纖維を吐き出す、之が棉花である。之から綿を製する。衣服・蒲團などの内容物として必要なものである。〔參照〕綿打（ワタウチ）　秋・綿取（ワタトリ）　夏　綿の花（ワタノハナ）

〔例句〕

古綿の絲屑とりて丸めけり　波那女（ホトトギス）

綿を繰る近くに邪魔や柱影　米太（同　）

綿打つ眞白き眉毛拂ひけり　牛城（續ホトトギス）

はゝそはの背にかけ給ふ眞綿かな　巴潮（同　）

〔考證〕　綿は移入植物で、類聚國史によれば桓武天皇の延暦十九年に、去年崑崙人の三河の國に漂著した者の持ち來れる種子を蒔いたのがもとであるといふが、なほ古く奈良朝時代にもその文獻がある。萬葉集に滿誓が筑紫の綿を詠んだ歌があり、その他にも見える。

綿入（わたいれ）　布子（ぬのこ）

〔古書校註〕

【俳諧古今抄】　再撰貞享式、綿は本より雜にして、綿入は綿拔の對なれば、

ひかれて戀なるべし。又、古枕・古衾、戀を付けたらば、其の時句に引かれて戀に成るべき也。只うちまかせては哀傷ばかりなり。句體に依るべし。

【三才圖會】大被を衾と曰ひ、單被を裯と曰ふ。詩の召南に、衾と裯とを抱くといふは是也。（一）三才圖會に云、論語に寢衣長一身有半と曰ふは、此の商周の事也。蓋し被の名は漢に始まる也。（按ずるに、（二）圖する所の被は蒲團に似たり。既に寢衣と謂ふときは襟袖有るべき也。倭の夜着は、常の衣の如くにして濶く大に、長一身有半なり。

【註】（一）明の王圻著の方である　（二）王圻の三才圖會に關する圖をいふ。

【季題解説】臥床時、身邊に掛ける蒲團である。布帛を以て外被を作り、綿・眞綿・パンヤ・羽毛等を厚く入れてある。【參照】夜着　紙衾　蒲團

【例題秀句】

衾

着てたてば夜の衾もなかりけり　丈草（丈草發句集）
脱たまふ御衣は天下の衾かな　嵐雪（玄峰集）
糞ひとつねずみのこぼす衾かな　蕪村（新五子稿）
沙彌律師ごろり〳〵とふすま哉　同（蕪村句集）
かしらにやかけむ裾にやふるぶすま　同（明烏）
鬼王が妻にをくれし衾かな　同（蕪村遺稿）
糊ひきて焚火得させむ古ぶすま　同（全集）
四ッに折て行李にあまる衾かな　几董（井華集）
影うつる鴛のふすまやよばひ星　同（同）
すさまじや市の衾の風たまひ　白雄（白雄句集）
篷に音あり衾にさはる夜もすがら　士朗（枇杷園句集）
引かぶるよし野のおくの衾かな　成美（成美家集）
いつまでか鳶にもならで古ぶすま　同（同）
小衾にかれのゝ雨のかゝる也　一茶（旅日記）
をり〳〵は竹の影おく衾哉　同（同）
寢衾や岑の紅葉のかゝれとて　同（七番日記）
入相に片耳ふさぐ衾哉　同（同）
衾から顏出して呼ぶ茶うり哉　同（同）
老たりな衾かぶるもどつこいた　同（九番日記）
懲しめに留守の衾ぞ虱ども　同（同）
犬が來てもどなたぞと申す衾哉　同（一茶句帖）
漏どのがおそろしといふ衾哉　同（發句集）
ある時は雲のふすまを着るやどり　乙二（松のゝえ草稿）
ふすま着てきけ鶯の歩行音　同（同）
ふすま着よ〳〵とやみねの松　同（同）
ぬくもりの宿鳥に劣るふすまかな　梅室（梅室家集）

古衾古人の夢もなかりけり　抱琴（春夏秋冬）
父の咳わびしく動く衾かな　京水（ホトトギス）
一日を心に描く衾かな　友次郎（同　）

【參考】衾は古くより夜具の意に用ゐられてゐた。古歌に多く詠まれてゐる。萬葉の東歌に「伎倍人のまだら衾に綿さはだ入りなましもの妹が小床に。」

夜著（よぎ）　搔卷（かいまき）

【解說】形は衣に似て袖があり、長く仕立て厚く綿を入れて臥床時に掛けるものである、又綿を薄く入れたものを搔卷といふ［[illegible]］衾の、褞袍。

【例句】
夜著
夜着に寢てかりかね寒し旅の宿　芭蕉（芭蕉句選拾遺）
夜着ひとつ祈り出して旅ねかな　同（茶草子）
ひとりねや幾度夜着の襟をかむ　來山（續いま宮艸）
漁舟へ積み込むや夜著と角燈と　的浦（ホトトギス）
身の熱に夜著あたゝかく寢たりけり　白峰（同　）

紙衾（かみぶすま）　天德寺（てんとくじ）

【[illegible]】【[illegible]】紙衾は紙にて造りたるなり、貧賤の者の用ふるテントクジ是なり、

【[illegible]】[illegible]天德寺といひ、普通の蒲團が布を外被とし綿を入れて作るに引きかへ、紙衾は紙を外被とし、藁を入れて作つたものである。江戸時代のもので賤民用である。[illegible]衾に、紙子。

【例句】
紙衾
紙ぶすま折目正しくあはれ也　蕪村（蕪村句集）
たゝむぞよ寢覺なき夜の紙衾　芭蕉（其蒿木綿）
戸ざさぬを我歸なり紙ふすま　蓼太（蓼太句集）
こつ〳〵と咳する人や爺衾　闌更（半化坊句集）
紙衾梅にゆかりのあるをとこ　蒼虬（蒼虬翁發句集）
百足はふ音すさまじや紙衾　梅室（梅室家集）
寐覺れば養子の音や紙衾　嵐來（文東）

蒲團（ふとん）　布團（ふとん）　掛蒲團（かけぶとん）　敷蒲團（しきぶとん）　羽蒲團（はねぶとん）　絹蒲團（きぬぶとん）　蒲團干す（ふとんほす）

【[illegible]】【三才圖會】按ずるに、[illegible]有り、座褥有り、（略）夏月、蒲・藺等の草を

以て之を作る。俗に褥を呼んで蒲團と曰ふは、蒲の圓座より出づるの名乎。

【滑稽雜談】　和製の者、綾羅錦綉より始めて、絹布木綿に及ぶ、舊制の者也。蒲團常用の者なれども、寒を禦く具なれば、冬に許用する也。猶考ふべし。昔は秋、蒲の葉を編みて、蒲の穗を包んで席とす。仍つて名有り。

【年浪草】　本草綱目に曰、蒲席、釋名に云、薦同じく席と爲す。薦は皆蒲及び稻藁を以て之を爲る。精粗の異有り。吳人龍鬚草を以て席を爲る、今絹布を以て之を爲ると雖も蒲團と曰ふ。

【[illegible]】　綿の代りに鳥の羽毛を入れたものを羽蒲團と云ひ、外被絹布仕立のを絹蒲團といふ如く、材料によつて夫々名稱がある、又用途と形によつて掛蒲團・敷蒲團・厚蒲團・薄蒲團と稱する。

【[illegible]】　蒲團は四季を通じて用ゐるけれども、俳句の上では古來習慣と約束から之を冬季に屬せしめてゐる。夏の蒲團は特に夏蒲團と言つて區別してゐる。〔……〕衾。　藁蒲團　背蒲團　肩蒲團　腰蒲團

夏―夏蒲團

【[illegible]】

蒲團

被き伏蒲團や寒き夜やすごき　　芭蕉（鹿島紀行附錄）

京にて

ふとん着て寐たる姿や東山　　嵐雪（玄峰集）

十三回忌

品々の蒲團にのぼる木魚哉　　同（同）

引ばりて蒲團ぞ寒きわらひごゑ　　惟然（惟然坊句集）

虎の尾を踏つゝ裙に、とんかな　　蕪村（蕪村句集）

嵐雪とふとん引合ふ侘寢かな　　同（同）

いばりせし蒲團ほしたり須磨の里　　同（同）

古鄕にひと夜は更るふとん哉　　同（同）

都人にたらぬふとんや峰の寺　　同（新五子稿）

あたまからふとんかぶればなまこかな　　同（同）

孝行な子供等に蒲團ひとつづゝ　　同（同）

大兵の假寢哀れむふとん哉　　同（新選）

唐くさに牡丹めでたきふとんかな　　同（題苑集）

能ふとん宗祇とめたるうれしさよ　　同（蕪村遺稿）

夜明ぬとふとん剝けり旅の友　　太祇（太祇句選）

旅の身に添や鋪布の鴛ぶとん　　同（同）

足が出て夢も短かき蒲團かな　　同（同）

活僧の蒲團をたゝむ魔風哉　　同（同）

わびしさや旅寐の蒲團數をよむ　　同（同）

身に添はで寢しやふとんの透間風　　召波（春泥發句集）

輕井澤君がきませるふとん哉　　同（同）

紡績に妻老けるよ嫁ぶとん　同（同）
[illegible]も見るつれなき人の蒲團哉　几董（井華集）
疊むとて主客爭ふふとん哉　同（同）
恨寐の蒲團そなたへゆがみけり　同（同）
三つ五つ星見てたゝむふとん哉　一茶（享和句帖）
座ぶとんに見ておはす也松の鳥　同（同）
佗[illegible]ば猫のふとんをかりにけり　同（七番日記）
ふとんともにおしよせらるゝ寢坊哉　同（同）
今少雁を聞とてふとん哉　同（同）
祐成がふとん引はぐ笑ひかな　同（同）
今しばし〳〵とかぶるふとん哉　同（同）
旅すれば猫のふとんも借りにけり　同（同）
安き世や二晩ぎりの借ぶとん　同（同）
飯櫃にきせれば蒲團なかりけり　同（一茶句帖）
早立のかぶせてくれし蒲團かな　同（[illegible]集）
舟が着てゐとはぐふとん哉　同（發句集）
小夜千鳥加茂川越る貸蒲團　無腸（五車反古）
毛ぶとんやこはい夢見る後夜鐘　涼菟（皮籠摺）

詩腸枯れて病骨を護す蒲團かな　子規（子規句集）
[illegible]を着て蒲團の内にすゝめけり　緑堂（新俳句）
紫の[illegible]蒲團はなまめかし　無事庵（同）
君とあて蒲團無し我と共に寐ん　花叟（同）
ありたけの布團を出して泊めにけり　料日（同　人）

うれしさのこみ上げて來る布團哉　菊香女（同）
長き文を布團の下にかくしけり　紫水（同）
三人の故郷の遠き蒲團かな　余子（ホトトギス）
荒海をひかへし宿の蒲團かな　月舟（同）
江の島の蒲團をたゝむ濤の上　果采（同）
つめたかりし蒲團に死にもせざりけり　鬼城（同）
[illegible]に背の雨洩る蒲團かな　暮雲（同）
我病めば[illegible]蒲團の裾に運ぶ子等　幸女（同）
目覺むれば京の蒲團に寐てゐたり　誓子（同）
美しき蒲團見てきし産見舞　ちぐさ（同）
頭ならべて蒲團につきし雲衲等　靜雲（同）
恐ろしき病の蒲團干しにけり　起草（同）
病臥[illegible]蒲團の苦情申しけり　恵來（同）

蒲團

瀨の下かげよふ瀨あり干蒲團　秋櫻子（ホトトギス）
今ははや咲くべき梅や蒲團干す　芝青（同）
胃風邪をひきし蒲團を憎みけり　稲女（同）
深耶馬の宿の蒲團の薄かりし　句鳴（同）
ひねもすや遠山かくす干蒲團　花蓑（同）
大岩に蒲團干したりでゆの谷　橙黄子（同）
ほか／＼と糊利き來し蒲團かな　桔梗生（同）
しみ／＼と病樂む蒲團かな　眞小男（同）
坊泊り蒲團の文字は延暦寺　無中（同）

雲仙

四五軒の地獄の宿や干蒲團　夏山（續ホトトギス）
蒲團干す蘆の古江の日和かな　一壺（同）
朝鮮の濃き紫の蒲團かな　越山（同）
貸ぶとんさげすみつゝも借りにけり　曉水（同）
病人の著たる蒲團の花鳥かな　茅舍（同）
ある時は蒲團のおごり好もしき　虛子（句集虛子）
箸置けば早布團敷く山の宿　同（同）
佛に仕へ僧に仕ふる身を蒲團　同（同）

【考證】　蒲團の字を宛てるのは、もと蒲の莖葉をもて圓座を編みて用ゐしより起る。フトンと讀むのは唐音で、支那語が入つたのである。後、綿の生産盛になつて、なほもとの語を殘したものであらう。東武實錄寛永五年十二月九日に『御放鷹の御機嫌伺のため、使者を以つて道服ならびに獵虎蒲團を獻ず。』

藁蒲團（わらぶとん）　藁衾（わらぶすま）

【解說】　綿の代りに藁を槌にて柔かく打つたものか又は藁の莖からすぐり取つたあくたを入れた敷蒲團である。百姓家とか下僕部屋などで用ゐる。今ではよほど山家でないと見られまい。病人用の藁蒲團は四季いつでもあるが、白布を以て包んである。俳句の題としての藁蒲團は素樸な保溫の寢具として意義がある。【參照】蒲團（下

背蒲團（せなぶとん）

【解說】　背蒲團といふのは我々が著て寢るところの蒲團とは違つて、まづ胴著とかちやん／＼こなどと同じやうに防寒用の爲めに造られたもので、ある。多く年老いた女などが背中に小さな蒲團を背負つたやうに當てゝ、その蒲團の端には紐が付いてゐて、胸のあたりで結んである。追々廢れて來て餘り見かけられなくなつたがまだ地方には殘つてゐるやうである。胴

著やちやん〳〵ことは違つて何となくその地の人々に親しみを感じさせるものがある。斷髮に洋裝の女達の横行する現今ではあるが、背蒲團を著た姿も日本の國の一隅にでも殘して置きたいものである。（參照）蒲團〳〵

肩蒲團（かたぶとん）

【季題解説】寒氣を防ぐ爲めに臥床時に肩の空くのを防ぐ爲めに長さ二尺ばかり幅一尺足らずの小蒲團を用ゐることがあるが、之を肩蒲團といふ。

（參照）蒲團〳〵

腰蒲團（こしぶとん）

【季題解説】東北・北海道あたりでは、寢具の肩當蒲團と同樣長方形のものに紐をつけ腰に結ぶ、冬期耐寒の目、冷性の婦人や姙婦などが腰を暖める爲めに之を用ゐるのである。相當の年配の婦人に多く、若い人達はあまり用ゐない。頗る暖かいが容子がよくない。（參照）蒲團〳〵

菊枕（きくまくら）

【季題解説】菊の花をつんで干し、枕に入れてあてがふ時はもろ〳〵の邪氣を拂ひ、長壽を保つといふ支那の故事にならひ、又隱逸の菊花詩人陶淵明の高風をしのんで試みたものであらう。菊は秋季であるが、菊花をつんで干すため、全くかわきしなびるのをまつて枕に縫ひあげる迄は約一ヶ月半の日數を要し、十二月に入つて出來上るのが普通である。（參照）秋―菊枕〳〵

【例句】

菊枕　白妙の菊の枕をぬひあげし　久女（續ホトトギス）

ぬひあげて菊の枕のかをるなり　同（同）

ちやんちやんこ　袖無（そでなし）

【季題解説】袖無が正しい名前である。古來支那人が多く著てをつたので此の名稱が生じたものらしい。地方語かもしれない。老婦人或は幼兒が冬季に羽織又は胴著代りに用ひるのである。男子は胴著の代りに用ひることがある。昔の胴著といつたのは現今の袖無と同樣のものであつたやうに思はれる。

【例句】

ちやんちやんこ　老妻や風邪用心のちやん〳〵こ　正蜂（ホトトギス）

幼子も子守女もちやん〳〵こ　忠雄（同）

袖無　ちやん〳〵こ著て犬撫でゝをられけり　古鐘（續ホトトギス）

ちやんちやんこ　炭出しにゆくとて羽織るちやんちやんこ　麥　村（續ホトトギス）

ねんねこ

【季題解說】赤ん坊を負んぶする胴著、冬は寒さに當らぬやうに綿入の胴著で赤坊を負んぶする「坊やはいゝ子だねんねしな」など云ふ子守唄があるが、そんなところからねんねこと云つたものであらう。

【例句】ねんねこ　ねんねこを著て錢湯へ老尼かな　只　管（ホトトギス）

厚司

【季題解說】太絲で製織した生地の厚い木綿の織物で、勞働著である。

【例句】厚司　たゝかれて埃のたちし厚司かな　春水子（續ホトトギス）

著ぶくれ

【季題解說】冬は寒いから著物を澤山に重ね著して、著ぶくれるのである。

【例句】著ぶくれ
著ぶくれて舵をあづかる女房かな　方　舟（ホトトギス）
著膨れてジヤガタラ蒔の夫・婦かな　花圖司（同）
著ぶくれて遊ぶ子供も大原かな　霞　村（續ホトドギス）
從いてゐる人も著ぶくれ雀さし　草　餅（同）

重ね著

【季題解說】寒さのため、衣服を二枚以上重ねて著ることをいふ。またその衣服のことを重ね著ともいふ。【參照】著ぶくれ（キソクレ）

【例句】重ね著
重ね着に寒さもしらぬ姿かな　鬼　貫（俳諧七車）
重ね著て手首の細く出でにけり　亭　々（ホトトギス）
重ね著の痩せたる膝を合しけり　森　々（續ホトトギス）

胴著

【季題解說】上著と襦袢との間に著る短い衣服である。普通眞綿などを入れてあるが、毛皮を裏にしたものもある。防寒の爲めに著るのであることは言ふまでもない。

【例句】胴著　はゝそはの後姿や古胴著　市　夕（ホトトギス）

いつまでもいつまでも著て胴著ぬぐ　たけし（續ホトトギス）

褞袍（どてら）

【季題解説】厚く綿を入れた廣袖の衣服で、防寒の爲め著衣の上に重ねるものである。その形容甚だ平俗なものであつて、客座に出れば失禮にあたる。常住坐臥、大いに便利であるから現今に於ても階級の上下を問はず遍く愛用されてゐる。〔參照〕夜着

【例句】

褞袍　草まくら女に狎れるどてらかな　橙黄子（ホトトギス）

紙子（かみこ）

紙衣（かみこ）　素紙子（すかみこ）　白紙子（しらかみこ）　紙子賣（かみこうり）

【季題考證】

【滑稽雜談】奧州府志に曰、紙子。倭俗、白き強き紙を續ぎ、柿澁を塗り、日に乾かすこと一遍、其の色自ら赤し。雨後晴天一夜露宿するときは則ち色を發す。兩手之を揉み和らげ、衣服に製す、是を紙子と稱す。寒氣を禦ぐに便有り。中古清水坂の人、亦之を造る。是を清水紙子と云ひ、素紙子と云ふ。又紀州根來の土人、白紙柿油を塗らざる者を以て之を製す。是を白紙子と謂ふ。是れ女子の手を經ずして成る。故に、持律の僧及び南都東大寺二月堂參籠の僧徒之を着す。好事の俗士偶々之を着す。（これらの説を按ずるに、紙衣は元來持戒持律の僧尼、高德の隱士沙門の、絹布を厭ひて是を着す。又は女子の手を觸れざる故に之を用ふ。二月堂の會に着用など思ひ合す可し。然るに今俗風流の模樣を好み、野郞・遊女も之を着す。故に古來の清水紙子・根來紙子、仙臺或は白石・阿部川等、外に近年京大坂染紙子、世上に流布せり。

【年浪草】奧州白石・駿州安部川・紀州華井・攝州大坂、之を出す。之を造るに、蒟蒻の根を用ひ、之を擂りて糊と成し、以て厚紙を續ぎ、柿漆を塗り、晒し乾し、足にて踏み手にて揉み軟らげ用ふ。一夜露宿するときは則ち柿漆の臭を去る。或は柿漆を施へず作るも亦可なり。

【毛吹草】紙子賣　夕紅（元祿十年刻）仙臺の淨瑠璃きかん紙子賣　此の外紙子賣の句多し。滑稽雜談　野郞遊女も着すと云々　元祿年中には流行せしとみえたり。

【季題解説】柿澁（シブ）を塗つた紙を足で踏み手で揉み軟かくしたもので拵らへた衣服である。或は澁を用ゐないで作ることもある、之を白紙子と言つた。俳諧の衣服として武家・風流・道士などが用ゐたものであるが、普通人も着たさうである。〔參照〕紙衾

【例句】

紙子　しぶ柿のこのはの後や染紙衣　宗因

紙子

ためつけて雪見にまかる紙子哉　芭蕉　（曠野後集）
よく富士に紙子ぬれてもひとつ橋　言水　（俳諧五子稿）
音するは立居の友やさら紙子　來山　（續いま宮艸）
一夜さに猫も帋子もやけどかな　丈草　（丈草發句集）
まじはりは紙子の切を讓りけり　同　（同）
むかしせし戀の重荷や紙子夜着　其角　（五元集）
紙子着に渡る瀨もあり大井川　同　（同）
紙子着てくゝり頭巾もみそじ哉　同　（同）
縫かゝる紙子にいはん嵯峨の冬　同　（同）
關守の紙子もむ矢かたつか弓　同　（五元集拾遺）
紙子きて川へはまらば龍田かな　許六　（五老井發句集）
待暮も曙もなき紙衣かな　千代女　（千代尼發句集）
此冬や帋衣着よふとおもひけり　蕪村　（蕪村句集）
老を山へ捨し世も有に紙子哉　同　（同）
めし粒で紙子の破れふたぎけり　同　（同）
紙子着て用そこ〳〵に出にけり　同　（落日庵句集）
寶盛の紙子ハ夜のにしき哉　同　（同）
縫ふてゐる傍に紙子を待身哉　同　（同）
半壁の斜陽紙子の袖の錦哉　同　（同）
うはかゝも見知る紙子のあるじ哉　同　（同）
宿老の紙子の肩や朱陳村　同　（蕪村遺稿）
紙子着しをとゝや夜舟の隅の方　太祇　（太祇句選）
帋子着てはる〴〵來たり寺林　同　（同）
小夜更て帋子まいらす迎かな　召波　（春泥發句集）
弓の師の家中をありく帋子哉　同　（同）
ながらへば紙子を貰ふすまひ哉　同　（同）
帋衣着てふくれありくや後影　同　（同）
紙子きて嫁が手利をほゝゑみぬ　同　（同）
三線の膝になつかぬ紙衣かな　也有　（蘿葉集）
袖口に白ひ手は出ぬ紙衣かな　同　（同）
追剝の詠て通す紙衣かな　同　（同）
勘當もせぬ子はくれる紙衣哉　同　（同）
人品は肩で見分る紙衣かな　同　（同）
似合ぬともむかしいはれし紙衣かな　同　（同）
寂しさを砧にきかて紙衣かな　同　（同）
ふり袖に仕立ては見ぬ紙衣かな　同　（同）
今は世を裏にして着る紙衣哉　同　（同）
去年より似合ふてつらき紙子哉　同　（同）

浪人の歸參にすてる紙衣かな　同（[illegible]の落葉）
羽二重の京に嵯峨ある紙衣哉　蓼太（蓼太句集）
客の來て我に音ある紙子かな　同（同）
遠く遊ぶ子に曬ひたる帋子かな　几董（井華集）
紙衣着ていろは教る御僧哉　同（同）
二冬やこそぐりなれし古紙衣　白雄（白雄句集）
賤物をかゝへる紙衣ざはり哉　曉臺（曉臺句集）
我かみこ鴨の足水かゝりけり　同（同）
紙衣きたうしろながらが西行ぞ　一茶（七番日記）
金かんや南天もきる紙衣　同（同）
切つぎの美を盡したる紙衣哉　同（一茶句帖）
千雨の嫁を取もつ紙衣かな　同（同）
粘づけよ逆鳥がなく紙子哉　同（九番日記）
達者なは口ばかりなる紙衣哉　同（同）
ばせを塚先拜むなりはつ紙子　同（發句集）
燒穴の日〱にふえる紙衣かな　同（嘉永版發句集）
上京は似た人多き帋衣哉　蒼虬（蒼虬翁發句集）
水もくみ火もたく所化のかみこかな　梅室（梅室家集）
音のするたびに目のつく紙子哉　同（同）
北風の吹出したる紙衣哉　鳴南（新選）
南天にさはる音する紙衣哉　木導（類題發句集）
關寺の名さへ淋しき紙衣哉　凡尺（百番句合）
あひしりける僧の旅立に
紙子やる弟子とてもなき別哉　孤舟（北の山）
紙衣着て人に紙衣をすゝめけり　吟江（夢占）
ふりかへる額まだ若き紙衣哉　佐藍（桜の首途）
著ては見て今年も著ざる紙衣哉　貝錦（新選）
いつしかに著て似合たる紙衣哉　沾峨（吐屑庵句集）
子鼠の尿かけたる紙子かな　子規（子規全集）
匂■なや祖師は紙衣の九十年　句佛（蕊葵）
繕ひて古き紙衣を愛すかな　虛子（句集虛子）

參考　「夕霧阿波鳴渡」に、藤屋伊左衛門が紙子を著たこと見ゆ、「冬編笠も塒ばりに紙子の火打ち袋の風吹きしのぶ忍草」。

毛衣（けごろも）　裘（かはごろも）　狐裘（こきう）

季題解説　毛皮製の防寒衣であつて、犬・兎の毛皮を使用することが最も多いやうである。しかし贅沢なものになると狐・獺虎・栗鼠などの毛皮を使用する。又熊の毛皮などを使つたものなども往々に見受ける。

特に俳味あるものとしては僕・御者・炭焼き・氷切り・葦切り等寒気に觸るることの多い特異の職業の者が夫々もくもくした毛衣を着用してゐる光景である。〔→毛皮〕

例句

毛衣

一冬の爐に主たり裘　月斗（同人）
すりきれし狐裘を著たり爐の主　同（同）
猪に裂かれしあとや裘　夜臼（同）
裘裏浜千鳥やかにぬがれけり　車春（ホトトギス）
蒲洲に居流れ住みて裘　青丘（同）
毛衣やわづかに見ゆる頸の石　沙美（續ホトトギス）
行きずりのスラブ女の裘　同（同）

参考　源氏物語に、末摘花の服装を書きて『ゆるし色のわりなううはじらみたる一かさね、なごりなう黒き袿重ねて、上著には古貂の皮衣いときよらにかうばしきを著給へり。』萬葉集卷九に仙人の形を詠める歌に『とこしへに夏冬行けや皮衣扇放たぬ山に住む人。』

毛皮（けがは）

季題解説　毛のついたまゝの獣類の皮で、防寒用として毛衣に襟巻に敷物に其他種々の目的に使用せられる。最も多く見受けられる毛皮は犬・熊・兎・狐・猟虎・おつとせい・獺・栗鼠・蝦夷鼬等で普通毛皮店で売買せられる。北海道では熊の毛皮などアイヌ部落で売つてゐたり、又行商をするものを往々見受けることがある。地方々々に夫々面白い獣類の毛皮があらうと思ふ。〔参照〕毛衣（冬）

例句

毛皮

毛皮売獐の毛皮を頰被　草舵（ホトトギス）
村老や獐の毛皮を餞に　紫牛（同）
開かぬ戸をたゝいて去りぬ毛皮売　魯考（續ホトトギス）
雪天に投げ交し售る毛皮かな　梅史（同）
毛皮著て閑日月を歩きけり　幽静（同）
戸に張れる鼬の皮や沼の宿　野影（同）

毛布（まうふ）

けつと

季題解説　羊毛とか駱駝の毛で織り、色は多く白とかくだ色とか赤などであり、一部又は全部に単純な模様を織り出してあるのが普通である。その大きさも一枚もの二枚續きとかあり、子供用の小型なのもある。防寒用として寝具とか敷物とか携帯用の膝掛とかに用ひる。昔田舎ではよく赤い毛布を背から羽織つてくるまつて往来するのを見たものであるが、今は殆

い見かけない。稀に北海道あたりで見る位のものである。北海道では其を角巻きといつてゐる。

例句

毛布　十年の苦學毛の無き毛布かな　子規　（子規句集）
路々に毛布はやうも著せさりき　せん女　（ホトトギス）
一枚の毛布親しや風邪心地　草城　（同）
毛布敷いて抱へ卸せし御像かな　靜雲　（同）
船室にわが一劃の毛布かな　三昧　（同）
チヤハルのいぶせき宿の毛布かな　沙美　（續ホトトギス）
色あせしロシヤ毛布の旅寢かな　同　（同）

角巻（かくまき）

季題解説　防寒のために、北國の婦人は四角な毛布様のものを身に纏ひ、殆ど頭も埋むるほどにして歩くのである。【季題】襟巻（えりまき）

例句

角巻　角巻を著直すが見ゆ朝の道　枯柏　（北海道季題句集）

冬著（ふゆぎ）　冬衣（ふゆごろも）

季題解説　廣く解すれば冬季着用する衣服一般のことになるが、洋服については冬服といふ特殊の名稱があるから、冬著といへば冬季着用の和服とするのがよからう。布地の種類は廣汎に渉るが、袷又は綿入を普通とする。

冬服（ふゆふく）

季題解説　冬季に用ゐる防寒用の洋服を夏服に對して冬服といふ。現代生活では普通その前後に合服を著て十一月初め頃から翌年四月半頃まで冬服を著るのであるが、學生や巡査の如く夏服から直ちに冬服に變るものもある。

例句

冬服　冬服や制令を肥る良敎師　久女　（ホトトギス）
冬服に替りし女看守かな　玉藻子　（同）
冬服の身に合はぬまゝ出征す　源二郎　（續ホトトギス）

冬シャツ（ふゆシャツ）

季題解説　冬シャツもなかなか種類が多い。ちよつと數へて見ただけでも普通のメリヤスシャツの外にジャケツ・スエーター・アンダー・ジャンパー・[illegible]がある。

ジャケツは元來織絲の名で、ジャケツで織つたシャツといふ意味だが、今は其材料何たるを問はず折襟のオーバーシャツは總てジャケツと唱へられてゐる。スエーターもオーバースエーターと云はずに單にスエーターで通つてゐる。アンダーは釦無し、ジャンパーはこれも釦無しで俗に徳利と唱へられてゐる。頭のところが徳利の口に似てゐるからである。斯ういふものをがつしりと着込んでゐる若者の姿はまさしく冬の魅力である。

【例句】冬シャツ

代り著て一つスエタや老た婦　芝青（ホトトギス）

賴まれて冬シャツ編みし不出來かな　千代女（同　）

冬羽織（ふゆばおり）

袷羽織（あはせばおり）　綿入羽織（わたいればおり）

【解説】冬羽織は專ら防寒用で、普通吾々の用ゐてゐるものである。地質には色々あるが、袷・綿入である。昔は革で作つたものもあつたが現今ではその跡を絶つた。【参照】皮羽織（二九二）

皮羽織（かはばおり）

革羽織（かはばおり）

【解説】革で仕立てた羽織で、多く茶色である。鳶職などが著たものであるが今は殆ど廢れてしまつた。【参照】冬羽織（二九一）

頭巾（づきん）

御高祖頭巾（おこそづきん）　袖頭巾（そでづきん）　大黑頭巾（だいこくづきん）　角頭巾（かくづきん）　丸頭巾（まるづきん）　投頭頭巾（なげずきん）　焙烙頭巾（ほうろくづきん）

【古書校註】【滑稽雑談】昨珍本草に云、頭巾、古へは尺布を以て頭を裹み巾と爲す。後世、紗羅布葛を以て縫合す。（云々）此の說に云ふ頭巾の製售し。和俗、冬月に戴き一寒霜潮風を禦ぐ者は、別製なるべし。其の製、角頭巾・丸頭巾・投頭巾・焙烙頭巾・兎毛兎角頭巾等也。最も老若に限らず、寒を防ぐ具也。故に冬に許す。

【栞草】さまゝ頭巾・きどく頭巾、二名一物なり。圖、骨董集にみえたり。今いふ芝翫頭巾に似たり。（略）用捨箱　袖頭巾、一名御高祖頭巾といふ物、ふるき草紙には見えず。寶曆八年の寫本、愚痴拾遺物語に、一兩年以前より、をかしきづきんはやる、袖頭巾といふ。其の原は、順光といふ坊主、品川へ通ふに、高祖日蓮上人のかぶり物より思ひつきしなり。（丸頭巾は、今いふ大黑頭巾のたぐひなるべし。すみ頭巾、未だ考へず。

【解説】布帛で作り、頭部を被覆し寒氣を防ぐに用ゐる。往昔は男女を通じて一般の風俗であつたが、今日都會に於ては殆ど之を用ふるものを見ない。然し地方へ行けば今尚ほ用ゐてゐるところがある。その種類・名稱

も多いが、御高祖頭巾・大黒頭巾など最も普及して居たと思はれる。

【例句】

頭巾

米かひに雪の袋やなげ頭巾　芭蕉（泊船集）
まつ宵の頭巾や耳を明て居る　鬼貫（俳諧七車）
唐のよし野の奥の頭巾哉　素堂（俳諧五子稿）
目ばかりを氣まゝ頭巾の浮世哉　其角（五元集）
拾得の風巾にからむ玉簾　同（同）
朝嵐馬の目で行く頭巾かな　同（五元集拾遺）
頭巾とはぬき替つたり膝頭　支考（蓮二吟集）
つかれなば斷とかたます投頭巾　沾徳（俳諧五子稿）
さゞめごと頭巾にかづくみ折哉　蕪村（蕪村句集）
頭巾着て聲こもりくの初瀬法師　同（同）
みどり子の頭巾眉深きいとをしみ　同（同）
引かふて耳をあはれむ頭巾哉　同（同）
町はづれいでや頭巾は小風呂敷　同（同）
我頭巾うき世のさまに似ずもがな　同（同）
紫の一間ほのめく頭巾かな　同（新五子稿）
頭巾二つひとつは人に參らせむ　同（蓮華會集）
春やむかし頭巾の下の鼎疵　同（高德院發句會）
眇なる醫師わびしき頭巾かな　同（月並發句帖）
なまめきてざしある僧の頭巾哉　同（全集）
北に向人はまづしき頭巾哉　同（同）
晴の夜に頭巾を落すうき身哉　同（蕪村遺稿）
路ぢの闇視子除合ふ頭巾哉　同（同）
詩師へ行子の美しき頭巾かな　太祇（太祇句選）
眼までくる頭巾あぐるや幾寐覺　同（同）
頭巾脱でいたゞくやこのぬくい物　同（同）
法躰をみせて又着る頭巾かな　同（同）
頭巾をく枕や老のひが覺へ　同（同）
新宅の頭巾おかしや家の内　同（同）
目にそしむ頭巾着て寐る父が良　同（同）
弔へは今もきませる頭巾哉　召波（春泥發句集）
引かふて椽に忍ぶつきん哉　同（同）
頭巾着し稚兒に逢りうつゝの山　同（同）
快なる頭巾きかすや物わすれ　同（同）
學して寐ずや頭巾の影ぼうし　同（同）
頭巾深しとてゝ聞えぬ老が耳　同（同）
頭巾着て法師かしこし安良蔵　同（同）

頭巾

異見など投頭巾着て馬の耳　召波（春泥發句集）
爪に頭巾忘れてうき身哉　同（同）
酒臭さらかれ頭巾の行違ひ　同（同）
頭巾さへ多田の新發意の左折　同（同）
角のない人と生れて頭巾かな　也有（蘿葉集）
奴には尻まくらせて頭巾かな　同（同）
さゝやきに片耳はづす頭巾かな　同（同）
紙衣着る沙汰はきらひて頭巾哉　同（同）
淵明か岩や頭巾の干し所　同（同）
いせ剃の床にわすれる頭巾かな　同（同）
寒いとて着はせぬ鷹の頭巾哉　同（同）
らんと手を延してかぶる頭巾哉　同（同）
看經を袖から覗く頭巾かな　同（同）
知己に逢ふたび寒き頭巾かな　同（同）
ひろふたを嗅けば坊主の頭巾かな　同（同）
傾城の市にかくれて頭巾哉　蓼太（蓼太句集）
千鳥鳴らしろ月夜の頭巾哉　同（同）
紅閨の足につめたき頭巾哉　几董（井華集）
頭巾着し戯男うつる鏡かな　同（同）
おちぶれて關寺謠ふ頭巾哉　同（同）
づきん頼く切られし髪を懐に　同（同）
關越えてうれしく被く頭巾哉　同（同）
野は柳頭巾やよけん笠よけん　一茶（享和句帖）
あつさりと淺黄頭巾の姿ぞ　同（七番日記）
梟が小ばかにしたるづきん哉　同（同）
横笛や猪首に着なす蒲頭巾　同（一茶句帖）
立ざまに頭巾ではくやたばこ芥　同（新集）
野の宮や頭巾かい置く小柴垣　我黑（眞木柱）
六十の耳に垂れたり置頭巾　秀億（翅隨筆）
赤頭巾人甘んじて老いけらし　子規（子規句集）
頭巾著て人行かふや山の道　同（同）
人丸は烏帽子芭蕉は頭巾にて　同（同）
辨慶は其頭巾こそ兜なれ　同（同）
戯作者のたぐひなるべし絹頭巾　同（同）
頭巾ぬぎて鹵簿を拜しぬ御堂前　四明（懸葵）
數珠入れて何處へ忘れし頭巾かな　巽（ホトトギス）
極樂をあこがれ生ける頭巾かな　蛇錫（同）
頭巾の眼たれぞと笑へば笑ひけり　花夫人（同）

綿帽子　喰ひ入りし杉の枯葉や綿帽子　鳴庵（同）
小町寺尼がかむれる綿帽子　積翠（續ホトトギス）

雪帽子（ゆきばうし）　蓑帽子（みのばうし）

季題解説　雪中に被るもので、頭から體の上部に掛けて雪を防ぐものがある。菅・藁などで編んだものである。蓑帽子などと云つてゐる。東北地方ではフランネルで作つた御高祖頭巾のやうなものを「帽子」と云ひ雪中男の子の專用するものである。これは北海道地方には殆ど見受けられぬもので、同地方で雪中に被る帽子は「冬帽子」と云ふ。

冬帽子は色々なもので製せられるが、革製・毛皮製・毛絲製・ラシヤ製のものが多く、防寒に適する樣に頭部のみならず額部・頬部・耳朶・頤部・首筋部をも覆ふ樣にし甚だしきは目ばかりが僅かに出る樣に作製せられるのである。〔參照〕冬帽（フユ）

冬帽（ふゆぼう）　冬帽子（ふゆばうし）　防寒帽（ばうかんばう）　毛帽子（けばうし）

季題解説　一般に冬季に被る帽子であるが、現代の生活では所謂中折帽（ソフト）と誤解するのが常識である。おなじ冬被る帽子でも中折帽以外である場合は特にそれと斷るか、又は一句を讀み下してそれと判然解るやうに構成しなければならない。例へば防寒帽とか毛帽子とか稱する類である。

〔參照〕綿帽子（ワタバウシ）　雪帽子（ユキバウシ）

例句

冬帽
雪晴れて我が冬帽の蒼さかな　蛇笏（ホトトギス）
癆咳（ラウガイ）の頬美しや冬帽子　我也（同）
馬叱る馬子の眼險し冬帽子　雪之家（同）
冬帽をとつてお辭儀や天氣翁　默禪（同）
　本牧三溪園
冬帽子待春軒の緣側に　清三郎（同）
遊女や防寒帽の飾刺繍（ぬひ）　幸叢（同）
樓の主毛帽をとれば稚き　三昧（同）
住みつきしよき冬天や冬帽子　朱城（續ホトトギス）
冬帽の古りしと思ひかぶりけり　蕗石（同）

覆面（ふくめん）

季題解説　冬日外出する時など、寒い風を防ぐために絹布或は綿布で顏面を深く覆ひつゝんで、皮膚を寒風に曝らすのを防ぐものをいふ。

例句

覆面
覆面の顎のあたりで物言へり　青史（ホトトギス）

覆面へ面倒臭く話しけり　（同　）

頬被（ほほかむり）

季題解説 手拭で頬冠りすること。寒さを凌ぐ爲めである。又冬は北風が吹いて埃がひどいから、外で働く者は風よけにも埃よけにも頬冠りをする。

例句 頬被

頬かむりなか〳〵とらぬ妻の冬　蕩枝（ホトトギス）
頬被して起臥や老の冬　並棕櫚（同　）

股引（もゝひき）

モンペ　ぱつち

季題解説 衣服の下に隠れて、腰部以下兩股を各別に覆ふ筒狀の服である。メリヤス・ネル・毛絲等で作られる。防寒の爲めに用ひられる。別稱はつち、農夫工人等が黑又は紺色の粗木綿を以て作つた之と同樣のものがあり之を股引と呼ぶが、これは季語の股引とは區別さるべきである。

例句 股引

股引のたるみて破れし膝頭　仙人（ホトトギス）
冬籠や股引下せる納屋庇　賓水（同　）
股引の又破れたる膝頭　彩虹（續ホトトギス）
童の黒ずかりせるモンペかな　曲豆子（同　）

足袋（たび）

古書校註

【三才圖會】唐令に云、舃は重皮底、履は單皮底、倭名抄に云、今野人鹿皮を以て半靴と爲し、名づけて多鼻と曰ふ、宜しく此の單皮の二字を用ふべきを乎。○按ずるに、單皮は半人[illegible]に代へて之を用ふ。其の皮は、兜を以て上と爲し、[illegible]の鹿皮之に次ぎ、山馬の皮を下と爲す。但、倭の鹿皮は薄れ、[illegible]にして佳ならず。木綿足袋、勢州山田・上州高崎、[illegible]線を以て之を刺し縫ふ。之を刺足袋と名づく、其の刺線を加へざる者を袋足袋と名づく。凡そ冬は皮を用ひ、春秋は絹を用ふ。又兜羅綿・實[illegible]織等有り。昔重陽より上巳に至るまで之を着く。宮家には冬と雖も着けず。此れ[illegible]用の物なればなり。意頭巾と同じ。

【骨董集】足袋は革にて製するが定なり。（一）昔は、貴賤男女、すべて革足袋を用ひたり。文祿の頃の古畫を見るに、小模の紋ある革足袋をはきたる男子あり。紫革の足袋は女子にかぎれり。

註 （一）應仁年間前後をさす。

季題解説 その材料は昔は主に革であつたが、現在では木綿・絹・繻子・キャラコ・天鵞絨を用ふる。色彩は白と紺が最も普通的であるが、子供は色

物を用ひる。子供以外女も色物を用ひることがあるが、之は上品な趣味といへない。足袋の目的には防寒と儀禮との二つがあるが、季語としての足袋は防寒を主とし時に儀禮を兼ねるものと解するが正しい。

例句

足袋

起き出て事しげき身や足袋頭巾　其角（五元集）
いそがしや足袋賣に逢うつの山　同（同）
足袋はきて寐る夜隔ぞ女房共　嵐雪（玄峰集）
古足袋の四十に足をふみ込ぬ　同（同）
足袋はいて寢る夜ものうき夢見哉　蕪村（蕪村句集）
眞結の足袋はしたなき給仕哉　同（落日庵句集）
あしきなや眞結びに成ぬ足袋の紐　同（同）
扱あかき娘の足袋や都どり　召波（春泥發句集）
あさましや足袋に足袋はく虚勞病　同（同）
子の母よいく度結ぶ足袋の紐　同（同）
革足袋で村あるかるゝ醫師哉　同（同）
はく口からはや白足袋でなかりけり　一茶（九番日記）
赤足袋や着せておけば猫しやぶる　同（一茶句帖）
はく外によそ行足袋はなかりけり　同（九番日記）
拇の出てから足袋の長さ哉　同（同）
脫だ時大きな足袋と思ひけり　富水（新選）
律僧の紺足袋穿つ掃除かな　子規（子規句集）
あちら向き古足袋さして居る妻よ　同（同）
足袋はいて忘れしことを思ひ出しぬ　槐堂（新俳句）
足袋刺しに齒朶の大束焚かれけり　猪山（懸葵）
紺足袋に景色寂びたる都かな　禾人（ホトトギス）
病む人の足袋白々とはきにけり　普羅（同）
干足袋を飛ばせし湖の深さかな　同（同）
足袋白く衣食の道を求めけり　橙黃子（同）

渡船せしも意不果さず歸途に就、

足袋穿いて船の奈落に坐りけり　十寸穗（同）
忘れその賴まれごとや足袋をはく　秋灯（同）
足袋はくやこはぜにうつる竈の火　草郎（同）
ほの〴〵とわが足袋白き夜路かな　二三子（同）
白足袋の薄よごれして起居かな　素香（同）
足袋つゞる吾がやつれを見まじとす　楞童（同）
干足袋の籬に沈む夕日かな　月華（同）
足袋干せる龍舌蘭の葉先かな　豐明（同）
百姓の足袋の白さや野邊送り　たかし（同）

足袋かくる庇の空は雪催ひ　炭子（同）
干足袋の乾くまもなく盗られけり　曉水（續ホトトギス）
嬉しさを心にひめて足袋を穿く　泊舟（同）
まぎれざる愛の足袋を綴りけり　久枝女（同）

参考 古くは革にて作る。和名抄に「單皮履、今案、野人以二鹿皮一爲二半靴一、名曰二多鼻一、宜レ用二此單皮二字一」後、男は小櫻の紋ある革足袋、女は紫革の足袋を用ゐ、寛永頃まで行はる。木綿足袋は、長岡三齋の母に始まり、三齋が茶事に出る毎にこれをはかせたる由である。以前は紐をつけて結んだが、後にこはぜ掛けとなつた。

マスク

季題解説 外出の時、鼻口を覆うて病菌や塵埃等の侵入を豫防する具である。兵士・醫師の用ゐるものは單に白布のみで作られるが、多くは鼻口を覆ふ際に呼吸を安易ならしむるやうに鼻梁のところを秀でしめて、針金又はセルロイドなどで組み立てた上を外部を黒布で覆ふて居る、何れも紐を兩端につけて左右の耳へ引かけるやうになつて居る。冬期最も多く使用される。ことに惡性の感冒などが流行する際には、都會では街頭たると車内とを問はず、到るところこれを掛けた無表情な顔ばかりになつてしまふ。一體これは明治の時代にはなかつたもので、大正年間、惡性の感冒が大流行をして以來用ひられ初めたものである。

例句
吉田屋を出はひりの妓のマスクかな　梅史（ホトトギス）
はひりくるマスクの顔のほころびぬ　はる子（同）
マスク厚くかけゐし人の死ににけり　石鼎（同）
マスクして稽古見て居る役者かな　みの介（續ホトトギス）
マスクして一兵卒に至るまで　鬼峰（同）

マッフ

季題解説 婦人用携帶防寒具の一種である。毛皮の裏に絹をつけ、間に綿を厚く入れて圓筒形に造り、内側に左右から兩手を入れて保温とするものである。洋裝貴婦人が外出の際に裝身具として携へるものであるが、非實用的なところから近來はあまり街頭でも見かけなくなつた。ほどことなく優美な感じのものであるから、かういふものの廢れることは惜まれていゝ。

手袋（てぶくろ）

季題解説 手の冷たさを防ぐものとして愛用される。指の一本々々を暖い

手袋に差し入れるとき、はめた手のまる／＼した可笑さをながめるとき、冬の來たことをなつかしく感ずる。毛絲のがありメリヤスのがあり革のがある。女の子のは眞赤で可愛く、若い婦人のにはいろいろの工夫が施されて裝飾を兼ねてゐる。勞働者の汚れた粗つぽい二つの指のもある。そしてそれらはよく道ばたに落されてゐる。片方をなくした手袋がいつまでもポケツトの中に殘つてゐるのはわびしいものである。

例句

手袋

手袋の紅き手振りて歩きけり　草城（ホトトギス）
手袋の穴つゝきたる鶺鴒かな　若灯（同）
新藁の手袋したり渡舟守　蔦堂（同）
漂へる手袋のある運河かな　素十（同）
つなぎ行く手袋の手の母子かな　石龍（續ホトトギス）
大いなる寢手袋して寢まりけり　しづの女（同）
大いなる手袋忘れありにけり　虚子（句集　虚子）

耳袋（みみぶくろ）

季題解說　耳朶の凍傷を防ぐために耳を覆ふ袋であつて「耳掛け」といふ事もある。布製のものもあれば、兎などの毛皮でつくつたものもあり、毛絲製のものもある。又中には耳も頤も頰も一所に覆ふことの出來る樣にしてあるものもある。

例句

耳袋

耳袋はづして耳をよせ來り　房女（同人）
言傳をきゝつゝかけぬ耳袋　北鳴（ホトトギス）
頭目の面魂や耳袋　青眼子（同）
日本を知らざる子のみ耳袋　同（同）
上陸の老船長の耳袋　三更青（同）
耳袋のれる四温の机かな　九雨（同）
耳袋かけし少年夫婦かな　幸叢（續ホトトギス）
耳袋奥地送りの娼婦かな　帆影郎（同）

髭袋（ひげぶくろ）

季題解說　老人が鬚髯を愛するのと防寒の爲めの目的で、寒期髭を布袋に收め小紐で耳につるのである。或老人の話に、寒い時季に長髯を露出して外出すると、ビショビショに濡れ、胸まで濡れる故に袋にをさめて置くとのこと。

襟巻（えりまき）　首巻（くびまき）　マッフラー

季題解説 寒さを防ぐために首に巻きつけるもので、普通は幅三〇センチ、長さ一メートル位、両端に房をつけたりしてある。防寒の目的から本来毛織製のものであるが之に絹又は人絹を織交ぜて見かけを美しくしたものもある。近頃は商人其他好尚のまゝに贅沢な品も作り出されて青年の間に流行を見るに至つた。狐・獺・貂虎などの毛皮、又は毛織物、毛糸編・絹布など色々の材料を用ゐて、老幼男女により夫々の趣向を凝らしたものがある。〔三冬〕ショール

例句 襟巻

衿巻の松にかゝるや三穂の海　其角（五元集）
襟巻や眞向きの風に吹れたり　白芽（[illegible]）
虎猫の襟巻の漢桑畑より　石鼎（ホトトギス）
首巻に肉の匂ひの染りけり　鐵子（同）
通夜僧や襟巻見えでいと不興　手寒（同）
明時や藍襟巻の一抹に　はじめ（同）
行人や襟巻風に吹き流し　鳴子（同）
襟巻や寺へさゝれの借きらひ　静雲（續ホトトギス）
襟巻の狐のかほの雪雫　陽水（同）
襟巻を匂ひ出でたる眉目かな　虚子（同）

ショール　肩掛（かたかけ）

季題解説 婦人の用ゐる肩掛である、ショールと言へば近代の女性の愛用するもの、外出時に肩に軽くかけられ、長く前に垂らされて、防寒であると同時に美しい装飾品として扱はれるものを指す。夏の日傘と共に冬の女性美には欠くべからざるものである。毛糸編・毛織物・絹布など色々の材料を用ゐる、色々のデザインをしてある。〔三冬〕襟巻

例句 ショール

蒸汽著くショールの色の貧しきも　夢筆（ホトトギス）
肩かけをかけてやりつゝ門送り　くに女（同）
少女の訪ひくる肩掛はづしけり　言子（同）
身にまとふ黒きショールも古りにけり　久女（續ホトトギス）

参考 明治時代には男子も用ゐて、防寒防風の用に供した。近時女子の専用となる。

コート　東コート

季題解説 男子の外套やマントと同様に、婦人の防寒具として外出の時着

られるものである。此の頃は美しい色彩や模様を織り出したものが作られ戸外の婦人の服装として必要なものとなつた。襟や袂の形にも色々の流行を見せて、その上に掛けられるショールと共に、冬の婦人姿を美しく描き出す。

例句

コート

呼びとめしコート姿のなつかしく　菊　子（續ホトトギス）
ちら／＼と雪降りそめしコートかな　同　（同　）
掛茶屋にコートあづけて詣でけり　綱　女（山　茶　花）

外套（ぐわいたう）

季題解説　和服の上に着る男の防寒具にはマントやトンビがあり、洋服の上に用ひられるのには外套がある。近頃は多くオーバーと稱へられてゐる。厚く温い地で作られ大きいボタンがつけられてある。寒い風を防ぐには襟を立てたり、そのうしろに付いてゐる帽をかぶつたりする。さうした姿が街燈の下を闇へ消えてゆくなどは冬の夜らしい情景である。近頃は婦人の洋裝の人も多くなつたので婦人用外套も勿論ある、男子用とは他少恰好も異ふであらうが、地色がもつと淡色とか、はでな縞とか、霜降などで作られてゐる。

例句

外套

外套を引つ被り出る月下かな　俳維摩（ホトトギス）
滿洲を著て歩きたる外套かな　たけし（同　）
外套に月日流れ（オホ）し老吏かな　白　貧（同　）
みさゝぎを衞る祖父の外套かな　青　畝（同　）
外套をかけていたはる膝がしら　ゐの吉（同　）
外套に月夜の雪の少しかな　凍　子（同　）
外套や闇の尾曳いて灯に出でぬ　爽　雨（同　）
鯉釣や捨てもやらざる古外套　泉　水（同　）
さすらひに馴れにし友の外套かな　北　湖（續ホトトギス）
病弱の身を大切や冬マント　めなしかづら（同　）

被布（ひふ）

季題解説　羽織に似てオクミが深く、衿はあるけれども短く、前をかき合せ組紐又は打紐でとめるやうになつてゐる。地質は紬・絹布など好みに隨つて選ふ。以前は少女・娘達か着用したものだが近時は未亡人とか僧侶・花茶道の宗匠などが着てゐるのを見受ける。

例句

被布

被布姿ほつそりとして病む妹　百　合（續ホトトギス）

被布を著て八丸茶屋にかけてをり　鄰　躅（昭和八）

春支度（はるじたく）

【季題解説】来る新春のためにさまざまの支度をすることである。その中でも子供達の正月著を、迫る年の歩みに追はれながら、仕立替へたり新調して居る仕事などは特に春支度らしい感じがする。その外、家の造作をしたり繕ひをしたり、石垣や溝を浄めたり、屏風や襖を張り替へ畳を替へるなどの、新年を迎へる爲めの用意はすべてこの季題に含まれてゐる。

【例句】
春支度
ハンハスも中より春の支度かな　蘭花（續ホトトギス）

春仕込（はるしこみ）

【季題解説】春仕入　商人が春の賣出しに備ふるために商品を仕入れて用意するを言ふ。商人の中でも呉服商とか洋品商とかは春の賣出しが年末の賣出しと共に一年中で一番華かなものである。その華かな商品の仕入れであるから大きな收益を期待しつゝ春仕込をするのである。わざ〳〵産地へ出向いて「春物」と稱して仕入れる方法もあるし、産地から賣込みに來たものを仕込む方法もある

春着縫ふ（はるぎぬふ）

【季題解説】年の瀬の追々迫つてくる家庭で、母や姉などが正月に著せる著物を縫つてゐる事である。さうした著物と言へば當然新年の遊びや訪問や旅行などに、子供や婦人が美しく著飾る紋付・振袖などを想像する。夜おそくまで、毎夜灯を低く下げて、美しい反物をひろげながら、傍らに寝てゐる娘の嬉しい正月のために、針を急いでゐる情景も思ひ浮べることが出來る。

【例句】
春着縫ふ [illegible]
蓄音きうなど伏せ縫ふ春著かな　久女（ホトトギス）
春著裁つ鋏の小猿よごれ顔　よりに（同）
歌がるた口ずさみつゝ春著縫ふ　貞子（同）
縫うてゐる春著の上に灯りけり　志保女（續ホトトギス）
濯ぐむことにかりなり春衣裁つ　由里子（同）

木葉衣（このはごろも）

【古書校註】
【[illegible]】著物にも衣類にも共に三句、冬なり。

【年浪草】 南越志に曰、獠人、冬鵝毛を編み、木の葉を雜へて、衣と爲す。（大平廣記、女仙の部に曰、秦の時、婦人草葉を衣ると、云々。薜蘿衣と云ふも、木葉衣の類乎

註 年浪草の擧ぐるものは、季題となるべきものではなく、季題となる木葉衣は、落葉衣といふと同樣のものたることは勿論であらう

例句

木の葉衣　故郷へも香らぬ木の葉衣哉　宗因（梅翁宗因發句集）

參考 謠曲雨月に、住吉の浦の海人の服裝に、『木の葉衣の袖の上』とある。

鼬罠

季題解説 鼬は春さき、秋、冬などに人家に近いところでも見受けるものであるが、冬になつてよく雞を取つたりする。それで罠をかけて捕るのである。

直徑二寸位、長さ八・九寸位、一方に節のある竹筒の中に、針金でバネをしかけ、竹筒の中に肉片などを著け、鼬がくはへて引くとバネがはねて首をしめる仕掛になつてをる。罠が紛失せぬやうに細紐でほとりの立木・杭などに結びつけて置く、十一・十二月頃が最もよい。

例句

鼬罠　沼の水かるゝばかりや鼬罠　北方（續ホトトギス）

小山田や畦に置きたる鼬罠　愛星（同）

狐罠

季題解説 夜中、狐が出て畑の作物を荒らすから罠をかけて狐を捕獲するのである。〔參照〕動物　狐

例句

狐罠　狐罠かけて冠を正しけり　盆城（ホトトギス）

鷹狩

放鷹　鷹野　鷹獵　列卒　狩杖　鷹の鈴　鷹槊　鷹鞴　鷹搖　追鳥狩　竿鷹　鴨鷹　窮れ鷹　偸立鳥　草取る鷹　呼聲　教草　入草　落草　力草　鷹犬

古書校註 【山之井】 霜・雪・あられのひるよなく、野をわけ原にまどひて、田畠あらす鷹人のさま、ひねもすにかりくらして、鴈とりじゝなるせこどもの氣色、鷹犬の物なれて穴ほりねほり、かぎまはる心ばえ、又、名にあふ鷹の鈴鴨にあはせ、しらふの鷹の黑鴨とれるかり場のていなど、都て、此の道

鷹をなぶつ一種さまの道具也。當時は櫻を其の備用ふる也。
鷹枝、狩杖。三百首抄に云、狩杖には櫻の木を用ふる物也。枝の尺は其の人々のたけに切るもの也とぞ。○百首抄に云、狩杖は鷹匠の笠の端とほりに切る。犬飼は日の通りにくらべて切ると也、
餌袋。鷹書に曰、韘。餌籠・餌袋（略）・洗餌・水餌。（略）○三百首抄に云、水餌とは洗餌の事也。差餌とは、架に餌をくゝり付けて飼ふを云ふ也。○百首抄に云、打飼とは犬の食物也。打飼袋とは、其の打飼を入るゝ袋也。犬に、野山にて飯に糠をまぜて餅のごとくして、鳥を立てたる時飼ふ也。
狩衣。御傘に曰、狩衣は根本職掌の裝束にはあらず。公家衆の狩場、或は御旅出立、或は假初なる所へ、御心易くめす物なれば、（四）假初の心あれ共、かりごろも・かり衣は、狩場の狩の字也。根本狩場へ著くるやうにしたてたる着物なる故也。○師說に云、無名に狩と計りは冬也。狩衣も冬に限るべからざる也。私に云、冬に限らずと雖も、鷹飼に因りて記する物多し。用・不用は斟酌あるべき也。
呼聲（鳥叫）（略）基房公の鷹連歌抄に云、をごゑとは呼聲と書けり。鷹を呼ぶ聲也 ○師說に云、鳥さけびとは、鳥たてば鳥よ〳〵と二度よばる也。やり聲とは、犬飼の、犬の行跡をみば、鳥の道を知りて聲を長くはう〳〵と云ふ也。是をやり聲と云ふ也。呼聲は只鷹をよぶ聲なり、混ずべからず。
鳥の落草・力草。百首抄に云、草とるとは、鳥を草に追ひ落して、草のかしらを取りまはるを、草とると申す也。又、草のうへにて、たやすく鷹をとるをも、草とると申す也。（略）○按ずるに、落草とは、鷹の鳥を追ひ落す所の草也。又力草と云ふも是にや。鷹、鳥を片足にて摑み居て、此の鳥逃げんとする時、かたあしにて落草を取り、力草にする也。
鳥の教草。三百首抄に云、教草とは、鳥はそこそこへ落ちたると云ふ事也。○基房公の鷹連歌抄に云、をしへ草とは、草取ると云ふ同じ事、草を取りて教ふる也。然れば、鷹、鳥のある草を心得て戀ふる也。○鷹書に、をしへ草とは、鷹、落草の上を羽を引きて鳥の有無を知る也。○藻鹽草に云、をしへ草と云ふは、鳥ある所ををしゆる也。
鷹犬。鷹經に云、獫、加利伊奴、或は太加伊奴。
【年浪草】 偸退鳥。ぬすみたつ也。鷹狩におそれて、草などにかくれたる鳥の、ひそかにたつをいふ。又、ぬきたつ鳥、鷹にあひて草のかげをとぶ也。

鳥立(トダチ)を慕ふ。鳥の立つをしたひて狩人の行くをいふ。歌に、御狩野はとだちやちか／＼なりぬらんたなれの鷹の手にもたまらぬ。
列卒縄(セコナハ)。藻塩草に曰「鹿狩に縄を引きて鹿を追出す事といへり、鷹狩にも、追鳥狩などには列卒入る事勿論也。其の外もあるべし。
鷹犬。犬に三品有り。一は田犬と曰ひ、二は吠犬と曰ひ、三は食犬と曰ふ。田犬、鷹犬也。
狩杖。田犬をひくものゝ持つ杖をいふ。犬をいましむる杖也。

【栞草】 本朝にて、鷹を肘にするは、百済の酒の公より始まれり。仁徳帝の四十三年秋九月、阿弭古、異鳥を献ず。百済の酒の公ならしてこれを養はしむ。酒の公韋緡を以て其の足につけ、小鈴を以て其の尾に着けて、腕の上に居ゑ、これを献ず。始めて鷹甘部を定む。又酒の公鷹を居ゑて、帝の狩に奉従ひて以て雉を獲る。其の後、兵部省に鷹司あり。後冷泉院、帝の時、出羽の國司源斉頼、これを飼ひ、これを放つ。最も神妙を得たりとぞ。

【滑稽雑談】 追鳥狩　傳成が款冬賦の序に云、予會て禽を逐ひて北山に登る。時に中冬の月（略）師説に云、逐鳥狩の事は、鷹狩の事にあらず。鷹犬をも引連れず、只、羅網、或は罠、或は弶、或は黐竿、或は簇、或は縄等の畋獵の具を設けて、人歩を催して草野及び山谷に徘徊し、遊行して鳥を驚かし、或は罠餌を調へて遊獵する事也。弓鐵炮及び吹筒などにて獵り取るを、逐鳥狩と申す也。尤も、冬月に至つて深雪の頃は獲多ければ、専ら興行する故に、冬の季とす。又一説、追鳥狩といへるも、鷹の狩の事也といへり。傳成が賦の序をみれば、中華も仲冬の頃、禽を逐ふとみえたり。追鳥狩は連歌にも用ひず、和歌にも詠ずる物にあらず、慥かなる説未だ考へず。

【年浪草】 同　追鳥狩は雉狩なり。列卒を以て、雉を追出してとるを云ふ也。又、田野に [illegible] 諸鳥の追鳥狩も有るべし。

註 [illegible]

[illegible]して、酉より子に至る、これを夜居と云ふ」とある。（四）中略して續けてある。

季題解説 鷹を放つて飛鳥を捕へさすことをいふのである。放鷹・鷹野などといふこともある。
仁徳帝の頃から始まり、爾来王侯貴人の遊びとして盛に行はれ、殊に徳川時代に於て其の様に [illegible]、諸侯参覲交代の節、鷹狩に [illegible] り、幕府の [illegible] と称して、東京近郊に河島・小松川・駒場野を選ばれて行はれるやうになつて鷹狩は [illegible] れたのである。明治に入り [illegible] 行はれるやうにな [illegible] 廃れた。（鷹狩参照）

内地では現今では行事として狩猟することはない、然し朝鮮では現にある。朝鮮總督府令狩猟規則第一條に「野生の鳥獸は左に掲ぐるものを除くの外銃器・網・鷹鶻・犬・又は鷹を使用して之を捕獲することを得ず。(以下略す)」とある。狩猟の目的物は雉であつて其の捕獲期間は「十一月一日より翌年二月末日迄」とある。鷹を以て鳥獸を捕獲するものは甲種免狀の下附を受くるを要し、免許手数料として金七圓也を納附せざるべからずとあり、銃器を使用するものは乙種免許を要し手数料は十圓とある。内地は納税額により三階級あるが朝鮮は一階級のみである。

序でに、鷹は野生のものを捕獲し数年間飼育訓練するのである。其の尾に太い白毛(俗稱七面鳥、和名のかんの毛)三・四本をつけて鈴を結びつける。鷹を手に据ゑて山に行き高いところを通る。勢子十人位で雉を狩立てるのである。

鷹狩は昔は武門の行事として重きを爲して居つたが、近來は廢れた。解說は主として古書に讓る。

列卒　鷹狩や鹿狩などの場合、鳥獸を狩立つる卒を列卒といふのである。

狩杖　鷹狩に用ふる杖をいふのである。

鷹の鈴　鷹につける鈴である。

鷹架　鷹をとまらせる木のことである。

鷹韝　鷹を据ゆるのに臂へかける布をいふのである。大鷹・荒鷹に限つて用ふるのである。紙よりの中に藥しべを入れたものである。

鷹掻　鷹なぶりとは鞭のやうなもので、夜、鷹をなぶつて寢させぬための道具である。

追鳥狩　列卒を以て雉子を追出して鷹にそれをとらしめるのである。又田野に群居る諸鳥を捕ふる場合にも追鳥狩といふ。

竿鷹　竿を使つて鷹に鳥を捕へさせる法をいふのである。

鴨鷹　鴨を捕る鷹をいふ。

遁れ鷹　鷹狩で鷹を合はせた時、鳥を見失つてあらぬ方へ飛びそれた鷹のことをいふ。

倫立鳥　鷹狩におそれて草などにかくれる鳥のひそかにたつのをいふ。

草取る鷹　鷹詞の一つで、鷹が鳥を草に追ひ落して捕ることをいふ。

教草　鷹詞の一つであつて、鳥のあるところを教へるのをいふのである。

入草　鷹詞の一つであつて、草の中へ鳥を追ひ入れるのをいふのである。

落草　鷹詞の一つで、鷹が鳥を追ひ落した草をいふのである。

力草　鷹詞の一つであつて、鷹が鳥を捕へ片足で草をつかんで飛立たせぬことをいふのである。〔參照〕鷹匠(タカジヤウ)　動物(鷹)　秋　小鷹狩(コタカガリ)

〔例句〕

鷹狩　かや葺や雀もこふをちから草　言水(俳諧五子稿)

　　　　ほ井衣翁四十九日忌

である。

鷹の菜　柳の木に居る蟲を取つて、水に搗いて食に和して食はすと鷹によくきくといふ。［参照］鷹狩 動物 鷹

例句

鷹匠　とまり木に飼ひ馴らされし鷹遊ぶ　正蜂（昭和八）

鳥柴（としば）　鳥柴（とりしば）

古書校註

【滑稽雑談】　鳥柴　河海抄に云、鳥を付くる枝の事。柴の高さ七尺五寸、普通の柏木より葉狭く闊くして、裏表に毛生ひたり。是を鳥付柴と云ふなり。年内は立枝をへだてゝ雄を左に上げて付け、雌を下げて付くる也。年明けては雌を左に上げて付く。春は雌を賞する故也。付けやう口傳有り。或は柴を用ふといへども、春は梅、秋は紅葉に付くる事常の事也。大臣大饗の時は之を用ふ。又初雪の朝、雉を人に送る時の作法也。又鷹野より人の元へ遣はすには、三四尺の柴の枝に刀目を付けずして本を折りはしらかして付くる也。一雙を付けやう慥に知る人なし（参兼則說）。（略）○按するに、鳥柴は春秋にわたるなれば、冬と治定しがたし。

三百首、暮れて行く鳥柴の雉をあら玉の春や櫻の枝につけましていか。

【倭訓栞】　としば。鳥柴と書けり。鷹の取りたる鳥をつくる木也。故實多しといへり。其の木は、長五尺にきりて、本は柴につけしが、後、春・秋・冬にてかはる。大かたは梅・櫻・松・楓・椨（一）・伏・薄などを用ゐたり。（略）又、鷹の鳴をつくるに、萩ばかりは弱き故に、柿の枝を添ふる事あり。定家卿　故郷の柿のもとつ葉わが鷹の萩にそへてや鳴をつくらん。又、とりしばともいふ。仲正集に、つれもなき人の心を鳥柴に金の雉子とりゐてしがな。

【同書増補】　とりしば。鳥柴、本草、山胡椒、今たんばの木と云ふ。（略）言塵集、鳥柴は葉のあつくて、冬枯れも葉を落さゞる也。黄葉なり。（略）武家調味故實式の鳥柴と云ふは、たもむの木なり。是は山にあり。但し木は何にてもあれ、鳥付けたる木はとしばとよぶ。

註 ○右に據れば、もと専ら鳥柴といふ木の枝に鷹の捕つた鳥を付け、又それが為めその木が鳥柴といふ名を得るにも至つたものらしく、後には、特に冬以外には、派手な木の枝に付ける樣になつたらしい。又木の名の方は專ら「とりしば」と云ひ、鷹の鳥を付けてのものは専ら「としば」と云つたものらしく見える。いづれにしても、鷹の鳥から起り、鷹の鳥を付ける技柴であるから、季の定めは各たるべきものであらう（一）萩の誤か。

千鳥打（ちどりうち）

季題解説　むかし冬季、かすみ網・投網などを使用して千鳥を捕獲し、食用又は藥用に供したが今は行はれない。［参照］動物—千鳥

流黐（ながしもち）　黐縄（もちなは）

【季題解説】鳥黐を木の枝に塗つたり或は縄に塗りつけたりして水面に張り流し、水鳥を捕へるのださうである。はつきりしたことはわからない。

網代（あじろ）　網代の床（あじろのとこ）　網代木（あじろぎ）　網代杙（あじろくひ）　網代守（あじろもり）

【古書校註】【滑稽雑談】藻塩草に曰、網代冬也　しかれども、九月九日の前に打ち初めて、宇治の網代人供御に奉るにや。又、宇治に限らず、田上にも讀める歟。（○）又云、網代人とは、宇治に網代と云ふ所有り。そこを住家にして網代を司る者を、網代守・網代人と云ふなり（略）○師説に云、網代とは漁獵の具にはあらず、只漁獵の所也　たとへば苗代と云ふに同じ。此の所にて大内へ貢る氷魚を取る代也。鷹場に鶴の居る所を鶴の代と云ふ心也。按ずるに、代は領の心にや。拾遺、月影の田上川に清ければあじろの氷魚のよるも見えけり　元輔。

【年浪草】枝折萩に曰、網代と書く。あみのかはり也。魚を取るしがらみ也。あじろ打は秋也。宇治、あふみの田上などに、氷魚とらん為にうつ物也。あじろの歌を、日をへてなどよむも、氷魚の事也。

【季題解説】湖とか川筋とか人海のほとりなどで見かける漁獵構への一種で、木の枝村に竹又は小柴を柵として立てつらね、之に魚を誘導するので、ほどを見つて一舉に魚を捕る仕組である。素朴なものもあり、器用に出來てゐるのもある。我が國の古い漁法である。この網代を守るものを網代守と言ひ、山城國宇治附近の網代は、よく人の知るところである。【参照】秋 網代打

【例句】

網代

句	作者	出典
火の影や人にて凄き網代守	言水	（俳諧五子稿）
火をつゝむ藻の明りやあじろ守	浪化	（浪化上人發句集）
しつかさを數珠も思はず網代守	丈草	（丈草發句集）
細ひとつあじろの夜のきほひ哉	其角	（五元集）
こゝに飲む座敷しつらへ網代守	同	（同）
網代守大根盜をとがめけり	同	（五元集拾遺）
網代守宇治の鵜かさとなりにけり	許六	（五老井發句集）
初雪を背中に負ふや網代守	同	（同）
惠心寺に奉公はせいで網代守	支考	（蓮二吟集）
鳥鳴て水音くるゝあじろ哉	蕪村	（新五子稿）
鬮に飲とられたる網代かな	太祇	（太祇句選）
魚ぬすむ狐のぞくや網代守	同	（同）

網代

賴政の忌日もしらで網代守　也有（蘿葉集）
世わたりのはづれ〳〵に網代哉　蓼太（蓼太句集）
網代木のそろはぬかげを月夜かな　白雄（白雄句集）
橋の鳥見ゆる網代のかゞりかな　曉臺（曉臺句集）
宇治に妻ありあじろにかゝる思ひ哉　士朗（枇杷園句集）
親のおやの打し杭也あじろ小屋　一茶（寛政句帖）
網代守天窓でかぢをとりにけり　同（七番日記）
網代守霙にとえへん〳〵哉　同（同）
三日月と肩をならべて網代守　同（發句集）
網代守夕ぐれは子もある男　蒼虬（蒼虬翁句集）
とかくして旭にあへり網代守　同（同）
餌搗た夜から来ぬなり網代守　同（同）
網代守うしろの家へもどりけり　同（同）
水は行月は落るにあじろ守　梅室（梅室家集）
しづかさに犬もおどさず網代守　同（同）
膝もとに月こそ出づれ網代守　孜童（類題發句集）
御鷹野にすくんで居たり網代守　李由（韻塞）
橋行く灯ある夜なき夜や網代守　梧月（ホトトギス）
杭頭ひらゞ歩みに網代守　鬼默（同）
顔あげて醉うて居るなり網代守　蘇甫（續ホトトギス）
宇治山に残る紅葉や網代守　盧子（句集盧子）

【參考】宇治川にて冬季氷魚を漁するもの最著はる。萬葉集「宇治川は淀瀬無からし網代人船よばふ聲をちこち聞ゆ。」延喜内膳式に「山城國近江國氷魚網代各一所、其氷魚始二九月一迄二十二月三十日一貢レ之。」

柴漬（ふしづけ）

【古書校註】

【日次紀事】（一）此の月、伏見の里人、柴漬（フシヅケ）を以て雜喉魚（ザコ）を取る。凡そ柴漬の法、生柴枝葉を連ねて之を代り、三四尺餘の河水淺き處に之を積み、高く水面を出づること四五尺を經過せしむ。寒氣嚴しければ、則ち止水亦凝ると雖も、玆に於て諸魚薪下に聚る。玆に於て、網を柴の四方に張り、其の柴を撤すれば、魚驚き走つて網に入る。又提網（サデ）を以て之を執る。立春以後、水漸く暖く、故に諸魚聚らず。玆に於て止む。

【滑稽雜談】藻鹽草に云、ふしづけとは、水に柴を切り付けて、其のあたまりに魚を集めて取る也。柴ならで、たゞ木の枝をも水に漬くる也。罧、又滲の字も同じ、日本紀に、柴と書きて、ふしとよめり、云々。〇和俗、常に柴漬の字を用ふ。

たつべ」、雑魚を捕へるのを「雑魚たつべ」と言つてゐる。細い割竹で編んで籠のやうに作り、一つの魚の入口が紡錘形に内部へ編み返しになつてゐるから一度入つた魚は出ることが出來ない。その中に餌を入れて魚を誘ひ入れるのである。沈みたる時は口を開き、引上げる時は口を閉づる」といふやうな構造のものが、昔は用ゐられたらしいが、今日ではさう云ふものは全く使はれてゐない。その形狀に紡錘形のものと圓筒形のものとがあつて、雑魚たつべには兩種類あるが鯉たつべには圓筒形のもの一種である。船一艘に三十個乃至五十個を積み込んで日沒前に漕出して漁場に行き、手繩に石を括つて錘りとし水底に沈めて置き、翌拂曉引揚げるのである。晝間、陸上から岸に竹筌を沈めて漁をするのもある。從來琵琶湖では紡錘形のもののみ使はれてゐたのが、大正五年から霞ヶ浦の漁法に倣つて圓筒形のものを使ふやうになつたのだといふ。霞ヶ浦で使用する竹筌にも紡錘形のものと圓筒形のものとがあるが、多少構造を異にしてゐる。そして「たつべ」とは云はず、紡錘形のものを「ずうけ」と云ひ圓筒形のものを「たる」と云つてゐる。又「こしど」と云ふ別種のものもある。霞ヶ浦では海老・鮒・鰻などが捕れる。琵琶湖には水産組合と云ふやうなものが出來てゐて、漁期は四月から十一月までと極まつてゐるから冬期には見られない。霞ヶ浦では四季を通じて漁に用ふると云ふ。参照　筌

例句

竹筌

渡舟守竹筌を上げて居たりけり　獅子浪（ホトトギス）
龜入りし竹筌抱へて戻りけり　如月（同）
舟の雪すてゝ竹筌をあげにけり　夕洋子（同）
稲舟と漕ぎわかれしが竹筌あぐ　同（續ホトトギス）
見えてゐる竹筌の上を漕ぎにけり　凡鬼子（同）
吹きあれて今日は揚げざる竹筌かな　七里峡（同）

筌（うへ）

古書校註

【滑稽雑談】詩經（邶風）に曰、我が笱を發くこと毋れ。註に、笱は竹を以て器と爲し、而して梁の空きたるところを承け、以て魚を取る者也。（略）（仙覺萬葉抄に云、うへとは、竹にて編みたる簀を、口廣く末を結ひすべて、山川の瀬にふせて、うへの左右をふさぎて、うへの中より水を流して魚の流れ入りたるを取るため也。

【三才圖會】笱は、竹を曲げて梁の空きたるところを承け、以て魚を取る者なり。（略）（按ずるに、今の魚梁は、多く竹簀を以て左右に立て、上濶く下狹くして空口なり。別に簿を曲げて籠の如くにして底無く、繩を編みて底と爲し、魚梁の空口を承くる者、即ち笱也。魚流れに隨つて入る。又

簀を以て扉の如くし、而して魚入るときは即ち順にして障り無く、出づるときは則ち逆にして出で去（俗に云ふ、口開流）ることを得ず●此れ諸の新製なる者乎。〔三冊〕竹筌ヘタツ　夏　簗ヤナ

註　○滑稽雑談は十月の部に挙げてある。年浪草は十月の部に「竹筍」として挙げて、簀と同じ賛仕や、和漢三才圖會の七謂の文などを引いてゐるが、これは全然混同である。然るに、筌（筍）は簗の中央の空きたる所に設けるもので、簗は冬季の季題でないから、筌を冬の季題とするは誤で、簗と同じく夏の季題とすべきものであらう。

箕輪田の鯉取

古書校註

【滑稽雑談】寒の鯉取。（略）寒中氷にとぢられ困死する者侍る。殊に常州箕和田にて寒中に一日之を捕る。（略）常州にて取る物江武へ多く出で、是を賞買ふといへり。

【俳諧輪】常陸國の江也。寒中鯉を多く取つて江戸に出し、市に販ぐ。貢物にはあらず。

【年浪草】此の事、古式に無し。偶ゝ和及が環學に見えたり。箕和田は常陸國に在り。和漢三才圖會に曰、鯉は城州淀川の者最も良し。武州淺草川・常州箕和田之に次ぐと云々。○本朝食鑑に曰、箕和田の鯉は、流れ濁らずして淸からず、江近からず、湖に通ず。魚稍ゝ肥えて、脂も亦稍ゝ多しと云々。里人、寒中に之を捕る。鯉長大なる者三四尺。水中に在れば則ち勢強く力健かなり。間ゝ漁人の之を懐く者あり。

註　○三書共十二月の部にある。

季題解説　「箕輪田の里人、寒中に鯉を捕獲することゝ、同所の江湖に鯉多く、長さ大いなるは三四尺、漁人水中に入り、巧にこれを抱き、必ず魚をしてこれを識らざらしめ、背腹を撫して魚の行くにまかせ、終に岸に近づけば急遽これを陸上に抛つ。然らざれば網を用ひて捕獲す。」従来の歳時記には斯く解説してある。（筆者は此冬、實地見分の爲に行つてみたが）箕輪田と云ふのは維新前の舊稱で、今は茨城縣筑波郡十和村字箕輪となつてゐる。水海道と十和村との境に小貝川と云ふ川が流れてゐる。その川に一つの橋がかゝつてゐて橋の袂の一部落が箕輪である。筑波山が近々と川の向ふに見えてゐる。鯉を取るのはこの小貝川である。鯉を取ると云ふ、その里人を訪ねて聞いて見るに、この小貝川には鯉が多く昔から鯉を取つて居るが、現今では多くは釣るのであつて、其他網で取るとか又は前夜仕掛籠を沈して置いて翌朝揚げに行くと云ふやうなことはするが、寒中水中に入つて鯉を抱き取ると云ふやうなことは誰もしないと云ふことである。今は亡くなつたお祖父さんが鯉取が上手だつたと云ふ息子さんを訪ねて聞いてみたが、お祖父さんがそんなことをして鯉を捕るところを見たことはないと言つてゐた。昭和七年の夏、潜水器を使つて鯉取をやつた人があつたが、そ

の時は水中にあつて捕へた鯉のあぎとに縄を通して腰に括り、一同に二三尾づゝ捕へ二十四五尾捕へたといふことである。この鯉取をやつた人は請負師で橋の工事に使ふ潛水器を利用したものであるといふ。これで見ると、寒中水中に入つて鯉を抱き捕へるといふ眞和田の鯉取は今日では全く廢つて居ることが分る。【参照】動物―寒鯉

例句　眞和田の鯉取

眞和田の鯉も押合ふ師走かな　一蜓　（昭和二年[illegible]）

白魚初網（しらうをはつあみ）

季題解説　十二月初旬、白魚網をおろすをいふ。【参照】春―白魚汲

鰤網（ぶりあみ）

季題解説　鰤漁の網である。網目四五寸位の大敷網を海上に張廻し、その大きいものは一里餘に達し、小さいものでも四五町に及ぶ。漁場によりその方法は違ふけれど、常に見張舟を置きその指圖に從ひ舟を操り漁獲する。【参照】動物―鰤

例句　鰤網

鰤網を干すに眼こはし濱烏　石鼎　（ホトトギス）
鰤網やかたむきまはる定期船　踏青　（同）
處々と干す鰤網や漁期終ふ　冬魚　（同）
鰤網や潮のながれ路むらさきに　里石　（續ホトトギス）
　濟州久平濱
鰤網の干しある中のペルリの碑　知廸　（同）
鰤船や汲み出す淦のまくれなゐ　磯香　（同）

寒釣（かんづり）

季題解説　寒中の魚釣りの總稱である。一體、沼湖河海みな魚は寒い時は流れの少い、深處の、日當りのよいところへ集つてゐる、それを覘つて釣るのであつて、寒鮒・寒鯉・寒鰡・寒鯊などは普通に行はれてゐる寒釣りの魚である。枯蘆の間の水の澱んだところなどで釣つてゐるのはそれである。

泥鰌掘る（どぢやうほる）

季題解説　冬になると泥鰌は田や沼や小川や水溜などの泥深く潜むのである、殊に冬期は水も涸れてゐるので、容易に泥を掘り返して捕へることが出來るのである。

例句

泥鰌掘る

鰌掘つて行く後掃く蓑の尻　小蕾（ホトトギス）
泥鰌掘焚火を焚いて憩ひをり　迷子（■ホトトギス）
上げ泥にうごめくものや鰌掘　一路（同）
繩帯の食ひ入る腰や泥鰌掘　無患子（同）

寒乗（かんのり）

季題解説　漁村の一行事で、漁家の少年、寒中時刻を定めて海上を漕ぎ巡り、漁船操縦の練習をするのである。

例句

寒乗

寒乗の子等の鉢巻たのもしき　耿陽（續ホトトギス）
寒乗の舟の中なる焚火かな　同（同）

綿打（わたうち）

季題解説　古来我邦で普く用ひられた方法で、先づ棉果から纖維を抜き、絲を以て綿打弓といふ方を釣弓に釣り、弓の弦を綿に接して平に持ち、弦を槌で打つ時は其震動によつて綿纖維は弦に纏はり、なほよく打てば綿は弦から離れる。かくすること數十回に及べば、種子と塵埃とを除き去ることが出來る。之を綿打と云ふのである。

現今では大規模に、始め繭を綿繰機にかけて纖維と子粒とを分離させ、開綿機によつて不純物を除いて綿の團結を去り、次に打綿機にかけて綿花を柔かに打ち開いて、更に之を梳綿機に掛けて打ち解し、その纖維を適當の大さに並列せしめるのである。　參照　綿（ワタ）　秋―綿取（ワタトリ）

寒肥（かんごえ）

寒ごやし

季題解説　冬期露地の草木に肥料を施すことをいふのである。寒肥には糠・魚粕・豆粕・油滓・堆肥などいふやうな遲く效を現すものを主に用ゐる。これらは樹木の根の周圍を掘つて埋め込むので、樹木が春活動を初める頃適度に腐敗して效くやうになり、又根の周圍を掘るために切斷された古根の先から春鬚根が簇生して、樹木の勢がきうしないものよりもはるかに活氣づくといふ別なよい作用もある。

例句

寒肥

寒肥や李がつけし狂ひ花　一果（同人）
寒肥の穴二十程掘りにけり　鐵刀木（同）
寒肥や隣人病んで庭廣し　青畝（ホトトギス）
寒肥をしらはしてゐる芽をかな　[illegible]（同）
寒肥の樹の大きな古木かな　富士子（續ホトトギス）

寒肥　寒肥に來ても[illegible]をいれにけり　今更（[illegible]ホトトギス）

寒肥をして貰ひたる枯木かな　青邨（同）

叺織（かますおり）

季題解説　十一月中、朝鮮全南各地農家の行事である。朝鮮米の包裝は叺と定められて居るので、各農家は十一月に入ると新藁を以て盛に叺を造る。狭い温突内で藁屑に埋りながら全家孜々として勵むのである。尤も叺織は朝鮮だけに限らない、内地でも同様である。

魞簀編む（えりすあみ）

季題解説　「魞張る」「魞さす」は春であるが、十二月上旬から翌年の一月一杯の二ケ月間に亙つてこの魞簀を編んでその準備をするのである。毎年十一月下旬になると古い魞簀が取拂はれる。そして新らしい魞を張るのは翌年の二月上旬に始まるから、これを編むのはその間の仕事である。この魞簀には青竹を使ひ、これを一寸程の巾に割り揃へて（水深によつて長短はあるが）大魚もの（沖に張るもの）は棕櫚縄、小魚もの（岸近い所に張るもの）は藁縄でかゞり編んでゆくのである。琵琶湖畔年中行事の一つで、湖畔到る處で編まれてゐる。

竹を伐る（たけをきる）

季題解説　竹は初冬に伐つて置くのが最もよいので、竹を伐るのは大抵十一月頃で竹を賣買するのもこの頃である。「鞍馬の竹伐」のことではない。

枝打（えだうち）

枯木卸（かれきおろし）

季題解説　杉・檜の植林の枯枝や枯枝に交る生枝を鉈を以て伐り落す仕事を云ふ。秋の彼岸から春の彼岸までと言はれてゐるけれども、樹木の皮がむけなくなつた頃、卽ち十月・十一月・十二月が最も盛んな時である。枯木卸といふのは枯枝を伐りおろすのである。木々の枯葉が全く落ちて了ふと、百姓達は皆山に出かけて柴をつくる。その折、竿の先に鎌を結びつけてさし交はしてゐる枯枝をおろすのである。長い青竹を使用して中々風情あるものである。

丸太曳（まるたひき）

丸太出（まるただし）　藪出（やぶだし）

季題解説　伐材を春季融雪を待つて流送する爲めに、溪流にのぞんだ處やその他へ運搬する作業をいふのである。

藪出といふのは、馬で運搬のきく所まで人の力によつて運ぶのをいふので

ある。

「毛曳」・「撥出」といふのはその毛篩（鼻毛）の形によつて異るので、木材に鼻（鐶）を打つて毛綱で曳くのである。〔參照〕春―木流す

毛絲編む

【季題解説】冬になると各家庭では編みものを初める、子供の爲めのシャツ・ジャケツ・上着・外套など、父親の襟卷・外套・手袋など、主人のチヨツキなど。近頃は防寒着に毛絲編のものが多くなり、主婦・娘など自ら編むやうになつた。少しの暇を見ては編んでゐる。日向ぼつこしながら編むもの、燈火の下で編むもの、電車の中で編むもの、待合所で編むもの、夫々に趣がある。

【例句】毛絲編む

膝先や少しころがり毛絲玉　　橙黄子（ホトトギス）

毛絲あむ夫人メノコよ末よかれ　　自得（同）

編みのこる白き毛絲の古びけり　　鶴女（續ホトトギス）

たそがるゝ戸口にたちて毛絲あむ　　花蓑（同）

藁仕事

【季題解説】冬季は農家ではどちらかと言へば閑な時である、殊に雪でも澤山積る國では止むを得ず家に籠つて居らなければならないのである。さういふ時に草鞋を作つたり、繩をなつたりするのである。その外、蓆を織るとか、叺を作るとか、俵を拵へるとかする。自家用の目的の場合もあれば副業としての場合もある。藁に埋つてせつせと仕事をしてゐるのであるが、さういふ中にもどこか落ち著いた氣安な感じがないでもない。

棕櫚剝く

【季題解説】棕櫚の皮を剝くのは冬に限られてゐる。紀伊の有田郡野上村は日本一の棕櫚の産地で、附近の山山は何れも全山棕櫚と云つてもいゝ位であるが、十一月下旬頃から皮剝きが始まり、剝いた皮は束に結し、ふやけた所を掲げて乾かすのであるが、冬になると村内擧げて此の作業に多忙を極める。其他各地とも棕櫚の植つてゐる所へは、冬になると棕櫚皮を剝かせてくれと云つてやつて來るのが例である。〔參照〕夏―棕櫚の花。

楮蒸す

楮刈、楮晒す、楮踏む

【季題解説】楮の葉が落ちた頃、雪を見ぬ中から刈取つて五六尺位の長さに切

り揃へ、之を大束に括り、両端を持ち上るまでに揃へられた大釜の中に立て、其上から桶を被せるはねつるべ式に装置した桶を被せ、蒸気の漏れ出ないやうにして下からどんどん火を焚いて蒸すのである。凡そ二時間位蒸した後むしこれを剝ね上げ、蒸せた楮に水を打つて取出し皮を剝くのである。之を竿にかけて乾したものが即ち楮の皮であつて、日本紙の原料である。［同］紙漉

［例句］

湯気まとふ楮の束の運ばるゝ　波川（ホトトギス）

上間障子楮蒸す火の映りをり　まさし（續ホトトギス）

楮蒸すや石を重ねし古かまど　風竹（昭和一万句）

［参考］楮の皮は、古くから布の原料とし、後には紙の原料として首位を占めた。紙の質から云へば、麻紙最緒にして強靱であり、楮紙はこれに比してやゝ粗である。

三椏蒸す（みつまたむす）

三椏の皮剝く

［解説］移植後三年位で、花の黄色を呈する一二月の頃、一株十数本の内から小さいものを残して根もとから伐採し、其まゝ大束に括り、地面とすれすれ位に据ゑた大釜に浸し、はねつるべ式にしつらへた蒸しこがといふ大桶を被せ、二時間餘り蒸した後蒸しこがをはね上げ、蒸せた三椏に水を打つて取出し根もとから皮を剝くのである。此剝き皮は其根を束ね竿に掛けて干し、やがて大束にまとめるのである。而して尚幾多の手数を經た上和紙の原料となるのである。［参照］紙漉

紙漉（かみすき）

［解説］三椏・楮などの皮から作られた紙の粗原料を更に煮たり、叩いたり、晒したりして、パイプになつたものを紙に漉くのである。張板のやうなものに適當な大きさにして張りつけて干すのである。冬の日に白く照らされてある紙干場など明るいよい感じである。大工業の製紙ではなく、山間小都會の和紙製造である。三椏・楮などの原料採取に關聯して農家冬期の副業とされてゐる處が多い。土佐を第一に伊豫・石見・因幡・美濃・埼玉・下野・信州などが和紙の産地とされてゐる。雁皮紙・吉野紙・鳥の子紙・半紙・美濃紙・塵紙・ナプキン紙などの種類である。［参照］楮蒸す　三椏蒸す

年木樵（としきこり）

［同類季題］年木　年木積む　年木賣　年木山　年木舟

【増山井】（一）年木こる。正月にたくべき薪とる事なり。

【滑稽雑談】和邦におゐて、冬の内薪柴を採つて春の用とす。是を年木樵と云ふ。俗に節料木、或は椎木餅柴などいへる類也。北國には雪の積らぬ内、秋月に冬春の用意すといへり。
【年浪草】月令に曰、孟春の月、木を伐ることを禁止す。注に、盛徳木に在るを以てなり、云々。然れば則ち、春は木を伐らぬゆゑ、年内に春の薪柴を伐る事、據あることにこそ。

註（一）十二月の條にある。

【季題解説】来春用ゐる薪を年内に樵ることである。山里では家々の軒下に高々この年木を積み上げて春を迎へる。山から樵り出した年木を町へ賣りに来るのもある。紀州あたりでは山から樵り出した年木を舟に積んで各地方へ送り出す。〔同類〕新年―年木。

【例句】

年木樵

年木めせ奥のおく山馬の聲　鬼貫（俳諧七車）
薄霜して霜もいとはず年木樵　桃鄰（古太白堂句選）
おとろへや小枝も捨ず年木樵　蕪村（蕪村句集）
樵捨るとし木の枝に雀かな　同（蕪村遺稿）
谷越に聲かけ合ふや年木樵　太祇（太祇句選）
うれしさよ御寺へ年木まいらせて　召波（春泥発句集）
冬枯や背中に見せて年木樵　也有（蘿葉集）
八十の老に親ありとし木樵　几董（井華集）
寐て見るや七日焚の柴一把　一茶（七番日記）
年木こる斧の[illegible]なる[illegible]　巴尺（百番句合）
ゆづり葉も一枝添て年木樵　中和（花[illegible]）
年木樵木の香に染みて飯食へり　普羅（ホトトギス）
流木を拾ひためたる年木かな　不[illegible]（同）
立ち食の里ならはしや年木樵　句瑠璃（同）
梅の枝を押し上げて年木積みにけり　正之（同）
年木舟一人で積んで暮れにけり　蘆馬（同）
割りかけし年木しぶとし[illegible]　[illegible]（同）
ふみ渡る伏木の苔や年木樵　澄黄子（同）
岩壁に積み上げてある年木かな　不折堂（同）
門前に積みし年木や光悦寺　倘石（同）
空洞木に生かしおく火や年木樵　不器男（同）
　（[illegible]）
下[illegible]の丘の[illegible]きに年木樵　[illegible]子（同）
年木賣夫の[illegible]著て来りけり　しげ女（同）
みさゝぎのうしろの山の年木樵　三山（同）
ほそ〳〵と割りその〳〵年木かな　[illegible]川（同）

年木樵

音無しの瀧のほとりの年木樵　あふひ（ホトトギス）
本堂の下に年木や靈滿寺　三千女（續ホトトギス）
黄葉のうしろよりすぐ年木山　風史（同）
年木樵一人見ゆれど二人らし　静歩（同）
攝心に飽き果てたれば年木積む　了悟（同）
年木樵御堂の裏に下りけり　虚子（句集　虚子）

池普請（いけぶしん）　川普請（かはぶしん）

季題解説　池普請といふのは、湖海や池沼や堀潰などがあつた場合、埋立をしたり若くは干拓に依つて開田・開畑を行つたり、或は灌漑排水に關する施設、又は道路堤塘などの新設・變更を行つたり、或は他から適當な土壌を運び入れて土性を改良するなどのことである。冬季から初春にかけ、農事の閑散時に村人が出て行ふものである。池の水も涸れるので冬季に限ることである。

川普請も同様冬川の涸れるのを待つて、出水に崩れた堤・橋梁の架換工事・樋管工事、岸に蛇籠を伏せたり、杭を打つたり、ケレツポーを作つたりするのである。杭を打つには、大阪地方では「猿」と呼ぶ梯子を滑り落ちる大槌（地下鐵工事に鐵板を打ち込むのに用ふる蒸汽槌に似たもの）を數十人の女人に綱を牽かせ、歌を唄ひながら悠長にやることもある。堤を固めるのに女工夫が數十人又は數百人並んで、手に手に四五尺の丸太を持つて唄ひながら打ち固めることもあるのである。

例句

池普請

雲かげのしきりに走る池普請　九二緒（續ホトトギス）
茶沸かしを勸むる婆や池普請　秀畝（ホトトギス誌）
午からの波立ちぐせや池普請　同（同）

麥蒔（むぎまき）

古書校註

【三才圖會】按ずるに、小麥の種類多くして、亦早中晩の異有り。（略）凡そ種を下す、十月を準と爲し、大麥と時を同じうす。

按ずるに、大麥は數種有つて、早き者は九・十月に種を下し、晩き者は十一月に種を下す。皆四月に黄熟す。其刈るや、立春より百二十日に至るを旬と爲す。故に諺に曰、麥は百日の中に蒔くべく、三日の中に刈るべしと。

季題解説　時期は、十月から十一月頃。大麥・小麥・裸麥など。種子は鹽水に浸して、沈んだ重い良い種を選り（鹽水選）、更に華氏百二十度位の湯に數分間浸して、黒穗の菌を豫防することも、だんだん行はれるやうになつた。

播き方に撒播（大農式の方法で馬に乘つたり、車を用ひたり、撒き散らす機械を用ゐたりするが、內地には殆ど見かけぬ）、條播（筋形につゞけて播き下す）、點播（又は株蒔といつて點々と間隔を置いて播き下す）などがある。撒播は別として、何れも耕して整地した畑に鍬類で條を作つて（さくるといふ）その中に肥料を撒き（堆肥・灰・油粕・豆粕・其他金肥といつて化學肥料）、その上に種子を播き、後から足で土を打ち掛け、更にその上を踏みつけるのである。それは種子を落ちつかせ、霜柱や風雨に種子が地表に現はれたり、又鳥などの害を防ぐといふ目的からである。ところによつては芋・菘などのやうな取入の遲れる畑には、之等の莖葉をくゝり上げてその間に、前のやうな方法で播くのである。

又二毛作の出來る田では、稻の取入後鋤き起して萬能類で土塊を細かく碎いて、畑の場合のやうに種子を蒔き下すのである。畑の場合より蒔く時季は遲れ勝である。 參照 春―麥踏（ムギフミ） 夏―麥（ムギ）

例句

麥蒔

麥はえてよき隱家や畠村　芭蕉（笈日記）
麥蒔や妹が湯を待頬かぶり　鬼貫（俳諧七車）
麥蒔や百まで生きる皃ばかり　蕪村（蕪村句集）
麥蒔の影法師長き夕日かな　同（新五子稿）
麥蒔や聲で雁追ふ片手業　太祇（太祇句選）
麥まきや思へば遠きほとゝぎす　也有（蘿葉集）
畑中や種麥おろす麻ぶくろ　白雄（白雄句集）
春日野の片端麥を蒔そめぬ　曉臺（曉臺句集）
麥まきやその夜狸のつゞみうつ　成美（成美家集）
麥蒔て妻ある寺としられけり　一茶（七番日記）
田に麥を蒔園へ行けなくからす　乙二（をのゝえ草稿）
麥まきや野路の玉川一またぎ　梅室（梅室家集）
霜の月麥まく人のながめ哉　吟江（夢占）
磯山や蒔きすて麥に蝸の殼　素丸（百番句合）
麥蒔やたばねあげたる桑の枝　子規（子規句集）
麥蒔や湖吹く風の暖かに　月巣子（懸葵）
落葉飛んで小鳥の如し麥を蒔く　土音（ホトトギス）
麥蒔や薄影出てはすぐ消ゆる　青塔人（同）
麥蒔に馬に乘り來る淺間かな　火星（同）
走り來る桑の落葉や麥を蒔く　しづ女（同）
麥を蒔く佛づかへのいとまかな　蟹二（同）
麥蒔くや日の當りたる二子山　南子（續ホトトギス）
鳥上る枯葉ありけり麥を蒔く　八重子（同）
村の名も法隆寺なり麥を蒔く　虛子（句集　虛子）

藺植うる

季題解説 藺は燈心草科の一種であつて、花莚、疊表の原料となり、又其心をとつて燈心を作る。

藺の苗は十二月乃至一月植ゑるのである。方法は田植に似てをり、はじめ藺の苗の大きな株を田の面の所々へばら撒いて置き、後田の中に入つて株を指先で分けつつ植ゑるのである。定木の繩を張つて不整にならない樣に植ゑることも田植同樣であるが、田植ほどには几帳面にはしない。かくて植ゑ終へた藺は春夏を經て成長し、夏季これを刈り取るのである。〔参照〕夏　藺の花(ナツ)

例句

藺植うる

氷田の中の一田の藺代かな　巴　潮　（ホトトギス）
時雨つゝあのもかのもの藺植かな　水　貝　（同　）
藺田植うる焚火にあそぶ童かな　三丘子　（同　）
藺植うるうしろは水の澄めるかな　臼笙子　（同　）
植うるより藺をとざしゆく氷かな　蒲　城　（續ホトトギス）

蕎麦刈(そばかり)

古書校註

【滑稽雜談】大和本草に云、凡そ蕎麥は、夏穀既に終り、立秋前後種を下し、九月既に實のりて、十月に收め刈りて、其の跡に又麥を栽うれば、凡そ一年三度穀類を收め取る也。〇按ずるに、毛吹草に云、十月蕎麥刈（まくは七月、花は八月）。其の外、古來の俳書、是に同じ。新蕎麥を以て終に記さず。近年新そばを秋に專ら用ゆ。是、關東には七八月にはやく實のるを取つて、ふるひそばと云ふ。青實の者也。焙爐に掛け、或は枝莖ながら火に燒き乾かし、麪に磨りて之を賞す。故に秋とす。誠に成熟のそばを收め刈る物は冬にて侍る也。

【栞草】新蕎麥を秋とし、刈るを冬とす。

季題解説 蕎麥には夏蕎麥と秋蕎麥と二通りあるが、秋蕎麥は粒が大きくて粉量が多いので、蕎麥といへば普通この秋蕎麥のことを稱してゐる。夏蕎麥といふのは七月頃刈りとり、秋蕎麥は十一月の上中旬迄に刈り終るものである。〔参照〕秋—蕎麥の花(ツバノ)(ハナ)

例句

蕎麥刈

刈あとやものに紛ぬ蕎麥の莖　芭　蕉　（芭蕉句選拾遺）
蕎麥刈に道問ふ嵯峨の天龍寺　花　叟　（春夏秋冬）
蕎麥刈るや藁束さげて老の腰　爽　雨　（ホトトギス）
蕎麥刈るやあとの始末に二三日　素風郎　（同　）

齒朶刈

季題解說 正月飾に用ふる裏白を歳末刈り採ることをいふのであるが、この草を地方によつて穗長・裏白・もろむぎ・山草などと稱へてゐる。裏白は陰性の植物で、濕氣の多い幽谷などを好んで自生するもので、寒地でも暖地でもどこにでも生育してゐるのであるが、寒地のものは小さく暖地のものは大きい。奥伊豆のやうな南向の暖い谷間には他の齒朶と共に身長位に伸びるものがある。かうなると飾用には大きすぎるので、柄を箸に作り又は編んで盆類を作るところがある。【參照】新年―齒朶。

例句 齒朶刈

齒朶刈に別れてしばし齒朶の道　　爾閘子　（續ホトトギス）

甘蔗刈

甘蔗の根掘る

季題解說 臺灣の甘蔗成熟期は十二月初旬に始まり翌年四月頃に及ぶ。即ち十二月初旬から甘蔗刈を始めるのであるが、甘蔗は刈つてそのまゝ置くと糖分が減るので、刈る一方、畑から製糖工場へと搬入する。かなり慌しい甘蔗刈狀景である。尙近年大莖種の甘蔗が多く栽植され、生育中の風水害倒伏豫防のため根莖の土盛りを深くするため、この土を排して根元から掘り取る作業が盛になつたので、甘蔗刈より甘蔗掘りの方が多くなりつゝある現勢である。

葉は燒いて肥料にする、根は多くは牛の飼料となる。

大根引

大根車　大根馬　大根舟　埋大根　圍大根

古書校註

【誹諧初學抄】大根引、亥の子過ぎて引くと云へり。

【三才圖會】（略）葉漸長じて鼠の尾の如くなる者を中拔大根と稱す。霜の後根肥大して味も亦甘し。

【栞草】集解　六月種を下し、秋苗をとり、冬掘る。春の末薹を抽んで小花をひらく紫碧花。夏の初め角を結ぶ。此の詞は冬の當用なり。大根と略して音讀によむべし。【貞享式】大根引に數ふべからず。

季題解說 十一月下旬から十二月中旬にかけて農家では大根を採收する。土が沍てゝゐると引くに困難でもあり又引くとき土の中で折れ易いから天氣のよい日を選んでする。あの長大な大根が葉を摑んで引張ればたやすく土から拔けて來る、大根引の名ある所以である。

大根車・大根馬・大根舟は大根を積む車・大根を積む馬・大根を積む舟を省約した言葉で俳諧的稱呼である。

埋大根・**圍大根**は農家で大根を圍つて置くこと。畑から引いたまゝの大根を日當りのよいところに穴を掘り、縦に重疊して一層毎に土をかぶせて圍つて置く。かうして翌年春まで貯へて食料に供するのである。〔同上〕大根洗(ダイコンアラヒ)　大根干す(ダイコンホス)　植物—大根(ダイコン)

例句

大根引

鞍壺に小坊主乘や大根引　芭蕉（炭俵）
久々で野に出る馬や大根引　浪化（浪化上人發句集）
御師殿は先づこなたへと大根引　其角（五元集拾遺）
御殿場に馬休めけり大根ひき　同（同）
たま〳〵に引人の有赤大根　嵐雪（玄峰集）
出女に投て通るや大根引　許六（五老井發句集）
同日に山三井寺の大根引　同（同）
兄弟の若盛也大根引　桃隣（古太白堂句選）
道くさの草にはおもし大根引　千代女（千代尼發句集）
道ばたの天秤棒や大根引　太祇（太祇句選）
胡蘿も色こきまぜて大根曳　召波（春泥發句集）
痩たれど常世か背戸も大根引　也有（蘿葉集）
暦にも日は定らず大根ひき　同（同）
さすか花に殘すもありて大根引　同（同）
けふの佛しるや粟津の大根引　同（同）
青々と枯野もとるや大根引　同（同）
折らさじと我骨折て大根引き　同（同）
人參に片荷は赤し大根引　同（同）
霜を踏む世わたり辛し大根引　同（同）
其寒さ煮て取かへせ大根引　同（同）
菜は跡に引わかれ行く大根かな　同（同）
葉は袖にあらで引るゝ大根かな　同（同）
鍬鎌の留守をする日や大根引　同（同）
山は時雨大根引べく野はなりぬ　同（同）
蕎麥切の日や一本の大根引　同（同）
市で見る顏やきのふの大根引　同（蘿の落葉）
大根引こゝら畠の字かな　几董（井華集）
引すゝむ大根の葉のあらしかな　白雄（白雄句集）
辛崎の松も見ゆるや大根びき　成美（成美家集）
かまくらやをさまる御代は大根曳　同（同）
大根ひくその夜や松にきり〴〵す　同（同）
大根ひきて松はひとりになりにけり　同（同）
長明が車もおせや大根びき　同（同）

大根引一本づゝに雲を見る　一茶（享和句帖）
菊をさへ只はおかぬや大根引　同（旅日記）
目利だてふしくれ大根引にけり　同（七番日記）
大根引大根で道を教へけり　同（同）
二三本母大根を殘しけり　同（同）
大根引拍子にころり小僧かな　同（一茶句帖）
野大根引捨られもせざりけり　同（同）
鳴雀その大根も今ひくぞ　同（發句集）
雉子なども粗鳴にけり大根引　同（同）
鶴遊べ葛西の大根今や引　同（狹蓑集）
尼寺や二人りかゝつて大根引　同（嘉永板發句集）
奥山にかゝる日和や大根引　蒼虬（蒼虬翁發句集）
我畑の串下もやさしや大根曳　同（同）
掘たての大根ぬくし山のはた　同（同）
大根曳御城の見ゆる天氣哉　同（同）
大根引志賀は人氣の揃ひけり　同（同）
角力取宿もちけらし大根引　梅室（梅室家集）
婆々が子は傳馬休て大根引　同（同）
十方に里の道あり大根引　乙由（麥林集）
落る日や吹さらされし大根馬　吏登（吏登集）
大根引大根くふ馬叱りけり　瀾水（春夏秋冬）
大根引きて畑荒々に霜降りぬ　雨煙樹（懸葵）
西吹けば灰降る村や大根引　蛙面坊（同）
馬持つて妻が迎や大根引　櫻莚（ホトトギス）
まのあたり下りくる霧や大根引く　王城（同）
夕霧に愛宕灯りぬ大根引　同（同）
たら／＼と日が眞赤ぞよ大根引　茅舍（同）
大根馬暮靄而して眼になみだ　同（同）
くらがりにありたる大根車かな　芥舟（同）
河口の芥に滯げり大根舟　鈴狂（同）
大根馬かなしき前歯見せにけり　同（續ホトトギス）
大根馬喰らひほどきぬ束ね桑　一路（同）
桃色の舌を出しけり大根馬　友次郎（同）

大根洗（だいこんあらひ）

季題解説　大根を干すには先づよく洗つて乾さねばならぬ。鎗の子だわし、鮫の皮などで大根の肌に疵のつく位よく洗つて干すと乾きが早いと云ふ。

普通大桶に水を汲んで洗ふのであるが、川があれば川の流れでも洗ふ。門川の洗ひ場で洗ふのもあり、川に棧を作つて洗ふのもある。【參照】大根引冬・植物―大根

【例句】大根洗

淺漬の大根洗ふ月夜哉　俊似（あら野）
灯ともして大根洗ふ野川哉　把栗（新俳句）
かゞやかに大根洗ふはるかかな　青邨（ホトトギス）

蓮根掘る（はすねほる）　蓮掘（はすほり）

【季題解説】八月頃から隨時掘りとるものもあるが、多く初冬枯葉後から始めて、農家の都合や市場の模樣によつて翌年四月吹芽の出る前までつづけるのである。毎年全部掘り上げるものと一部分次期の苗となるものを殘しながら掘り上げるものとがある。

米作の不適當な濕田などは特に栽培に利用される。濕田の中の仕事のため、板などで作つた大きな下駄のやうなものを履き、又は水深いところは小舟に乘つて掘るのである。掘る道具は萬能や鍬・鎌など隨意なものを用ひてゐる。

蓮根は赤い花の咲くものは地下莖が深くて一體に太く、關西方面に多く、白色のものは地下莖が淺くて前のものより細く肉から粘りの絲を多く出すので、餅蓮ともいはれ關東地方に多く作られる。その他に達磨蓮といふ支那種、觀音蓮といつて近江邊から產する觀賞用のものもある。【參照】夏―蓮の花（ハスノハナ）

【例句】蓮根掘る

田の苫に焚火絕やさぬ蓮根掘　放斗（懸葵）
蓮掘るや泥に突き込む舟がしら　蕪子（ホトトギス）
蓮掘るや泥に逆立つすがれ莖　巽（同）
蓮掘ののこせし焚火燃えゐたり　迷子（同）
蓮根掘る人見あげたる廓かな　かけい（同）
蓮根掘夕燒面（ツラ）をあげにけり　風生（續ホトトギス）
蓮掘にかはせみ低くとびにけり　照子（同）
泥水の流れ込みつゝ蓮根掘る　虛子（同）

人蔘採（にんじんとり）

【季題解説】北鮮方面の深山に自生する人蔘、所謂山蔘の採取をいふ。二人或は三人協力して雪を冒して深山幽谷に分け入り探索する。その二人三人一團となるのは、斷崖絕壁のものを採取する場合に、採取者は腰繩をつけて危險防止に供へ、他の者は繩の護持其他採取者の動作を援ける要があり、

一人では採取出來ないからである。人參は五加科の多年生草本、夏日花開き、秋に至つて紅色の漿果をつける。採取者がこれを探ぐるのに雪中を選ぶのは、雪中では莖の周圍は雪が少し解け凹み、青い葉と紅い漿果とが露出してゐるため、比較的容易にその所在を知ることが出來るからであるといふ。採取の用具はシコベル・鍬其他いづれも小形のもの數種を携行する。彼等は一ケ月以上山ごもりをして採收に從事するといふことである。

紫根掘る（しこんほ）

【季題解説】　紫草の根は多年生草本で表皮部が濃紫色をしてゐて、形は大形な朝鮮人參位のものが多い。野生するものが多く晩秋葉が枯れた後、雪の降らぬ前に採取するのである。

紫根は古來主として紫色の染料とし偶々藥用としたので（紫色は高位の色とされてゐたものである）、秋田の花輪地方には今なほ花輪染と稱してこの紫根を用ひた織物が産出されてゐる。盛岡でも紫根染と言つて賣出してゐる。江戸紫といつて武藏野にも産したことは古歌などにも殘つてゐるところであるが、今日は絕えてしまつたと見えてあまり聞かない。然し武州高尾の連峰にはわづかではあるが今なほ生存してゐる。

秋田地方では病氣の藥としてこれを煎用し、青森岩手地方では膏藥の中に混用する風もある。又紫根染の寢具は長病ひの病人が床ずれがしないといつて用ひられる風があるる藥效があるものとされてゐる。〔參照〕秋　花紫（ハナムラサキ）

【參考資料】　正倉院文書に、天平八年豐後の國で紫草園を經營したことと見え、その紫草の根を掘る時には、國守が從者三人を隨へて二日がかりで監督したことが傳へられてゐる。紫草の根は御料の染料を得る原料になるので嚴しいのである。

生姜掘る（しやうがほ）

【古書校註】

【滑稽雜談】　本草別錄に曰、生薑（シヤウガ）九月之を采る。（略）○これらの說によらば、秋月根を掘るべきにや。京都には、多く冬月にほるゆゑに、近來の季物に（一）當月とす。（略）東國には秋分前後に之を掘る。武州江戸芝の神明社の祭、例年九月十六日に行はる。此の會に土民生薑の市をなす。國俗、生薑祭（シヤウガマツリ）と名付くる也。

註　（一）十一月。

【季題解説】　生食用としては若い頭を貴んで初夏の頃から隨時に採收されるのであるが、晩秋から冬にかけて全部を掘り採つて俵に入れて賣り出したり、穴倉や芋穴に貯藏するのである。

有名な産地は靜岡縣下・東京府下・愛知縣下であつて種類には金時・近江・おか種・かや種などといふものがある。

生姜は食料の他に醫藥として發汗劑・健胃劑などに用ひられ、又ジンジャーエールといふ飲料水に用ひられてゐる。〔參照〕秋—生姜（シヤウガ）

葛根掘る（くずねほる）

〔季題解説〕主として葛粉を作るために山野に自生する眞葛の根を掘り採ることをいふのである。秋過ぎて葉が枯れてしまつた頃が澱粉が根に多く含有して居り、又寒くなれば精製する操作中腐敗する懼も少く、農閑期を利用することも出來る利便があるので多く晩秋から冬にかけて掘り採るのである。雪の早く積る地方は自然他の地方よりも早目に掘るのである。葛粉はこの葛根を臼などの中でよく搗き碎いたものに水を混ぜながら布袋で漉して粕を除き去り、液を樽の中に入れて數時間放置し上澄を流し葛粉だけを沈澱せしめるのである。これだけではまだ灰色をしてをり夾雜物が混つてゐるので　再び清水を加へて攪拌して前のやうな操作を數回繰り返し曝すのである。かやうにして純白になつたものを乾燥したものが葛粉となるのである。昔から大和の吉野地方は有名な産地であるが、北陸・山陰・東北等各所で造り出されてゐる。

葛の根と甘草を混ぜて煎したものは葛根湯といつて漢藥として用ひられてゐる。葛粉は葛湯とし菓子の材料となり料理に用ゐられ、藥用としては血の道の藥又は強壯劑、酒毒の藥などとして效能があるといはれてゐる。

〔參照〕秋—葛掘る（クズホル）

干菜吊る（ほしなつる）　干菜（ほしな）　懸菜（かけな）

〔古書校註〕

【年浪草】干菜は、本朝食鑑に曰、蕪菁（カブラ）の葉莖を采り、以て簷下に懸けて、陰に乾かす。呼んで懸菜（カケナ）と號す。或は乾菜と稱す。又干菜に作る。

〔季題解説〕大根や蕪の莖—葉の付いたまゝ——を繩で編み、又は繩の縒（ヨリ）を戻して挾み、或は繩で括り、それを壁際・軒下などに吊して陰干にするのである。味噌汁の實として食ふのが普通であるが、一種の風味があつて、小百姓とか貧乏人の食ふものゝやうに思はれてゐるがさう輕蔑したものでない。〔參照〕干菜湯（ホシナユ）

〔例句〕

干菜吊る

玄賓を世に見るさまか干菜賣　其角（五元集拾遺）
鶯に藪の掛菜のにほひかな　太祇（太祇句選）
たくはへて罪なき庵の干菜かな　蓼太（蓼太句集）
みのむしの掛菜を喰ふ靜さよ　白雄（白雄句集）

掛菜して世をやすげなる縣かな　同（同）
里佬しかけ菜が下のつり階子(ハシゴ)　同（同）
程あらで掛菜にむつぎ千家哉　同（同）
雪積つてぬくき一ト日や懸菜解く　柿葉（懸葵）
いとゞしく干菜つりけり浦の寺　曾左運（ホトトギス）
一度來し時も干菜の河内宿　青萌（同）
掛けまして青き干菜や庵の壁　泊露（同）
落月に簷すさまじや釣干菜　泊雲（同）
風の月壁はなれ飛ぶ干菜影　同（同）
青々と干菜釣りたるばかりなり　虎杖（同）
多聞寺の尼がかけゐる干菜かな　眞竿（同）
干菜影障子に搖れて鳴りにけり　ちよ女（同）
干菜窓機の小止みて灯りけり　爽雨（同）
橋裏にかけて干菜の一くさり　梅史（同）
巖簷や掛菜かしこき一庵　蚊又（同）
靜けさや干菜に遊ぶ蠅一つ　草餅（同）
叱られて干菜の壁に泣きにけり　楠畝（同）
葛城の笠雲寒し菜を掛くる　雁來紅（同）
佇ちよりて道を問ひけり干菜窓　三山（同）
いみじくも日の當り來し掛菜かな　磯山（同）
神垣につゞく庵垣枯菜釣る　拳岡童（同）
軒深く釣られて青き干菜かな　雨意（同）
溫泉煙につゝまれてゐる干菜かな　葵洲（同）
吹き落ちて水に沈める干菜かな　夏井（續ホトトギス）
提灯をくはへて下す干菜かな　狐草（同）
業平の寺にかけある干菜かな　青芭（同）
火事あかりさしゐる軒の干菜かな　措大（同）
向き合うて干菜の窓の灯りけり　良夜（同）
かりそめに掛けし干菜のいつまでも　虛子（句集虛子）
青き色の殘りて寒き干菜かな　同（同）
ぽつかりと灯ともる窓の干菜かな　同（同）

干菜湯(ほしなゆ)　干菜風呂(ほしなぶろ)

【季題解說】干菜を中に投じて沸かした風呂のことである。體がよく溫まるので、産後の人浴などに用ふる地方もある。【[illegible]】干菜吊る(ツル)

【例句】干菜湯

干菜湯に煮入りゐるや音のなし　月村（同人）

干菜湯　干菜湯に入りて筵戸下しけり　積翠（ホトトギス）
故郷や筵蓋して干菜風呂　晩華（同）
こそりとも云はさずなりぬ干菜風呂　其月（續ホトトギス）

切干製す

蠶切干　千切干　割干　白髮切干

古書校註【年浪草】切干は、冬月萊菔を切ること、絲の如くす。之を纖蘿蔔と謂ふ。筵に攤げ晒し乾かす。故に切干と名づく。尾州多く之を製して、諸州に販る。味甘美なり。

季題解說　大根を紐狀に切り日に曝して乾物とするのである。時期は十二月・一月・二月で、多くは竹簀の上にひろげて干すのであるが、木から木へ繩を引張つて繩暖簾のやうに吊して乾したりもする。その乾燥は切干の種類によつて早いものは一二日、遲いものも六七日で乾く。切干には色々種類がある。蠶切干は蠶程の大きさに切つて干したもので一寸見ると蠶のやうにも見える。千切干は一口に千切と云つて細かく刻んで干したものである。割き干は大根を縱に細長く切り割いて干したものである。白髮切干は機械を用ゐて細く長く切つて干し、精製せられたものは總の如く束になつてゐて麻絲の如く綺麗である。切干製造は尾張大根の產地だけに尾張が最も盛んである。多くは農家の自家用に作られるが、白髮切干は製造家によつて製造せられる。切干は之を煮て食ひ或は漬物とし或は三ばい酢として用ふる。

參照　大根干す　植物—大根

例句　切干製す

切干の皺つくりたる天氣かな　花櫻（ホトトギス）
切干のまゝに疊みし筵かな　丹楓（同）
切干のよく乾くなり法然忌　不水（同）
切干に撞く鐘少し遲れけり　鈴和尙（同）
切干を切るやかれこれ三ヶ日　素風郞（同）
切干や刻み交れる赤大根　あき女（同）
ちり〳〵と切干乾きはじめけり　美津女（續ホトトギス）

大根干す

懸大根　干大根

季題解說　大根を干すのは澤庵漬にする爲めで、十日前後の間干して大根を曲げて輪に出來る程度にするのである。關西では大根の心葉を捥り上葉を殘して十本位づゝ葉を束ね、木に掛けたり垣根に掛けたり夂架を作つて掛けて干す。心葉をつけて置くと完全に乾かぬと云ふ。關東では大抵丸太などで架を設け、葉を切り落した大根を繩で編んで聯にして掛け連ねて干す。朝掛けて干し夕刻外して積み上げ其上に筵・藁などを覆つて冱を防ぐ、

それを毎日繰り返して乾かすのである。冱に遭ふと乾きが遅く大根の心に洲が透ると云ふことである。關東では練馬大根と云つて練馬から井草・石神井あたりが大根の本場とされてゐる。大根を干す時期になると野は一面の掛大根で掛大根の海みたいな光景を呈する。〔參照〕大根引・切干製す・澤庵漬製す　植物―大根

例句

大根干す

畑々や掛大根の上の富士　花蓑（ホトトギス）
清瀧の茶屋の手摺の大根かな　泊月（同）
道端の干大根や両武陵　芒趾（同）
住の江や松に掛けたる干大根　旭川（同）
絃歌わく二階の欄も干大根　茅舍（同）
茶の垣の上にもおいて干大根　風生（續ホトトギス）
浪しぶきあがる松にも掛大根　蔦堂（同）
帆柱に懸けし大根や湯治船　怒愛庵（同）

蕪菁干す

干蕪　ほしかぶ　蕪菁引く

古書校註

【栞草】〔新干蕪〕凡そ干蕪は、冬至以前に根を取りて、檐間に掛けてこれを乾かす。ゆゑに干蕪と名づく。春月煮食ふ。極めて甘美し。

季題解説

干大根或は干菜と同じく、冬季に縄などに束ねて軒端・木の股などに干して食用に供する。〔參照〕植物―蕪菁

例句

蕪菁干す

緣側に蕪干しあり詩仙堂　泉冷（續ホトトギス）

澤庵漬製す

古書校註

【栞草】凡そ十一月中旬より大根の澤庵漬を製す。○青藍云、澤庵和尚はじめてこれを製す、故に名づくといへり。愚按ずるに、澤庵和尚の墓所、武江品川東海寺にあり。無縫塔とて丸き石を置くのみ也。大根漬の壓に丸き石を置きたるさまと、澤庵和尚の墓所の形とよく似たり。故に俗、澤庵漬といふ歟。

季題解説

干し大根を材料にして澤庵を漬ける。漬物製造を業とするところでは六尺又は三八と稱する大桶を用ふるが、自家用には四斗樽を用ふる。之を澤庵桶と云つて皆同じ桶を使用する。鹽と米糠とを混合して干大根の一並べ毎に振り撒き桶一杯に詰める。そして其上に石の壓をする。早く食するものは鹽少く遅く食するものは鹽を多くする。鹽二升五合に米糠一斗

七升五合、合計二斗の割合で、三升鹽・四升鹽など斗鹽まである。早いのは二十日乃至一月位で桶の口を切る。七升鹽位のものは翌年の時期まで貯藏に堪へ、斗鹽近いものは數年後も食することが出來る。大根を漬ける時期は十一月下旬から十二月一杯である。澤庵漬の名は澤庵和尚が之を創製したところから出てゐるとも云ひ、品川東海寺にある澤庵和尚の墓石が縫塔と云つて丸い石を置いてあるのみで大根漬の壓に丸い石を置いたものと形が似てゐるところからこの名があるのだとも云ひ、或は貯へ漬の轉訛とも云はれてゐる。　**參照**　大根干す（ダイコンホス）　植物―大根（ダイコン）

例句　澤庵漬製す

踏むは踏み大根漬の雲衲等　靜雲（ホトトギス）

寒曝（かんざらし）　寒晒（かんざらし）

古書校註　【日次紀事】（一）此の月寒中、新に井水を汲み、桶或は壺に盛りて、之を收め蓄ふ。是を寒水と謂ふ。五穀及び諸菓・生薑等の物を漬けて、後、陰乾にす。是を寒曝と謂ふ。（略）凡勝尾寺の氷餅・信州百合の氷餅・奥州仙臺の氷餅、各ゝ京師に賣る。及び豆腐・蒟蒻・太凝菜の類の水曝の乾物、悉く寒中の製する所也。

註　（一）十二月。

季題解説　寒中米を石臼で挽き、その粉をまた寒天に晒したものを云ふのである。寒搗・寒餅などと同じく長く貯藏に堪へるものである。米ばかりには限らない。すべての穀物、又馬鈴薯なども同樣の手續きをして晒す。これ等を凡て寒晒といふ。

例句　寒曝

晴るゝ日も雪ちらつくや寒晒　再生（ホトトギス）
二三日水のよく減る寒晒　素方（續ホトトギス）

寒搗（かんつき）

季題解説　寒の内に米を搗くことである。寒中に搗いた米には穀象がわかないといふて昔はよく搗いたものであるが、現今はあまり行はれない。

例句　寒搗

寒搗や右肩寒き庇下　呂柚（ホトトギス）
寒搗の汗にかゞやく刺青かな　竹果（同）
寒搗に晝風呂沸かす婢かな　俳小星（續ホトトギス）

味噌搗（みそつき）　味噌作る（みそつくる）

季題解説　農家では冬、自家用の味噌を作る。最も簡單な普通の味噌を作る

には、先づ糀の素（糀花）を買ひ、之を用ひて所要量の糀を作る（味噌糀）、それに十分に煮た大豆（豌豆又は其他のもの）と食鹽を加へて搗くのである。鹽を少くして搗いたものを「味噌餅」といつて好んで食ふ者が多い。米の糀で作つたものを「米味噌」、麥の糀で作つたものを「麥味噌」、糀を少くして豆を多く加へたものを「豆味噌」、甘藷を多く加へたのを「甘藷味噌」などといふ。又麥味噌の如く舐め食ふ味噌を「舐味噌」と云ふ。味噌を作るのに冬季を選ぶのは貯藏上に結果がいゝからである。

天草（てんぐさ）ふむ

季題解説 寒天製造中の一の仕事で、天草に附著した汚物を洗ひ落す作業を言ふのである。此の作業は一冬耐え得るだけの小屋を流れの傍に作り、その中で行はれる。中には唐臼を据ゑて、これで天草の附著物を取り落すのである。土地ではこの小屋を「さらし場」といひ、仕事を「くさふみ」と言つて居る。

例句 天草ふむ

天草ふむ臼に張りたる氷かな　　呉畝（山茶花）

寒天製（かんてんせい）す

季題解説 夏季に採取した天草、礦草などを冬季水に晒し、日に乾し、煮てその汁を冷すと寒天狀のものが出來る。それを適當の太さに切り、寒天に一夜又は二三夜晒すと、水分は分離して寒天が出來る。寒天は我國産として歐米へ澤山輸出する。歐米では製菓の原料に供する。

例句 寒天製す

うす黒きしまひ寒天干してあり　　白毫（續ホトトギス）

寒天を山へ畑へとさらし居り　　思行（同　）

蒟蒻（こんにやく）凍（こほ）らす　氷蒟蒻（こほりこんにやく）

季題解説 氷蒟蒻をこしらへることである。普通の蒟蒻を一旦湯に投じその煮えたのを取りあげて適當の大さに切り、更にそれを三十日内外寒天に晒すのである。

例句 蒟蒻凍らす

蒟蒻の果々として氷りけり　　五城（歳事記大全）

豆腐（とうふ）凍（こほ）らす　氷豆腐（こほりどうふ）　高野豆腐（かうやどうふ）

季題解説 普通豆腐を造る時のやうに大豆を水に浸し、軟くなつた時臼で挽き釜に入れて煮る、煮え上つたのを麻袋に入れて搾り、搾つた汁に「ニガ

りーを入れ布を敷いた籠で漉し、漉した汁を更に布を敷いた箱（水箱と呼ぶ）に入れ上から重石をかけ暫くすると白豆腐の如くになる、これを適宜の大いさに切り板の上に立て並べ、干場の棚の上に並べて寒天に晒す。

かくの如くして凍らしたものを莚の上で干板の裏から叩き落し、むろ（土藏）の中に入れて數日間圍ひ、次に取り出し熱湯に入れて氷を融かし上げて水氣を取り、更に熱湯に入れて之を掬り上げ乾燥室で乾燥する。干場は豆腐を凍らす處。干構は干板を並べる構。干板は豆腐を並べ凍らす板。板附とは氣候の加減で一夜に凍らず板のまゝ一時土藏に運び置き更に翌夜又は翌々夜凍らしたもので質が悪い。折豆腐は製造中に折れたもの。豆腐削るとは箱詰にする際形を整へる爲め鉋にかけること、豆腐山とは製造場は山地であるから紀州邊ではかう言つてゐる、又製造することを豆腐山をするといふ。（高野山報告）

以上は紀州の如く大規模に氷豆腐を造る場合であるが、北國では豆腐屋がみんなかういふことを行ふので、その規模も小さく、寒夜屋根の上などに並べて凍らすのである。

例句

豆腐凍らす

豆腐氷らす屋根に出來て雫へり　栁童（ホトトギス）
凍てつきし高野豆腐に雪すこし　晃嶺（同）
貧厨の豆腐氷りてありぬべし　寒山老（同）
　雲仙
寒豆腐干し塞ぎたる旅籠かな　夏山（續ホトトギス）
凍豆腐角もするどき琥珀色　新樹（同）
てらてらと月下の豆腐氷りけり　美波子（昭和一万句）

参考　本朝食鑑に「有二凍豆腐者一、切二豆腐一作レ片、盛二于竹籃一、寒夜露宿則凝、如二絲瓜之乾枯狀一、晒乾煮食」とあり。紀伊續風土記に、「氷豆腐・氷蒟、有二種、高野山領處々にて製す」と見ゆ。高野にて製するもの名あるに依り高野豆腐ともいふ。金剛山中千早村にても製す。

氷餅造る（こほりもちつく）

季題解説　氷餅は諏訪の名産である。今を去る三百餘年前寛永の初年、徳川三代將軍に獻上したのを始めとし、以來將軍家へ獻上品として高島城主諏訪賴永公の城内で製造し、一般庶民の私造を禁止したが、明治維新の廢藩後其の禁を解き廣く民間で製造するやうになつた。その製造法は先づ糯米を洗ひ石臼で水びきにして白い汁とし、細かい篩で漉して粕を除き、この汁を二重釜で煮ると粘力ある糊となる。これを攪き廻して冷やし、型箱に流し込み寒氣に晒して凍らす、堅く凍つてから型箱から出し氷切機によつて適當の大きさに切る。それを紙に包み藁で二つづゝ連ね棒に架け連ねて、二十五日乃至三十日程の間天日に乾すのである。製造期間は十二月

上旬から三月中旬頃迄である。【傍題】餅搗 寒餅

霰餅造る

【季題解説】寒の内に搗いた餅を左分四方位の寒の日に刻み、よく乾した上貯へるものを霰餅といふのであるが、普通の家庭では特に寒餅を搗くわけでなく、正月用の餅の程よく乾いたのを刻んでこの霰餅を造る向が多いやうである。春になつてから熬つて食ふのである。【傍題】餅搗

寒の水

寒九の水

【季題解説】寒中の水を飲めば風邪を引かないとか、腹の薬になるとか云つて、寒になると生水を飲む人が多く、又これを甕などに汲んで貯へる向もある。その他寒造りの水、寒晒布の水など、すべて寒中の水には一種神秘的な清浄感がある。

【例句】寒の水

見るにさへぞつとする也寒の水　一茶（一茶句帖）
汲かへていとゞ白さや寒の水　浮流（類題発句集）
捧げ來て置くにこぼしぬ寒の水　斜日（同人）
大杉の根より湧くなり寒の水　一立（同　）

新干大根

【季題解説】初冬よく肥えた大根を洗ひあげて縄で編んで、架を畑中に組んで掛けつられたり、軒下や壁一杯に掛けならべたりして、干して澤庵漬の材料としたり、煮て食べたりする。新干大根とはその冬干しあがつたばかりの新らしい干大根をいふのである。【傍題】大根干す [illegible] 植物―大根 [illegible]

新干蕪

【季題解説】蕪も大根とおなじ様に初冬よく肥えたのを洗ひあげて、軒下や壁に掛けて干し、それを煮て食ふ。新干蕪とはその干しあがつたばかりの新しい干蕪を言ふのである。【傍題】蕪干す [illegible] 植物―蕪 [illegible]

新海苔

初海苔

【季題解説】市場に現はれた海苔の走りのことである。あの色の鮮かな香りの高い新海苔の市場に出るのは最も早い年で十月下旬、普通は十一月中旬頃からである。なほ海苔は初冬から寒中へかけて採取したものが一番優良で、遅くも二月一ぱいに取れたものであつたら色も悪くはなし軟かであるが、それ以後になるとだんだん硬くなり色も赤黒くなつて品質が次第に劣

るのである。〔參照〕春 海苔

淺漬

季題解説 澤庵の大根は乾きの十分なるをよしとし、淺漬の大根は乾きの未だ生々したのをよしとする。麹・糠・鹽等で漬け、早いのは一週間で食べられ、普通、漬けて二十日後のものを最もよしとする。澤庵に先立つて食用に供せられ、べつたら市に樽の蓋を切るのを以て初めとする。〔參照〕植物 大根洗ひ 秋 べつたら市(人事)

例句

淺漬

淺漬に色濃く流れ醬油かな　余史翁（ホトトギス）

大根配

季題解説 地方の小都會では、今も師走に入ると、家々の肥料を汲み取りに來た百姓が一年中肥料を貰ふ禮として大根を配つて來る。地方によつては尻米と稱して正月の餅米を哭れる所もある。大都會でも昔は此の風習があつたのであるが、現今ではあべこべに料金を拂つて汲取を賴む樣になつてゐる。〔參照〕植物 大根引

莖漬

菜漬　お葉漬　近江漬　酢莖　莖の桶　莖の石　貌見世莖

古書校註

【滑稽雜談】和俗又（一）此月比、大根幷に蕪菁などを鹽漬となし、冬春の食に備ふ。俗に淺漬と云ふ。又略して莖漬と云ふ。其製する時を以て季とす。○當世十月末、芝居貌見せ前に、芝居茶屋より日頃見物の棧敷場敷きし、客方へ配りて饋り物とす。是を號けて私に貌見世莖と云ふ。其の製右に同じ。廿年來恆例と爲し、かはる事なし。又、季に用ひて惶なかるべきか。

【采草】「本朝食鑑」蕪菁の葉莖を採りて、淹麹（カフヂヅケ）とし、收藏、これを莖漬（クキヅケ）と號す。年を經て又佳なり。江州の製造を近江漬と號し、珍とす。年を經て酸味を生ずるもの、なほ佳なり。賀茂の里人の造るを酸莖と號し、これを賞美す。

註 （一）十一月をいふ。

季題解説 蕪や大根の莖葉を鹽又は麴漬としたものをいふのである。年月を經て酸味を生じたものも捨てられない味である。滋賀縣で出來るものを近江漬と稱して昔から珍重されてゐるとのことである。京都の加茂で造るのを酢莖といつてゐる。之は蕪菁を畑から葉のまゝ引き抜いて牛馬車で運んで來て、里人が寒天にもめげず門川で洗ひ、直に大き

茎漬

酸茎賣うこんの財布ほどきけり　紅隣（續ホトトギス）
鐵漿つけてきりやうよしなり酸茎賣　きぬ（同）
茎の水あすはこぼれんけしきかな　虚子（句集虚子）

牡蠣船（かきぶね）　牡蠣料理（かきれうり）　牡蠣飯（かきめし）

季題解説　牡蠣の原産地廣島に現はれ、消費地大阪に於て大いに發達した牡蠣料理の屋形船。シーズンは十月頃から翌四月頃迄。
大阪では大川・横堀・道頓堀などの橋の袂から石段をたらたらと降りたところに船繋りして、潮の滿干、上下する汽艇の波にピッチング（縱搖れ）又はローリング（横搖れ）をする。船に弱い者は輕い船暈を感じて、料理を食べながら輕い不安に憑きまとはれる。船中は廊下が通じ、幾間にも仕切られ、床の間があり、軸を掛け、船にゐて船にゐることを忘れる。料理は酢牡蠣・牡蠣フライ・牡蠣雜炊・牡蠣飯など總て牡蠣を材料とし、悉く船中に於て料理をする。（日本人の考案した料理のバラエティを推讃すべきではあらうが、些か執拗に過ぎ、人間の食欲を甘く見た嫌がないでもない）句會又は忘年會の會場として恰適であり、船中には電話も架設され、勿論手洗場の設備もある。牡蠣船は牡蠣船として一つの有機體である。參照　動物　牡蠣（かき）

例句

牡蠣船

牡蠣船に遊女連れたり芝居者　格堂（春夏秋冬）
牡蠣船や難波の浦の灯の林　同（同）
牡蠣船に芝居見殘し來りけり　几燈（同人）
牡蠣船の床に起上小法師かな　梧月（ホトトギス）
牡蠣船の柱にひきし電話かな　白楢（同）
牡蠣船に俄かなる冬來りけり　蕪人（同）
牡蠣船の傾き居るも興深く　文鹿（同）
牡蠣船に舟あたりたる搖ぎかな　淺香（同）
牡蠣船をからころ出でし舞妓かな　つき草（同）
牡蠣船に居て大阪に來てゐたり　たけし（同）
牡蠣船に搖られごゝろの旅情かな　播水（同）
牡蠣船やそらはなにはの月の暈　夢六郎（同）
牡蠣船の風にかけたる行燈かな　青葉（同）
牡蠣船に辻占舟の來りけり　圭州（同）
牡蠣船へ下りる客追ひ廊者　夜半（同）
かき船の奥の一間の置火燵　英明（同）
牡蠣舟や火の粉散らして川蒸汽　一四朗（續ホトトギス）
牡蠣船の搖れて櫨音きこえけり　爽雨（同）

牡蠣舟に廓のゆきゝ聞ゆなり　富太郎（同）
牡蠣船の隣座敷も役者かな　吉右衛門（同）
牡蠣船に持込むもつれ話かな　雄子（同）
牡蠣船の庇の上の戎橋　黃鳥（同）
牡蠣割女をとこの如き口きける　霞村（同）

藥喰（くすりぐひ）　鹿賣

古書校註

【滑稽雜談】　肉類おほよそ冬月に至りて服食し、方藥に用ふる、雜也。故に、和俗、寒に入りて三日・七日、或は三十日の間、其の功用に應じて、鹿・猪・兎・牛等の肉を喰ふ。是を藥喰と稱する也。又、其の穢忌の事、延喜式に記するといへども、一概を論ずべからず。猶識者に尋ぬべき也。

【年浪草】　本朝食鑑に曰、世人多く鹿を嗜みて食する者、謂へらく能く人を益すと。其の肉、甘溫軟肥にして、膜少く硬からず。定に決れ然る乎。本邦鹿を食する者、最も穢忌多し。此れ加茂・春日の神使の故に謂ふ乎。故に、世人鹿の謂を忌みて、音を以て鹿と爲す。鹿肉甘溫にして毒なし。冬時食ふべし。他月宜しからず。故に、寒中特に之を用ひて、中を補ひ氣を益し、一切の風虛を療し、血脈を調ふ。故に是を藥喰と謂ふ。諸獸も亦之を食ふ者有り。

季題解說　鹿の肉は冬期に於てのみ喰ふことが出來る。冬期以外は味がよくない。特に寒中に於て之を喰へば身體の邪氣を拂ひ、血行をよくして健康を增すといはれてゐる。それで鹿の肉を冬時喰ふのを藥喰といふのである。

鹿を喰ふ者に穢忌が多い、又鹿は加茂・春日の神使でもある、そこで世人は鹿の謂を忌み、音を以て鹿といふとのことである。それで鹿の肉を賣るものを鹿賣といふのである。鹿に限らず、猪とかその外一般に獸類の肉を食ふことを藥喰と言つて支障ない。〔參照〕紅葉鍋（秋、鹿の項）

例句

藥喰

このいとし身をしかられて藥ぐひ　來山（續いま宮艸）
客僧の狸寢入やくすり喰　蕪村（蕪村句集）
くすり喰人に語るな鹿ケ谷　同（同）
藥喰隣の亭主箸持參　同（同）
妻や子の寢顔も見えつ藥喰　同（同）
藥喰廬生を起す小[illegible]哉　同（遺草）
襲衣の裏もこもれりくすり喰　同（落日菴句集）
手燭して[illegible]明りやくすり喰　太祇（太祇句選）
雛（稚）子の窠て物とふや藥くひ　同（同）
うまきとはいつはりがまし藥喰　同（同）

薬喰　日頃に旨き[illegible]　[illegible]

鍋捨る師走の隅やくすり喰　同（同）

長言す人去レけり薬喰　召波（春泥發句集）

夕ド誰疊焦しつくすり喰　同（同）

氈帳に短檠くらし薬喰　同（同）

湯豆腐に客はたゝせこ薬喰　也有（[illegible]集）

看經はきかぬためなりくすり喰　同（同）

邪魔が來て門敲きけり薬喰　同（同）

灸より箸はとりよし薬くひ　同（同）

息災な内儀は寒し薬くひ　同（同）

きかぬ匙杓子にかへて薬くひ　同（同）

薬喰おぼつかなさに人誘ふ　几董（井華集）

むづかしと今宵はやみぬくすり喰　同（同）

くすり喰箸を下せば鐘がなる　成美（成美家集）

行人を皿でまねくや薬喰　一茶（九番日記）

戸を叩く音は狸か薬喰　子規（子規句集）

鎌倉のかたき豆腐や薬喰　元（ホトトギス）

薬喰病ある身を惜しみけり　虚子（句集虚子）

参考　本邦古代は肉食を忌まず。天武天皇四年四月、諸國に詔して、四月から九月まで、牛馬犬猿雞の肉を食ふことを禁ず。佛教の流通するに及んで愈この風あり。遂に近世獸肉を食ふといふを憚りて薬喰といふ。これに依り精力を增進すると信じたのである。今宮心中に「私の申した通り、薬喰ひをなさるゝか、はあいから脈がようなつた。」

山鯨（やまくぢら）　猪の肉（ゐのしゝのにく）

季題解說　猪肉のことを東京では山鯨と云つてゐる。猪肉を食べるのは一種の薬喰ひで、年寄や冷性の人が多く之を食べる。尤も好きな人には又別種の味があつて、中には毛を拵つて皮のついたまゝの肉を煮て食べる人もある。皮に一二本の毛が殘つてゐて喉を通るとき毛でこそぐられるのが乙なもので「ししの喉こすり」と云つて之を珍重する人さへあると云ふ。猪肉は普通味噌煮・薩摩汁などにして食する。雜煮のだしにも使ふ。一流の料理屋で猪肉を使ふ家もある。江戸時代には一もんもんじ屋」と云つて猪や鹿の肉などを賣つてゐたさうである。今日では牛肉店で冬になると猪肉を賣つてゐる家がある。或る牛肉店の主人に聞いた話であるが、東京でも猪肉を食べる人は餘りないさうで、猪肉を好んで食べるのは薩・長・土の人に多く、西鄕從道さんなどは大變お好きで一匹のまゝで納めてゐた。震災前まではそれでも可なり食べる人があつたが近頃は得意がずつと減つたと

言つてゐる。
猪は丹波・丹後・若狹・甲州が本場で朝鮮の猪は味が落ちると言はれてゐる。【[illegible]】動物—猪汁

狸汁（たぬきじる）

季題解説 狸は冬月肉肥え脂肪が多くて美味であるから、これを捕へて食ふのである。その皮は鞴に用ゐられたり、又防寒具としても用ゐられ、毛は毛筆に使用される。
狸汁は普通皮を剝ぎ採つた後、腹を割き四肢から切り離して料理し、蒟蒻・牛蒡・里芋・大根・葱などの野菜を添へて、味噌汁、又は醬油汁に仕立てゝ喰ふ。冬期山里では山珍の首とし、獵夫・青年等相集つて樂しく爐邊で食ふのである。興趣が深い。【[illegible]】動物—狸

例句
狸汁　狸汁かたむきかゝる自在かな　平凡（ホトトギス）

鯨汁（くぢらじる）　鯨鍋（くぢらなべ）

季題解説 鯨の肉を入れて仕立てた汁で、主として清汁で、輕く葱の刻んだものをあしらつてゐる。味噌汁のものもある。鯨鍋は鯨の肉を鍋で煮ながら食ふのである。【[illegible]】捕鯨—動物—鯨

例句
鯨汁　をのゝくと喫過ぬほや鯨汁　几董（井華集）
お長屋の老人會や鯨汁　子規（子規句集）
大時化のやゝおとろへぬ鯨汁　梅東（ホトトギス）

河豚汁（ふぐじる）　ふくと汁　河豚鍋　河豚の宿

季題解説 河豚には種類・時期によつて、卵巣・肝臓、及び白子などに毒があることがあり、古来危険視されてゐる。之に食中りして死ぬ例が多い。然しその危険味のあるところに興もある。
河豚汁は河豚の肉を入れたる味噌汁をいふ。河豚の肉を血の気のなくなるほど幾度も水を換へて洗ひ、好みに切つて[illegible]少し[illegible]へた酒に漬け、薄くした味噌汁に入れ、一遍煮立て[illegible]加減をして出す。【[illegible]】[illegible]、河豚釣—動物—河豚

例句
河豚汁　兄弟のくすし憎むや河豚汁　芭蕉（もとの水）
ふぐ汁や鯛もあるのに無分別　同（[illegible]）
あら何ともなきのふは過てふぐと汁　同（江戸三吟）

河豚汁

生煮をふく〳〵といふなりふぐと汁　其角（五元集）
魨汁や祝言のこす夜戻り　同（同）
世の中に男をよぶやふぐと汁　同（同）
魨汁に又本草のはなしかな　同（同）
人妻は大根ばかりを魨汁　同（同）
鐵砲のそれとびどくやふぐと汁　同（五元集拾遺）
魨汁や憎き顔には猶くれじ　同（同）
秋風の呉人はしらじふぐと汁　蕪村（蕪村句集）
鰒汁の宿赤々と燈しけり　同（同）
鰒汁の我活てゐる寢覺哉　同（日發句集）
ふぐ汁や己等が夜は朧なる　同（月並發句帖）
音なせそ敲くは僧よ河豚汁　同（新選）
海のなき都はこはしふぐと汁　同（新五子稿）
逢はぬ戀おもひ切夜やふぐと汁　同（同）
ふぐ汁の亭主と見えて上座哉　同（同）
河豚汁や五侯の家の戻足　同（蕪村遺稿）
鰒汁の君よ我等よ子期伯牙　同（同）
鰒と汁鼎に加羅を焚火哉　同（同）
玉川の哥口ずさむ鰒の友　同（同）
死ぬやうにひとは言也ふぐと汁　太祇（太祇句選）
廻文の點の長さよふぐと汁　召波（春泥發句集）
河豚汁鯛は凡にてましく〳〵ける　同（同）
ふぐと汁我が使に我ぞ來ぬ　同（同）
隱居屋へ蓋して煮るや河豚汁　也有（蘿葉集）
河豚好む家や猫迄ふぐと汁　几董（井華集）
鰒を煮る汁なむ〳〵とこぼれけり　同（同）
ふぐと汁ひとり喰ふに是非はなし　白雄（白雄句集）
鰒汁やおもひ〳〵の八仙歌　同（同）
君が代は誰もくふなりふぐと汁　成美（成美家集）
河豚汁妻といふものなくもあれ　同（同）
親分と家向あふて鰒と汁　一茶（享和句帖）
鰒すゝるうしろは伊豆の岬かな　同（七番日記）
鰒汁やもやひ世帶の惣躮　同（發句集）
水仙の花なき宿や鰒と汁　蒼虬（蒼虬翁發句集）
鰒汁や今宵枯野の月はすむ　同（同）
魨汁や鍋の傾ぶく古疊　猫帳（其雪影）
魨汁や小家に似ざる灯の光　支鳩（新選）
一つ家に河豚くふ人の集りぬ　花叟（新俳句）

河豚喰ひし人恙なく鍋を洗ふ　紅緑（同）
河豚汁や叟ぞ瓶酒の度々絶ゆる　青七星（同人）
河豚汁や我に乃父の酒量なし　間去（同）
鍋舐る青き焰や河豚汁　六里巽（懸　荅）
河豚鍋の春菊を少し試みし　盧吼（ホトトギス）
衛立の金おとろへぬ河豚の宿　橙黄子（同）
いつまでも菊咲かせたり河豚の宿　同（同）
衛立にかけし羽織や河豚の宿　蓬生（同）
瓢家も二代になりて河豚の會　水竹居（續ホトトギス）
斯く行きてかゝるところが河豚の茶屋　青畝（同）
河豚宿は此許より〳〵と灯りをり　同（同）
河豚好きの妓に盃のたまりけり　綠夢（同）
みとりゐる漁師ばかりや河豚中り　並木（同）

鰭酒（ひれざけ）　身酒（みざけ）

【季題解説】河豚の生身の鰭を炭火であぶつて狐色にこがし、その上に熱燗の酒をそゝいで飲む、河豚黨の賞美してやまないものである。河豚料理で名高い關門を中心とした山口・福岡・大分の三縣の割烹店で食膳にのぼす河豚料理は實に美術味の豐かなもので、大皿の模様が透いて見える程に紙のやうに薄く削いだ刺身を一枚一枚ならべたものなど美しい限りである。鰭酒も又その河豚料理の席で必ず缺くことの出來ないものとなつてゐる。男も女もつい鰭酒の口ざはりのよいために喜びつぶれることなどもある。鰭の代りに刺身の一片を以てしたものを身酒と言つてゐる。〔類題〕動物—河豚

河豚ちり（ふぐちり）

【季題解説】河豚の肉を刺身の如く作り、季節の野菜をあしらひ、熱湯を沸ぎらせた鍋に入れて引き廻しにし、肉の縮つたところを鍋から上げ、酢味噌・薄醤油・橙の搾り汁など好みのものにつけて食ふのである。通人は皮・肝などの生煮を以て最上の美味として居るが怖ろしい。〔類題〕河豚汁〔入〕動物—河豚

納豆汁（なつとじる）

【古書校註】【大和本草】大和本草に云、本草綱目に載する所の豉云々、俗に云ふ納豆也。別に一種糸引と云ふ物あり。大豆を煮熟して、包んで稲に出て、腐つて粘出來、糸を引く。世人是を汁にたき、菜と煮し多く之を食ふ。（略）〇拔ず

るに、本草に云ふ豉は、和製の唐納豆或は濱名納豆にて侍る。和俗の饗として賞する物、中華未だ考へず。冬月賞して防寒の佳品とす。都鄙諸國造其の製多し。殊に江州蘆浦觀音寺の製甚だ佳也。公方家へ獻ぜらるるともいへり。

【年浪草】本朝食鑑に曰、釋名、納の字未だ詳かならず。或は謂ふ、僧家の庖廚を納所と號す。納豆は近代僧家多く造る。故に、此の豆の僧家の納所に出づるを以て、之を名づくる乎。此れも未だ的當と爲さず。(略)用ふる時、板上に剉末し、水に研り、煮て汁と作し、鹽酒及び魚鳥菜を和す。此を納豆汁と稱す。菜子泥を放して食ふ。

季題解說 納豆を味噌とともに摺り込んで造つた汁である。納豆三十匁程を俎板の上で庖丁で敲き或は擂鉢で擂つて、それに二十匁程味噌を加へて摺り合せ、水六七合でのべ、豆腐一丁を賽の目に切つたもの又は貝の剝身などを汁ぐさにした汁である、冬月中々風味のあるものである。〔參照〕納豆(ナットウ)

例句

納豆汁

砧つきて夂の寐覺めや納豆汁　其角（五元集拾遺）
おほふ哉さまさぬ袖を納豆汁　同（五元集）
臘八や腹をさぐれば納豆汁　許六（五老井發句集）
入道のよゝとまいりぬ納豆汁　蕪村（蕪村句集）
朝霜や室の揚屋の納豆汁　同（同）
朱にめづる根來折敷や納豆汁　同（月並發句帖）
下部等に箸取らせけり納豆汁　同（落日庵句集）
僧と居て古び行氣や納豆汁　太祇（太祇句選）
臘の時はづす遊女や納豆汁　同（同）
納豆汁比丘尼は比丘に劣りけり　召波（春泥發句集）
反椀は家にふりたり納豆汁　同（同）
翌といふ隣の音や納豆汁　同（同）
齊腹の使々たりや納豆汁　同（同）
納豆汁必くるゝ隣あり　几董（井華集）
叩く音もらすを罪や納豆汁　梅室（梅室家集）
椀の湯氣額のゆげや納豆汁　同（同）
草の戸に小さき藏や納豆汁　百萬（新選）
早咲の梅の香もあり納豆汁　黎鷄（淡ちしま）
祥月や佛が嗜きし納豆汁　子駿（ホトトギス）
火燵してくれる山家や納豆汁　虛子（句集虛子）

參考

「大草家料理書に、なつとう汁の事、豆腐いかにも細かに切りて、くきなど細かに切りて、ふくさ味噌にてよくよく立て、すひ口を入れ候也。但しくきは出し樣に入れてよき也。なつとうは常の如くねせてよきなり。」

納豆（なっとう）　納豆賣（なっとううり）

季題解説 大豆を煮て麹とし蒸したものである。納豆の名は昔、僧家の納所で造られたところから出たものだと云ふ。納豆汁は昔から僧家の食物とされてゐる。現今東京から北の方へかけての國では、朝夕、納豆賣が藁苞にした納豆を賣りに來る。〔[illegible]〕納豆汁。

例句

納豆
- やうくに納豆くさし寺若衆　子規（子規句集）
- 閑居の譏みそ浮世に配る納豆哉　其角（五元集拾遺）
- 夢人の湯を聽めけ納豆かな　嵐雪（玄峯集）
- 曲輪にも納豆の匂ふ齋日哉　太祇（太祇句選）
- 納豆叩街や四百八十寺　曉臺（曉臺句集）
- 納豆の絲引張て遊びけり　一茶（七番日記）
- 納豆に暖き飯を運びけり　鬼城（ホトトギス）
- 藁苞のすがくしさの納豆かな　樂天（同）
- 納豆や長屋住居のはで暮し　春雨（ホトトギス）

粕汁（かすじる）　酒の粕（さけのかす）

季題解説 味噌汁の中に酒粕を投入して一度煮沸させる。それが普通のものであるが、擂鉢で味噌と酒粕と擂りまぜて作るものもある。鹽鮭・鹽鰤・野菜等を材料にして作る粕汁もある。酒粕の成分によつて體内を温め寒氣を防ぐ效がある。東北地方・北海道には特別なうまい粕汁がある。〔[illegible]〕秋—新酒（シンシュ）

例句

粕汁
- へばりつく大きな鼾や酒の粕　千燈（同　人）
- 酒の粕燒いては食べる淋しさよ　草千（ホトトギス）
- 酒の粕噛くや杉箸燃え出でて　あきら（同）
- 粕汁の香にかゝりし鼾かな　傳嘧草（同）
- 粕汁や腹はへらねどうまくして　士行（同）
- 粕汁に醉ひし顔や庵の妻　草城（同）
- 粕汁に温まりたる家族かな　通草（同）

葱汁（ねぶかじる）　根深汁（ねぶかじる）

季題解説 葱のぶつ切を實にした味噌汁である。葱に體内を温める成分があつて、之を食へば風邪を引かぬと言はれてゐる。〔[illegible]〕植物—葱

例句

葱汁
- 僕等のよゝと盛けりねぶか汁　召波（春泥發句集）

葱汁　女房に一夜ふられむ根深汁　也有（[illegible]）
嫁もはや世帶じみたり根深汁　同（同）
ひたすらに夫をたよりや葱汁　淡路女（ホトトギス）
根深汁病ろ舌を燒きにけり　秋峽（同）
ほと染めし夕日の窓や根深汁　旭川（同）
鍋蓋に這ひ居る蝸根深汁　ひとし（同）
風邪もはや忘れ〳〵や根深汁　溫亭（同）
一汁に一菜庵や根深汁　水竹居（同）
根深汁とろりと煮えぬ旅人宿　ひろし（續ホトトギス）

蕪汁（かぶらじる）

季題解説　蕪を汁の實にした味噌汁である。冬の汁物は凡て體内を溫める效があると云はれるが、蕪汁もその一つである。〔參照〕植物―蕪菁カブ

例句

蕪汁　蕪汁や宿のふりはも今朝は久　其角（五元集）
野火留や背曉のかぶら汁　巣兆（曾波可理）
蕪汁息ふきやまずすゝりけり　亭々（ホトトギス）
彌陀のほか賴る佛なし蕪汁　泥中（同）
天龍寺の賄うけぬ蕪汁　虚子（句集虚子）
煮ゆる時蕪汁とぞ匂ひける　同（同）

干菜汁（ほしなじる）

季題解説　干菜を實とした汁をいふ。中流以下の農家の冬の副食物である。干菜は大根・蕪菁の菜莖を採つて繩で編んで簷下などに吊して陰干にしてからからにひからびたものを取外して用ふるのである。味はもとより大して美味くはないが、爐上で干菜汁の鍋がぐつぐつ煮えてをり、家族どもが皆健康な顏をそろへて夕餉を認めてゐる情景は冬の山家に缺くべからざるものであらう。また干菜汁は身體を溫めるにいゝと云ひならはされてゐる。〔參照〕干菜吊るホシナツル

例句

干菜汁　冷腹を暖め了す干菜汁　虚子（ホトトギス）

のつぺい汁（じる）

のつぺ

季題解説　葛で仕立てた清汁である。大根・里芋・椎茸・蒟蒻・油揚・にんじんなどを材料にする。大根は銀杏に、里芋は輪切に、油揚・にんじんは短册にきり、蒟蒻は適當にちぎり、鰹節のだしで煮込んだもので、火から揚げ

したに水で溶いた葛を入れてどろりとさせたものである。寒夜の一汁として萬人向きのものである。

三平汁（さんぺいじる）

季題解説 鹽鮭・鹽鱒・鰊、その他の魚を適當の大さに切り、芋・大根を入れ、鹽で調味して食ふ、北海道特有のものである。

闇汁（やみじる）

季題解説 幾人かの人が持ち寄つた食品を汁鍋の中に投じて煮えるのを待つて、闇中摸索して食ふのである。もとこの方法は實行上しばしば困難な場合が多く、依つて各々包み隱して持ち寄つた食品を一たん厨へ運び、心きいた料理人の方で適當に切り又は量りなどし、調味料を加へて煮えるを待ち、燈火のない部屋へ鍋のまゝ持ち込み、暗中各々杓や箸をとつて食ふといふ方法が多く行はれて居る様である。孰れにせよ何人が如何なるものをもたらしてあるかといふことがお互ひに全然わからないところ、又いかなるものを食ひあてるかわからないところに興味があるのである。特に思ひもかけぬものが箸にかゝつたりするところが面白い。

例句

闇汁　闇汁に鼻がつまつて来りけり　鐵り木（同　人）
闇汁や杓の如きに逆着す　素十（ホトトギス）
闇汁の杓をしづめてしまひけり　[illegible]子（山茶花）

寄鍋（よせなべ）

季題解説 鳥肉・魚（蝦など）・貝類・蒲鉾・麩・絲蒟蒻・葱・白魚・慈姑・銀杏・椎茸・松茸・芹などを淺鍋に入れ、醬油味醂等で味をつけ、卓上焜爐の上にかけて煮ながら食ふのである。近來支那料理に、掛爐鴨子・火鍋子などといふ料理があるが矢張り寄鍋の一種と見るべきで、材料は日本の寄鍋と似たものがあるが豚肉・海月・木耳・白菜などを割合に多く用ゐてゐる。焜爐には炭火を用ゐる外によくアルコールを燃すやうな装置になつたものを用ゐてゐる。

例句

寄鍋　寄せ鍋の火の衰へや話倒れ　淡清（同　人）

神仙爐（しんせんろ）

季題解説 焜爐と鍋とを併せた形態のもので、中へ入る食物の器、日本で茶を點ずる風爐の如く、焜爐ではこれ神仙爐を用ひて飲食することを風

流としてゐる。

銅又は眞鍮をもつて鑄造されたものと、花崗岩をもつて彫造されたものとがある。形は大小區々、徑四寸乃至八寸ほどの圓形、その中央に徑二寸乃至三寸ほどの圓筒を構へ、炭火を焚き周圍の凹んだ部分に肉汁を入れて煮沸し、肉類・蔬菜類・麺類などに種々の調味料を加へて温め、匙または箸で攝る。神仙爐で煮たものに悦口子といふのがある、珍重するに足る高尚な佳肴である。

神仙爐は陰暦十月の丁の日とか亥の日から用ひはじめるのである。即ち古昔は冬季の會食用具とされてゐたが、近時は殆ど四季の別なく焚かれることゝなつた。（朝鮮固有色辭典）

内地のすきやきにも似たものであつて、現在に於ても冬季最も多く使用されてゐる。

紅葉鍋

季題解説　紅葉は古來鹿の隱し詞であるところから鹿の肉を煮食することを紅葉鍋といひ做したのである　鹿の肉は脂肪分が濃厚で羊肉に似た特殊な香があるので食ふことを喜ばない人もある。寒中は香が少く毒もないといはれてゐる。又那須の邊では芹を入れると鹿肉の香がなくなると言つて用ゐて居るのを知つてゐる。

昔獸肉を食ふことを迷信的に忌み嫌ふものの多かつた頃には獸肉を嗜好するものは藥喰と稱して用ひたものださうであつて、殊に鹿は神使といふ謂で鹿の肉とか又は紅葉の肉とかいつて密に用ゐたともいはれ、又實際寒中體を温め滋養あるため藥用として用ゐたともいはれてゐる。

東京の兩國橋の袂にもゝんじ屋といつて昔から種々の獸肉を鬻いでゐる店がある。〔參照〕藥喰　牛鍋

牛鍋　すき燒

季題解説　牛肉と白葱・燒豆腐・白瀧（絲のやうに細くした蒟蒻）・麩、時には松茸、ところによつては白菜を一緒に淺鍋に入れて砂糖醬油等で加減した汁（わり下といふ）で味付して混爐にかけて煮ながら食べるのである。

肉には霜降り・ひれ・ロース。上肉・中肉・並肉などの等級がある。霜降とは肉の細胞に一見霜のやうに脂肪が縱横に細く走つた上質肉のこと。ひれとは腿肉等の脂肪の少い肉。ロースとは肉の間に脂肪層のかなり多く見えるものゝことである。

從來神戸牛といつて珍重がるのは主として但馬地方に産する牛を用ふるもので、外國種の輸入されなかつた頃は殊に品質がよかつたといはれてゐる。但馬牛の肉には一種特有な芳香があるが、これは同地方の風土や牧草の關

係が然らしむるのださうで、外國人がすき燒等をほしがるのはこの香りを非常に珍しがつて好むのださうである。
牛鍋屋では客前に運んだ葱などの事をザクといひ、又一人前を一枚と稱へてゐる。〔參照〕紅葉鍋

葱鮪（ねぎま）　鮪鍋（まぐろなべ）

季題解說 葱・鮪肉・豆腐などを醬油で味付けして煮た汁のことで、掩盛りとして食膳に供する。あぶらつこい料理で、煮立つた處を食するので、微溫くなつたものは鮪の臭が出て不愉快に感ずるものである。關西地方には鮪が稀である關係上餘り用ひられない、鮪鍋といふのは同樣のものを鍋で煮ながら食ふのである。

鮟鱇鍋（あんかうなべ）

季題解說 鮟鱇の肉や肝を豆腐・葱などを添へて醬油で味付して煮ながら食ふのである。肉は皮附きのまゝ、肝は一見寄せ物のやうな風に見える桃色をしたもので蒲鉾を切るやうに薄くして用ふるので、鮟鱇鍋を嗜むものは特にこの肝を珍重がるものが多い。
鮟鱇は俎上で料理し難いために、懸け吊して置いて庖丁を加へる風習がある。鮟鱇の吊し切りといふのである。關西には稀な料理で、東京地方の狹い範圍に限られる樣な料理の一つに數へられてゐる。

例句

鮟鱇鍋　鮟鱇鍋あつらへて肩の雪拂ふ　朱雀（ホトトギス）
鮟鱇鍋箸もぐら〳〵煮ゆるなり　虛子（句集虛子）
鮟鱇の肝らかみ出し鮟鱇鍋　同（續ホトトギス）

甲羅煮（かふらに）

季題解說 日本海産の足長蟹の甲羅をとりはづし、この中に蟹味噌・蟹肉を混入し、味醂・砂糖・醬油などで味を調へ、炭火の上で甲羅の壞れない程度にとろ〳〵と煮ながら食膳に供する。之を蟹の甲羅煮又は單に甲羅煮と稱し、風味まことによい。丹後・但馬地方に於て多く行はれる。

例句

甲羅煮　甲羅煮や神棚の灯の穗の長し　水華（山茶花）

鍋燒（なべやき）　芹燒

古書校註

【栞草】鍋燒・貝燒　皆其の食物の調味を溫かならしめ、寒氣を防がんた

めに是を用ふ。

季題解説 古來鳥肉に芹・慈姑のやうなものを加へ醬油で味付をして煮て食ふ極めて幼稚な料理であつて、芹を多く用ひる關係から芹焼ともいつたのである。今日蕎麦屋で商ひ又冬の夜街上を荷を擔いで商ぎ歩く鍋焼饂飩とは之に起因するものである。〔參照〕鍋焼饂飩

例句

鍋焼　燭臺や小さん鍋焼を仕る　我鬼（ホトトギス）
　　　鍋焼の屋臺に細き煙出し　ひさし（續ホトトギス）

鍋焼饂飩

季題解説 薄鍋に饂飩を入れ、葱・蒲鉾などを加へてぐつ〳〵煮立つたところを食べるのである。

鍋焼饂飩は居店のよりも屋臺を引いて流して歩いてゐるのを呼んで、目の前で焜爐の火をぱた〳〵煽ぎながら煮て出すのを食べるところに感じがある。土鍋の焦けるまで熱したもので、その熱い中に食べるものである。凍夜のお濠端などではた〳〵火の粉を散らしてゐるのを見ると、たまらなくなつてマントの袖を刎ねながら立ち食ひの一味に加はるといふやうな事がよくある。

上方には鍋焼饂飩は少く、掛け・信太などを賣る普通の夜鳴饂飩が多い。のみならず居店の饂飩屋でも鍋焼饂飩は殆ど無く、かやく饂飩・しつぽくなどと唱へるものがそれに似てゐるが趣味はまつたく違ふ。〔參照〕鍋焼　夜鷹蕎麦

例句

鍋焼饂飩　うどん屋の裏突出しや筑後川　鈴和尙（同人）
　　　　　饂飩屋の火の子落して通りけり　波石（ホトトギス）

夜鷹蕎麦　夜鳴饂飩

季題解説 上方の夜鳴饂飩に對して關東では夜鷹蕎麦が、おでん屋・鍋焼饂飩などとともに冬の夜の街頭料理を代表してゐる。近來は支那蕎麦が割り込んで夜鷹蕎麦の領分を蠶食してゐるが、支那蕎麦のチャルメラが亡國的の哀音を帯びてゐるのに對して、夜鷹蕎麦の賣聲は消え入る樣で侘しい。

〔參照〕鍋焼饂飩

例句

夜鷹蕎麦　みちのくの雪降る町の夜鷹蕎麦　青邨（ホトトギス）

蠟燭焼

季題解説 魚・鴨・雁などの肉を擂身にして串にさし、蠟燭を作るやうにし

て焼き、酢味噌などを附けて食べるのである。おでん屋などによくある料理で冬の感じのものである。

貝焼（かひやき）

季題解説　帆立貝の貝を鍋の代りにして魚肉のすき焼をする料理。秋田邊ではカヤキと呼びショッツルと呼ぶ一種のだし汁を使つて特別の味を出してゐる。客が數人の時には一人一人に小さな焜爐を具へて貝鍋を掛ける。但し必ずその貝の肉を加へて煮るのが常法である。鮑貝だと孔は味噌に葛粉を混ぜたもので固めて塡ぐのださうである。一般に北國情緒のある料理とされてゐる。

杉焼（すぎやき）

古書校註　【栞草】杉の香を魚肉などへ移さんがため、杉板の上にて燒くなり。箱にて燒くもありとぞ。

季題解説　杉の木で作つた箱の底に酒で溶いた味噌を敷いて、魚・鳥・貝類に野菜をあしらつたものを載せて火に焙ると、杉の木の焼ける香味が全體にしみ込んで一種の風味が出る。それを小皿などにとつて客に出すのであるが、中にはすき焼・どて焼のやうに焼きながらつゝき合つて食べるものもある。

おでん　おでん屋（や）

季題解説　竹輪・はんぺん・あんぺい・蒟蒻・焼豆腐・雁擬（ガンモドキ）・薩摩揚・八頭（やつ）、すじなどを一つ鍋に醬油・砂糖などで煮込んだもの、皿にとつて辛子をつけて食べる。左黨には燗酒が副食につけてあり、尚、薄醬油で色をつけた茶飯とうまいお新香が用意されてゐる。

おでんは東京を本場としなければなるまい、だから關西では之を尊重してわざわざ「關東煮」といつてゐる。

一戸を構へた居酒屋式のものと、街頭を移動する屋臺店式のものとがある。前者の方が清潔で親しみのあることは云ふ迄もない。同じ東京でも學生街と下町とでは客筋も異り雰囲氣も違ふ。

晩食の早い下宿住居の大學生は、勉強に夜が更けると腹が空いて來るので、近くの友達を誘つて行きつけのおでん屋で腹をこしらへ身體を溫めて來る「デカンショ節に云ふではないか「おでん・燗酒・稻荷鮨」と」關西の關東煮は大阪が料理したおでんであつて、ひつこく又風味といふものがない。

尙、關西では木茶田樂のことを略しておでんともいふが、それは此冬季のおでんとは關係ない。

例句

おでん

おでん屋の時計一時に垂んと　誓子（ホトトギス）
おでん屋の波形障子ぎんざ降り　同（同）
おでん屋のうしろに夜の神戸かな　槐（同）
おでん屋にいさゝか借のありにけり　桂歩（續ホトトギス）
おでんやの五高びいきのおやぢかな　夕陽斜（同）

煮凝（にこゞり）　凝鮒（こゞりぶな）

古書校註

【日次紀事】鯉・鮒の類、之を截りて羹と爲し、寒夜經宿して凝りたる、是を氷凝（こほり）と謂ふ。

【栞草】煮凍（にこゞり）　煮たるものゝ凍（こほ）りたる也。

凝鮒（こゞりぶな）　煮て凝りたる鮒をいふ。

季題解説　魚鳥などを煮た汁が寒氣のため凝り固まつたもの。かゝる凝結作用は脂肪の關係であるから、煮凝は魚鳥の煮汁に限られてゐる。この自然のゼリーは、日本人の舌に醤油と脂肪の味覺を與へてとろりと溶けてしまふ。子供に喜ばれるのも故あるかなである。煮凝といふ一種の料理もあるが、それは煮凝の特種なものと思つてもよからう。

例句

煮凝

煮凍や簀子の竹のうす緑　其角（五元集）
煮凍にともに箸さす女夫かな　召波（春泥發句集）
煮凍を旦夕やひとり住　同（同）
妻の留主に煮凍さがすあるじ哉　几董（井華集）
煮凍や精進落るかねのこゑ　同（同）
煮氷やもろく折たる萩の箸　同（同）
煮凝の匙が上げたる小鍋かな　奇錢（同人）
煮凍や船の底にも棚のある　菊太（ホトトギス）
煮凝のとけたる湯氣や飯の上　野風呂（同）
煮凝の皿の寒江獨釣圖　鳳人（同）
煮凝やともにこゞりしちりれんげ　曉水（續ホトトギス）
煮凝や親の代よりふしあはせ　同（同）
煮凝に一つ置きけりちりれんげ　富士子（同）
煮凝に乏しき酒をあたゝめぬ　虚子（句集虚子）

【参考】内膳司式、諸國貢進御贄に、「蘿井伊具比魚煮凝等、隨レ得進加。」

蕪蒸（かぶらむし）

【季題解説】蕪の皮を剝いだものを蒸籠に入れて蒸し、葛餡をとろりと掛けて食べる。蒸籠は水ばかりでもよいが、料理屋でやるのは、水と酒を等分にしたものを煮立たせるのが普通のやうである。又蕪の中を刳りぬき、中に竹輪・鶏肉・野菜などを入れて調味し、蒸籠で蒸してあたたかいうちに食べる、さうしたものもあるやうである。〔季昭〕蕪菁）

風呂吹（ふろふき）

風呂吹大根（ふろふきだいこん）

【古書校註】

【栞草】骨董集「甲陽軍鑑に云、熱風呂好（アツフロズキ）にてよく吹申さるゝ云々。本朝諸士百家記、風呂をもてなす條に云、上手の吹手一兩人云々　伊勢人の物語を聞くに、風呂を吹くといふは、空風呂にあることなり。垢をかくもの、風呂にいる者の身上に息を吹きかけて垢をかくなり。しかすれば、息をかけたる所に潤ひ出でゝ、垢よく落つるなり。これを風呂吹といふと云々。さて大根を熱く蒸して煙りの立つほどなるを、大根の風呂吹といふも、息を吹きかけて食ふさま、かの風呂吹に似たるゆゑならん」

【季題解説】大根や蕪の茹でたものに味噌をかけて食べる料理である。大根ならば面取りして輪切りにし、鍋の底に昆布一枚を敷いて、適當に水を注いで茹でる。別に鰹節と昆布の煮出汁を作つて置いてこれを味噌に注ぎ、砂糖を加へて適度にゆるめて煮、胡麻を煎つて擂つたものを混ぜて胡麻味噌にし、或は橙の搾り汁を加へて作つた橙味噌などをこの茹で大根に掛けて出すのである。蕪の場合だと皮を剝いて丸ごと茹でたもの、若くは皮ごと茹でたものに右の味噌を掛けるのである。蕪村忌などによく蕪の風呂吹を出す事がある。

【例句】

風呂吹

日本の風呂吹きといへ比叡山　其角（五元集）
風呂吹や小窓を壓す雪曇　子規（子規句集）
風呂吹に集まる法師誰々ぞ　同（同）
[illegible]
風呂吹を喰ひに浮世へ百年目　同（同）
[illegible]
風呂吹の一きれづゝや四十人　同（同）
風呂吹や蕪村百十八回忌　同（同）
風呂吹や比叡山颪雨となる　紅綠（新俳句）
風呂吹をよばれ立して戻りけり　梅女（同人）
風呂吹や[illegible]の[illegible]渡の一末寺　[illegible]（ホトトギス）

風呂吹

風呂吹にあたゝまりたる夕餉かな　鄒　蠲（ホトトギス）
風呂吹や漆の如き自在鈎　何　鳴（續ホトトギス）
風呂吹を更へて上人召されけり　月　倚（同　）

湯豆腐（ゆどうふ）　湯奴（ゆやつこ）

【季題解説】　豆腐を一寸角位に切つたものを鍋に入れて温まつたものを「だし」を加へた醤油汁をつけて食ふのである。湯豆腐鍋といつて楽焼で共蓋のついた土鍋がある。焜爐の上に掛け得られる大きさで醤油汁の容器も鍋の中に浸して温められるやうな仕掛になつたものである。
湯豆腐用の豆腐の作り方には、地方によつて幾分風習の異つたものもあるが、絹漉といつて極く目の細い布で漉して作つた豆腐などもある　鍋には板昆布を敷いてだしを出す。醤油汁の中には味醂・鰹節・葱などを細く刻んだものを入れ七味唐辛子などを加へることもある。又鍋の中には葱を入れたり菊菜などを入れて豆腐と共に温めて食ふところもある。
長崎湯豆腐といつて豆腐や蔬菜の外に鯛の頭のやうなものを入れて温めて前のやうな方法で食べるものもある。
關西では湯奴と言つて居る。

【例句】

湯豆腐

湯豆腐や妻も嗜む唐がらし　月　倚（ホトトギス）
だし昆布のたぎりゐる湯に豆腐かな　泡水生（同　）
湯豆腐や昔ながらの四疊半　あふひ（同　）
湯豆腐の旗出してあり嵯峨の茶屋　曉　明（續ホトトギス）
湯豆腐や古妻にさす小盃　紅　朗（同　）

生姜味噌（しやうがみそ）

【季題解説】　擂味噌又は粒味噌のまゝを酒でとろりとする位にのばし鍋で煎り上げ、下ろし際に卸し生姜を交ぜ合せて作る　農家などでは生姜に粒味噌をつけて噛じるやうなこともする。生姜の辛味で體内をあたため寒氣を防ぐに效があると云はれてゐる。

【例句】

生姜味噌

霜朝の嵐やつゝむ生姜味噌　嵐　雪（玄　峰　集）

鯛味噌（たひみそ）

【[illegible]】

【年浪草】　（一）鯛味噌は、肉を、味噌と同じく、酒を以て煮熟して、之を食ふ。

註（一）十二月の部にある。

【季題解説】鯛の肉のそぼろにしたものを味噌・味醂などに和して煮て作つたもの、曾ては静岡・明石産のが有名であつたが、今は鯛の澤山とれる地方ではどこにでもある。

【例句】鯛味噌

うかぶ瀬や雪の朝餉の鯛のみそ　露石（俳諧五萬句）
添へて出す杉の小箸や鯛のみそ　守水老（同）

寒卵（かんたまご）

【季題解説】寒の内に生んだ雞の卵のことである、外の時に生んだ卵よりも滋養が多いといつて多く生で用ひられる。又長く貯蔵することも出来る。

【例句】寒卵

苞にする十の命や寒鶏卵　太祇（太祇句選）
よき時をうるまが袖に寒鶏卵　成美（成美家集）
寒玉子賣りて講掛したりけり　梅香（同人）
米櫃の中に團ひぬ寒玉子　方水（同）
寒玉子卽ち割つて朝餉かな　青畝（ホトトギス）
寒玉子ありと障子のとざしあり　敗杖（同）
寒玉子雨宿りつゝ買ひにけり　若沙（同）
二成の黄味もめでたし寒玉子　ながし（同）
ありあけの月の手もとに寒卵　南[illegible]寺（[illegible]ホトトギス）
寒玉子ましろき雛に孵るらん　草城（[illegible]　芝）
手にとればほのとぬくしや寒玉子　虚子（[illegible]　虚子）

寒糊（かんのり）　寒炊糊（かんたきのり）

【季題解説】表具師の年中行事の一で、寒中の水を以て生麩（シヤウフ）を炊くと數十年蓄へても腐敗しないのである。炊いた生麩を甕に密閉し、土中に埋め、年を經たものを「古糊」といふ。表具の裏打用の水糊とする。

【例句】寒糊

地に埋めて甕に寒の日蓄ふる　[illegible]美（[illegible]ホトトギス）

雲腸（くもわた）　[illegible]腸（みのわた）　菊腸（きくわた）

【古書校註】【滑稽雑談】鱈の（略）[illegible]今按ずるに、腸は其形雲の如く、俗に雲腸と稱す。

【本朝食鑑】鱈魚の胃、其の胃煮て食ふべし。或は酢に浸して食ふ、亦佳なり。菊鱠・雲鱠有り。其の形色を以て之を名づく。最も之を賞す。其の強硬なる者、強鱠と称す。味稍之に劣れり。

季題解説 嚢腸とも胃腸ともいふ。動物學上、幽門垂と稱せられるもので、胃の末部が小腸に連ならうとする場所から、房々と數多の絲狀の突起が出てゐるのがこれである。此等の數多の突起は消化液を分泌する作用をする。幽門垂は他の多くの魚類にも見られるものであるが、鱈のが特に美味であるといつて貴ばれる。【参照】動物―鱈

海鼠腸（このわた）

古書抜註

【滑稽雑談】大和本草に云、海参其の腸黄にして長し。醢とす。味佳なり。凡そ諸肉、醢の中、是を以て上品とす。○海鼠は暮秋より初めて、冬月専ら賞す。春暖に至れば味も劣れり。故に冬季に押し用ふるならし。腸は東北の海濱、煮海鼠を製する漁人、取りて醢とし、方産とす。是を取るは冬ともいふべきにや。醢は尤も雑なるべし。

季題解説 海鼠の腸を取つて鹽からとしたもの、色が黄色で絲のやうである。酒客が好んで食べる。三河大島・三河佐久の島のものが有名である。

【参照】動物―海鼠

例句

海鼠腸やつゝましう乾す小盃　流水（ホトトギス）

海鼠腸や重ねうけたる小盃　同（同）

酢海鼠（すなまこ）

季題解説 生の海鼠を薄く切り、三杯酢に浸し、わさびを添へて食するもの。冬の膾物として酒客に珍重せられる。【参照】動物―海鼠

鱲子（からすみ）

季題解説 鱲子は鯔の卵巣から製する。其の卵の粒は極めて細かいものであるが、その卵巣は無數の卵子を包容して頗る大きい。鱲子は臺灣鹿港以南高雄に至る沿岸一帯に、十二月上旬から約二ケ月の間、鯔の漁獲期に造る。季節風が募るに隨つて、産卵期に入つた鯔の大群が北から南へ臺灣西海岸に沿うて南下して來るから、その頃が鯔の漁獲期になるのである。

鱲子は内地でも長崎附近で産するが、臺灣産に比較して其の形が遥かに小さい。そして内地産のは品質が佳良とせられてゐるが、近來は臺灣でも加

[参照] 動物―[illegible]

乾鮭（からざけ）　ほしざけ

古書校註

【三才圖會】生鮭を采りて、腸を去り、屋上に投じて以て曝し乾す、又腹より背に至り、皮を連ねて割り開き、曝し乾す者有り（佐介乃比良岐）。其は松前・秋田多く之を出す。

季題解説

【[illegible]】[illegible]鮭[illegible]

例句

乾鮭

乾鮭や何がし殿は毛唐人　芭蕉（もとの水）
をとゝしのから鮭買うてやすいもの　鬼貫（俳諧七車）
からざけや帯刀殿の臺所　蕪村（蕪村句集）
乾鮭や琴に斧うつひゞきあり　同（明[illegible]）
佗禪師乾鮭に白頭の吟を彫　同（蕪村句集）
からざけや蔦もすさめぬ市の中　同（新五子稿）
乾鮭の骨にひゞくや後夜のかね　同（同）
からざけの片荷や小野の炭俵　同（同）
からざけや小野の芒も枯て後　同（蕪村遺稿）
寒山に木を伐て乾鮭を烹る　同（同）
風呂敷にから鮭と見しは卒都婆哉　同（同）
から鮭や判官殿の上り太刀　同（同）
から鮭やさすが石とも成にけり　也有（蘿の落葉）
乾鮭や換ば木のはし炭の折　几董（井華集）
から鮭に名利のあぶらなかりけり　同（同）
から鮭の口はむすばぬをなしびかな　白雄（白雄句集）
からざけをしわぶりて我皮肉哉　曉臺（曉臺句集）
から鮭や汝も木の端炭のをれ　同（同）
乾鮭の徇を喰をるけしきかな　成美（成美家集）
から鮭の腹にはかくすものもなし　同（同）
から鮭は花さかぬ梅の木ぶり哉　同（同）
乾鮭と鳴り〳〵行くや油筒　雪也（去來抄）
から鮭の阪東武士が最後かな　子規（子規句集）
乾鮭の頭めでたし鬼退治　同（同）
月渓がかける蕪村の像の寫しを見て
乾鮭に目鼻つけたる御姿　同（同）
乾鮭のからついて居る柱かな　漱石（春夏秋冬）
乾鮭を吊れはかけもつ障子哉　計介（同人）
乾鮭の鱗も枯れて月日かな　草城（ホトトギス）

乾鮭の下に動ける婢かな　樹人（同）
乾鮭の荒縄かめる頭がな　半山（同）
日暮れて乾鮭の眼に灯あり　春草（同）
乾鮭も漸く釣りぬ新世帯　虚子（ホトトギス）

【参考】 有名な話では、宇治拾遺物語に、聖寶が上座の法師と言ひ爭つて、賀茂祭の日に、眞裸に干鮭を太刀に佩いて女牛に乗つて大路を渡つたことが見えてゐる。徒然草には、四條大納言隆親が乾鮭を供御に參らせたのをある人が咎めたので、鮭のしらぼし何事かあらんと云つた話が出てゐる。

宗太郎漬（そうたらうづけ）

【季題解説】 以前は非常に盛んに作られ、廣島縣下の重要の産物であつて、正月などには京阪神地方に多く荷を出したが、明治三十五年頃を絶りとして衰へてしまひ、今では一流の料理屋で時に調製する位のものである。夏は腐敗しやすいため冬に製造する。

其製法は、(1)おから（豆腐のから）に小量の鹽を入れ、油を引いた鍋又は焙烙で煎る、之は水氣を拔くためであつて、雪花菜漬の名の如くおからが焦げてはいけないので、焦がさずに水分を除く程度にするので氣ながにとろ火で煎る、(2)煎つた後裏漉として擂り之に極く小量の酢を入れる、(3)これに穴子・にし・芋の實を漬けるのである。魚身は鹽・酢に漬けたものを用ゐる、(4)それを樽漬にするには底に具を置き、それにおから、其上に具を並べ其上に又おからを入れるといふ順序。(5)鉢に盛る時にはおからと具を適度に混ぜ合せる。

宗太郎漬の由來はよくわからない。

熱燗（あつかん）　焼燗（やきかん）

【季題解説】 冬に寒さ凌ぎに酒の燗を殊に熱くして飲む。冷えた身體に熱いのを一口引掛けると五臓六腑に泌み渡るであらう。燗鍋にはチロリと云ふ素焼製の尻の尖つてゐる陶壺を用ゐるのと、硝子製の尻がふくらんで細長い口のついてある銚子を用ゐる場合とがある。前者は火の中へ陶壺を挿し込んで酒を煖め、後者は火の上に銅壺を載せて酒をあたゝめる。燗鍋は何でも火鉢でも火さへあれば手輕に燗が出來て當座の寒さ凌ぎには誂へ向きである。

【例句】
熱燗　あたゝめよ瓶子ながらの酒の君　召波（春泥發句集）
榾折て雪の戀慕のわかし酒　曉臺（曉臺句集）
熱燗に頭巾脱ぎする眉目かな　夢筆（ホトトギス）

熱燗にねぎらひ返す使かな　不器男　（ホトトギス）

酒うすしせめては燗を熱うせよ　虚子　（續ホトトギス）

参考　酒は古く冷酒のまゝにて用ゐたやうであるが、白樂天の詩に「林閒煖レ酒燒ニ紅葉一」ともあるから熱したことも古いと見ねばならない。延喜式卷四十に新嘗會の直會の日の雜器を註して、「瓷四口、盛ニ參議已上白貫黑貫酒一、并煖レ酒器」とある。

玉子酒（たまござけ）　卵酒（たまござけ）

古書校註

【滑稽雜談】　日華に曰、鷄子、豆淋酒に和すれば、水臓を暖む。和俗の寒月におゐて專ら飲となすはこれらの據にや。古來は沙汰なし。近世冬に用ゆ。

【年浪草】　（一）同書に曰、鷄卵酒は、精を益し氣を壯んにし、脾胃を潤ふ先づ、水五盞、麹上の黃衣一盞、砂糖半盞を用ひて拌勻し、之を煎ずることと數十沸、別に鮮けき鷄卵一箇を用ひ、殼を去り汁を取りて湯中に投じ、頻々攪き合せ、溫に乘じて之を飮む。此れ酒を嗜まざる人に宜し。或は鷄卵一箇を用ひ、外殼を破り開き、煎酒中に瀉り盡し、箸を以て頻に之を攪き、溫に乘じて之を飮む。

註　（一）「本朝食鑑」を指す。

季題解説　湯吞などに鷄卵を割つて入れ砂糖で味をつけ、熱燗の酒を注ぎ掻きまはして啜る。體内を溫め寒氣を防ぐ效がある。又之を飮んで寢ると風邪が治ると言はれてゐる。**參照**　生姜酒にあり

例句

玉子酒

いざ一杯まだきににゆる玉子酒　蕪村　（月並發句帖）

親も子も醉へばねる氣よ卵酒　太祇　（太祇句選）

盃になるもの多し卵酒　同　（同）

吹きやすす胸はしり火や卵酒　同　（同）

玉子酒賓主を二分ツ小盃　召波　（春泥發句集）

沫を消す内儀老たり玉子酒　同　（同）

草の戸や盃足らぬ鷄卵酒　同　（同）

寢酒せむ先たのもしき鷄卵百　同　（同）

玉子酒十重たる小さかづき　同　（同）

朔日や智どのわせてたまご酒　几董　（井華集）

かりそめの怒とけけり玉子酒　花明　（同人）

盞にふくるゝ色や玉子酒　上史　（同）

閾の事も思ひながらに玉子酒　菊太　（ホトトギス）

めをとしてめをともてなす玉子酒　躑躅　（同）

いふほどの恙ともなし玉子酒　春太　（同）

松葉酒（まつばざけ）

季題解説 松の葉を刻み、水と砂糖とを混ぜ陽の熱によつて醱酵せしめたもの。寒氣の抵抗力を增す爲め、冬季之を飮用する。又卒中にもよいといふ。

寒造（かんづくり）

古書校註

【滑稽雜談】 和國にて酒を造るに、寒中に釀する者、寒造りと稱す。其の味、尤も來年に至りて佳なる故に之を賞す。（一）杜詩にいへるも此の類也。併に冬に許用する所、其の製する事を云ふ也。寒曬し等の詞も季に用ふる也。只現在の事を用ふべきにこそ。

註 （一）同書に杜甫の詩句「蟻浮乃蠟味」を擧げ、その註に、蟻浮は酒名、蠟味とは此の酒臘月に作れるを言ふとある。猶、時珍本草の「酒は臘月釀造する者、數十年を經て壞れざるべし、是を老酒と謂ふ」を引いてゐる。

季題解説 寒中の水で酒を釀すこと、又釀した酒の稱である。寒造りはその味が殊に優れて居り、長く貯藏にたへるのである。

酒を造るには、最初酒母（酛）を作る。酒母は蒸米・麹・水を適當に配合して仕込み「擢入」と「暖氣入」を行ひ、自然に諸醱酵を行はしめ、（仕込後七日乃至三十日で熟成する）次に酒母を種とし、これに蒸米・麹・水を適當に配合して醪を仕込む。醪は擢入して醱酵と溫度經過を調節すれば、仕込後二十日乃至三十日で熟成するから、酒槽（清酒搾器）に入れて搾る。卽ち清酒を得るのであつて、最初搾り出た白濁の激しい清酒を「荒走り」と稱する　酒槽から垂れた清酒は一週間以上清澄せしめて「滓引」（滓を除去することをなし貯藏する。以上清酒の釀造工程は、十一月から三月下旬までの期間に行はれる。

尙、酒造從業者を「藏人」といひ、太古支那杜康なる人が酒を發明したと云ふ故事に依り、藏人の長を「杜氏」と呼ぶ。この下に「頭」といふのがをり、これが副杜氏であつて杜氏に代つて命令し得る資格がある。麹を製造する係長を「代司」と云ふ。この下に釜屋（釜たき）・上人・中人・下人などの働き人がゐる。酒母を仕込んで十時間內外の後、擢で酛を擂り、つぶす、これを「酛擂り」又は「山卸し」と云ふ。この時の唄を「酛擂唄」と云ふ。醪が醱酵盛んとなれば白泡が桶を溢れ出るから、時々竹で「泡消」をする。夜中も一人はこれが爲めに不眠で番をする。これを「泡番」と云ふ。

醪の仕込みは三回に行ひ、第一回仕込、翌日「仕込休」、三日目に第二回仕込、四日目に第三回の仕込をして終了する。そして第一回目の仕込休みを「踊」といふ。〔參照〕夏—新酒の火入　秋—新酒

【例句】

寒造

夜深きその情こそ寒づくり　宗因（梅翁宗因発句集）

並蔵はひゞきの灘や寒作り　其角（五元集）

礁の十挺だてや寒づくり　召波（春泥発句集）

杜氏の大吉日や寒造　泊雲（ホトトギス）

酒庫口のはき替草履寒造　同（同）

甑唄につゞくくだかけ寒造　同（同）

湯けぶりのなかのゆきゝや寒づくり　釣児（同）

どん〳〵と倉ひゞきして寒造　比沙鷗（同）

櫂入れて金輪際にとゞく見ゆ　夜半（續ホトトギス）

雀罠つくるいとまや寒造　泊雲（同）

ホットドリンクス

【季題解説】寒い時は何でも温いものがよい、ここでは温かい飲みものの意である。ホット・ワイン、ホット・ウイスキー、ホット・レモンなどと言つて夫々の飲料に熱湯を加へて調製するのである。

葛湯（くずゆ）

【季題解説】葛粉にてほどよく砂糖を入れ水で解き、之に熱湯を注いで攪拌すれば透き通る糊のやうなものが出来るが之が葛湯である。冬期の好餌である。[illegible]葛根掘る[illegible]

【例句】

葛湯

しろ〳〵と腹に冷えたる葛湯かな　森水子（ホトトギス）

小火鉢に夜更けて搔く葛湯かな　蕉吟（昭和一萬句）

生姜湯（しやうがゆ）

【季題解説】生姜・蜜柑皮・砂糖に熱湯を注ぎ又は煎じたもの。冬季身體を暖め風邪を防ぐために飲用する。

蕎麦湯（そばゆ）

【古書校註】

【年浪草】本朝食鑑に曰、（蕎）蕎麦を用ひて熱湯に撹じ、排匀して徐々に之れを飲む、而して能く食を消すと言ふ。然れども、蕎の性寒、寒を禦ぐの理無し。惜し哉湯身を暖むるの故ならん

【季題解説】蕎麦粉二匙か三匙ほどを茶碗などに入れ、熱湯を注いで溶かし、それに砂糖を適當に加へて搔きまはして飲むのである。體が温まると

いつて多く老人が用ゐる。〔参照〕蕎麦掻（冬）、秋―蕎麦の花(ハナ)

例句

蕎麦湯

我のみの柴折くべるそば湯哉　蕪村（蕪村句集）
葛水の月日ながれてそば湯かな　也有（蘿葉集）
長ふるす程はないとてそば湯かな　同（同）
赤椀に龍も出さうなそば湯哉　一茶（七番日記）
そりや寐鐘そりやそば湯ぞよ〳〵　同（同）
親しみを信に重ねて蕎麦湯かな　孤羊（懸葵）
古を好む男の蕎麦湯かな　鬼城（ホトトギス）
たらちねのちゝはゝゐます蕎麦湯かな　鬼橋（同）
寝ねがてのそば湯か[illegible]庵主かな　久女（同）
貧にして賤しからざる蕎麦湯かな　句佛（同）
老人へそば湯まゐらす時刻かな　波留女（同）

蕎麦掻(そばかき)

蕎麦掻餅(そばかきもち)

季題解説　小鉢又は丼やうのものに蕎麦粉を適宜に入れ熱湯を注ぎ、よくこね、それを箸で千切り煮汁をつけて食ふのである。田舎などでは煮汁の代りに生醤油をつけたり又は餡をつけたりして食ふこともある、體が暖まるといふて寒い晩の寝しななどに多く用ひられる。殊に老人などが嗜むやうである。〔参照〕蕎麦湯（冬）、秋―蕎麦の花(ハナ)

例句

蕎麦掻

蕎麦かきや半俵と號す竹はり師　聽泉

ホットケーキ

季題解説　手軽なおやつ向きの菓子。焼きたての熱い処を賞味する。牛乳、砂糖、卵、メリケン粉、ベーキング・パウダーなどを攪きまぜて、フライパンの上に杓子で掬つて直径五六寸の大きさに流して焼き、裏返して焼き、二枚焼いて一つに重ね、上にバタを円角に切つてのせ、蜂蜜又は糖蜜を添へ、ナイフ、フォークで食べる。日の短い冬の日など、熱いところを食べるといふ處に季感がある。

焼芋(やきいも)

焼芋屋(やきいもや)

季題解説　大きな鐵鍋に鹽を撒き、その上で蒸焼きにした甘藷。皮を剝かずに丸ごと焼いた「丸焼」（關西ではほつこりといふ）と、皮を剝き縦に二つに切つて焼いた「切焼」との二種が普通である。「西京焼」と言つて、皮を剝き薄く切り鹽と胡麻を振りかけて焼いたものもある。又近頃「壺焼」と

言つて、素焼の大きい壺の中に皮を剝かない丸ごとのを鈎に吊して焼くのもある。

尙別に赤藷を蒸籠で蒸したふかし芋があるが、之を焼芋の分類に入れることは勿論いけないことであらう。屋臺店のものと、一戸を構へたもの（夏は氷屋、冬は焼芋屋）とがある。最近は百貨店でも焼芋を賣つてゐる。スヰート・ポテトといふ焼芋のイミテエションには季感がない。

例句

焼芋

焼芋や今日を今日として女のあり　再生（ホトトギス）

塁鳴や己が子を見し焼芋屋　浮舟城（同）

焼けてんのとおいもの小錢さしだして　諸人（續ホトトギス）

刈上餅（かりあげもち）

季題解説 稲を刈りあげてしまつた時、餅を搗いて祝ひ、四隣又地主などへ配る、初冬、農家で稲も刈つて、ほつとした時の心祝である。

例句

刈上餅

御佛に刈上餅をまゐらする　落葉（ホトトギス）

大いなる刈株餅をもらひけり　露子（續ホトトギス）

亥の子餅（ゐのこもち）

亥の子（ゐのこ）　玄猪（げんちよ）　御厳重　嚴餅　おなりきり

古書校註

【初學抄】亥の子の餅、（十）同、上の亥日也。永安四年に始まる。

【山之井】亥の月の亥の日、餅をつくりてくひ侍れば、病をいやすとかやいふ本文ありて、大内にもいはひせさせたまひ、かちんを色々にそめて、萌・なをなどにきませ、いでふをさしそへて、それぐにも、たまはせ給ひし[illegible]もかしもにも、身々の禮りに、ちいさきうす・きねとゝのへて、わかおもふ事もつきねなど、ことぶきし侍る。

【増山井】亥の子の餅、御厳重、或は御玄猪。十月亥の日餅を食すれば萬病を除くとし、師忠除集に見えたるに、禁中にも内藏寮より此の餅を奉れば、朝備にてきこしめすと、公事根源に侍り。此の内藏寮よりたてまつる餅の餘風をうつして、今も御げんてうとて人々にわかち給ふとぞ聞え侍ると、世諺問答にあり。

【日次紀事】此の月亥日、禁裏、赤白黒の小團餅を群臣に賜ふ。之を御玄猪と謂ふ。或は嚴重と稱し、又嚴者と謂ふ。（略）凡そ今日を祝するは、猪の性多く子を産む故に、亥の月亥の日之を祝して子孫の繁榮を祈る者也。女子に有つては特に之を祝す（略）地下の良賤の家も亦、粗ぼ斯の儀あり。中華も亦今月亥日餅を食し萬病を除くと云ふ。

【滑稽雜談】徐玄初學記卷二十六、雜五行書に云、十月亥の日餅を食へば、

人をして無病ならしむ。○公事根源に云、亥子餅、上亥日。此の餅は内藏寮よりそなへ奉る。朝餉にてきこしめす。十月の亥の日餅を食すれば病なしと云ふ本說あり。此の事いつの頃より始まるともみへず、延喜式にのせたれば、往古よりはやありける事ならんかし。(略)○長明四季物語に云、(略)子夜行と云ふふみには、十月は亥の月にして、亥の用ひらるゝ事、亥は子を一年の月の數うみ、うるふには十三うみて、めでたくめざましきまでいみじき物なればとて、此の事をこなはるゝよし侍る。○日本歲時記に云、亥子餅、七種の粉を合せて作る。七種は大豆・小豆・大角豆・胡麻・栗・柿・糖也、(注略)。かゝる事を下にうけて、此の日民間にいたる迄、糕を製してくらふ。又榻鴫曉筆といへる書を見侍りしに、景行天皇二十三年十月亥日餅を奉りし由しるししぬれ共、又國史に見えず。○今按ずる所、說多しといへども、古賢も和朝の起りを治定なし。今俗間において女子を持ちたる人殊に賀す。其の謂あるにや。彼の家の子をおほく平產するの義なるべし。又一說、愛宕殿へ供するなど云ふ。彼の神は陰神にて、亥の方に鎭座ある筈の義也。又平產の義を祈るにも深き心あるべし。當代にも禁裏・院中・諸家を始めとして、將軍家幷に武家の大小名此の日を賀す。餘節に過ぎたり。民間に至つては、亥の日三つある時は、二番・三番と稱して、嘉例とすとて祝する也。

津國木代村亥子貢。攝陽群談に云、能勢郡木代村門(カド)太輔數代、(略)今に繁榮也。家記に云、往古より毎年玄猪の餅を供す。其の先神功皇后に起る。昔此處及び切畑大丸の近里は、山城國八幡の神領たり。因て善法寺門主より之を捧ぐ。(略)○これらの說猶尋ぬべし。

【貞丈雜記】御なりきりとは、猪の子の餅の事なり。碁石ほどの大さに丸くして、うすくおしひらめたる餅なり。紙に包みて下され、又御前にて御手づから下さるゝもあり。御まいりきりと書きたる書もあり。御なりきりの事なり。御まいりきりとあるは、書き誤まりなるべきか。

【栞草】太平御覽　初冬其の月亥に建す。亥の日亥の刻に餅を食へば病なし。錦繡萬花谷　此の餅を食へば、萬病を除く。政事要略　家は多子なる者なり。毎年十二子を生む。閏年には十三子を生む故に、婦人これを羨みて、此の日に至り餅を供して神を祈る。○ゐの子のこと、其の始め詳かならずといへども、延喜式にも載せられたれば、古くよりあることなるべし。亥の子の餅は、大豆・小豆・大角豆・胡麻・栗・柿・糖、此の七種の粉を合せてつくるよし、正親町公通卿の抄並に御湯殿記等にその式委しくみえたり。

【東都歲事記】上亥日。○玄猪御祝儀、諸侯申中刻御登城、大手御門並に櫻田御門にて御篝を焚かせらる。貴賤餅を製し時食とす。武家にては公の例にならひて、白赤の餅を家臣に給はるなり。町家にては牡丹餅等製す。又、中亥をも祝ふ。

註 （一）十月。（二）この箇所に、月の中亥の日三ある時は、小間餅に添へられる草薬のその三度によつて異なることが述べてある。

季題解説 十月の亥の日に亥の子餅をついて祝ふ習慣がある。亥の子餅を食ふと萬病を除くといふ言ひ習はしがある。

「亥の子の晩に餅つかん家は、箸で家建てて、馬の糞で壁塗つて……」といふ亥の子の晩に藁を束ねたものを持つて各〻の家の門口を叩き廻り、歌ふ謠がある。（奈良縣越智岡村）

例句

亥の子餅

しら箸の夜のちぎりやゐの子餅　宗因（梅翁宗因發句集）

紅葉の下部あらんゐのこかな　其角（五元集）

玄猪とや祖父のうたふ枝折萩　同（同）

三か月のおぐらき程に玄猪かな　同（同）

人の来て言ねばしらぬ猪子哉　太祇（太祇句集）

畫になつて亥子と知りぬ重の内　同（同）

著ぶくれて小者等遊ぶ亥の子かな　泊雲（ホトトギス）

剪り／＼て菊は乏しき玄猪かな　田士英（同）

町近に住みて亥の子のお百姓　律朗（同）

臼庭の窓はりかへし亥の子かな　村家（續ホトトギス）

渡船場やあり合したる亥の子月　默禪（同）

参考 十月の初亥の日に餅を食すれば萬病を除くしといふ。柳の臼杵を以て搗き猪子の形とし錦を以て裹み、御料とす。又親王より諸家に紙に包み菊紅葉等を入れて賜ふことあり、武家にても行はれた。この夜、小兒等、亥の子石又は藁の棒などにて地面を敲き、「ゐのこゐのこ」と呼んで諸家を廻ることがあつた。

乙子(おとご)の朔日(ついたち)

乙子(おとご)の餅(もち)　川浸餅(かはひたりもち)

古書校註

【增山井】（一）人の乙子たる者、そが日いはふ事也。

【日次紀事】（二）今日は一年中朔日の終也、俗に乙子の朔日と謂ふ。倭諺に季子を乙子と稱す。

【滑稽雜談】日本歲時記に曰、十二月朔日、殷の代には建丑の月を歲首とせしかば、今日則ち殷の正月元日なり。國俗此の日を乙子の朔日と云ふ。又乙子の餅とて餅を製し祝ふ事あり。いつの頃より始まりし事にや。されば一年の間事なく朔日を悉くかぞへ來しことを祝ふ意なるべし。私に云、太郎月も正月を云ひ侍れば、十二月は乙正月といふべきをば、只朔日と云ふか。

【日本歲時記】いつの頃より始りし事にや。一年の間事なく朔日を悉くかぞへ來りし事を祝ふ意なるべしと云へり。今日製する餅を乙子のもちとい

ふ。又川渉餅ともいふ。水上を祀る義ともいへり。此の日餅を食へば水難なしといへる俗習によりて、武家にてもこの事あり。交代の砌、海上安全を祈らるゝことなるべし。船宿船頭の家にてはとりわき祝ふなり。

【年浪草】　此の朔日、一年中朔日の終也。俗に乙子の朔日と謂ふ。和俗に季子を乙子と稱し、初子を太郎子と號す、故に歳初の月を以て太郎月と日ひ、歳末の月を以て乙子月と日ふ。朔日又之に准ず。

【栞草】　（略）又此の日餅をくらふ。これを弟子の餅といふ。江戸の俗、これを川渉餅といふ。俗傳に、これを食へば水難なしと。

註　（一）十二月。（二）十二月一日。

参考　十二月朔日に末子の爲に祝うて餅を搗く。これを食すれば水難を避くといふ。十二月を乙子月といふは、正月を太郎月といふに對へてであるとも、又一年中の朔日の最終だからともいふ。餅を食ふことは、昔支那で高辛氏の子七歳にして河に溺れその靈を慰める爲に餅を供へたことから出ると傳へる。今でも京都等では、季子のある家は十二月朔日に小豆飯を焚いてこれを祝ふ。

餅米洗ふ

季題解説　餅搗をする二日程前に餅米を洗ひ桶などに入れ水に浸けて置くのである。澤山餅を搗く家ではこの餅米を洗ふ用意がなかなか大仕事である。暮の家庭の一行事で、餅搗の前奏曲とも言ふべきものである。　【参照】餅搗

餅搗

賃餅　引ずり　餅搗歌

古書校註

【日次紀事】　（一）此の月尾、傭夫晝夜と無く、木槌を肩にして街衢を巡り、高聲に餅擣と呼ぶ。倭俗、米丼に餅を舂くを加都と謂ふ。貧民之を雇ひ、以て餅を舂かしむ。日間は暇無き者、又は乞人の餅を請ふを嫌ふ者、多くは夜に入つて之を舂く。

【東都歳事記】　（二）此の節より餅搗街に賑し。其の體尊卑によりて差別あれども、おほよそ市井の餅つきは、餅搗く者四五人宛組合ひて、竈・蒸籠・臼・杵・薪、何くれの物擔ひありき、傭ひて餅つかする人糯米を出して渡せば、やがて其の家の前にてむし立て、街中せましと搗きたつることいさましく、晝夜のわかちなし。俗是を賃餅又は引ずりなどいふなり。都べて下旬親戚に餻を送り歳暮を賀す。是を餅配りといふ。鹽魚・乾魚を添ふるなり。

註　（一）十二月。（二）十二月廿六日の條にある。

季題解説　年の瀬も押しつまつてくると正月の用意にどこの家でも餅搗に

忙しい。現今は都會地では餅屋に注文するのが普通であるから、各家庭での餅搗はあまり見られなくなつた。二日位前から餅米を洗つて用意して置いて、一家の男女が集つて餅搗に興じたり、又餅搗人を頼んで門前とか中庭などで餅搗をさせるのは面白いものである。【參照】餅 餅莚 餅配 寒餅 氷餅造る

例句

餅搗

有明も三十日にちかし餅の音　芭蕉（笈日記）
かち杵に血を見る餅のつよさ哉　鬼貫（俳諧七車）
餅歌や君が歲暮の馬下りに　同（同）
震災流火しづなりて
妹が子や薺とけて餅の番　其角（五元集）
もちつきや犬の見上る杵の先　許六（五老井發句集）
餅つゐた音は夢驗よ朝烏　支考（蓮二吟集）
餅つきやものゝ答へる深川寺　太祇（太祇句選）
餅つきや焚火のうつる嫁の貌　召波（春泥發句集）
高き屋のお年にひゞけ餅の音　也有（蘿葉集）
旅人にきぬたは古し餅の音　同（同）
横につく鐘は寒きを餅の音　同（同）
庵更に幽なり餘所の餅の音　同（蘿の落葉）
餅搗の日も幸齋か茶湯かな　几董（井華集）
餅つきや今それがしも古郷人　一茶（七番日記）
迹臼は鳥のもちやら西方寺　同（同）
餅臼にそれうぐひすよく〱　同（同）
門並や只一臼も餅さわぎ　同（同）
あこが餅〱迚並べけり　同（同）
のし餅の數手の迹はかくれ家ぞ　同（同）
餅とぶやばたりと犬の大口へ　同（同）
世の中やおれがこねても餅になる　同（同）
お袋がお留手をさる指南かな　同（おらが春）
餅搗が隣へ來たといふ子哉　同（同）
犬の餅鳥のもちも搗れけり　同（一茶句帖）
餅搗やせがむ子供をはり合に　同（同）
古ばゝが丸める餅の日傭哉　同（九番日記）
餅つきの臼にさし込朝日哉　迎山（萬題集）
餅つきや臼も薪も松くさし　之道（同）
餅つきや火をかいて行男部屋　信水（續猿蓑）
裝つけたなりで運ぶや餅の竈　助宜（今人五百首）
餅つきやともし火くらき持佛堂　尹日（小弓俳諧集）

餅搗

餅つきの手傳ひするや小山伏	馬佛	（[illegible]）
餅搗や腰掛にせし杵桶	併小星	（ホトトギス）
餅搗や篝火明りこぼれ來	爽雨	（同）
杉垣や餅搗く音のたどたどし	七三郎	（同）
餅搗の火の骨燃え落つ雪の上	湖村	（同）
編み立てし藁莚にさ餅搗けり	岳居	（同）
餅搗や聞うちはなゝ嵐山	蕪子	（同）
餅搗のはじまつてゐる隣家かな	涼暮	（同）
餅搗いて竿に掛けたる襷かな	冬青	（同）
吉田屋の餅搗を見に來りけり	落山人	（續ホトトギス）
餅搗や障子にうつる竈の火	静波	（同）
餅搗の手傳人も歸りたる	竹堂	（同）
餅臼を轉がしながら借り來る	温亭	（温亭句集）
おかゞみのほか／＼けむる筵かな	鬼城	（鬼城句集）
三日目を鏡餅とはなしにけり	虛子	（ホトトギス）

餅（もち）　鏡餅（かゞみもち）　熨斗餅（のしもち）　切餅（きりもち）　餅切る（もちきる）　餅燒く（もちやく）

季題解說　年の暮に搗く餅のことで、延し餅にするもの、鏡餅にするもの、小判餅にするもの樣々である。荒筵の上に並べて乾かす、水餅にして置けば長く保つ。「もち」は「もちひ」の略言である。**參照** 餅搗（モチツキ）

例句

餅

餅の粉の家内に白きゆふべかな	太祇	（太祇句選）
鷄が餅踏んづけて通りけり	一茶	（七番日記）
當にした餅が二所はづれけり	同	（一茶句帖）
隱れ家や猫が三疋餅の番	同	（同）
三角の餅をいたゞくまゝ子哉	同	（同）
一枚の餅の明りに寢たりけり	同	（九番日記）
餅箱の中に萎びぬ餘り商衣	銀螢	（同人）
筵目の荒き餅かな田舍より	大愚	（ホトトギス）
膨れ餅いさゝか灰を嘗めにけり	虛吼	（同）
兄弟子の見てゐる餅を盗みけり	提河	（續ホトトギス）
歳時記を繰る間に餅のこげにける	月倘	（同）

餅筵（もちむしろ）

季題解說　餅を搗いてのし餅にしたり、又は丸くもんで列べる筵である。床の間とかあまり人の入らない室などに臨時に敷いてあるのをよく見かける。**參照** 餅搗（モチツキ）

例句 餅莚

草庵に一つの寶や青むしろ　去来（去来發句集）
大雪に餅をならべし莚かな　巣兆（曾波可理）
神棚の灯で並べけり餅むしろ　一茶（一茶句帖）
小莚や餅を定木にもちをきる　同（同）
小鼠の渡り歩くや餅莚　月斗（同人）
須彌壇の裏にのべたり餅莚　越南樓（ホトトギス）
端ふみて佛づとめや餅莚　青冬（同）
風邪の床辺りて囲ふ莚かな　七峰（同）
神棚の前より敷きぬ餅むしろ　虚子（句集虚子）
書棟や下に並べし餅莚　同（ホトトギス六）

餅配（もちくばり）

季題解説 年末各家庭で餅搗をする際に餡餅とか豆粉でまぶした餅をつくつて、親族・知人・近隣に配る習慣がある。重箱などに詰めて暮の街を女中とか丁稚とかが配つてゆく光景はおもしろい。——京都では「こゝろみの餅」と言つてゐる。〔[illegible]〕餅搗。

例句 餅配り

餅配り同酒人ごまめ奏してより　其角（五元集拾遺）
乙松や手を引れつゝ餅配　一茶（七番日記）
我門へ来さうにしたり配餅　同（おらが春）
妹が子の背負ふた形りや配餅　同（同）

餅の札（もちのふだ）

古書校註 【栞草】（二）〔青山通称〕江戸にて、非人ども門々に立つて、餅舂の祝ひとて餅を乞ふ。乞ひ得たる家と、こはざる家との印に、門の柱に紙にて判をして張り置くなりと云々、
註 [illegible]の書にある。

例句 餅の札

弱法師我門ゆるせ餅の札　其角（五元集）
草の戸もおかしはせぬや餅の札　一茶（一茶句帖）

餅花（もちばな）

古書校註 【日次紀事】児女、小丸餅を柳枝に貼りて之を玩ぶ、是を餅花と謂ふ。
【[illegible]】[illegible]として、（[illegible]）此の日餅を柴に付けて花に造る。

註（一）餅搗の日。

柱餅（はしらもち）

【古書校註】

【栞草】 肥前國長崎にて、としのくれの餅搗の日に、終りの一臼の餅を、家の柱へまき付けおき、正月十五日、左義長の火にてこれを炙り食ふなり。これを柱餅といふ。このこと、西鶴が世間胸算用といふ書にしるしたり。

【參考】 西鶴の世間胸算用四、長崎の柱餅に「可笑しきは、柱餅とて、仕舞ひ一臼を大黒柱に打ちつけ置き、正月十五日の左義長の時、これを炙りて祝ひける。」

寒餅（かんもち）

寒の餅（かんのもち）　氷餅（こほりもち）

【季題解説】 寒中に搗いた餅。寒中に搗いた餅は黴を生ずることがない。かきもちにしたり、貯藏したりする。參照 餅搗（一）

【例句】

寒餅

寒餅を切るに吹き募る夜風かな　濱人（ホトトギス）

貸二階寒餅並べありにけり　蘭村（同）

寒の餅海苔よ胡麻よと搗きにけり　砧女（續ホトトギス）

けふ寒のあけるといふに餅をつく　虚子（同）

【參考】 書言字考節用集六服飾に、「寒餌（こりたて）、氷餅」 御湯殿上の日記慶長三年十月一日の條に、「とびたよりこい一折こほりかちん一折しん上申。（二）」

水餅造る（みづもちつくる）

水餅（みづもち）

【季題解説】 餅は搗いてから日數が經つと自然黴が生えたり乾割れしたりするので、それを防ぐために甕・壺などの類に水を張り、その中に餅を入れて貯へることをいふのである。又軟い餅を好むためにとくに寒餅を搗き、それを寒水に漬けて貯へる場合もある。參照 餅搗（一）

【例句】

水餅造る

水餅や笊の下なるこぼれ水　百川（續ホトトギス）

餅の水すこしにごりてつめたけれ　美津女（同）

水餅の壺中靜けし年の宿　龜二（同）

水餅の弱に形もなかりけり　自得（同）

燋糟を食ふ（さうさうをくらふ）

【古書校註】

【增山井】 （一）一日。もろこしに荊楚の人之を食ふ。（（二）原文）。

【滑稽雜談】 歲時記に云、荊の俗、十月一日、燋糟を食ふ。○唐の杜甫の

詩に云、燋糟一盤に萃る。(一)これらの(三)二事、和朝において沙汰なし。近來俳書に之を載す。作者心得べし。
【年浪草】事文類聚に曰、峡人十月一日多く蒸甏を以て節物と爲す。荊楚の人多く燋糟を食ひ、或は糖に作す。故に杜詩に云、蒸甏千室の如く、燋糟一盤に萃る。

註 (一)十月。(二)事文類聚。(三)この前に丹墳を述べて居り、それと燋糟を食ふとの二つを指す。

赤豆(あづき)の粥(かゆ)　赤柏(あかがしは)

古書校註

【増山井】共工氏の子、冬至にうせたりしが、疫鬼となれり。赤小豆をおそるゝ故に、冬至の日あづき粥をもて是をはらふと、荊楚歳時記に有り。此方にも、冬至ならねど、(一)此の朔日にはあからがしはとて、赤小豆の飯を用ふる事有り。
【年浪草】風土記に曰、天日・正南・黄鐘、長を踐む。饘粥病を追ふ。微く休口を納る。注に云、この日始めて芽動、饘粥を爲り、幼を養ふを以て、俗尙赤豆を以て糜と爲す、色を象る所以也。或は云、冬至の日、赤豆粥を作りて、厲鬼を攘ふ。共工氏不才子、赤豆を畏る。

註 (一)十一月

参考 拾芥抄に世風記を引用して「正月十五日亥時、煮小豆粥、爲天狗祭、庭中案上、則其粥凝時、向東方再拜、長跪服之、終年無疫氣」とあり、土佐日記正月十五日の條に「今日あづき粥煮る」とある。物類稱呼に「さくらがゆ加賀ざふすみ但馬」四季物語に「推古の御代よりある事にて、赤は陽の色をかゝせ給ふ御事にて、あづきの御かゆ給はせ給ふとぞ、冬の陰氣を陽德にて消させ給ふ御心なるべし。」

蒸(ふかし)飯(めし)　おしめし　飯ふかし

季題解說 冬季、冷えた飯を蒸して食ふことである。

例句
蒸飯　傾いて噴きはじめけり飯蒸し　䣊春(山茶花)

雜(ざふ)炊(すゐ)　御慈也(おじや)　牡蠣雜炊(かきざふすゐ)　芋雜炊(いもざふすゐ)　韮雜炊(にらざふすゐ)

季題解說 冬の寒い日、腹を煖めるに好適な食物である。もともと冷飯から造るものと、白米から造るものとあるが、粥よりも少し硬い目に炊き、醬油・味噌・或は殘り物の汁などで味をつけ、野菜・魚鳥肉を加へて煮るのである。俗に「御慈也(おじや)」といつてゐる。牡蠣を入れたのを牡蠣雜炊、芋を入れたのを芋雜炊などゝ言ふのである。

例句

雜炊　雜炊の椀のぬくみのなつかしく　喜太郎（ホトトギス）

雜炊に風邪の父を起しけり　外山（續ホトトギス）

牡蠣飯（かきめし）

季題解說　牡蠣を混ぜて炊いた飯。一升の白米に鹽加減して水九合ほどで仕掛け、煮え立つた時よく水氣を切つた牡蠣の剝身五合ほどを入れて炊くのである。釜のまゝ食膳に出し、しやもじで交ぜて食ふのである。また牡蠣を煮出汁と共に、炊きあげた飯にかけて食ふ方法もあり、別に清汁に大根おろしと揉み海苔の薬味をつけて出す。この料理を專業とするのを「牡蠣船」といひ、昔は廣島地方から海路都會地に來て、適當な河川の橋詰などに繫留し、冬の間、客を呼んだものであるが、近來は一年中船をとゞめ夏季その他は一般の料理をしてゐる。船内も立派な座敷を設け、電話も引いたりしてゐる。牡蠣の殼を割るのは多く若い女で、これを「牡蠣割女」と言つてゐる。牡蠣飯は腹を溫めるし、消化もよいし、滋養もあるので病人にも食べられる。［參照］動物―牡蠣。

例句

牡蠣飯　蠣飯の釜描きたる行燈かな　鳴雪（昭和一萬句集）

咳（せき）

季題解說　冬は寒氣の爲めに呼吸器管を冒され易い。人はなりはひの爲めにそれぞれの仕事に忙殺されてゐるが、知らぬ間に咽喉を冒されてごほんごほん咳をしてゐる人をよく見受ける。

例句

咳　もの問へば咳入る僧や納經所　了悟（續ホトトギス）

嚏（くさめ）

はなひり　くしやみ

季題解說　徒然草に「嚏をくさめといふはこの頃よりいへるにや、はなひることゑのくさめといふに似たればなり」とあるので「くさめ」「くしやみ」「はくしやみ」「くつしやみ」などの語源が解る。それには覺え易いやうにちやんと唄まで出來てゐる。「一褒められ、二誹られ、三惚られて、四風邪を引く。」といふのである。すなはち嚏を一つするのは何處かで自分の事を褒められてゐるしるし、二つするのは誹られてゐるしるし、三つするのは誰かに惚れられてゐるしるし、四つするのは風邪を引くしるしだといふのである。そこで二つ續きの嚏は一般に忌まれて、喜劇や落語などに、蔭口を云はれてゐる當人がそれを立聞きしてゐてハックシコハックシヨと二つ續きの嚏をす

みところがある。

例句

嚏

嗜話の鼻をこそぐる嚏かな　青畝（ホトトギス）

老僧や佛に向ひ大嚏　清風郎（同）

頬被ふりほどけたる嚏かな　元波志（續ホトトギス）

嚏する我の後や咳拂　虚吼（同）

水洟（みづばな）

古書校註

【年浪草】鼽、鼻中水を出すを鼽と曰ふ。（略）寒氣鼻に窒る也。月令に曰、季秋、夏令を行ふときは、則ち民、鼽嚏多し。

季題解説　水洟を垂らすといふやうなことは、いかにもむさい、しみったれた事であるが、然し寒い時分には誰も思はずつるりと洩らす。そこに何となく張りの抜けた、年寄臭い、侘しさはあるが、一面又隱さうとして隱しきれない人間味のあたゝかさも感じられる。

例句

水洟

稽古著の袖に水洟ぬぐひけり　郊雨（同人）

水洟のとめどもなうて味氣なや　草城（ホトトギス）

念力もぬけて水洟たらしけり　青畝（同）

水洟や聴聞なれて眠り婆々　月尙（同）

水洟や一念うつす古俳諧　野風呂（同）

水洟のほとけにちかくなられけり　曉水（續ホトトギス）

水洟やいますこしなる寫物　竹露（同）

湯ざめ（ゆざめ）

季題解説　沐浴のあとの温味が冷めて、ぞく〳〵と惡寒を感ずる、之が湯ざめである、冬の情味の一つである。

風邪（かぜ）

ふうじや　感冒（かんばう）　流行風邪（はやりかぜ）　風邪氣（かざけ）　風邪聲（かぜごゑ）　鼻風邪（はなかぜ）　頭風邪（あたまかぜ）

お多福風邪（おたふくかぜ）　お染風邪（おそめかぜ）　風邪薬（かぜぐすり）　風邪の床（かぜのとこ）

季題解説　風邪を以て總稱されてゐる病氣のうちにはいろんなものが包含されてゐるさうで、昔から俗間で唱へられてゐるものにも、鼻から引く鼻風邪、[illegible]から引く[illegible]風邪、頭から引く頭風邪、背中から引く背風邪、[illegible]ところ[illegible]ってそのために引く[illegible]風邪、顔の腫れるお多福風邪、年頭の頃に流行るお染風邪、其他[illegible]たくさん種類があって皆それ[illegible]に異った[illegible]であり、又その病状について[illegible]、風邪聲・風邪[illegible]・[illegible]・[illegible]の[illegible]・風邪[illegible]なと[illegible]に情趣[illegible]、風邪薬・風邪

の床・風邪の夫・風邪の妻・風邪の兒など、凡そ風邪に關する題材を一々拾ひあげてゐては全く際限がない。

昔は風邪の神を追拂ふと云つて鬼の假面などを被り太鼓を打つて家々を廻つて歩く物貰ひがあつて、それを風邪の神と云つてゐた。近松の夕霧阿波鳴渡にも「やあ彼奴は何者ぢや、風の神か鳥威のやうなざまで、何ぢや喜左衛門に逢はう」といふ一節がある。今でも斯ういふ風習が地方的に禁厭として殘つてゐる所がある。

例句

風邪

襖開いて風邪の主出で來り　思杏（同人）
わが胸に咳入る風邪の子供哉　佛頂子（同）
眷月のさやけきを見ぬ風邪心地　橙黄子（ホトトギス）
枯野上る月血の如し風邪心地　呂仙（同）
風邪藥枕の上に零しけり　王春（同）
たゞ一目逢ひたしとて十餘年前の戀人尋ね來る
咳けば風邪かと問ひぬかなしけれ　寸七翁（同）
風邪熱やにがきがなかの白湯の味　よりに（同）
大阪の風邪を貰うて戻りけり　供子（同）
かばかりの風邪にも細る命かな　花衾（同）
風邪に寢て佛勤めもないがしろ　正義（同）
老妻や吹きさましのむ風邪藥　正蜂（同）
かりそめの風邪と答へて哀れなり　色風（同）
花買ひに出でし戸口や風邪心地　すゞえ（同）
ひさ〳〵にたましひ遊ぶ風邪かな　佐美人（同）
風邪とのみ思ひておはす母悲し　水貝（同）
風邪の妻起きて燈明上げにけり　富久子（同）
はつきりと風邪ともつかず黄水仙　天城子（同）
村中につんぼう風邪の流行りけり　七里峽（續ホトトギス）
風邪の子の手足よごれてあはれなり　左千夫（同）
言傳をきゝゐる我も風邪ごこち　白洗（同）
風邪の床見舞はれはおちて全りにけり　曉水（同）
風邪の子のよくきゝ分けてあはれなり　烽火（同）
もり〳〵と我頰を咬む風邪の神　旭川（同）
風邪藥色こく出でゝたのもしき　末曾二（同）
送られて機嫌斜や風邪の神　俳小星（同）
貧乏の風邪引きやすとなりにけり　蓑助（同）
つんぼ風邪癒えてめつきり耄けにけり　十雨哇（同）
久米の子や洟を紙ぶく、風邪ひける　青郎（同）
樺色の頰紅風邪のタイピスト　誓子（ホトトギス雜）

胼（ひゞ） 胼藥（ひゞぐすり）

古書校註

【滑稽雑談】 莊子、逍遙遊の篇に曰、宋人善く手を龜らしめざる藥を爲る者有り。（略）○寒月のなす所なれば、毛吹草等の俳書、冬に之を押す。和訓にひゞとは、或は、ひゞわれの略と云ふ。胝父あかゞりとも訓ず。考ふべし。

【年浪草】 釋名に云、皸は、寒にやぶられて、手足の皮いたむを云ふ。ひびとはひえひゝらぐ也。ひゝらぐは痛む也。

註 （一）滑稽雑談、瘃の項に、「順和名に云、瘃、和名、比美（略）」を引いてゐる。

季題解説 寒氣に侵されて手足の皮膚に細かい龜裂を生ずるをいふ。グリスリン・烏瓜の汁、その他脂肪性の藥を塗る。參照 皸（アカギレ）

例句

胼

勤行に腕の胼やうす衣　太祇（太祇句選）

胼の手を眞わたに恥る女かな　几董（井華集）

胼となる風もふせがず小家ども　乙二（たのゝえ草稿）

胼いのる神もありげに遠小里　同（同）

胼の頬に涙流して泣く兒かな　三川（新俳句）

室州妻を迎ふるに

胼の手をいたはることを怠るな　月斗（同人）

胼の手をいたましと見つ別れけり　感來（ホトトギス）

古妻や用ひ減らせし胼藥　紅醉（同）

なりはひになれにし胼の姉妹　菁果（同）

畫きたる胼の藥の獸かな　蝸牛（同）

そのかみの邪宗の寺の胼藥　英輔（續ホトトギス）

はしためのいたはりあへる胼藥　潤（同）

胼の頬を相寄せたりし母子かな　虚子（句集虚子）

皸（あかぎれ） あかゞり　皸　皹

古書校註

【滑稽雑談】 或は云、あかゞり、靡賤の者には四時を論ぜず手足に生ず。冬と決し難し。又云、（一）凍裂するといふ義によらば、季に用ふべきか。

【年浪草】 釋名に曰、皸、あかぎれ也。寒にあたりて手足のはだへさけ、あかゞりとして割れたるがごとく也。きれとがりと通ず。○（時・貴、老少に依らず、血燥の人之を患ふ。治法は、内、血藥を以て之を滋し、外、藥を塗る。但し民間奇藥多し。

註 （一）字彙に曰、[illegible]、[illegible]足拆裂也。

季題解説 寒冷に中りて手足の皮膚に裂傷を生じたものをいふので、赤切

の裂である。またあかがりともいふ。水仕事に携さはるものに多い。膏薬を張る。〔參照〕胼（ひび）

例句

竝べあふ胝の手先や寮の尼　召波（春泥發句集）
皸をかくして母の夜伽かな　一茶（發句集）
あかぎれの膏藥つゝむ落葉哉　木導（句　筆）
あかぎれの手に白粉をときにけり　良子（同　人）
皸の手に受取つて御札かな　秋平（ホトトギス）
皸の足痛はしく逝かれけり　正之（同　）
たてよこに血の吹き走るあぎれかな　鬼城（同　）
あかぎれに當ることはせを掛けにけり　今夜（續ホトトギス）
皸の踵の餘る草履かな　素方（同　）

參考　萬葉集卷十四東歌に、『稻春けばかゞるあが手を今宵もか殿のわく子がとりて歎かむ』又神樂早歌に、『安加加利ふむな、しりなる子。』狂言あかゞりに、「あかがりは戀の心にさも似たりひびにまさりて思はれぞする。」

霜燒（しもやけ）

霜腫（しもばれ）　瘃（しつくち）　瘃墮（ちくだ）の患（うれひ）

古書校註

【滑稽雜談】　順和名に云、瘃、和名比美、辨色立成に云、之毛久知。○寒月に及びて、手足或は耳のほとり、寒風を得て、肌痕の紫皮となるを、俗に霜やけ・霜ばれと云ふ。是則ち瘃也とぞ。

【栞草】　前漢趙充國傳　瘃墮の患。注に云、寒に因りて、瘃げて指の墮つるなり云々。○和俗いふ霜やけなり。

季題解説　烈しい寒冷に中り手・足・耳・頰など局部の血行が妨げられる結果、皮膚の色が變り腫脹し、灼熱感・搔痒感を與へる。雪を弄ぶ子供や水仕事などする婦女子に多く見るところである。所謂凍傷といふものゝ輕いものである。又霜朽ともいふ。〔參照〕凍傷（トウシヤウ）

例句

霜燒
霜燒の手に大粒の涙かな　紀水（同　人）
霜やけをこすり歩きぬ古疊　かな女（ホトトギス）
霜やけの掌をたゝきゐる唱歌かな　濁流（同　）
福耳に霜やけできし尼ぜかな　燥々（同　）
しもやけに足袋をかむせてはきにけり　今夜（續ホトトギス）

雪燒（ゆきやけ）

古書校註

【增山井】　雪やけ、（一）同。

寒灸

寒灸よりどころなき膿をつむる　南丈（ホトトギス）
寒灸や一間どころに老同士　落魄居（同）
日の暮るゝせはしきなかや寒の灸　和香女（續ホトトギス）
細き身を裏表より寒灸　南丈（同）

木の葉髪

季題解説　俗に「十月（陰暦）の木の葉髪」などと云つて、やうやく冬めく頃、木々の葉のおのづからふるひ落つるに伴れて、人間の毛髪も亦常よりは多く木の葉の落ちるやうに脱落することを云ふのである。萬物は凡て春夏秋冬の四季の推移に從つてその影響を受けずにはゐられない。植物は造化の命令通り夏は繁茂し、冬が來れば落葉する。人間もその例を免れることは出來ない。炎熱の候の下には汗を出し、嚴寒に際しては胼皸を切らせる。そして木の葉の一時にふるひ落つる時に當つては、又多く毛髪の拔け落つると云ふ現象を免れ得ない。朝々梳る度毎に櫛の齒にからまる拔毛の多いのに驚くのである。

例句

木の葉髪

木の葉髪すく〳〵や土産のお六櫛　雪溪（ホトトギス）
おとろへの見えし鏡や木の葉髪　落葉女（同）
母に似てのぼせ性なり木の葉髪　母宵（續ホトトギス）
がわ〳〵と鳴る冂衣や木の葉髪　白風（同）
新しき櫛の齒にあり木の葉髪　虛子（同）

手足荒るゝ

季題解説　體質によつて冬期手足の皮膚がかさ〳〵して小さな皸裂を生じ半ば剝落狀になることがある。皸・胼の前期的症狀であつて、その原因は皮下脂肪の缺乏にある。これを手足が荒れるといふ。水仕事に携はるものにはあり勝ちのことである。

悴かむ

ここゆ

季題解説　冬期、手足の凍えて自由を失ふことを悴かむといふ。敢て手足と云はず、時には唇邊迄悴んで言語機能に故障を生ずることさへある。

例句

悴かむ

凍へ來し手足うれしくあふ夜哉　几董（井華集）
凍死人麥藁帽をかぶりけり　手寒（ホトトギス）
鬼樺の根に寄りかゝり凍死人　紅實（同）
棒立ちにステッキ持てり凍死人　雨圃子（同・）

かじかめる手をもたらせる女房かな　青邨（續ホトトギス）
足枷といふものはめて悴める　誓子（同　）

吹雪倒れ（ふぶきだふれ）　凍死（とうし）

古書校註

【俳諧初學抄】（略）ふゞきだほれ、此等北國に有る事也。

【增山井】ふゞきたふれ、俳。

【栞草】雪吹倒れ。北越雪譜　暖國にては、雪吹を花のちるさまに擬したる詩作詠歌あれど、この雪が國にては、雪吹にあふ者は九死一生、云々。

圖（一）雪後

季題解説　吹雪の烈しい時、往來の者道を失ひ歩行に窮し、倒れて遂には死んでしまふことがあるがそれをいふのである。山間僻陬の地で見るところであるが、また市街地でさへ年少・老年の者が死ぬことがある。殊に泥醉せるものに多い。然し近年は減少した。

吹雪倒れに似て非なるものに「凍死」がある。これは吹雪による死ではなく寒氣凜烈な爲めに上述の樣な者が死亡するに至るのである。

何れも檢死を受け、その引取人に渡される。引取人の無い者卽ち旅行のものの場合は共同墓地或は無緣墓地に葬られる。雪國の悲しい事實である。

宗教

明治神宮祭

季題解說　十一月三日、官幣大社明治神宮の例大祭をいふのである。明治神宮は東京市澁谷區代々木にある。大正九年十一月一日御鎭座　明治天皇・昭憲皇太后の二神を奉祀してある。

明治天皇は叡聖文武、古今東西に比類のない大英主にましました、その千古不滅の御偉業と御仁德深い御治世とは國民の等しく欽慕景仰し奉るところであつて、御在世時十一月三日の天長節こそは國民が陛下の赤子たるの誇を持つて、心の底から聖壽を御ことほぎ奉つた忘るゝことの出來ない祝日であつた。卽ち此日を以て明治節を制定あらせられ、又明治神宮の例大祭を行はれることになつたのである。從つて此日、明治神宮では例大祭の外に中祭明治節祭をも行はれる。當日は午前九時から約二時間祭式が執行され、勅使の御差遣がある。國民崇敬の念に燃ゆる神宮とて、雨の朝、風の夕參拜者の絕ゆる時とてはないが、此日の參詣者は實に夥しいものである。〔參照〕明治節　神宮競技

大正天皇祭

季題解說　十二月二十五日は大正天皇崩御の日である。宮中では　天皇御親祭の儀があり、多摩御陵には勅使が差遣される。

天智天皇御國忌

古書校註

【增山井】　天智天皇の御國忌。(一)三日。崇福寺にて行はる。

【日次紀事】　天智天皇御忌、天皇、十年(二)今日崩ず。(三)誓願寺創建の大檀越也。故に之を修す　陵は山科御廟野に在り。古へより今日廢務し、是を國忌と稱す。

【滑稽雜談】　公事根源に云、三日。天智天皇の御國忌也。崇福寺にて行はる。朱鳥三年より始まる。天智天皇は舒明天皇の御子、御母は皇極天皇也。御位につかせ給ひて、近江國志賀の郡大津の宮にましましき。中興の主にておはしますによて、國忌は時にしたがひて改まれども、是はながく替らぬ事と成りにき、太神廟其中すべきにや。

【走禮輪】　三日。江州志賀郡崇福寺にて之を行はる。天智帝近江の國に都を開き玉ふ時、先づ勝地を求めて、一區の大伽藍を建立し玉ふ。是、崇福

寺、今の志賀寺也。天智帝は中興の聖主にて御座(オハシマ)す。依つて御國忌末代にも廢することなし。大祖廟とも申すべきにや。天皇近江國大津の宮に崩じ玉ふ。又相傳ふ。山階に幸し玉ひ、人知らず天に登り玉ふ。山に御沓を留む、則ち其所を御陵とす、今山階の山上に有り。下の原野を御廟野と云ひ、里を御陵村と號す。

【年浪草】 令義解に曰、國忌は先皇崩ずる日を謂ふ。○公事根源に曰、十一月三日、崇福寺にて行はる。朱鳥二年よりはじまる。天智天皇は舒明天皇の御子、御母は皇極天皇なり。御位につかせ給ひて、近江の國しがの都大津の宮にましましき。中興の主にておはします。よて、國忌は時にしたがひてあらたまれども、是はながくかはらぬ事と成りにき。太祖廟ともいひつべきにや。崇福寺は近江の國志賀寺也。ながらの寺とも詠ずるよし八雲御抄にあり。天智天皇の御時、此の地に瑞光ある故に精舍を建立し給ふ事、元亨釋書に見えたり。天智帝、太師大友氏に敕して、崇福寺を移して三井寺を建つると云々。

註 (一)十二月 (二)十二月三日 (三)多くの歲時記類は崇福寺とするが、同寺はいつか廢絕してやうである。三井寺とするは、或は崇福寺廢絕後の事で、崇福寺とするものは其に據らぬものか。との說は究を要する

神(かみ)の旅(たび)

【箋註】

【初學抄】 神おくり、十月一日也。神むかへ、十月晦日也。

【滑稽雜談】 按ずるに、神送と云ふ事、俗に云ひならはしける事にや。本說も未だ聞かず、大社にもしれがたし。察する所、神なし月と云ひ、出雲へ神の集り給ふと云ふ說の侍れば、附會して、神送り・神歸り、或は神の留主など申すにや。誹・連歌にて作例有るまじけれど、俳諧にて存する所也。又、(一)詞花集の好忠が神無月の歌など、沙汰なきにもあらずかし。

【年浪草】 毛吹艸に日、神送、十月朔日。但し住吉の神送は九月卅日也、云々。諸神出雲國大社へ臨幸し給ふを神送とて神祭あり。仍て神無月の名あり。諸子の說紛々として未詳なしといへり。然れども、吉田秀賢神代卷抄に云、伊弉册尊は生老病死を一年の中に示さるゝ也。十月崩御也。故に神無月と云ふ。陽神は不生不滅也。陰神は法を唱ふ、されども不滅の義也、云々。世諺問答も又、伊弉册尊崩御のゆゑと記し侍へり。風雅の道には法實事とするはよき也。神無月の名あれば、神送・神の留守・神迎等の事ありて、風雅のたすけ也。詞林采葉の說もあり。又淨藏貴所とかや有驗の僧、出雲の大社に籠れり。頃しも神在の時にや、神々の仰せに、今宵に樂れる僧と何某の女と婚せんと聞えけれど、有るまじき事に思ひ捨てゝ都に歸りけりを、神の告に符合することとありて、扨は我が宿世なりとて、彼女をさし殺して逃れぬ。年經て又參內の時、彼のさし殺したると思ひし女、關に

疵の有りけると廻り合ひ、終に夫婦のかたらひをなせりと、云々。

【栞草】此の月諸神出雲の國大社に集まりたまひ、男女の縁を結び給ふといふより、神送り・神の留主・神迎へ等の事あり。

註（二）詞花集巻四に見える[illegible]は、「何事も行きて祈らむと思ひしに神無月にもなりにける哉。」

季題解説　舊曆十月に、諸國の神々が出雲に集り給ふといふ傳説があるので、その出雲への神の旅立をいふのである。神無月といふことについても古來色々の說があり、之を雷無き月の訛轉とも云ひ、十月は新嘗祭の新酒を醸す月であるから醸成月といふところであるとも云はれてゐる、兎に角神々が出雲に集まるといふ有力な文獻はないやうであるが、俗說としては餘程古くから云ひ傳へられてゐる。又俗間、諸神出雲に集りになつて男女の縁をお結びになるのであるとか、このお集りには安藝の宮島だけが御出にならないなどと云つてゐる。神事としては福岡縣志賀海神社で舊九月晦日に祭神が出雲へ旅立ちますのを奉送する神渡祭といふのが行はれてゐる。【參照】神送（カミオクリ）　神の留守（カミノルス）　神在（カミアリ）　神迎（カミムカヘ）　神還（カミカヘリ）　時候　神無月（カンナヅキ）

例句

神の旅

都出て神も旅寝の日數哉　芭蕉（己が光）

神の旅酒匂は橋と成りにけり　其角（五元集）

蔦ひよろひゝよろ神の御立げな　一茶（七番日記）

旅じたく神の御身もせはしなや　同（同）

御遷參はおく病神や大社　同（同）

不性神置みやけかよ貧乏雨　同（九番日記）

凩に葉守の神も旅出哉　北溟（恒誠）

葛城の神もおたちか小夜しぐれ　露川（小弓）

野宮

淋しさやけさ立し神の小柴垣　田社（俳諧古選）

[illegible]

結びおきて結ぶの神は旅立ちぬ　子規（子規句集）

神の旅梅橋の落葉して　悟空（春夏秋冬）

神の旅日々楪の風呂沸かす　北洲（懸葵）

絶壁に注連ひきはえて神の旅　村家（ホトトギス）

旅立ちの迫れる神に祈りけり　寸陽（同）

俳諧のおくのほそみち神の旅　雲弟（續ホトトギス）

とつかはと祠の神も旅立ちぬ　虚子（句集虚子）

參考資料　陰暦十月一日は全國諸社の神々出雲大社に集りて、男女の縁を結び給ふ、故に是月を神無月と云ひ、諸社に祭神無き意なりと傳ふ。而して諸社の神々出雲に向ひ給ふを「神の旅」と云ひ、その旅立ちを送るを「神送り」と云ふ。此の時諸社に祭神不在となるを以て「神の留守」と云ひ、

反對に出雲に在ては之を「神在」と云ひ、かくの如き神々の集會を「神集ひ」と云ひ、終りて神々出雲より歸るを「神返り」と云ひ、之を迎ふるを「神迎へ」と云ふ。

是れ固より俗説なり。出雲大社と縁結びとの關係は、祭神が大已貴命と素戔嗚命との合祀なれば、素戔嗚命奇稻田姫を妃と爲し、出雲八重垣の歌を詠じ給ひし故事に附會せし説なるべし。

神送（かみおくり）

神送る

[季題解説] 舊暦九月晦日の夜、神々が出雲へ御旅立になるといふので、これを送ることである。

埼玉地方にお竈様送りと云つて十月三十一日（新暦のため一月遅れとして）みるこに赤飯など炊き、お竈團子（首なし米團子）といふのを作つて荒神様を祀る風習がある。又此の日吹く風を神送風といふ。埼玉地方で「お竈風」と云つてゐるのがこれである。[季題] 神の旅

[例句] 神送

荒るゝとも[illegible]と知はたうとし神送　鬼貫（鬼貫句選）

布子着て淋しき顔や神送り　去来（去来發句集）

神送る禰宜にお供の顔もなし　也有（蘿葉集）

まめな衆忘れ給ふな神送　一茶（七番日記）

我宿の貧乏神も御供せよ　同（發句題叢）

吹上る雲に木葉や神送　露川（類題發句集）

留守風お供風を送りけり　子規（子規句集）

赤幟疱瘡の神を送りけり　同（同）

新しく建ちたる宮の神送　青々子（ホトトギス）

炎上の宮成らなくに神送　多景主（續ホトトギス）

一筋に神をたのみて送りけり　虚子（句集 虚子）

神の留守（かみのるす）

[季題解説] 古歌に「何事も行きて祈らむと思ひしを社はありて神無月かな」などと歌はれてゐるやうに、陰暦十月は神々が出雲に御旅立になるので十月中の社は神様が御留守であるといふ意である。埼玉地方ではお竈様の留守祝と云つて十一月十四日（新暦のため一月遅れ）に荒神を祀り、留守居[illegible]と云つて[illegible]をつくる風習がある。[季題] 神無月

[例句] 神の留守

お留守居に頼みおくべし玉津島　芭蕉（[illegible]句選）

留守のまにあれたる神の落葉哉　同（小文庫）

神の留守

神の留守能く女房を守るべし　嵐雪（玄峰集）
葱の上神のお留守とにほふなり　成美（成美家集）
鶺鴒や御手洗へ來て御留守にも　先之（同）
神の留守燈明講を結びけり　石居（同人）
稲積んで神の留守なる社かな　禾牛（ホトトギス）
吉田屋の庭にも留守の祠かな　梅史（同）
みあかしや留守なる神に仕へをり　歌村（同）
熊野なる潮の神は神の留守　今夜（同）
大吉のみくじ給はる留守の宮　ちかし（同）
高麗狗の影うづくまる神の留守　沙川（同）
神の留守巫女もなすなる里歸り　水竹居（同）
たまに來て熊野三社の留守詣　常紫郎（同）
神の留守蠟燭立を直しけり　虚吼（續ホトトギス）
大杉の降らす枯枝や神の留守　越南樓（同）
水棹などあづけてあるや神の留守　子鴨（同）

神在（かみあり）　神集ひ（かみつどひ）

季題解説　十月一日から一ケ月の間は神の旅とて八百萬の神々が出雲へ旅立たせられる、だから出雲大社にはこの一ケ月間は日本國中の神々が集りおはしますことになるのである、〔季題〕神の旅（カミノタビ）　出雲大社神在祭（イヅモオホヤシロカミアリマツリ）　時候　神無月（カンナヅキ）

例句

神在　庭燎焚く神在月の大社かな　雨城（續ホトトギス）

神迎（かみむかへ）

季題解説　陰暦十月晦日、神々が出雲の御旅から御歸りになるのを迎へる行事である、官幣小社志賀海神社では陰暦十月晦日の夜半から神の還行を祝ふ神待祭が行はれる、又埼玉地方ではお竈様迎へと云つて、十一月三十日（新暦故一月遅れ）に荒神を祀る、年頭の子供のある家では神様に供へた團子を桝から落して、團子の轉る方に嫁に行くとか、又嫁を貰ふなどといふ。此あたり、縁結びの爲め神々が出雲にお集ひになり、縁をお取決めになつて歸られたのだといふ心持が出てゐる　〔季題〕神の旅（カミノタビ）

例句

神迎　ぼた餅は欄にいざ是へ福の神　一茶（九番日記）

湯島天滿宮祭禮（ゆしまてんまんぐうさいれい）

古書校註

【東都歳事記】（一）十日。湯島天滿宮祭禮。別當喜見院にて、今日は當社勸請の日なりといふ。九日より賑へること、二月十日のごとし。別當より砥餅となづけて、餅を砥石のごとく四角にたちて神供とし、後、産子の家々へ配る。或は云ふ、當社地守神戸隱明神なればなりと。

註（一）十月十日

丹波出雲社祭（たんばいつもしやまつり）

古書校註

【滑稽雜談】（一）下子日或は午日。（略）此の社は京より五里西に出雲村と云ふ所侍る。神縁は三穗津姫なるべし。然れば、杵築の大社を移し候と云ふものにや。此の所は山田氏の家に往古の記錄侍るなり。祭は例年十月廿日より同廿五日までの内にあたる子の日或は午の日のはやくあたるを取りて祭る　御影山の祭と云ふ。此の所深山也。社官是を行ふ也。按ずるに、古俳書に大社の神事、中冬の日など侍るは、若し此の祭禮にや。一說、出雲大社也と云々。猶考ふべし。

註（一）十月。

加羅左手神事（からさてしんじ）

古書校註

【滑稽雜談】（一）十一日より十五日間。（略）神道名目抄に云、加羅佐手の神事は、出雲佐田の社に有り。當社は伊弉諾・伊弉册二神の鎭座也。十月は陰神伊弉册尊崩れます月なれば、諸神此の社に會集し給ふ。故に當所において神有月と云ふ。此の神事種々神異有り。就中十一日より十五日の間に、海上より小蛇一疋しら波に乘つて濱邊に寄來る。是海神より佐陀の社に獻上物也と云ふ。其のたさ一尺ばかり、金を以て彩るが如し。甚だ美麗、是を龍蛇と云ふ。神官等潔齋して濱に出で、其の來るを待ちて、海藻を以て手に請く。龍蛇來て藻の上に曲り居れば、則ち神前に備へ進む。これを加羅佐手の神事と云ふ。一說に、素盞烏尊簸の川上にて八岐の大蛇を退治し給ひし由意を、後世に示すの義と云ふ。加羅左手とは、大蛇を斷ち給ふ劒を一に韓鋤の劒と云ふ。加羅左手とは其の轉語にや。

註（一）十月。

嚴島鎭座祭（いつくしまちんざさい）　御燈消（おしめし）

古書校註

【滑稽雜談】嚴島鎭座祭社能　道芝記に曰、十月末の亥の日より十一月初

宗像祭

古書校註

【滑稽雜談】 (一)上卯日。（略）公事根源に云、宗像祭、つくしの胸形の社の祭也。氏人是を執行ふ。此の神は天照大神と素盞烏尊とちかひ給ひし時、素盞烏尊のうみ給ひし御神也。田心姫命・湍津姫命・市杵島姫命、此の三神也。日本紀神代上卷に委しき事は見えたり。（略）當代此の宗像氏も絶えてなければ、此の祭も今世に於て沙汰なき事なりけらし。

【年浪草】 一說に、宗像郡田島村に在りと。蓋し筑前・大和・山城、以上三所に宗像の社有る也。三神共に素盞烏尊の女也。

註 (一) 十一月。

道祖神祭

古書校註

【滑稽雜談】 天王寺道祖神祭。傳へて云、此の祭は、天王寺の村里の辻々に、(一) 毎年今日、童子共立集まりて、幸の神を祭る也。往來の人に錢を取りて、出さざれば此所を通さざる、是を道祖祭と云ふ。させる事なし。今按ずるに、一に剝祭といふよし。錢十六文を乞ふ。若し錢なくば衣類を脱ぐと云ふ。仍て剝祭の名有り。往古はわらんべのみならず、祭の法也とて、若き者出でて道を遮りしよし。ある公使の飛脚に妨げしより爭論と成り、果ては廳に訴へし由にて、大人の出づる事を停止し給ふと。

【年浪草】 道祖神祭、十一月十六日。攝州天王寺領天王寺村に在り。道祖神、又幸の神と稱す。實は猿田彦命と、云々。○祭の日一村の童部集り、往來の人に錢を乞て祭祀の資料とす。錢を與へざれば、繩を以て往來を遮り留めて、終に繩を以て卷きたをすと也。依て此事を知る人は、商賈共に今日此處を通路せぬと也。唯堺の魚荷飛脚は、故ありて通路の煩ひなき也。

註 (一) 十一月十六日。

參考 陰曆十一月十六日、大阪府（攝津國）天王寺領内天王寺村の祠に於いて行ふ祭なり。俳諧歲時記 十一月 道祖神祭の條に「祭る所猿田彦命なり、この日一村の童あつまり往來の人に錢を乞ふて祭禮の料とす、錢をあたへざれば戲れに繩を以往來を遮り留む、よりてこのことをしる者は商賣といへども今日この所を通らず、但堺の魚荷飛脚はゆゑありて道路わづらひなしとぞ」と記されたり。そも道祖神とは、衢を司る神にして、古く之を岐神とも云へり。即ち日本書紀（神代上）に伊弉諾尊女神伊弉冉尊と泉津平坂に於いて千人引岩を距てゝ絶妻の誓を爲し「此れより莫過そ」と仰せられて御手の杖を投げ給ふ、之を岐神と云ふと見えたり。フナドは又クナド

とも云ひ、此處より來る勿れとの意なり。或は久之をサヘノ神ともサイノカミとも稱す。サヘは塞の義にしてフナドと同じく魔物の襲ひ來る道を遮斷する意なり。

又此の側に猿田彦命を祀る所以は、日本書紀神代下に天孫瓊瓊杵尊此の國土に降臨し給ふ途次、天八達之衢（アメノヤチマタ）に一人の神あり、その鼻の長さ七咫、その名を猿田彦大神と云ふと見えたるに據るものにして、卽ち後世猿田彦命を以て衢の神と爲し、之を八衢彦（ヤチマタヒコ）神・八衢姫神と稱して祭れり。然るに其後一種の淫祀の如くなり、各地の衢毎に男女の偶像を安置し神として、幣帛・香花等を供へ、或は男女の性器を模し之を獻りて吉凶禍福を祈るに至れり。卽ち本朝世紀の朱雀天皇天慶元年九月二日の條に「近日東西兩京の大小路衢に木を刻みて神を作り、相對して安置す、凡そ其體像丈夫に髣髴たり、頭の上に冠を加へ、鬢の邊に纓を垂る、丹を以て身に塗り、緋の彩色を成し、起居同じからず、遞に各々貌を異にし、或は作るところの女形、丈夫に對してこれを立つ、臍の下、腰の邊に陰陽を刻み又は繪きて、几案を其前に構へ、坏器を其上に置く、兒童猥雜、拜禮殷懃にして、或は幣帛を捧げ、或は香花を供じ、號けて岐神と云ひ、又御靈とも稱す、未だ何の祥たるを知らず、時人これを奇とす」と見えたるが如し。惟ふに此の道祖神と性器崇拜との關係は、古典に記す猿田彦命・天鈿女命の故事と、當時民間に廣く行はれたる此の種の信仰とが結合せる結果にして其の當初に於いてはかくの如き因を爲すものは豪も存せざりしなり。

鎭魂祭（たましづめまつり）　ちんこんさい

古書校註

【[illegible]】（一）中寅日　舊事本紀に云、饒速日尊元年十一月丙子朔、庚寅、宇摩志麻治命殿内に天璽瑞寶を齋き奉り、帝后の爲に御魂を崇鎭し、壽祚を祈請す。御鎭魂祭是よりして始まる（[illegible]）。[illegible]に云、鎭魂八神、今世神祇官に在り。[illegible]公の時吉田山に遷しまつる。公事根源に云、鎭魂祭、中寅日、此の祭も加法に行はるゝには、[illegible]・御所と成るべきにや。まれは白河院の御時、院中にて行はれ侍りき。東宮・中宮にても皆ゝあるべき也。天安二年にとゞめられ侍りしを、貞觀元年十一月神祇官にて行はる。今は年々の事になれり。[illegible]此の祭當世は斷絕し侍り。八神殿は今に神祇官に形のごとくましますなり。

【栞草】中の寅。○吉田八幡の祭なり。

註（一）十一月。（二）以下、一木丈石の箚筆による。

諸手船神事（もろたぶねしんじ）　[illegible]

【[illegible]】美保神社は出雲國美保關にあり、事代主神（コトシロヌシ）（惠比須神）及び三

穗津姫命の二座を祀つてをる。

事代主神がこの地に在まして釣魚を以て樂となし給ふた。折節天孫御降臨のことがあつて、天神使稻背脛を熊野諸手船（亦名天鳩船）に載せ遣つて高皇産靈尊の勅を傳へた。卽ち事代主神御父大國主神に國讓りの大義を勸め給ふて、自ら海中に八重青柴垣を造り船の枻を踏み傾けて隱れ給ふた。此故事によつて毎年十二月三日（もとは十一月中午日）諸手船神事を執行する。此の日神事に供奉する氏子は何れも裃著用で參殿し、神籤によつて渡される狩衣を懸命に奪ひ合ふのである。これを御籤奪ひといふ。素肌に烏帽子狩衣を著た十八人の櫂子、籤取は二艘の諸手船に分乘して、事代主神に擬した神職長官は岸に居り、使神に擬した一同は船に居り、拍手應答の式があり、寒風吹き荒れて霰玉散る海上を濺けむりを上げて漕ぎ競ふ事六回でこの神事を終るのである。その年の病災を受けないといふので賽客が群集する。

春日若宮祭

御祭　後日の能　日使　揭鳥

古書所載

【日次紀事】（一）南都春日若宮祭夜宮。興福寺の寺僧頭屋田樂有り。凡そ頭の僧一人なれば則ち兩頭と謂ふ。是、兩人を兼ぬるの義也。此の時、前に頭を勤むる所の僧一人之に加はり、其の勞を助く。二人有る時は則ち片頭と謂ふ。兩片相合の義なり。長谷川黨、春日の社に參詣、野太刀を携へ馬を牽く。是を遍照院の護といふ。御旅所の前に於て、流鏑馬有り。或は新願に因りて、人をして馬に乘りて馳驅せしむ。是、競馬の儀也。夜に入り亥の刻許に、若宮の拜殿に神幸ありて神樂有り。其の後、燈燭を滅し、社家各神體を擁護す。其の外、各供奉、香を手爐に點じて之を携へ、暗中警蹕して旅所に奉遷す。茲に於て、篝火を張燈し、音樂・相撲等次第之を修す。諸人參詣するに、恰も白晝の如し。

（一）南都春日若宮祭禮當日。古へ式日無し。寛正年中之を定む。巫女及び伶人、田樂・猿樂あり。供奉の僧、松の下鳥居の南方に於て之を觀る。奉行職の人亦茲に在り。樂人の上臈役守、下馬して供奉す。是を闇自代と爲す。茲に於て陪從の樂有り。田樂藝術を施し、猿樂開闔を唱ふ。是を松の下の開闔と謂ふ。凡そ猿樂始めに臈太夫新に吉事の詞を作りて萬歲を祝す。是を開闔の詞と謂ふ。而して後、舞曲始まる。其後、金春・金剛兩座の太夫供

到着する。それから御旅所での式が始まる。即ち宮司の祭典祝詞、田楽・市長等の玉串奉奠、神楽、東遊、田楽舞、細男舞、舞楽の奉上などがあつて、一方、春日参道では競馬、場外では流鏑馬が行はれ、全く公園一體を古典情緒で包んでしまふ。冬の日が早く暮れて、参道にはあかあかと篝火が燃え、又高張提灯に灯が入る。午後十一時、再び燈火を滅し、宮司の奏する秘文の祝詞で還幸の儀が始まる。

十二月十八日、後日の能（又は御宴の能） 即ち直會であつて、御旅所の庭上で午後一時頃から夜七時迄まで、金春流のお能が催される。これが今日行はれる薪能である。 〔參照〕薪能

例句

春日若宮祭

舞ひ人に庭燎の煙引かれけり　ちかし（續ホトトギス）
大藤の後日の能の御紋かな　子丑（同　）
鹿の繪の屏風がこひの樂屋かな　同（同　）

參考

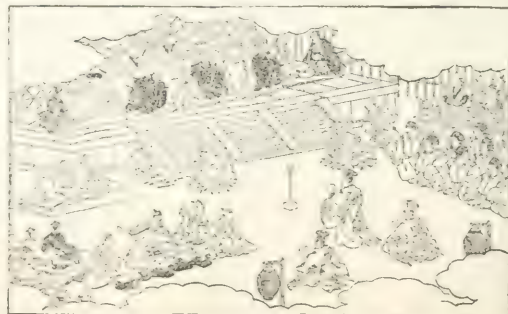
毎年十二月十七日、奈良縣（大和國）奈良市春日野町官幣大社春日神社の攝社春日若宮に於いて行ふ大祭なり。一に霜月の御祭と稱し、或は單に御祭（オンマツリ）とも稱す。舊くは陰暦十一月廿七日に行ひたり。その儀、先づ廿六日に興福寺の僧頭屋田樂あり、次に長谷川黨（春日に六派の地侍あり、平田・長川・長谷川・葛上・乾脇・散在是なり）野太刀を携へ馬を牽きて春日の社に參詣す、之を遍照院の渡と云ふ。是より先き御旅所を作り、之に掛鳥と稱し雉一千二百五十六羽・兎百三十四疋・狸百四十二疋の贄、及び公饗の飾物並に菓子等を供ふ。次に御旅所の前にて流鏑馬あり。夜の亥刻、神輿若宮の神殿に御幸す、神樂ありて後ち燈火を消し、神官神體を擁して闇中御旅所に奉遷す。了りて燈火を點じ音樂・相撲等を行ふ。二十七日祭禮の當日、巫女及び伶人の田樂・猿樂あり、供奉の僧、奉行職人等松の下鳥居の南方に陣を張りて見物す。樂人上越後守騎馬にて供奉す。是を關白代と云ふ。その狀、黑袍を著け冠の巾子に藤の花を懸く、是即ち關白殿下より奉らるゝ騎馬の伶人なり。次に猿樂開闔をうたふ、之を松下開闔といふ。次に細男（セイノウ）六騎笛・大鼓を持つ、次に脇太夫新に吉事の詞を作りて萬歳を祝す、之を開闔の詞と云ふ。次に四座の役者ありて舞樂を行ふ。即ち今春・金剛兩座の太夫は舟の立合を舞ひ、觀世・寶生兩座の太夫は弓矢の立合を舞ふ。時に大小の鼓を以て之を囃す、次に、大和國を領する武家各〻鞍置馬・長柄の鎗等を出して供奉の行列あり。是日夜に入りて御旅所より還幸あり。

此の祭は崇德天皇保延二年九月二十七日に始まると云ふ。是の年天下に飢饉并に疫癘流行す、依つて時の關白法性寺忠通公此の祭禮の大願を發し給ふに、初めて天下靜謐を得たりと傳ふ。後ち花園天皇寛正年間に至り十一月廿七日を以て定日と爲すに至れり

薪能（たきぎのう）　若宮能（わかみやのう）　後宴の能（ごえんのう）

【季題解説】薪能には二種類ある。一つは陰暦二月七日から七日間、奈良興福寺法會中、晝から夜にかけ同寺門前の芝生に薪を燃してその明りの中で金春大夫を主に觀世・寶生・金剛の三大夫及び喜多六平太の四流が二組となつて年々交代、都合三流で年々催されて來たのがその一つであるが、明治初年中絶、同二十年再興したが、事情のため一回限りで全く廢滅に歸して仕舞つた。

他の一つは十二月十七・八日の兩日（昔は十一月十七・八日）に催される春日若宮の祭、所謂「御祭（おんまつり）」の二日目即ち十八日に催されるのが之で、若宮能（又は「後宴の能」とも言つてゐる。十七日の祭事に對して）現今では前記興福寺の方が絶えたので、薪能と云へば之のみを指すことになつてゐる。歳時記に若宮能として春の部に入れてあるのは間違ひで、十二月十七日の御祭に引續き記載すべきである。場所は春日神社二の鳥居の手前北側の若宮御旅所の小高い芝生の上で、前記興福寺同樣、午後から夜にかけて、黑木造の神々しい假の祠を背景にして行ふが往時から一年も缺かしたことのない行事である。二十年前から裝束保存の關係から假に敷舞臺を組むこととなり相變らず金春一門のみに依つて催されて居るのが現在の薪能である。外側は青竹の矢來いかめしく、幔幕を張り廻し、内側に沿うて數多の棧舍が設けられ、一部は樂屋に使用されてゐる。舞臺の三面には莚道を敷詰めて見物に當て、誰でも自由に見物出來るやうになつてゐる。もの馴れた土地の人は毛布・座布團・火鉢などを用意して、治まり返つてゐる有樣は奈良ならでは見られない光景である。暮れそめる此處彼處に篝火が燃えはじめ、昔は此火で、金春橋の薪能の光景に接することが出來る。竹矢來の入口をはじめ、處々に献花御寄進の高張が灯され、さながら昔の儘で見る薪能見物の欄そのまゝである。猶十七日の神事に關しては、金春宗家を主として日の矢立合、其他舞樂など種々の催がある。現在の薪能といふ名はむしろ此の若宮能の方をいふのである。―春日若宮祭（カスガワカミヤオンマツリ）　季――薪能（タキギノウ）

[illegible]

薪能

薪能松を見つゝぞ急ぎける　法師（ホトトギス）
小[illegible]の背の傘や薪能　月舟（同）
枯芝に打つ幕串や薪能　洛山人（同）
影法師わなゝきこぞる薪能　青畝（同）

醍醐祭（だいごまつり）

[illegible] 十一月一日、京都市伏見區醍醐長尾神社の祭禮である。朝から神輿一基の渡御があり、醍醐町中を廻つて正午還御。長尾天神の高い石段を神輿を上げる時が見物である。神輿が拜殿に還御なると神歌の謠から始まつて能五番の奉納がある。昔は祭禮も清瀧權現・勝間明神の三神の祭禮であつて、九月九日であつたが、何時の頃からか長尾神社だけの祭禮となつた。明治初年頃は十月三十一日、長尾天神の社前で宵能を行つてゐたが、明治二十一年から廢止され、現在の如く十一月一日だけの祭禮となつた。從來は能は野村三郎が勤めてゐたが、次に金剛・觀世隔年交代となり、近年は金剛巖一門が勤めることになつた。

賀茂臨時祭（かものりんじまつり）

[illegible]

【初學抄】北祭、十一月中の酉日也。賀茂臨時の祭也。寛平の御時より始る也。

【滑稽雜談】藻鹽草に云、下酉、賀茂臨時祭、未日、試樂あり。（略）○公事根源に云、當日の儀式、御禊庭の座など石清水に同じ。此の祭のおこりは、宇多の御門いまだ王侍臣と申し奉りし時、狩し給ひけるに、賀茂の大明神現じ給ひて、臨時祭を給ふべき由申されけるに、我はさやうの事知り侍らず、御門へ申させ給へと申され給ひければ、やうありて申すなりとてあがらせ給ひけるか、いく程なくして思召もよらぬ位につかせ給ひければ、寛平元年十一月より臨時祭を奉らせ給ふ。○連歌新式抄に云、北祭は賀茂の臨時の祭也。（略）○童蒙抄に云、冬の賀茂祭とは臨時の祭をいふ。同還立（カヘリダチ）。（略）公事根源に云、社頭の儀はてゝ使・舞人歸りに還立の儀有り。孫廂に御障子をたつ、御引直衣に御草鞋をめす。額の間より出御させ給ふ。階の間のとほりの庭、南北に二行に座を敷きて、使・舞人著。うしろに本末の神樂所作人・陪從・近衞の召人著。出御有つて、公卿召あれば簀子長階に候す。階の下に與以下著きて、使・舞人をめす。勸盃ありて、神樂あり。庭燎より始めて、朝倉・其駒までうたふ。庭火にももろ歌有るべければ、人長作法あり。御神樂はてゝ祿有り。（略）（イ本補）此の祭今は絶えてなき事なれば、其の作法式も古記に見るのみ。参照 夏―賀茂祭（カモマツリ）

宇賀祭

古書校註

【年浪草】 按ずるに、宇賀祭、諸書に十一月晦日と言ふと雖も、其處を記さず、下梅が蓮邇輪に、宇賀祭九條東洞院に在り、則ち宇賀辻と稱すと、云々。(一)雍州府志に、九條烏丸、宇賀の辻子と、云々。兩處共に宇賀祭の儀無し。偶ゝ讀書家の書を見るに、攝州住吉の土俗、十一月晦日、家事を棄てゝ專ら倉稻魂を祭る、古への遺風と云々。住吉三神の御德に合一の神秘有りと云々。此の神王の利益廣大なること、佛說最勝護國宇賀耶頓得如意寶珠陀羅尼經に詳かなり。

齋宮繪馬

古書校註

【遵道輪】 (一)卅日。伊勢の齋宮に諸民詣でゝ繪馬を掛くる、其毛色を見て來年秋の農桑を占ふとぞ。

【年浪草】 齋宮は伊勢國多氣郡に在り。今齋宮村有り、多氣の郡或は竹の都と名つく、(一)世記に曰、齋宮は宮川より二里程西、多氣郡也。景行廿年春、宇治の齋宮を多氣郡五百野に移し、皇女久須姬をして皇太神御杖代たらしむ。倭姬皇女、猶宇治の機殿に在す。(一)增山井に曰、晦日の夜、伊勢齋宮の樹下道の傍に小祠あり。ことなひ里人繪馬をかくる事あり。行疫神をなだむるわざとかやいへり。天王寺の道公法師、熊野より歸さに、此の樹下に宿して、繪馬の神におひて、行疫神の馬に乘りてゆく音を聞き、此の繪馬の神、前驅するよしを語りつる事あり。さて法華經讀誦の功力によりて、此の神補陀落山に生れ、觀音の眷屬となりつるよし侍り。

註 (一)十二月

難波の綱引

八阪の綱引　よいよい

年中行事

一月十四日、「難波の綱引ヨイヨイヨイ」と俚謡にうたはれた大阪難波八阪神社の綱引神事である。「天王寺のどやどや」と共に関西の二大奇祭で、此の日は古典的な風景を展開して難波の冬に一異彩を點ずる。先づ早朝、綱曳講の人達が境内に集り周圍にしめ繩を張り廻したなかで、荒繩を以て七十貫、丈三間、太さ三尺の大繩をより上げ、八頭八尾の八岐の大蛇にかたどる。午後一時頃になると故事に倣つて祭典を執行し、繩の大蛇にとぐろをまかせて神酒を振舞ひ、青白色の神代服に宿禰帽を冠つた氏子六十人の綱引によつて本社を出發し、浪速區反物町同社御旅所に向ふのである。途中各町を練りながら「難波のつな引きヨイヨイヨイ」と朗らかなのんびりした掛聲が續く。お旅所に着くのは三時頃、儀式の上歸還するのは五時頃であるといふ。

どやどや祭 どやどや

【[illegible]】 一月十四日、大阪四天王寺のどやどや祭のことである、八阪神社の綱引と共に随分古くから行はれ、大阪の郷土色を傳へた珍祭禮で、女性的な艶美を競ふ夏祭の多い浪花の都に珍らしい男性的な冬祭とされてゐる。行事は十四日午後四時頃から、四天王寺境内六時堂で行はれる、空つ風に背を曝ひしにりながら、締込み一貫の壯漢數百名が紅白に分れスクラムを組んで壯烈な肉彈戰を演じ、六時禮讃堂に飾られた午王の護符を奪ひ合ふのである、壯觀である。式を終るのは大概五時過ぎであるが、この日は毒に火か入れられ一層華々しさを加へる。この護符は穀物の害蟲除けといはれてゐる

和布刈の神事

【古書摘録】

【滑嵜雜談】 神社啓蒙に曰、和布刈神社、長門國下關赤日に在り。祭る所の神一座。按ずるに、毎年除夜半、必ず潮濤の退くを俟つて、神官一人炬火を秉り、海底の和布を刈つて、神に奠する也、神官の海に入るに依つて潮の退くを言ふに非ざる也。○今に於て十二月晦日の夜、和布刈の神事侍る由也。定めて此の儀神緣の起り侍るべし。猶社家者說或は國俗の傳を得可し。

【諸國里人談】 豐前國門司關早鞆明神の宮前は海なり。これに石の階あり、常に二十階ほどは水中に見えて其の先はしらず。毎年十二月晦日の子過丑の刻に、社司宮殿の寶劍を胸にあてゝ、石階をくだりて海中に入る。その時潮左右に颯とひらけり、海底に和布を一鎌かりて歸るなり。誤りて二鎌かれば潮に溺るゝ難あり。此の時は社頭の民家の燈火、海上掛り船の火、ことごとく之を消すなり。その刻限の前半時許り、浪大に立て海あらし。海底に入らんずるとおもふところ、しばらく浪しづまりて、また前のごとく半時が程は海あるゝなり。元朝件の和布を神前に備ふ。父帝都へも奉るなり。これを和布刈の神事といふ。當社は龍神の屬にして、神功皇后三韓退治の時、干珠・滿珠を持來りて船を守護し玉ふなり。その頃神后孕ませ給ふなれば、軍の中に降誕あらばいかゞならんとわづらはせ給ふに、此の神和布を獻じすゝめ給ふに、三とせを經て征伐し給ひ、歸朝の時、筑前の箱崎にて御降誕ありける。應神天皇是なり。此の和布を食する者は萬病を治す。疫癘は立所に愈ゆ。貴ぶべし。

【菜草】 長門國文字の關の北にあり。隼人の社と稱す。祭る神五座、玉依姫・彥火々出見・豐玉姫・不萱合・阿度目・礒良なり。祠の後に一の巨石あり。石に因りて祠をたつ。前に謁殿・舞殿・神厨あり。謁殿の下に右の鳥居を建つ。鳥居を出づれば石磴ありて海の底に達す。虛潮日といへども、そ

の窮むる所をみず。十二月晦日の夜四更に、祝衣冠帯剣して鎌を携へ、炬を擧げ石段を下り、海に入り和布刈って歸る。是夜祝詞あり。元日に和布を神前に供し、既にしてこれを撤し、國主に献るなり。

季題解説 福岡縣門司市早鞆和布刈神社の神事である。毎年舊暦大晦日の夜半に始まり曉に終る 神功皇后三韓征伐の後、皇后自ら大臣武内宿禰を早鞆の地に祀り瀬戸の和布を採って神前に供せられたことに始まる、爾来年毎に缺かさず修せられて今日に到った。古来極めて神秘な行事として庶民の拜觀を許さず、禁を犯して覗き視するときはたちまち兩眼の明を失すると傳へられてゐる、爲めに今日と雖も對岸壇の浦の漁家は宵より燈火を滅し戸を鎖し相警めて戸外に立ち出づることがない 近年は誰でも參觀を許されるけれども人々は傳來の慣習を守り少數が集るに過ぎず、而もその大半は句作の爲めの俳人であるのは面白い。

除夜の刻ともなれば、境内に四坪程の廣さに竹を立て注連を張り、その内に大焚火をはじめる、同時に拜殿では祝詞を上げ神樂を奏する。やがて衣冠劍を帯びた三人の禰宜は男竹女竹で作った長さ丈餘の大炬火を捧げ來り、焚火から灯を移し、海に面する磴を下りてゆく、毎年この時刻は瀬戸の干潮時で潮は激しく東に流れ、海面は傾き闇に鳴動する潮聲、物凄いばかりである。禰宜はまづ渚の岩に諸手を清め海神に向って祝詞を唱へる、唱へ終れば、こゝにはじめて和布を刈りはじめるのである、三人の禰宜、一人は炬火を抱いて先にたち、一人は鎌を手に他の一人は塗桶をさげてこれにつゞく。大きな礁のここかしこをさぐり求めて和布を刈るのである 闇の海を背景に炬火の焔に照し出される禰宜の姿はまさに一幅の繪である かくして刈り集めた和布は潮垂れつゝまゝ神前に供へられ祝詞神樂を奏してここに神事は終るのである、早鞆瀬戸の和布は早鞆和布と呼んで著名であるが、此神事が終らなければ漁師達も決して和布刈をはじめない習慣である。

例句

和布刈神事

炬火に峨々とうつりぬ若布礁　默子（ホトトギス）
なめらかに御鎌なぞるわかめかな　晴（同）
はふりこの炬[illegible]もてる和布刈禰宜　同（同）
正面に焚き祀りし和布刈禰宜　同（ホトトギス）
潮垂れの和布かゝげて禰宜　雲等（同）
御鎌へとぼしくかゝる和布かな　山雨（同）
注連たれて和布刈の手桶岩にあり　蘭女（同）
和布刈禰宜二つの袂背に結ぶ　晴（同）

参考 毎年陰暦十二月晦日、福岡縣門司市門司區早鞆神社に於いて行ふ神事なり。當日子の刻過ぎ丑の刻の間に、神官右手に鎌、左手に松明を持ち、石階を下りて大海の渚に向ふ。時に潮汐左右に

颯と開く神官之に向ひて進み海底に到り和布を一鎌苅りて歸る。若し誤りて二鎌刈れば溺沒の難ありと傳ふ。此の時附近の篝火悉く燈火を消すを例とせり。而して此の刻限の前後は海大に荒れ波濤頗る高さも、神官海底に下るの時は全く靜まると云ふ。かくして刈りし和布は正月元旦に至りて神前に供ふ。尙ほ古くは朝廷に獻上せしことありと云ふ。

此の神事は、昔神功皇后三韓を征せんと欲して角鹿（ツヌガ）より渡航し、長門豐浦に向ひ給ひし時、如意珠を得給ふ。時に阿曇磯良（アドイソラ）と云ふ者ありて干潮珠・滿潮珠の祕法を知り、皇后に其の祕法を授け奉る。皇后之に依りて海水を滿し遂に敵の王城まで無事に到り給ふ、その遺風なりと傳ふ。又一說には皇后三韓征伐の時、既に懷姙し給ひ軍中にて御分娩あらん事を憂ひ給ふに由りて、此の和布を獻りしに凱旋まで生れ給はず、後ち箱崎にて皇子御降誕ありしと云ふ。即ち此の吉例に據りて行ふとも傳へたり。蓋し此の神事は古くより神祕として傳はるものなり。

山の神祭（やまのかみまつり）　山の講（やまのかう）

古書校註

【年浪草】　山林を持傳ふる畿内の村民、（一）此の月山神を祭ると云へるは卽ち火燒なり。山神の社の邊、樹上に幣を切りかけ、神供を備へ、燎火を燒くを云ふなり。

註　（一）十一月。

季題解說　陰曆十一月、山林を有するもの、林業にたづさはるもの、樵夫など山神を祭る。九州地方では陰曆十一月十五日行はれてゐる。此日は一切山に這入らず、シトキと云つて臼で搗いた米の粉で握り團子を造り、小さな藁苞に入れて山の神に供へに行くのである。大きな山の神では市が立つて角力などが賑ふ。

房州では陰曆十一月七日に山の神祭がある。炭燒・木挽を始め山仕事をする人の此の日は山に這らないことは九州地方と同じである。日ははつきりしないが東北地方でも行はれてゐる。

伊勢一志郡では、村の山の神を子供等がまつる。此の日生れて始めての男の子の內で、小舛（菓子の）みかんを靑竹の箍に釣つて山の神を祀るのである。子供等の一年中の樂しみの行事である。

土牛童子像を立つ（どぎうどうじざうをたつ）

古書校註

【滑稽雜談】　大寒の日（略）（一）公事根源に云、大寒の日夜半に、陰陽師土牛童子の像を門口にたつ。靑色は春の色、東にたつ。赤色は夏の色、南にたつ。白色は秋の色、西にたつ。黑色は冬の色、北にたつ。四方の門に又黃

末に荷前の幣を獻つたこと傳はる。從陵墓の數に消革あり、この儀も漸く衰ふるに至つた。（武田）

神樂

神遊び　神遊び歌　阿知女　庭燎　内侍所の御神樂

古書校註

【山之井】神樂はあまてるおほんかみ、天の磐戸に閉れましまし〳〵ければ、六合とこやみとなりて、よるひるのわかちなかりける時、天鈿女の神、かづらたすきをかけ、竹葉飫誨の木の葉を手草にし、ほこをもちなどして、彼の磐戸の前にて歌舞をなしたまひければ、すなはち、いはとひらきて、日の神世にあらはれ給ひ、人の顔どもしろく見えつれば、萬づの神たち悦び給ひつゝ、みなあひともに、阿波禮阿那於茂志呂と、のたまひけるとかや。されば、（一）おもてしろきいちどのゝけしやうをいひなし、（二）きねがうすめの神かぐらまねぶありさまなど、ひたて、又、とこやみはれて、あかぼしうたふ心ばへ、朝くら〳〵の物の音に心いさめるけしきなどすべし。

【初學抄】里神樂、禁中の外は皆里神樂也。かぐらうたひ物の事、榊葉うたふ、明星・きり〴〵す・からかみ・しづやのこすげ・さゞ波うたふ、此等也。但、催馬樂のうたひ物は雜也。

【御傘】冬也。夜分也。連に一句の物なれば、誹には、里神樂・山神樂・夏神樂など、今一つあるべし。夏神樂は夏の季也。水邊也。夜分にはあらず。猶此の外に、星うたふ・きり〴〵すうたふなど、折をかへて神樂の名、今一つ有るべし。是も夜分也。

【滑稽雜談】連歌祕書に云、里神樂は、内裏の外を悉く里神樂と云ふ。里とは私の心也。居所に非ず。神樂は大内が本也。内侍所のを山神樂と云ふ也。○抑神樂を冬に用ひる事師說。

小忌衣。神道名目抄に云、小忌衣、神事に著用す。神職人着用したる事を見ず。大嘗會の時公卿是を着用す。小忌の公卿と云ふ。或記に云、諸司の小忌・出納の小忌といふて、形のごとく布に青摺したる物也。それを只袍の上に打掛けて著するなり。いづれも山藍にて摺る物なれば、臨時の舞人の著するを青摺と云ふ。大嘗會の時小忌と云ふ。大忌衣、別に此の服あるにあらず。祕說有り。或は小忌・大忌は麤細の義也といへり。○師說に云、小忌衣は大嘗・新嘗に用ゐる故冬也。神樂などにも山神樂には小忌衣有るべし。神官又は社職のもの用ひざる服なれば、里神樂には掛酌歟。山藍の袖とは、小忌をも又青摺をも云ふべし。神樂に用ひる時も尤冬也。大忌・小忌、潔齋の輕重とも心得べし。

日蔭蔓。（略）古今榮雅抄に云、さがり苔は岩にさがりたる苔也。日蔭のかづらとも云ふ。神祭る時、昔は此の苔を取つて舞人・神子などの鬘にし、又袖にかざりけるとなん。今も日蔭の絲とて、草にかたどりて絲にてむすぶ也。

きゝ諷ふ五はい機嫌や伊勢神樂　宗因（[illegible]）
大神樂根に添寐の夢もなし　言水（[illegible]）
御神樂や火を焚く衛士にあやからん　去來（[illegible]句集）
割すそや八乙神樂男より　其角（五元集）
萬代のメをあげけり神樂帳　同（同）
かぐら舟澪（ミヲ）の灯の御火白くたけ　嵐雪（玄峰集）
おもしろもなう一夜に[illegible]む神樂哉　北枝（北枝發句集）
馳折をしばらくおこす神樂哉　几董（[illegible]）
松風や霜にはゝきして庭神樂　白雄（白雄句集）
我子等が笛ミ身にしむ神樂哉　梅室（梅室家集）
乙女子に雪ふりかゝる神樂哉　李由（[illegible]）
立様に禰宜の顔見る神樂哉　淵水（小弓）
眞顔なる神樂男の神樂哉　柴雲（[illegible]）
神樂見る人の後の朽葉風　湘海（ホトトギス）
御神樂の始まるまでの儀式かな　草淵（同）
神樂師の笑ひ居るらし面の内　紫月（同）
この雪に詣る人ある神樂かな　北星（同）
神樂師の綻縫へり樂屋内　徘小星（續ホトトギス）

〔參考〕毎年十二月中旬宮中賢所の前神樂舍に於いて行ふ神樂なり。一に神遊（カアソビ）とも稱す。當日儀式執行に先ちて神樂舍に神樂の座を設け、三方に斑幔（ダンマン）を張り兩側に薦を敷き其の上に薄帖を敷く、又賢所の中庭には庭燎（ニハビ）を燒く設をなし、傍に火炎の座を設く。午後三時より御殿の裝飾を爲し大眞賢木を建つ、午後四時に宮内の官員着床、次に賢所・皇靈殿・神殿の順位にて御扉を開き、神饌を供す。此の間奏樂あり。午後五時前に親王・大臣・樞密院議長及び各廳勅任官一人宛着床。此の時本拍子・末拍子・笛・篳篥（ヒチリキ）・和琴（ワゴン）の所作人・人長等便宜の所に列立す。午後五時陛下出御。綾綺殿に於いて御束帶御手水畢りて賢所に進ませ給ふ。掌典長御先導、之に侍從扈從す。やがて陛下内陣に入御ありて御拜あらせらる。次いで皇靈殿、次に神殿にても同じく御拜あり、了りて入御あらせらる。次に皇后陛下・皇太子・皇太子妃兩殿下の御拜あり。次に親王以下勅任官の拜禮あり、次に宮内奏任判任官の拜禮あり。それより庭燎を燒く、掌典賢木の枝を持ちて賢所の階を下る、人長階下に進みて之を受け砌を下りて神樂舍の座に着き、賢木を座前に置き笏を執りて跌坐す。かくて笛の所作人本の座（本とは賢所に向ひて左方を云ふ）に就き、篳篥の所作人末の座（末とは同じく右方を云ふ）に就きて音取を奏す。其の[illegible]笛を先とし、篳篥之に次ぐ、次に人長庭燎の前に進み其司人に「御火白う仕う奉れ」と云ふ。次に人長は召人を起たしめ、司人に「獻仕へ奉れ」といふ。かくて初は笛・所作人、次に篳篥の所作人、次に和琴・所作人、逐一に一回宛庭燎を奏す。以上の所作人共に人長の召にて起ち、復席も又人長の命による。

里神樂

闇をあいて闇れる獅子や里神樂 （　）

宮神樂炎の藁をくべりけり （同）

郷社より村社となりし神樂かな （　）

面とればをさな顔なり里神樂 了 敬 （　）

夜神樂や哭く手なづち足なづち 泥 中 （同）

里神樂柿くひながら見る人よ 虚 子 （句集虚子）

五條神參（ごでうてんじんまゐり） 勝の餅（しようのもち） 白朮（をけら）

【古書校註】

【山之井】 節分は、都の町のならはしに、五條の天神にまうでゝ、をけら・もちいを、かひもてきつゝ、家内のかみなかしも是をいはふ。

【日次紀事】 此の日、良賤、五條天神社に詣で、各〻白朮を買ひ、之を自家に燒く。是、神代の遺風也。又、小團餅を買ひて家に歸る。此の餅は社傍の勝軍地藏に供ふる所也。故に勝餅と謂ふ。參詣の男女之を求め、今夜之を食へば、則ち明年勝利を得と云々。

此月尾、俗間米壹升を壬生地藏寺に供すれば、寺俗則ち小團餅を與ふ。是を地藏餅と謂ふ。又勝ノ餅と稱す。勝軍地藏の義に取る也。各家之を食へば則ち來春疫無しと云ふ。

【滑稽雜談】 節分に此の社へ參る事、（略）又けふの賽錢、曉景に及びて公聽へ之を納む。いかなる由緒にや。

蒼朮買。（略）世諺問答に云、節分にをけらをたくは何のゆへぞや。白朮は風氣をさる藥にて侍るうへ、蘊あしきゆゑに、やく病の神の夜行する夜なれば、是を焚きておそれしめんかためにて侍る　按ずるに、或は云、神代に云ふ飫憩木とはをけら也。是不祥を除く草也。是又中華にも、今夕蒼朮を焚燒して疫を辟くるよし、所說多し　京都の俗は、五條天神の社司より是を請けて、竈に焚く事僅に一撮に過ぎず。社司又蒼朮の分を撰にす　賣藥の店屋に求めて之を鬻ぐ。豈かならんや。心あらん人は蒼朮多く求めて、屋中に燕ぜしむ可くこそ。

勝乃餅買。世諺問答に云、節分にせうのもちひとてくひ侍るは何の故ぞや。答へて云、この事さらにしりがたし。また五條の天神に侍るよし申す。かの天神いつくよりあまくだりましませる事とも見えず。儀式にもものせぬ神なれば、更にしりがたし。此のもちひをくへば、物に勝つと云ふ人の侍る由、申傳へたるばかりなり。（　）今世社家者說とし、此の日諸人に之を鬻ぐなり。

【年浪草】 拾芥抄に曰、京程圖に云、五條南、西洞院の西に在り。今松原通是也。祭は九月十日、又、每歲節分の夜、諸人之に詣す。（　）社說に曰、當社は大巳貴命・少彥名命二座云々。諸神記に據るに、闕韓神同神也。

日限、一社一定に相用ふる支の日を撰み、或は式日會日を用ゆ。世人のよく知る義なれば、之を記すに及ばず。

注（一）この間に、五條の御火焚・大黒の御火焚に就いて記載があるが、それ〳〵祭・祭の項に引いて、こゝには省略した。（二）今宮祭に五月十五日、御靈祭は五月十八日に行ふ。（三）諸社の祭日の日取りが一様でない爲、十一月八日の條には稲荷社・有栖川宮・大坂高津宮・同下造稲荷社・天王子庚申・明神社等の御火焚、九日には貴船末社結の御火焚、十日には五條天神、十一日には粟田口神明社、十三日には大坂稲荷社・同三津寺八幡、十五日には藤々八幡宮・今宮社、十六日には藤々神明社・吉田社・岡崎天王・相逢明神社・座摩社・同朝日宮、十八日には上下御靈社・室社・大酒明神社、二十日には社、二十三日には貴船神社等が擧げてある。

季題解説　十一月中、京都の各社で行はれる神事で、神道名目類聚抄に「十一月諸社御火焼の神事あり、是當年の新穀を始めて供進の神事なり。官符ありて是をつとむるは新嘗祭と云ひ、官符なき社は某の神官の意にして是をそなへたてまつる。是を御火焼と云ふ。」とある如く、京洛でも供進使のたつ社ではなく、あつてもその末社である。例へば吉田神社の末社今宮神社と竹中稲荷社では、十一月二十四日と同二十八日とに行はれるが、本社ではない。只稲荷神社に於ては、吹革の神で毎年十一月八日に行はれる。御火焚は大前に松割木を積み上げ、ぐるりに齋竹を圍ひ新穀と神酒とを供へ神官が祝詞を誦し後火を放つので、井筒形に組んだ松割木は燃え上り齋竹は爆竹の如き音をたてる。群つた子供に饅頭・蜜柑・おこしを分與する。子供は蜜柑饅頭お火焚の―の―、お火焚の―の―と唱へてよろこぶ。

例句

御火焼

御火焼に元服するや鍛冶の弟子　浪化　（浪化上人發句集）
御火焼や風雅と呼る友ほしし、　桃隣　（古太白堂句選）
御火たきや犬も中〳〵そゞろ良　蕪村　（蕪村句集）
御火焼や霜うつくしき京の町　同　（同　）
御火焼や積上し傍へ先よるな　召波　（春泥發句集）
お火焚の幣燃えながら揚りけり　野風呂　（ホトトギス）
大楠をこがす火焚の祭かな　素子　（同　）

酉の市

酉の町　酉の町詣　一の酉　二の酉　三の酉　熊手　頭の芋
熊手市　おかめ市

古書校註

【栞草】鷄の町詣、酉の日。鷄大明神の社は、武州葛飾郡花又村にあり。江戸より三里。毎年十一月酉の日市たつ。酉の日三つあれば、三日ともに市なり。上の酉の日を專とす。江戸近在より諸人群集して甚だ賑はへり。是當社神事の遺意か。土産に芋かしらを賣る也。參詣の人必ずこれを買ひて家に歸る。又此の日、淺草寺の裏手鷄大明神にも此の市ありて群集す。

【東都歳事記】酉の祭、酉のまちは、酉のまつりの縮語なり、酉の町と書

けるは據なし、又酉の市ともいふ。二の酉、三の酉ともに參詣あり、兩所ともに開運の守護神なりといふ。

【考證解說】 東京足立區花畑及淺草に鎭座の鷲(おほとり)神社の祭事をいふので、とりのいち或はとりのまちといふ。まちは祭の約言である。祭日は十一月中の酉の日で、年に依り二回のことと三回あることとある。一の酉、二の酉、三の酉と云つてゐる。今ではこの酉の市は段々各地に廣まつて、東京附近では新宿・品川・深川・四谷・巢鴨・大塚・目黑・横濱・王子・草加・蕨・大宮・浦和・鳩谷・川口・越ヶ谷・吉川・金町・府中・調布を始め約四十ヶ所、其他東北・關西方面にも行はれるやうになつた。多くは本社の祭日に、末社の大鳥神社に祭事が行はれるので、中には普通の市日に、單に熊手市が立つ程度のものもある。之等は酉の市とも、熊手市とも、おかめ市とも呼ばれてゐる。

然し最も有名で賑やかなのは淺草の酉の市である。祭神は天之日鷲命と日本武尊の二柱で開運の神樣と云はれてゐる。お宮では當日午前零時、二時、五時に一番、二番、三番太鼓が鳴る。一番太鼓が鳴つてから第三番までにお札を受けた人を結願者としてあるので、前夜から參詣者が押し寄せ、殊に當日午後七時頃からは最も雜閙を極め、此日人込にとられた下駄が翌朝山を爲す程である。

又緣起物の商ひが此の祭の特色で、熊手・頭の芋などは其代表的なものである。福德を搔き込む、又人の頭に立つの寓意あるものである。祭日が酉の日といふことも、この熊手は祭神名の鷲から來たものと傳へられ、お札も熊手に挿んだものである。

お宮から竇町の間は通りと云はず路次と云はず、道の兩側に突出し天幕張などをして、熊手や頭の芋(八ツ頭・赤頭芋など)の丸蒸したおかめ飴に通したもの、黃金餅(五色の餅)・お茶おこし等を賣る店ばかりぎつしり並んで、景氣のいゝ賣買が行はれる。花畑の酉の市では、昔は實用の熊手を商はれたといふことであるが、段々商家の店に飾られるものとなつて、今のやうに華美精巧なものになつた。大きさは寸大のものから七八尺

のもとまで種々あつて、竹の熊手に、おかめの面・七福神・寶舟・打出の小槌・大判・小判・大福帳・松竹梅・鶴龜・枡・其他縁起のよいものを飾りつけたものである。

【例句】 酉の市

人波に光り散るまゝや熊手より　青曲（ホトトギス）
買ひ挿して小さき熊手も髪かたち　一水（同）
酉の市疱瘡神も照らさるゝ　素十（同）
灯に映ゆる銀杏のありて酉の市　博亮（同）
米久へはひりし人の熊手かな　夢香（續ホトトギス）
見てゐたる熊手賣れたる淋しさよ　耿陽（同）
病む人に買うてもどりし熊手かな　虚子（句集　虚子）

大神宮札配（だいじんぐうふだくばり）

【季題解説】 昔は十二月、伊勢の皇大神宮から直接全國各地へ人を派して大麻を配布した。其後、神部署から府縣支部へ配布し、更に郡役所へ、郡役所から各町村へ配布したが、現今では縣神職會へ、それから更に郡神職會へ配布し、各神官が一般に配布するやうになつた。

札納（ふだをさめ）　納札（をさめふだ）

【出典考證】

【日次紀事】 (一)此の月、良賤年中受くる所の諸社の札を、神社に納む。

【滑稽雜談】 世俗(二)此の月、末にいたりて、諸社の午王、諸寺の祈禱の札を門戸に貼する物、悉く取去つて其の家の竈に捨て火にあぐるも有り、又は神社の橡下に納め、或は寶殿に持參して焚するも侍る、是を札納といへり。傳へ云、糊にて貼したる札は、其の年過ぎぬれば功能なしといへり、いかにや。只舊符を取去つて來春新符を貼すべき爲なるべし。煤拂と日多く此の事をなすも有り。

【東都歳事記】 享保の頃までは、古札納といふ非人、毎年十二月に、武家町家を御はらひをさめ、古札納とさけび歩行けり。年中佛神の札守の溜りしを、錢を添へて右の非人にあたへしなり。

註 (一)十一月。(二)十二月。

【季題解説】 改暦に際しては、神佛から新しいお札を受けるので、前に受けた古いお札を粗末にならぬやうに、歳末に際して氏神などに納めることをいふのである。

神社では納の札を叮嚀に預るところもあるが、主に境内に納札場が設けてある。村方では氏神の木にお札を縛りつけるところもある。

斯うして納められたお札は神主が昇神（カミアゲ）をして、淨火をかけるのが普通で、

大概二十七八日から三十一日迄に行はれる。鎌倉鶴ケ岡八幡宮では十二月三十一日午後六時からお札の焼却祭が行はれる。上野の五條天神の境内で、冬木がくれに、札を焚く篝火が夜陰にちら〱してゐるのなどは神々しいものである。

[例句] 札納

梅の木や御蔵箱を負ながら　一茶（おらが春）

老木の洞かしこし札納　春水子（ホトトギス）

遠くより投げ納めたる御札かな　青嵐（同）

[illegible]涙のかゝりし札を納めけり　並木（續ホトトギス）

火の中に重なり合へるお札かな　一烽（同）

納の水天宮（をさめのすいてんぐう）

[解説] 十二月五日。その年の最終の御縁日をいふのである。水天宮は天御中主神と安德天皇との二柱を祀つてある。日本橋人形町の水天宮は江戸時代、久留米の藩主が同地の本社から招請奉祀したものである。當日は神前に並んで懸つてゐる八つの鈴が絶間なく鳴つてゐる位參詣人が多い。鳥居外では紙にひねつた奉納のお餅や、錨・腹帯などを賣る店が並ぶ。店々のお清めの切火の音がかち〱〱〱と鳴つてゐる。參詣者はお供の餅を二つ供へて一つ頂いて歸るのである。神前には大きな錨の御幣があり、兩側の唐金のお獅子は參詣人毎に頭やら手やら撫でられて光つてゐる。[參照] 新年―初水天宮（ハツスヰテンクウ）

終天神（しまひてんじん）

[解説] 十二月二十五日、初天神に對して「しまひ天神」と稱へ、極月の大縁日として、京都では東寺の「しまひ弘法」と並び稱せられてゐる。此日は神燈が數多く點ぜられて、見世物・露店などが案出し、師走氣分の裡に參詣の人が多い。[參照] 新年―初天神（ハツテンジン）

[例句] 終天神

萬燈や終ひ天神にぎやかに　活刀（續ホトトギス）

納の金毘羅（をさめのこんぴら）

[解説] 【日本草一】讃州鶴足郡にあり。祭る神一座、或は三輪大明神、或は素戔嗚尊。富山の形ち象の頭に似たり。故に象頭山と號す。開基詳かならず。一説に修業大師、唐留學の日、金毘羅神を勸請すと。麓より山上十八町、悉く石階を疊み、又崇德院の廟を以て世に金毘羅大權現と稱す。[illegible]上安[illegible]を稱するに崇德院の社あり。金毘羅の社と稱す。八月二十六日祭禮

なり。

【季題解説】十二月十日は納の金毘羅と云つて其年最終の金刀比羅神社の御縁日である。東京では深川と虎ノ門の金刀比羅宮が非常に賑ふ。境内を通りに普通の市が立ち、南門の茶屋でお供餅やお神酒などを賣つてゐる。お賽銭を神前の構内の白布の上に投げられるのが雨の降るやうである。參詣人が大きな聲で「お燈お願ひします」と口々に云つて參拜してゐるのが特に注意をひく。禰宜が「はあ、はあ」と答へては神前の燭臺にしきりに蠟燭を灯すのが見られる。【季題】新年　初金毘羅

納の庚申（をさめかうしん）　果の庚申（はてのかうしん）

【季題解説】庚申會或は庚申待といふのは庚申の日に行はれる祭事である。六十日目に巡つて來る。その年の最終の庚申會を納の庚申といふのである。庚申に就ては種々の説が行はれ、陰陽家は萬物改まる日として祀り、道家では此日寢に向つて其名を呼べば、體内の三尸長く去つて萬福來ると云ひ、佛家では青面金剛を以て庚申天とし、神道家では猿田彦神を祀るものと傳へられ、その庚申祓といふのを見ると

天津日猿田彦大神夫庚申其波怒于去于云高祖待其遍久天乎祭留事智天波則智父母乎舍遷遊乎祭倶乎孝心生于云然利福祿寛榮天住天道祖神乃惠乎叶布……云云

とある。祓文も幼稚で牽強附會の感があり、總じてこれらの説は俗説であらう。

今祭祀の實際についてみると、猿田彦大神の總社ともいふべき伊勢の猿田彦神社を始め、關東方面の猿田彦神社も庚申の日には祭祀も參詣もない。道祖神は多く一月十四日、左義長に祭られて居り、庚申塚は、三河の國に庚申の日にお祀する庚申堂があるとの事であるが、巢鴨の庚申塚は八月二十四日及毎月四日、篠塚の庚申堂は毎月一日・十五日の御緣日で庚申會はない。

今庚申會の最も盛大に行はれてゐるのは柴又の帝釋天である。青面金剛が帝釋天の使者であるといふ關係もあるが、庚申に帝釋天を祀るのは斯う說かれてゐる。庚申（カウシン）は陰陽から見て妖の日と云つて最も險惡な日であるから威德の高い神の力に縋らねば災厄を遁れることが出來ない、そこで天竺三十三王の主で最も力強い帝釋天王を祀念して加護を受けんとするに出たものであると云ふのである。又帝釋天が始めて天王寺に顯現せられたのが庚申の日であり、其他庚申の日に數々の靈驗があつたので庚申に帝釋天を祀るとも云はれてゐる。柴又の庚申會は、前夜の宵庚申からして非常な人出で、終夜參詣者が絕えないので、附近の土産店や飮食店も全部徹夜して商ひをする。又堂内には夜籠をする人も少くない。

當日は午前五時から午後七時まで御開帳があり、終日お經が上る。護摩を受ける人　風邪封じの祈禱を依賴する人などが本堂から長廊下に溢れ雜沓

を極める。厄除のお守が出る。

斯うした賑かな庚申會があるかと思ふと、九州の片田舍などでは「一話しや庚申待、唄二十三夜……」といふ俗謠の通り、百姓達が夜更るまで世間話をしながら待つ、心易さの庚申待の情景を見ることが出來る。

京都では八阪庚申堂、栗田の庚申堂などである。 [季題] 新年—初庚申(ハツカウシン)

年越の祓(としこしのはらへ) 大祓(おほはらへ)

古書校註 【滑稽雜談】 公事根源に云、大祓、六月に同じ。

季語解說 六月・十二月の晦日に行はれる祓の、これは後者の方で、往昔禁裏で卜部氏によつて行はれたが、今は各神社に於て行はれる。式の始まるのは凡そ午後四時頃、宮司、以下所定の位置に著く。先づ主典切麻を頒つと諸員懷紙に執ること二回、次に宮司祓を仰す。次に禰宜、祓詞を宣る。卽ち祓座に起立し深揖後祓詞を讀み了て拜す。此間諸員磬折をなし「宣」の語毎に應といふ。次に諸員切麻を執て祓ふ。次に主典大麻を行ふ。 [季題] 時候—節分(セツブン) 夏—大祓……

參考 每年六月・十二月の晦日に宮中及び全國の各神社にて行ふ式典なり。大祓とは百官諸司、天下萬民の罪穢を除去する祓の意にして、六月に行ふものを特に六月祓・夏祓と云ひ、或は名越の祓とも稱す。是日宮中にては、祓所を賢所前庭の神樂舍となし、午後より祓物を具備す。時刻至れば掌典長以下の職員着床す。次に掌典補二人進みて案上の御麻に祓の行を挿む、次に掌典長の仰に依つて、高案の前にて大祓詞を奏讀す、諸員起立、畢りて掌典一人案上の大麻を取りて幄舍に向ひて祓ひ、之を掌典補に授く、時に他の掌典大河道に向ひて「祓遣れ」と宣り畢りて本床に復す。諸員退出。次に掌典御贖物を携し、掌典一人祓物を取りて賢所の門を出で、濱離宮に參向し之を海中に流す。之にて式を終る。

大祓の起原は遠く神代に在り、卽ち伊邪那岐命黃泉國(ヨモツクニ)より歸り給ひ、其の汚穢を厭ひて筑紫日向の橘の小戸にて海水に浸りて御身を滌ぎ給ひし事始めて古事記等の書に見え、後ち仲哀天皇崩御の時、國の大幣を取りて種々の罪穢を覓めて國大祓を行ひし事、又同書に見えたり。其の後ち天武天皇の五年八月四方に解除を行ひ、國別に祓物を出さしめし事日本書紀に見えしが、大寶令の制に至りて六月・十二月の兩度に定められ、歷世の恆例となれり。大祓の式は元と皇城の朱雀門にて極めて盛大に行はれしが、其の後ち圓融天皇の朝に及び古儀行はれず、天元二年六月には公卿の參集するものなく、早くも百年を出でずして衰頽するに至れり。然れども後花園天皇の嘉吉・文安の頃までは尙存在し、應仁の大亂に及びて全く廢絕するに至る。後ち東山天皇の元祿四年六月には吉田家に命じて內侍所の西庭にて行

ひ給ひしが、内侍所の清祓と稱して一種の形式に過ぎず、舊制に及ぶものなかりき。然るに明治元年の六月御再興の御沙汰ありて、其の後宮庭に行はるゝこととなり、爾來今日に及べり。

年越詣（としこしまうで）

【季題解説】としこしまうで又はとしこしまゐりといふ。節分の夜、翌年の歳徳に當る方へ參詣することと大晦日に伊勢大神宮にまゐるといふ説があるけれども伊勢大廟に限つたことでもない。〔参照〕時候—節分

節分詣（せつぶんまうで）

【季題解説】節分は立春即ち春の季節となる前日、冬の最終の日である。このやうに節分は一陽來復の期節の變り目であるから、昔から朝廷や社寺では祭事が行はれ、民間でも惡魔を拂ひ福を迎へると云つたやうな行事が廣く行はれてゐる。此の夜神社や寺院では追儺祭・節分會などが行はれるので、附近の小祠に參る者、遠くに參詣に行く人が非常に多い。東京附近では成田の不動・川崎の大師・龜戸天神・淺草觀音など殊に盛んで物凄い程の人出である。〔参照〕時候　節分

厄塚（やくづか）

厄塚立つる（やくづかたつる）　吉田大祓（よしだおほはらへ）

【古書校註】【滑稽雜談】吉田大祓。傳に云、是往古より六月・十二月晦日に行はるゝ大祓の遺風也。當世此の所齋場所なるゆゑに、社頭に疫神塚を設く。節分に之を設け、正月十九日夜、疫神祭に是を撤す。神官夜に入つて參集し、神拜祝詞の人祓の義在り。是を當社大ばらひと云ふ。こよひ黄紙上に丹朱を以て疫神齋の三字を書きたる神符を相調ふ。諸人これを頂戴する。併し是又後日又早春に至りて此の符をおす也。諸人是を門戸に貼する時は、疫疾を辟くと云ふ。抑々疫塚は、諸社根元記に云、天眞榊を根掘にして、岩戸の前に敬白の體也、注連を八つ附けて、四手を附くる事は、是八方神を祝する表示の儀也。

【年浪草】節分の夜、吉田神祇官に於て之を行はる。其の式庭上に塚を築く。之を厄塚と謂ふ。此の塚正月十九日に至つて解き拂はる、云々

【東都歳事記】神田社疫神齋。本社の右のかたに疫神塚を立てゝ、祝詞をさゝげ執行あり、疫神齋の札を出す　この札は後小松院様勅筆といひ傳ふ。

【季題解説】一月十九日の女節分から二月三日の節分の夜中まで、京都吉田神社の齋場所太元宮に建てられてあるもので、その形、天の岩戸開きの時

の天の眞榊を根こじにして敬白して居る體で、又八筋の注連縄で本殿から支へるのは八百萬神を祝ぎ奉るあらはれである、參者が自分の干支や年齢を記した紙に疫豆や賽錢を包んで此厄塚めがけて投げつけるのは、此厄塚にあらゆる疫を負はせて自分の災厄を免れるためである
（倘句に詠まれた厄塚はお札納めしたその堆積を火燒祭にするまでのものをあやまり云つて居る。）【参照】新年―吉田清祓（三〇八）

例句

厄塚

厄塚の煙にむせび拜みけり　王城（ホトトギス）
禰宜の來て掃く厄塚のほとりかな　朱朗（同）
厄塚へ齋竹燃えて倒れたり　ながし（同）
厄塚の猛り燃ゆ火に合掌す　夜野火（同）
厄塚や水引かけし一とたばね　くに女（續ホトトギス）

年籠（としごもり）

古書校註

【滑稽雜談】今世において、和俗大晦日の夜寰佛靈社へ詣で年をとる也、是を年籠と稱す。諸國に有る事にて、其の國郡の神社佛閣などへ籠る也。京都にては伊勢・熊野など、近くには祇園・清水・愛宕・八幡などへこもる。然れども仕官奉公の人、賣買家の者は、今夜他行する事かなひがたければ、家中を掃除し、身の不淨をあらためて、神明・佛陀を敬詞して、一年の終りと一年の新に來るを待つべし。是身を護るの儀なるべし。近來は今夜において傾國茶店などの淫室に入りて、通宵飲食する輩多し。甚だ愼むべき一夜也。

【年浪草】紀事に曰、俗間甚だ伊勢大神宮を信ずる者、窮臘より伊勢山田に至りて、元日則ち神前を拜す。是を年籠と謂ふ。（夫木）おひらくにかくれんとおもふしめの内の年ごもりをばあはれとも見よ　信實朝臣。

季題解説

長いのは年の暮から正月にかけ、短いのは大晦日夜から元日を迎へるために、各自信奉する社寺に參籠することが昔時あつた。今、二三の社寺に就て尋ねたがその事はない。

例句

年籠

（鳥羽ニ年籠ノ夜）
鳥一羽鏡に寒しとし籠　支考（蓮二吟集）
月もなき杉の嵐や年籠　召波（春泥句集）
春待や支へたてたるとし籠　几董（井華集）
[illegible]
とし籠る火の御灯をみけり　白雄（白雄句集）
君が世やから人も來て年ごもり　一茶（一茶句帖）
深川や木更津舟の年籠　子規（子規句集）

大原雑魚寝　雑魚寝

古書校註

【滑稽雑談】節分の夜、(一)當所の産砂神拜殿にて、人々雑居寐する事は、此の夜、悪鬼・邪神の流行するなれば、是らの事を攘ふの儀に依つて、里人一所に集列すならし。緣結びの事はなしとぞ。

【年浪草】山城國愛宕郡於波羅は矢背の北に在り、隣と爲す。○名勝志に日、大原村雑居寢とは、蛇井手村の大淵と云ふ池に蛇住みて、時々里に出て人を取らんとす。其の出でて集るゝ時は、晝夜を分たず、男女一所に集り臥して隱るゝなり。是を大原の雑居寐と云ふとなり。其の夜、男女の永きかたらひをなすと也。是は其の起りにて、大原物語と云ふ古き草紙に記せり。其の後は、産沙神の拜殿に、節分の夜、男女參籠して通夜するとなり。江文明神の社也。大原の西南山下平林の中に在り、祭る所倉稲魂命。

註（一）大原。

季題解說　節分の夜、京都府愛宕郡大原村江文神社拜殿で昔あつた行事である。昔大原村蛇井手（今の字井出）に大淵といふ池があつて大蛇が棲んでゐた。時々里に出て人を害するので、其の時は晝夜の別なく里人は一ヶ處に集つて隱れて難を避けた。それが何時の時代にか轉じて大原村井手の産土神江文神社（祭神宇賀御魂神、例祭五月十五日）に節分の夜參籠通夜することゝなつてしまつた。勿論一字擧げて男女の別なく一拜殿に參籠し、灯を滅する事とて風俗上いかゞはしいので明治以前に禁止されて今は村人の語り草となつてゐるのみである。

西鶴好色一代男——老若のわかちもなく神前の拜殿に所ならひとて猥がはしく打臥して一夜は何事も許すとかや、いざ之よりと朧なる清水岩蔭道小松を分けて其里に行きて手つかむ許りのくらがりまぎれに聞けばまだいはけなき姿にて逃げまはるもあり手を捉へられて斷をいふ女もありわざと戯れ懸かるもありしみじみと語る風情ひとりを二人して論ずる有様もなほ可笑し、七十になる婆騒がせ或は姨を乘越え主の女房いやがらせ後にはわけもなく入組み泣くやら笑ふやら聞き傳へしより面白きことにぞ、曉近く一度に歸る氣色さまざまなり。［參照］天文—小野霞

例句

大原雑魚寝

にゝき木の立聞もなき雑魚寝哉　蕪村（蕪村句集）

文机や見ぬ世の人と雑混寐せむ　也有（鶉の落葉）

家脱けて神に委ねし雑魚寝かな　大我（ホトトギス）

竈祓

荒神祓　竈の神祭　竈公祭　竈祭　竈注連

古書校註

【栞草】［五雑組］俗皆十二月二十四日竈を祀る。謂らく、竈神この夜天に

によりて、一家の善悪を以て天に奏す。是の日婦人女子齋を持す、云々。俗猶これを竈公といふ。萬畢術に云、竈神晦日天に歸りて、人の罪過を白す。西陽雜俎 竈神六女あり。常に月の晦を以て天に上り人の罪を白す。大なるものは紀を奪ひ、小なるものは算を奪ふ。○我俗十二月下旬、修驗を招きて竈神を祭る。これを竈祓、又竈注連といふ。五月九月又おなじ。

季題解説 荒神祓ともいふ、竈の神のお祭である。

毎月二十八日に釜拂と云つて巫女の姿をした女が手に神樂鈴と扇を持つて、祝詞を謡ひながら家々に入つて竈の前でお祓をして廻つたものである。又釜拂の中には淫を賣るものが多かつたと傳へられてゐるが、凡て江戸時代のことである。

又十二月二十八日、民家では神官を請じて竈の神を祀つたといふこともあるけれど、今は行はれてゐないやうである。只陰暦十二月八日は竈塗日と云つて、此日竈の塗替・修繕等をする風習は今でもある。

京都附近では正月になると太神樂を招じて竈を拂はせる事がある。太神樂の獅子は竈の神に鈴を鳴らし神を拜し、刀を拔いて惡鬼を拂ふ型をする。近在では太神樂も特に佐々木金太夫といふのを招ずる習慣がある。

或る地方では十一月三十日、お竈様の日と稱して農家で、甘諸・芋・味噌豆等を煮る大きい竈の設けがあるが、此の日には燈を獻じ、お土産團子と稱へる白團子三十六個を供へる。お竈様をよくするとよい所にお嫁にゆけると言つて、此の供物に限り若い女が捧げることになつて居る。

參考資料 陰暦四・十一の兩月、民間に於いて行ひし竈神の祭なり。後世は正・五・九の三長月及び十二月晦日に行ふ。是日各家には神主若くは修驗者を招きて竈前に幣帛・神饌等を供へ、祝詞・經文等を讀誦し、祓を修し、家内安全延命息災の祈禱を行ふ、之を竈祓・荒神祓といふ。

竈神とは竈を守護する神にして、古事記上に「奧津日子神、次奧津比賣命亦名大戸比賣神、此者諸人以拜竈神者也」と見えたり。古來我が國人は清淨を尊び、諸の災は穢より生ずるとの信念を有し、就中火の穢を最も忌みしかば、家内にこの竈神を尊び之を家神と稱して重んぜり。竈神を祀りし事は既に藤原時代に在りて、轉宅の際には必ず屋内に是の神を奉祀するを例とせり。而して之が禮拜には正月元日・毎月朔日或は又毎朝祝詞を唱へて禮する事最も愼重を極めたり。然るに中世以後、佛教と混淆し、天台・眞言の兩宗及び日蓮宗にて三寶荒神と稱して之を祀るに至れり。而してその說く所は天台・眞言の兩宗にては、荒神は不淨を忌む、火は其體清淨にして兩ら不淨を除く故に在家にて最も清き竈を其の棲處となすと云ひ、日蓮宗にては、三寶荒神とは十羅刹女の事にして、いはゆる飢渴神・貪慾神・障碍神なり、此の三毒はやがて三寶となり、法華信者の前にては荒神は守護神となる故に之を祀れる家人をして悉く荒神を拜ましめたが爲め、便宜上竈神を拜ひたりと云ふにあり。その結果遂に江戸近在にては權現と稱して、山伏

の女房を巫女に扮せしめ、之に巫覡を唱ひ歩かせて賽錢をとはしめ、又京阪地方にては縣巫と稱するものありて、勸進の爲め竈祓をなして諸國を巡歷せしめしが、やがて之等の巫美服を纏ひ扮裝を凝らして色を賣るを專らとし遂に遊女の一種となるに至れり。かくて德川時代の末葉に至り、國學の勃興すると共に、これ等の弊風全くその跡を絶ち、次で明治維新の初め神佛分離されて一旦山伏をも停止せしかば竈神祭は專ら神職の掌る所となれり。

加年拂

古書校註

【滑稽雜談】傳へて云、年の終りに、僧尼山伏の輩に、金銀米錢などを供養し施行するを、俗に、加爾ばらへと云ふ。其には加年拂なるべし。今年無事に送りて、來年を待ち得て、又年を加ふべき祈禱に、其の身の凶事をはらふなるべし。是らも厄拂などいふ類ひならし。猶考ふ可し。

【年浪草】かに拂、增山井に、煤拂と並べ出せり。按ずるに、竈拂なるべし。民家歲末に、巫女或は山伏來りて、竈を淸め祓ひ、歲德神等の幣を切りて祭る。和俗是を竈拂と云ふ。中華には臘月二十四日に、送竈とて竈君の上天を送るの義あり。次年元旦に又新竈を迎ふるの義あるなり。

鞴祭　鍛冶祭　稻荷の御火焚　蜜柑撒

古書校註

【山之井】ふいがうまつりとは、八日の日、いなりのおほたけにて、かな物の諸職人、取りわきていはひつゝ、あかの飯など奉り侍る。

【滑稽雜談】神社啓蒙に曰、問、金工專ら稻荷を以て主神と爲すは何ぞや。曰、古へに小鍛冶と云ふ者有り。劍戟を造る。其の利きこと能く及ぶ無し。一旦當山の埴土を取つて、以て鋒刃に堪ふることを覺る。仍て數々埴土の爲に往來し、且神を拜す。世此の理を詳ぜず、從つて金工の守神と爲す。○今の世において、金銀銅鐵の工匠の徒、尤も吹革を專用する者也。每年今日吹革祭又稻荷火燒と稱して、吹革に神供を調へ、酒飯魚鳥を料理して家族是を祝す。是又社家者の幸なれば、今又金工の守護神の旨を述べ給ふ。又本社へ參る人多し。

【栞草】祭る所智恩寺の鎭守元賀茂明神なり。或人云、三十九世滿靈和尙稻荷八幡をくはふ。ゆゑに稻荷の火燒といふなり。十一月八日鍛冶・鑄冶・石工の徒、すべて吹革をとりあつかふ家には、この神を祭る。江戶にては八日未明吹革祭、その家より榿柑を投げうつ、群童爭ひてこれを拾ふ。每年此の戲を以て家例とす。

【東都歲事記】鞴祭。稻荷を祭るの行事なり。世に火燒といふ。鍛冶・鑄

す。卽ち商家に於ける夷子講の如きものなり。是の日其の業に掌る者、終日休業し、鞴を淨め、注連を飾り、神前に神酒・赤飯・蜜柑等の供物を供へ、親戚知舊を招きて馳走を爲し、祝宴を張るを例とす。近年迄は神前に供へたる蜜柑を下げ、之を投げて子供に拾はしむる風習あり。卽ち近隣の子供口々に「まけ〳〵捨てヽ鍛冶屋の貧乏」と叫ぶ、之を相圖に家々の窓より撒き與ふるを、子供等爭ひて拾ひたりと云ふ。

鞴祭は、三條小鍛冶宗近常に稻荷神を尊崇し、稻荷山の埴土を採りて利劍を鍛へ、必ず一刀を得る毎に其の場を淨め、鞴の側に神酒を供へて神恩を謝せりと云ふ、此の故事より出でたるものにして、此より後、代々の鍛工稻荷を以て守護神と爲すに至れり。而して祭日に陰暦十一月八日を用ふるは、是日山城國稻荷山にて火燒の神事を行はるヽを以てなり。東京にては小石川區水道橋際の三崎稻荷の神事を最も盛なりとす。

子祭（ねまつり）　福來（ふくらい）　子燈心（ねとうしん）　燈心賣（とうしんうり）

古書校註

【山之井】子祭は、子の日、大黑のおほたけにうちそへて、惠美須をもまつり侍る。まづ其の曉がたに、陰陽師のうりありくゑびす大黑の繪像をいはひこめて、まめの供物に、ふたまたの大根そへて備へ侍る。

【日次紀事】（二）此月子の日、供物を備へて子祭を爲す。○禁裏にも亦此の儀有り。四辻家參內、御前に於て林歌（りんか）を奏せらる。此の樂の舞衣、鼠の紋有るに因りて也。樂了りて後、則ち子に供する所の調味を以て四辻家を饗せらる。（略）凡そ諸商此の月子の日子の時、之を祭る。蓋し買賣の間、其の利を取るや、鼠の子の蕃息に比せんと欲する也。凡そ子に供する所の膳食、每品大豆を加へ、又兩股大根を供す。大豆は鼠の好みて食する所也。兩股大根は俗に福來と稱す。

【滑稽雜談】神道名目抄に云、十一月子の日大黑神を祭る。是を子祭と云ふ。大黑神は大國主命也。此の神鼠を愛して、鼠大國主神のために功ある事、舊事記・古事記に見ゆ。鼠は十二支の中坎を以て配合す。十一月子の月にあたる故に、此の神を祭るに、此の月此の日此の刻限を用る也。○これら異說甚だ多し。識者に決す可し。（二）俗間此の神を祭るに、黑米飯に大豆を加へて炊ぎ、又二岐の大根を供す。其の緣由いかなる事にや。未詳。京師、此の月此の日、市人燈心を賣る。家々又是を求む。貯ふるに此の日をよしとす。子燈心といへり。いかなる事にや、未詳。或老人曰、子は北方に配して水なり。燈心は火具なれば、火災を呪はん爲に、此の日を用ひて貯ふといへり。予おもふに、此の義さも有るべし。然れども燈心に限るべからず。火寸・燧石の類又買求むるに日を撰ばざるは何ぞや。

【年浪草】子燈心とは、和漢三才圖會に曰、燈心草、小刀を用ひて指に按へ、以て皮を裂き白穰を取る。凡そ六斤を剝ぎて、白穰半斤を得る者を上

と爲す。武州の産肥大にして最上と爲す。江州の産之に次ぐ。凡そ燈心を貯ふるに、略熱湯に蘸し、晒し乾せば則ち久しきを經て痩せず。毎十一月子の日を以て之を貯ふ。未だ其の據るところを知らず。

【東都歳事記】 初子日。子祭。毎月といへども、當月は子の月なるを以て、初子の日子の刻、專ら大國神をまつる。これを子まつりといふ、赤小豆飯等を供す。

註 (一)十一月。一本に於ける丈石の補筆に係るもの。

季題解說 十一月子の日、大黒天の祭事をいふ。陰曆十一月は所謂子月で、此月に甲子が來るのが本祭だと昔から云ひ傳へられてゐるが、今では十一月特に祭るといふことはないやうである。中には例へば鶴見の大黒天のやうに子の日でなく毎月三日に祀るところさへあり、初甲子の外は季節の感じが餘程稀薄である。

昔は子祭に福來と云つて兩股菜菔(二股大根)・玄米・黑豆などを供へたり、子燈心と云つて燈心賣などあつたとの事であるが、今は其事は無く、多くは七寶とか七味の温食と云つて七種のお供をするやうである。鼠算で利殖を得んとする意で商賣繁昌を祈るのである。黑豆を供へるのは鼠の好むところであるからである。又此の日燈芯を求めて貯ふことがある、これを此の日に買ふと家が繁榮するといふ俗說があるからである。又飯は玄米飯に大豆を加へて炊くのは大黒天の黑と玄米の玄とを符合せしめたことである。現在は京都地方でもこの事も絕えた。

東京では護國院・不忍池畔・向島などの大黒天が有名で、子の日特に甲子の日は大護摩の修行があり、講中其他の參詣人が夥しい。民家でも甲子には神棚に燈明を點じ、飯・酒などを供へ、之を祀るところがある。

因に、青海及辭林には子祭は陰曆十月甲子の日と云ひ、國民百科辭典には十二月子の日子の刻と記してある。

例句

子祭 子祭や寢て待つにはまたもちか來る 一茶 (九番日記)

朝風や燈心賣の吹かれ行く 作者不知 (類題發句集)

參考 每年陰曆十一月子の日に商家に於いて行ふ祭なり。當日屋內に大黒天神を祭り、神前に大豆或は兩股大根を供ふ。又燈心を購ひて貯へ置く、之を子燈心と云ひ、此日之を買へば其の家富み榮ゆと傳へたり、即ち大黒天に福德を祈る意より出たり。大黒天とは、梵語に云ふ摩訶迦羅(Mahākāla)の譯にして一に大闇夜とも稱す。初めは闘戰神なりしが唐の初期より僧堂神となり、厨房の福を主りて食堂に安置せらるゝに至る。而してその形像にも又變化を來せり。即ち初めは三面六臂、前左右手に横に劍を執り、左次手に人頭を執り、右次手に羊牝を執り、次左右に象皮を背後に張りて、觸髏を以て瓔珞となし、頗る[illegible]樣なりしが、後には烏帽子狩衣に袴を着け、その[illegible]を[illegible]け右手を擧りて右膝に附け、左手に大なる袋を持ち

肩より背に懸け、袋の口は臂の上に餘りて垂れ下る。而してその袋の色は鼠毛色を爲し膚色は悉く黒色に作られたり。然るに我が國平安朝の初期頃密教と共に渡來して以來、神佛習合の結果、その名稱と形體の類似より大國主命と結合するに至り、やがて形像は更に變化し、以上の外右手に槌を執り烏帽子は頭巾となり、足下には米俵を蹈むに至れり。此の如く大黒天と大國主命とが混淆せる結果、命の故事に倣ひて鼠を神使とするに至り、更に鼠と十二支の子と結びて子の日に此神を祀ることゝなれり。而して殊に大黒天が七福神の一なるを以て福德を祈り、家内の繁榮を願ふに至れり。

箕祭

箕納　秋揚　庭揚　鎌祓（鎌納）　扱祓　唐臼祓

【季題解説】 米の收穫に際して、用濟みとなつた箕を祀る行事であるが、現在行はれてゐるところはあまりないやうである。

尤も米の收穫については、地方に依つて夫々内祝が行はれてゐる、例へば九州の一地方では田から刈入が濟んだ時秋揚と云つてお祝をし、扱いだり俵に入れたりして庭仕事がすつかり濟んだ時庭揚と云つてお鮓など作り、酒肴を買つて祝ふ風習があり、關東の一地方では稻の刈上が濟んだ時、鎌祓（鎌納）、扱ぎ終つた時扱祓、籾摺が濟んだ時唐臼祓と云つて夫々赤飯を炊き、荒神を祀つてお祝ひをする。

【例句】

箕祭

箕祭や箕もてあげたる干饂飩　小海老（ホトトギス）
古き箕を上座にかけて祭りけり　大愚（同）
懐姙りて妻安らかや箕を祭る　南魚（續ホトトギス）
古き箕もまつさをな箕も祭りけり　春山（同）

王子の狐火

【古書校註】

【栞草】 江戸近鄕王子村稻荷の社邊に、裝束榎といふ榎あり。每年十二月晦日の夜半、この木の下にて群狐火をともすなり。その狐火を以て、農民明年の豐凶を卜す。今夜社内に參籠多し。

【東都歳事記】 今夜、王子稻荷の傍、衣裳榎の本へ狐多く集る。關八州の命婦、こゝに集り、官位を定むるよしにて、狐火夥し。其の狐火山路をつたひ、川邊をつたふ樣を見て、明年の豐凶を占ふとぞ。この事、年によりて一度ある事あり、又二度三度に及ぶ事もありて、刻限も又定らず。別當金輪寺にては、前かたより刻限を知るといふ。この官定の時、關八州の狐集る内に、八官町の穀豐いなりは老足なるが故、途中に憩ふ所なくしては、當所へ來る事あたはずとて、いにしへ日赤不動の別當へ靈夢の事あり。よつて同所境内を每年官定の日の旅所と定めしよし云傳へなり。

又科學的自然現象も共にその面影を失ふに至り、纔かに心ある住民の努力に依つてこその代償か計劃されしものと見るを得べし。嗚呼惜むべき哉。

拜墳（はいふん）

古書校註

【滑稽雜談】 程子遺書に曰、墳を拜するは則ち十月一日之を拜す。霜露に感ずる也。寒食には則ち常禮に從ひて之を祭る。飲食は家の有無に稱ふ。（略）○夢華錄に云、十月の朔、都城の士庶城を出でゝ墳を饗す。禁中車馬陵に朝すること寒食の節の如し。

註 ○滑稽雜談に本項に續いて、樵楷食の項があり、その末尾に「これらの二事、和朝において沙汰なし 近世の俳書に之を載す、作者心得べし」と記してゐる。

臘日（らふにつ）　臘祭（らふさい）

古書校註

【滑稽雜談】 玉燭寶典に曰、臘は先祖を祭り、蜡は百神を祭る。日を同じうして祭を異にする也。（略）和において臘蜡の一祭沙汰なし。臈臘の說に云、武帝紀又始皇帝紀の旨をみれば、和にある所の農民に倉附の酒食を贈るなどいへるに似たるか。和歌連歌に臘日の沙汰なし。我が黨の好事のため之を註す。考ふべし。

註 ○年浪草には、臘日の項に續いて、蜡祭・嘉平・淸祀の項があるが省略した。

智積院論義（ちしやくゐんろんぎ）

古書校註

【滑稽雜談】 雍州府志に云、智積院は鳥戶山の麓に在り。紀州根來寺覺鑁の派にして、眞言新義の道場也。然れども其の法流日に衰へ、剩へ僧徒武勇を勵み、動もすれば武家に對して讎をなす。織田信長公之を怒り、伽藍を燒き僧徒を滅す。今代殘僧の中傑出の者を撰ぶに、偶〻二人有り。其の一人は長谷寺小池坊に住ましめ、其の一人は智積院に住ましむ。是を兩能化となし、新義の法流を再興し、所化の僧を導かしめ、每年十月朔日より同十二日に至り、論義を修す。所化の僧來集する者七百餘人に及ぶ。（略）○今の世において猶論義を修す。諸國の所化此の會に年を積みて僧位を轉ず。十二月の覺鑁の法會を相勤めて四方に退散す。學寮は軒をつらねて山に聳ゆ。誠に雲の寮の名侍る。

東叡山開山忌（とうえいざんかいさんき）　慈眼大師忌（じげんだいしき）

古書校註

【日次紀事】 慈眼大師天海忌。比叡山延曆寺中興幷に武藏國東叡山寬永寺開山也。寬永二十年（一）今日寂す。山門南光坊に牌有り。

【東都歳事記】 二日。東叡山開山忌。開山慈眼大師御忌によつて修行あり。辰の刻御本坊より御門主御轎にて慈眼堂へわたらせらる。閣山の院主惣出仕ありて、法華八講修行、行道散花等あり、伶人音樂を奏し、巳の半刻に法會終る。これを俗におねりといふ。貴賤群集す。

註 (一) 十月二日。

大師講(だいしかう)

月會(つきゑ)　智者大師忌(ちしやだいしき)　天台大師忌(てんだいだいしき)　大師粥(だいしかゆ)　智慧粥(ちゑがゆ)　比叡山法華會(ひえいさんほつけゑ)　霜(しも)

古書校註

【日次紀事】 天台大師講 震旦法華の三祖天台智者大師也。叡山並に愛宕山天台大師講を修す。建仁寺も亦之を修す。俗間、各々亦豆粥を食し、枯柴を折りて箸となす。是を智慧粥(チエノカユ)と謂ふ。(一)今日より正月晦日に至るまで、天台所化勤學の僧、暇を請ひて能化、各住院に歸りて休息す。是亦夏間(ゲアイ)と謂ふ。盛夏の例に倣ひて、嚴冬の寒苦を避くる爲也。日蓮宗の所化僧も亦然り。

【滑稽雜談】 佛祖通載に云、天台智者禪師、寂を開皇十七年十一月廿四日に示す。師諱は智顗、字は德安、姓陳氏、頴川の人。(略)天台の大石像の前に卒す。春秋六十七。(一)別行傳に曰、隋の開皇十一年廿三日、大王散居して菩薩戒を授かる。師曰、大王、行聖禁に邇ず、名づけて總持と云はんと。王曰、大師、佛の法燈を傳ふ、稱して智者と爲さんと。和俗今日大師講と稱する者、按ずるに天台智者大師の忌日也。此の師は台宗の高祖、法華三昧の人なれば、天台法華宗におゐて專ら敬すべき師也。故に法 など傳ふ。他宗の俗間今日赤豆粥を製して大師講の粥と稱す。おほくは傳教・弘法・慈惠の三大師と謬る也。又粥を製する事本說なし。或說に云、法華門にて僧徒始めて八軸を習ひ終る時、智惠粥とてあづき粥を製し、經の師或は祖像に奉る事侍る。若しくはかやうの義より起るにや。又他門に製する事を按ずるに、大師講の粥を、燒けざる家は蚊蠅去らずと云ふ孟浪の說より持賞すにこそ。

【年浪草】 當月、廿一日より廿四日に至りて、諸山大師講を修す。比叡・東叡・日光の三山、廿一日の曉より、廿三日の朝に至りて、晝夜法問あり。之を論義と謂ふ。一山一院交こ年々道場を勤む。之を天台會と號す。(略)○(二)和讚に曰、歸命頂禮大唐國、天台大師は能化の主、佛の使と世に出で、一乘妙法宣べ給ふ、眉は八字に相分れ、目には重瞳相浮び、妙惠深禪身を飾り、佛に治と近かりき。(下略)

註 (一) 十一月廿四日 (二) 天台大師和讚の一節。

【季題解説】 十一月二十四日、智者大師の忌日である。智者大師は梁の僧、諱は智顗、姓は陳氏、十八歳で出家し、隋の煬帝の時、法華玄義・法華文

句・摩訶止觀を講じ、天台の宗義を完成した人である。六十歳、隋の開皇十七年示寂した。よつて天台宗の寺院では忌日を修する、これを大師講といふ。昔は比叡山・愛宕・建仁寺・東叡・日光等で法會を修し論義を行つた。就中比叡山では十日間法華會を修した。民間では枯柴を折つて箸とし小豆粥を食ふ。これを大師粥といひ、又智慧粥ともいふ。今は多く行はれないが、比叡山延暦寺では山麓諸佛堂で九月二十三・四兩日に行はれてゐるとか

例句

大師講

なむ大師しらぬも粥にありつきぬ　一茶（七番日記）

けふの日やするゝ粥もをがまるゝ　同（同　）

大師會や山動くかに詣で人　皐鶏（ホトトギス）

臘八會（らふはつゑ）

成道會（じやうだうゑ）　臘八粥（らふはちがゆ）　五味粥（ごみがゆ）　溫臟粥（うんざうがゆ）

古書校註

【日次紀事】　溫臟粥。（一）今日横司より溫臟粥を獻ず。二水記に云、本朝、臘八粥を溫臟粥と名づく。今造る所を見るに、昆布・串柹・大豆粉・菜葉相合せて之を製す。按ずるに、中華十二月初八日、都下の諸大寺浴佛會をなし並に七寶五味粥を贈る。之を臘八粥と謂ふ。本朝の溫臟粥、此に本づく乎。

【滑稽雜談】　按ずるに、是釋迦如來悟りを開き、雪山を出給ふ日也。世に出山の釋迦と稱す。上の註する所異說侍る。博學の師に決す可し。當世に就中禪家において上堂をなし、法會を行はる。諸家の僧徒豈おろそかならんや。

溫糟粥。按ずるに、臘八の粥を製する事、經に說くが如し。釋尊雪山を出給ひし日、難陀・婆羅の二女乳味を奉りしとかや。故に天竺・震旦（でこ）ともに其の故實を修す。我が朝にも釋家おほくは此の事を侍る。又溫糟粥と云ふ名、釋氏要覽・禪林類聚等、齋粥之部、釋尊出山の時において供し奉る。又本草綱目粥之部にも、溫糟の二字所見なし。或は云、二水記に溫糟粥の事、出山の時供し奉るとあり。又洛西槇尾寺に溫糟粥と云ふ物を製すと。往きて尋ぬべし。

【年浪草】　月令廣義に曰、臘月八日を以ての故に臘八と曰ふ。凡そ臘四十日にして、此日を以て勝れりとなす。○又曰、臘八粥、諸穀米菓を以て粥を煮て相餽る。邪を逼ひ寒を祛ぎ疾毒を禦くと謂ふ。

【栞草】　溫糟粥。臘八粥。八日。「增山の井」五山にても、又禁中にても有りと也。「年中行事」溫糟粥、醴（カマザケ）・餠・燒栗・菜をこまかにきりわかして、ゐらす云々。（略）。「傳燈錄」釋迦佛檀特山にて非非想を學び、二月八日成道す。（周の二月は夏の十二月也。）「夢粱錄」十二月八日を寺院にて臘八といふ。大刹等の寺、倶に五味粥を設く。名を臘八粥と云ふ。

註（一）十二月八日。

季題解説 「ろうはつ」と讀む。釋迦が雪山で苦行をせられ、十二月八日鷄鳴、明星を見て悟を開かれたので、此日を期して禪林其他大きな寺では法會が行はれる。其日が臘月八日であるところから臘八と云ひ、釋尊成道の法會であるので成道會とも云はれてゐる。

芝增上寺では十二月四日から八日迄法會と說敎がある、本堂には大きな花蠟燭が灯され、信心の門徒が數千人集つて說敎を聞き、又僧と和して誦經するのである。法會の終りに、寺僧が五色の散華を撒き、參詣の人々が爭つて之を拾ふ、魔除になるといふのである。

鎌倉圓覺寺・芝青松寺・京都相國寺・越前永平寺などでは、十二月一日から七日或は八日朝まで殆ど不眠不休で座禪修道が行はれる。これを臘八接心とか臘八大接心とか云ふのである。七日夜或は八日の朝、茶粥・甘酒・澤庵などが出る。又八日朝、問答が濟んだあとで、掌に小豆粥を載せて食べる寺もあるといふ。又粥に昆布・串柿・菜、その他を混ぜたものを食べる、之を五味粥といつて居る。釋尊の苦行を偲ぶ嚴格眞劍な修道である。

例句

臘八會

臘八や夜着の中から聞あらし　浪化（浪化上人發句集）
臘八や今朝雜水の薫の味　惟然（惟然坊句集）
臘八や痩は佛に似たれども　支考（蓮二吟集）
我目には師走八日の空寒し　杉風（杉風句集）
臘八や流るゝ水も物いはず　千代女（千代尼句集）
臘八や行燈にさめる目は寒し　也有（蘿葉集）
臘八にせめてうたふ人もがな　白雄（白雄句集）
臘八や仰向ばはや星もなし　闌更（半化坊發句集）
臘八や今に迷ひを傳へつゝ　同（同）
臘八や我と同じく骨と皮　一茶（七番日記）
臘八や八瀬の薪も山を出る　乙由（麥林集）
臘八や庭に榾焚く山の寺　吟江（夢占）
臘八や山より響く鐘の聲　利一（同人）
臘八や庭師も粥に召されけり　月嶺（竪葵）
臘八の晨鼓（シンク）山河に響きけり　活潭（ホトトギス）
五味粥に混ぜて賜り合ふ華足餅　月尚（同）
臘八の法話の中の摩伽陀國　休山（續ホトトギス）

達磨忌　初祖忌　少林忌（せうりんき）

古書校註

【日次紀事】達磨忌當日。梁の大通二年、(十)今日入寂。大小禪刹集りて之を修す。凡そ各〻の寺院、開山の忌と達磨忌と、是を二祖忌と稱す。

【滑稽雜談】定[illegible]第一に曰、菩提達磨は南天竺國香至王の第三子也。[illegible]

梁の普通元年庚子、支那に來り、武帝の與に第一義を說く。帝契はず。乃ち江を渡りて魏に入り、嵩山の少林寺に居り、(二)九白を經て天竺に歸る。(略)(此祖は禪門の初祖といへば、濟家洞家のわかちもなく、達磨忌と稱して、上堂の頌を唱へ、諸山の行はるゝ忌也。

註 (一)十月五日　(二)栞草に同文を引き、九白に九年と註してゐる。

季題解說　十月五日は菩提達磨の正忌である。此日禪林では法會が行はれ、お說教などがある。

達磨は印度の高僧、釋迦から二十八代目の人で、支那に禪宗を傳へた始祖である。支那の少林寺で九年の間、面壁靜坐をしたといふことなどは廣く人口に膾炙してゐるところである。「吾本來二茲土一、傳レ法救二迷情一、一花開二五葉一、結果自然成」といふ偈を作り、大通二年十月五日入寂したと傳へられてゐる。

京都市右京區花園の妙心寺に於ては十二月四日、忌を修し、上堂の頌を唱へ法事を勤行する。

例句　達磨忌

達磨忌や自剃にさぐる水かゞみ　其角（五元集拾遺）
達磨忌の旭たふとや赤東堂　許六（五老井發句集）
達磨忌や宗旨代々不信心　太祇（太祇句選）
達磨忌や和尚いづちを尻目なる　召波（春泥發句集）
達磨忌に見やる經師が障子哉　白雄（白雄句集）
達磨忌や寒ふなりたる膝がしら　同（同）
だるま忌や沓ふみきりし葛根山　同（同）
達磨忌や南天の入汁の中　乙二（をのゝえ草稿）
達磨忌や壁にも葛の枯るゝ時　稻中（芭蕉庵再興集）
達磨忌や油揚の棒くらはせん　春來（新選）
達磨忌や皆呪まれて齋に著　萬立（古今句鑑）
達磨忌や寺幕張りて僧ゆきゝ　松碧樓（ホトトギス）
達磨忌や僧を眺めて俳諧師　茅舍（同）

冬安居（ふゆあんご）　雪安居（せつあんご）

季題解說　佛教徒が冬、期間を定めて靜居修道するのをいふので、夏安居（げあんご）に對して冬安居といふ。然し臨濟宗を始め一般では雪安居と呼ばれてゐる。冬安居は露領中央アジアで行はれたもので、期間は十二月十六日から三月十五日迄であるが、我國では現在主として禪宗の大寺院で行はれ、期日は十月一日から一月十五日迄のところもあり、十一月一日から一月三十一日までのところもあり、十一月十五日から二月十五日までのところもあり、又九十日間行ふところ、百日間のところなど各寺一定してはゐない。此間

主として坐禪を行ひ、佛書の研究・講義をなすもので、安居に入るのを入制、終るのを解制、期間中を制中と稱んでゐる。又雪安居が終つて雨安居が始まるまでの間は休暇といふ意味で制間と云はれてゐる。寺によつては此の九十日或は百日間の修業を小僧から長老に上る行として、盛に問答をやつたり、朝は一番に起きて他の僧を起したり、不淨の掃除までもして辛い修業をさせる寺もある。〔參照〕夏　安居ゴ

例句

冬安居　狐狗狸の頭ならべて雪安居　一杉

興福寺法華會

古書校註

【滑稽雜談】（一）六日、（略）（一）公事根源に云、興福寺法華會、六日、南圓堂にして、妙法の大會をひらかしむ。是は十月六日長岡の大臣內麿の御忌日によてなり、閑院贈太政大臣冬嗣公は、彼の大臣の御子たるによて、父の御ために始めて行はせ給ひけるにや。扨も興福寺南圓堂の本尊、不空羂索の觀音の像幷に四天王の像は、長岡大臣の造立し給ひしを、後に閑院大臣の南圓堂を建てて此本尊を安置し給ひし也「補陀落の南のきしに堂たてゝ今ぞさかえん北の藤浪」と春日明神の人夫の中にまじはり給ひて遊ばされし事は、此南圓堂を建立の時の事也。されば藤原氏も、（略）王家は絕え果てて、北家のみさかえぬる事は、偏に彼の神歌の德なるにや。（一）大和名所記に云、（略）法華會、昔は每年行はれしなり。當世は三年に一度行はるゝ也。

【後撰集】補陀落の藤とて今もあり。東圓堂の八重櫻と一雙の樹也。

註（一）十月

維摩會

維摩忌　淨名會

古書校註

【初學抄】維摩會、十月十日也。興福寺に於て行ふ也。元明天皇御宇、和銅七年に始めて行ふ也。

【日次紀事】南都興福寺維摩會、維摩大會、一乘院・大乘院、交ゝ寺務を爲す。時に一代一度之を修す。每年今日、亦小法會を修す。

【年浪草】（一）故事要略に曰、維摩會は、齊雲三年先正一位太政大臣、聖朝安穩、社稷傾くこと無き爲めに、謹みて弘誓を發して、斯の會を開く。○元亨釋書に曰、齊明皇帝三年十月、內臣鎌子、山階寺を建てゝ維摩會を修す。山州山階の家に於て、山階精舍を創め、維摩會を設く。維摩會此より始まる。（略）○公事根源に曰、是は十月十日より十六日にいたるまで、七ケ日の間、興福寺にて維摩經を講ぜらる。十六日は大織冠の御忌日なるゆゑなり。興福寺は大織冠の御願とはいひながら、其の御子淡海公ぞ誠には作り立てられしか、又は山階寺とも申すなりと云々。

季題解説　十月十日、維摩居士の忌日である。維摩は釋迦の弟子ではあるが僧侶ではなく、信者と云つたやうな所謂大惜の居士であつた。釋迦は維摩に佛弟子の力を試させてゐたと云はれ、又文殊と維摩の對話が其儘維經文になつてゐる位で非常に偉い人であつた。我國では昔奈良興福寺などで十月一日から七日間維摩經を講ずる維摩會が行はれてゐたが、今は中絶してゐる。只東京芝青松寺で年に依つて行はれる事もあるといふ程度である。京都相國寺で毎月講演會を開いて維摩會と云つてゐるが、之は意味が違ふ

例句
維摩會　維摩會にまゐりて併諧尊者かな　鬼城（ホトトギス）

栂尾蟲供養

古書校註
【滑稽雜談】　元亨釋書に曰、釋高辨、（略）修供の間、常に佛眼波妃法を修し、又般若理趣分を誦す。侍者良詮を呼んで曰、一蟲桶の裏に落つ、汝早く之を救へと。詮堂外の水桶を見るに、果して一蜂落ち浮ぶ。（略）○雍州府志に云、（略）毎年十月十二日・十三日、蟲供養有り。山下の農夫一度耕種の時、覺えず殺す所の蟲幾許有り。故に殺生の罪を恐れ、東西兩村より兩日各々米穀を供し、施齋を修す。是、死蟲の爲に供養を修する也。

鹿王院舍利開帳

古書校註
【滑稽雜談】　（一）十五日。（略）此の寺は洛西嵯峨にあり。是勝定院相國（足利将軍義持公也）普明國師のために建給ふ塔前の名跡ならし。（二）件の牙舍利猶此の地に在つて、毎年今日是を開きて舍利會を行ふにや。又此の舍利を水精の内に安置す　拜見の人面、彼の水精の圓相にうつりて互に相映ず（マヽ）圓相なる故に人影逆に相移れり（マヽ）。俗に云、鹿王院の水精人影をして逆に見せしむ、若し正しく影を移すものは短命也と云ふ。甚だ笑ふ可し。

註　（一）十月。（二）同書引く所の鹿王院佛牙舍利記によれば、後光嚴院の敕命によつて圓覺寺の獻じたものとある。

東福寺開山忌　聖一忌　行厨納

古書校註
【日次紀事】　聖一國師忌當日。弘安三年（一）今日寂す。偈に曰、利生方便七十九年、欲レ知二端的一佛祖不傳。此直筆、開山堂に掲ぐ。
【滑稽雜談】　元亨釋書第七に曰、惠日山の辯圓、字は圓爾、姓は平氏、駿州藁科の人、母は税氏。夢むらく、手を擧げて明星の光を採ると。因りて孕む。（略）九月に至りて胎中に聲有り。建仁二年十月十五日、日出づる時生

る。金光室を照らす。(略)十八にして園城寺に薙髮し、東大寺の戒壇に登り、三井を出で、野州長樂寺に往く。嘉禎元年海に泛び、十晝夜にして宋の明州界に着く。(略)淳祐元年四月、佛鑑を辭す。(略)孟秋博多に著く。本朝仁治二年辛丑也。崇福・承天・兩寺に居り、盛に祖道を倡す。(略)諸徒遺偈を乞ふ。便ち書して曰、利生方便七十九年、欲知端的佛祖不傳と、筆を投じて逝く。(略)正和の始め、諡して國師と賜ふ。國師の號師に始まる。(一)(略)(二)此の日當山の什物、開山將來の繪讃等、諸堂方丈客殿に満る。諸人是を拜見のため老若群をなす。又此の節通天の楓葉紅錦をさらす。故に酒餞を携へて興を催す。京都の一壯觀なり。俗に云、十月初午を以て行厨の始とし、十月當山開山忌を以て行厨の終とせると也。

註 (一)十月十七日。(二)十月十六日。

語釋解說 東福寺は京都市東山區にある五山第四の臨濟宗の一本山である。惠日山と號し延長七年九條道長の創建で、寺域廣く洗玉澗といふ溪流にかかる通天橋は紅葉の名所として有名である。開山は聖一國師で忌日は陰暦十月十六日である。國師諱は辨圓、姓は平氏、駿河の人、十八歳で近江園城寺で薙髮し、大和東大寺で受戒し、嘉禎三年入宋、仁治二年歸朝した。弘安三年壽七十九で入寂した。東福寺では前日十五日に葬儀に擬して國師の木像を輿に安置し、寺僧前後に隨從し法堂に安置し、翌十六日正當の忌を行ふ。夕刻常樂庵に歸輿、又法會を行ふて忌を終るのである。當日は寺寶を諸堂方丈に陳列し諸人に拜觀せしめる。丁度通天橋の紅葉の見頃とて、京都では昔、遊山の始めとして御忌を行厨始といひ、この東福寺開山忌を行厨納といつた。現今は新暦として一月遲れの十一月十六日に行つてゐる。

例句

東福寺開山忌

開山忌となりは留主のいなり山　浪化 (浪化上人發句集)

十夜（じふや）

お十夜（じふや）　十夜粥（じふやがゆ）　十夜婆々（じふやばゝ）

古書校註

【日次紀事】 眞如堂念佛并に法要、(一)今日より十五日に至る。是を十夜と稱す、夜に入り、宗門の男女群集して各々高聲に彌陀號を唱ふ。凡そ淨土宗の寺院、法談有り。其の始めに多く永[illegible]を讀む。

【滑稽雜談】 今世淨土宗に此の會を用する事、鎌倉光明寺に始まり、眞如堂は別に十六日[illegible]回向也。子細未だ知らざる歟。光明寺より之を始め、諸國の宗門十夜念佛を行ひ侍る。又引聲彌陀經并に引聲念佛、十夜の法要とする事、當代は光明寺一寺のみ也。每歲今月十四日、夜に入りて引聲彌陀經を修行せらる。いと尊なる法會とかや。

【栞草】 五日より十六日迄、[illegible]此に於て[illegible]修することを十日十夜なれば、他方諸佛の國土に[illegible]となす千歲に勝れり、云々。故に十夜といふ

○洛東鈴聲山眞正極樂寺眞如堂（天台）を以て始めとす。本尊慈覺大師の作なり。此の像靈夢によりて別時念佛を始む、これを十夜といふ。蓋し伊勢守貞國はじめてこれを修す。

【東都歳事記】六日。今日より十五日に至る迄、淨土宗寺院十日十夜法要執行。此の間、說法別時念佛等ありて、參詣多し。今日を十夜紐解と云ふ。十四日には籠り等あり。此の間、俗家にても法事をなす。增上寺、十四日檀林よりも出る。此の日は庶人拜する事ならず。

十日十夜法要の事は、白川女院の宮中にて始めて行はる。そのゝち後花園院永享二年、武將足利義教公の執權伊勢守平朝臣貞經が息兵庫頭貞國法名眞蓮、深く彌陀の誓願に歸し、洛東鈴聲山眞正極樂寺眞如堂（天台宗）の本尊の靈夢を得て、此の法會の中興ありしが、明應四年品川願行寺の開山觀譽祐崇上人、勅に應じて京師に入り、十夜法會を淨土宗にて執行ふ事を許され、鎌倉の光明寺に歸り始めて行ふ。是、淨土宗の諸寺院にて修行するの始なり。今も光明寺の十夜法會には、江戸並に近在より詣で來る人多し。

註　（一）十月五日

季題解說　淨土宗の寺院では昔から舊曆十月五日から十四日まで十日間、十夜の法要を修することになつてをる。併し新曆が採用された明治になつてから之を新曆に引直して、新曆の十月五日から十四日までにしたものが多い。十夜に特別の緣故のある寺は京の眞如堂と鎌倉の光明寺であるが、光明寺の如きは新曆十月五日から十四日までである。之ならば秋季になる。然し十夜が始めて行はれ、十夜については最も權威ある京の眞如堂では一月おくりになつて、十一月の六日から十五日まで行ふことになつてをる。其ならば冬季になる。
十夜婆々といふ言葉があるやうに、老翁老媼などが群集して參詣する。

【參照】秋　十夜寺

例句

十　夜

十夜鉦明日の納豆もたゝきけり　言水（俳諧五子稿）
極樂はいつも月夜に十夜かな　浪化（浪化上人發句集）
　傷亡師終焉
わすれ得ぬ空も十夜の泪かな　去來（去來發句集）
下京の果のはてまで十夜かな　許六（五老井發句集）
禪門の革足袋おろす十夜哉　同（同　）
さえそむる鐘そ十夜の場の月　杉風（杉風句集）
油灯の人にしたしき十夜かな　蕪村（新五子稿）
あなたうと茶もだぶ／＼と十夜哉　同（蕪村句集）
尼寺や十夜にとゞくさねかづら　同（落日庵句集）
あら笑止十夜に落る庵の根太　太祇（太祇句選）

十夜

くゝりぬれし大俗をてあり十夜寺　[illegible]（ホトトギス）

お亂に金欄かけて十夜かな　鬼城（同）

ぬかるみの月となりたる十夜かな　濁水（同）

吉祥院八講（きつしやうゐんはつかう）

古書校註

【滑稽雜談】拾芥抄に曰、十月十七日、吉祥院御八講始、四日。○或家記に曰、鳥羽院の御宇天仁二年二月廿五日、菅相公の昔に依り、始めて北野の御忌日を行ひ、吉祥院に於て八講を行ふ

法勝寺大乘會（ほつしようじだいじようゑ）

古書校註

【滑稽雜談】（二）廿四日より廿八日まで（略）當世にあゐて此の寺の舊跡、岡崎村民屋幷に田畠の中に往々あるのみ。然るうへは此の大乘會式も名のみ也。作者讃吟すべし。

【栞草】廿四日より廿八日まで　當寺は白河法皇の皇居なり。その後天台宗の住持聖道衣なり。後醍醐帝の勅によりて律衣となる。今寺絶えて岡崎村の藪中に諸堂の跡残る。九重の塔の跡、村の南にあり。塔檀と號す。絲櫻の名所なり。風雅集、淨妙寺關白、立ちよらで過ぎぬとおもへど絲ざくら心にかゝる春の木の本。一説に、當寺は南禪寺の西北、新黑谷の南なり。この地は白川の大臣忠仁公の別業にして、寺は白川院の御願なり。當寺の九重の塔、浪速の浦にうつりしといふ。

註（二）十月

永觀忌（えいくわんき）

古書校註

【滑稽雜談】二日。元亨釋書に曰、釋永觀、姓は源氏、東大寺有慶に投じて三論を學ぶ。晩に洛東禪林の故居に歸り、交往を謝絶して偏に安養を慕ふ。天永二年秋疾む。徒に語つて云、昔世尊八十にして涅槃、我今歳壽を同じくす。年を踰えずして滅を取らば足れりと。十一月二日沐浴して念佛す。異香芬郁たり。中夜頭北面西にして寂す。紫雲房壁に垂る。○今世に及んで永觀忌侍る也。禪林寺に於て、毎歳今日此の忌を修し侍るなり。

善福寺開山忌（ぜんぷくじかいさんき）

古書校註

【東都歳事記】（二）三日。今日より六日迄。麻布善福寺開山忌。開山了海上人は、藏王權現に祭りて、境内別堂に安んず。麻布權現ともいふ。今日開

山忌にて、則ち右の堂にて開山自作の木像を浴す。俗におゆひき又御身拭と云ふ。この間阿彌陀經を讀誦す。五日の夜、近邊の者、笹に團子・蜜柑を付けて納む。境内にまきて諸人に拾はしむ。

諺 (一)十一月

御忌定(ぎよきさだめ)

古書類證

【滑稽雜談】(一)十一日。此の日東山智恩院末中六役僧并に寺中の役者衆會所に會合して、來春御忌七晝夜の導師法役の僧并に初山の僧、各普請をくり改めて其の交名を定む。其の後役者より奉書紙を以て初山に相當る僧へ觸れ達はしむ。且黑谷・百萬遍又淨花院の三本寺へも、當寺の使僧を以て、例年の通り勤行の有るべき旨を申し達す。是當山の淨土宗の總本寺なれば也。會合の僧衆に丈室より饗應として饂飩を給ふる定例なるよし。

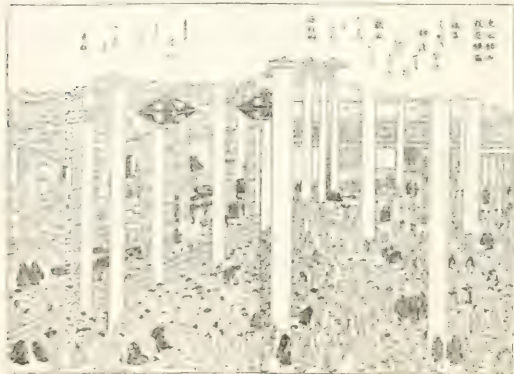
註 (一)十一月。

御正忌(ごしやうき) 報恩講(はうおんかう) 御七夜(おしちや) 御講(おかう) 御佛事(おぶつじ) お霜月(しもつき) 親鸞忌(しんらんき)

古書類證

【日次紀事】東西本願寺開山親鸞上人忌法事(一)今日より廿八日に至る。是を報恩講と謂ふ。俗に御霜月と稱す。門徒宗常毎日佛前の立花を改め挿し、互に綺麗を爭ふ。僧俗、銅瓶の大なる者を花瓶と稱す。又薄端(ウスハタ)と謂ふは、其の上に受くる所の水至つて淺き故に之を稱す。數品の花木を以て其の中に挿し、是を立花と稱す。

【滑稽雜談】按ずるに、京都にて高田流の道場は、西原町二軒、木壽寺是也。凡そ東本願寺・佛光寺・高田專修寺、其の外三摩耶(鯖江)錦織寺などいへる門徒諸國に散在して、其の數幾萬なるを知らずといへり。是らの門徒、僧俗に限らず一七日の亂忌を行ふ、是を報恩講と稱し、俗又御佛事・御霜月など云ふ。皆是親鸞上人の正當忌也。(一)晦[illegible]寺・在家に[illegible]より引上げて

之を勸む。

【栞草】　親鸞上人の忌日なり。上人は内丸の後胤、藤原の有範の男、伯父範綱養ひて子とす。字は善信坊。名は綽空、又範宴と更め、初め慈鎭を師とす。後源空の弟子となる。弘長二年十一月廿八日寂す。年九十一。淨土眞宗の開祖たり。東西本願寺は十一月廿二日より廿八日まで報恩講を修す。京江戸在家宗門の徒、參詣群集す。或は御霜月と稱す。又御講と云ふ。昨今時として天氣快晴なり。俗にこれを御講凪といふ。

【東都歳事記】　東本願寺。參詣の道俗、晴曇の分ちなく、東雲の頃より寺前に群集し、惣門の開くを待つて本堂に詣る事、更に間斷なし　法會中座敷に於て聽衆に齋非時をすゝむ。一宗の老若、御講小袖となつけて、あらたに衣服を調へて參詣す。男は肩衣の巾せまきを着し、女は薄ものゝ黑き頭巾をかぶる。是を俗に、つのかくしといふ。

季題解説　本願寺派——一月十日乃至十六日、大谷派——十一月二十二日乃至二十八日。陰暦十一月二十八日は眞宗の開祖見眞大師（親鸞上人）の忌日である。眞宗は本願寺派・大谷派・高田派・興正寺派・佛光寺派・木邊派・出雲路派・山元派・誠照寺派・三門徒派の十派に別れてゐる、その内本願寺派、大谷派が大きいものであるが、この兩派に於て忌日・法會の日取が異つてゐる、即ち本願寺派本山では太陽暦によつて毎年一月十日から十六日までの一週間、大谷派本山では太陰暦により毎年十一月二十二日から二十八日までの一週間取り行ふのである。何れも七晝夜に亙る大法會であつて、之等各派寺院で行はれる法會のうちで重要なものである。そこで正しくいふならば、本願寺派では一月十六日が親鸞上人の忌日であり、即ち御正忌といふことになり、大谷派では十一月二十八日が上人の忌日であり御正忌であるといふことになるのである。因に敎家、佛徒間では親鸞上人を呼ぶのに祖聖とか宗祖上人とか敬語を用ゐて、決して親鸞などとは言はない、從て親鸞忌などとは言はないわけである。然し一般には親鸞忌と言つて通つてゐることでもあるからこの言葉を抹殺する程でもなからうと思ふ。親鸞上人は京都の人。幼名若松丸、後、鶴滿丸と言ひ日野有範の子、幼にして父母に別れ伯父範綱に養はれた。慈鎭に台敎を學び、範宴と號し、後、法然に從つて綽空又は善信と言つた。六角堂觀世音の夢想に託して一向宗（淨土眞宗）をはじめ、肉食妻帶の自由を唱へ、藤原兼實の娘を娶つた。衆僧の憎しみを受け、幕府に訴へられ、越後に流され、赦免の後、宗旨を全國に弘めた。弘長二年十一月二十八日、九十歳で示寂した。明治九年見眞大師と追謚された。

京都東西本願寺では、日こそ違ふけれども御正忌は盛大に行はれる。七日間の法會の第一日を初日（ショニチ）、四日を中日（ナカビ）、七日目を結願日（ケチグワンビ）と言ひ、この最終日が最も重要なものである。毎日未明に晨朝法要、午前十時に日中法會、午後二時に逮夜法要があり、七日間之を繰り返すのである。中日には御傳

す。故に其の外は此月之を修す。

【滑稽雑談】　京都東西本願寺墓所大谷において、毎年此法事を修す。二十七八両日也。是又御取越と稱す。今世諸道場數多之有り。其日限さし合ふゆゑに、八月に入つてはや御とりこしを行ふ所多し。俗家も是にならひて八九月に法事をつとむる家多し。古來より季に用ひ來るは冬也。

注　(一) 十一月廿二日。(二) 御取越を參照せよ。(三) 十月。

季題解說　眞宗の本山では親鸞上人の忌日には御正忌又はお七夜と言つて七日間の大法會を行ふが、末寺又は門徒ではそれよりも少し日を早めて報恩講引上會地方ではこれを單に報恩講といつてゐる。又はお取越といふものを行ふ。之は嚴格の意味で上人の忌日法會ではなくて、宗祖の御敎化の恩德を報謝する意味で行はれるのである。又本山御正忌よりも繰り上げて早めに行ふといふことからお取越と言ふのである、從て本願寺派末寺で行ふ報恩講は十一月から十二月にかけて行はれる。　參照　御正忌　精進落　鳴瀧の大根焚

例句

御取越餡でもちくふ夜なりけり　一　茶（七番日記）
下序にきせる磨くや御取越　同（一茶句帖）
とつときの江戸畫屛風や御取越　同（九番日記）
けぶたさに泪こぼすや御取越　吟　江（推敲日記）
大いなる庫裡の火鉢や御取越　雨圃子（ホトトギス）
隣まだ籾する音やお取越　かずを（同　）

精進落（しやうじんおち）

精進固（しやうじんがため）

季題解說　報恩講のすんだ日沒後、精進落をする所もある。本山でも其日あかるい內から、大きな立派な鯛などが搬入されるのを見受ける。眞宗寺院では、京本山の御七晝夜、卽報恩講執行中一週間は魚肉を食はず、嚴重に精進を守ることもある。その精進に入る前日何かと馳走して食する、これを精進固めと云ふのである。　參照　御正忌　御取越

例句

精進落

御法主も精進落ときくからに　水　陽（ホトトギス）
鶏燒いて精進固めしたりけり　月　倘（同　）

鳴瀧の大根焚（なるたきのだいこたき）

大根焚（だいこたき）

季題解說　十二月九日（翌日も續いて行はれる）、京都市右京區鳴瀧了德寺（俗に鳴瀧御坊といふ）での行事である。了德寺は眞宗大谷派である。當日は親鸞上人「薄の御名號」と蓮如上人「六字の名號」を掲げ、本堂には掛

めいこうといふ。（略）日蓮上人は房州の人、三國氏、弘安五年十月十三日寂す。年六十一。後醍醐天皇勅して大菩薩の號を贈らる。蓋し、洛北妙顯寺の妙實、雨を祈るの賞に因つてなりといへり。武州千東郷池上村長榮山本門寺、これ終焉の地也。昨今宗門の徒佛壇を掃除し、紙にて製したる造り花をさしはさみ、五色に染めたる餅を供す。

【東都歳事記】八日。法華宗寺院、御影供法會。報恩會、又會式といふ。當月十三日は宗祖日蓮上人の忌日たるによりて、法會を備くる所なり。今日より十三日まで修行あり。俗にお命講といふは、御影供の轉訛せるなり。白衣園鶯水が編の俳諧新式に、みえいかうといふべきを、春の弘法大師の忌を御影供といへば、紛るゝゆゑ、ミエの反メなれば、めいかうといふなるべし、それを、俗にあやまり御の字をさへそへて、おめいかうといふ。おめは重言なり、みあかしをおみあかしといふたぐひなりといへり。○法會の間、一宗の寺院佛壇をかゞやかし、造花を挿し、莊嚴目を驚かしむ。參詣の輩は月末迄出る。在家にも宗門の徒は會式と稱して、祖師に供養し客を迎ふ。祖師に供する所の五彩に色どりたる餅をこまくら餅といふ。こまくら餅は鎌倉餅の謬誤なり。緣起あれども繁ければ略す。池上本門寺會式。今日より十三日迄修行。十二日・十三日開扉あり。十二日の夜通夜の人多し。夜中說法あり。十三日・十四日には、門前茶籠の市立つ。當寺は宗祖上人入寂ありし靈跡にして、大伽藍なり。今日祖師御更衣あり。

注 （一）十月十二日。（二）同十三日。

【季題解説】舊暦十月十三日は日蓮の寂滅せる日である。さうして東京池上本門寺は其の終焉の地であるから、御命講の最も盛んなところである。其前日十二日からお籠りと稱へて參籠するものが多い。萬燈と稱へて造花で飾り立てた行燈を推し立て、團扇太鼓を叩き、妙號を唱へて行く信者が絡繹として續く有様はまことに盛んなものである。が、これは其まゝ新暦に引直して修するから秋季になつてをる。此歳時記も多分秋季に出てをることゝ思ふが、一月おくりで、十一月十二日若くは十三日に修することになつてをる所もあるので、それは冬季としてこゝに入れておく。京都には日蓮宗本山でさへ十二ケ寺もあるので、一般の便を圖り左の五ケ寺に限り十一月に法要を營むのである。【參照】秋―御命講

十一月八日	京都市上京區七本松中立賣	立本寺
同　十二日	同　中京區寺町御池	本能寺
同	同　東山區仁王門東大路	寂光寺
同	同　上京區寺町今出川	本滿寺
同　十三日	同　東山區二條東大路	妙傳寺

【例句】

御命講

菊鶏頭きり盡しけり御命講　芭蕉（忘れ梅）

御命講や油のやうな酒五升　同（小文庫）
柚子蜜柑會式の箔を命哉　支考（遠二時集）
御命講の華のあるじや女形　太祇（太祇句選）
上京や月夜しぐるゝ御命講　几董（井華集）
風邪ひかぬ御法の聲や御命講　巣兆（曾波可理）
御命講子どもの親も呼れけり　成美（成美家集）
赤みそのしぶみをほめる會式哉　蒼虬（蒼虬翁句集）
月時雨もるを庵の會式かな　同（同）
十ばかり柿も樹におく會式哉　同（同）
　小倉山常寂光寺
御命講やあとの月には月の友　蘿雀（あゝそ海）
二貫目の蠟燭ともすお講かな　花笠（春夏秋冬）
お命講かゝはりなしや餘所の寺　青畝（ホトトギス）
山門の上に月あり日蓮忌　青邨（同）
萬燈の花に縋りし子供かな　同（同）
お會式の萬燈のゆき人のゆき　暖光（續ホトトギス）

空也忌（くうやき）　空也念佛（くうやねんぶつ）　空也堂踊念佛（くうやだうをどりねんぶつ）

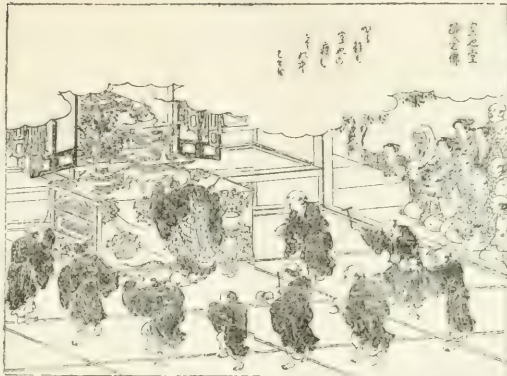
古書校註

【日次紀事】紫雲山極樂院空也上人光勝忌。五條一夜道場幷に七條金光寺等亦之を修す。光勝、世人其の名を問へば則ち自ら空也と稱す。曾て晩年修行の爲に京師を出で東國に赴くの日、徒弟に謂ひて曰、今吾已に老いたり。再び歸ること必と爲し難し。則ち(二)今月今日、寺を出づるの日を以て忌日と爲せと。故に今日を用ひて、法事を修す。斯の院中に十八家有り。其の中年老の者、剃髮し著衣して僧となり、代々空字を以て諱字に加ふ。其の餘は剃髮せず、妻子を帶し、常に茶筅を製して市中に賣る。（略）凡そ斯の徒を鉢敲と謂ふ。言ふこゝろは、斯の徒、冬に至れば、則ち夜々市中を巡り、又洛外の五三昧場に到る。國俗火葬の場を三昧と稱す。南京の五箇所は行基菩薩の定むる所也。北京の五箇所は弘法大師の定め置かるゝ所なり。所謂舟岡山・中山・鳥戶山・最勝河原・珍皇寺是也。各〻鉦を鳴らし、佛の號を誦念し、或は竹枝を以て攜ふる所の瓢を鳴らし、口に無常の詞を唱へ、若し信施の米錢有らば、則ち瓢を以て之を受く。是、瓢を以て鐵鉢に代ふるの故に、鉢敲と稱す。

【滑稽雜談】一休和尚鉢扣の讃に曰、晝は笠を着けず、夜は菌せず、東西南北自由の身、一瓢扣き畢へて何の益か有る、花食く十方淨土の春。（略）今四條坊門空也堂十八家鉢たゝき、毎年十一月十三日本堂に集つて、四十八夜の行人とて、齋念佛を修し、今日より十二月晦日迄四十八夜、洛中洛外山野墓林をめぐりて、無常の和讃幷に高聲念佛を唱ふ。是を曉の鉢敲と

謂へり。誠に殊勝の法則也。此の徒率生笠を着ず。或は笠に紺を附けずといへり。○又十八家の者常に茶筅を制して産業とす。いかなるゆゑなるか考ふ可し。

【栞草】曉の鉢叩。空也上人は、天祿三年九月十一日寂す、年七十と元亨釋書に見えたり。○空也堂は極樂寺と號す。四條坊門の南、堀川の東にあり。鉢叩等此の堂を守る。傳に云ふ、極樂寺は元三條櫛笥にあり、櫛笥道場と稱す「(略)」吾山遺稿 鉢たゝき瓢をならして誦ふ和讃「無常たちまち來りなば、誰か此の苦をのがるべき、花やかなりけるよそほひも、その名ばかりぞ殘りける」、此の外和讃多し。之を略す。此の歌を聲をかしく哀れに誦ひつれて勸進する也

季題解説

(一) 十一月十三日。

十一月十三日、空也上人の忌日を修する。上人は醍醐天皇の皇子、又は仁明天皇の御孫とも稱されてゐる。俗名光勝、沙彌となつて自ら空也と稱された。遊觀を好み天下の名山殆ど至らざるなく歩かれた。又道路を修め、橋梁を架け、井を掘り大いに庶民に便した。天慶元年京師に入り、市巷に立つて民衆の教化に力めたので、時の人、上人を市の上人、又は彌陀聖と呼んだ。京都東山洛東に六波羅密寺を建立してこゝに居た。天祿三年九月十一日、壽七十歳で奥州に入寂した。(一説には山科西光寺ともいふ。)その奥州出立の日が十一月十三日で、遺言して曰く「今日、寺を出づる日を命日とせよ」と。それで空也忌は十一月十三日となつてゐる。此日、京都中京區蛸藥師堀川東入空也堂で忌を修し、念佛踊を修行する。寺は時宗・空也念佛の本寺、紫雲山極樂院光勝寺と號する。天慶元年空也上人の開創。(東國、光勝寺派では九月を忌とする由。【傍題】鉢叩(はちたたき)

例句

空也忌

空也忌や空き方より踊り出し　麥字 (類題發句集)

空也忌や水仙活けし古瓢　吳樂 (同　人)

空也忌の魚板の月ぞまどかかな　蛇笏 (ホトトギス)

空也忌や死土産なる玉の珠數　素風郎（同）

鉢叩

【季題解説】 十一月十三日より四十八日間、京都市中京區空也堂の僧が京市、洛の内外を巡つて念佛和讃を唱へるのをいふ。空也上人鹿を飼養してゐた。猟夫これを殺したので、上人はその猟夫に佛道を說き聞かせると、猟夫は發心し、たづさへた瓢簞を叩いて法語を誦し、修行した。之が鉢叩の起因とされてゐる。上人その鹿の角を杖とし、金鼓を叩いて市巷に米錢を乞ひ法を說いて歩いた。今も此の鹿の角は空也堂の寶物となつてゐる。その頃から此寺は半僧半俗有髪の僧である。今は腰に瓢をつけ鉦を叩き、米錢を喜捨すれば瓢形の菓子を授與する。【同題】空也忌

【例句】 鉢叩

長嘯の墓もめぐるかはち敲　芭蕉（錦繡緞）
納豆きる音しばし待て鉢叩　同（韻塞）
われが手で我顔なづる鉢扣　鬼貫（鬼貫句選）
鉢たゝき顔の雪を春にけり　來山（いまみや草）
鉢たゝきまはりあはせや上手づれ　浪化（浪化上人發句集）
舟岡に影[illegible]鉢たゝき　丈草（丈草發句集）
うら門の竹にひゞくや鉢敲　同（同）
一月はわれに米かせはちたゝき　同（同）
上人の[illegible]にうれし鉢たゝき　去來（去來發句集）
その古き[illegible]見せよ鉢たゝき　同（同）
物くるゝ門にも立ず鉢たゝき　同（同）
千鳥たつ加茂川こえて鉢叩　其角（[illegible]）
ことごとくね覺めはやらじ鉢叩　同（同）
[illegible]　同（[illegible]）
[illegible]　同（同）
[illegible]　同（同）
今少し年より見たし鉢扣　嵐雪（玄峰集）
嫁入の門も過けり鉢たゝき　許六（五老井發句集）

鉢叩

鉢たゝき出そむる夜の笑ひ顔　支考（蓮二吟集）
はちたゝき晝は梟に衣かな　同（同）
鉢たゝき夜毎に竹を起しける　千代女（千代尼發句集）
山彦をつれて歩行や鉢たゝき　同（同）
西念はもう寢た里をはち敲　蕪村（蕪村句集）
一瓢のいんで寢よやれ鉢たゝき　同（同）
終に夜を家路にかへる鉢たゝき　同（新五子稿）
夜泣する小家も過ぬ鉢叩き　同（同）
守信とふくべにかけよ鉢叩　同（同）
鉢たゝきこれらや夜の都なる　同（落日庵句集）
夕顔のそれは髑髏か鉢たゝき　同（高德院發句會）
木の端の坊主の端や鉢たゝき　同（平安廿歌仙）
墨染の夜の錦やはちたゝき　同（蕪村遺稿）
子を寢させて出行闇や鉢たゝき　同（同）
曉の一文錢やはちたゝき　太祇（太祇句選）
攝待へよらで過けり鉢たゝき　同（同）
鉢たゝき頭巾まくれて鬢の霜　召波（春泥發句集）
愚なる御僧と申せ鉢叩　同（同）
鉢たゝき右京左京の行戻　同（同）
まぎるべき物音たえて鉢たゝき　樗良（樗良發句集）
兄弟歟同じ聲なるはちたゝき　同（同）
はちたゝき少し踊て廻向かな　同（同）
さゆる音の雲井にかよふ鉢叩　同（同）
そこな狗瓢から出たか鉢たゝき　也有（蘿葉集）
何で似せても似ぬ音や鉢たゝき　同（同）
瓢簞は霜にも冴ず鉢たゝき　同（同）
雪の朝このあし跡や鉢たゝき　同（同）
明やすき水鷄もあるを鉢敲　同（同）
瓢簞に頭巾は着せず鉢たゝき　同（同）
月の夜も門は叩かで鉢たゝき　同（同）
習はふと思ふ夜もあり鉢たゝき　蓼太（蓼太句集）
鉢たゝき月夜は見えて哀なり　同（同）
まねし人のゆかしや夜半の鉢扣　几董（井華集）
川ぞひや木履はきたる鉢叩　白雄（白雄句集）
野ざらしに何事いふぞ鉢たゝき　同（同）
にがにがしおのれ二代の鉢たゝき　曉臺（曉臺句集）
鉢叩き今はむかしの忍び路や　同（同）
愚に歸る曉ごろや鉢たゝき　同（同）

煩悩の犬にかまれなはち叩　同（同）
いかならん祖師の心ぞ鉢叩　闌更（半化坊發句集）
鉢叩月下の門をよぎりけり　同（同）
竹買に來た親父也鉢たゝき　同（同）
あともなき寐ざめの友よ鉢たゝき　士朗（枇杷園句集）
南無月夜南無雪時雨鉢たゝき　同（同）
月霜や歯ぬけとなりて鉢たゝき　成美（成美家集）
ふとん着て山さへ寝るをはちたゝき　同（同）
宗鑑がとふばも見たか鉢敲　一茶（旅日記）
しばしまて白髪くらべん鉢敲　同（同）
出始を祝うてたゝく瓢かな　同（發句集）
うす雪のかげより出たり鉢叩　蒼虬（蒼虬翁發句集）
枯盡す梢の音與鉢たゝき　同（同）
風のなき夜となれば來る鉢叩　虎國（我庵）
九條まで下り詰たり鉢叩　祇完（月影塚）
何時ぞ九條あたりの鉢叩　東序（翁反故）
鉢叩火を見せられて默りけり　萓磨（俳林良材集）
落柿舎の日記に句あり鉢叩　子規（子規句集）
わが門を鉢叩かずに通りける　碧梧桐（新俳句）
日暮れてしばらくすれば鉢叩　蕪堂（春夏秋冬）
鉢叩呼ばるゝ門に後戻り　巴潮（ホトトギス）
報謝馴れし件の門や鉢叩　月尚（同）

妙心寺開山忌

古書校註

【日次紀事】（一）妙心寺開山本有圓成國師忌。是、開山慧玄禪師也。延文五年歿。（一）

【滑稽雜談】今世に至つて、毎年今日祖忌を行ふ也。

註（一）十二月十二日。

最勝寺灌頂

古書校註

【篗纑輪】（一）十五日。白川に有り。今は照高院御門跡御寺務也と云々。

【栞草】十五日。[名勝志] 土人云、最勝寺の舊跡は、岡崎村の西二條通りの一町ばかり西にあり。櫻田といふ。六勝寺の其の一也 [以呂波字類抄] 保元三年十二月十五日、最勝寺にて灌頂を始めて行はる。大僧正覺明を以て大阿闍梨とす。此の寺の櫻を詠ずる哥、新古、なれなれてみしはなごり

の春ぞともなど白川の花の下陰、雅經。

圖（一）十二月。

佛名會　御佛名　かづけ綿　柏梨の勸盃

古書校註

【滑稽雜談】壒嚢抄に云、歳暮に、禁中より始めて邊山に至つて、必ず過現未の三千佛の御名を稱して罪障を懺悔する也。謂へば年中造る所の罪障を懺悔して、三世の諸佛の智光に照し、霜露と共に消滅せしむるの意也。抑ゝ三千佛とは、過去莊嚴劫の千佛、現在賢劫の千佛、未來星宿劫の千佛也。千とは滿數を擧ぐる而已。無量無數の如來有る也。されば御佛名の導師初後に唱へて、南無歸命頂禮萬三千佛名云々。（中略）其の故は、仁明天皇の御宇承和十三年に佛名を禁中に始められしより以來（一說）、寶龜に至るまで、佛名を修するに皆十六卷の佛名經を用ゆ。此の經中載する所の佛名菩薩聖等の名一萬三千餘也。然るを玄賓内供上奏して、十六卷の佛名を略して延喜十八年三千佛名經改修せしむるより以來、之を以て常式とす。然れ共猶初後に於て萬三千佛名唱ふるを故實と稱す。（中略）公事根源に云、御佛名（一）十九日。けふより廿一日迄三ヶ日也。或は一夜も例あり。仁壽殿の御本尊をうつして、御帳の中にかけて、南の額の間に、又南北に札を立て、佛像塔形を置く。佛前に香花などを備ふ。ひさしに地獄變相の御屛風をたつ。出居のすけ最勝講のごとし。出居の前に火爐におり松せさす。女嬬是を勤む。公卿ひさしに著す。初夜・中夜・後夜、おの〳〵御導師かはる。さし油藏人之を勤む云々。又佛名の中の夜など、大將の直宿申あり。弓場にて丑一ツのほど右大將導れ行き給ふ、弓絃打ちならす程など、まことにところ得たるかほ也。佛名の御導師、昔は夜もすから唱へければ、延喜の御代などは、夜の御殿にて和琴をかき合せ給ひけるとかや。承和の頃は每年佛名三ケ日の間は、諸國にて殺生禁斷のよし、格に見えたり。被の綿。（略）（公事根源に云、かづけの綿の事有り。夜はこのふたにわたを入れて、すのこの北に、内侍の簾下と云ひて、翠簾をかけて出す。藏人御導師の肩にかづくる也。柏梨勸盃。（略）○公事根源に云、柏梨の勸盃などいふ事有り。それは左近衞府の領に、攝津國柏梨の莊といふ所より御酒を奉りて、殿上にて勸盃のある也。

【年浪草】（三）續日本後紀に曰、仁明天皇承和五年、始めて宮中に佛名院を置く。○江次第に曰、承和の初め勅有りて之を修す。藏人式に云、十九日御佛名。今日より廿一日に至る。但し三箇日の中、吉日を擇び初めて之を行ふ。承和十三年十月廿七日の格、十二月十五日より十七日迄三箇夜、云々。仁壽三年十一月十三日の格、改め定めて、十九日より廿一日迄三箇夜。○貞觀十三年九月八日の格、慮に一萬三千畫佛像七十二鋪を安置すべ

○(略)

被綿。江次第に曰、被綿、五位藏人殿上の戸より出でて、堂童子の座の東井に孫廂燈樓の東等を經て、北行して内侍の簾下に就いて、綿二筥を取り、六位に持たしめ、庇の北一間より、先づ禮盤の下に到つて導師の肩に被け、次に衆僧の座の後に到つて次第に之を被け畢る。

柏梨勸盃。同書に曰、今夜柏梨を進む。左近衛府攝津の在名也。彼の地の利(梨)を以て之を造る所の甘糟也。裏書に曰、柏梨は昔し府の中將和氣の某、攝津栢梨の庄を以て左近府に寄す。其の地の利を以て官人以下酒醪の科に充つ。

【註】(一)十二月。(二)續日本後紀・江次第は滑稽雜談に引けるを便宜に約取してゐる。

【季題解説】 十二月十九日、三世諸佛の名號を稱へ六根の罪を滅する爲めに行はれる法會である。昔は宮中に於て盛んな御儀式があつたといふことを漏れ承はつてゐる。

この法事の時に導師が頭に綿をかづくことがある。それをかづけ綿といひ、又宮中の御儀式のあつた頃には終つて栢梨といふ御酒の勸盃があつた。それで栢梨の勸盃といふ名稱があるのである。

【例句】

佛名會

佛名や屏風見くらす小僧かな　浪化　(浪化上人發句集)

老樂の口もと寒し御佛名　去來　(去來發句集)

佛名や打敷ほめるみすの中　許六　(五老井發句集)

佛名や柿の衣の僧ばかり　召波　(春泥發句集)

佛名會腰のぬけたるおはしけり　之房　(新選)

終大師(しまひだいし)

果ての大師(はてのだいし)　終弘法(しまひこうぼふ)

【季題解説】 十二月二十一日。其年最終の弘法大師の御緣日のことである。東京附近では川崎大師と西新井大師が有名で最も賑ふ。川崎大師では二十日の晩と二十一日早朝に御勤行がある。二十日の夜は參者のために終夜扉を開放し、お札番やお蠟番も徹夜をするといふ。門内には易者が陣を爲し、門外にはかたゐが袖を乞うてゐる。京都では東寺、早朝から善男善女の參詣多く、境内には露店・見世物・植木市が立ち賑やかである。

又地方では田圃の岩蔭にある大師堂に、村人が心から捧げた燈明が灯り、お線香や水やお大師樣のよだれ掛などを持つて參詣に行く二三の人を見掛けることがある。　【參】新年――初大師(參)

大德寺開山忌(だいとくじかいさんき)

【古書校註】

【日次紀事】 大德寺大燈國師忌當日。建武四年(一)今日寂す。國師の遺物、

并に運庵・虛堂・南浦各〻自贊の畫像三幅對、龍虎畫一幅、禪月并に閻次平所安畫の五百羅漢百幅、方丈に掲ぐ。

【滑稽雜談】開山略傳に曰、（略）又紫野の傍に住す（略）洗心子已が宅を捨てて大德方丈となす。今の雲門庵是也。花園院詔して大内に入り、奏對旨に稱ひ、大德と勅して第一祝聖道場となし、特に興禪大燈國師の號を賜ふ。（略）建武二年十二月廿二日化す。五十六歳。

注（一）十二月二十二日。

時宗歳末別時（じしうさいまつべつじ）

古書校註

【滑稽雜談】（一）廿四日より晦日まで、小の月は廿三日より。○抑〻時宗の元祖は、相州藤澤本山の開山一遍上人、（略）後宇多院の御宇、建治二年春三月、熊野證誠殿にして、神敕を承けて六十萬人決定往生の札を日本六十餘州に弘通して、時衆を建立也。（略）此の宗門において、歳末一七日の別時より念佛を每年修して、（其方法は別時記とて遊行廿一代述作有り）、是則ち智識の修行行義と見えたり。故に中日中夜滅燈といふ事を行ふ。（略）藤澤の遊行上人は、廻國の始めには在京し侍る。其の歳末には七條道場にて此の會を行ひ、滅燈の儀式侍る也。

注（一）十二月。

御魂の冬（みたまのふゆ）　暮の魂祭（くれのたままつり）

古書校註

【滑稽雜談】周處が風土記に曰、除夜其の先祖を祭る。長幼聚り飲みて祝頌して散ず。之を分歳と謂ふ。○清輔奥儀抄に云、みたまの冬と云ふは、なき人の恩德を報ずとて、年のはてにはこれをまつる也。下人はみたま祭とぞ申す。公家には荷前の祭と云ふ。書にも黃帝天に昇り、みたまのふゆすとあり。賴とかきてよめり。日本紀には恩賴と書きてよめり。（略）○つれづれ草に、つごもりの夜、云々。なき人の來る夜とて、玉まつるわざは此のごろ都にはなきを、あづまのかたにはなほする事にてありしこそあはれなりしか、云々。参照 秋—魂祭（タママツリ）

除夜の鐘（ぢよやのかね）　百八の鐘（ひやくはちのかね）

季題解説

一年の將に終らんとする、十二月三十一日の正子、寺院で鳴らす百八の鐘を除夜の鐘とも百八の鐘ともいふのである。

除夜とは大晦日の夜のことで、十二月を除月、大晦日を除日といふのと同じである。百八と云ふ數は數珠などにも用ひられ、又梵鐘も、もと朝暮百八づつ打たれたもので、百八煩惱　人間には無數の迷ひがあるが縮少し

て假に百八煩惱といふ——を覺醒せしめるものと云はれてゐる。除夜の鐘も同じ意味で、鐘の供養に依つて、一音毎に百八の煩惱を消滅し常樂・光明の新年を迎ふる意が含まれてゐるのである。

鐘は夜半十二時に始まり、除韻の靜まるのを待つて撞くので、約一時間を要するが、奈良の興福寺のやうに午後十一時から撞き始めるところもある。鐘の數も百八の外に捨鐘と云つて、最後に一つ撞き添へる寺も偶にある。

東京で除夜の鐘を打つのは淺草寺・增上寺・青松寺・護國寺・傳通院・護國院などである。上野護國院の鐘は家康の陣鐘であつたもので、よい響きを傳へ、增上寺の鐘は四人掛りで撞く巨鐘で、房州までも聞えたといふことである。

放送局では年中行事の一つとして、毎年各地の有名な寺院の除夜の鐘を放送する、居ながらにして京都智恩院・長野善光寺・松島瑞巖寺・大津三井寺などの名鐘も聽くことが出來るやうになつた。（[illegible]時代　除夜）

例句

除夜の鐘

撞かんとす除夜の一鐘まのあたり　北人（ホトトギス）
除夜の鐘鳴り終りたる東山　同（同）
客送りてしはしして聞く除夜の鐘　暢（同）
除夜の鐘かすかに聞え深雪かな　栩童（同）
除夜の鐘大きな簞笥賣れにけり　諸人（同）
除夜の鐘もつとも近き相國寺　松風（續ホトトギス）

寒參（かんまゐり）　裸參（はだかまゐり）　寒詣（かんまうで）

古書校註　【東都歲事記】　神佛裸參り、なかんづく、中の鄉太子堂へ、作事の諸職人夜中參詣す。

參考解說　小寒・大寒三十日の間、夜、神社佛寺に參詣することをいふのである。昔は裸・跣でお詣りするものが多く、「裸參」とも云つてゐたが、當節は裸體を禁ぜられたので、白木綿の單衣をまとひ、白の手甲をはめ、白足袋をはき、白布の[illegible]鉢卷をしめ、女は白布で頭を包む。腰に鈴を下げ、提灯を手にして馳せ參ずるのが普通である。中には平常着のまゝ日參する人も少くない。何れも寒氣を侵し艱苦を忍んで神佛に眞心を捧げ願望の加護を祈念するのである。

東京では深川不動堂が最も盛んで、寒行大護摩が修行される。玆には日參講といふのがあつて、寒三十日間日參をする人には寒行日參帳を交付し、毎夜六時から九時まで日參の判を押してくれる。一月三十日に寒が上り寒行の終りの日に御姿や佛印の押された行衣を貰ふことが出來るといふ。

境內には來往する行者の鈴の音が響き渡り、不動堂正面では行者の荒らかな讀經の聲が聞え、右手では百度詣をする人が續くやうであり、左方の寒

垢離行場に走る人も少くない。門前では甘酒の寒行接待などがある。
盛岡では今なほ裸参の風習が行はれてゐる。舊暦十二月二日から二十八日まで市内外の諸々の神社に信心の参詣をするのであるが、いづれも素裸で一人のもあり、數十人並んでゆくのもあり、素草鞋に白鉢巻、肩に斜に太注連を廻し、腰にも注連を廻して手に手に鈴を鳴らす、口には唐辛子を入れた紙包を啣へ寒氣に耐え、三寶に神酒を載き肴を携へるのもあり、悠揚迫らず練りゆく樣、嚴肅である。群衆人襖をつくつて賑ふ。遠くから詣る者の中には凍死者を出すことがある、之を三ヶ年續ける。社殿の裏には暖熱二つの風呂を沸して待つてゐる。〔參照〕寒垢離(カンゴリ)　時候―寒(カン)

例句

寒詣　みあかしに杉の根高し寒詣　南蠻寺（ホトトギス）
しかられて佛師の弟子や寒詣　いさむ（同　）
しろ〳〵と裸參りの含むもの　小提灯（夏草）

寒垢離(かんごり)　寒行(かんぎやう)　寒行僧(かんぎやうそう)

古書校註　【年浪草】凡そ願人は古より洛北鞍馬山大藏院に屬す。此の者冬月麻衣を裸體に着し、白棉巾を以て頭を裹み、家々錢を乞うて水を浴ぶ。之を寒垢離と謂ふ。此の族寒垢離を修し得る者、功と爲つて出世すと云々。

季題解說　特に寒三十日間を選んで、神社佛閣に詣で水を浴びたり、瀧に打たれたりして身の穢を去り、眞心を披瀝して神護・佛果を得ようとする行である。主として病氣平癒・技藝上達、其他願望成就の爲めになされるのである。
東京附近では深川不動堂・埼玉縣不動丘の不動堂などで寒垢離が行はれてゐる。行者は水行場で脫衣し、觀音經・眞言などを唱へ、六根清淨を繰返しながら幾杯も幾杯も頭から水を浴びるのである。
京都では伏見稻荷神社の瀧・南禪寺駒ヶ瀧・清水寺音羽瀧などで、大聲で誦經して瀧を浴びてゐるのを夜の闇の中に見ることが出來る。
又、地方では、町中で寒垢離行を行ふところがある。それは寒に入つてから、山伏が法螺の貝を吹鳴しながら町を通ると、町家では、大急ぎで擔桶に一杯水を汲んで戸口に出して置く、それを行者が六根清淨を唱へながらはしつて來て、次々に頭からかぶつて行くのである。〔參照〕寒參(カンマヰリ)　時候―寒(カン)

例句

寒垢離　寒ごりやいざまいりそふ一手桶　蕪村（蕪村句集）
寒垢離や上の町まで來たりけり　同（同　）
寒ごりに尻をむけたりつなぎ馬　同（新五子稿）
寒垢離の耳の水ふる勢かな　太祇（太祇句選）

寒垢離の風に乘行步ミ哉　召波（春泥發句集）
寒垢離や湧にして行く水の錢　也有（蘿葉集）
寒垢離や夏の人見る雪の中　同（同）
寒垢離のあと門々の氷かな　同（同）
寒垢離の氷踏行く野道かな　同（蘿の落葉）
寒垢離やひとゝせ見たる角力取　几董（井華集）
寒垢離に背中の龍の披露哉　一茶（おらが春）
寒行の鐘に逐はるゝ步みかな　富久女（ホトトギス）
寒行に布施して樞おとしけり　柳之（同）
寒行や合掌しつゝすれちがひ　小園（同）
寒行の常まち／＼の下山かな　句一步（東京ホトトギス）
寒行やなか／＼廣き米田町　紅舟（同）

寒念佛（かんねぶつ）　寒念佛（かんねんぶつ）

古書校註

【滑稽雜談】傳へ聞くに、往古にはなかりし事也。近來京・田舍にて、僧俗に限らず、寒三十日曉天に及んで山野に出で、高聲に念佛を唱ふ。是を寒念佛と云ふ。又近年に及んで、京都の(一)東俗の男女老若を論ぜず、五三昧廻りとて、寒夜に鉦をならして行捨宣稱也。何れの聖師の行狀にや傳へ給ひしか。或は又空也上人の修行し給ひて今に鉢敲と稱する行人の所業に似通ひたるにや。彼の東俗の輩の三昧廻り・寒念佛、猶又他宗の謗まねくに近し。

【年浪草】往昔、行基菩薩定め置く所の五昧所、又弘法大師定めらるゝ所云々。三代實錄に曰、貞觀十三年閏八月二十八日辛未制して百姓葬送の地を定む。其の一は山城國葛野郡五條荒木の西の里に在り。其の一は六條久受原に在り。其の三は紀伊郡十條下石原の西外の里に在り。其の四は十一條下佐比の里、其の五は十二條上佐比の里、云々。右の外西の堤・粟田口刑罰の二箇所、合せて是を七墓と謂ふ。又荼毘所を稱して之を三昧と謂ふ。三昧は梵語、此には正定と曰ふ。志願有りて寒念佛を修する者、寒中三十日の間毎夜七墓を廻り、鉦を敲き念佛を唱ふ。之を寒念佛と謂ふ。

註（一）東俗は僧俗の誤か。

季題解說　寒三十日の間、僧俗を問はず、鉦打鳴らし或は鈴を振り、又日蓮宗では團扇太鼓を叩き、念佛を唱へて家々に米錢を乞ひ歩く。昔寶永の頃、京都の僧俗が男女老幼、寒三十日の間、曉、山野に出て鉦を打ち鳴らし念佛を唱へたのに始まるとの說もある。東京では單一人、又二人、大勢連、日蓮宗の僧俗男女の一團、又は詠歌をうたふ俗人の一團等、手に手に寺號入の提灯、講中名を書いた提灯を提げて念佛をあげて町を歩くので中々賑やかである。〔季題〕時候・寒行

例句　寒念佛

曉の筑波にたつや寒念佛　　其角（五元集）
寒念佛橋をこゆれば跡からも　　同（同）
酒飲の飲酒はいかに寒念佛　　同（同）
あの聲の撞木は細し寒念佛　　支考（蓮二吟集）
極樂の近道いくつ寒念佛　　蕪村（蕪村句集）
挑灯の猶あはれなり寒念佛　　同（新五子稿）
細道になり行聲や寒念佛　　同（夏より）
咲ている梅にもあふや寒念佛　　太祇（太祇句選）
茶を申をうなの聲や寒念佛　　召波（春泥發句集）
無緣寺の夜は明にけり寒ねぶつ　　同（同）
寒念佛豆にうたれて仕回けり　　也有（蘿葉集）
臘八の日にぬか星や寒念佛　　同（同）
掛乞の地獄の中や寒念佛　　同（同）
鬼月に衣着せてや寒念佛　　同（同）
あの世より先春ちかし寒念佛　　同（同）
柊さゝぬ内をさかりや寒念佛　　同（同）
替履のうしろさびしや寒念佛　　白雄（白雄句集）
月を見に今年も出ばや寒念佛　　巢兆（曾波可理）
雨の夜やしかも女の寒念佛　　一茶（一茶句帖）
迹供に犬の鳴く也寒念佛　　同（九番日記）
寒念佛させては貴殿でありしよな　　同（發句集）
一夜さは出來心なり寒念佛　　同（同）
川風や渡し舟待つ寒念佛　　湖水（續虚栗）
跡からは狐なく也寒念佛　　馬耳（類題發句集）
長町や雨方からくる寒念佛　　一斧（年尾）
雨の夜は提灯明し寒念佛　　車春（ホトトギス）
寒念佛終の日なる報謝かな　　不彩（同）
小坊主の挾まれ行くよ寒念佛　　射水（同）
提灯の隱れがはりや寒念佛　　草能（同）
提灯にかぶさる袖や寒念佛　　波品（同）
耶蘇といへば辭儀して去りぬ寒念佛　　雉子郎（同）
惠信尼と見奉りぬ寒念佛　　夜潮（同）
明け申す雪の扉や寒念佛　　柿紅（同）
母立ちて落ちし鉄や寒念佛　　和香女（同）
夕闇の濃くなりゆくや寒念佛　　歌村（同）
寒念佛來に牡蠣舟の灯りけり　　黒葡萄（同）
寒念佛今日は佛の日なるかな　　さい女（同）

帷子の辻の闇より寒念佛　木母（續ホトトギス）
寒念佛きりゝと僧の高草鞋　草石（同　）

星佛賣（ほしぼとけうり）

【古書校註】

【日次紀事】（一）大佛師來年の屬星の形を造りて、禁裏・院中に獻ず。

【年浪草】 紀事に曰、此の月十三日、大佛師來年の屬星の形像を造りて禁裡に獻す、云々。民間も亦來年の屬星を祭る。故に人家各々星佛を買ひて、歸依の僧を請じて之を祭祠す。故に市中星佛を賣る者有り。所謂日曜・月曜・木曜・水曜・火曜・羅睺・（二）計の七曜の像也

註（一）十二月十三日の條にある　（二）年浪草には計都とある

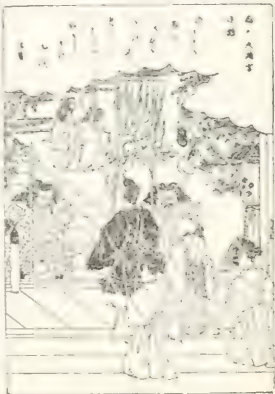
【季題解說】 昔、禁裏で年首に方つて其の年の九曜の星を佛工所に命じて調製せしめ、陰陽師に命じて星供を行はしめ災厄を祓つた。俗間でも亦星佛を佛師で求めて祭つた。佛師は禁裏へは十二月十三日に來年の星佛の形像を製作して獻じた。民間では年内に翌年の星佛を買ふので「星佛賣」として冬の季になつてゐるのである。現今はこの事なく、たゞ社寺で星佛を祈禱する式がある位のものである。　【參照】 新年——星佛（ほしぼとけ）

追儺（つゐな）　なやらひ　鬼（おに）やらひ

【古書校註】

【御年】 儺（ナイ）名、なやらふ・鬼やらひ共いふ。十二月晦日の夜也。慶雲年中よりはじまる。民多く病みしゆゑ也。大とねり、四目ある厄鬼をつとむ。桃の弓、あしの矢をあけて、これを追ふこととなり。

【栞草】 淺草觀音追儺　除夜より七日。江戸金龍山淺草寺にあり。今宵參詣堂中に充つ。初更のころ、鬼形の者一人、堂外に出づ。又一人、方相氏の假面をかぶりたる者、これを追うて堂を巡る。後陰陽の札三千枚を撒じて諸人に與ふ、參詣の人、各々爭ひ拾うて持ちかへりて、自家の門に貼す。

【季題解說】 追儺は又なやらひ・鬼やらひといひ、支那太古に於て、高辛氏（一說に顓頊氏）の三子死して一子は疫鬼となり人の宮内に入つて病を與へた、周代官廷に於て方相氏が之を驅逐したのを嚆矢とする。その行事が平安朝の頃我國にて毎年大晦夜宮中に於て行はれたものである。その儀式は大舍

人が黄金四ツ目の假面を被り、玄衣朱裳、楯と矛とをとつて方相氏となり、水干を著た侲子が之に從ひ、陰陽師が祭文を讀み終ると、方相氏楯を打つて叫ぶこと三度、群臣呼應して宮中を一巡りし、王卿以下桃の弓・葦矢を放つて追ひ拂ふのである。此の風、鎌倉末葉まで續いて公の儀式となつて居たが、京都吉田神社が明治初年まで宮中の八神殿を奉齋してゐたので、昭和四年、御大典記念として追儺式を復興し今に及んでゐる。すなはち節分の前夜午後八時本社前に於て擧行。式中神代から傳はつて居る神樂庭燎の樂を奏し、甚だ古雅な儀式である。その式次第は

一、衞府社頭を警固す
一、齋郎は上卿以下を導いて舞殿所定の座に就く
一、陰陽師は方相氏、侲子を率ゐて舞殿前に導き、方相氏以下本社に向ひ立つ
一、陰陽師は舞殿所定の座に就く
一、近衞樂人は直會殿に上り所定の座に就く
一、陰陽師、陰陽祓を行ふ
一、陰陽師、獻供を行ふ
一、陰陽師、祭文を奏す
一、樂人奏樂す
一、方相氏大聲摔を以て楯を打つこと三度、拜殿を三廻し鬼を追ふ
一、齋郎は上卿以下に桃弓葦矢を渡す
一、上卿以下前庭に南を向いて矢を放つ
一、上卿以下退下

近世に於ては追儺は各地の寺院に於て行はれる。中にも、成田不動・京の廬山寺などが有名である。〔參照〕豆撒(マメ)　柊挿す(ヒヽラギサス)　鬼踊(オニヲドリ)　時候―節分(セツブン)

〔例句〕

追儺

追儺うらの町にも聞えけり　召波（春泥發句集）
鬼は外月は内へともる夜かな　蓼太（蓼太句集）
なやらふや今宵しのぶの戀もあらむ　曉臺（曉臺句集）
かくれ家や齒のない口で福は內　一茶（七番日記）
福はうちく　とてをはり哉　同（同　）
一聲に此の世の鬼も迯るよな　同（おらが春）
其迹は子供の聲や鬼やらひ　同（同　）
鬼の出た迹掃出してあぐら哉　同（九番日記）
鈴の音に泣やこゝろの鬼やらひ　梅室（梅室家集）
又ことし閉足す帳や福は內　連城（明和二）
追儺豆あびて須彌壇まもりけり　句一步（ホトトギス）

吉田神事

蘆の矢のふわりと飛びぬ追儺式　王城（同　）

燃えさかる四つの庭燎や追儺式　桂樹樓（續ホトトギス）

豆撒（まめまき）

年の豆（としのまめ）　鬼打豆（おにうちまめ）　年男（としおとこ）　鬼は外（おにはそと）　福は内（ふくはうち）

古書校註

【日次紀事】若し年内に節分あれば、則ち其の夜、禁裏、熬豆を殿中に撒きて疫鬼を逐はる。春に在つても亦然り。今夜大豆を撒くを拍と謂ふ。（諸）同夜、家々の門戸窓牖に、鰯魚の首并に枸骨の條を挿む。俗へ言ふ、此の二物は疫鬼の畏るゝ所也と。又大豆を家内に散る。之を打豆と謂ふ。或は拍豆と謂ふ。凡そ一家の内、事を執る者之を勤む。是を儺男と謂ふ。高聲に鬼は外福は内と呼んで、疫を攘ひ、福を索む。其の後、合家各々熬大豆を食へば、則ち己が歳の數を用ふ。此の外、人々大豆を以て紀年の數に准し、孔方兄數枚と白紙を以て之を包み、自ら週身を摩すれば、則ち是を街頭の疫拂に授く。疫拂之を受けて、高聲に疫を逐ふの詞を唱へて之を祝し、伴つて鷄鳴を爲して去る。

【滑稽雑談】豆を撒く。豆を爆す（いり）。（諸）世俗問答に云、節分の大豆打つ事は、年越と世俗にいひならはして、こよひは惡鬼の夜行するゆゑに、禁中にもむかしは陰陽寮祭文をよみて、上卿以下これをおふ。御所にともし火をおほくともして、四目ありておそろしげなる面を着し、手にたてほこをもて、内裏の四門をまつる也。又殿上人ども御殿の方に立ちて、桃の弓・葦の矢にて射はらふ。是等をかたどりて、豆うちて鬼を拂ふ事始まれるにや。

季題解説　節分の夜、今は主に佛閣などで豆撒の儀式がある。次に成田山新勝寺の豆撒の儀式を記するが、民間でも此夜、豆の炒つたものを「福は内、鬼は外」と稱へて部屋の内に撒く習慣がある。これは宮中に行はれた追儺の式の轉じたものであらう。其豆を年の豆と稱へ、又自分の年齡程數へて食ふ習慣もある。

「成田山の豆撒」はいつの時代からかはつきり判らないが、少くとも三百年以來のことで、豆撒と云へば、成田山と云ふやうに一般世間が認めるやうになり、又それは實際實に物凄い程の盛況を呈するのである。

當日は夜の十時の一番鐘で、先づ新勝寺本坊に於て「般若心經」三百六十五卷、即ち一年の日數に該當するだけの卷數讀誦の式があり、つゞいて豫て申込んである年男が本坊に入り、いろ〳〵の式が行はれて約一時頃二番鐘が報ぜられ、間もなく三番鐘、これが豆撒の始まる合圖である。豆撒に就てはいろ〳〵の儀式があるが、それは省略して本堂の實況に移る。

成田を中心とする總ての交通機關は當日當夜の運轉で、成田町全體は晝夜不眠不休、四方八方から參集する人々は少くとも五萬以上と稱せられ、それが一睡を眠るものなく、一粒の豆を目的に山上山下に蝟集して居る有樣は實に壯觀である。

いよ〳〵午前一時二番鐘が鳴ると、本坊から宣誥の年男がそれ〴〵提灯を持つた湯山の付添人に護られて、掛け聲も勇まし、本堂へ詰めはじめる。年男の入堂が終ると間もなく、殷々たる深夜の三番鐘が鳴りわたり、待ちに待つた群集は怒濤の如き鬨聲をあげ一山どよめくかと思はれる。先づ山主僧は紫衣金襴七條袈裟の威儀おごそかに、一山の衆僧を隨へ、本坊から護衛の行列長く伶人の奏する樂の音とともに入堂する。勤修される護摩法と、それに衆僧の讀經がつづいて、護摩は漸く半ば頃、須彌壇上に供へられた新しい一升桝が内陣一杯に控へて居る年男のめいめいにわたされる。渡り終ると、一同は先づ本尊不動明王の壇上に向つて一禮の後、「福は内」と一齊に撒き始める。これと同時に、内陣外陣その他正面廻廊の各處に、豆入の大袋と福守とを持つて控へてゐた役僧が、内陣の豆撒に和して一般大衆に撒布するのである。

これよりさき、本堂内は宵淺いうちから本坊受付から出す入堂券を所持する熱心な信徒が刻々にその數を増し、遂には數百の警官その他の制止をも聞かず、文字通り立錐の餘地もない人波の上を泳ぎころがされながらこの人中に割り入らうとする。かうして時はうつり豆が撒かれるので、この間の喧騷、人の渦卷くさまは全くもの凄いと言ふより外はない。〔參照〕柊挿す〔時候・節分〕 追儺〔時候・節分〕

例句

豆撒

豆をうつ聲のうちなる笑ひかな　其角（五元集拾遺）
今こゝに團十郎や鬼は外　同（同）
　家を[illegible]たる年、小屋の住居のわびしさに涙をさへのみて
豆をさへ聞ぬ藥屋にこれや此　嵐雪（玄峰集）
年かくすやりてが豆を奪ひけり　几董（井華集）
煎豆の福が來たぞよ懷へ　一茶（七番日記）
福豆や福梅ぼしや齒にあはぬ　同（同）
三ツ子さへかりゝ〳〵や年の豆　同（一茶句帖）
豆もうち柊もさし孀かな　孤峰（ホトトギス）
還暦の春こそ來つれ豆撒かん　水鳴（同）
年男宿りつらねし名提灯　眉峰（同）
年の豆口もご〳〵と老師かな　月倚（同）
年の豆ほつ〳〵嚙めるめしひかな　曉水（同）
老の掌をこぼれ落ちけり年の豆　蕉蔭（同）
豆打つや鬼あらはれし橋がかり　二橋（續ホトトギス）
豆撒いて爐にもどりたる老納所　靜雲（同）
　寺院
鐘鳴れは船の上よりも福は内　冬男（同）
夜業より歸りし父の福は内　菊坡（同）

柊挿す

鬼除よ浪人よけよさし柊　一茶（一茶句帖）
我門やひゝらぎさせば人笑ふ　梅室（梅室家集）
傾城のさす柊や額口　馬泉（寶暦九）
凍雪を踏んで柊挿しにけり　素十（ホトトギス）
柊をさすや灯の漏る戸袋に　泊雲（同）
柊をさしたる人や暗まぎれ　たけし（同）
柊をそなへ替へけり竈神　素月（同）
柊をさしたるまゝに遠入りけり　夜半（同）
柊の葉のさはりつゝ挿しにけり　同（同）
さし柊わづかに雪をいたゞける　枴童（同）
草の戸や柊さして小酒宴　空蟬（續ホトトギス）
くらがりを過ぐる人あり柊さす　羊史（同）
柊をさす附によりそひにけり　虛子（句集虛子）

鬼踊（おにをどり）

季題解説　節分の午後、京都市上京區寺町今出川盧山寺で法樂鬼踊がある。青・赤・黑の三人の鬼は、まさかり・劒・槌を持つて踊り、本堂で法要の後鬼は逃げる、逃げる鬼を追うて山伏姿の講中や僧達が豆を撒く。その豆の中に蓬萊豆を交へて打つので名高い。此の日寺では蓬萊豆を寶來豆と呼んでゐる。〔參照〕時候—節分（セツブン）

例句　鬼踊　鬼の臍大きかりけり鬼踊　草兵衞（ホトトギス）

神農祭（しんのうさい）

季題解説　神農は炎帝で姓は姜、木をけづりて耒（スキ）とし木をためて耜（クワ）となし、天下に耕を教へたので神農と號したのである。百草を嘗めて醫藥を創製して疾病を濟つた、これ後の世農醫の由て起る所である。冬至の日醫家・藥種を商ふ家では醫藥の祖神として神農を祭る。

大阪市道修町は藥種問屋が軒を並べてゐる所であるが、そこにある神農樣は有名である。こゝでは十一月二十三日が例祭である。其日には五枚笹に張子の虎とつけたものを鬻ぐ。元來このお社は少彥名命を祭神とするのである、それを神農さんと呼んでゐるのである。此の道修町の藥種商は享保七年に德川吉宗から藥種屋の株百二十四軒を免許せられ、始めて藥品市場として公認せられたので、其當時漢藥の旺盛時代であつたから藥の神樣と云へば直ちに神農を稱したのも無理ない事で、此の藥屋組合の寄合所の座敷に神農を祭つた、現今尚其神農の像が存してゐる。其後藥種商連中が發起で、京都松原通りの五條天神の少彥名神を勸請して藥祖神と崇めて鎭祭

し奉つた、それが安永九年である。神農は漢土の醫藥の祖神であり、少彦名命は日本神代の醫藥の祖である。謂なきことではない。

虎を神社から出した起因は、最初は虎骨で製した丸劑を疫病除として施與した傍ら、其姿の張子の虎を魔除に授けたから生じた習慣で、其時は虎は少數で丸藥が大部分であつた。現今は廢止し專ら張子の虎のみを授ける事になつた。張子の虎も信者は疫病除として授かるは勿論であるが、僧俗間では產褥除の御守りとし、或は又腰痛の御守りなりとして寢所の天井につりて靈驗があると云ふ。

今では大阪だけの行事のやうに思はれて居るやうであるが斯う限るのは如何かと思ふ。醫藥業の始祖と仰ぎ其像をかゝげ馳走などして祀るのであるから、心の篤い醫家や藥種商など、どこでもより〳〵に行ふであらう。現に其像を見たことがあるが、口に草をしごいて居り頭に角が生えて居る。

例句

神農祭

神農の祭の虎をもらひけり　　一　杉（ホトトギス）

片附けて神農祭の店格子　　三四郎（同　）

醫者の子の醫者にもならず神農祭　　曹雅子（續ホトトギス）

熊祭（くままつり）

熊送（くまおくり）カムイマンデ）　贄（にえ）の熊（くま）

季題解説　アイヌの年中行事中最も壯嚴盛大なものである　豫め檻に飼育した熊を神の贄とし、種々の供へものをして盛んな神事が行はれる。二四月の雪解の頃、アイヌは山へ行き、冬眠の穴から出る親熊を斃し、生後二三ケ月の仔熊を生擒にし、はじめは蜂蜜、粥をもつて養ひ、稍長ずれば小屋の前に杭を打ち繫いで飼ひ、なほ長ずれば檻（セロ）に入れて殘飯・南瓜等を與へ、翌年の冬又は翌々年の冬、十二月から二月頃までの間に之れを祭の贄とする。旭川市外近文の酋長の家では十二月末に行ふ。（昭和六年には十二月二十日、昭和七年には十二月二十五日に行はれた）まづ祭場の雪を踏みひらき、一隅の祭壇（ヌシヤサン）に新らしいイナヲ（木幣）を立てならべ、花莚（チタラペ）を敷き、太刀・熊・花箭・團子・蒔繪の大鉢・小樽に濁酒を滿へたもの等を供へる。

爐邊のイナウ（火の神）に祝詞を捧げ濁酒を注ぐ。屋内の儀式を終へると熊を檻から曳き出し式場を引きまはし、中央の幣を飾つた杭に繫ぎ、花箭を蒼穹に放ち、目出度い聲でヤイ、ヌサ熊箭を束ねたものを振りかざして、熊を追ひまはして怒らす、熊は悲號して雪まみれとなり荒れまはる。その間に童子は弓を持ち式場に居ならび花箭を放つ。花箭が熊をめがけて入り亂れる、メノコ等は傍で單調な哀歌のごときものを唱へ、手拍子を取つてはやす。熊が衰勢の極に達すれば[illegible]木（二尺ほどの丸い棒）を口に銜へさせる。熊は力を極めて嚙みつく。次に二人で兩側から各前脚を提へ、他の二人は同樣に後脚を提へる。次に二

本の絞殺棒（オク・ヌンバ・ニ）を持ち出し、一は咽喉の下に他は頸の上に當てて壓殺する。斯くて屍は徐々に引き來つて神座に俯伏させ、濁酒を盛つて供へ、菓子・乾魚を捧げ、主客一同その前に舞踏して禮拜し、再び酒を酌む、之を（カムイノミ）と云ふ。終りに胡桃の實を撒く。宴終つて後其場で解剖し、皮は美としまた酒盃を擧げる。大抵三日間位酒宴が續く。時と場所、アイヌの族によつては儀式の形式に變化がある。この神事はアイヌの迷信によるものである。

例句　熊祭

雪の上に魂なき熊や神事すむ　誓子（ホトトギス）
神が召すいけにへ熊の胴飾　同（同）
蒼穹に熊まつる箭を放ちけり　夢城（同）
凍土にひきすゑられし神の熊　凍魚（同）
ときれし熊に涕き伏すメノコかな　雨意（續ホトトギス）
酋長の蘗のかんむり熊祭　馱々子（同）

義士會

季題解說　赤穗義士義擧を欽慕憧憬する會で、各種の團體・青年會・學校等で近年盛大に催されるやうになつた。昭和七年は討入滿二百三十年なので兵庫縣赤穗町では大石神社が中心になつて、十二月十四日から十五日にかけて徹宵で行はれた。赤穗町では店鋪を飾り驛前には大アーチを設け、夜は要處々々に大アーク燈を點じ全町を不夜城にした。講演會が花岳寺・隨鷗寺外四個寺・公會堂・大石神社・赤穗中學校などで開かれた。義士記念祭として午前一時といふに神社で神福授與式　兵庫縣武道大會が縣の後援で神社前で相撲大會、赤穗別院では雄辯大會、赤穗中學生の義士行列神事。尙ほ姬路三十九聯隊から將校兵士三百餘名が行軍して來拜し、一泊して翌早曉赤穗中學生と聯合演習をしたり、その外、素人淨瑠璃大會などもあり全町くつがへるやうな賑はしさであつた。此日赤穗鐵道では汽車賃大割引をして終夜運轉をした。因に大石神社は舊城內にあり縣社である。地元の赤穗ばかりでなく、東京その他の都市でも同樣のことが催される。

參照　春—義士忌　大石忌

例句　義士會

校長は赤穗藩士や義士の會　憲郎
義士會の小學校も赤穗かな　三重史
義士會や赤穗外れの對提灯　躑躅

八幡起業祭

製鐵所起業祭　起業祭

季題解說　詳しく言へば八幡製鐵所起業記念祭である。

十一月十七・十八・十九日の三日間。製鐵と採炭に有名な北九州での年中行事の一で、單に起業祭と言へばこの製鐵所起業祭を意味するまでになつてしまつた。

八幡製鐵所は昭和八年を以て創業三十二年、東洋一の大工場である。十七日・十八日は從業員の招魂祭が行はれ、又祭日には特に一般に工場を開放して鎔鑛爐・作業場その他の縱覽を許す、殊に鎔鑛爐出銑の火華散り赤い鎔鑛（湯と稱す）が流出する壯觀は數萬の群衆興味の中心である。なほ、國旗をかざした巨大な鎔鑛爐が、三角形の美しい帆柱山を背景に、第一から第六迄並び聳え立つ様は又當日の最もすぐれた工場風景といへよう。鐵都八幡は帆柱山の麓にあつて、製鐵所で立つてゐる近代都市であるから、起業祭に對する意氣込は非常なもので、全市、旗と人の海と化し、諸所に興行物がかゝり遠くからも見物人が殺到し、職工達は故郷の父母を迎へて工場見物に案内するなど、數萬の人出で一年一度の大雜沓をなすのである。此の日、高官夫人達は附近の大谷グラウンドに天幕のおでんややおすしやを引受けて活動するのも又この賑ひの添景であるといふ。

【例句】 八幡起業祭

かき時雨れ鎔爐は聳てり嶺近く　　久女（ホトトギス誌）
起業祭白光迸る爐のほとり　　螢雪
[illegible]
つねの日の汽笛に鳴れり起業祭　　同
北風に汗のおもてをあげにけり　　同

海苔祭（のりまつり）

【[illegible]】 紀州の和歌浦では毎年冬の初めから海面に海苔の粗朶を植ゑつける。その植ゑ附けが一通り濟んだ時に關係者が各部集つて、鹽竈神社へ今年の海苔の豐作をお祈りし、御幣をたまはつて歸つて各自の粗朶田へそれを立て、近所へ錫を配るのを例としてゐる。

クリスマス

【[illegible]】 降誕祭　クリスマス・トリー　聖樹

十二月二十五日を以て行ふキリスト誕生の祝日である。キリストの生地ハレスチナの十二月は雨季の最中で、羊が野外にある事は無い筈であるから季節違ひであるけれど、五世紀の頭から異教の風習がとけ込んで、此の日をキリスト降誕節として守るやうになつたといふことである。

敎會堂では高塔に灯し、クリスマス・トゥリーと言つて樅の樹に金銀の綵などを打ちかけて飾り、贈物の玩具を吊し、後に頒つなど殊に子供等に樂しい日である。

サンタクロースは聖徒ニコラスといふ慈悲深い老人が人知れず貧しい人に

贈物をしたのを、其名をなまり傳へたのであるといふことである。馴鹿の橇に乘つて世界中を廻り、クリスマスの前夜、煙突から入つて善い兒童等に贈物をするといはれて居る。
クリスマス・カロルは隊を組んで未明に信徒の家を訪うて唱へるのをいふのである。

[illegible]

クリスマス

八人の子供むつまじクリスマス　子規（子規句集）
群集より唱ひに出る子クリスマス　温亭（ホトトギス）
夜すがらの橇のゆきかひクリスマス　草夢（同）
長崎に雪めづらしやクリスマス　風生（同）
わが父の熱き祈やクリスマス　田々子（同）
映畫會聖誕祭の童ばかり　誓子（同）
幕あけばユダヤの春やクリスマス　麥畝（同）
老牧師子に扶けられクリスマス　雉子郎（續ホトトギス）
雪堆き門邊の橇やクリスマス　草夢（同）
雪かかり星かゞやける聖樹かな　青邨（同）
廚房に老いしニグロやクリスマス　北渊（同）
かゞやける銀の燭臺クリスマス　同（同）
聖堂といふも藁家やクリスマス　濱月（同）

社會鍋（しやくわいなべ）　慈善鍋（じぜんなべ）

季題解説　救世軍では毎年十二月十五日から三十一日まで、大都市の往來繁華な街頭に三脚を立て鍋を吊下げ、旗などひらめかせて行人の喜捨を乞つて居る。その金で以てのし餅の施與又は廉價、歳末診療、水上クリスマス其他の救濟事業を行ふのである。

例句

社會鍋

外套の襟立て慈善鍋見えぬかに　月舟（ホトトギス）
慈善鍋釣る青竹を組みにけり　牧春（同）
投げてみてうつろの音や慈善鍋　巨青（同）
街頭の女兵士や慈善鍋　三海風（同）
支那人の通るばかりや慈善鍋　幸叢（同）
社會鍋寄捨きのけて据ゑにけり　北紅（同）
社會鍋人織る如くかへりみず　楊童（同）
慈善鍋入れたる錢のまはる音　夕野火（同）
慈善鍋に投げ入れし後の懷手　湘海（同）
天王寺の鳩の來て居る慈善鍋　秋鈴女（續ホトトギス）
まつくろの空より雪や慈善鍋　鬼人（同）

貞徳忌（ていとくき） 長頭丸忌（ちやうづまるき）

【[illegible]】 十一月十五日は松永貞徳の忌日である。貞徳は幼名勝熊、長頭丸と稱し逍遊軒と號した。細川幽齋に和歌を、里村紹巴に連歌を學び、俳諧連歌の一體を興し、慶長三年勅許によつて花の本を名乘るやうになつた。承應二年八十三歳で歿した人であるが、その流派を貞門といひ遺著御傘は俳諧連歌の虎の卷とせられてゐた。花の本の系統は今も京都に傳はつて居り、鳴東新誌といふ俳諧雑誌がその家から出てゐる。

芭蕉忌（ばせを） 翁忌 桃青忌 時雨忌

【[illegible]】

【本朝文選】 芭蕉翁は伊賀の人也。武名は松尾甚七郎、藤堂家に奉仕す。（略）風雅を本となし、桃青と號す。乃ち誹諧正風體中興の開祖也。（略）深川芭蕉庵に入る。（略）天下芭蕉翁と稱す。東西南北に遊び、風雅を説き諸門人を助く、國中悉く芭蕉風に歸す。一たび難波津に遇して病に伏し終に卒す。年五十一。江州義仲寺に葬る。

【栞草】（十月十二日、俳諧正風體の開祖芭蕉庵桃青の忌日なり。（略）小文庫芭蕉忌と申しそめけり。時雨忌 史邦

註 十月十二日 （元祿七年十月十二日歿） （[illegible]は、[illegible]な引用を要すると思ふので、簡略に從つた。

【[illegible]】 十月十二日は元祿の俳星芭蕉（松尾桃青）の忌日である。芭蕉は伊賀國阿拜郡柘植の人、幼名金作、父、宇七、後、甚七郎、父、忠右衛門と言ひ、俳号の名は初め宗房、後桃青と號した。深川に庵を結び一株の芭蕉を植ゑて芭蕉と稱したのは後のことである。早く官を辭して風月を友とし、諸國を遊歴し、到る處吟詠を恣にした。野ざらし紀行・笈の小文・更科紀行・鹿島詣・奥の細道などの紀行文、又幻住庵の記以下俳文の随筆があり、冬の日・春の日・曠野・猿蓑・ひさご・炭俵などの諸集もある。「この翁孤獨貧窮なりといへども風雅にとめる二千人の門葉あまりて康済ひとへに合信する四方の族とも不可思議いかにとも勘破しがたし……」と其角をして言はしめてゐるだけに俳風天下を風靡してゐた。常に閑寂の中に遊び、幽玄枯淡の句風を尚び、所謂蕉風（正風ともいふ）の體を樹てたのである。俳諧の祖と言つてもよい程の偉業を完成したのである。元祿七年秋、南都におもむく途中大阪で病を得、御堂前南久太郎町花屋仁左衛門方裏座敷に靜養し、門人數人の看護を受けつつつひに十月十二日みまかつたのである。享年五十一。俳人この日、忌を修し俳聖の徳をしのぶのである。

今は陽暦を用ゐるので[illegible]に[illegible]となるが、芭蕉忌はまた時雨

忌などとも言ひ、冬の季題が多いので冬の部に入れて置く方が便利であらう。

例句

芭蕉忌

芭蕉翁一周忌
おもひ出す空の機嫌もしぐれ月　　浪化　（浪化上人發句集）
一日は塚の伽するしぐれかな　　同　（同）
かしこまる後も壁のしぐれ哉　　同　（同）
ばせを翁三回忌
いひ出すもけふの佛の寒かな　　同　（同）
羽氷る蝶もかなしき其日かな　　同　（同）
七回忌
霜時雨それもむかしや坐興庵　　嵐雪　（玄峰集）
元祿九丙子十月十二日翁三回
今更に袖を絞るや冬櫻　　桃隣　（古太白堂句選）
旅すがた時雨の鶴よ芭蕉翁　　樗良　（樗良發句集）
ばせを忌に薄茶手向る寒さ哉　　同　（同）
木がらしに古人荷葉の夢さむし　　同　（同）
いつの世に誰か此日をわすれ花　　也有　（蘿葉集）
ばせを忌や飯をゆかりの茶に染ん　　蓼太　（蓼太句集）
我ねがふ小春の望や十二日　　同　（同）
俳諧に古人有世のしぐれ哉　　几董　（井華集）
霜ときへてきへぬ翁のむかしかな　　白雄　（白雄句集）
この日数の故人をおもふしぐれかな　　同　（同）
時雨行日をおもかげの翁かな　　同　（同）
松島をよく見て何なき翁かな　　同　（同）
擔ひもて毛呂に翁のしぐれかな　　同　（同）
義仲寺在翁前に
障子まで來る蠅も有翁の日　　暁臺　（暁臺句集）
世にふるはさらにばせをの時雨哉　　士朗　（枇杷園句集）
ばせを會に瓢の底をたゝきけり　　成美　（成美家集）
翁忌や鴈も平話な並び様　　一茶　（七番日記）
芭蕉忌や江戸にもこんな松の月　　同　（一茶句帖）
芭蕉忌や留守をして居る榜宗　　同　（同）
旅の翁御覽ぜへばせを佛　　同　（七番日記）
ばせを忌と申も只一人哉　　同　（一茶新集）
ばせを忌や昔から錠の明く菴　　同　（同）
ばせを忌やことしもまめで旅虱　　同　（發句集）
旅の衰たぶけせうものばせを佛　　乙二　（をのゝえ草稿）
十月十二日翁忌に
安濃の舊に木の葉かゝせむ翁の日　　蒼虬　（蒼虬翁發句集）

木菟も夜を來てさやせ翁の日　　同　　（同　）

ばせを忌や伊賀、下そばみのゝ柿　　梅室　　（梅室家集）

冬の朝日の哀也けりばせを翁　　乙二　　（をのゝえ草稿）

芭蕉の畫かけて芭蕉を祭る哉　　宗雅　　（時雨笛）

芭蕉忌や壁に掛たる文の切　　吟江　　（推敲日記）

芭蕉忌や櫻畫し芳野椀　　菊堂　　（金反故）

芭蕉忌に芭蕉の像もなかりけり　　子規　　（子規句集）

芭蕉忌や芭蕉に媚びる人いやし　　同　　（同　）

芭蕉忌や其角嵐雪右左　　同　　（同　）

芭蕉忌や我俳諧の奈良茶飯　　同　　（同　）

伊賀川に時雨かけたり桃青忌　　月斗　　（同人）

芭蕉忌に琉球人の末座かな　　梅白　　（ホトトギス）

年々や同じ芭蕉の像の前　　虚子　　（句集虚子）

近松忌（ちかまつき）　巢林子忌（さうりんしき）

【季題解説】　十一月二十二日（一説に二十一日）。淨瑠璃作者近松門左衛門の忌日である。近松門左衛門は巢林子の名を以て聞え、日本文藝史上演劇史上の最も大いなる存在の一人である。本姓杉森、名は信盛、別號平安堂・不移山人。長門深川の人。幼時出家して肥前唐津近松寺に入つたが、少壯京に上つて髮を蓄へ、一條家に仕へて雜掌となつた。然し二十五歳の時には既に官を辭して歌舞伎作者となつてゐた。その後、義太夫節の元祖竹本筑後掾と結び、彼のために、澤山の淨瑠璃を作つた。享保九年十一月二十二日七十二歳で歿するまでに百餘番の淨瑠璃を殘してゐるが、詞藻豐富、文章巧緻、殊によく世態人情の機微を描くに妙を得てゐた。元祿十六年始めて世話淨瑠璃「曾根崎心中」を作つてから、情死するものが頻に多くなつたと噂せられるくらゐである。墓は唐津近松寺に在るが、門左衛門の遺言で建てたものであると傳へられる。また大阪谷町法妙寺にも碑がある。門左衛門の兄は相國寺長老と云ひ、弟は岡本一抱と云つて京都で名高い醫師、姪は錦紅と云つて俳諧に長じ、大阪に住んだ。

【例句】
近松忌

近松忌百目蠟燭灯しけり　　蛇笏　　（ホトトギス）

二番目の世話狂言や近松忌　　同　　（同　）

生涯を人形つかうて近松忌　　多佳女　　（續ホトトギス）

い[illegible]椅を譲りて近松忌　　砧女　　（同　）

夕霧忌（ゆふぎりき）

【季題解説】　一月七日は、[illegible]門で名高い大阪新町[illegible]の遊女夕霧の忌日で

ある。此日大阪新町九軒の吉田屋で盛大な夕霧忌が營まれ、俳優や文藝の關係者、文士などが招かれて、夕霧の居間や調度・遺墨などが展観される。

夕霧は洛西嵯峨の生れで本名をてると云ひ、京都島原の扇屋四郎兵衛といふ娼家に身を賣つて夕霧太夫となつたが、容色のすぐれてゐる上に諸藝に秀で、物腰もしとやかであつた爲め、忽ち廓の人氣を一身に集めたが、仔細あつて扇屋が島原を引拂ひ大阪の新町へ引越す事となつたので、夕霧も共に新町へ移された。

夕霧が大阪へ來てからは殆ど九軒の吉田屋へ揚詰になり、新町初まつて以來の全盛と謳はれたが、美人薄命の譬に漏れず、大阪へ來てから六年、延寶六年の一月六日に二十六歳を一期として病没した。

廓文章の淨瑠璃には「去年の月見は吉田屋で云々」といふ名文句があつて人口に膾炙してゐるが、其他近松の「遊君三世相」「夕霧七年忌」「夕霧阿波鳴渡」などの戯曲によつて嬌名が傳はつてゐる。「夕霧の作つた句として傳へられてゐるものに「子の親の手管いとはめ時雨かな」といふのがある。倘夕霧は子持遊女として名高かつた。近松の書いたものにも皆子供の事が出て來る。

例句

夕霧忌

櫻炭ほの〴〵とあり夕霧忌　夜半（ホトトギス）

襖繪の花鳥もわかす夕霧忌　秀好（同）

土芳忌（どはうき）

季題解説　一月十八日。明暦三丁酉年の出生で、藤堂家の家臣、芭蕉の門に入つた。其別莊蓑蟲庵は上野西日南町に現存し、後人の所謂芭蕉五庵の一である。享保十五年庚戌年正月十八日歿、壽七十四、伊賀上田村西蓮寺に葬る。

例句

土芳忌

土芳忌にまかる俳人夫婦かな　亨女（續ホトトギス）

振はざる伊賀俳諧や土芳の忌　九園（同）

伊賀越のこの古町や土芳の忌　蕉蔭（同）

蕪村忌（ぶそんき）　春星忌（しゆんせいき）

季題解説　十二月二十五日、與謝蕪村の忌日である。蕪村は享保元年、攝津東成郡毛馬村（現今の大阪市東成區）に生れた。本姓谷口氏、名は寅、字は春星、東成・三菓軒（三果）・紫狐庵（紫虎庵）・夜半亭・四明其他の別號がある。丹後與謝の風光を愛し與謝と改姓、又單に謝蕪村ともいつた。早くから江戸に出て内田沾山に俳諧を學んだ。元文二年巴人（宋阿）に學び、巴人歿後第二世夜半亭を襲ひ、寶暦元年京都に移つて畫を業とし俳諧に遊

壬午年十二月二十三日歿。行年七十四。

例句

几董忌　俤の主とせをいたく帋衣哉（亡父大祥忌）　几董（井華集）

月雪に集てかなし筆の物（同十三回忌）　同（同）

寒月にうつし見む我かこち顔（同二十五回　右は其[illegible]に遇ひし十余年をへて、百[illegible]を綴りし[illegible]行る也。）　同（同）

一茶忌（いっさき）

季題解説　十一月十九日は小林一茶の忌日である。一茶、名は彌太郎、俳諧寺・蘇生坊などの號があり、信州柏原の農家に生れて、幼にして母を失ひ、繼母に仕へ、村の本陣中村新甫に手習と俳諧の手ほどきを受け、十四歳で江戸に出て奉公の傍ら溝口素丸に俳諧を學び、寛政四年郷里に歸つて家業を繼ぎ、文政十年六十五歳で歿した。おらが春・しだら・一茶句帖、その外、今日だんだん發見されてゐる日記などが世に行はれ、貧乏で繼母と爭ひぬいた事及び俗事を詠んだ人間味の多い句や文章で知られてゐる。信州に於ける一茶同好會を初め一茶の研究家は全國に多く、一時は文壇人にもてはやされて流行ッ兒となつてゐた。

例句

一茶忌　一茶忌の雪となりけり大根飯　炎子（懸葵）

一茶忌や古りて嬉しき百姓家　蛹魚（ホトトギス）

いも供養（くやう）

正朋忌（まさともき）　井戸祭（ゐどまつり）　芋殿忌（いもどのき）

季題解説　石見の國に於て、毎年十一月二十六日、井戸平左衞門正朋の靈を祀る。

正朋は大和の人、享保十六年九月二日歳六十にして、石見銀山領大森代官に任ぜられてから、享保十八年五月二十六日備中笠岡の陣屋に移つて逝去するまで、在職僅か一年八箇月であつたが、赴任早々打續く大飢饉に處してあらゆる救濟の手段を講じ、遂には幕府の許可を得る暇なく、公租税金を出して窮民を救ひ、田租を免ずるなど、身を捨てゝ仁を果した。

正朋は斯く一時の急を救ふばかりでなく、永遠に下民安全の道を立てようとして、享保十七年薩摩芋の種を求め、石見一國に其栽培を普及せしめて遂に其目的を達した。里人正朋の徳に感じ、芋代官・芋殿樣と呼び、諡「泰雲院殿義岳良忠居士」の碑を到る處に建てて祀つた。

明治十二年、有志相謀つて其屋敷跡に井戸神社を造營し、其遺徳を敬慕した。明治四十三年十一月には其功績を追賞せられて從四位を贈られ、大正

七年には縣社に列せられた。昭和七年は丁度その二百回忌に當る。

例句

いも供養

二百回忌に

いも供養いもは好かねど謹みて　虚子（城　）

寺もなく芋の忌にある村ト戸　水天老（同　）

漱石忌（そうせきき）

季題解説　忌日は十二月九日。漱石は本名を夏目金之助と云ひ、慶應三年一月五日庚申の日、牛込馬場下に生れた。父を直克、母はお千枝と云ふ。幼い頃里子にやられ、預つた古道具屋が四谷の大通りに夜店を出すので、三ツになる漱石も一しよに連れて行かれ、笊に入れられたまゝ師走の寒空に吹晒されてゐた事もあり、一時は養子にもやられたといふことである。明治二十三年東京帝國大學英文科に入學した、正岡子規・尾崎紅葉など同級であつた。同二十六年七月卒業して大學院に入り、後松山中學・熊本第五高等學校などに教鞭を執り、同三十三年九月英國に留學、英文學を研究し、歸朝後東京帝國大學及第一高等學校の講師となつた。同四十年四月教職を退いて朝日新聞社に入り、大正五年五十歳を一期として一生を終つた。文獻院古道漱石居士は其の諡である。

漱石は始め三島中州に漢學を學び、釋宗演に就て禪を修め、大學時代子規と一しよに俳句漢詩などを作り、俳句は其歿年まで續いた。明治三十四年洋行中ホトトギスに倫敦消息を書いて病子規を慰め、同三十七・八年頃は俳體詩も盛に作つたものである。明治三十八年一月號からホトトギスに處女小說「吾輩は猫である」を連載して文名大に上り、引續き倫敦塔・カーライル博物館・幻影の楯・琴の空音・一夜・薤露行・趣味の遺傳・坊つちやん・草枕・二百十日・野分などを發表し、朝日新聞入社後、虞美人草・坑夫・三四郎・それから・門・彼岸過迄・行人・心・道草・明暗などの長篇小說を書いた、其他小品・紀行・文學論・文學評論など著作が甚だ多い。晩年には書や畫にも親しんでゐた。以上の様な譯で其作品には多分に英文學・俳句・禪などが或はローマンチックな作風となり、低徊趣味に變形し、或は一種の人生觀となつて影響してゐる。

漱石は博學上品な人格者であつたが、又一面氣骨ある風變りな人であつた。明治四十四年二月文學博士の學位を授けられた時「只の夏目でよい」と云つて之を受けず物議を釀し、首相西園寺公が當時の文士を招待した時も「ほとゝぎす廁半に出兼ねたり」の句を以て應酬し、其の招に應じなかつたなどの逸話も隨分多い。一代の文豪である。

例句

漱石忌

青草の枯れる庭や漱石忌　迎南（ホトトギス）

このごろは讀まぬ妻なり漱石忌　立春（同　）

漱石忌　熊本にのこる逸話や漱石忌　さむろ（春ホトトギス）

漱石忌うすら覺えの草枕　濤聲（同）

宗鑑忌（そうかんき）

季題解説 陰暦十月二日、山崎宗鑑の忌日である。宗鑑は近江の人、一休に師事したことがある。讃岐で癰を患ひ、天文二十二年十月二日歿、年八十九。

以下五人の忌日は新暦にして秋季に屬せしむべきだと思つて、はじめは冬の部に省いてをつたが、秋の部になく、さすれば歳時記より抹殺さるゝことゝなるので、校正の節簡單に挿入することゝした。

嵐雪忌（らんせつき）

季題解説 陰暦十月十三日、服部嵐雪の忌日である。淡路に生れた。芭蕉の門に入つて、其角と並び稱せられた。寶永四年十月十三日病歿、歳五十四、駒込竹町常驗寺にその墓がある。

例句

嵐雪忌　嵐雪忌殘る白菊黄菊かな　魚里（懸葵）

來山忌（らいざんき）

季題解説 陰暦十月三日、小西來山の忌日である。來山は大阪の人、享保元年十月三日歿、年六十三、逢坂山一心寺に葬る。

浪化忌（らうくわき）

季題解説 陰暦十月九日、浪化上人の忌日である。芭蕉の門人で、元祿十六年十月九日寂、年三十二といふ。或は十月十三日が忌日といふ説もある。

例句

浪化忌　浪化忌や司晨樓建つる志　句佛（懸葵）

浪化忌や未だ詣でず瑞泉寺　綾華（ホトトギス）

几董忌（きとうき）

季題解説 陰暦十月七日、高井几董の忌日である。京都の人、几圭の子で蕪村の門人である。寛政元年十月七日歿した。或は十月二十三日ともいふ。

官幣社例祭表（冬季）

官幣大社例祭

神社	祭日	祭神	鎮座地
明治神宮	十一月三日	明治天皇・昭憲皇太后	東京市澁谷區代々木町
淺間神社	十一月四日	木花開耶姫命	靜岡縣富士郡大宮町
宗像神社	十一月十五日	多紀理姫命・市杵島姫命・多岐都姫命	福岡縣宗像郡田島村

官幣中社例祭

神社	祭日	祭神	鎮座地
水無瀬宮	十二月七日	後鳥羽天皇・土御門天皇・順徳天皇	兵庫縣三島郡島本村
住吉神社	十二月十五日	表筒男命・中筒男命・底筒男命	山口縣豐浦郡勝山村

官幣小社例祭

神社	祭日	祭神	鎮座地
竈門神社	十一月十五日	玉依姫命	福岡縣筑紫郡太宰府町及御笠村

別格官幣社例祭

神社	祭日	祭神	鎮座地
談山神社	十一月十七日	藤原鎌足	奈良縣磯城郡多武峯村

動物

熊(くま)　羆(ひぐま)　赤熊(あかぐま)　馬來熊(まれいぐま)　白熊(しろくま)　黑熊(くろくま)　月輪熊(つきのわぐま)

古書校註

【三才圖會】按ずるに、熊は深山の中に在り。松前に出づる者最も多し。全體黑くして胸の上に白毛有り。偃月の如し。俗に月の輪と稱す。常に手を以て之を掩ふ。獵人其の月の輪を窺ひ之を刺せば則ち斃る。若し然らざれば則ち刀鎗を拌く。其の强勢敵す可からざる也。其の子を生むや甚だ容易にして、自手を以て抓出す。故に人熊の掌を用つて臨產の傍に置く、亦安產の義を取る。

季題解說 哺乳類中の食肉類に屬す。種類 馬來熊(マライ地方產)・白熊北極熊(北國地方產)・黑熊又は月輪熊(ツキノワグマ)(東北地方產)・赤熊又は羆(ヒグマ)(北海道產)

仔は冬期山中の穴の中で產れ、授乳せられ、融雪と同時に親と共に穴を出る。水芭蕉の芽、ばらふう・やまにんじんの根、こけもも・つがざくら其他の高山植物、又ぶどう・こくわ等の果實を主食とし、秋期川を遡る鮭・鱒類を捕へ、また溪流の砂礫中に棲息するざりがに等を捕へて食す。山中にて秋の末食餌缺乏すれば麓に來り人家近く現れ、畑の南瓜・唐黍・燕麥等を喰ひ荒し、又牛馬等を嚙み殺して之を喰ふ。人に逢ひ之を倒して內臟を喰ふこともあるが人肉を好むものではない。一產一仔、懷姙期間七ケ月、獨棲、稀に二三匹同棲する。交尾期六・七月頃。

根雪が四・五寸積ると穴に入るが、多くは天然の洞穴で、入口が上方へ向いたもの、下方にあるものもある。洞穴の地面は熊笹等を敷き淸潔である。年齡八歲・九歲以上のものがあり、體重八十貫以上のものがある

羆の被害は多大であるが、六・七年前、旭川赤十字病院に、羆のために危害を加へられて入院したもの五名あり、顏面・背部・臀部など傷けられ悲慘なものであつた。年々入院するものがあると云ふ。〔參照〕熊穴に入る(クマアナニイル) 貉(アナグマ) 人事—熊突(クマツキ) 熊祭(クママツリ) 秋—熊搔栗架

例句

熊

雪田の一點熊の歸るなり　涼斗（同人）
鞭に媚びて熊立ちありくあはれさよ　丑秋（ホトトキス）
熊つれし熊の膽賣の來りけり　蔦堂（同）
熊つれしアイヌ芝居の一座かな　郊春（同）
月の輪のよごれて檻の熊あはれ　ひさし（續ホトトギス）

【例句】　荒熊の爪の痕ある峰祠　駄々子（同　）

つきのわぐま Ursus torquatus japonicus SCHLEGEL. 普通、熊と稱せられるものはこれで、我國の山地に廣く分布してゐる。全身黒く、爪も黒いが、胸部に明瞭な月輪狀の大きな白斑がある。性質は比較的溫順で、防禦のための外は、人に危害を加へることは稀で、魚・蟹・蜂・蟻・果實等を食ひ、大木の空洞又は地中の穴に棲んで冬にはこゝに蟄居してゐるが、夏季には喬木上に登り、その樹枝を折り曲げて「熊の床」を造り、この上で生活することがある。

ひぐま［Ursus arctos yesoensis LYDEKKER. 北海道の山地にのみ棲むので、えぞくまとも云ひ、あかぐまとも呼ぶが、眞の赤熊とは形態を異にする。つきのわぐまが、頭胴を合して一メートル半を少しく超えるのに過ぎないのに、ひぐまはこの長さが二メートル以上に達し、體は淡赤褐色で、往々帶灰色のもある。牝や幼獸は、成熟した牡よりも大抵色が淡い。幼獸では不判明ながら月輪狀の斑があるが成獸となれば全く消失する。性獰猛で、初夏に牛・馬・豚のみならず人をも襲ふこと稀でない。常時の食物は、つきのわぐまにほゞ等しい

あかぐま［Ursus arctos collaris CUVIER. 我國では樺太に產し、カムチヤツカ・シベリア・北歐・北米に廣く分布し、くろけ、まとも稱せられ、ひぐまよりも更に大形で、性獰猛である。躰は淡褐色であるが、四肢はやゝ黑色を帶びてゐる。

しろくま［Ursus (Thalarctos) maritimus PHIPPS. 北極地方に棲むので、ほつきよくぐまとも云ふ。我國では千島にこれを捕獲し、新潟に於ても、これを獲したことがあるが、此等の地方に常住するのではなく、流氷に乘つて渡來したものと思はれる。全身純白で海岸の洞窟、岩石の裂れ目などに棲み、あざらし等の海獸を襲ひ、魚類をも食ふ。游泳甚だ巧みで、潜行も自由に行ふ。人に馴れ易く訓練すれば種々の藝當をなさしむることを得。これカール・ハーゲンベック氏のはじめて世界に紹介したる事實である。

熊穴に入る　穴熊

【季題解説】　積雪が深くなり、食物が缺乏するやうになると、熊は穴に入つて翌春融雪期まで籠る。これを穴熊といふ。（三冬）熊

貛　あなほり

【動物解説】　鼬鼠科、我國特有の動物である。冬と夏とで毛の色を異にする。冬毛は上面白味勝ち、下面は黒褐色、夏毛は上面淡黄褐色、後半部と體側

は暗黄褐色、胸は黒褐色。時にたぬきに似た色彩のものがある。地方によつてむじなと稱し、たぬきと混同する。本州・四國・九州に棲息し、深い穴を穿つて棲んでゐる。昆蟲・蚯蚓・芋・甘藷などを食つてゐる。〔參照〕熊、狸

あなぐま。穴居せる熊を穴熊と稱し、之を獵するを、「穴熊獵」又は「穴熊打」と呼ぶが、この外に、別種の獸に此の名を附してゐる。卽ち、いたち科に屬し、Meles anakuma Temminck てふ學名を有するもので、頭胴の長さが約半メートル、體軀肥大し、頸部短く、顏面熊に似、本州・四國・九州の山地に穴居してゐる。この獸は「むじな」と稱せられるが、「むじな」の語は狸を指すこともあるので、狸と混同されてゐる場合がある。

猪（ゐのしし）　猪の肉（しゝのにく）　山鯨（やまくぢら）

【季題解說】偶蹄類に屬し豚に似た丈の低い不格好な動物で、毛色は黒色に黒褐色の剛毛が混生してゐる、頭部にあるのを「怒り毛」といふ。牝には大牙、牝には小牙があり、晝は山林に潜み、夜出て、吻端で地を掘り、野鼠・蚯蚓・さはがに等の小動物や木の根・木の實・畑の甘藷・豆類を食ふ。本州・四國・九州に産し、その肉は美味である、猪汁などを作る。山鯨ともいふ。

【實際的注意】猪の季題は從來秋の季になつてゐた。しかし近代の歳時記にはこれを熊などと同じく、冬の部に屬せしめてゐるものもある。しばらく疑を存して、冬の部にも存置しておくことにする。〔參照〕人事—猪狩（シシガリ）　秋　猪（シシ）

【例句】

此の𤭖猪の背擦りに傾けり　梧月（ホトトギス）
朝鮮や猪を煮るべき石の鍋　蘚溜子（同）
薄雪に昨日あたりの猪の跡　無錫（同）
橋の下猪を釣してありにけり　青蓑（續ホトトギス）
猪舁いて高野の街を通りけり　馬柵（同）
みちのくはまだ〳〵冬や猪を賣る　青邨（同）

冬の鹿（ふゆのしか）

【季題解說】鹿は夏季の毛は栗色で鮮かな白斑が散點してゐるが、冬になるとその白斑は一樣に薄れて暗褐色になり、殆ど消滅するといつてもよい、それは雌雄とも同じである。

部などでは養狐事業が行はれてゐる。〔參照〕宗教—王子の狐火

〔例句〕狐

火ともして己等寒き狐かな　月斗（同人）
飽きげに狐と歩く堤かな　浮光（同）
稻塚に尾をひきあます狐かな　伏兎（同）
月浴びて面とがりたる狐かな　立春（ホトトギス）
くらがりに狐の顏の見えにけり　冬男（同）
印度デッカン高原に三冬を送る
よぎりたる狐の顏におぼえあり　同（續ホトトギス）

狸　たのき　貉

〔季題解説〕東アジア州に特産する動物で、顏は小さく口先尖り眼は小さく丸く、形は狐に似て體毛は種々なものがあるが、大體八文字といつて前半身の背の部分八文字狀の黑い毛のあるもの、十文字と言つて前肢の左右に通ずる黑横帶と背中を縦に走る黑帶と十文字に交叉したもの、しろといつて白斑のものなどがあり、普通は黑褐色をしてゐる。

野鼠・爬蟲類・昆蟲・果實を食つて生育し有用動物の一つである。

毛皮は防寒用、毛は毛筆などに用ひられる。

貉といふのは別名同屬のもので、貛といふのはよく似てゐるけれども別種である。

狸は山野に穴を掘つて棲み、東京附近でも雪の頃には、杣人が山奥に入つてその足跡などを辿つて穴の中のものを捕へることがある。穴口からものを燻して苦しめ誘ひ出し、又は穴を鍬で掘り竹鎗様のものなどを用ひて捕獲する。主として毛皮を得ようとするのである。晩秋柿の熟する頃に夕方から啼聲を立てながら柿の木に上るのを見ることがある、その聲は宛も人がよぶやうにオーイオイといふ風にきこえる、普通に之を貉と稱して居り、狸と共に人を誑かすといひ傳へられてゐる。〔參照〕貛

〔例句〕狸

蓑着たふりや狸のあなたふと　也有（蘿葉集）
子を呼べば應ふ貉や山の暮　文方（同人）
後つくる狸愚かや盜み足　耕雨（同）
山宿へことづかりたる狸かな　石鼎（ホトトギス）
狩くらの網をのがれし狸かな　双堂（同）
狸罠道にあらばや觀心寺　紫水（續ホトトギス）

狼 山犬 ぬくて 送り狼

古書校註

【三才圖會】 按ずるに、狼は春夏山家に出でゝ鳥獸及び人物を竊み食ひ、秋冬は穴居す。性能く機を知る。若し獵らんと欲すれば則ち深く隱れて出でず。四趾に蹼有りて能く水を渉る。或は砲火の繩の氣を聞げば、則ち遠く避け去る。夜行人有れば其の首の上を跳び越ゆること數回にして、人若し恐怖して轉倒すれば則ち噬み食ふ。之を送り狼と稱す。人怖れず又敵せざる者は害無し。故に山野を行く人常に火繩を携ふる也。

季題解說 哺乳類中犬と同種のものである。形は犬に似て瘠せ、耳は小さく、口は大きく廣く裂け、前肢は長いために一見立つたやうな風貌があり、肩は聳え一體に黃褐色粗硬な毛をもつてゐる。多く夜間、兎・鳥・爬蟲類動物を襲ひ捕食して棲息する。冬期深山の積雪の多い頃には群をなして村里に現れ人畜に害を加へることがある。山野僻間にしばしば獸毛を交へた獸糞を見受けることがあるが、土民は之を狼が夜現れたのであると信じ、又送り狼といつて夜間旅人の後を尾行して其人が仆るゝ時跳りかゝつて咬みつくものがあるといひ、狼は鹽を嗜好するから夜間屋外を持ち歩くことを忌むなど夫々恐怖心にかられるものが今尙少くない。狼は火を怖るゝ性があるといつて深夜外出する場合には火繩を振りながら歩いたり、鹽の上には榾火をのせて持ち運ぶ等の風習がまだ殘つてゐる地方がある。武州三峰山で出す盜難防符には、お犬さまと稱して狼を畫いてあることは廣く知られてゐるところであり、その地方の人民は盜難の多い場合には三峰神社から「お犬様を借りる」といふ風習がある。學說によると我内地に棲むものは眞の狼ではなく山犬(豺)と稱するものであるさうである。北歐に棲む狼がその祖先であつて、形も大きいが、その一變種が朝鮮に渡つて一亞種を作つて現在朝鮮に多く棲む「朝鮮狼」ぬくて)となつたものであつて、前者よりも小形で前肢が少し短いといふ差違がある。更にその内一層小形のものが内地に渡つて山犬といふ一亞種をなした。そして狼と言はれてゐるのである。山犬を俗に狼と稱してもその祖先は矢張り狼であることには相違ない。

例句

狼の犬より小さし檻の中　小蕾（ホトトギス）

狼 警察に吊されてある狩かな　友萍（同　）

參考

やまいぬ (Canis hodophylax TEMMINCK) 本州の山地及び支那に產する狼は本種で、體色は概ね黑褐色

てうせんおほかみ (Canis lupus coreanus ABE) 朝鮮に於て、人畜を襲ふ「ヌクテー」は、大抵これである。齒は上下合して四十二個あること犬及

び、やまいぬに同じいが、山犬よりも體が大である。しべりあやまいぬ（Cuon alpinus. Pallas）朝鮮で「ヌクテー」と稱せられるものには本種を混ずる。齒は上下合して四十個。樺太にも本種が産するので、「からふとおほかみ」とも呼ばれる。

獐（のろ）

麞（のろ）　のろしか

季題の解説　獐は朝鮮の到るところの山野に棲む特種な獸である。哺乳類中の有蹄類に屬し、形態。性情・嗜癖共に概ね鹿に似てゐるが、鹿よりは小さい。また鹿の如く角をもつてゐないのが普通である。牡は二寸程の牙を有するが、これを闘爭の具として用ふることはなく、毛は鹿より粗く且つ脆くて折れ易い。幼時には鹿と同じく白斑があるが、成長するにつれて全身褐色となる。常に個々にゐて群棲することがなく、晩秋交尾し、翌年初夏の頃に至つて仔を産む。一牝で三四匹を産む點に於ても鹿と異つてゐる。獐の血（生血）は不老强壯の妙薬であるといはれ、また肺病とか肋膜炎とかを治するにも效能顯著であるといはれてゐる。肉は牛よりも淡で美味。皮はなめして靴および袋物などに加工され、腋の下の柔い毛は筆を作るに適する。（朝鮮固有色辭典）

或る狩獵家の話　獐を狩るのは晩秋から晩春に亙つて行ふが、その中でも冬期を最盛期とする。其肉も十二月頃から二月頃までが最も美味であつて、その他の時は臭氣が出るので獐虻（春、「獐虻」参照）が出て後のものは多く脯肉とする。獐は性質溫順で、藪・茂みなどに入つてよく眠る。夜はもとより晝も眠る。夜眠つたときは、朝日がわづかに草の上にちら〳〵とさして來るころ眠からさめて、藪或は茂を出てあたりの草を食ひ歩くが、極めて緩漫な動作である。晝眠つた場合は夕日が沈むころ起きるやうである。朝鮮には獐の眠りといふ言葉があるが、これはしば〳〵目を醒ますことを指していふのである。そのやうに獐は眠つてゐる時にもよく眼を開くといふことである。これは外敵を怖れて熟眠し得ないのであらう。獐は又極まつた巣穴を持たないといふことである。かうした鈍な動作を繰り返して生活してゐるが、一旦恐怖し或は敵襲を受けるとその遁走することは極めて迅く、二間、三間と一氣に跳躍して遁逃するのである。眠る場所は多く谷或は山裾、又は人里などにも見るが、畑や草原などに近いところを選擇するやうに見え

る。よく行人の足音に驚いて走ることがある。

獐は群をなすものではないらしい。が平安北道鶏城郡内の山中では二三十頭列をなして歩いてゐるのを目撃したものがあるといふ。狩猟家は勢子を使つて狩り立てることもあるが、又その足あとを追つて臥臥してゐる場所を探知し、そのさめて出るのを待つて射撃することもある。三頭五頭と同じ叢中にゐることもあるさうである。但し出て草を食ふ場合には次々に姿を現すことが多いといふ。

支那の山西省・満洲などにも居るといふことである。朝鮮の北部には、別種シベリアのろじかといふのがゐるが、普通ののろじかに比べると其数が極めて少ない。（新季題）獐茸

例句

獐

仕とめたる獐を夕日に荷ひけり　萩下（凍ホトトギス）

かへり血を浴びて獐の子居りけり　櫻人（同）

獐の血のしたゝる獐茸を負ひにけり　仲生（同）

獐茸（つのぎ）

獐の袋角

季題解説 鹿の袋角と同じで、薬用として貴ばれてゐる。獐には角はなく、これは一見獐と違はぬものであるが朝鮮鹿の一種であるともいはれ、たゞ尻毛に白色のあるのが獐と違ふところであるといふ。この獐の角は鹿のやうに大きくならず、枝も第一年に根幹の一枝をのべ、第二年に側から一枝、第三年に互生的に一枝、そして脱落するといふことである。

この角を持つた獐は牡らしく、それも三四十頭中に二三頭を見るのみだといふ。（新季題）獐

兎（うさぎ）

越後兎　野兎　飼兎　黒兎　兎狩　兎網

季題解説

「ゆきうさぎ」十月頃から冬毛に抜け變つて白毛となる。

「のうさぎ」林野に棲むもので、丘を上ることは巧みであるが下ることは拙劣でよく顛落する。毛色は灰褐色である。

「かひうさぎ」毛の白いものが多くこれ等は目がルビー色をしてゐる。灰色、白黒斑のものもある。

「くろうさぎ」琉球孤島に棲み樹洞や土中に棲んで、夜、食を求めに出る。天然記念物として指定されてゐる。

兎は草や木の皮などを食ひ、農作物の苗その他を食ひあらすことが多い。兎の肉は食用、毛皮は防寒用、又は衣類の縁用、毛は筆などに用ゐる。

「兎狩」網を張り、反對の方向から追ひつめて捕ること。網を兎網といふ。

【例句】

兎

擔ぎ戻る背に兎の温さかな　四十雀（ホトトギス）

撃ちとられ眼つぶらぬ兎かな　里石（同）

兎賣日向ぼつこをしながらに　稻女（同）

竈猫（かまどねこ）

【季題解說】猫は冬になると緣側の日向とか、炬爐の上とか、圍爐裏ばたとか、暖いところを追つてあるく。丁度よく温もりの殘つたへつついの上などは最も好むところで、いつまでもその上に香箱を作つて眼を細くしてゐるものである。時には火の落ちた生あたゝかい竈の中にもぐつてゐて、灰だらけになつて出て來ることもある。これを竈猫として新季題に入れることは言葉としても熟してゐるし、ちよつと面白い。

鯨（くぢら）

鯢（くぢら）　いさな　まつかうくぢら　ざとうくぢら　ながすくぢら　しろながすくぢら　いわしくぢら　せみくぢら　こくぢら

【古書校註】

【三才圖會】鯨。音、擎（鱷）。本字、海鰌、勇魚　万葉集に伊佐奈と訓す。古へ魚を呼びて皆奈と曰ふ。雄は鯨と曰ひ、雌は鯢と曰ふ。和名、久知良。（略）其の狀、喀と鰌に似たり。故に海鰌と名づく。（略）凡そ鯨に六種有り。性喜びて鰯を嗜み、諸魚に敵せず。海猟若し尾箸に觸るゝときは、則ち必ず覆る。冬は北より南に行き、春は南より北に去る。肥州の五島・平戶の邊は、節分前後盛りと爲し、紀州熊野浦は仲冬を盛りと爲す。

【年浪草】說文に曰、鯨は海の大魚なり。本、鱸に作る。（爾雅翼に曰、鯨は京に从ふ、大也。常に五月を以て子を岸に生み、八月導きて北す。

【季題解說】哺乳類中游水類に屬する海獸で、古名いさなといひ動物中最大のものである。體軀は魚類に似てをり、水中生活に適應する。小は六七尺より、大は五六丈から八九丈にも達する。皮膚は平滑で厚く、其下に脂肪層があり、後肢がなく、前肢は全く鰭狀をなし、尾も水平に擴がつて尾鰭狀をなしてゐる。眼は細く、鼻孔は頭の頂上にあつて、時々水面に浮み出でて空氣を呼吸する時には丁度霧のやうに噴出する。俗にこれを汐吹きといふ。種類非常に多く、我近海に棲息するものに、まつかうくぢら・いわしくぢら・ざとうくぢら・ながすくぢら・せみくぢら・こくぢら・どんどうくぢらなどがあり、各體色形狀を異にする。肉を食用とし、脂肪から油を採り、齒及び鬚は種々の細工物に用ひられる。

近代人の作る鯨の句は多く捕鯨によつて漁獲され、海濱に曳きあげられてあるのを見に行つて作られるやうである。さびしい冬の海濱に鯨が揚げら

れ、戰場のやうに騷ぎ立てゝゐるのを見に行くことはたしかに興趣あることである。【參照】人事—捕鯨(附)

【例句】

鯨

彌陀佛や鯨よる浦に立玉ふ　蕪村（落日庵句集）

ふく汐の入日にかゝる鯨哉　赤羽（新　選）

大きさも知らず鯨の二三寸　子規（子規句集）

烈風に松明霧す鯨かな　花囚（ホトトギス）

鯨の血流れて砂に溜りけり　月二郎（同　）

人垣の隙に見えゐる鯨かな　青眼子（同　）

土佐室戸岬

くぢら船見送つてゐる娼婦かな　波川（同　）

貝殼のつける鯨の尾鰭かな　里石（續ホトトギス）

鯨見の鐵をかつぎて來てゐたり　同（同　）

曳かれゆく鯨の上の男かな　鋭子（同　）

見にきたる人のすくなき鯨かな　今夜（同　）

【參考】まつかうくぢら Physeter macrocephalus LINNÉ. 頭部巨大で、鈍端をなし、下顎には、四十乃至五十個の齒を具へ、脊鰭を有しない。腸に生ずる龍涎香は貴重な香料となり、この鯨の油は甚だ優良で、特に額骨中にある油卽ち鯨腦油は時計油等として賞用される。

ざとうくぢら Megaptera nodosa (BONNATERRE) 前肢は長大なる鰭狀をなし、頭には數多の疣狀突起がある。喉部より腹部に亙りて褶襞縱走す。脊鰭は低く鎌狀である。躰長十七メートルに達す。性甚だ群棲を好む。潛水中に美妙なる聲を發す。笛を吹きつゝ流し歩く座頭の如しとてこの名を得たりとの說がある。齒を有せず、所謂鯨鬚を具へてゐる。

ながすくぢら科に屬する。

ながすくぢら Balaenoptera physalus (LINNÉ) 喉より腹部に縱走する褶襞は百條以上に及ぶ。體長二十六メートルに達する。

しろながすくぢら Balaenoptera musculus (LINNÉ) 體長三十メートルにも達し、最大の鯨で、また現存動物中の最大種である。喉から腹部へ、約六十條の褶襞が縱走してゐる。體色は概ね灰白色で、腹部は白い。

いわしくぢら Balaenoptera borealis LESSON. 體長十六メートルに達す。前腹面の褶襞は十數條に過ぎない。體は概ね灰色、背面濃く腹面は淡い。

せみくぢら Balaena glacialis BONNATERRE. 甚だ大なる頭部を有し、其上顎が弓狀に曲つてゐる。腹面には縱走褶襞を見ない。背鰭を缺如する。

こくくぢら Rhachianectes glaucus (COPE) 小形の鯨、こくくぢらの名は鯨の兒の意と混同し易きを以て捕鯨業者は克鯨と記すことになつてゐる。牡は十六メートルの體長に達するが、牝は十三メートルを普通とする。

背鰭なく、腹面の褶襞は稀に四條、多くは二乃至三條に過ぎぬ。

鮫(さめ)

季題解説　體は紡錘形であつて尾は偏平である。顎に一二列の三角形の齒があつて、鰓孔には鰓蓋がない。體の表面に粒狀の凸起がある。體色は概ね灰色で種類が極めて多い。しろざめ・しゆもくざめ・ねずみざめ・あをざめ・あぶらざめ・ほしざめ・をながざめ・つのざめ・あいざめなど。

例句

鮫　鮫船のろくろを捲ける女房達　史江（續ホトトギス）
　兩眼は撞木の先や撞木鮫　冬青（同）

海豚(いるか)　海豚狩(いるかがり)

季題解説　體の長さ二間に達するものがあり、長紡錘狀で、口が尖つて突出してをつて恰も嘴のやうである。脊鰭は概ね三角形で、前肢は鰭狀をなし、水中生活に適して居る。尾は水平に擴がり、眼は凹んで極めて小さく、頭部に俗に潮噴と稱する小穴がある。（時々浮き上つて鯨の如く潮を噴く。）體色は藍黑色又は黑色である。常に隊をなして海洋を游泳してゐる。
沖合を群游する海豚を數十艘で打ち圍み、一齊に舷や甲板を打ち鳴らして威嚇し、散亂するのを防ぎながら港に誘ひ込み、港口を鎖ざして之を狩る。
漁師は眞裸で海中に入り、海豚の浮き上るのを待つて潮噴の穴に鉤をさし入れて、その鉤につけた太い綱をもつて陸上に曳き揚げるのである。（伊豆西海岸安良里港所見）

例句

海豚　海豚哭くまつくらがりの港かな　耿陽（續ホトトギス）
　横はる海豚の中の焚火かな　同（同）
　海豚鍋煙をあげて煮ゆるなり　美津女（同）
　家の間に海豚揚げある安良里(アラリ)かな　耿陽（ホトトギス誌）

冬の鳥(ふゆのとり)　寒禽(かんきん)

季題解説　冬季の鳥の總稱であつて、特に冬季に限つて棲息するの謂ではない。鳥又は雀と雖も冬季に之を見れば冬の感じがあるものである。

例句

冬の鳥　寒鳥の日を追入ぬあだゝらね　曉臺（曉臺句集）

寒禽の頭血を噴き撃たれけり　竹の春（ホトトギス）
寒禽の撃たれてかゝる雀かな　蛇笏（同　）

鷲（わし）　いぬわし　をじろわし　おほわし

古書校註【年浪草】鵰（テウ）和名、於保和之。鵰音、鷲音就、鷙音閩、和名、古和之。（略）按ずるに、鵰・鷲、大小の異有り、老少の謂に非ず　狀は鷹に似て、角鷹より大なり。腹背は皂青色、背は蒼黄、脛爪は黄、其の尾は白黒の斑文あり。禽經に、鷹は以て之を膺ち、鶻は以て之を猾ひ、隼は以て之を尹し、鵰は以て之を周し、鷲は以て之を就し、鵰は以て之を搏つ。皆其の異を言ふ也。

季題解説　猛禽類、はげわし（邦産中最大）・いぬわし・おほわし・をじろわしなどがある。はげわしは頭頸部の露出して居ることが、丁度禿頭同様である。いぬわしは羽毛が長く柳葉狀、黄赤色で光澤がある。をじろわしは尾羽が純白。おほわしは額、腰その他諸所に白色があり、體やゝ小。いづれも鋭い嘴と爪を有し、眼光鋭く、高峰、絶頂に棲息し、性猛悍、禽獸を捕へて喰ふ。日本にはさう澤山は棲息して居ないので、これを山野で見ることは尠い、普通には動物園などで見るのである。
場所によつて鷲の渡るのを見ることがある。

例句
鷲
磯鷲はかならず岩にとまりけり　石　鼎（ホトトギス）
大いなる古創顔にこれの鷲　誓　子（同　）
鷲の眼に檻もあらじな空青き　木　國（同　）
つながれて歩ける鷲のくさりかな　行　路（續ホトトギス）
ふと啼いてまじろぎもせず檻の鷲　一　大（同　）
雙翼ひろげたりける檻の鷲　草　笛（同　）

參考　いぬわし Aquila chrysaëtus chrysaëtos (LINNE) 本邦内では本州及び北海道に産し、アジア・北アフリカ・歐洲・北米に亙つて廣く分布する大なる鷲、翼長六十センチ以上に達し、雌は鷲鷹類の通性として雄よりも大である。頭上から後頸に向け、柳葉狀の長い黄赤色の羽毛を生じ、それ以下の背面は紫光を帶ぶる濃褐色である。
をじろわし Haliaëtus albicillus (LINNE) いぬわしよりも稍ゝ小、分布區域は更に廣く本州内では樺太から臺灣までに及んでゐるが、北米には産せず、歐亞大陸・北アフリカに見られる。體色概ね褐色を帶びてゐるが、尾羽が純白色である。
おほわし Thalassaëtus pelagicus (PALLAS) 東亞特産の鷲で、我國では樺太から琉球まで産する。大鷲と稱するも、前二種よりも稍ゝ小で、翼長約五十六センチ。尾の白きこと、をじろわしに似てゐるが、額・腰・

小中覆羽・脇などゝも白く、他は概ね灰褐色。

鷹

かしこどり　こゐどり　大鷹　隼　くま鷹　黄鷹　撫鷹　蒼鷹　はし鷹

古書校註

【山の井】かり場のていなど、都て、此の道の習に付きたる興どもあるべし。猶、鷹はうえてもほをつまぬ侍かたぎを感じ、賢こけれども鳥に笑はるゝたとへに、身をかへりみる心ばへなどすべし。

【御傘】鷹、大鷹がりは冬也。たか狩とばかりも、鷹とばかりも皆冬也。小鷹は秋也。小鷹とは、はい鷹・つみ・悦哉・くちさし・はこのり等をいふ也。皆秋也。朝鷹がりは春なり。

【滑稽雑談】時珍本草に曰、鷹以て膺撃す、故に之を鷹と謂ふ。其の頂に毛角有り、故に角鷹と曰ふ。其の性爽猛也、故に鶏鳩と曰ふ。祝鳩・鶻鳩・鵰鳩・鵃鳩・鶏鳩の五氏有り。蓋し鷹、鳩と同気禪化す。故に得て鳩と稱する也。鷹梵書に之を嘶那夜と謂ふ。遼海に出づる者上也。北地及び東北胡は之に次ぐ。北人多く雛を取り之を養ふ。南人八九月媒を以て之を取る。乃ち鳥の疏暴なる者、雉鷹・兎鷹有り。其の類也。（略）○和訓義解に云、たかとはたかくかけるの名下略也。○鷹書に云、傳受に云、雄を兄と云ひ、又大鷹とも云ふ。尾短き也。雌を弟と云ふ。尾長き也。諸の鷹の上品ははいたか也。中納言已上は弟也。大鷹は遣らざる也。○藻鹽草に云、（一）くち、鷹の總名也。なら柴鳥・こゐ鳥、是も異名也

【鵤鷹】顕昭袖中抄に云、鷹にかへると云ふ事をよむは毛のかはる也。とやかへりと云ふは、鳥屋にて毛のかはる也。山かへりと云ふは山にて毛のかはる也。されば黄鷹と書きてわか鷹とよむ。一歳の鷹也。撫鷹と書きてかたかへりとよむ。二歳也。鵤と書きてもかへるとよむ。一歳を經る也と云ふ　○綺語抄に云、鷹ことし取りてつぎの年の秋過ぎてかへるをかたかへりといふ。胸の符のよこざまになる也。つぎの年をばもろかへりと言ふ。ふのこまかなるを云ふなり。

【蒼鷹】鷹百首抄に云、三年をもろかへりと云ひ、四年より四鳥屋と云ふ。十・廿まで鳥屋と申す也。○鷹書に曰、とかへる、鳥屋にてかへるを云ふ。又七かへり・八かへりと云ふ事あれば、十度かへるをも云ふ。又鷹狩をとかりと云ふ。鷹屋をとやといへば、總じて鷹のかへるを、鳥かへるとも云ふ也。又何處ともなく外にてかへるを、鳥かへるとも、外かへる共云ふ。山にてかへるを山鵤と云ふ。又鳥屋かへるとは、三年目四年めより斑に成る。五六年かへれば初の古毛皆落盡したるを云ふ也。又四年をもろかたかへりと云ふ。其の後を鳥屋と云ふ。四年の秋より五年を一と鳥屋といふ。

小鷹狩(コタカガリ)・小鷹(コタカ)

例句　鷹

鷹ひとつ見つけて嬉し伊良古崎　芭蕉（笈日記）
青空や鷹の羽せゝる峯の松　鬼貫（鬼貫句選）
物云ふて拳の鷹をなぐさめつ　蕪村（落日庵句集）
鷹の眼や鳥によせ行袖がくれ　太祇（太祇句選）
はげしさや鳥もがれたる鷹の聲　同（同）
落し來る鷹にこぼるゝ松葉哉　白雄（白雄句集）
鷹組て鶴の毛散すみそら哉　曉臺（曉臺句集）
鷹來るや蝦夷を去事一百里　一茶（一茶句帖）
影ぼうも眠らぬ鷹の旅寝かな　梅室（梅室家集）
岩山や切れとを過る鷹の聲　同（同）
鷹の目に遠山松のうつりけり　素丸（推敲日記）
あら鷹もその鷹匠も頭巾哉　朱廸（ありそ海）
鷹部屋の窓より雪の白根哉　イ人（夜話狂）
はし鷹の拳はなれぬ嵐かな　子規（子規句集）
風垣の松に鷹來る山家かな　栖乙（懸葵）
碧空に鷹ひるがへる白さかな　岫雲（ホトトギス）
鷹來たる梢まがりの數木かな　岳居（同）
雲海や鷹のまひゐる嶺ひとつ　秋櫻子（同）
小さなる鷹とはつきり今は見ゆ　夜半（同）
倉かげに鷹を見舞うて上京す　戎人（同）
鷹の目の佇む人に向はざる　虚子（續ホトトギス）

參考　くまたか Spizaëtus nipalensis orientalis TEMMINCK & SCHLEGEL. 鷹と稱へるが、實は鷲の類である。喉・胸・腹・尾などに所謂鷹斑がある。額及び頭上は黒く、背面は暗褐色。翼長四十七センチ。北海道から九州・朝鮮まで分布する。

隼(はやぶさ)　鶻(こつ)　晨風(あさかぜ)

古書校註　【滑稽雜談】按ずるに、雀鷂(つみ)・兒鷂(コノリ)・海青(サンバ)、皆隼の類也。いづれも小鷹にて秋也。隼は總名にや。又一種隼の名を持ちて侍る。李嶠總論にも鷹・鶻・鷲の三種を辨ず。總名の説も據あり。小鷹の類何れも鶻の部也。順が和名に鶻をはやぶさと訓ず。昔より鷹・鶻の二種には、敎へて鳥を捕らしむ也。鷲の類は敎ふる事なし。諸鳥は雄大なり。鷹は雌大にして力量又强し。日本昔は鷹狩に小鳥及び雛に止まる。故に鷹の鳥とは雛に限る也。鶴・雁等の大鳥を捕る事近世に侍る故に、今俗に鷹の鳥とは鶴の事といへり。連俳

には雉を以て猶ほ用ふ可き歟。然し乍ら俳諧には當語をも捨つ可からざるか。已上師說也。〔參照〕鷹狩

【參考】はやぶさ Falco peregrinus calidus LATHAM. 北アフリカ・東歐及び亞細亞に分布し、我國では千島から臺灣まで產する。歐洲では主として本種を鷹狩に用ひた。本邦でも之を鷹狩用として飼育するが、本邦では、多く、おほたか Astur gentilis schvedowi MENZBIER. を用ひた。(夏之部、四一二頁參照) はやぶさは、額面及び頭部黑色、背面灰黑色、下面黃白色に黑斑を散布す。

鷹渡る（たかわたる）

【季題解說】晩秋から初冬にかけて薩南・沖繩あたりでは、多數の鷹一團となつて南方をさして渡り行くといふことである。〔參照〕鷹

【例句】

鷹渡る

珍らしき鷹わたらぬか對馬舟　其角（五元集）
渡りかけて鷹舞ふ阿波の鳴門かな　子規（子規句集）

【參考】鷹渡るとて古來有名なのは、さしば Butastur indicus (GMELIN) と稱する、最も普通な鷹の渡りを指したるものである。さしばは翼長約四十六センチの中形の鷹で、背面は褐色、額及び眉斑は白色、喉は白色、胸は褐色、これに赤褐并びに白色の斑を散布してゐる。東南シベリアから本邦へ渡來して蕃殖し、冬季には琉球・臺灣・印度等へ飛去す。その渡りの際には多數群飛し壯觀を極める。

暖め鳥（ぬくめどり）

【古書校註】【滑稽雜談】暖鳥と云ふは、鶻、寒夜に鳩を捕へて、をのが足を煖む。明くれば之を放つ、其の鳥の飛びさる方をよく見て、其の方へ行きて其の日は鳥を捕らず、又、其の方へ向はざる也。

【季題解說】隼の雄を鶻といふ。此鶻が冬の夜、鳩や小鳥の類をとつた時分に、其れで足を暖ため、翌朝それを放つことがある。之を暖め鳥といふのである。〔參照〕隼

【例句】

暖め鳥

人はしらじ實に此道のぬくめ鳥　惟然（惟然坊句集）
又逢はぬ別をいかにぬくめ鳥　也有（蘿葉集）
ある時は一はい鷲やぬくめ鳥　蓼太（蓼太句集）
爪たてぬ心もあはれぬくめ鳥　同（同）
右になし左りにすらんぬくめ鳥　白雄（白雄句集）
暖め鳥同士が何か囁すぞよ　一茶（七番日記）

暖め鳥　やゝあつて鷹の立けり煖鳥　　平居（文車）

鶴渡る（つるわたる）

季題解說　渡鶴（わたりづる）　鶴來る（つるきたる）　鶴の使（つるのつかひ）　初鶴（はつづる）

鶴が最も多くやつて來るのは十一月である。多く快晴の日、朝鮮元山附近では、眞鶴・鍋鶴・丹頂などの群がいつも千米內外の高さを通るのを見るであらう。

內地でも昔は隨分來たもののやうであるが、今日では殆ど見られなくなつてしまつた。たゞ鹿兒島縣と山口縣は有名で、今でも大群の渡り鶴を見ることが珍らしくない。山口縣熊毛郡八代村には每年約三百羽の鶴が渡來するが、同村では特に野鶴保護會といふものがあつて、田圃の中などに「つるの爲に」と書いた白杭が保護函を附けて立てられてゐるのを見かける。昭和七年には十月二十三日、同八年には二十六日にその先發隊が現はれたが、同地方では渡來の時期によつてその年の寒暖を占ふといふ。〔參照〕霜の鶴　凍鶴

例句

鶴渡る　遠眼鏡はづして鶴を仰ぎけり　　潮鳴（昭和八）

霜の鶴（しものつる）　霜夜の鶴（しもよのつる）

古書校註　【栞草】［八重垣］鶴は霜に苦しむもの也。よつて、霜夜の鶴とも、霜の鶴ともいふ。

季題解說　霜降る夜の鶴のことである。鶴は殊に霜の寒さに苦む鳥であるといふところからこの季題がある。〔參照〕鶴渡る　凍鶴

例句

霜の鶴　霜の鶴土にふとん被されず　　其角（五元集）

丹頂の頭巾似あはむ霜の鶴　　几董（井華集）

凍鶴（いてづる）

季題解說　例へば動物園の檻の中とか邸園などに飼はれてゐる鶴の冬の姿

を見ると、まことに天地と共にその満身の身も凍ててしまつたやうに、長い脚を枯れた草莖のやうに突立てゝ、頸を曲げて丹頂を翼ふかく差しこみ、身じろぎもせずに眠つてゐることが多く、たまたま何かの音におどろいて首をたてて二三歩給ひ歩きをすることがあつても、又元の寂然とした姿に還るのである。かうした鶴を凍鶴と稱へる。〔参照〕鶴渡る（秋） 霜の鶴(シモノツル)

例句

凍鶴　さえ／＼て鶴の足干る嵐かな　沾徳（俳諧五子稿）
凍鶴が羽ひろげたるめでたさよ　青畝（ホトトギス）
凍鶴のふたゝび閉ぢし瞼かな　静雲（同）
また一人来て凍鶴の前に立つ　禪寺洞（同）
凍鶴のやゝ汚れたる白さかな　虹谷（同）
凍鶴や朝の糞を落したる　蓉雨（續ホトトギス）
ながれゆく鷺あり鶴は凍てにけり　秋櫻子（同）
凍鶴のそばに降りたる雀かな　仰子（同）
目をあきて凍鶴脚を下しけり　一水（同）

冬の雁(ふゆのかり)　寒雁(かんがん)

季題解説 秋分に塞北から渡つて来る雁は、冬の間を沼や池にそのさびしい姿を浮べてをり、時折害を避けて處を移して、春再び塞北に歸るまでの生活を營んでゐる。即ち「冬の雁」であつて、冬枯の天地にあつて亦蕭條とした存在である。〔参照〕秋―雁

例句

冬の雁　渡津海に捲き下す雨や冬の雁　白貧（ホトトギス）
提灯に冬雁居ると見し田かな　秋灯（同）

梟(ふくろふ)　ふくろ　さけ　母食鳥(はゝくひどり)　しまふくろふ

古書校註 【三才圖會】按ずるに、鵂(こつかう)、形も態も皆木菟に似たり。但毛角無きのみ。雖木菟より大く、鵂より小くして、尾短く、頭目木菟の如くにして全體褐黒色、褐斑或は白斑有り。（略）亦木菟の如く晝伏し夜出でて小鳥を摯り食ふ。啼く聲木菟に似て長し。ほいほいと曰ふが如し。

季題解説 「ふくろふ」本州中部の方に多く棲む種類であるが南の方に棲むに隨つて羽の色が淡色となるのが例である。「しまふくろふ」北海道樺太に多く棲む。木菟のやうに頭に立毛がある。（俗に耳といふ）。

きは則ち毛角竪起すること一寸許りなり、(略)爪勾つて利く、其の喙下は短く上は長く、勾りて黑し。遠く飛ぶこと能はず、夜出でて小鳥を摯る。吹く聲梟に似て短く、連聲ほいほいと曰ふが如し。

【栞草】 貞享式古抄は秋の部に入れたれど、渡鳥にもあらず色鳥にもあらず、まして鳴聲の物凄きは寒さを厭へるゆゑにとや。決して冬と定むべし。

季題解説

「このはづく」 滿洲・北海道・本州から臺灣に亙つて棲息する。梟類中で最小のものである。

一おほこのはづく一 各地に産するも伊豆七島のものは同種類であるが、形が内地のものより小さい。

「あをばづく」 中形で本州以南の各地に棲み冬季に南洋諸島に渡る。東京地方で夏の夜啼くのはこの種類が多いのである。

「とらふづく」 中形で各地に棲み他のものと異つて晝間も活動する特徴がある。

木菟は梟同屬のものであるが、俗間、梟よりも小さく頭上に耳(立毛)あるものをいひなしてゐる。梟と同じく、夜啼いて友を呼び、活動して小鳥の巣を襲ひ、之等を捕食し多くは晝小暗き森林にひそみ、活動出來ぬことと梟と同じである。〔圖〕梟の秋 木菟引

例句

木菟

みゝづくの頭巾は人に縫せけり　其角(五元集)
みゝづくやうき耳ありと山の奥　也有(蘿葉集)
木菟なくや人の人とる家ありと　一茶(旅日記)
木菟の目たゝきしげき落葉哉　乙由(麦林集)
木菟の眼をあいて居る眞晝かな　碧玲瓏(新俳句)
木菟やほうと追はれて逃げにけり　鬼城(ホトトギス)
懸けられて囮の木菟のほうけけり　青畝(同)
うつ〳〵と木菟の瞼の二重かな　烏頭子(同)
みゝづくの食はざるものが嘴に　盆城(續ホトトギス)

參考

あをばづく Ninox scutulata scutulata (RAFFLES) 氣候溫暖なる時期には、東南シベリア・我國の本州以南・支那等に棲み、冬季には南洋諸島に渡る、中形の木菟。東京附近で夏季「ホーホー、ホーホー」と二聲續けて夜間鳴くのは大抵この種である。體は概ね黑く、下面は地色白く、褐色の縦斑が走する。

このはづく Otus sunia japonicus TEMMINCK & SCHLEGEL. 沖繩から北海道まで、最も普通に産する木菟。又、滿洲・東南シベリア等にも分

布する。翼長約十五センチに過ぎぬ甚だ小い種類で、體は概ね灰色で、黄褐色の羽毛を混じ、尙、「蟲食ひ」樣の褐色斑が多數にある。

おほこのはづく（Otus bakkamoena semitorques TEMMINCK & SCHLEGEL.）翼長十九センチに達し、色彩は前種に類してゐるが、遙にこれより大なので容易に識別される。本邦内の分布は亦前種に同じ。

とらふづく Asio otus otus (LINNÉ) 晝間に於ても、屢こその姿をあらはす木菟。千島から沖繩まで廣く産し、北歐・アジア・アフリカにも分布す。所謂耳と稱せられる羽毛甚だ長く、顏部は判然と他と輪狀羽毛で區別され、腹面には顯著な黑褐色の縱斑がある。

冬の鶯（ふゆのうぐひす）

鶯の子（うぐひすのこ）　笹子（さゝこ）

【季題解說】春暖盛に囀つて友を呼び合つた鶯は晩春から夏に亙つて蕃殖し、その後大部分は換羽期（とやに入る）に入つて、之を動機として「ホーホケキヨウ」の啼聲は忘れたかのやうに囀らなくなるのである。之等は蕃殖した子鶯と共に多く深山に棲んでゐて、軈て冬期になると餌を求めて里近くに現れて隨所に棲むのである。

彼等は主に昆蟲類を啄んで生育するので、この頃になると藪の間とか枯蘆の中とか或は樹間にあつてチヽチヽといふ聲を出して啼いてゐる。こゝでいふ鶯の子とは、冬期啼聲が春暖の候のやうな完全なものでなく、宛も啼き習ひつゝあるものとして子といふ見解をなしたもので、必ずしもその年に生れた子ばかりといふのではないのである。ささ鳴は春季のやうに完全な鳴き聲ではなくチヽと鳴くのをいふ。ささ子は前記の鶯の子と同意である。

【參照】笹鳴（冬）、春（鶯）

【例句】

冬　鶯

うぐひすや何ごそつかす藪の霜　　蕪　村（から檜葉）

冬鶯むかし王維が垣根哉　　同　（同　　）

光悦寺冬鶯が鳴きにけり　　軒　市（同　人）

さゝ鳴（なき）

鶯（うぐひす）の子（こ）鳴（な）く

【古書校註】

【滑稽雜談】近世俳書に、鶯の子鳴くと（二）當月の部に入れたるは、此の鳥春さかり、夏雛を生ず。雛生れて聲有りといへども、其の音律未だ調はず、此の月に至りて能く聲調ふ。其の時親鳥の能く鳴く者をして生餌を與へこ春月の聲を此の時に出さしめ、其の傍に雛を置きて鳴き習はしむる也。雛の聲調ふる時にをしへざれば、春に至りては教ふれども移らず。是を鳥を付くるとも押すとも云ふ。親鳥を押親と云ふ。習ふ子を付子と云ふ。若しよろしき親なければ、笛にてならはしむるを笛付といふ也。飼鳥を鬻ぐ

者、其の押親のよきを飼ひ、其の前で付子を取るに、千金を得て、又其の親鳥を求むるものあれば、萬金を以て之に代ふ。

【俳諧古今抄】此名は古抄より啼の字を結びて冬となせれども、鶯の子とは名目も長ければ、啼の字なくとも冬と定むべし。彼は冬至の頃より鳴習ふ故に、其の子に冬の用あればなり。まして鶯の笹鳴と云へば、子の字にも及ぶまじきなり。

【栞草】青藍云、俳諧歳時記に、冬日鶯藪の中に鳴く、これをさゝ鳴といふと云々。この説おだやかならず。愚按ずるに、さゝは少しの義、鶯の子の鳴きならひをいふなるべし。

季題解説

註（一）十月

一説 冬の鶯 春 鶯 夏 鶯の附子 鶯音を入る

例句

さゝ鳴

鶯の子は子なりけり三右衛門　其角（五元集拾遺）
笹鳴も手持ぶさたの垣根哉　一茶（七番日記）
鶯や黄色な聲で親をよぶ　同（發句題叢）
笹鳴や閑かにあれば餌する　苔水（同人）
笹鳴や入唐僧の三字額　是山（同）
笹鳴に耳そらし鐵漿つける　かな女（ホトトギス）
笹鳴いて今日は病もこゝろよし　天山（同）
笹鳴やとかけしたまふ矢大臣　青畝（同）
笹鳴の人なつかしや忌がゝり　同（同）
笹鳴や山道にして莊の道　たけし（同）
笹鳴や平群の山は疊なはり　誓子（同）
笹鳴や籬にかゝりし青蘚　布山（同）
笹鳴や山影かぶる二條院　池冷（同）
笹鳴や藪の中行く紙屋川　如淵（同）
笹鳴や萩の枯枝わたりつゝ　富久子（同）
笹鳴やからくれなゐの椿かけ　醉雄（同）
笹鳴にのぶる朝寢のうなじかな　烏頭子（續ホトトギス）
笹鳴や昨日東京けふ吾が家　みつほ（同）
縱横に笹あり笹鳴ける　雨蛙（同）
門ありて又石段や笹鳴す　虚子（句集虚子）
石垣の上の竹垣笹子啼く　同（ホトトギス）
笹鳴や小家許りや雜司ケ谷　同（續ホトトギス）

寒鴉（かんがらす）

季題解説 寒中の鴉をいふ。鴉は人間近い森林などの樹上に棲み、耕作物等に害をなす事も相當大きいが、雀と同じく古來最も人類に親しまれてゐる

鳥である。朝、森林を群飛して出でて四散し、餌を養め、夕に歸るときまた四方から集り來つて群がり歸る習癖がある。
冬期は食物が乏しくなるので、或は墓地の供物を盜み或ははきだめを漁るなどいよ〳〵人に近づいて來る。殊に雪國などでは、雪の爲めに地が全く覆はれるやうになるといよ〳〵食物に窮し、暮色の藁塚の上などであちこち鳴いてをる有樣は哀れをさそふ。なほ寒鴉は寒中しば〳〵河沼の水を浴びてゐるのを見掛けることがある。[參照] 夏—烏の子(カラスノコ)

[例句]

寒鴉

葉は〳〵と冬の梢をなく鴉　也有（蘿葉集）
しもを燒筋に寒鴉の聲くらし　曉臺（曉臺句集）
鳥居より小石落すや寒鳥　杉路（同人）
寒鴉しきりに雪を落しけり　としを（ホトトギス）
乞食の餅見惚れけり寒鴉　月尚（同）
積藁や戰ひ飽きし寒鴉　鬼城（同）
のめりゆく弔旗や寒鴉　和香女（同）
大風の森の中より寒鴉　石鼎（同）
潮かぶる石垣ありく寒鴉　舟居（續ホトトギス）
よこたはる鯨の背の寒鴉　雅光（同）
藻にほのかげよりかげへ寒鴉　越央子（同）
白き息吐きて啼きけり寒鴉　十七星（同）

寒雀(かんすゞめ)

[季題解說] 寒中の雀をいふ。雀は人家近くに棲み最も我々に親しみの多い小鳥であるが、穀類を食害する爲めに農家では厄介視する傾向がある。體は褐色で黑褐の斑があり、殊に顏の黑斑が目立つ。大して美しい小鳥ではないが、どことなく愛嬌があつて子供などにも好感をもたれて居る。庭園等にあつては相當害蟲驅除の功をもする。
嚴寒の候になると、食物が乏しく自然ますます人家の軒近くやつてきて、こぼした米や人の捨てたものを拾つて一日中姦しく鳴き立てる。木々の落葉しつくした隱蔽物の少ない天地に朗かに、鳴き遊ぶ動作は大へん親しい感情を湧かしめるものである。冬晴の朝など、日のさしわたる障子の外に晴れ晴れしい聲をきくのは惡くない。
また寒中の雀は美味であつて藥用となるとて、或は空氣銃で擊たれ、囮じかけや擂き餌や小鳥網などで捕獲されて串にさして、燒かれて食はれて哀れをとゞめるものもある。[參照] 秋—稻雀(イナスズメ)

[例句]

寒雀

朝茶のむうちは居よかし冬雀　乙二（をのゝえ草稿）
寒雀盥落しを覗きけり　梧月（春夏秋冬）

生ゝ米を啄む米搗きや寒雀　飛雨（同　人）
寒雀猫にとられてまろ〳〵と　禪寺洞（ホトトギス）
土塊を啄み吐きぬ寒雀　濱人（同）
祇王寺や留守の干菜に寒雀　紅春（同）
雪天の暮るゝゆとりや寒雀　泊雲（同）
寒雀三羽が三羽くしけづる　俳小星（續ホトトギス）
住吉の高燈籠の寒雀　木國（同）
米桶をのぞきてゐるや寒雀　とき子（同）
寒雀大佛殿を栖ひなる　誓子（京鹿子）
寒雀竹動かして集まれり　温亭（温亭句集）

鶲（ひたき）　火焚鳥（ひたきどり）

古書校註

【栞草】和漢三才圖會　大さ雀の如し。頭黑く白き彪あり、俗、霜降といふ。頷・頬正黑、背・翮灰赤にて黑き彪あり。翅の上に白き羽・黑き羽ありて層々たり。脊・脚蒼黑、其の聲清亮にして多く囀る。又、黄鶲あり。貞享式古抄には、渡鳥の部に入れたれど、其の名もその聲も、朝霜の氣色といひ、秋には小鳥も多ければ、冬の部に踰ぎて、此の名も加減といふべきなり。

季題解説

鶲は大の色鳥、頭は黑色で小さく嘴は細い。胸は黯赤色、背は漆黑色で尾に近いあたりに二個の白い斑點が並んでゐる。故に一名「紋付き」と言はれる。カツカツと小石を撃ち合せるやうな音で鳴く、鳴きつゝ常に尾を振る、然し百舌のやうに尾だけを振るのではなくて同時に身體を前後に搖る。動作敏捷で去來慌しいが、人懐つこい鳥で、人家の庭などによく現れる。瑠璃鶲・野鶲などの種類があり、最も普通なのは常鶲である。秋とする説もあるが、冬の感じの鳥であらう。〔季題〕秋・鶲ヶ

例句

鶲
枯籬に赤き鶲の又來たる　墨石（ホトトギス）
枯葎搖がせゐるは鶲かな　朝帆（同）
鶲來し櫨の葉はなし一枚も　呑風（續ホトトギス）
やゝありて別の鶲の來りけり　一馬（同）

[illegible]

きびたき Zanthopygia narcissina narcissina TEMMINCK. ひたき科。樺太から沖繩まで分布し、繁殖する。冬季には更に南方へ移動す。胸部は鮮明な黄色を呈してゐる。雄は頭上から背まで黑色、下背は黄色、翼は黑褐色、中央に白斑がある。尾は黑く、下面は橙黄色。雌は一面深綠色を帶びたる褐色、腰は綠、翼と尾とは褐色、下面は黄色。咽喉も赤黄たる[illegible]である。
じやうびたき Phoenicurus auroreus (PALLAS) つぐみ科　本邦内に廣

く分布し、中部以北に於て蕃殖す。頭上より背の上半まで灰色、下半は黒色、翼黒く顯著なる白斑があるので「もんつきどり」と云ひ、人を恐れずして、近つき易いので「ばかびたき」とも俗稱される。

ごみかぶり

【季題解説】鳥の名　冬季、美濃地方に極めて稀に姿を現はすといふ。渡り鳥ではないらしい。體は鶉に似て太く、鶯色で、くくく、くくくと鳴く。三足か四足歩いては地を搔き自身の體へ落葉などをふりかける特性がある。別名はないらしい。

連雀（れんじやく）　黄連雀（きれんじやく）　緋連雀（ひれんじやく）　ほやどり

【季題解説】渡り鳥の一種、鶉よりやゝ小さく鵯よりやや大きい。頭の上に長い著しい羽冠を載いてをり、嘴は側扁して居る。體色は葡萄褐色で翼と尾羽は黒色。黄連雀と緋連雀の二種あるが、尾の尖端が黄色なのが前者で、洋紅色なのが後者である。形は黄連雀の方がやゝ大きい。また黄連雀は世界のどこにも分布されてをるが日本にはあまりゐない。緋連雀はシベリヤの東南端にのみ蕃殖し、冬期群をなして我國に渡來する。東北地方では寄生樹（ヤドリギ）にその實を食ふ爲めに群來する故に、ほやどりと稱せられる。ほやは寄生木の方言である。

【例句】
連雀　緋連雀一齊に立つてもれもなし　青畝（ホトトギス）

鷦鷯（みそさざい）　三十三才（みそさざい）　せうれう　冑蝶（かぶとてふ）　巧婦鳥（たくみどり）

【古書校註】【栞草】桃蟲・巧雀・女匠・襪雀・巧女・巧婦・桃雀、等の諸名あり。○時珍曰、狀ち黃雀に似て小也。灰色にして斑あり。聲吹嘘（キヤウ）が如し。喙利く錐のごとし。茅・葦・毛蟲を取りて巣を爲る。大さ雞卵の如くして、これを繋ぐに麻髮を以てし、至て精密をなす。樹上に掛く或は一房二房。故に莊子に云、林に巣くうて一枝に過ぎず。【貞享式】古抄には秋にして、渡り鳥の部に入れたれど、山雀・日雀の類にあらで、斥鷃のみ物に連立たず。民家の軒に馴れて、馬防を傳ひ水欄にあそび、聲の清みたるは殊更に寒し。春歸る姿もみえねば、決して冬とさだむべし。

季題解説 形、雀に似てそれよりも小く、尖つた嘴と上へピンとはねた尾をもつて居る。暗褐色の地に細かい黑斑がある。四時我國に居つて、三季は主に山中の陰濕な低地の叢中に生活し、小形の昆蟲や蜘蛛を捕へて食ふ。冬、落葉の頃人里近く現れる。生垣や植込の間をくゞりなどして敏捷にとび廻り、澄み徹つた冴えた聲でよく囀る。

前述の如く羽色はさまで華美ではないから敢て美しくはないが、擧動の輕快と囀聲の美とを以て飼鳥にもされる。

例句

鷦鷯

雪かこひするやいなやにみそさゞい　浪化（浪化上人發句集）
鶯に啼て見せけりみそさゞゐ　許六（五老井發句集）
足ばやに竹の林やみそさゞゐ　惟然（惟然坊句集）
晩方の聲や碎るみそさゞゐ　同（同）
花にとは願はず雪のみそさゞゐ　千代女（千代尼發句集）
散た木へもどる一葉やみそさゞゐ　也有（蘿葉集）
田樂のきのふの窓や鷦鷯　同（同）
木守の柚に來て啼やみそさゞゐ　同（同）
夕暮の篠のそよぎやみそさゞゐ　蓼太（蓼太句集）
見ぬふりに物捨はせん鷦鷯　同（同）
跡先に雀飛けりみそさゞゐ　白雄（白雄句集）
壁ぐろや鼠行あふみそさゞゐ　曉臺（曉臺句集）
松竹におもひもいれずみそさゞい　成美（成美家集）
さうとんで桥にあたるなみそさゞい　同（七番日記）
おつとよし皆迄鳴なみそさゞい　同（同）
みそさゞい身を知る雨が降りにけり　同（同）
きよろきよろきよろきよろ何をみそさゞい　同（同）
糞土より梅へ飛んだり斤鶺　一茶（一茶句帖）
みそさゞゐきよろきよろ何ぞ落したか　同（同）
今しがた來たよ小しやくなみそさゞい　同（同）
こつそりとしてかせぐなりみそさゞい　同（同）
雀等と仲間入せよみそさゞい　同（同）
うす壁や鼠穴よりみそさゞい　同（同）
斤鷯ちゝというても日が暮る　同（發句題叢）
湖の明ぼの覗けみそさゞゐ　乙二（をのゝえ草稿）
師走菜も覆む住居ぞみそさゞゐ　同（同）
蔓づたひ屋根へ行けりみそさゞゐ　蒼虬（蒼虬翁發句集）
結構な日は何處に居て斤鷯　同（同）
雪花をまぶたにつけてみそさゞい　梅室（梅室家集）
[illegible]も小月夜になりぬみそさゞい　同（同）

鷦鷯

鷦鷯家はときるゝはだれ雪　如行（小文庫）
・凩凪て干菜に音や鷦鷯　牛歩（月影塚）
柴おろす棚から立や鷦鷯　吟江（推蔵日記）
味噌桶のうしろからどこへ鷦鷯　子規（子規句集）

草卷

菜屑など散らかしておけば鷦鷯　同（同）
裏庭の池に水無しみそさゞい　一五坊（春夏秋冬）
鷦鷯槇の實高きより落つる　鳥不關（懸葵）
石あれば石にまぎれつ三十三才　朝輝（同人）
鷄を恐れて遠し三十三才　喜舟（ホトトギス）
葎より葎へ入りぬ三十三才　巴潮（同）
消炭をころがし去りし三十三才　春生（同）
鷦鷯吹きわかれたる廣葉より　素十（同）
鷦鷯平家の墓にまたゐたり　筵路（同）
つくばへる人をおそれぬ三十三才　みづほ（續ホトトギス）
庭にこぼす十能の火や鷦鷯　虚子（句集虚子）

参考　みそさざい　Troglodytes troglodytes fumigara TEMMINCK.

みそさざい科。尾甚だ短く、翼も短小、五センチに過ぎぬ。常に尾端を上方に曲げてゐるので、全體が曲玉狀に見える。體は概ね濃褐色。叢中の蟲を好んで食ふ。我國に廣く分布す。

寒苦鳥（かんくてう）

寒號鳥（かんがうてう）　雪山（せつざん）の鳥（とり）

古書校註

【滑稽雜談】　禮記月令に曰、仲冬鶡旦鳴かず。註、鶡旦は夜鳴いて旦を求むるの鳥也。○時珍本草に曰、寒號蟲は一名鶡鴠、詩に盍旦に作る。○玉篇に云、鴠雖。○說文、鶡鴠に作る。皆義に隨ひて名を借るのみ。（略）○郭璞が曰、鶡鴠は夜鳴いて旦を求むるの鳥也。夏月裸體、晝夜鳴叫す、故に寒號と曰ふ。（略）順和名に曰、四聲字苑に云、鸀鳿。獨春の二音、漢語抄に云、獨春鳥。佐夜豆木止里（サヤツ）。鳥、黃色、聲春者の相杵に似たる也。○今按ずるに、和名に云ふ所此の者也。俗に云ふ寒號蟲を誤りて寒苦鳥と云ふならし。この鳥、夜鳴いて旦にいたる。其の聲、舂杵の音に似たり。此の鳥夜分なるべし。心得可き也。○玉葉、朝な〳〵雪の深山に鳴く鳥の聲におどろく人のなきかな　後京極。

【采草】　五雜組　五臺山に蟲あり。狀ち小雞の如くにして四足、肉の翅あり。夏月毛羽五色、其の鳴くこと鳳凰我にしかずといふがごとし。冬に至り、毛落ちて鳥の雛のごとし。寒を忍びて號く、「得過且過といふ。其の糞、鐵の如く、狀ち凝れる脂のごとし。恆に一處に集る。醫家これを五靈脂といふ是也。佛經　印度大雪山に鳥あり。此の鳥、夜寒を苦みて鳴く聲、「寒

苦身を責む、夜明くれば巢を作らん」、明けてはまた「今日死することをしらず、亦明日をしらず。何が故に巢を造りて、無常身を安穩にせざる。」

季題解說 寒苦鳥とは學術語ではなく經文中に讀み込まれてある名である。「謌林拾葉集」「續々群書類從連集良材」等に記載されてゐる經文から綜案して見るに——、

雪山に鳥あり穴を掘つて夜穴に入る。此鳥裸にして羽毛なく、苦、餘鳥に勝る、故に寒苦鳥の名あり。

此鳥穴に入り終夜寒苦を憂ひ寒苦我を責む、夜明くれば巢を作らんと鳴く、晝になれば夜の寒さを忘れ、今日不知死、明日不知死、何故造作栖、安穩無常身、となく。

要するに「今日や死なん、明日や死なん、知らぬ身の何故に栖をつくつて無常の身を安穩にせんや」と鳴くといふ經文の意である。

寒苦鳥の聲は鐵のやうに、又凝脂のやうに、一處に集まつてゐて之れは漢藥で「五靈脂」といふさうである。

例句

寒苦鳥

寒苦鳥明日餌つかふとぞ鳴けり　其角（五元集拾遺）

かんこ鳥は賢にして賤し寒苦鳥　蕪村（蕪村句集）

雉入大水爲蜃（きじたいすゐにいつておほはまぐりとなる）

古書校註

【滑稽雜談】 素問の註に云、立冬の節、初め五日水始めて氷る。次の六日地始めて凍る。後五日雉(一)大水に入つて蜃と爲る。禮記月令に曰、孟冬の月、雉大水に入つて蜃と爲る。(略)(二)大和本草に曰、(略)月令雉の化せる蜃は大蛤也、古書を多く考ふるに、此の說を是とすべし。合璧事類等に、大蛤一名蜃、能く氣を吐き樓臺を爲すの說(三)非也。

注 (一)海 (二)非なりとするは却つて誤で、支那で蜃市を蜃樓(蜃氣樓)となすは傳說なのであるから、傳說として文字通りに認めて置く外ない譯である。

鵲始巢（かささぎはじめてすくふ）

古書校註

【年浪草】 月令廣義に曰、鵲の巢、今驗するに、鵲巢を爲るは、或は仲冬、或は季冬、或は孟春、始めて巢を爲る。古と多く應ぜず。(一)禮月令に曰、鵲始めて巢くふ。此は丑の月の候を記す。丑の月は十二月也。(略)(二)一說に曰、十二月始めて巢くふ。戸を開くこと、太歳に背きて太乙に向ふ。來歳風多きを知れば、巢必ず卑下す。故に曰、鵲は來るを知り、猩々は往くを知る。又云、鵲、巢を隱す木有り。鵲の如くにして鷙鳥をして見ざらしむ。人若し之を見るときは、富貴を主る也。

季題解說　鵲はたうがらす・こうせんがらす・かうらいがらす・ちくごがらす・かちがらすなど異名が多い。朝鮮・滿洲・支那・シベリアなどにはどこにも見受けられるが、我本土では佐賀縣・福岡縣に見るのみである。この地方に住むものは秀吉朝鮮征伐の時朝鮮からもつて來たもので、かちがらすの俗稱が生れたとのことである。

鴉より形やゝ小さくほゞ橿鳥の大きさで、尾羽長く背面は黑色で綠色又は紫色の光澤があり、肩・腰・股は白い。鳴く聲は鴉に似て低い。

鵲は陰曆十二月頃にはじめて巢を營み、佐賀・福岡地方では、椋・槐其他の落葉樹にかける。枯枝の類を以て樹上に作り、草の根、芝などみまとひ、泥土を塗り、甚だ巧みである。冬落葉しつくした枝梢にこれを見ることはまことに蕭殺たる感が深い。なほ佐賀縣地方では此鳥が庭や門前の木に巢を營むときは其家に不幸があるといつて忌む風習がある。〔參照〕秋　鵲

例句

鵲始巢

かささぎの巢をこそはこべ老の道　乙二（をのゝえ草稿）

雀の陪堂（すゞめのほいと）

季題解說　紀伊國高野山で、冬季の間、雀のために時鳥が養はれるといふ傳說がある　秋暖國へ歸り遲れた時鳥が、靈山高野山中に迷ひ入り、寒氣の爲めに樹洞の中などにとぢこもつて食餌を得ることも出來ずにゐるのを、數多の雀が集つてこれに餌を與へて、來る年の夏まで養ふのを雀の陪堂といふ。ほいとは乞食の義で、雀のための食客といふ意味である。事寶ほととぎすの中には秋南歸せずして日本で越年するものがをり、高野山にこれが相當ゐるといふことをものの本で讀んだことがある。果して然りとすればこの季題も荒唐無稽なものと一笑し去るわけには行かないであらう。

鷄初乳（にはとりはじめてつるむ）

鷄交む（とりつるむ）

古書校註　〔滑稽雜談〕禮月令に云、季冬の月、雞乳（ツルミ）す。（略）○按ずるに、鷄のつるむは四時に侍る也。季冬に始めて交ると也。鷄は陽物なれば、時を感じ利きより云ふにや。

狩場の雉（かりばのきじ）

鷹の鳥（たかのとり）

古書校註　〔滑稽雜談〕禮月令に曰、季冬の月、雉雊（ナ）く。○說文に曰、雊は雄雉の鳴く也。雷始めて動き、雉鳴きて其の頭を雊く。○按ずるに、連俳の書に云ふ狩場の雉は冬也。聲音を繕へば春也。然れば今又（一）小寒第三の候たれども、俳連には雉の鳴くは春也。說文の義によく合へり。作者考ふ可し。

註（一）小寒三候の中、後の五日雉雊く（素問註）といふを指す。

水鳥（みづとり） 浮寝鳥（うきねとり）

【古書校註】

【山之井】水鳥は、つらゝの枕にねぶり、玉もの床に羽をしき、波の鼓に音をそへ、水まりに嘴かくるけしき、又、名にしあふ賀茂川の鴨、にほの海なる鳰鳥をながめ、（一）えんわうのふすまに妻をこひ、（二）うはげの霜につるぎ羽をみがく心ばへなどすべし。

【御傘】都鳥を冬也と無言抄にあり。此の抄は高野木食興山上人、紹巴に問ひてせられしゆゑに、指合の奥儀を極めたまはず、水鳥なれば冬と思はれたりと見えたり。冬になる水鳥・ならぬ水鳥、差別するは子細ある事也。かもめ・鵆・都鳥・鳰などは雑也。大事の師説ある故、愛にしるさず。

【滑稽雑談】師説に云、四季おの〳〵季を持てど、雑になる鳥類は水鳥に限らずある也。心を付けて覺悟すべし。或(アル人)問うて云、冬部水鳥と云ひて季に許用す。都鳥・鷗・鳰（連歌新式、都鳥冬也）など名をさしても雑也と云ふ。水鳥と許りは無名に云ひて卻つて季を持つ事いかゞ。答へて云、此の理を以て、季を持つと雑になるとの堺を覺悟する一助とすべし。例していはゞ、諸木の類、春は木の芽、夏は茂り、秋は紅葉、冬は落葉と無名にして云ふ時に、四季各別に季あり。其の諸木の中に一木の名を呼べば雑になる者有り、總名にては季を持つ也。水鳥と總名にて季を持つも又此の理也。一切の物常住不變は四季に關せざる故、雑也。往來出沒して、生住異滅の者は季有り。猶口傳、又愛に註せず、傳受たるべし

【御傘】「浮寝鳥」うきねの鳥、冬也。水鳥の事也。水鳥は昔も波の上によくぬる物也。故に夜分にあらず。惣別、鳥のぬるは夜分にあらずと無言抄に侍れ共、それはいはれず。新式目にも夜分にあらざる物の内に、うきねの鳥とばかり出したるにて、餘の鳥のぬるは夜分としるべし。

註（一）[illegible]中にある。（二）羽のうへの霜うちはらふ友をなみ鴛の獨寝するぞわびしき（古今六帖）

【季題解説】浮寝鳥とも稱せられるが、冬の水上に游泳して、餌を漁つたり或は翼に首を埋めて眠つたりしてゐる鳥を總稱したものである。鴨・鳰・鴛鴦などが主なものである。水輪を残して水中深く潜つて遠く浮び出たり、二三羽が長い水尾を曳いて靜かに泳いでゐたり、波のまにまに眠つた姿を浮べてゐるなど、いろいろ興深い姿態を見せてくれるのである。〔三冬〕
夏→水鳥の巣・水鳥の子

【例句】

[illegible]

水鳥のおもたく見えて浮にけり　鬼貫（鬼貫句選）
水鳥やむかふの岸へつういつい　惟然（惟然坊句集）
水さつと鳥にふわふわふうはふうは　同（同）
水鳥や枯木の中に駕二挺　蕪村（蕪村句集）

水鳥

水鳥や舟に菜を洗ふ女有　蕪村（蕪村句集）
水鳥や百姓ながら弓矢取　同（同）
水鳥を吹あつめたり山おろし　同（新五子稿）
水鳥や朝飯早き小家がち　同（同）
かぜ一陣水鳥白く見ゆるかな　同（同）
水鳥の居所替る礫かな　同（同）
水鳥や提灯遠き西の京　同（新選）
水鳥やてうちんひとつ城を出る　同（蕪村遺稿）
水鳥や巨椋の舟に木綿うり　同（同）
水鳥や夕日江に入る垣のひま　同（同）
水鳥に唐輪（カラワ）の兒の餌蒔哉　召波（春泥發句集）
水とりや心の闇の流し鶵　同（同）
水鳥やかねて郷士の弩撰び　同（同）
浮鳥を石とあやまる水遠し　同（同）
水鳥や墓所の火遠く江にうつる　几董（井華集）
水鳥やさすがに雨をうちそむき　曉臺（曉臺句集）
水鳥の巴になりて狂ひけり　同（同）
水鳥の立行程や淀の松　同（同）
曉の山を越え來てうきね鳥　同（同）
雨も降風も吹瀨のうきねとり　同（同）
水鳥や何はなくとも夕ながめ　闌更（半化坊發句集）
浮寐鳥岩に身をうつ夜もあらん　同（同）
月澄や音なき水に浮寐鳥　同（同）
越後からふたつ連てや浮寐鴨　巣兆（曾波可理）
水鳥のどちへも行ず暮にけり　一茶（享和句帖）
君が世のとつぱづれなり浮寢鳥　同（七番日記）
水鳥のこつそり暮す小庭哉　同（九番日記）
水鳥や親子三人寢てくらし　同（同）
流し薪功者によけて浮寢鳥　同（同）
追鳥や鳥より先につかれ寢る　同（同）
汝等も禍は待かよ浮寢鳥　同（發句集）
水鳥と同じうねりの丸太かな　蒼虬（蒼虬翁發句集）
水鳥の羽にもつけぬよ二日月　同（同）
水鳥もものいひ顏や布勢の海　同（同）
水鳥のあさり消したる日南かな　梅室（梅室家集）
水鳥に夜かげかぶせて峰の月　同（同）
水鳥の中つきわつて長いかだ　同（同）
水鳥に慣ふてあそべいつも春　同（同）

水鳥のかしら並べし朝日哉　布舟（續明烏）
御社や庭火に遠き浮寢鳥　子規（子規句集）
水鳥の聲を殘して暮れにけり　霞洲（同人）
水鳥や淵に垂れたる蔓もどき　青蛙（同）
日當りぬ水鳥そこへ浮び出でぬ　櫻坡子（ホトトギス）
こち向き浮く鳥やゝにこち向き浮寢鳥　石鼎（同）
月さすや晝のまゝなる浮寢鳥　雄月（同）
水鳥や四條河原の料理屑　春葉（同）
水禽に遠く漕ぎ出で富士眞白　默禪（同）
水鳥や渡舟の中の廓者　朱朗（同）
山火事のうつれる湖や浮寢鳥　秋晴（同）
水鳥の岩がくれなる水輪かな　乙月（同）
さしのぞく木の間月夜や浮寢鳥　たかし（同）
浮寢鳥杜のかげとなりにけり　松路（同）
水鳥や松をこぼるゝ雪げむり　一聲（同）
水鳥にとられて居りし濯石　しぐれ（續ホトトギス）
境内に入り込む海の浮寢鳥　千魚子（同）
水鳥の下りゆく石の沈みをり　立子（同）
水鳥の自からなる一列び　玄非知（同）
佇つ人に故里遠し浮寢鳥　風生（同）
水鳥の夜半の羽音やあまたたび　虛子（句集虛子）
水鳥や氷の上につぶらなる　同（同）
水鳥の首さしのべて人を見る　同（續ホトトギス）

鴨（かも）

青頸（あをくび）　眞鴨（まがも）　小鴨（こがも）　巴鴨（ともえがも）（味鴨（あぢがも）・あぢむら）　鈴鴨（すゞがも）　葦鴨（あしがも）（葭鴨（みのがも）・みのよし）　尾長鴨（をながかも）　尾越の鴨（をごしのかも）　鴨の浮寢（かものうきね）　鴨の共立（かものともだち）　鴨池（かもいけ）

古書校註

【滑稽雜談】 格物論に云、鳧は野鴨、江海の間沙の上に在り。沙石を食ふ。皆消化す。唯海蛤を食うて消せず。其の糞に隨つて出づ。（略）○順の和名に曰、鴨、加毛。爾雅集註に云、鴨、野に名づけて鳧と曰ふ。音、扶。家に名づけて鶩と云ふ。音、木。漢語抄に云ふ、鳧鶩、加毛。○和訓義解に云、かもはうかぶの略、むとも通ず。○連歌新式抄に云、蘆鴨、植物に非ず。○御傘に云、蘆鴨水邊也。冬也。植物に非ず。是も句體によりて植物にもなるべし。○宗祇萬葉抄に、鴨は契り深き物にて、霜夜にも互ひにはがひてぬるとなり。

大和本草に云、鴨をかもと云ふ非也。鴨はあひろ也。鳧は野鴨と云ふ。凡そ鴨は雁より後に來り、春は雁より後に歸る。

【三才圖會】按ずるに、鳬は種類太だ多し。頭・頂深紅、喉の下白く、胸紫にして黒き點あり。腹の毛灰白、淡紫色を帶び、黒き小斑あり。背に灰色にして黒斑有り。翅は蒼黒、翮は正黒、翮の上の小羽深綠にして白を交へ、蒼き嘴、短き喙、紅き掌、卑き脚ある者眞鴨也（略）諸の鳬、畿内の產を上と爲し、九州の產之に次ぐ。

【栞草】あぢむら。「夫木」とぢそむる氷をいかにいとふらんあぢむら渡る諏訪の入海　西行。䳑鶄（アジカモ）のむらだちわたるをいふなり。（略）〇水翁。鴨の事也と增山井に出せり。「急就章」鳬翁顏を濯ふ。水藻を得て喜悅す。註に鳬翁は頸の上の毛也云々。故に水翁といふか、尋ぬべし。

註　なほ滑稽雜談には、鳬の項に續いて、青頭・刁鴨・鈴鴨等の項を出し、栞草には、鴨の條下に、あぢむら・鈴鴨・たかべ・あいさ・とう長・みこあいさ・はしひろ・あしかも・蘆鳬・綠頭・赤頭・よしふく・島ふく・眞鴨等を擧げ、「此の外種類多し、枚擧に遑あらず、云々」と記してゐる、また栞草には尾越の鴨の項を擧げて、「此の名は俗習也　鴨は往來の道を定めて、山の尾より越ゆる故とぞ。然れば初鴨を秋となし、鴨とばかりを冬となせる名は、殊に俳諧の用と云ふべし」と記してゐる

【季題解說】鴨は秋季寒地より群飛して來て、我國の湖沼、河川等に群集生活を營み、やがて春三・四月の頃再び歸つてゆく候鳥である。河鴨と海鴨とに大別されてゐるが、食用としても狩獵の獲物としても、河鴨の類が主とされてゐる。安全な山中の池や沼から、食を求める爲めに薄暮から夜にかけて、田や畑に飛來してくる。その際闇の中で張網とか高繩とかいふ方法で捕獲することが出來る。狩人をのせた小舟がとび立つ鴨を追ひ擊つ面白さ、夕明りも消えた大沼田に舟にひそんで、峯を越して網にかゝる鴨を待つ趣、雪峯のめぐつてゐる湖上に、群居游泳する鴨の大景、いづれも冬の深い趣である。

小鴨　鴨の一種類であつて、獵鳥として、數も多く肉も美味、價値あるものとされてゐる。その名の如く、まがも等より小さく、羽の色彩もやや劣つてゐる。たかぶ・をかべ・又はこびやうなどと方言で呼ばれてゐる。

巴鴨　方言であじがもと言はれる鴨の一種類である。獵の獲物として價値あるものとされてゐる。あじむら。

鈴鴨　すずかもといふのは方言での呼び方で、なきはじろといふ名を持つた鴨の一種である。

葦鴨　鴨の一種である。翼は美艷な蓑のやうな羽であつて、俗に蓑鴨とも又蓑よしとも云ふ。河川湖沼など蘆の生えたあたりに棲息するところからこの名がある。

尾長鴨　方言でながと呼ばれてゐる鴨である。狩獵上こがも等と同樣重要なものとなつてゐる。

尾越の鴨　鴨が夕闇に乘じて、沼田や畑に食を求める爲めに飛翔してくるが、その道はほゞ一定してゐるやうである。山中から飛來するものは峰を

すれ〳〵に越す。この峰の上を低く越す事とその道が一定してゐるといふ習性を利用して、その峰にひそんでゐて夜陰の空に手練の網を投げ上げて捕へるといふやうな方法も、越前福井附近では行はれてゐる。かうした鴨が即ち尾越の鴨である。參照 夏―夏鴨(ナツカモ) 夏の鴨(ナツノカモ)

例句

鴨

かもあつらしてや料理の水いり菜　宗因（梅翁宗因發句集）
鼈につゝみてぬくし鴨の足　芭蕉（續猿蓑）
海くれて鴨の聲ほのかに白し　同（[illegible]笘物語）
らね〳〵と船に筋違ふ鴨の聲　同（俳諧七車）
遠干潟沖はしら浪鴨の聲　鬼貫（鬼貫句選）
家鴨かとおもふ人なし沖の鴨　同（同）
水底を見て來た顏の小鴨哉　丈草（丈草發句集）
精腹の寐覺〳〵や鴨の聲　同（同）
峠こす鴨のさはひやもろきほひ　同（同）
鴨なくや弓矢を捨て十五年　去來（去來發句集）
萍に何を喰やらいけのかも　嵐雪（玄峰集）
鈴鴨の聲ふり渡る月寒し　同（同）
明がたや城を取まく鴨の聲　許六（五老井發句集）
うち入て先遊ぶなり池の鴨　北枝（北枝發句集）
鴨おろす水に筋あり昆陽の池　支考（蓮二吟集）
くる〳〵と堀江の鴨の浮寐哉　同（同）
佐保川に鴨の毛捨るゆうべ哉　蕪村（蕪村遺稿）
鴨の毛を捨るも元の流かな　太祇（太祇句選）
鴨の毛や笊打たゝく軒の水　召波（春泥發句集）
毛を立て驚く鴨の眠かな　同（同）
たゞ一羽離別れて行くか鴨の聲　蓼太（蓼太句集）
目に鴨の白沙あゆむ尾ぶりかな　白雄（白雄句集）
鴨啼や浦淋しくもたつ櫓　同（同）
浮鴨や、戲男に射崩され　曉臺（曉臺句集）
湖を鴨で埋たる夜あけかな　士朗（枇杷園句集）
芦鴨の寐るより外はなかるべし　巣兆（曾波可理）
棒提てゆけば鴨なく澤邊かな　成美（成美家集）
我門に來て眞鴨と成にけり　一茶（七番日記）
鴨よかもどつこの水にさう肥た　同（同）
夫婦鴨竹おろして遊びけり　同（同）
おちつきにおつと寝て見る小鴨哉　同（發句集）
見去りに鴨見て入りぬ門の口　乙二（をのゝえ草稿）
錢首で喰れうならば波の鴨　同（同）

鴨

月の夜をきたなくするな鴨の聲　乙二（松のゝえ稿）
青竹のそなた表や池のかも　同（同）
山水や鴨の羽いろにながれこむ　同（同）
寐る事をあまりきらひな小鴨哉　同（同）
鈴鴨の虚空に消ゆる日和哉　蒼虬（蒼虬翁發句集）
すゞ鴨や日くれさかひの野の曇り　同（同）
汲水の波をよけ行小鴨かな　同（同）
何處からか出て來て並ぶ小鴨かな　同（同）
朝〳〵にかぞへる池の小鴨哉　同（同）
朝川にひたして赤し鴨の足　同（同）
夕雲のてるや藪根のひとつ鴨　同（同）
鴨なくや汐さす堀の行留り　梅室（梅室家集）
風呂に居て鴨の料理の差圖かな　同（同）
川上へ汐に押るゝ小鴨哉　頓賀（三崎志）
つるされて尾のなき鴨の尻淋し　子規（子規句集）
竹藪の裏は鴨鳴く入江かな　同（同）
一つ家に鴨の毛むしる夕かな　同（同）
內濠に小鴨のたまる日向かな　同（同）
鴨啼いてともし火消すや長酡亭　同（同）
石垣に鴨吹きよせる嵐かな　碧梧桐（新俳句）
よべいたく鴨鳴きし江や初氷　格堂（春夏秋冬）
鴨鳴くや枯木を染むる離宮の燈　天香（同人）
打たんとす鴨の番ひに入日かな　十因（懸葵）
鴨打つて心昂ぶる舟を行る　韮城（ホトトギス）
鴨なくや橋に傘さし立話　青后（同）
鴨墜つや銃をはなるゝ銃煙　櫻坡子（同）
鴨擊ちに空の鴨道月出でぬ　素十（同）

手賀沼

鴨渡る明かにまた明かに　同（同）
鴨打の高浪を見て歸りけり　朱人（同）
鴨擊ちに今出し父や銃の音　念腹（同）
遠鴨に未練の覘ひ犬も見る　みづほ（同）
手探りに卸す碇や鴨を待つ　雁來紅（同）
鴨擊の蹋み走りや堤の上　駝王（同）
あかつきの波のたゆたに手負鴨　鹿郎（同）
鴨打ちのかくれてくれと手をあげぬ　ひろ女（同）
かきくらす雪より鴨の下りにけり　秋櫻子（續ホトトギス）
鴨の水きらゝ〳〵と銃先に　みよし（同）

鴨舟の擧つゞとおもふうちにけり　吾樓（同）
鴨打の腹ごしらへや黍の中　雁來紅（同）

鴛鴦（をしどり）

をし　匹鳥（をしどり）　鴛鴦（をし）の沓（くつ）　思羽（おもひはね）　劍羽（つるぎはね）　離（はな）れ鴛鴦（をし）　鴛鴦（をし）の契（ちぎり）
鴛鴦（をし）の衾（ふすま）

古書校註

【御傘】鴛・鴨等に涼しきと結びては秋也と無言抄にあり、これおぼつかなし。かやうの冬の物にも、すゞしき・暑きの詞を添ふれば夏に成る也。やゝ寒・夜寒・ひやゝか・冷し・身にしむなどの詞を加へば、秋に成るべし。

【滑稽雜談】大和本草に云、瀉鶩は世俗に所謂をし鳥より大也。一類別種也。雄の形、本草に言ふ所のごとし。尾の羽、船の柁の形の如し。是俗に云ふ思ひ羽也。雌は文采なし。翅に翠羽有り。頭鷹の如し。背は灰黑色、腹白く、思ひ羽なし。○私云、鴛のつるぎ羽と云ふも又思ひ羽の事也。或書に云、鴛の劍羽とは、漢の白靈が故事也。昔鴛の思ひ羽にて帝の首を切る事有り、それよりの名也、云々。慥かなる出書未考、多識の人に尋ぬべし。

【栞草】和漢三才圖會　其の羽毛五彩あり。頭に玄纓（ゲンエイ）あり、頸に紅絲あり。背に小き羽あり、揩扇の半邊のごとし。俗に劍羽と稱す。九・十月多く至る。家々庭池に養ふ。然も鳧鴨と同居す。雌は蒼色にして目の後に白き條あり。翅尾黑く腹黃に赤黑の紋あり。大和本草　雌雄相（かたみ）に愛して相離れず、他鳥に異なり。東垣曰、二其一を失へば、朝夕思ひ慕ひ、憔悴して死す。「昔癱夫弓を以て其の雄の首を射切る。其の翌年又其の水邊を過る時、雌一隻あるを射殺してみるに、翅の内に去年射たりし雄の首をいだけり。」鴛鴦の沓。鴛鴦の姿の沓に似たるをいふなり。（一）古哥、こやの池つがはぬをしの一つがひ誰ぬぐ沓のかたちなるらん、鴛鴦の衾。西京雜記　趙飛燕皇后たり。其の女弟昭陽殿にあり、飛燕に遺る書に云ふ、鴛鴦の襦（ジュ）、鴛鴦の被、鴛鴦の縟　云々。壬二集　霜もらぬをしの衾のおもひばも千世をかさぬる宿の池水。鴛鴦を縫ひものにし、或は畫きたるを、をしの衾とも縟ともいふなり。

註（一）正治二年院御百首　こやの池におりゐる鴨の一つがひ誰がぬぐ沓のすがたなるらん　三ノ宮

季題解説　動物園とか禁裏園の池とか少し氣の利いた林泉には必ず居ると云つてもいゝ。華麗な水禽で雌雄仲睦まじく常に離れず、眠るにも頸を交へ、泳ぐにも相並んで離れず、其一方が捕られれば他の一方が思慕の餘りに死ぬと言はれてゐる、さういふことから匹鳥と言つてゐる。昔娘を嫁入させる時、鴛鴦の睦まじさにあやからせる爲めに鏡の裏に其の尾羽を二本入れたものである。大きさは小鴨位で羽毛に五彩があり、古詩に文綵雙鴛鴦とあるがそれ程美し

い。頭に玄い縷（カリ）があり白い長毛があつて垂れて尾に至り、翠顏で頸に紅の絲かあり、黑い翅、黑い尾、腹は黃色で赤黑の紋があり、脚は赤く、背に半扇の如き羽かある。之を劍羽又は思羽と言ひなして居る。能く交孕して卵を生み、蘆葦の間又は朽木の穴に抱き伏すといふことである。保護鳥として取扱はれてゐる。

參照　夏の鴛鴦（オハ）

例句

鴛鴦

鴨の毛や鴛の衾の道ふさげ　其角（五元集）
十石は鴛につくなりれうあん寺　同（同）
瀧口やおもひ捨ても池の鴛　同（同）
鴛鴦の盃とちようすこほり　同（五元集拾遺）
鴛氷る夜や蜉蝣灯盞に羽を閉て　同（同）
里過て古江に鴦を見付たり　蕪村（蕪村句集）
鴛や國守の沓もにしき革　同（新五子稿）
をし鳥や鵯の覗く池古し　同（落日庵句集）
鴛にふり行池や雨きく夜　同（同）
鴛や池におとなき樫の雨　同（同）
草も木も小町が果や鴛の妻　同（同）
鴛や花の君子はかれてのち　同（蕪村遺稿）
歸來て夜をねぬ音や池の鴛　太祇（太祇句選）
對にしてかぞへて歩く鴛見哉　同（同）
かたよりて島根の鴛の夕かな　召波（春泥發句集）
鴛鴦のちぎりや沓の右ひだり　蓼太（蓼太句集）
松二木ひと木にをしのやどるかな　白雄（白雄句集）
をし啼や一節（ヒトヨ）切ふく瘦をとこ　同（同）
夜の鶴鴛鴦の中よりも哀れなり　同（同）
しのびねに鳴夜もあらん離れ鴛　曉臺（曉臺句集）
うか〳〵と日に照れ居るやはなれ鴛　同（同）
人をたゞうらみ聲なりはなれ鴛　同（同）
放れ鴛鴦一すねすねて眠りけり　一茶（七番日記）
夜すがらの心づかひや眠る鴛　蒼虬（蒼虬翁發句集）
かざし羽の帆になるをしの浮寢かな　梅室（梅室家集）
陰日なた隔てぬをしのつがひかな　同（同）
古池のをしに雪降る夕かな　子規（子規句集）
釣殿の下へはいりぬ鴛二つ　同（同）
人間のやもめを思へ鴛二つ　同（同）
鴛鴦の向ひあふたり並んだり　同（同）
鴛鴦の二つ並んで流るゝよ　別天樓（新俳句）
鴛鴦のふくらみあるく芝生かな　無聲（同人）

牡丹寄浮寢醒めたる鴛鴦二つ　花蓑（ホトトギス）
鴛鴦の濡らせし石や樓の下　綠童（同）
返り咲くつゝじのあり鴛鴦の池　嘉綠（同）
鴛鴦のもとのごとくにならびけり　紅醉（同）
鴛鴦やほころび初めし茶屋の梅　一帆（同）

耶馬溪

屏風岩高く翔れる鴛鴦もあり　花蓑（續ホトトギス）
鴛鴦の目をつむり目をつむりけり　みづほ（同）
鴛鴦の背を水玉となり落ちにけり　不忘（同）

[illegible]盛装を凝らし居るを見て

我子錦繍の帶を背負ひて鴛の妻　虚子（句集　虚子）

参考　支那、東シベリアにも分布す。溫暖の候には深山に棲み、大木の洞中に巣を造つて蕃殖するが、氣候寒冷となれば、山を下つて湖沼、河川に移つて越冬するを以て、人目に觸れ易くなる。

をしどり　Aix galericulata（LINNÉ）臺灣から樺太まで産し、

都鳥（みやこどり）

季題解説　鷗の一種で、全身白く嘴と脚とが赤く優美な鳥である。千島・樺太・沿海洲などに生れるもので、冬になると内地に渡つて來て海港や海近い河口などに棲んで食を漁りつゝ浪に浮び又空を翔るが、春になると又歸つてゆく候鳥である。元來隅田川に浮ぶものをかく命名したので、都鳥と言へば必ず隅田川の聯想を伴ふのである。都鳥といふ言葉は現今の東京では廣義に解して、隅田川に浮ぶ鷗の類を總て都鳥と稱してゐる。〔參照〕夏―都鳥（ミヤコドリ）

例句

都鳥

鹽にしていざことづてん都鳥　芭蕉（武藏十歌仙）
我舟におもて合せよ都どり　几董（井華集）
都鳥なるれば波の鷗かな　乙二（松窓乙二發句集）

鳰（かいつぶり）

にほ　にほどり　いよめ　むぐり　はじろかいつぶり　あかえりかいつぶり

古書校註

【栞草】大和本草〕鳰　字彙に曰、好んで水に入りて食ふ。鳧に似て小也。又本草に載せたる鸊鷉も、かいつぶりなるべし。倭名、和名抄にはにほと訓ず。俗に、鳰の字を用ふ。鳰と鸊鷉と一物二名歟。本草に、鸊鷉大さ鳩の如くにして、鴨脚連行くことあたはず、常に水中に在りて、人至れば沈む。

【滑稽雜談】鳰は鸊鷉を雅稱にて、俗語にかいつぶりともいふなれば、俳諧に

は名目の自在を稱して、冬に用あらば用ふべきなり。○鳰の巣は夏なり。

【註】御傘には、「鳰、鸊鷉、浮巣も夏也」とある。（水鳥の季題中にある御傘の註参看）

季題解説　美しいといふ方の水禽ではない。鴨より少し小さく、嘴は短い、翼は肥えて居て尾は後方に偏して極く短い、脚は赤いといふ方で趾の間に膜がある、背の羽の色は暗黒褐色の稍淡い方、喉は白く、頭部は灰褐色、胸も淡く其れ以下は殆ど銀白色で下腹部は鼠色。普通湖や沼や池に棲んでゐるが、城の濠とか或は池沼で禁獵區になつてゐる處には到る處に見られる。水を潜るのが上手で、二三羽泳いでゐるなと見てゐるうちにふと居なくなる、暫らくするとあらぬ方に浮き出て來る、それが一種の淋しさを誘ふのである。

水草などを以て水の上に巣を拵へる、之が所謂鳰の浮巣である。浮巣となると夏の季になる。〔參照〕夏—水鳥の巣へ。

例句

鳰

野の池や氷らぬかたにかいつぶり　几董（井華集）
行もどり孫に啼いよめかかな　白雄（白雄句集）
かひつぶり浮出まで見て通りけり　曉臺（曉臺句集）
水鳥もふれも塵なり鳰の海　梅室（梅室家集）
鸊鷉（カイツブリ）雪がぼたぼた落つる池　月斗（同人）
石集めて獨遊ぶ子鳰淋し　楞童（ホトトギス）
沈めば沈み浮かめば浮かみ鳰二つ　花蓑（同）
尻高になるよと見れば沈む鳰　伊勢寺（同）
かいつぶり二つ浮びて相寄りぬ　大榎庵（同）
古利根や家鴨とあそぶかいつぶり　秋櫻子（同）
鳰矢走の舳に水走り　月哉（同）
水の面を見てゐたるとき鳰浮ぶ　岳樓（同）
一濤や二つの鳰のゐるばかり　洗耳（續ホトトギス）
舟やれば並べる鳰もゆきにけり　鹿郎（同）
傘さして佇む人に鳰近し　霞人（同）
鳰の陣木の間がくれにつゞきけり　外山（同）
橋の下すこし暗くて鳰　菅草（同）
日なたぼこしてゐる人や鳰　虛子（ホトトギス）

参考

かいつぶり　には Podiceps ruficollis japonicus HARTERT.

鴨に似るも、みづかきなく、各趾に扁平な膜附着し、恰も櫂のやうである。

本邦内の湖沼に廣く分布し、水草を以て浮游性の巢、卽ち鳰の浮巢を造る。各羽は背面黑褐色、喉部白く、頸は灰褐色を呈し、胸は淡褐色、腹部前半白色、後半鼠色であるが、夏羽は背面の色濃く、頸は赤褐色、腹面は銀白色の地に褐色羽毛を混ずる。

はじろかいつぶり Otodytes nigricollis nigricollis Brehm. 樺太から九州まで產するが、其數は多くない。顏に長い羽毛を叢生し、夏羽では栗色を呈し、冬羽では白色となる。

あかえりかいつぶり Pedetaithya griseigena holboellii Reinhardt. 北米から東亞まで廣く分布し、我國では樺太から九州まで之を產す。後頭部の羽毛が稍々上向して冠狀をなしてゐる點で識別される。

千鳥

衞　鵆　磯鳴鳥　海千鳥　浦千鳥　川千鳥　磯千鳥　夕千鳥　小夜千鳥　村千鳥　岩千鳥　島千鳥　濱千鳥　友千鳥　遠千鳥　千鳥足

古書校註

【山之井】千鳥は、磯邊・濱邊などにちりとんで友をよび、(一)川風さむみ鳴きかはすけしきなどを、(二)ちどりがけとも、ちどりあしともいひて、つらねなし侍る。又、(三)ちどりのかうろにそへても、ふるくいへり。

【御傘】冬也、水邊也。鷹をむすびては秋也。霧・露を結びても同前。

【滑稽雜談】漢名未詳。(略)○藻鹽草に云、千鳥、冬の物也。但し秋にもよめり。(略)○大和本草に云、千鳥河海の水邊に有り。數種有り。其の形鶺鴒に似たり。俗に鵆の字を用ふ。出所未詳。(略)○按ずるに、千鳥は後趾なく、木に止る事なし。疑ふらくは、詩井羅願が云鴇と云ふ物ならし。鴇は豹文有りて雁の如く行列有り。後趾無し。性木に止らず、水鳥也と本草にも註せり。今行狀略〻相同じ。鴇を誤りて鵆に作るにや。篤信は鴇を以て野雁と云ふ。是否か未だ考へ定めず。猶識者に尋ぬべし。

【三才圖會】鵆 音衞 千鳥 俗 (略)○按ずるに、鵆江海水邊に在りて、百千群を成す。仍りて千鳥と稱す。鷸に類し鶺鴒に似て小さく、其の頭蒼黑く、頰白く、眼の後に黑條有り。背青黑く、翅黑く、腹白く、胸黑く、嘴も亦蒼黑し。尾短く、脛黃蒼にして細長し。冬月最も多し。水上に飛鳴して侶を呼ぶ。肉味美也。歌人之を詠賞す。(略)種類甚た多し。四十八品有りと云ふ。指少異有り。蓋し諸鳥の趾は三指にて皆前に有り。杜鵑は三指、前に二、後に一有り。鵆は四指にして、前に三、後に一あり。唯此の二物他鳥に異なるなり。

【栞草】千鳥足。大和本草 雀より大也。前三指後指なし。歩むに足を左右にちがへてはしる。人の歩むことこれに似たるを千鳥足と云ふ。

注（一）貫之の歌「思ひかね妹がり行けば冬の夜の川風寒み千鳥なくなり」（拾遺集）。（二）眞直に行かず打廻へた行き方となる。千鳥掛集素堂の序に「鳴海の何がし知足亭に亡友芭蕉の翁宿りける頃、翁思へらく、此所は名護屋熱田に近く、ことに大垣へも遠からず、千鳥がけに行通ひて殘生を送らんと、云々」（三）同序に「東田殿鳴海の千鳥を聞に出給ふに、千本の近貞といへる者、袖に蘭香を焚きて出ける歌聞召して、其香爐を御取りかはしありて、今の世に大千鳥・小千鳥と二賞せられけると也」とある。

季題解説　涉禽類に屬し、體は鶺鴒に似てやや小さく、頭部及嘴部は蒼黑色、背部は青黑く腹部は白く、眼邊に黑い條紋をそなへ、尾は短く脚細く後趾を缺く。冬季河や海の上に群つて飛ぶ。晝は遠く外海にあるが夜は渚近く來てめぐり飛んでゐる。その聲は一種哀調を帶びてゐる。参照　秋—鴫(シギ)

例句

千鳥

ふみかよへ伊勢の津の國友衞　宗因（梅翁宗因發句集）
闇の夜や巣をまどはしてなく衞　芭蕉（猿蓑）
星崎の闇を見よとや啼千鳥　同（千鳥掛）
汲汐や千鳥のこして歸る海士　鬼貫（俳諧七車）
いざさらば酴醾漉(コノロ)らで千鳥きこ　同（同）
千鳥鳴須磨の明石の舟にゆられ　同（鬼貫句選）
ねられぬやにがにがしくも鳴千鳥　同（同）
碁は妾に崩されて聞千鳥哉　言水（俳諧五子稿）
けいせいのよる瀬しつたか川千鳥　來山（續いま宮艸）

傷亡師の終焉

曉の墓もゆるぐや千鳥數寄　丈草（丈草發句集）
背戸口の入江に上る千鳥かな　同（同）
さよ千鳥庚申待の舟屋形　同（同）
荒磯やはしり馴たる友千鳥　去來（去來發句集）
妹が手は鼠の足かさよちどり　其角（五元集）

人丸讃

沖の帆も十はたたみそや濱千鳥　同（同）
心をや笙にゆらるゝうら千鳥　同（同）
よき日和に月のけしきやむら衞　同（同）
鹽擔子や投げてたゆたふ磯千鳥　同（同）
鳴く千鳥幾夜明石の夢おどろく　同（五元集拾遺）
村千鳥その夜は寒し虎が許　同（同）
越後屋の算盤過ぎて小夜衞　同（同）

はせを翁へ餞別

なく千鳥不二を見かへれ汐見坂　杉風（杉風句集）

由比が濱

人を啼鷗を鳴や濱千鳥　桃隣（古太白堂句選）
有明となりて一群千鳥かな　同（同）

衛聞くために二日の旅寐哉　同　（同）
こぼれては風拾ひ行千鳥哉　千代女　（千代尼發句集）
三つ五つまではよみたる衛かな　同　（同）
吹たびにあたらしうなる千どり哉　同　（同）
加茂人の火を燧音や小夜衛　蕪村　（蕪村句集）
打よする浪や千鳥の横ありき　同　（同）
羽織着て綱もきく夜や川ちどり　同　（同）
便舟のこたへつれなき千鳥かな　同　（新五子稿）
渡し呼女の聲や小夜ちどり　同　（同）
浦千鳥草も木もなき雨夜哉　同　（同）
湯あがりの舳先にたつや村千鳥　同　（同）
むら雨に音行違ふ千鳥かな　同　（同）
風雲の夜すがら月の千鳥哉　同　（題林集）
鎧着て瀬を渉夜や村千鳥　同　（蓮亭監賞集附錄）
磯千鳥あしをぬらして遊びけり　同　（夏より）
うかれ越せ鎌倉山を夕千鳥　同　（反古衾）
千どり聞夜を借せ君が眠るうち　同　（全集）
鳥山や夜着の裾より朝千鳥　同　（同）
聽へらすむかしながらの千鳥哉　同　（同）
風呂と見て小船濟よる千鳥哉　同　（落日庵句集）
小夜千鳥君が鎧に薫す　同　（同）
ちどり啼曉もどる女かな　太祇　（太祇句選）
木戸しまる音やあら井の夕千鳥　同　（同）
立波に足みせて行ちどりかな　同　（同）
江南は烏飛也むら千鳥　召波　（春泥發句集）
その夜半の啼音は遠し浦衛　同　（同）
一夜聞てほゐなきすまの千鳥かな　樗良　（樗良發句集）
消もせん有明月の濱ちどり　同　（同）
小夜千鳥羽風もいとふ聲の痩　同　（同）
あし跡を浪にとらるゝ千鳥哉　也有　（蘿葉集）
かへる波かへらぬむかし啼千鳥　同　（同）
三つまではかぞふる月の千鳥かな　同　（同）
船頭のくさめに騷ぐ千鳥かな　同　（同）
關守の寐よとて遠きちどりかな　同　（同）
火をいとふ沖に見る夜の千鳥かな　同　（同）
はげに踏む千鳥や波もうらやまず　同　（同）
うごかずに居れば氷をかむら衛　蓼太　（蓼太句集）
吹上て汐くもりゆくちどり哉　同　（同）

千鳥

蛤にならじ／＼と千鳥かな　蓼太（蓼太句集）
押分て月こそ出れむらちどり　同（同）
闇を鳴く沖のちどりや飛ぶは星　同（同）
裾ぬるゝ浪や七里がはまちどり　几董（井華集）
夕衛手にも来るかと淡路しま　同（同）
貫之が船の灯による千鳥哉　同（同）
羽箒のふいと悲しくちどり啼　同（同）
小夜ちどり人喰犬も吼るなり　白雄（白雄句集）
假まくら魚藏に千鳥降がごとし　同（同）
千鳥きく夜衣にたちし松葉かな　同（同）
遠淺や月の千どりの舞もどる　同（同）
酒桶に千鳥舞入あらしかな　同（同）
夕闇のまつ風のぼるちどりかな　同（同）
あまつたふ星の御かげになく衞　曉臺（曉臺句集）
風はやく二ツにわれてむらちどり　同（同）
濱ちどり雪の中より顯はるゝ　同（同）
蠣殼や下駄の齒音に飛千鳥　同（同）
曉をまぐれて行やむら千鳥　同（同）
月も見え雪も降出てなく衞　同（同）
心われしてや二瀨に鳴ちどり　同（同）
聲立て氷を走る千鳥哉　闌更（半化坊發句集）
住なれし人はよく寐て小夜千鳥　同（同）
貫之のうき旅ゆかし啼ちどり　同（同）
聲かれて朝日に眠る千鳥哉　同（同）
柿寺や藪のうちにも啼ちどり　士朗（枇杷園句集）
生海鼠ほす袖の寒さよ啼ちどり　同（同）
まつ原や馬にわかれば啼ちどり　巣兆（曾波可理）
旅烏磯にともなふ千鳥かな　同（同）
には鳥が啼ば聞えぬちどりかな　同（同）
肩ほねの鳴るにつけてもなく千鳥　成美（成美家集）
川千鳥牛の喰もののなかりけり　同（同）
ぬす人も妹とぬる夜やなく乳鳥　同（同）
片壁は千鳥に任す夜也けり　一茶（旅日記）
袂へも飛入ばかり千鳥哉　同（七番日記）
莚崎の犬と仲よいちどり哉　同（同）
浦千鳥たまつて玉子とられけり　同（同）
御地藏と日向ぼこして鳴く千鳥　同（同）
象潟のかけをつかんで鳴く千鳥　同（同）

むら千鳥犬をじらして通りけり　同（同）
あちこちに小寄合する千鳥哉　同（同）
むら千鳥そつと申せばはつと立つ　同（おらが春）
犬の道あけて鳴也濱千鳥　同（九番日記）
忍べとの竿の印や鳴千鳥　同（同）
聲〳〵や子どもゝ交る濱千鳥　同（同）
濱衛ひねくれ松を會所哉　同（同）
蘆の芽に肝つぶしてや居ぬ千鳥　乙二（をのゝえ草稿）
義仲寺の灯がともれるや飛衛　蒼虬（蒼虬翁發句集）
あら海や別に千鳥の夜が明ゆ　同（同）
松のうへに道が付けり朝ちどり　同（同）
有明にたつあし見ゆる千鳥哉　同（同）
川上は柳もなくて啼ちどり　同（同）
きはまりて道よりするや川衛　同（同）
波に入る月見て居れば飛千鳥　同（同）
あら磯や我足あとに啼ちどり　同（同）
笠ふんで啼あら磯の千どりかな　同（同）
啼ときは見えず成けり川ちどり　同（同）
ひと走りしてたつ朝の衛かな　同（同）
ひと吹雪千鳥のまはる岬かな　同（同）
ありあけのはまやさながら飛衛　同（同）
夢に見たまゝを寐覺の衛かな　同（同）
望汐の橋につまづく千鳥かな　梅室（梅室家集）
里に來て欄の寶鳴らす千鳥かな　同（同）
蛸つぼに跡もどりして鳴ちどり　同（同）
志賀の山深入しては鳴千鳥　同（同）
吹かれ来て畠に上(アガ)る千鳥哉　乙由（麥林集）

[illegible]

さす汐に跡しさりする千鳥哉　紙隔（新選）
大波にまくられて立つ千鳥哉　常仙（類題發句集）
立つ波をかゝへてあがる千鳥哉　和水（月影塚）
海士の子の礫してゐる千鳥哉　則風（京水）
立つ千鳥浮桶一つ殘りけり　李夫（類題發句集）
狼の跡踏み消すや濱千鳥　史邦（猿蓑）
日によする波美しや朝衛　來道（古今句鑑）
千鳥啼く揚荷のあとの月夜かな　子規（子規句集）
路ばたに[illegible]くふ人や川千鳥　同（同）
須磨の[illegible]間に影れる千鳥かな　同（同）

千鳥

千鳥たつ汀の船のうしろかな　　四方太（春夏秋冬）
人近く千鳥飛び來る月夜かな　　愚哉（同）
川千鳥障子は雪にぬれにけり　　之水（同人）
千鳥鳴くや雨になり行く東山　　句佛（懸葵）
嵐山の枯木にとまる千鳥かな　　零餘子（ホトトギス）
林檎に月夜烏や遠千鳥　　石鼎（同）
山川の高波にとぶ千鳥かな　　泊雲（同）
戸をあけし闇に船ある千鳥かな　　魚將（同）
千鳥とんで枯色見ゆる端山かな　　枴童（同）
大風の菜畑へ下りし千鳥かな　　湘海（同）
いりあひの衙なるべき光かな　　青畝（同）
高波に傾きつれし千鳥かな　　越泉（同）
庭を掃く千鳥のあとのこゝかしこ　　耿陽（同）
かへりきていしくも高き衙かな　　烏頭子（同）
あがりたる千鳥の上の櫻島　　白鷗（續ホトトギス）
畑中の岩より立ちし千鳥かな　　耿陽（同）
雙衙と行くなりけりかくも行く　　青畝（同）
足跡の千鳥の中の烏かな　　風生（同）
揚りたる千鳥に波の置きにけり　　夜半（同）
磯千鳥降りたるところぬれてをり　　磯香（同）
多々良川潮満ちくれば鳴く千鳥　　清風郎（同）
磯畑の千鳥に交じる鴉かな　　虚子（句集虚子）

【參考】千鳥と鷸とは共に鷸科に屬し、この科を分つて、田鴫亞科・鷸亞科・千鳥亞科とするが、田鴫亞科に屬する九種が通常「しぎ」と稱せられるもので、鷸亞科の三十六種・千鳥亞科の十七種が俗に千鳥の名の下に總括されてゐる。依つてこの三亞科中主なるものを左に擧げる。

だいしやくしぎ Numenius arquatus lineatus CUVIER. アジアの東北部で蕃殖し、冬季には中部及南部に渡來する。本邦の千島から臺灣までこの鳥の渡りを見る。しぎの中で最大、嘴甚だ長く下方に曲る。

いそしぎ Actitis hypoleucos (LINNÉ) 歐亞大陸に廣く分布し、冬季にはアフリカ・濠洲にも渡る。我國にも多數渡來し、且、我國内で蕃殖するものもある。嘴は黑褐色、脚は帶綠灰色。

きあししぎ Heteroscelus incanus brevipes (VIEILLOT) 春秋の二季に我國にあまねく渡來する種。嘴と脚とは黃綠色。以上の「しぎ」類は皆四趾を有するが、次の千鳥亞科に屬するものは三趾を有する。

むなぐろ Pluvialis dominicus fulvus (GMELIN) あいぐろとも云ふ。夏羽では下面黑色なので、むなぐろと稱へられるが、冬羽では、この黑色部が白變し、疎に灰褐色の斑點がある。秋季、樺太から臺灣まで多數に

渡來する。本種は千鳥笛を以て容易に呼び寄せ、網で捕へることが出來る。

いかるちどり（Charadrius placidus (Gray.　頸部に明瞭な黒輪があるので、くびだまちどりとも云ふ。北海道から九州まで分布し、所在の河川で蕃殖す。翼長十四センチ。

こちどり（Charadrius dubius curonicus (Gmelin.　前種によく似てゐるが、翼長十二センチに過ぎぬ小なる鳥。我國に廣く分布し、我國内にて蕃殖する。尚歐亞大陸にも産する。

鰰（はたはた）

雷魚（はたはた）　かみなりうを

季題解説　棘鰭目鰰科の魚で、體長四五寸、白色で、體の上部に小形の褐色の斑がある。頭部は扁平で、眼大きく、口は殆ど垂直。北日本に産し、殊に秋田縣は有名な産地である。雷鳴がすれば水上に浮んで泳ぐと言はれ、雷鳥とも呼ばれる。

例句

鰰　潮ぶくれして雷魚の湧きにけり　文方（同人）

鮪（まぐろ）

しび　めじ　びんなが　きはだ　かじき　鮪釣（まぐろつり）　鮪船（まぐろぶね）　鮪網（まぐろあみ）

古書校註

【三才圖會】　按ずるに、鮪も亦鱣（フカ）の屬にして、鱘（カジトホシ）の類也。本綱に、鱘・鮪一物と爲るは未だ精しからず。鱘は青碧色、鼻長くして身と等し。鮪は頭略大く、鼻長しと雖も甚しからず、口頷の下に有り、雨の頰眼鐵兜鍪の如く、頰の下青斑有り。死して後眼に血を出す。背腹に鬣有つて鱗無し。些細の鱗有るが如し。蒼黒色、肚白にして雲母を傅るが如し。尾に岐有つて硬く、上大、中圓く、下小し。其の大なる者一丈餘、小き者六七尺、（略）其の頭力有り、暖に乘つて浮く。日を見て目眩く。其の來るや群を成す。漁人熊（ひえ）で油を取る。其の肉を膾と爲し炙と爲す、味稍佳なり。

季題解説　鮪（しび）に似てゐるけれども鰭の長さ六七尺、最も大きいものは丈餘に達する、まるまると肥滿してゐる。鱗小さく、皮下にかくれて無いやうに見える、側線及び胸部にあるもののみが大きい。背部蒼黒色、腹部銀白色で黄色な斑がある。常に暖い海洋に棲游してゐる。仙臺鮪が名高い。漁法としては流し釣・大敷網などがある。

例句

鮪　漁翁の鮪が釣れて日の出哉　鈴川（同人）

よろめいて鮪かき行く漁師かな　玖治（ホトトギス）

今日の解説　まぐろ Thunnus orientalis (Temminck & Schlegel). 小なるを「めじ」と云ひ、大なるを「くろしび」と云ふ。冬季關東地方で賞

美される。鰤の背部は蒼黑色、腹部は白色、胸鰭短小。

びんなが Thunnus alalunga (Gmelin) 關西では「とんぼ」又は「とんぼしび」と云ふ。鮪に似てゐるが、胸鰭が甚しく長大である。

きはだ Neothunnus macropterus (Temminck & Schlegel) 背部は濃藍色であるが、側部は淡灰色で黄色を帶びてゐる。第二脊鰭と臀鰭とが長くて鎌狀をしてゐる。

かじき Tetrapterus mitsukurii Jordan & Snyder. まかじきと稱す。又かじきまぐろとも呼ぶが、普通の鮪が「さば」科に屬するに反し、かじきは別科の「かじき」科に編入されてゐる。上顎が下顎より著しく長く劍狀をなし、和船に激突して之を穿孔することを得る。體は鋼鐵株の色を帶び、背鰭は黄色である。性甚だ狂暴、鯖その他の魚群を追うて遠洋を游弋す。

鱈(たら) 雪魚(たら) 眞鱈(まだら) 磯鱈(いそだら) 沖鱈(おきだら) 鱈場(たらば) 鱈船(たらぶね) 鱈網(たらあみ)

古書校註

【滑稽雜談】大和本草に曰、杏魚(タラ)は北土の海に多し。南海に生ぜず。西州には北海にも生ぜず。朝鮮甚だ多し。寒國に生ず。冬春多く捕る。夏秋はなし。脯と爲して味最も佳なり。白き者を佳品と爲し、黄を下品と爲す。魚頭に石二つあり。其の子及び腸も亦佳也 凡そ鱈は油無く性輕し。諸病妨無し。俗に鱈の字を用ふ、正字に非ず。〇今按ずるに、腸は其の形雲の如し。俗に雲腸と稱す。脯と爲す者俗に干鱈と稱して、春月ことに賞して俳子是を春に許用す。鱈と計は冬也。又鹽藏の者あり。凡そ醃魚の類季に用ひず。然れども鹽鱈は歲暮に節物となす故、冬とすべし。

【年浪草】東醫寶鑑に曰、俗に大口魚と名づく。性平に、味鹹く、毒無し。之を食へば氣を補ふ。腸と脂と味鹹く尤も佳なり。東北の海に生ず。〇和漢三才圖會に曰、吳魚(タラ)、鱈(俗字)。俗に多羅と云ふ。魚の大口の者を吳と曰ふ。吳魚狀略ゞ鱸に類して、大なる口・細き鱗・大なる頭・堅き骨、頷下に細鬚有りて見え難し。頭の中に白石二枚有り。小棋子の如し。端に鋸齒有り。鱗色靑黄、白を帶ぶ。皮薄く肉白し。鰭尾共に軟かなり。味甘淡にして佳なり。北海多く之を出す。冬月之を采る。

季題解說 體長二三尺、形稍ゞ鱸に似て、口大きく腹膨れて大きい、眞鱈と云ふ。北海道・朝鮮にかけて産する。抱卵成熟して最も美味なのは冬季である。漁期は大抵九月頃から翌年五月頃迄である。

漁法 延繩(這繩)、餌は鰯・蛸・鰊・烏賊など。

漁場は二浬から二十浬の沖合 發動機船で未明出漁。

製造 鹽製・乾製・蒲鉾。肝臟から肝油、內臟は肥料にする。開いて鹽とし、架で干したものは棒鱈と云ふ。【參照】佐渡鱈(サドダラ) 秋—初鱈(ハツダラ)

例句

鱈

蝦夷鱈も御代の旭に逢にけり　一茶（七番日記）

鱈船や比良より北は雪げしき　李由（韻塞）

山國に鱈雪食うて著きにけり　再生（ホトトギス）

犬のやうに鱈の荷を守るアイヌかな　木乃伊（同　）

凍鱈や大いなる口あきしまゝ　蕪秋（續ホトトギス）

甲板の汚れし雪や鱈運ぶ　砂々（同　）

投出して鱈賣つて居り雪の上　一葦（同　）

參考　たら、まだら　鱈科。（Gadus macrocephalus TILESIUS.）ベーリング海・オホック海・日本海・朝鮮及び關東州沿岸・太平洋沿岸では金華山沖以北に産する寒海魚。頭部が甚だ大なるを以て、この點を學名の稱名としてある。下顎は上顎より短く、その先端下面に長き鬚を生ず。このマダラには、磯鱈又は根鱈と稱するものと、沖鱈又は通り鱈と呼ぶものとがあつて、この二者は明に二品種と見做すべきものと考へられる。即ち卵の性質に差あるのみならず、前者が岩礁に定着するに反して、後者は洄游をなし、頭部は後者の方小であり、味にも差があつて後者の方がすぐれてゐる。周年漁獲されるが、盛漁期は嚴冬で、主として延縄及び刺網が用ひられる。鹽鱈には腹部を切り開き、又は切り開かずして、内臓を除去した新鱈、頭部から背面に沿うて縦に切り開き、内臓を去り、有頭有脊柱のまゝ、又は無頭無脊となしたる開鱈がある。此等は皆鹽藏後乾燥したものであるが、棒鱈は、無頭無脊柱の開鱈のやうに刀を入れ、三四十日間丸太に鞍掛して乾燥したものである。肝臓から取つた「肝油」、卵巣を鹽藏した「はらゝご」（鱈子）も甚だ有名である

佐渡鱈（すけとうだら）　助宗鱈（すけそうだら）　明太魚（めんたい）　明太魚卵（めんたいこ）　紅葉子（もみぢこ）

季題解說　鱈科に屬する魚、腹部白き外暗紅色、長さ約三十糎から六十糎位。朝鮮の北部及び北海道に至る日本海沿岸に棲息する。漁期十一月から翌年一月下旬迄、生食する外これを凍乾して四時の食膳に供する。干明太魚は朝鮮人の祭祀時に缺くべからざるものである。明太魚卵は明太魚の卵巣のまゝの卵を鹽漬にし、唐辛子を撒布したもの、近時内地への移出が多額にのぼつてゐる。〔同〕鱈

例句

佐渡鱈

明太魚を踏みても歩む市場かな　綠溪（續ホトトギス）

匝道せば干明太の臭かな　枕流子（同　）

參考　すけとうだら、又にすけそうだら　鱈科。Theragra chalcogramma （PALLAS）．北海道から富山・新潟・朝鮮沿鏡道方面に多く、太平洋沿岸には稀でない。普通の鱈よりも著しく頭が小で、下顎は上顎より長く、その下面先端に生じてゐる鬚は甚だ短い。鱈は細長いが胸鰭は著し

く大である。體側に斷續せる二本の暗褐色線縦走する。蓋し種名の「鋼版畫の如き」は之を指示してゐるのであらう。この魚の鹽藏卵巣は特に美味なりとて、廣く販賣されてゐる。本種の鰓と内臟とを除去し、丸乾したものを、朝鮮では明太魚と稱へ、正月の食膳に必須品となつてゐる。その他の利用は普通の鱈に同じい。漁期は十一月乃至翌春四月であるが、盛漁期は矢張り嚴冬である。

初鰤（はつぶり）

季題解説 十二月初旬初めて漁獲した鰤であつて、やや小さい。出世の魚として關西では歳晩の贈物などにする。〔參照〕鰤

例句

初鰤　初鰤やほのかに白き大江山　季　友（類題發句集）

鰤（ぶり）　寒鰤（かんぶり）

古書校註

【滑稽雜談】大和本草に云、鰤の字昔より國俗ぶりと讀む。然れども出處未詳。本草魚師といへるは別物也。其の形を載せず。唐韻の鰤の義を以て云ふ。然らば鰤と魚師と一物歟。又山海經、魚師是を食へば人を殺すとあり。和産微毒あれども人を殺さず。されども松前蝦夷の鰤は人を殺すと云ふ。丹後の鰤味美也。若狹は鄰國なれど味劣れり。○此の者東北の海或は筑紫の産有り、各形狀風味別也。只丹後伊保の浦の者上品也。

【栞草】初鰤。六月五六寸、津波須といふ、（略）和漢三才圖會　仲冬長じて三四尺、最大なるもの五六尺、鰤と名づく。腌（シホモノ）として、冬春これを食ふ。（略）少きより老に至る時名を改む、初めは江海にあり、徐々大洋に出づ。また東北の海より連行（ナラ）して、西海對州に終る。出世昇進の物とし、これを大魚と稱す。貴賤相饋りて、歳末の嘉祝とす。

註（一）栞草の記載要領を得ぬが、歳末饋るものが初鰤だとの意であらう。圖會には、改むる名を、つばす・めじろ・はまち・ぶり（關西語か）としてゐる。

季題解説 體長三尺餘、目方二貫目から三貫目位。頭部は圓錐形で口は中庸、背鰭二基相接して居り、體側には上側より尾部にかけて黄色條がある。背部は帶黄色を呈し腹部は白く尾は狹窄して强い。常に大洋に棲み、あぶこ・いなだ・わらさ・鰤の順序を經て成育する。寒中に漁獲したものを寒鰤と稱しその味最もよろしい。小田原鰤・紀州鰤など名高い。〔參照〕初鰤（ハツブリ）　夏—津走（スツバ）

例句

鰤　鰤荷ふ中間殿にかくれけり　其　角（五　元　集）
　　剛の座は鰤大ばえに見えにけり　太　祇（太祇句選）

大食のむかしがたりや鰤の前　同　（同）
めでたしな御子達からの臺の鰤　召波　（春泥發句集）
唯道や鰤五七駄を年の物　蕪路　（寶暦九）
灯ともして鰤洗ふ人や星月夜　子規　（子規句集）
腰蓑にあらき浪かな鰤を突く　正義　（ホトトギス）
舟板に怒れる鰤の血潮かな　卯星　（同）
青潮のもまれ躍れり鰤と見ゆ　里石　（續ホトトギス）

修補續考　ぶり Seriola quinqueradiata (TEMMINCK & SCHLEGEL) 冬季は味佳良なるを以て、寒鰤と稱して賞美される。體は背部蒼青で、腹部白く、その中間を縱走する黃帶がある。大なるは一メートル以上に達し、五十キログラムの重さがある。小より大に成長するに從つて、いなだ、はまち、わらさ、ぶりと名を變ずるを以て出世魚として貴ばれる。但し、この俗稱は地方によつて甚だ差異がある。

鮟鱇　琵琶魚　華臍魚　老婆魚　綬魚

古書校註

【滑稽雜談】大和本草に云、花臍魚、俗、鮟鱇と稱す。未だ出處を見ず。恐らくは妄稱爲る可し。坂東に多し。尤も珍賞す。西州には希也。冬は味好く、春は味劣る事、寧波府志に云ふがごとし。○按ずるに、此の者異形也といへども、上品の者にて、貴官に饗す。其の肉中の腸布袋の中に收む種々の肉形道具と云ふ。其之を割くに、其の袋に水數杯を入れ、魚を繩にかけ置きて切る也。俗にあんかうの提截と稱す。此の者東國常陸國佐竹より産するを上品とす。冬月專ら饗する故、近來季に用ゆ。

【采草】華臍魚　老婆魚・綬魚・琵琶魚の諸名あり。寧波府志　綬魚、蓋し其の腹に帶あり。蛟子の如く生じて、其の上に附く。故に名づく。その形、蝌斗の如くして、大なるもの盤の如し。呉都賦　琵琶魚、鱗なくして形琵琶に似たり。

季題解說　體扁平で、頭部大きく口も亦濶い。背部は淡褐色であるが腹はやや淡い。眞黑いのもあるが赤いのもある。腹部は膨れて大きく尾に至つてやうやく細く、丁度琵琶のやうである、よつて琵琶魚ともいふ。眼と鼻は共に上に向き背鰭の前方に突起してゐる釣竿様のものがあり、その尖端にある薄い膜を動かして他の魚を誘ふ奇性がある。漁獲したものを見ればその口から選

の如き汁を流し、腹を探ぐれば海老・鯛・鰈・鮫などを吐く。大きいものは五尺、小さいものは一尺位。冬期最も美味である。常に百尋未満の海底に靜止潛伏する。

【例句】

鮟鱇をふりさけ見れば厨かな　其角（五元集拾遺）

とめどなき大鮟鱇の涎かな　耿陽（ホトトギス）

【參考】あんかう Lophiomus setigerum (Vahl) 運動甚だ緩慢な、底棲魚で、背鰭の第一棘が甚だ長くこれにて小魚をおびき寄せて食ふ。春四五月頃、布狀の卵塊を産む、之を「あんかうの布腸」と俗稱する。頭部は大で幅廣く、口が甚だ大である。胸鰭は稍々扇子狀をなしてゐる。

おこぜ　虎魚　おにおこぜ　だるまおこぜ

【季題解説】體は長くてやゝ側扁し、皮膚は滑かで鱗がなく、黑色・紫色・黄色の斑點がある。體・頭及鰭には皮褶が多い。口及び眼は共に小さくて鋤骨に齒がある。背鰭に十七棘、臀鰭に二棘がある。これに螫されると烈しい疼痛を感じて病むことがある。種類は極めて多い。

【例句】

おこぜ　かりそめにおこぜに刺され病みにけり　今夜（續ホトトギス）

盲鰡（めくらぼら）　鰡盲となる

【季題解説】冬になると、鰡は脂肪が充滿して遂に眼球を覆ひ盲になるといふ。その頃、投網などに自ら躍り込んで來ることがある。【參照】秋——鰡

杜父魚（かくぶつ）　杜夫魚　角鯀　霰魚

【古書校註】

【滑稽雜談】○大和本草に云、杜父魚、伏見にて川をこぜと云ひ、京にて石持と云ひ、近江にてちんこと云ひ、嵯峨にてねまると云ひ、筑紫にてどんぽと云ふ、杜父也。西近江にて道滿と云ふ。江州の湖に多し。形、河鮠に似て色黑く、長さ五六寸有り。沙魚にも似たり。此の魚を河鹿と云ふ說あり。夜鳴く故に名づく。古歌によめり。一說ごりの大なるを河鹿と云ふ、皆同類也。京都に云ふだんぎぼうずと云ふ魚あり、又同類也。○按ずるに、此の者同類多し。又異名多し。北國にてかくぶつと云ひ、好んで雹を食す。故に國俗、雹の降る時に之を捕ふ。余、北越より出づる鹽鮋の者を見るに、形狀本草の說に合せり。大さ七八寸、之を食するに味美ならず。北國の産、其の形大也。

【栞草】【山海名産圖會】越前の霰魚は、此國の外になしとて、杜父魚に充

つるは誤り也とぞ。霰のふる時は、腹を上にして流るゝといふ。一名をかくふつといふ聲あり。是れ杜父魚の種類なり。杜父といひて、誤りにもあらざるか。

【季題解説】 鰍に似た魚で越前の國に産する由である。霰が降れば水面に浮び出て、霰に打たせて流れるといふ奇妙な性癖がある。美味であるといふ。叉鰍の異名だといふ人もあるがはつきりしない。【参照】秋―鰍

【例句】

杜父魚　杜父魚のえもの少き翁哉　蕪村（蕪村句集）
魚だなやかくぶつばかり藁敷て　梅室（梅室家集）
かつぶくや腹をならべて降霰　拙候（續瓊葉）

鯇（あら）

阿羅（あら）　沖鱸（おきすずき）　鯇綱（あらあみ）

【季題解説】 海底に棲み、頭・口ともに大きく、體形まるく、腹も大きい、眼は眞黒である。體色暗褐色にして黒い斑點がある。體形が鱸に似てゐるを以て沖鱸の名がある。小さいもので一貫五百匁、大きいものは三貫匁位。北海に産し、美味である。

氷魚（ひを）　ひうを

【古書校註】

【滑稽雑談】 延喜式内膳式に曰、山城國・近江國、氷魚網代各一處、其の氷魚九月に始まり十二月迄、之を貢ぐ。（略）○公事根源に曰、孟冬の旬、朔日、三獻の後、氷魚を群臣に賜ふ、云々。○八雲御抄に云、氷魚、十月頃の景物也。宇治の網代、田上などによめる也。○御傘に云、氷魚、冬也。網代にてとる魚也。○大和本草に云、鱠殘魚、俗にきすこと訓ず。甚だ誤れり。本草四十四卷、鱠殘魚の集解よく見るべし。白魚なる事明白也。鱗無し。但し目に黒點有るのみ。其の外の說も皆白魚也。江州田上・堅田などに冬月之を捕る。氷魚と云ふ。叉鱗魚の苗、冬春海に在る者、亦氷魚と謂ふべし。○或は云、氷魚は昔より近江田上にてとる。田上の網代に漏れたる氷魚を、山城宇治にて取るといへり。此の者、白魚叉は鱗魚の苗にあらず。別に冬生ずる白小魚侍るとなん。

【年浪草】 倭名抄に曰、切韻に云、鮊音小、今案ずるに俗に云ふ氷魚是也。白き小魚也。白魚に似たり、長さ一二寸ある者也。○和漢三才圖會に曰、鮊、氷魚狀白魚に類して大さ寸許り、秋の末より冬の初めに至るまで魚簗に聚まり、撈網を以て之を取る。古は江州の田上川・城州の宇治に多く之を取る。

【[illegible]】 此の氷魚と云ふもの、江湖の名産にて他州になし。伊勢・江戸の江にある白魚より勝りて、潔白なるもの也。江州田上及び宇治川に網代

を打ちて之を取る。堅田にては擻網を以て多く取れり。

【季題解説】近江琵琶湖及び山城宇治川に産する魚で外には産しないとされてゐる。白魚よりも淡白で優れてゐるとせられてゐる。江州田上、及び宇治川では網代によつて取り、堅田では掬ひ網で取るといふことである。以上は何れも古い時の話で、今日では川・湖の様子も變り、はたしてよく産するかどうか、又近頃は人工孵化によつて方々に移育するから外にも産するかもしれない。昔は大變珍とせられたらしく、「氷魚を賜ふ」とか「氷魚の使」とか宮廷に關した言葉までも出來てゐる。【參照】人事―氷魚の使(ヒヲノツカヒ)

【例句】

氷魚　網ぬけの氷魚は醉うて居たりけり　天打浪(ホトトギス)

【參考】ひを・ひうを・氷魚。琵琶湖に産する小鮎の子。小鮎は大抵晩秋に産卵するので、孵化後一乃至二ケ月を經た稚魚が、夥しく冬季に漁獲される。體は無色透明で 體長二センチに達せず。特殊な魚と思はれる程、一見、鮎の成魚とは形態を異にしてゐる。氷魚の俗稱の外、「シラス」の名が與へられることがあるが、これは白魚・鰯等の稚魚にも附せられる語で、いづれも體甚だ小、生時では無色透明、死ねば白色となるによる。

氷下魚（こまい）

氷下魚釣（こまいつり）　氷下魚汁（こまいじる）　乾氷下魚（ほしこまい）

【季題解説】たら科に屬する魚類で、腹部が白くその他暗灰色で、鱈に似て小さく、身長二十糎から四十糎位。朝鮮や北海道以北に産する。凍海に穴を穿つて網を入れ、また氷上に筵小屋を建てて之を釣る。味は淡白である。味噌汁・乾物、時には刺身として食ふ。「かんかい」はアイヌ語である。

【例句】

氷下魚　氷の窻に冥き海ぞも氷下魚釣る　誓子(ホトトギス)

氷下魚小屋見えつかくれつ吹雪かな　左人(同)

藻の上に敷く小蒲團や氷下魚釣　林魯考(同)

大鷲におどろきにけり氷下魚釣　三餘(續ホトトギス)

傍に樺太犬や氷下魚釣　乙信(同)

河豚（ふぐ）

ふく　ふぐと　まふぐ　あかめふぐ　とらふぐ　はりせんぼん　はこふぐ

【古書校註】【滑稽雑談】和訓義解に云、布久は、ふくるゝの略也。此の魚之を犯す時は怒る。怒る時は腹ふくるゝの義也。○大和本草に云、凡そ魚はまたゝきせず、目をふさがず、只河豚のみ目をうごかす。此の事本草にいへり。此の魚大毒あり。○按ずるに、和産所説のごとし。世俗甚だ賞す。又人を毒せず、或は毒殺する事千人に一人侍るあり。察する所、本草に云ふ肝及び其

の子を咬ひて毒するにや。和俗傳へて云、其の毒有るを試みるに、魚を擲地するに、毒有る者、必ず魚の丁を北になす。是を北向鯸(フク)と號す。此の者腹に慄と云ふ物有り。此の慄を喰ふ者、必ず死すといへり。然るや否を按ずるに、かの慄とは、肝の莢實の如き子なるべし。又は死を得る人、おほくは過食の謬ならし。愼むべし。

按ずるに、和産に腹立鯸とて、河魚に似てちひさき魚有り。味劣れり。只是を地に投じ、又木枝を以て動かす時は、魚腹を立てて、鞠のごとくにふくるゝ也。これ（一）貫緊泡の如しと云ふに合す。難波の浦又は堺浦などにまゝ侍るとなん。河豚の類ならし。仍て、押して冬に用ゆべきにや。

【三才圖會】按ずるに、河豚魚は河の名を得ると雖ども、河の中には之無し、江海に有るのみ。（略）狀は（二）上の說の如く、頭より尾に至るまで、腹背に小鬣有りて刺の如し。其の尾、岐無くして細し。肉白く、味淡く脆く、美にして飽かず。大骨の兩邊に赤き血肉有り。又、腸胃の後に、大骨に傍うて胡蝶の形の如き者有り。青白色。水に投じて動くが如し。此の物大毒有りて人を殺す。

【栞草】「古方選注」豚は猪の小き者、其の性よく嗔る。故に嗔豚の稱あり。魚中鯸鮐またよく嗔る。故に河豚の稱あり。「北山經」其の腹腴を重じ、呼びて西施乳とす。（陶覽云、河豚魚小也といへども、獺及び大魚敢へて咬はず。唯に人に毒するのみにあらず、又よく物を毒す。煮るときは、煤炲中に落つる事を忌む。肝及び子に大毒あり。食ふべからず。

㊟（一）本草綱目に「觸則嗔脹大貫緊如泡」とあるを指す。（二）本草綱目の說。

季語解說　頭部廣く、口小、皮膚に鱗なく背部に黑く不規則な斑紋がある、腹部は純白で皮膚軟弱、空氣を吸うて腹を膨脹させるのが此魚の特徴である。劇毒を有するが美味であるから食通間に珍重せられる、種類極めて多いけれども、本河豚・名古屋河豚・彼岸河豚・かなと河豚などが代表的のものである。

河豚料理は昔から下關が盛んで、本場として知られて居る。同地方の料理の方法や食べ方は多種多樣で技巧的に驚く程發達してゐる。調理の主眼は毒を去ることで、そのために頗る多量の清水を使用し、肉皮・內臟等から血液を洗ひ去り、更に白布を以つてこれを清め、ほとんど全部が食用に供せられる。

其季節は冬季で十月上旬から始まり翌年三月上旬に終る、下關地方で橙の黃ばむ頃から菜の花の開く頃までとされて居る、そして最も美味なのは十一月から三月までの三ヶ月である。料理は大別して刺身・ちり・味噌汁であるが、其各々に橙・唐辛子・しん菊・わけぎ等の生野菜を配する、また鰭を燒いて熱酒を注げば香ばしく、これを「鰭酒」と呼び、鰭の代りに刺身の一片を以つてするのを「身酒」と稱し、ともに上戶に賞味される。

紙の如く薄く切つた眞白い刺身を藍染付の大皿に並べて、皿の繪模樣が肉

を通してほのかに見られるなどは頗る美しいものである。
下關地方ではふくと呼んでゐる。［參照］人事―河豚汁（フグジル）

例句

河豚

あそび來ぬ鈍釣かねて七里迄　芭蕉　（皺筥物語）
ふくと程鰒のやうなるものはなし　鬼貫　（鬼貫句選）
雪路ふみ水仙刈つ夜の鰒　言水　（俳諧五子稿）
繪にだにも筆捨松や鰒嫌　同　（同）
盜人におひともいはん鰒の錢　去來　（去來發句集）
河豚あらふ水のにごりや下河原　其角　（五元集）
鈍ひとつとらへかねたる網引哉　同　（同）
打鎰にふくもゑびすの笑ひ哉　同　（同）
鯖にこりず鰹にこりず雪の鰒　同　（五元集拾遺）
詩人ゆるせ松江の河豚と言んに　同　（同）
手を切ていよ〳〵にくし鰒の面　同　（同）
妻ならぬ鰒ならうらみそ小夜衣　同　（同）
鰒のやうに腹を立するあけ麩哉　嵐雪　（玄峰集）
袴着て鰒喰ふて居る町人よ　蕪村　（蕪村句集）
岳茲て鰒になき世の人とはん　同　（同）
雪の河豚鮟鱇の上にたゝんとす　同　（新選）
河豚喰へと乳母は育てぬ恨哉　同　（落日庵句集）
妹が子は鰒くふ程となりにけり　同　（同）
鈍の面ラ世上の人を白眼ム哉　同　（明烏）
その昔かま倉の海や鰒やなき　同　（蕪村遺稿）
鰒の贊先生文を揮はれたり　同　（同）
人ごゝろ幾度河豚を洗ひけむ　太祇　（太祇句選）
鰒賣に喰ふべき顔とみられけり　同　（同）
鰒喰ふて酒呑下戸のおもひかな　同　（同）
河豚喰し人の寐言の念佛かな　同　（同）
佐殿に文覺鰒を進めけり　召波　（春泥發句集）
歸らめや鰒喰ぬ家によせし身を　同　（同）
鈍あらふいつもの男まいりたり　同　（同）
長生の肩や鰒もつりながら　也有　（蘿葉集）
ふぐ提て竹の中道誰が子ぞ　白雄　（白雄句集）
身をまゝに沈めかねたり河豚の腹　曉臺　（曉臺句集）
今はなき身をもて鰒のいかり哉　同　（同）
河豚くはぬ人さへもまた夢なれや　成美　（成美家集）
淺ましと鰒や見るらん人の顔　一茶　（享和句帖）
鰒好と窓むきあふて借家哉　同　（同）

とす。背部暗褐色、腹面白色 胸鰭の後方に大きな黒斑がある。はりせんぼん Diodon holacanthus LINNÉ 無毒の河豚で、皮棘が長大となつて突出してゐるのを、針千本といふ。はこふぐ Ostracion immaculatum TEMMINCK & SCHLEGEL. 全身が堅い皮で包まれてゐる無毒の河豚で、美味であるといふ。

潤目鰯（うるめいわし） うるめ

古書校註

【滑稽雜談】 按ずるに、うるめ、京都に出る者皆乾魚也。其の鮮なるものみる事なし。阿州に産するもの味甚だ美也。八九月の頃半乾なる者を出す。なまびと稱して甚だ之を賞す。其の味尤も佳也。冬月に至りて能く乾したるもの多く出づ。其の肉上霜のおけるごとく白し。是を粉吹といふ。味又よろし。或は日、宇留女は阿州の浦の名也と。又阿波の土產に魚醬を出す。名を酒盜といふ。積酒を散ずるの能ありといへり。是此のうるめの腸なりといへり。○又䱥の字をうるめと訓ず。近世の俳書にも此の字を出せり。未詳。

【栞草】 一わくかせわ 鰮（イワシ）の屬なり。䱥（ウルメ）は俗字也。正字未詳。此の魚目大にして潤ふ よつて名とす。阿州の海濱に多しとす。鰲にして京師の市にひさぐ。その多く來るときを季に用ふ。○青藍云、猿蓑集に、(一)二番草取りもはたさず穗にいでゝと云へる前句に、(二)灰打ちたゝくうるめ一枚、といふ附あれば、句體によりて雜たるべし。

註 (一) 去來の作 猿蓑卷五、芭蕉・去來・凡兆の三吟歌仙の第三。(二) 凡兆の作、同四句目。

季題解說

その形眞鰯（秋）に同じであるが、鱗やや小さく、剝げ易く、背部に黑い斑點が十五六點ある。その目大きくて赤くうるんでゐる爲めにこの名がある。眞鰯に比して脂肪少く乾魚に適する。常に溫暖な外洋に棲息してゐる。 參照 秋一鰯（イワシ）

例句

潤目鰯

齒朶の葉がこびりつきたる潤目哉　府中（同人）

寒鯉（かんごひ）

古書校註

【滑稽雜談】 按ずるに、此の者江湖池澤に生ず。和產往々にあり。俗間におほくは夏月の賞翫とす。然れども俳書夏に用ひず。寒中氷にとぢられ困死する者侍る。殊に常州簑和田にて寒中に一日之を捕る。是又毛吹草等の季物に出せり。常州にて取る者江武へ多く出で、是を賣買ふといへり。他國にも寒の鯉を捕る事侍るよし、猶考ふべし、

堅田（近江）の漁人多くこれを取る。賤民賞して饌とす。

【季題解説】近江琵琶湖に産する小魚である。大きいものでもせいぜい一寸五分位、寸にみたないものが多い。頭口大きく尾が細い。煮て喰ふが臭くて美味ではない。冬月漁獲する。

【例句】

鯋

しぐれきや並びかねたるいさゞ船　千那（猿蓑）

鯋網にまどひ入りたる鰶かな　涼舟（同　人）

水増て鯋とれぬ日續きけり　圓嶺（續ホトトギス）

【參考】いさゞと稱するは「あみ」類のことで、長さ僅に一センチ、稍ゝ蝦に似たる動物を指す。群棲してゐるので、之を目の細かい網にて漁する時は、多量に得られる。佃煮又は養魚餌料として使用される。動物學上から論ずれば數種に分れるが、その中の普通なのは Neomysis japonica NAKAZAWA. などである。

八ツ目鰻

八ツ目　寒八ツ目　かはやつめ　すなやつめ　八ツ目鰻取る

【古書校註】

【滑稽雜談】多識篇に云、鱓魚、今按ずるに也豆米宇那幾。○大和本草に云、和品、八つ目鰻鱺、うなぎに似て白點目の如くなる者八九あり。味好からず。世俗鱓を八目うなぎと訓ず、未だ是ならず。鱓は別物也。○按ずるに、大和本草の説、鱓似たれども、夏出でて冬蟄する物は、和品と別物にや。此の者、寒中に多く之を捕へ、鰕となし、小兒の蟲を殺すの藥に用ゆ。東北の地に出ず。殊の外、越後濱川直州にて、寒中にて之を捕る也。毛吹草、極月の部に載せて有るべし。

【三才圖會】北國の川澤に多く之有り。大抵尺許り、大なる者二三尺、背蒼黑く光有り。腹の色稍ゝ淺し。其の首尖らず。口裂けずして圓く、齒細小にして針の鋒の如し。兩眼の後に各ゝ七點有りて目の如く、星の如く、錐孔の如し。目と與に八數なり。故に八目鰻と名づく。然れども多くは七數有り、八數の者を撰びて藥に入れて用ふ。冬月堅氷を破りて之を取る。

【栞草】江海處々にあり。信州諏訪の海に取ものを名産とす。上諏訪・下諏訪一里ばかり、冬月氷みちて厚さ二三尺に及ぶ。この時に至りて鰻を採る也。先づ氷の上に小家を營むに、火を焚いて穴を穿ち、その穴に柱を建て、漁者の休み所とす。又、綱或は繩を入るべき穴を穿つにもみな燒火を以てす。さて延繩を入れ、共餌を以て釣りとることとその數夥し。氷なきときはうなぎ掻を用ふ。

【季題解説】體の兩側頭部によつたところに鰓孔が七個あつて、眼に稍ゝ似てゐる。そのために眞の眼と合して八つ、眼があるものとしてかういひなしたものである。初春産卵のために溯河する性があり、寒い水を好み暖い水には棲まぬ性がある。東京附近でも田川のやうなところにまで二三寸か

まる。（略）冬月盛に出で、春月終り盡く。夏月全く無き也。（略）熬海鼠は、（略）奥州金花山の海邊に出づる者は金色を帶ぶ。金海鼠と名づく、極上と爲す。又之を熬り、毎十箇、二つの小柱に懸け張つて、梯の如くなる者、串海鼠と名づく。

【季題の解說】棘皮動物、沙噀類に屬する。體は楕圓であつて長さ五六寸のものが多く、色は蒼黑・暗褐・黃褐の三種、暗黑色の雲紋がある。又たま〲赤色を帶びるものもある。その棲む所により體色體形を異にする。背には肉質の突起多く、腹面には三縱線の步足帶を有し、それから澤山の步足を出してゐる、之を伸縮して移動するのである。海底にあるものを覗いて見ればさながら草鞋のやうである。

三河大島・三河佐久島に產するものが美味とされてゐる。

海鼠煮る　阿波國北部海岸では海鼠がよく獲れる、冬季海鼠が獲れ初めると海參（煮海鼠）の製造が始まる、生の海鼠を大釜で煮て上げ日光に乾燥する、主に支那料理に使ふので輸出される、海鼠竈（海鼠釜）　海參を製造するに專用の竈を築き專用の釜が用意される、軒端又は濱邊など屋外に築くのである。

【例句】

海鼠

生ながらひとつに氷る海鼠哉　芭蕉（木曾の谿）
尾頭の心もとない生海鼠かな　去來（去來發句集）
海鼠喰ふはきたなきもゝかお僧達　嵐雪（玄峰集）
海鼠たゝみもむつかしき世や獨住　同（同）
思ふ事いはぬさまなる生海鼠哉　蕪村（落日庵句集）
大𩵋そしればうごく生海鼠哉　同（同）
生海鼠にも鍼こゝろむる書生哉　同（蕪村遺稿）
胴切にしもせざりける海鼠かな　太祇（太祇句選）
俎板に這ふかとみゆる海鼠かな　同（同）
身を守る尖ともみへぬ海鼠哉　同（同）
海鼠だゝみや有し形を忘れ顏　同（同）
海鼠だゝみの饗應しのばし業樂御所　召波（春泥發句集）
憂ことを海月に語る海鼠哉　同（同）
麗しく玉堂作器にこたゝみぬ　同（同）
釣針の智惠にかゝらぬ海鼠哉　也有（蘿葉集）
活て居るものにて寒き海鼠哉　几董（井華集）
わだつみや餌だにまかで海鼠かく　白雄（白雄句集）
生海鼠干伊良古が崎の二日凪　曉臺（曉臺句集）
くらきよりくらきに歸るなまこかな　同（同）
浮け海鼠佛法流布の世なるぞよ　一茶（七番日記）

なまこさへ逃るこゝろか手をすべる　梅室（梅室家集）
むくつけき海鼠ぞ動く朝渚　露沾（其袋）
水底の海鼠にあたる海鼠哉　買明（其雪影）
混沌ととりひろげたる海鼠哉　乙梈（皮籠摺）
　　　　　　　　　　　　そ　す
渾沌をかりに名づけて海鼠かな　子規（子規句集）
無爲にして海鼠一萬八千歳　同（同）
砂の中に海鼠の氷る小さゝよ　碧梧桐（新俳句）
東港の石垣深し海鼠澄む　天高（同人）
海鼠とり舟傾けて流れ合ひ　方舟（ホトトギス）
わだつみのそこひのなまことりにけり　律朗（同）
水底やわらぢの如き大海鼠　耿陽（同）
舷にかりにおきたる海鼠かな　一秋（續ホトトギス）
海鼠突く銛に海底歪んだり　有風（同）
おもむろに角をさめぬ大海鼠　蔓（同）
海鼠笊に住り下女ゑんつきせん猫へここにあり　盧子（句集盧子）

[illegible]　なまこ Stichopus japonicus SELENKA. 體は圓筒狀、背面には肉質の突起を生じてゐる。樺太から九州までの淺海に產する。煮干したものを「いりこ」と稱へ支那へ輸出する。支那では之を海參と呼び、賞美する。

きんこ Cucumaria japonica SEMPER. 金華山沖以北に產する小形のなまこ、之を煮干したるものは光參と稱し支那へ輸出される。

牡蠣（かき）

石花（かき）　まがき　いたぼがき　牡蠣田（かきた）　牡蠣採（かきとり）　牡蠣割女（かきわりめ）

[illegible]
【滑稽雜談】大和本草に云、牡蠣、海邊の石に付きて化生す。冬春味好し。四月以後秋まで食ふべからず。故に海人取らず。凡そ蠣は石に付きて一所に有りて動かず。故に牝牡の道なし。子を生まず。故に牡蠣と云ふ。一所に有りて動かさる者、蠣の外に稀也（略）又沖蠣と云ふ者、海中深き所に有り。大にして色黃也。夏之を食す。味劣る。常の蠣は石に付きて生ず。故に數個なり。沖蠣は數個ならず、蚌の殼のごとし。又ころび蠣と云ふ蛤の大きさなるあり云々。

【本草】蘇頌が曰、今海旁皆これあり。尤も多し。石に附きて生ず。魂々相連りて房の如し。呼びて蠣房とす。晉安の人呼びて蠔莆とす。初生止石の如し。四面漸く長じ、一二丈に至る者嶄巖として山の如し。俗、蠔山とよぶ。一房の内、肉一塊あり。大房は馬の蹄の如し。小なるは人の指の面の如し。潮來る每に、諸房皆開く。小蟲入るときはこれを合し、腹に充たしむ。[illegible]日、牡蠣、蛤蚌の屬、皆胎生卵生あり。獨り化生、純雌[illegible]

にして雌なし。故に牡の名を得たり。蠣といひ、蠔といふ、其の糲大なをいふ。○石花の字は、文選江ノ賦に見えたり。

季題解説 海中の石に附著して生ずる貝。外形はどぶ貝の樣で、片方は深く片方は扁平、大小形狀を異にしてゐる。剝身の成分は蛋白質八・四五、脂肪○・八九、鑛物質○・七九、水分八九・八九で頗る滋養に富み消化もよい。近來は至る所で養殖が行はれてゐるが、牡蠣の養殖を始めてやつたのは藝州草津の小西屋五郎八といふ者で、今から二百五十年前にその販路を大阪に求めて來た記錄がある。次で元祿年間に同地の仁左衞門といふ者が全國へ販路を開いたといふ事である。今でも牡蠣は廣島が本場といふことになつてゐて、その養殖してゐる所を牡蠣田といつてゐる。

養殖以外は海岸の石垣や巖礁に附いてゐるのを手鉤でほぢくつて採るのが普通であるが、遠洋航路から歸つて來た汽船の底に附いて居るのを採るものもある。

料理法は酢牡蠣・どて燒・殼蒸し・フライ・牡蠣飯などいろ〳〵あり、關西の海近い都會には、牡蠣料理專門の船料理が冬の川筋の點景をなしてゐる。牡蠣船といへばこの料理船の事になるのである。

牡蠣は剝身にして置くと瘦せるので購客の目の前で剝いて賣る事が多い。前記の牡蠣船の入口に姉冠りをした女が並んで牡蠣を割つてゐる情景なども面白い。〔參照〕人事—牡蠣船(カキブネ)

例句

牡蠣

蠣むきや我には見えぬ水かゞみ　其角（五元集拾遺）
たまはるは石花(カキ)にかしこしひねり文　嵐雪（玄峰集）
煎蠣に土器とりし采女かな　召波（春泥發句集）
から蠣の潮にもどるひとつかな　白雄（白雄句集）
殼かきや世には出られぬうつぼ舟　同（　）
煎蠣の跡しら雪となりにけり　曉臺（曉臺句集）
いり蠣に軒の松風聲ふなり　同（　）

芭蕉庵

菊枯て蠣むく蜑の隣哉　不卜（つゝきの原）
牡蠣殼に松葉散つたる漁村かな　夕村（新俳句）
走り牡蠣露ぐ女の祭髮　曲萱（同人）
牡蠣賣の桶見せ合うて別れけり　禪侍（同）
いさゝか酒あたゝかき酢牡蠣かな　蕪人（ホトトギス）
暖き飯に酢牡蠣を呑みにけり　冬衞（同）
牡蠣の桶　すゝ紫に濁つたり　蛸雨（同）

參考 まがき（Ostrea gigas Thunberg）最も普通な牡蠣は本種である。現今は本邦内で消費のみならず、小なるものを種貝として米國へ輸出する。

いたぼがき Ostrea denselamellosa Lischke. 殻は一ど圓形で稍〻厚く、隨分濃厚なる海水中に生活する。

冬の蝶（ふゆてふ）

凍蝶（いてちやう）

季題解説 初冬に蝶を見ることはあまりめづらしくもなく、暖い日などよく飛んでゐるのを見ることがあるが、冬が相當深くなつてからも風かげの崖の暖かなところなどに弱々しく生き殘つてゐる蝶を見かけることがある。死んでゐるのかと思つて觸れて見るとそれがほろ／＼と舞ひあがつてみたり、又生きてゐるとばかり思つて觸れて見れば凍て死んでゐたりするのはよく經驗するところである。冬の蝶のぢつと動かずにものにとまつて、凍てたるが如くに見ゆるのを指して凍蝶といふのである。（□□ 春—蝶）

例句 冬の蝶

石に蝶もぬけもやらで凍じかな　白雄（白雄句集）
篠原の小野になつかし冬の蝶　圭岳（同人）
凍蝶の摘まれたげにも見ゆる哉　文方（同）
凍て居たる諸羽全き蝶々かな　迷堂（ホトトギス）
凍蝶の吹き落されし日向かな　杏鋒子（同）
凍蝶や掃きしばかりの毯　一洲（同）
春の日に似て凍蝶のあがりけり　京童（同）
冱蝶に黄をあざむく月夜かな　楞童（渋ホトトギス）
冱蝶の簾の先にあがりけり　蛍風（同）
冱蝶の海苔簀にそうて上りけり　黄沙（同）
たど／＼と籬に沿ひて冬の蝶　泊雲（同）
土くれをしたひてとぶや冬の蝶　みかけ（同）
枯菊を刈れば翔つなり冬の蝶　夏叫（同）
凍蝶の落ちくだけゝり石の上　虚子（句集虚子）

冬の蜂（ふゆのはち）

季題解説 冬季生き殘つてゐる蜂である。（□□ 春—蜂）

例句 冬の蜂

冬蜂の死に所なく歩きけり　鬼城（ホトトギス）
冬の蜂駄菓子の色に來たりけり　夢筆（同）
冬の蜂死に轉け居る座かな　濱人（同）

冬の蝿（ふゆのはへ）

凍蝿（いてばへ）

季題解説 冬季生き殘つて居る蝿である。（□□ 夏—蝿）

例句

冬の蠅

憎まれてながらふる人冬の蠅　其角（五元集）
摺墨の香は忘れずよ冬の蠅　白雄（白雄句集）
冬の蠅貧女が髪にむすぼるゝ　同（同）
家の蠅凍て死たる骸もなし　同（同）
日影もる壁に動くや冬の蠅　闌更（半化坊發句集）
日のあたる硯の箱や冬の蠅　子規（子規句集）
枯菊に冬の蠅居て庭掃除　青々（春夏秋冬）
冬蠅をなぶりて飽ける小猫かな　鬼城（ホトトギス）
糊皿を舐めつ去らずよ冬の蠅　楚雨（同）
蒲團干せば喜びとべり冬の蠅　佛山（同）
冬蠅の三つになりゐし乾飯かな　一壺（同）
一匹の冬の蠅ゐておもしろし　巨童（同）
凍蠅のけはひしそめし日射かな　諸人（續ホトトギス）
冬の蠅蛸壺の砂おとしけり　味竿（同）
虻よりも大きな冬の蠅ゐたる　素十（同）

雪蟲（ゆきむし）

季題解説　雪國の人でも知らないものが多い位の蟲であつて、雪蟲とは學術語ではなく雪のある頃現れる蟲であるから雪蟲と稱するのである。北越雪譜といふ書の中に「越後の雪中に雪蛆あり、この蟲早春の頃より雪中に生じ雪消え終れば蟲も消え終る、始終の死生々雪と同うする、云云」又廣文庫と北國地方の人の説によると――「雪蟲には二色あつて一つは翼があつて飛び、一つは翼があつても藏めて這ひ歩き、足は六本、色は蠅に似て淡く（黒いものもある）、一見胡麻のやうに見える」この蟲は多く雪を蹴つて跳ねるが如くに運動し、人を螫すこともなく、夜中には雪の中に凍死したやうになつてゐるが、日があたれば自在に運動し群をなして飛び又は歩くのである。

紅梅なり。凡そ冬至より前にひらくを早梅といひ、山中平原、又地の寒溫によりて花の遲速あり。

【大和本草】 八朔梅は八朔のころより開く。花小にして八重なり。西土にてこれを寒紅梅といふ。冬至に至つて多くひらく。梅の魁なり。畿內の寒紅梅は、西土にて淺香山といふ。九月より開く。八重なり。但し九月に開くは狂花(アダバナ)なるべし。臘月に開くを正時とす。故に寒紅梅といふ。

【季題解說】 冬至既に開花する冬至梅、その他寒中に開花する梅の種類である。【同題】 早梅(サウバイ)　春—梅ノ

【例句】 冬の梅

冬梅の身にあまりたる匂ひかな　鬼貫　(俳諧七車)
今でさへ顏なつかしや冬の梅　來山　(續いま宮艸)
ゆつたりと寢たる在所や冬の梅　惟然　(惟然坊句集)
おもひきや縮譜の梅を冬の宿　北枝　(北枝發句集)
雪霜の骨となりにや梅の花　支考　(蓮二吟集)
我に此師走の梅を見るたわけ　杉風　(杉風句集)
冬の梅咲やむかしのあたゝまり　千代女　(千代尼發句集)
折々の日のおし跡や冬のむめ　同　(同)
冬の梅きのふやちりぬ石の上　蕪村　(蕪村句集)
寒梅や火の迸る鐵より　同　(同)
引よせてとらまへ見るや冬の梅　同　(蕪村句集拾遺)
鶯の逢ふて戻るや冬の梅　同　(蕪村遺稿)
寒梅や熊野の溫泉の長がもと　同　(同)
寒梅やうめの花とは見つれども　同　(同)
老木とあなどられしな冬の梅　同　(落日庵句集)
寒梅や奈良の墨屋があるじ貌　同　(同)
寒梅やほくちにうつる二三輪　同　(同)
とかくして散る日になりぬ冬のうめ　同　(同)
寒梅を手打ひゞきや老が肘　同　(はいかい袋)
ゆかしやと見れば見えけり除夜の梅　樗良　(樗良發句集)
盃は預けおくなり冬の梅　几董　(井華集)
散はてぬもみぢもあるを冬の梅　同　(同)
寒梅に比す産聲は男かな　白雄　(白雄句集)
あすの夜は月もかゝらん冬の梅　蒼虬　(蒼虬翁發句集)
美しく石に落ちちる冬の梅　桃榮　(小弓俳諧集)
賈島痩せ孟郊寒し雪の梅　子規　(子規句集)
寒梅や一寸とした寺一寸とした碑　虚吼　(春夏秋冬)
苔の上に蕾ほとばしり出ぬ冬の梅　默禪　(ホトトギス)
冬の梅咲く枝剪つてさしはさむ　溫亭　(同)

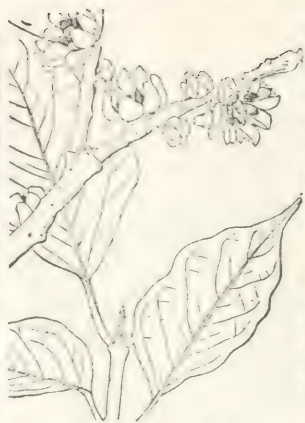
寒梅や青々として竹簃　凡平（同）
寒梅の固き蕾の賑しきとしを（同）
冬ながら梅さくこゝを假の宿　椎花（續ホトトギス）
寒梅のかけ足もとにありにけり　菖蒲園（同）
冬至梅暖爐の側でふくらみぬ　青邨（同）

蠟梅（らふばい）　唐梅（からうめ）　南京梅（なんきんばい）

古書校註

【滑稽雜談】時珍本草に曰、蠟梅、一名黃梅花。此の物、本、梅の類に非ず。其の梅と時を同じうするに因り、香又相近く、色蜜蠟に似たり。故に此の名を得たり。（略）〇大和本草に云、蠟梅、本草灌木に載す。近年中夏よりわたる。臘月に小黃花を開く。蘭の香に似たり。葉は柿の葉に似て、小にして長し。木の高さ、三四尺、四五尺に過ぎず。大坂にて唐梅と云ふ。梅の類にあらず。（註）〇（二）此の名臘月の義にあらず。其の花黃蠟色に似たり。故に是を名とする也。

註（一）時珍の本草には、なほ蠟梅に狗蠅梅・磬口梅・檀香梅の三種あることを說き、檀香梅が最も佳なることを述べてゐる。（二）著者の自註。

季題解說　蠟梅は花が蠟細工に似てゐるところから、又臘梅に臘月に咲くところからの名稱である。

蠟梅科に屬し庭園に栽培する落葉の灌木である。高さ七八尺から丈餘に達し、葉は對生で卵形、先端が尖つてゐて緣に缺刻がない。葉に先つて開花する。花被は澤山あつて內層の片は暗紫色を帶びて短く、外層の片は黃色で大きい。香氣に相富に高い。花の後で其花托は成熟して卵形の果實になる。觀賞用として栽培せられるが幾分か有毒成分を含んでゐる。東洋の原產である。我國には支那から僧錄を經て後水尾天皇の正保年中に始めて渡來した。支那に於ては古來園分文學上に讃美されたものである。

例句

蠟梅　山林蠟梅きりに此屋來て　斐畝（ホトトギス）
蠟梅の咲いてゐるなり梅の宿　羽公（續ホトトギス）

【學名】らふばい　Meratia praecox, Rehd. et Wils.（らふばい科）

支那の原產にして、庭園に栽培する落葉灌木なり、莖の高さ七八尺より丈

筒に達し、葉は對生し卵形にして鋸歯頭を有し、全邊なり、葉面鱗滿す、二月頃葉に先ちて黄色花を開く、花被は多數にして内層の片暗紫色を帶びて短く、外層の片は黄色にして大なり、强き香氣を有す、花後花托は成熟して卵形の果實をなす。狗蠅梅・荷花梅・檀香梅・素心蠟梅の品あり。尚、蠟梅の名は花の蠟細工に似たるより生れたる名稱なり。

冬櫻（ふゆざくら）　寒櫻（かんざくら）

【古書校註】

【年浪草】小樹也、花葉彼岸櫻に似て、其の枝垂れず。冬月花を開く。單葉なり、盆に植ゑて机案の傍に賞す。又八重櫻有り。稀也。

【季題解說】　櫻樹の一種である。實際について調べた人の話をこゝに揭げる。「兵庫縣武庫郡本山村岡本、今は烏有に歸した二樂莊の眞下の家で見たことがある。十一月中頃より二月頃まで霜や雪にもめげず咲き、寒櫻と呼んでをり、他の期には開花しない。高さ一間半位の木で、木は吉野櫻に似てをり、花は彼岸櫻と略ぼ同じ位で、色は眞白く、香もなく、枝一面に咲いて居り、丁度ゆすらむめの花のやうであつた。尙同地は北に山を負ひ南に展けて日當りのよい土地である。」【參照】會式櫻（エシキザクラ）　春　櫻（サクラ）

【例句】

冬櫻　　冬櫻ほとりに咲いて茶店かな　　たけし（ホトトギス）

　　　　一瓣を吐ける蕾や冬櫻　　風生（同　）

會式櫻（ゑしきざくら）

【古書校註】

【東都歲事記】日蓮宗谷中領玄寺に櫻ありて十月に花咲く、この故に會式ざくらといふ。當寺は甲州身延山の隱居寺なり、身延三十三世日亨上人、自ら植ゑる所にして、寶曆三癸酉年十一月廿三日上人三十三回忌の刻、始めて花咲くといふ。今にいたり、例年十月花さき、春に至りて花さくこと又餘木に同じ。亨師ざくらともいへり、池上本門寺にも是に等しき櫻ありて、此の頃花咲くこと當寺にかはらず。【參照】冬櫻（フユザクラ）　宗教―御命講（オメイカウ）

歸り花（かへりばな）

歸り咲（かへりざき）　二度咲（にどざき）　忘れ咲（わすれざき）　忘れ花（わすればな）　狂ひ咲（くるひざき）　狂ひ花（くるひばな）

【古書校註】

【俳諧初學抄】かへり花。小春には何花も咲く事有り。

【滑稽雜談】和俗の冬月の頃ほひ、諸木或は草類の花開くをすべてかへり花と稱す、中華に云ふ狂花、又櫬花の類也。俳道に冬に用ひ、則ち正花と用ゆ。一木一草に限らざる故也。

季題解説 歸り咲又は狂ひ咲き・忘れ花・二度咲きなどと云つて、新暦十一月の所謂小春日和の時、草木が時節はづれに花を咲かせるものをいふのである。例へば櫻・梨・山吹・躑躅などが二三輪又五六輪の淋しい花を咲かせてゐるのを見ることが出來る。毎年きまつて返り咲きする櫻も處々にあるやうであるが、たま〳〵通りがゝりの道端に返り花をつけてゐる櫻の木を見出したりすることがある。又庭の躑躅が二三輪返り花をつけてゐるなどもあはれに美しい景色である。

例句

歸り花

凩に匂ひやつけし歸花　芭蕉（後の旅）
霜白し鳥のかしら歸り花　言水（俳諧五子稿）
かへり花それにも敷かん莚切り　其角（五元集）
坊主小兵衛小兵衛坊主と歸り花　同（五元集拾遺）
十月を夢かとばかりさくらばな　嵐雪（玄峰集）
一度は醫師ものとはん歸りばな　許六（五老井發句集）
平藏が哥の名殘や歸花　桃隣（古太白堂句選）
みよし野はよ所の春ほど歸り華　千代女（千代尼發句集）
春の夜の夢見て咲や歸花　同（同）
明ぼのも暮の姿やかへりばな　同（同）
寢た草の馴染はづかし歸り花　同（同）
咲〳〵も果はらそなりかへり花　同（同）
焚火してひやさぬ庭や歸り花　蕪村（新五子稿）
屋根ふきがふしんな顔や歸り花　同（同）
薄枯てまねかずとてもかへり花　同（全集）
木ひとつに飛花落葉やかへり花　同（蕪村遺稿）
片枝は雪に殘して歸り花　同（落日庵句集）
菩しはしらでゐにけり歸花　太祇（太祇句選）
かへり花蝶のもぬけに薫す　召波（春泥發句集）
はゝ木々の梢はこゝぞ歸花　同（同）
雨雲の梢は奇也かへり花　同（同）
歸花桃李の美人覺束な　同（同）
咲出て心ならずや歸ばな　同（同）
王母から使やものかへり花　也有（蘿葉集）
其側に鶍のさし留やかへり花　同（同）
似せかとて取らぬではなしかへり花　同（同）
香のありと近目のしるや歸り花　同（同）
待とゝも聞かで相州にかへり花　同（同）
垣ゆへにやさしく咲て歸ばな　同（同）
若菅刈ありしあたりか忘れ花　同（同）

歸り花

吹過て春を減らすな歸花　　也有（[illegible]）
時雨にも少し思あり歸り花　　同（同）
おもてきる地主の木の間や歸花　　蓼太（蓼太句集）
春雨とおもふ日もありかへり花　　同（同）
夢に似てうつゝも白し歸花　　同（同）
恩なる宿の祈りや歸花　　几董（井華集）
稻づまの見えし夜明てかへり花　　同（同）
紅葉ちるこのもかのものわすれ花　　同（同）
すかさずや道に酒賣歸り花　　白雄（白雄句集）
かへり花咲よしもなく咲にけり　　同（同）
返り花いはゞ老木のおとろひ歟　　同（同）
十月の櫻つぼめる木かげかな　　同（同）
歸花祖父が戀の姿かな　　曉臺（曉臺句集）
住の江や一もと草のわすれ花　　同（同）
わすれ花忘れぬ宿の菜哉　　同（同）
夫そこに草の中なる忘れ華　　同（同）
歸り花一輪をしむ薪かな　　闌更（半化坊發句集）
見るほどに歸らんと思ふ歸りばな　　成美（成美家集）
北窓や人あなどれば歸り花　　一茶（享和句帖）
櫻木やつんのめつても歸り花　　同（七番日記）
紙屑もたしに咲けり歸り花　　同（同）
木瓜の株刈つくされて歸り花　　同（嘉永板發句集）
よきことはことゞばすくなし歸花　　乙二（たのゝえ草稿）
散ほどのちからは見えず歸り花　　蒼虬（蒼虬翁發句集）
かへり花闇にも見えて哀也　　梅室（梅室家集）
さた聞て夜る見に行ぬ歸花　　同（同）
木の下にたつかひありや歸花　　同（同）
深草の櫻は白し歸り花　　秀和（其袋）
深山木や畳束なくも歸花　　鶴舟（古今句鑑）
歸り咲く八重の櫻や法隆寺　　子規（子規句集）
返り花挿すや我句に迷ひあり　　楞童（ホトトギス）
一度來しこゝの茶屋なり返り花　　みどり女（同）
返り花かりそめの葉も二三枚　　素風郎（同）
とざしある花見の亭やかへり花　　久女（同）
眞青な葉も二三枚返り花　　素十（同）
忘咲ゆびさゝるれば在りしかな　　青畝（同）
たんぽゝの返り花あり松の下　　風史（ホトトギス）
返り花ありて茶店に憩ひけり　　愁去子（同）

はなびらのかなしきかへりあやめかな　忠雄（續ホトトギス）
荒波や返り花なる月見草　雨亭（同）
返り花まばゆき方にありにけり　烏頭子（同）
草深く山吹たれて返り花　眉峰（同）
アカシアに返り花ある遊里かな　孤岳（同）
まつさをな空に櫻の返り花　鷗汀（同）
日に消えて又現はれぬ歸り花　虚子（句集虚子）
蝶も飛ぶ日和めでたし歸り花　同（ホトトギス）
紫の薄き躑躅の歸り花　同（續ホトトギス）

寒椿（かんつばき）

冬椿（ふゆつばき）　早咲の椿（はやざきのつばき）

古書校註

【滑稽雜談】　三才圖會に云、山茶（ツバキ）數種有り。一種磬口の如くして、粉紅の者有り。十月開く。浙之温郡、白寶珠有り。九月花を發す。香淸くして嗅ぐべし。（略）（一）此說のごとく、和產又花早咲冬咲の者侍る。或は八九月に開く者、名月又は韋駄天などいへり。十月に開く者、一本の時雨、幾夜の霜などいへる類、計ふるに勝ふ可からざるか。近來の俳書冬椿を十二月の部とす。毛吹草には十月の部に之を註す。さも有るべし。早咲椿はすべて冬なれば、三月にも渡るべけれど、當月に用ふる事專一といふべし。作者心得あるべきにや。

註（一）三才圖會は山茶花をいふので、それを誤り引いての說である。

季題解說

冬椿・早咲椿などとも言はれる。元來、椿は初春から開花するものであるが、往々、冬期中に早咲するものがある、之をいふのである。

〔同〕侘助椿　春—椿ハ

例句

寒椿

うつくしく交る中や冬椿　鬼貫（俳諧七車）
冬つばき難波の梅の時分哉　召波（春泥發句集）
塊のはしやぎ拔けり冬椿　一茶（享和句帖）
火のけなき家つんとして冬椿　同（同）
遊ぶ日は菜賣になしや冬椿　乙二（たのゝえ草稿）
咲たやら折たあとあり寒椿　蒼虬（蒼虬翁發句集）
いつこけし庇おこせば冬のはき　龜洞（あら野）
鳥の喰たまゝに咲けり冬椿　飛來（鶉[illegible]發句集）
うまさうな色につぼむや冬椿　蘆本（安臘摺）
寒椿眞紅に咲いて一つかな　帆影郎（懸葵）
冬椿閑主の外は知らぬかな　禾人（ホトトギス）
冬椿乏しき花を落しけり　草城（同）
枯蔓のしがらもがらや寒椿　汀郎（同）

寒椿

うつ向きて雪の中なる冬椿　時綱（ホトトギス）
ひとり來て寂しさうれし冬椿　暮情（同）
光悦寺
寒椿すくなしとせず椿坂　素風郎（同）
きのふけふゆるみし寒の椿かな　秋皎（同）
葉おもての一輪咲きぬ寒椿　三山（同）
大島や椿の中の寒椿　双堂（同）
汲みとりて蓋する井戸や冬椿　澄水子（同）
鏡葉に玉よくらみぬ寒椿　淸三郎（同）
冬椿落ちてそこより畦となる　秋櫻子（續ホトトギス）
とりあへず妹が生けたる寒椿　水竹居（同）
うかゞへば倘一輪や冬椿　八郎（同）
太秦とうちたる菓子や冬椿　耳王（同）
葉の蔭に蔭にとありぬ冬椿　虚子（句集虚子）
山椿雪をかぶりて咲けるかな　同（續ホトトギス）

侘助（わびすけ）　唐椿（たうつばき）

季題解說　冬椿の一種、一重小輪であつて花の數もさほど多くはない、いかにも侘びた姿である。茶人など昔から愛好して來たものである。侘助を春とする說もあるけれども、事實冬から咲くので、冬に入れてもいいと思ふ。**參照**　寒椿（カンツバキ）　春　椿（ツバキ）

例句

侘助のひとつの花の日數かな　青畝（ホトトギス）
侘助やかくれ棲みたる彫刻師　鬼橋（續ホトトギス）
侘助や障子のうちの話し聲　虚子（句集虚子）

參考　たうつばき（Camellia reticulata, Lindl.（つばき科）支那原產常綠亞喬木にして、我が邦にては觀賞用として培養せらる、概形ツバキに似たれども、葉は稍長く狹くして尖端尖り、葉脈上面に溝路を有す、春日枝端に開花す、赤色にして主に重瓣なれども又單瓣の變種あり、侘助も此一變種である。子房に毛あるは此種の特徵なり。

山茶花（さざんくわ）　茶梅（さざんくわ）　こつばき　ひめつばき

古書校註　【滑稽雜談】三才圖會に云、茶梅、白と紅粉と二種有り。子出づるは單葉、接ぐに用つて開く。十一月中、花鵝眼錢の如し。○大和本草に云、茶梅は山茶の類にて、葉も花も小也。白あり、香よし。實に油あり。村民取りて利

とす。九月より花開く。家園に植うるには淡紅・深紅あり。紅をば海紅とも云ふ。其に本草に載せず。海紅は十月より二月迄花あり。中華の書に載せたり、云々。○按ずるに、和俗の山茶花と云ふは、茶梅又海紅也。又椿と稱するは山茶花なる事、本草の書に明らか也。椿は別物也。文字を用ひ來る事、世以て久しければ、改むる事なかれ。

【年浪草】 時珍曰、其の葉茗に類す。又飯に作る可し。故に茶の名を得たり。高き者丈許、枝幹交へ加り、葉頗る茶の葉に似て厚く硬し。稜有り。中濶く頭尖り、面綠、背淡し。冬花を開く。紅瓣黃蕋。格古論に花數種有り、云々。過生八牋に曰、山茶花は磬口の如し。外粉紅色の者、十月開いて二月巳む。

季題解説 椿科の植物で、こつばき・ひめつばき・茶梅・油茶などの別名もある。山茶花の文字は椿の漢名「山茶」と混同するので注意を要する。椿との相違の點は、1山茶花の花は晩秋から冬にかけて咲く、椿は寒椿以外は春である。2山茶花の花は平開する。(3)山茶花の葉は椿よりも小さい。4山茶花の嫩葉及び果實には密毛を生ずる等である。木は高さ丈餘、專ら庭園に植ゑて觀賞するが、四國・九州などの暖地では自生してゐる。幹は農具の柄などに用ゐる。花は單瓣・複瓣兩方があり、其の色は、雪白・

淡紅・濃紅・紅白交錯せるもの、斑紋をなすものなど色々ある。花の直徑は一寸五分ばかり、六瓣あるが其の一瓣は小さくて外部にあるから一見五瓣のやうである。多雄蕋、一雌蕋で、花後蒴果を結び中に三箇の種子を藏する。種子からは「かたし油」と稱する油を搾る。椿の油と同じ用途である。

例句

山茶花

兒消ぬ輿は山茶花崗壁　言水（言水五子稿）
山茶花に囮鳴日の夕かな　同（同）
山茶花や獨りこぼれよこぼれ盛り物　其角（五元集）
山茶花や宿々にして板の凍　雅然（雅然坊句集）
山茶花に發する鳥も旅宿かな　沾德（佳斎五子稿）
山茶花や來た消安き枝の霜　樗蘭（古來庵句集）
墨ぬりかし山茶花折にもどりけり　蒼虬（蒼虬句集）
山茶花を椿ときくも草枕　同（同）

山茶花や小雨に庭の薄明り　梅壽（古今句鑑）
山茶花に犬の子眠る日南かな　子規（子規句集）
山茶花や鳥居小き胞衣の神　同（同）
山茶花にしばらく朝日あたりけり　碧玲瓏（新俳句）
山茶花や海鳥一羽まぎれ來つ　几董（懸葵）
山茶花や毎朝掃いて砂減りぬ　小蘆角（同）
山茶花や屢々來る雨寒し　水鳳（ホトトギス）
山茶花の葉滑る花や霜の上　石鼎（同）
山茶花の葉にさゝやいて落ちしかな　月舟（同）
山茶花に二度目の盛來りけり　樂子（同）
山茶花や蕊を出でし瓣の皺　溫亭（同）
山茶花の咲きとぎれたる蕾かな　瑠璃洞（同）
山茶花や落花かゝりて花盛　花蓑（同）
山茶花に再びくらき玻璃戸かな　野風呂（同）
山茶花の散りしく朝も見飽きたり　野葡萄（同）
公園や山茶花垣の一茶亭　菅草（同）
山茶花のちりてたまれる庇かな　燕人（同）
指ふれし山茶花一瓣（ヒトヨ）こぼれけり　靜子（續ホトトギス）
山茶花のうちまじりたる落葉かな　田鶴子（同）
一しぐれせし山茶花を手折りけり　普士枝（同）
山茶花のちり浮びたる龍の髯　風生（同）
霜を掃き山茶花を掃く許りかな　虚子（句集虚子）

參考　さざんくわ Camellia Sasanqua, Thunb.（つばき科）暖地の山中に自生すれども、賞觀用として培養せらる、高さ丈餘、概形ツバキに似たれども葉小く、嫩枝に密毛あるを以て異りとす、又果實にも毛あり、秋冬の間花あり、自生のものは白色なれども園養品には淡紅・濃紅・純白・紅白交錯等種々異品多し、又單瓣重瓣の別を有す、果實より油を搾るべし。

八手（やつで）の花（はな）

天狗（てんぐ）の羽團扇（はうちは）　八角金盤（はつかくきんばん）

古書校註　【滑稽雜談】漢名未だ知らず。大和本草に曰、和品。八手の木西州に多し。葉の形蓖麻のごとし。又かへでの葉の如くにして、甚大なる事盤のごとく、葉厚し。とちの木の葉にも似たり。冬凋落せず。葉の本一にして岐多し。七八にわかる。白花を開き、黑き實なる、毒ありと云ふ。鰹のさしみを八手の葉に盛つて食すれば死すと俗に云へり。其の木の高さ五六尺に過ぎず。庭に栽うる人多し。然れども佳木に非ず。筑紫に山林にも有り。古來より日本に有る木なるべし。京畿にて未だ之を見ず。八手を肝木と云ふ人

有り。非也。(一)丈石曰、(一) 良安は此のもの五六月に小白花を開くといへり。いかゞにや。

季題解説 註 (一) 和漢三才圖會の所說。藝窓輪は實驗によつて圖會の說を否定してゐる。

八手は漢名を八角金盤と稱し、我が國では「てんぐのはうちは」などとも言つてゐる。長柄を有し、大さ尺に近い厚質な、光澤のある葉身が掌狀に分裂してゐるのから起つた名であらう。五加科の常綠灌木で暖地に自生し、高さ七八尺に達する。冬日、枝梢間に花莖を抽き、小枝を分岐して、淡黃白色の小花球狀をなして繖形花序に咲かせる。この花は冬の季感まことに豐かである。花後、果實は黑色に成熟する。此の果實は毒性である。

例句

八手の花

たくましく八手は花に成にけり　倘白（類題發句集）
寒き雨初めて降りぬ花八つ手　月斗（同　人）
濡れ炭の乾く匂ひや花八ツ手　美紅（蘆葉）
こぼれ花の葉につく雨の八ツ手かな　鐵枴（同　）
北向の大玄關や花八手　鬼城（ホトトギス）
ひねもすの暗き庭なり花八手　州風（同　）
花八手うすみどりにぞ見えにける　咲正（續ホトトギス）
花八手静なれども市の音　花谷（同　）

參考 やつで Fatsia japonica, Decne. et Planch.（うこぎ科）暖國に自生あれども、通常庭園に栽植せらるる常綠灌木なり、幹の高さ七八尺、一根より叢生す、葉は長柄にして掌狀に分裂し、頗る大きくして其質厚く、深綠にして光澤に富めり、秋末枝梢葉心に穗を抽き、分岐して淡黃白色の小花を球狀に開く、五瓣五雄蕊あり、花後實を結ぶ、熟して黑色となる。

茶(ちゃ)の花(はな)

古書校註 【滑稽雜談】（圖經本草に曰、茶の木瓜蘆の如し。葉は梔子の如し。花は白薔薇の如し。實は栟櫚の如し。莖は丁香の如し。根は胡桃の如し。其の上なる者は爛石に生じ、中なる者は礫壤に生じ、下なる者は黃土に生ず。）按ずるに本草に花時を說かず。和產の者冬月に開く、白花單瓣、黃蕊を

吐き、微に水仙花に似る。只茶梅の至つて小き也。香好し。

圖　（一）年浪草及び栞草には此の說を陸羽茶經に依つて出してある。

季題解說　茶は山茶科の植物で、温暖な地方に栽培せられる常綠灌木である。晩秋から初冬にかけて、葉腋上にふくよかな白色五瓣の小花を開くが秋よりも冬の季感が豐かである。花後、扁圓鈍三角形の果實を結び翌秋に至つて裂けて三個の種子を出す。

京都大原地方では、茶の花が皆葉かげに咲くと、その年は雪が深いと言ひ傳へてゐる。

例句

茶の花

宇治橋の神や茶の花さくや姫　宗因（梅翁宗因發句集）

茶の花や春によう似た朝日山　鬼貫（鬼貫句選）

茶の花や利休が目にはよしの山　素堂（俳諧五子稿）

茶の花やいつを盛といふけしき　浪化（浪化上人發句集）

茶の花や鶯の子の鳴ならひ　同（同）

茶の花や是も玄旨の植殘し　支考（蓮二吟集）

茶の花や乾きつたる晝の色　桃隣（古太白堂句選）

茶のはなや石をめぐりて路を取　蕪村（蕪村句集）

茶の花や黄にも白にもおぼつかな　同（同）

茶の花のわづかに黄なる夕かな　同（落日庵句集）

茶の花や風寒き野の葉の閑ミ　太祇（太祇句選）

茶のはなに文覺のやうな庵主哉　召波（春泥發句集）

茶の花にきゞす鳴也谷の坊　同（同）

茶の花や是から寺の畑ざかひ　也有（蘿葉集）

茶の花や世に木がくれの枝ひとつ　同（同）

茶のはなに喜撰が哥はなかりけり　几董（井華集）

茶の花に今般の雉子かくれけり　白雄（白雄句集）

住ばかく茶の花垣ぞうらやまし　同（同）

茶の花や誰が築せし里の道　同（同）

茶の花にたとへんもの歟寂栞　同（同）

ちやのはなや雲雀鳴日もあれば有　曉臺（曉臺句集）

茶の花に兎の耳のさはる哉　同（同）

茶の花や茶菓子のなさにおりに行　巣兆（曾波可理）

迯水の果や花さく茶の木垣　同（同）
茶の花に隠れんぼする雀哉　一茶（七番日記）
茶の花や餘計日のさす芥塚　梅室（梅室家集）
茶の花に見うしなふたる狐哉　頭水（泊船）
茶の花や蝶の来ぬ日の暖さ　殘笛（古今句鑑）
茶の花や川岸高く父低し　嘯山（新選）
茶の花に炭やく家を見によらん　巴風（續虚栗）
茶の花や庭にもあらず野にもあらず　子規（子規句集）
茶の花に梅の古木を愛すかな　同（同）
提灯に茶の花しるき夜道かな　碧梧桐（新俳句）
茶の花に月より降りし時雨かな　はじめ（ホトトギス）
茶の花や枝組み合へる葉に深く　夜牛（同）
草むらに茶の花咲きぬ光悦寺　雄月（同）
近よりて茶の花白き日和かな　野風呂（同）
茶の花やもりかためたる御佛飯　行々子（同）
茶の花のみな下向いて日和かな　石鼎（同）
茶の花や門のうちなる潜門　秋皎（同）
茶の花に眞逆さまの山路かな　春夜亭（同）
茶の花に富士かくれなき端山かな　秋櫻子（同）
茶の花や月の徑のあきらかに　凡圭（續ホトトギス）
茶の花や後ろに佇てる人の影　言子（同）
茶の花や庇がくれの小倉山　蘇城（同）
茶の花のころがつてをる甃　風生（同）
花活の茶の花落つる夜の音　虚子（句集虚子）
茶の花に暖き日のしまひかな　同（同）
綠見ゆる茶の花垣の低きかな　同（續ホトトギス）

【参考】ちや「Thea sinensis L.」つばき科の一支那竝に本邦の原産にして通常栽培せらるゝ常綠の灌木なり、高さ三四尺に達す、葉は長楕圓形にして鋸齒を有し、其質厚くして光澤あり、秋日葉腋に白色花を下垂す、果實は扁圓鈍三角形を呈し、翌秋開裂して通常三種子を出す、春季嫩葉を採りて綠茶及紅茶を製す。

榧の花

【古書校註】

【[illegible]】時珍本草に曰、榧の木牝牡有り、牡は華さき、牝は實る。冬月黄[illegible]花を開く、○[illegible]のごとし、

【栞草】時珍曰、其の木文木と名づく。斐然として章采あり、故にこれを榧といふ。信州玉山懸の者を佳也とす。【[illegible]】秋、榧の實た

柊(ひひらぎ)の花(はな)

古書校註

【滑稽雜談】今按ずるに、枸骨は俗に云ふ柊の木也。柊の字出所未詳也。花を開く事、本草に五月と云ふ。和產の者十月に咲く也。

【藥草】五出、細き白花をひらく。〔大和本草〕枸骨。本草時珍が說ひゝらぎにあへり。木皮を煎じ、鳥もちにすと之有り。

季題解說　柊は暖地の山林に自生するものを見ることもあるが、主として庭園に栽培せられる、木犀科常綠木本である。高さ丈餘に達する。葉は針形大鋸齒を有し、とげとげして觸るれば痛い。初冬、葉腋に小白花を開き、佳い香を發する。漿果は翌年黑紫色に熟する。かうしたさゝやかな花にも一寸心を惹かれることがある。

例句

柊の花

柊の花のこぼれや四十雀　浪化（浪化上人發句集）

ふれみぞれ柊の花の七日市　其角（五元集拾遺）

白亭

柊の花一本の香かな　素十（ホトトギス）

柊の香に近よれる歩みかな　拳三（同）

柊の花や乾の籬の隅　虛子（同）

枇杷(びは)の花(はな)

古書校註

【滑稽雜談】蘇頌圖經に曰、枇杷木高さ丈餘、肥枝長葉、大さ驢耳の如し。背に黃毛有り。陰密婆娑として愛す可し。四時凋れず、盛冬白花を開く。三四月に至つて實を成す。○時珍曰、楊萬里が詩に云、大葉長耳のごとく聳え、一枝盤に滿つるに堪へたり。荔枝分れて核を與へ、金橘郤つて酸無し。頗る其の狀を盡す、云々。○和產の者所說のごとし。和歌にも十月の題によめり。

【藥草】枇杷は冬華さき、實黃にして鷄子の如し。小さきものは杏の如し。味甘く酢し。

季題解說　薔薇科の植物で、九州・四國などには野生のものがある。大抵は果實を得る目的で栽培される。常綠の喬木で高さ三四丈にも達する。初冬の頃、枝頭に褐色の毛を密生した逞しい花軸を出し、複總狀花序に花を著ける。花は一見、花の如く又花にあらざるが如く見える、やゝ黃色を帶びた白色の五瓣を有し、直徑四五分で梅の花に似てゐる。雄蕊は二十本、花柱は五六本、芳香を放つ。子房下位は翌年初夏の候に熟して黃色となり、食用に供せられる。參照　夏―枇杷(ハビ)　枇杷葉湯(ウタフハビ)

例句

枇杷の花

来るとしの身もたのもしや枇杷の花　鬼貫（俳諧七車）
皆人の匂ひはいはじ枇杷の花　同（鬼貫句選）
寒き日にきつとがましや枇杷花　惟然（惟然坊句集）
枇杷の花鳥もすさめず暮にけり　蕪村（蕪村句集）
輪番にさびしき僧やびはの花　召波（春泥発句集）
をのが名の音はしぐれる枇杷の花　也有（蘿葉集）
びはの花汝みのるはいつの事　白雄（白雄句集）
蟋蟀村と名乗負なり枇杷の花　一茶（発句集）
掃だめの所かへけりびはの花　梅室（梅室家集）
ひそやかに来て居る鳥や枇杷の花　東瀼（新選）
職業の分らぬ家や枇杷の花　子規（子規句集）
朝風や板戸倒れて枇杷の花　紅緑（新俳句）
塔中や根深畠の枇杷の花　子洋（同人）
葉に乗れる夜べの粉雪や枇杷の花　静風（ホトトギス）
枇杷の葉の重畳として蕾かな　青夜（同）
花枇杷や枇杷を渡世の一漁村　芥江（續ホトトギス）
雄岩に堰かれし村や枇杷の花　白鳥（同）

寒木瓜（かんぼけ）

冬季の木瓜の花をいふ。

季題解説　木瓜は薔薇科の植物で、鐵脚梨とも書く。一名、からぼけとも云ひ、庭園に植ゑ鉢植等にして観賞する。普通春季、葉よりも先に開花する。花の色の白いのをしろぼけ、深紅なのをひぼけ、白紅雜色なのをさらさぼけといふ。〔季〕春—木瓜。

例句

寒木瓜

寒木瓜の咲きゐて苔ひしめける　清三郎（續ホトトギス）

室咲（むろざき）

室の花（むろのはな）　室咲の梅（むろざきのうめ）　室の梅（むろのうめ）

古書校註

【滑稽雜談】　室咲梅　□按ずるに、和俗小春以來一陽來復の比、梅花に限らず、椿或は草花にも、枝節の上に蕾を持ちて花を發せんとすれ共、寒に壓されて開く能はざる者あり。其の蕾ある枝を切取りて、一室の内に置きて、爐火を焼けて室内に入れ、或は土藏の内に置きて一夜之を煖む。則ち其の火氣に感じて忽ち花を發す。是を室咲と稱す。多くは梅を以て第一とす。古俳書之を載せず。然れ共世俗の賞する所、因つて之を記す。尤も冬

也。猶勘ふ可し。

【栞草】　室咲の梅。室の内、或は土藏の内に、爐火を備け、これを暖むる時は、其の火氣に感して忽ち開く。これを室咲の梅といふ。

【東都歳事記】　盆栽の草木、(一)この月室に收め、仲春に至りて取出す。大よそ山丹・花紫・おもと・茉莉・蘇鐵・覇王樹・阿蘭・麒麟角の類、寒を恐るゝもの、分けて室へ入る事早く、室は唐むろ・ぬりたれ・あんどうむろ・穴ぐら等あり。種類によりて差別あるべし。むろ咲の福壽草・梅は、九月の末よりあり。

註　(一)十月。

季題解說　溫室で草木に不時に開花させたものをいふのである。

溫室は蒸氣・電氣又は炭火を利用して溫暖にする外に、土地を四・五尺掘り下げてその中に藁・紡績屑・馬糞等の腐敗する時、高熱を出すものを選んで固く踏み込み、上部に土をかけて均らし、地表部には木框を据ゑ付け硝子障子や油障子を覆ひ被ぶせ、日光の射し込むやうにし埋設物の醱酵する熱を利用するものもある。(溫床作り)とか(フレーム作り)とかいふのは之である。又、南面傾斜の日溜りの土地を選んで穴を穿つて日光を射し込ましめて溫度を高める仕組をした元始的な溫室作りを營むものもある。室咲を作るには前のやうな室の中に苗を植ゑつけるとか種子を蒔くとかして作るのを普通とするけれども、時には桃の早咲を作るために冬季花芽のある枝を剪つて土中にうづめて置いたものを掘り出して、室の中に入れて溫氣を頻繁に與へて花をもたせるやうなこともある。室咲には梅・桃・木瓜・つつじ・薔薇の樹木類から、百合・蘭・櫻草又は洋種の花卉の殆ど何れの種類でも室咲として栽培することが出來るのである。

例句

室咲

内藏の古酒をねだるや室の梅　其角(五元集)

圍より大工召しけりむろの梅　同(五元集拾遺)

神垣や室咲匂ふ白在釜　似水(江戸弊麞)

むろの木の中に見ゆるや花からじ　不詳(毛吹草)

一しきり咲きてしまひやむろの梅　蘆水(ホトトギス)

身邊やとりかへて置く溫室の花　清三郎(同)

室咲のひとつの花を了へにけり　秋櫻子(續ホトトギス)

六角や池の坊立花

室咲の櫻の花を立花かな　ながし(同)

蜜柑(みかん)

季題解說　芸香科(ヘンルウダ)の植物、亞細亞東南部原產の常綠木で高さ丈餘に達する。六月頃、白色の五瓣花を開き、扁球形の果實を結ぶ。初め眞青で晩秋初冬から黃赤色に色づく。黃赤色の所は外果皮で、白色綿狀の所は中果皮、皮

を去つた後に殘る袋は内果皮に生じた毛茸である。冬季の果物として到る處で幅を利かしてゐる。種々變種がある。溫州蜜柑・八代蜜柑・紀州蜜柑・絹皮蜜柑・紅蜜柑・櫻島蜜柑などよく知られてゐる。

木の實は秋であるから、蜜柑も秋とするのが穩かとも思ふが、冬嗜食することが多いのであるから冬にも入れた。樹の上に紅熟してゐるのを見かけるのも初冬である。〔同類〕秋・蜜柑。

十夜柿（じふやがき）

〔季題解説〕京都黑谷の眞如堂で十夜の法會が行はれる時分に、此の柿を賣る露店が道筋の兩側に出並ぶ。眞如堂に限らず、永觀堂の紅葉見〔十一月中・下旬〕、岡崎の當屋〔十一月末から十二月上旬〕にも此の柿を賣る店が出る。掌へはひつてしまひさうな少し長目の小さい柿であるが、ほかの柿がもう無くなつた頃に出てくるのと、色が美しくて甘味が多いので珍重される。

〔同類〕秋―柿。宗教―十夜。

青木の實（あをきのみ）　桃葉珊瑚（たうえふさんご）

〔季題解説〕漢名を桃葉珊瑚と稱する。あをきばともいひ、山茱萸科の植物である。山野の稍〻陰地に自生する常綠灌木である。又觀賞用として庭園に栽培せられる。葉は寛大で厚く光澤があり葉だけでも美しい。初夏、小さな紫褐色の四瓣花を開く。其の實は棗の形をして冬季熟して紅くなる。光澤があつて美しい。雌雄異株であるから、雌株と雄株と兩方を同一の庭に植栽すべきである。〔同類〕春―青木の花。

〔例句〕

青木の實　つやゝかにかたまりうれて青木の實　荊花女（ホトトギス）

霜の上に落ちて沈みぬ青木の實　徒然（同）

〔參考〕あをき Aucuba Japonica, Thunb.（みづき科）山野の稍陰地に自生する常綠灌木なれども、之を庭園に植うること多し、葉は對生にしてはじめは綠色にして平滑なれども後に[illegible]質に變ず、葉は長橢圓形にして、長さ五六寸に達し、革質にして光澤を有す、雌雄異株なり、春日枝梢に花穗を出し、多數の紫褐色四瓣花を開く、花後橢圓形の實を結び冬月紅熟して美なり。

ねずみもちの實　ねずみもち

〔季題解説〕觀賞用の木として、籬垣の生垣などにも用ゐられ、又山野に自生することも多い。高さ六七尺、葉は對生して革質、冬も枯凋しない。七八月頃白い小花を圓錐花序に開き、十一月上旬、漿果結實するが、十二月頃になると其の實が熟して暗紫黑色を呈するやうになり、其の形と色も[illegible]鼠糞

に似て來るのでこの名をなすに至つたものであらう　玉椿・寺椿などの別稱を持つてゐる　ねずもちは父藥用となり、その製品島本膏は創傷及び淋巴内分泌促進に特效があるといふ。種子は熬つてコーヒーの代用とされることもある。　参照　夏ー女貞の花（ネズミモチノハナ）

南天の實（なんてんのみ）　實南天（みなんてん）

季題解説　南天は小蘗科の灌木で、夏季小白花を開いて實を結ぶ。實は圓く澤山かたまつて穗のやうになる。秋から冬にかけて赤くなり美しい。葉も美しく紅葉する。冬季花の少い時、花よりも紅なこの實は眞に美しい、軒端に雪をかぶつてたわわになつてゐるのも美しい。正月の活花などにも用ゐる。

一般に木の實が秋であるので、南天の實も秋とする人もあるが、雪と對照されることも多く、感じは冬のものであらう。　参照　秋ー南天の實（ナンテンノミ）

例句

實南天　實南天二段に垂れて眞赤かな　　風生（ホトトギス）

深山樒（みやましきみ）　深山莽草（みやましきみ）　茵芋（みやましきみ）　庭躑躅（にはつつじ）　岡躑躅（をかつつじ）　ははら草（ははらぐさ）　もくたちばな

古書校註

【滑稽雜談】　大和本草に曰、和品、深山莽草。葉は樒に似たり。實は紅なり。高さ二三尺に過ぎず。毒有り。煎じて菜蔬に灌げば蟲を殺す也。陰地を好む。挾みて活く。（一）此の者近來俳書に之を載す。（二）當月紅實を以て賞す故にや。

【年浪草】　太山樒、（三）同書に曰、深山樒、正字未詳、樹葉樒に似て、葉皺（シヤ）かならず。其の香、略々山礬花の香に似たり。四月細白花を開き、秋子を結ぶ、赤色にして仙蓼の子に似たり。○花彙に曰、茵芋（インウ）、深山樒と訓ず。深山背陰の地に多く産す。其の木高く上らず。好んで偃（タフ）れ臥して藤蔓の如し。其の色灰白、葉、莖頭に叢生す。冬を凌ぎて凋まず。形、蓬萊紫（チンチヤリゲ）の葉に類して長大なり。冬梢の間に五出の碎花を着く。穗をなして簇生す。粉紅褐色の實を結ぶ。樟柳（ヤマヤウ）に似て大なり、云々。按ずるに、和三・花彙の說、同名異種なり。和三の說は京師にて冬月花肆に多く、佛前の花瓶に插して紅實を愛するもの是なり。花彙は別種の說なり。

註　（一）十一月。（二）和漢三才圖會をいふ。

季題解説　芸香科の植物に屬し、深山幽谷の地に自生する草本狀灌木である。四五月頃、綠白色の小花を圓錐叢をなして頂生する。果實は核果で冬季熟せば紅色を呈する。　参照　夏　深山樒の花（ミヤマシキミノハナ）

例句

深山樒　降雪に深山しきみは高くあれ　　乙二（たのゝえ草稿）

千両（せんりやう） 仙蓼（せんれう） 草珊瑚（くささんご）

季題解説 金粟蘭（チヤラン）科の植物で、草珊瑚ともいふ。暖地に自生する多年生常綠灌木で陰地を好む。蘚苔の生ずるやうな庭園に適する。通常叢生して二三尺の高さになり、葉は長卵形で對生し、鋸歯を有する。五六月頃、梢頭に小梗を分けて綠色の小花を簇生し、球果を結び、冬期紅色になるが、又白色・黄色の種類もある。

参考 せんりやう（Chloranthus glaber, Makino.（ちやらん科）本邦暖地の山林樹下に生ずる常綠灌木なり、通常叢生して高さ二三尺に達し、莖稍草質を呈し節高し、葉は對生し卵狀長橢圓形にして鋸歯を有し平滑にして短柄あり、夏日枝頭に花梗を分ち綠色細花を開く、花後相集りて小球果を結び、熟して赤色卒に黄色を呈し、年を越えて落ちず。

萬両（まんりやう） 硃砂根

季題解説 紫金牛（ヤブカウジ）科の植物で「硃砂根」とも書く。暖地の陰地に生ずる常綠灌木で、庭園に栽培し觀賞する。高さ二三尺。厚くて光澤のある長橢圓形の葉が莖の先端に集り互生する。六月頃黄白色の小花をつけ、花後えんどう豆位の球果を結び、冬期、美しい紅色となる。又一種、果實熟して黄白色となるものもある。

例句

萬両　萬両のひそかに赤し大原陵　青邨（ホトトギス）
座について庭の萬両憑きにけり　青畝（續ホトトギス）
萬両をたま〳〵つゝむ茶の煙　同（同）
夕闇に萬両隠れ去りにけり　左兵子（同）
燭擧げて彼の萬両を照しけり　同（同）
萬両や使ふことなき上闕　鳳生（同）

参考 まんりやう Ardisia crispa, A.DC.（やぶかうじ科）山中陰地に自生する常綠灌木にして、又人家に栽培せらる、莖の高さ二三尺、暖國にては五六尺に及ぶものあり、葉は莖端に互生し、厚くして光澤を有し、邊緣に鈍鋸歯を具へ、稍革質す、夏日葉を有する小枝端に白色の小花を繖狀に排列す、花冠五裂し、花蕊黄あり、果實は熟すれば通常赤色を呈す。

藪柑子（やぶかうじ）　紫金牛（やぶかうじ）　やまたちばな　やぶたちばな　あかだま　ししくはず　平地木（へいちぼく）

季題解説 紫金牛科の常緑小灌木で山林陰地に生じ、稍厚みのある艶やかな葉を互生し、冬になると葉の間に小豆大の眞赤な實をぶらさげる。自生の物は全體で二三寸から四五寸位の高さであるが、觀賞用として栽培されてゐるものには一尺以上の物が尠くない。數本をあつめて細蔓で卷きつけたものを卓上用とし、或は小さな素燒の鉢植にして賣つてゐる。自生の物を採つて來て新年の蓬萊臺につかふのは昔からである。紀州の高野山は福壽草の自生地として有名であるが、藪柑子もなかなか豐富なやうである。東京附近では大島の三原山あたりが豐富で、十分間も摘めば手籠に溢れる位は採れるといふことである。暖地へ行くほど莖が長くて蔓のやうに這つてゐるものもある。これも藪柑子のうちだが一般には蔓柑子と唱へてゐる。〔參照〕新年・藪柑子（ヤブカウジ）

例句

藪柑子

髭かくるやと髯にかざす藪柑子　杉風（杉風句集）
ぬれいろや色なる雪の藪柑子　白雄（白雄句集）
いたづらに抜いて捨てけり藪柑子　芳園（ホトトギス）
祇王寺や雪にうづもるやぶかうじ　春霜（同　）

參考 やぶかうじ Ardisia japonica, Bl.（やぶかうじ科）山林陰地に生ずる常緑の小灌木にして、地下莖を引て繁殖す、又往々觀賞用として栽植せらる、莖は高さ四五寸乃至一尺許、長橢圓形の葉を互生し、通常輪生狀を呈し、一二層をなす、葉縁に細鋸齒あり、夏日梢葉間に白色の小花を開く、花後小球果を結び冬赤熟す。

冬木立（ふゆこだち）　枯木立（かれこだち）　寒林（かんりん）

古書校註 【栞草】夏木立は茂りたるをいひ、冬木立は葉の脱落したるさまなど云ふべし。

季題解説 冬木の群立するものを冬木立といふ。落葉樹の落葉しつくして群立するものを枯木立といふ。〔參照〕枯木（カレキ）

例句

冬木立

散とのみ見る日や婆娑の冬木立　鬼貫（俳諧七車）
からびたる三井の二王や冬木立　其角（五元集）
冬木立いかめしや山のたゝずまひ　同（五元集拾遺）
このむらの人は猿也冬木だち　蕪村（蕪村句集）
二村に質屋一軒冬こだち　同（同　）

冬こだち月に隣をわすれたり　同　（同）
斧入て香におどろくや冬こだち　同　（同）
みよしのやもろこしかけて冬木立　同　（蕪村遺稿）
冬木立家居ゆかしき麓哉　同　（同）
里ふりて江の鳥白し冬木立　同　（同）
乾鮭ものぼる景色や冬木立　同　（同）
鳩部屋に朝日もれけり冬木立　同　（落日庵句集）
よるみゆる寺のたき火や冬木立　太祇　（太祇句選）
盗人に鐘つく寺や冬木立　同　（同）
帶見ゆる貧乏柿や冬こだち　召波　（春泥發句集）
孟子讀む郷士の窓や冬木立　同　（同）
垣結へる御修理の橋や冬木立　同　（同）
郊外に酒屋の藏や冬木だち　同　（同）
黒ふ子もしろふてもさびし冬木立　也有　（蘿葉集）
猿も手の置所なし冬木立　同　（同）
冬木立月骨髓に入夜哉　几董　（井華集）
明ぼのやあかねの中の冬木立　同　（同）
組かけし塔むづかしや冬木立　白雄　（白雄句集）
冬木立馬一寸の行方かな　曉臺　（曉臺句集）
雲かゝる天の柱の冬木たち　闌更　（半化坊發句集）
捨果し景色でもなし冬木立　同　（同）
此うへは折るゝばかりぞ冬木立　同　（同）
雲起る谷の上なる冬木立　同　（同）
芭蕉翁百回忌、手向發句
ちなみよるもの無量也冬木立　士朗　（枇杷園句集）
賣家や一本よりの冬木立　一茶　（七番日記）
町中に冬がれ榎立りけり　同　（同）
山寺に豆鉄引く也冬木立　同　（九番日記）
虫籠の軒にふらりや冬木立　同　（同）
かるゝなら斯くかれよとて立木哉　同　（同）
津の國の何を申も枯木立　同　（おらが春）
ひと林揃ふて高し冬木立　蒼虬　（蒼虬翁發句集）
[illegible]
鵲の巣はほれかまし冬木立　乙由　（麥林集）
枯捨やところどころの冬木立　山竹　（二千化）
[illegible]丸に三千坊や冬木立　彫司　（類題發句集）
荒草道の一すぢ長し冬木立　子規　（子規句集）
三河に
茶畑や小村をめぐる冬木立　同　（同）

家二軒畑つくりけり冬木立　子規（子規句集）
寺ありて小料理屋もあり冬木立　同（同）
さびつくす北野の神の冬木立　瓢亭（新俳句）
其中に氷る池あり冬木立　非風（同）
から〳〵と日は吹き暮れつ冬木立　鳴雪（同）
冬木立田舟擔いで戻りけり　崇朝（同）
冬木中屋根苔青く濡れてあり　枯木（懸葵）
藤蔓の幹に喰ひ入る冬木かな　意外（同）
寒林や樹に喰入つて枯れし蔓　土音（ホトトギス）
寒林をつゞり亙れる筧かな　杜泉（同）
隔心の弟子と會ひけり冬木立　石鼎（同）
大石にたゞ一文字冬木立　萍雨（同）
新繩に卷きし筧や冬木立　巴潮（同）
冬木立糺の森に這入りけり　江仙（同）
冬木立ランプ點して雜貨店　茅舍（同）
道細く曲り奥ある冬木立　法師（同）
朝風や雀群るゝ枯木立　俳小星（同）
神の扉を木魂やたゝく枯木立　完（同）
　パリ
窓かけの眞赤にともる冬木立　友次郎（續ホトトギス）
影ひいて歩みいでけり冬木立　荻風（同）
とり出せし蜜柑かゞやく枯木立　躑躅（同）
大寺の茶店の軒も冬木立　虚子（ホトトギス）

枯木（かれき）

冬木（ふゆき）　冬木道（ふゆきみち）　枯木宿（かれきやど）

季題解説　冬木といふのは落葉樹と常磐木とを問はず蕭條たる冬の木をいふのである。

枯木といふのは冬になつて葉がことごとく落ち盡し恰も枯れはてたやうに見える木をいふのである。この場合にも木々の名を添へて枯木の形態を如實にすることがある。例へば枯藤・枯芙蓉・枯銀杏などといふのである。

參照　冬木立（フユコダチ）　名の木枯る（ナノキカル）　冬木の櫻（フユキノサクラ）　枯柳（カレヤナギ）

例句

枯木

其かたち見ばや枯木の杖の長　芭蕉（小文庫）
寐覺うき身を旅猿の冬木かな　鬼貫（俳諧七車）
鳩眠る冬木ながらや桔槹　言水（俳諧五子稿）
しばらくもやさし枯木の夕附日　其角（五元集）
家遠し枯木のもとの夕けぶり　召波（春泥發句集）
月大きく枯木の山を出でにけり　鼠骨（新俳句）

罠の儘の狸さげ出る枯木哉　四翠　（同人）
風の日は山脈青き冬木かな　櫻國　（ホトトギス）
冬木積む舟見てしめ障子かな　泊雲　（同）
大股に冬木をありく烏かな　牙集　（同）
人に逢ふが嫌で廻れる冬木かな　楊童　（同）
ぬかるみに出來ては消ゆる冬木影　曉南　（同）
戸をしむる音あらゝゝし冬木宿　淡路女　（同）
遙より冬木がくれの彩輿かな　道貫　（同）
岩かどを徑のおちゆく冬木かな　青嵐　（同）
額上げし栗鼠や冬木の空洞より　北鳴　（同）
こまごまと星をやどせる冬木かな　槐　（同）
笹の鯉生きて屆きぬ枯木宿　濱人　（同）
鵜來て色作りたる枯木かな　石鼎　（同）
雉子たつて霜を降らせし枯木かな　泊月　（同）
全山の枯木となりし靜かかな　としを　（同）
暈を著て月は春なる枯木かな　青塔人　（同）
背負籠のうちあたりたる枯木かな　念腹　（同）
滿月の歪み上りし枯木かな　文器　（同）
前山のけむりの如き枯木かな　竹灯　（同）
大いなる犬現れぬ枯木宿　鶴哉　（同）
赤く見え青くも見ゆる枯木かな　たかし　（同）
角折れし大牛飼へり枯木宿　小提灯　（同）
高枝の折れさがりたる枯木かな　朝暮　（同）
尼一人歩める園の枯木かな　友次郎　（續ホトトギス）
遠くより見ゆる出入や枯木宿　晨天　（同）
行くほどに水音變る枯木かな　漾人　（同）
巨いなる百日紅の冬木かな　裸骨　（同）
海の音きこえずなりぬ冬木中　露岸　（同）
道ばたに高き冬木のあるところ　虚子　（句集　虚子）
大空に延び傾ける冬木かな　同　（同）
一本の冬木の影の延びて來し　同　（ホトトギス）
日の當る冬木の幹を仰ぎけり　同　（續ホトトギス）
茶室あり柿の枯木のもとにあり　同　（同）

名の木枯る

季題解説　通常、名附け得べき木々が落葉して枯木になつた時總稱的に「名の木枯る」といふのである、例へば銀杏枯る・櫻枯る・柞枯る等、木の名を冠して枯るるといふのを總括的にいふのである。（→〔枯木〕）

例句　名の木枯る

鬼茨踏んばたがつて枯にけり　一茶（七番日記）
一もとの榎枯れたり六地藏　子規（子規句集）
小蟻や狸を祭る枯榎　同（同）
枯葉鳴るくぬ木林の月夜かな　同（同）
野施行の脛枯茨に破りけり　蝶衣（懸葵）
山莊や此谷すべて櫨枯るゝ　せん女（ホトトギス）
見るかぎり枯れ立つ桑と鵙の貫と　秋櫻子（同）
枯桑や國定村は其中に　嵐峰（同）
囮鳴くややがて日のある枯茨　杏鉄子（同）
枯茨は繭もろく刈れぬ飯食はん　花弟（同）
がら／＼に枯れて實高き芙蓉かな　石鼎（同）
實をあげて芙蓉は枯るゝばかりなり　青逸（同）
明け暮れの風やいよ／＼萩枯るゝ　韮城（同）
暮れそめて枯萩叢のかすかかな　立子（同）
水車への水とめてあり枯櫻　田士英（續ホトトギス）
遠山のつらなるや桑枯れにけり　七歩（同）
びゆう／＼と赤城颪に桑の鞭　五米（同）
桑枯れて近江にもある御陵かな　櫻坡子（同）
老女とはかゝる姿の枯芙蓉　長（同）
笹鳴の渡りてゆるゝ枯芙蓉　富久子（同）
山吹の枯れて亂れし力なし　蚊杖（同）
山吹の風におよいで枯れにけり　十歩（同）
流れ莖枯山吹のもらひゆれ　竹丹郎（同）
枯萩を焚く火なるべしあがりをり　椎霞（同）
枯萩に殘る夕日も失せにけり　山璣（同）
蕭條と枝垂櫻の枯れにけり　青郁（同）
枯萩の四五枚の葉の殘るのみ　虚子（句集虚子）
枯萩を刈りたる日よりしぐれけり　同（同）

冬木の櫻（ふゆきのさくら）　枯櫻（かれざくら）

古書校註【篗纑輪】冬櫻、冬木の櫻。かへり花などの事には非ず。只冬枯の櫻也。

季題解説　冬枯の櫻、卽ち葉の落ちつくした櫻をいふのである。

實作注意　櫻の一種である冬櫻とは區別すべきである。一說に櫻の歸り花のことをいふとある。しかし「わくかせわ」などには、はつきりと「歸花などのことにはあらず、たゞ冬枯の櫻なり」と記載してある。　**參照**　冬櫻（フユザクラ）
枯木の櫻・春・櫻

例句　冬木の櫻　冬枯の櫻の杖の十二本　虚子（續ホトトギス）

枯柳（かれやなぎ）

古書校註　【年浪草】柳は初秋桐に先だつて葉早く落つ。暮秋に至つて葉盡く黄落す。故に之を枯柳と謂ふ。凡そ諸木枯槁の中、垂柳獨り愛す可し。茶人最も之を愛翫す。

季題解説　柳といふ木は四季を通じて季題となつてゐる。その美しい風姿と共に、特に季節に敏感な植物である爲めである。太い幹からふき出したやうに垂れてゐる枝の一本々々を、靜かに明かに揃へてゐる冬枯の柳は、遠くから眺めるも立ち寄つて見上げるも深い趣がある。寒く光つてゐる水面にぢつと垂れてゐる枯柳、ところどころにみの蟲をつけて吹き上げられる枯柳、さまざまの姿態をとつて冬ざれた中に特有の面白さを見せてゐる。

〔季題〕枯木（冬）・柳（春）

例句　枯柳

川越て赤き足ゆく枯柳　鬼貫（鬼貫句選）
鼠喰ふ鳶のゐにけり枯柳　太祇（太祇句選）
古絲のまゝで春まつ柳かな　也有（蘿葉集）
葉はなひと振て見せたる柳かな　同（同）
枯々て月を柳の淺夜かな　蓼太（蓼太句集）
枯柳筏の飯にけぶりけり　同（同）
鷄を盜しは誰かれやなぎ　白雄（白雄句集）
枯柳雀の腹の見えにけり　且藁（小弓俳諧集）
古池や柳枯れて鴨石に在り　子規（子規句集）
枯柳八卦を畫く行燈あり　同（同）
質草の屏風かつぐや枯柳　水巴（ホトトギス）
枯柳星かたまりてかゝりけり　蕪人（同）
何時よりの縺ずれや枯柳　泊雲（同）
氷上へ馬車驅り下す枯柳　寄雨（同）
境内にたつぼろ市や枯柳　子瓢（同）
いつ來ても臺置いてあり枯柳　五庵（續ホトトギス）
枯柳縺ずれのせいはなし　柳風（同）

冬紅葉（ふゆもみぢ）

〔類題〕殘る紅葉

季題解説　紅葉の色の盛きるのは晩秋である。その紅葉は霜に傷められ冬めいた風に傷けられて、散る。さうした頃は既に冬季に入つてゐるので、

従つて「紅葉散る」といふ題は冬季とされてゐる。然し紅葉の中には、その木の種類とか性質から或は日當りや日當りの加減で、眞赤な葉をそのまま保つてゐるものがある。冬紅葉と呼ばれるもので、あつて木全體の葉が殘つてゐるといふのはむしろ珍らしく、大方は一枝か二枝に、而もその先の方などにかたまつて殘り映えてゐるのであるが、あたりの木々の葉は總て地に委してしまつた中で、よく〳〵當る日光の中で其らの葉は一層生々と鮮明に印象されるのである。人は稀にさうした紅葉に杖を曳いてくる。茶店も一二枚の戸を開けてさうした客を待つてゐる。〔参照〕紅葉散る冬、秋・紅葉秋、

例句

冬紅葉

蝙むきの手に明りさす冬楓　支考（[illegible]）
遣に焼て煙を揚るもみぢ哉　蕪村（蕪村句集）
下りざまに又鐘きくや冬もみぢ　几董（井華集）
汐風の吹よわるかたや冬紅葉　曉臺（曉臺句集）
ありやいかに隅田川邊の冬紅葉　同（同）
十分に紅葉の冬と成にけり　同（同）
めづらしや今朝みる雪の下紅葉　同（同）
なつかしや雪見し後の下もみぢ　同（同）
逆のつく礒となりぬ冬紅葉　旻羊（[illegible]葵）
松と交る枝のみ紅葉殘りたり　耕雪（ホトトギス）
一山の鐘の遅速や冬紅葉　草千（同）
清瀧川
紅葉枯れかはらけ沈みゐたりけり　芹生子（續ホトトギス）

紅葉散る（もみぢちる）　散紅葉（ちりもみぢ）

古書校註

【御傘】紅葉かつちるは、秋也。ちりそむるは冬也。（略）紅葉のちりて物を染むる、新式冬成る也。

【栞草】貞享式　に古式をもどきて秋とす。されどこは古式によるべし。

季題解説

觀賞客を集めて賑つてゐた紅葉も、やがて冬めく風雨にその色も極つて散りはじめる。左指をひろげたその葉は時に水車のやうにくる〳〵廻りながら散る。つい〳〵と風を切つて散る。枝や幹を傳つて誘ひ合ひながら散る。散つて迅い流れに消えるもの、堰に溜るもの、地上に錦を敷くもの、何れも樹上の紅葉に勝る趣を覺える。しかし露も凝り霜も置きはじめて、天地はすでに冬の寂寥に入つてゐる。箒をとつてゐる人の姿も枯れた枝の下で寒々と見られるのである。〔参照〕冬紅葉ふゆもみぢ　秋・紅葉もみぢ

例句

紅葉散る

たふとがる涙やそめてちる紅葉　芭蕉（笈日記）
散る紅葉水ない所も月夜哉　一茶（旅日記）

ぬり椽にさつと散たる紅葉哉　一茶（一茶句帖）
今打し畑のさまや散紅葉　同（發句題叢）
ちり初て紅葉に寒し東福寺　涼莵（皮こすり）
橋へちり橋からもちる紅葉哉　蘆笛（安永六）
紅葉散る岡の日和や除幕式　子規（子規句集）
ちる紅葉鞍馬の杉の木の間より　舞月（新俳句）
茶の煮えて紅葉掃るなり山の茶屋　疑星（春夏秋冬）
ちり紅葉かさりこそりと枝を傳ふ　野風呂（ホトトギス）
散るのみの紅葉となりし嵐山　草城（同）
ちり紅葉萵の砂にも三五枚　紫生（同）
柿もみぢ美しければひろひけり　羽城（同）
大空に紅葉まひとぶ日の出かな　吹治（同）
散紅葉松のあらしに添ひにけり　橙黄子（同）
美しき水に沈める紅葉かな　たけし（同）
ひとつ散りまたひとつ散り紅葉かな　青邨（同）
散紅葉沈みつゝ迅く流れけり　手古奈（續ホトトギス）
かさねたる袂の上の散紅葉　たか女（同）
散紅葉岩ばかりなるいづこより　風生（同）
しがらみの渦をめぐれる紅葉かな　草夢（同）
かづき行く紅葉しきりに散りにけり　王城（同）
紙屋川紅葉流れてつゞくなり　いはほ（同）
磐石を割りて礎とす散紅葉　たかし（同）

落葉（おちば）

櫻落葉　銀杏落葉　朴落葉　楓落葉　柿落葉　栗落葉　榎落葉　落葉時　落葉風　落葉山　落葉掃く　落葉搔く　落葉籠　落葉焼く

季題解説　秋になつて木々は成熟してその營みを休止する、葉は美しく紅葉し、やがて狐色に枯れ、ひらひらと舞ひ落ちる、風のある日も、風のない日も。これは落葉と稱へて冬の季と定める。まつあたり樹梢を離れる落葉、一面に散り敷く落葉、とりどりに趣がある。木々によつてその名を冠して、落葉の形態を如實にする場合もある、櫻落葉・銀杏落葉・朴落葉・楓落葉等といふのである。落葉は冬の初から春等の生活を[illegible]にするものである。
〔參照〕木の葉（冬）　枯葉（冬）　朽葉（冬）　夏—常磐木落葉（夏）　秋—[illegible]の木散る（秋）

例句

落葉

皀角子の實は其まゝの落葉哉　芭蕉（[illegible]）
百年の氣色を庭の落葉哉　同（[illegible]）
宮人よ我名をちらせ落葉川　同（[illegible]）

落葉

寒くとも三日月見よと落葉かな　素堂　（俳諧五子稿）
松陰に落葉を着よと捨子かな　同　（同）
かゞり火の中へ空しき落葉かな　來山　（續いま宮草）
待うけて經か〳〵風の落葉哉　丈草　（丈草發句集）
船待の笠にためたる落葉哉　同　（同）
賽錢を落して掃ふ落葉哉　去來　（去來發句集）
寒山と拾得とよる落葉掻　許六　（五老井發句集）
泥付かぬ落葉なりけり袖の上　沾德　（俳諧五子稿）
落葉見し人やおちばの底の人　同　（同）
葛の葉の落ぬ構や蜘の絲　桃隣　（古太白堂句選）
一颪庫裏へ吹込落葉哉　同　（同）
見るうちに月の影減る落葉哉　千代女　（千代尼發句集）
水のうへに置霜流す落葉かな　同　（同）
　寒山の賛
隣り〳〵わからぬものは落葉かな　同　（同）
往來待て吹田をわたる落ば哉　蕪村　（蕪村句集）
古寺の藤あさましき落葉哉　同　（同）
菊は黄に雨疎かに落葉かな　同　（同）
待人の足音遠き落葉かな　同　（同）
もしほ草柿のもと成落葉さへ　同　（同）
西吹ばひがしにたまる落葉哉　同　（同）
乘ものを靜に据る落葉かな　同　（新五子稿）
茶帒を捨る所も落葉哉　同　（同）
長生の舍りをうづむ落葉哉　同　（同）
伐たをす木は其儘の落葉哉　同　（反古衾）
落葉して遠くなりけり臼の音　同　（夏より）
屋根ふきの落葉ふむなり閒の上　同　（同）
細道を埋みもあへず落葉哉　同　（落日庵句集）
人疎し落葉のくぼむ森の道　太祇　（太祇句選）
掃けるが終には掃ず落葉かな　同　（同）
花もなき水仙埋む落ばかな　同　（同）
嫁みせに出て來る茶やの落ば哉　同　（同）
米搗の所を替る落葉哉　同　（同）
中窪き徑わび行落葉かな　同　（同）
川澄や落葉の上の水五寸　同　（同）
藤棚のうへからぬける落ばかな　同　（同）
あちこちとして居りたる落葉哉　召波　（春泥發句集）
篦深にも射たる垜の落葉哉　同　（同）

落葉

明るまで人はよく寢ておちばかな　成美（成美家集）
鴫まで落ば寒がる風情かな　同（同）
落ばして小寺〳〵のあそびよき　同（同）
人さらに狸のあとをふむ落ば　同（同）
落葉して日なたに立る榎かな　同（同）
鳥めらが來ては屋根ふむ落ば哉　同（同）
目みじかに見てもたらるゝおちばかな　同（同）
山川や落葉の上のいかだ守　一茶（一茶句帖）
おち葉して憎い鳥はなかりけり　同（七番日記）
またけふもおち葉の上の住居哉　同（同）
澁紙のやうなのばかり落葉哉　同（同）
おち葉してけろりと立し土藏哉　同（同）
焚ほどは風がくれたるおち葉哉　同（同）
風のおち葉ちよい〳〵猫の押へけり　同（同）
落葉して日なたに醉し小僧哉　同（同）
山里や疊の上におち葉かく　同（九番日記）
鶯の山となしたる落葉哉　同（發句題叢）
落葉して三月ごろの垣根哉　同（發句集）
鶯の口すぎに來る落葉かな　同（嘉永板發句集）
佛達をものゝ落葉にのせ巾　乙二（松のゝえ草稿）
鹽買てかへる徑や落葉時　同（同）
山鳥のひとり寐に行落葉哉　蒼虬（蒼虬翁發句集）
惠心寺を行過したるおちば哉　同（同）
鷄の來てくふものゝある落ば哉　同（同）
掃よせた落葉うごくや蟾の穴　梅室（梅室家集）
落葉火や一もえづゝの窓明り　同（同）
田の水にわざとがましきおちばかな　同（同）
つかねたる手にさはる迄落葉哉　同（同）
落葉して苔に音ある時雨哉　紹巴（大發句帳）
ぬけ道や落葉がくれの溜り雨　宗瑞（百番句合）
殘る日や落葉が森に蔦一木　一巴（古今句鑑）
掃きおろす牛の背中の落葉哉　如行（類塞）
水仙の落葉被いて開きけり　秀山（新選）
　　冐龍か土庵を結びし時
茶わかしてこゝに廬山の落葉哉　乙由（麥林）
一釣瓶汲てすてたる落葉哉　馬吹（類題發句集）
から〳〵と明り障子へ落葉哉　吟江（行雲日記）
落葉焚くいろ〳〵の木の烟哉　宗派（其袋）

縁に干す蒲團の上の落葉かな　子規（子規句集）
首入れて落葉をかぶる家鴨かな　同（同）
堀割の道じく／＼と落葉かな　同（同）

或夜ふと、豐山閣を[illegible]といふ僧社に[illegible]、左の一句を口ずさみたりと見てさめたり

境内は賑やかなれど落葉かな　同（同）
姥が垣根古下駄朽ちて落葉かな　同（同）
落葉して塔より低き銀杏かな　同（同）
枯葉朽葉中に銀杏の落葉かな　同（同）
樺の木に尾長鳥來て居る落葉かな　同（同）
大木の二本並んで落葉かな　同（同）
藁屋根にちらばる柿の落葉かな　李坪（新俳句）
墓原の落葉鴉の踏む音す　把栗（同）
谷底に落ちつく峰の木の葉かな　錦浦（同）
山鳥の落葉の中をあさりけり　叟柳（同）
淋しさの落葉積りぬ庵の留守　素香（同）
遠きより暮れて來りし落葉かな　太郎（同人）
久米の子等落葉を掃いて焚きにけり　一杉（同）
大方の落葉して風ぐ小雨かな　容堂（[illegible]）
無花果の落葉明るき干場かな　夜濤（同）
落葉して汝も日になる木かな　水巴（ホトトギス）
人の如落葉をふんで鷄をりぬ　香歩（同）
鴉たつて地(ツチ)を掃れる落葉かな　泊雲（同）
風落葉岩にはりつき暫くは　同（同）
手をひろげ子等たち騒ぐ落葉風　世蕪（同）
傘の上の落葉やいつか霽れてあり　温亭（同）
掃かず置きし落葉でいつかなくなりぬ　句亦（同）
落葉してくどもりひどく伏せ樋かな　泊月（同）
落葉掃く我に過ぎ行く月日かな　惠子（同）
むさしの空眞青なる落葉かな　秋櫻子（同）
礎石へ道のありたる落葉かな　橙黄子（同）
むりつゝ、落葉に枝のあはれにけり　巖（同）
撫で拂ふ去來の墓の落葉かな　雄月（同）
三つ一つ雨のきこゆる落葉かな　躑躅（同）
足もとの闇を過ぎりし落葉かな　友次郎（同）

洛北芭蕉庵

開けて見し障子のなかの落葉かな　琅玕子（同）
ぬぎかけし法衣[illegible]落葉かな　義王（同）

落葉

掃き落す落葉の山や一の谷　竹の春（ホトトギス）
山道のこゝまで掃かれ落葉寺　成外（同）
落葉掻く音に眼覺めぬ坊泊　波品（同）
枯枝を挿ざしや落葉籠　禪寺洞（同）
燈籠の灯りて掃ける落葉かな　潮海（同）
みさゝぎの落葉をはこぶ小舟かな　梅史（同）
落葉籠小童（コワツパ）の來てこれを負ふ　蝶六（同）
こぼしつゝ風の落葉を運びけり　藍女（同）
道に出て落葉焚きゐる御陵守　竹兜子（同）
仁和寺の山門に焚く落葉かな　長（同）
夕心慢落葉を焚きしかば　豺勝子（同）
芋掘りし跡なくなりぬ柿落葉　立子（同）
散りしきし柿の落葉や裏表　雅一郎（同）
うす青き銀杏落葉も置きそめし　たかし（同）
銀杏散る童男童女ひざまづき　茅舍（同）

[illegible]

朴落葉に豆腐包んで賣りにけり　星城（同）
柄をついて倒れなほりし朴落葉　水味（同）
朴一葉ふみ落したる鶯かな　南花（同）
邸内に山の鼻あり朴落葉　京童（同）
くきを離れて蔦のおち葉や風のまゝ　よりに（同）

自笑軒

落ちてきて二つ並びぬ蔦落葉　蚊杖（同）
美しき落葉の道や門のうち　草夢（同）
遠方に吹きさわぎゐる落葉かな　たけし（同）
百千の落葉從ふこともあり　鬼峰（同）
一枚の落葉舞ひ落つ菊の前　凡秋（同）
温泉の華をつけて沈める落葉かな　耳掻子（同）
落葉踏んでよろこび合へる童かな　つね代（同）
話しゆく落葉の深くなりにけり　麻葉（同）
吹かれきてともに吹かるゝ落葉かな　靜風（同）
落葉掻しづかに鹿を追ひにけり　芳子（同）
落葉籠背負ひしまゝに合掌す　葉句亭（同）
くれおた戸によせてある落葉籠　泉司（同）
落葉かく童やがて遊ぶなり　左兵子（同）
落葉かく音八方にある如し　穀雨（同）
落葉掃いて鹿の足跡殘りけり　橙青（續ホトトギス）
落葉掃くわぎもが髮の落葉かな　俚汀（同）

夕もやは落葉籠置くほとりにも　孔甫（同）

柿落葉風に從ひ掃きにけり　竹亭（同）

柿落葉ふみて落柿舍ひと廻り　水竹居（同）

屋根ごとに柿の落葉や貴船村　溪水（同）

神の松銀杏落葉をふりかぶり　王城（同）

田にかけて銀杏散るなり蟹滿寺　比古（同）

この道の欅の落葉はじまりぬ　風生（同）

一枚の朴の落葉のうすみどり　夢香（同）

林間や落葉の中の朴落葉　雨意（同）

樹落葉重なる上に朴落葉　手古奈（同）

[illegible]

梅の木の落葉毎朝二つ三つ　素十（同）

雜木林なる落葉する日もすがら　壺子（句集 廬子）

ひら〳〵と深きが上の落葉かな　同（同）

庭隅に枯れてなくなる落葉かな　同（同）

靜かにも枝はなれたる落葉かな　同（ホトヽギス）

踏み歩く落葉の音の違ひけり　同（ホトトギス）

見失ふ落葉の上の落葉かな　同（同）

落葉焚く園のかげにかくれけり　同（同）

[illegible]畑に欅落葉のうら敷きぬ　同（同）

つく杖の先にさゝりし朴落葉　同（同）

たら〳〵と藤の落葉のつゞくなり　同（同）

木の葉（このは）

木の葉散る　木の葉の雨　木の葉の時雨　落葉の雨　落葉の時雨

古書校註

【山之井】落葉衣といひては、霜のはかまつしたかさね、昔衣のうはぎたどいひなし、木の葉猿といひては、(一)木からおつるたとへをよせ、木の葉天狗といふには、蜘のゐにかゝりしためしなどをも思ふ。猶、山里の道もわけなく、谷川の流れもひつき、森も林もまばらなるけしき、又、(二)木がらしの女のことを葉をよせ、(三)落葉の宮の名をたて、(四)風のちぐさに見ゆるあやとも、(五)から紅に水くゞる景氣なども。

【御傘】木の葉ちるも同じ事也　[illegible]ことなくて木の葉といへど、枝に付きてあれば雜なり。但し、木の葉天狗・木の葉猿・木の葉衣、皆冬也。[illegible]雜也。　柳・桐・柿・[illegible]ちるは秋也　皆初秋に一葉づつちる故に、是等の木の名をさゝねども、只一葉ちるといひて秋に成る也。又、松・杉の落葉は雜也。又、落葉に常磐木のちる・松の葉の散る、連

には折を嫌ふとあれば、誹には西を嫌ふべき義ながら、何の木の葉のちるも、(六)四の内なれば折を嫌ふべし。

木の葉の雨、植物なり、冬なり。降物に二句、雨には七句去る也。無言抄等をみれば、降物には兎角嫌ふまじきとあれ共、新式に分別すべき物の所に、両方に嫌ふべきよし分明なり。

【滑稽雑談】　連歌新式抄に云、松竹の落葉、雑也。柏の落葉など夏散る者也。夏か。柳ちるも落葉の内也。(略)(二)師説に云、木のはちるに色結べば秋也。且ちるも秋也　朽葉は色をむすびても冬也。朽の字重き故也。

木の葉の雨、連歌新式抄に云、木の葉の雨、(略)ふり物にあらず。(三)紹巴式に云、木の葉時雨同前也

【栞草】　わくかせわ　落葉と木の葉、總べていふときは同じ。別けていふときは少し趣意たがひあり。其の意を得べし。つれづれ草「木の葉落つるも先づ落ちてめぐむには、下よりきざしつはるにたへずして落つるなり。

註　(一)本文の末尾に、例句として「猿も木からおつるたとへの木葉哉」と見えてゐる。(二)源氏物語雨夜の品定に出る女で、左馬ノ頭が通つた浮氣な女。(三)光源氏の妻の女三ノ宮の姉で、柏木・衛門督が戀つて懊惱する女(源氏物語)(四)少輔の歌、「霜枯は一つ色にぞなりにける千種に見えし野べにはあらずや」(後拾遺)(五)業平の歌、「ちはやぶる神代もきかず立田川から紅に水くゞるとは」(古今集)(六)一座に四つの意。

季題解説　降霜期に及んで落葉樹の落葉したもの、或は凋落しようとして未だ木にある枯葉を總稱したものである。

その落ちる有様を雨に擬して、木の葉の雨・落葉の雨・木の葉の時雨・落葉の時雨などいひ倣されてゐる。〔参照〕落葉(冬)

例句

木の葉

しばの戸にちやをこの葉かくあらし哉　芭蕉（續深川）
三尺の山も嵐の木の葉哉　同（己が光）
葉は散てふくら雀か木の枝に　鬼貫（鬼貫句選）
水底の岩に落つく木の葉かな　丈草（丈草發句集）
一葉ちりいくらもちりて月夜哉　嵐雪（玄峰集）

辭世

一葉ちる咄一葉ちる風のうへ　同（同）
世の中にやどるものなし散木のは　杉風（杉風句集）
いつ喰ふて落る木の葉の蟲の穴　同（同）
思ひなし木の葉ちる夜や星の數　沾德（俳諧五子稿）
市中や木の葉も落ず不二颪　桃隣（古太白堂句選）
木葉散雨うちはれて夜明たり　太祇（太祇句選）
木葉ちる風や戸をさす竈の前　同（同）
うら表木の葉浮べるさび江かな　白雄（白雄句集）
そむき見れば木の葉疊の林かな　同（同）
夜の音木のは身を刺おもひあり　同（同）

風の木の葉行ざま一葉摑ける　同（同）
翁婆の有がたくなる木の葉哉　巣兆（曾波可理）
すみだ川木の葉がちにもなりにけり　成美（成美家集）
ちる木の葉いくへの下の我ならむ　同（同）
かけがねのさても錆しよ散る木の葉　一茶（旅日記）
吉原のうしろ見よとや散る木の葉　同（七番日記）
二つ三つ赤い木の葉のあら寒き　同（同）
散る木の葉社の錠の錆しよな　同（同）
夕暮や土にかたれば散る木の葉　同（同）
散る木の葉音致さぬが又寒き　同（同）
水をまく奴が尻へ木の葉哉　同（同）
赤いのが先へもけたる木の葉哉　同（同）
文字のある木の葉もおちよ身延山　同（同）
いる程は手でかいて來る木の葉哉　同（同）
門畑や猫をじやらして飛ぶ木の葉　同（一茶句帖）
門先にちよいとうづまく木の葉哉　同（同）
黒塗の馬のはげゝり散る木の葉　同（同）
役にして木の葉拾ふや寺の山　同（一茶新集）
木の葉とはちる頃の名かこのはとは　乙二（たのゝえ草稿）
ならの葉はまだなくならず柞の木　同（同）
角つつむ牛を見やうぞ散るこの葉　同（同）
小坊主は風も引かぬや散このは　同（同）
掃よせた木の葉も塚と見る日哉　蒼虬（蒼虬翁發句集）
ありがたき御膝の上の木のは哉　同（同）
心すみ行や木の葉のちる度に　同（同）
近〲と城の崎見えて散木のは　同（同）
しら壁にあたる月夜のこの葉哉　同（同）
次〲〲木の葉散行天氣かな　同（同）
音がするたびに出て見る木の葉哉　同（同）
常にさへゆかしかりしを散木のは　同（同）
膝にふる木のはを夢や馬の上　梅室（梅室家集）
木の葉ふる奥にひかへて松の月　同（同）
單の雪窓にはれたる木葉哉　杉（慶長十四年）
水鳥の行にしたがふ木葉哉　[illegible]江（拾[illegible]日記）
さま〲の木葉あつまる山路哉　枳風（續虛栗）
紫貫のもて來てこぼす木葉哉　曼草（類題發句集）
槙に落てつめたき木葉哉　孤[illegible]（俳諧古選）
木の葉やく寺のうしろや普請小屋　子規（子規句集）

木の葉　射るが如く落ち來し木の葉あしに行り　千代（ホトトギス）
御廊下の木の葉拾うて案内僧　螺堂（同）
まのあたり闇を落ちゆく木の葉かな　友次郎（同）

枯葉

【季題解説】降霜期に入つてから落葉樹の葉又は草の葉の枯れたものをいふのであつて、元來樹上又は莖にあると凋落したものとを問はないのであるが、俳句では主として樹上又は莖に殘つてゐる枯葉を特にいふやうである。〔一二三〕落葉（ら）朽葉（く）

【例句】
枯葉　夕照にひらつく蝶のかれ葉哉　去來（去來發句集）
しがみつく岸の根笹の枯葉哉　惟然（惟然坊句集）
山歸來の枯葉吹かれぬ峠越す　紅々（ホトトギス）

朽葉

【季題解説】落葉の雨雪に曝されて朽ちたものをいふのである。里近くの林野では肥料等の目的で綺麗に掃かれて終ふが、一度深山に入れば積年の落葉が堆く朽ちたまゝとなつてゐて褥の如く、踏めばふかふかと感じ又朽葉の匂が高く鼻をうつのである。〔一二三〕落葉（らく）枯葉（カレ）

【例句】
朽葉　朽葉よりあらはす苔の緑哉　紹巴（大發句帖）
山の井に色よきまゝの朽葉哉　素外（古今句鑑）

寒竹の子

【古書校註】

【滑稽雜談】時珍本草に云、江南・湖南の人、冬月大竹の根下未だ土を出でざる者を掘つて、冬筍と爲す。東觀漢記に、之を苞筍と謂ふ。食ふ可く、珍品と爲す。（略）○按ずるに、和朝にも暖國には冬筍を出す事往々に侍る。俗呼んで孟宗竹と名付けたり。かの楚國の先賢傳に云ふ孟宗の故事よりいふならし。又寒竹を一説にいへり。○漳州府志に曰、雪竹笋、冬春の交に生ず。○泉州志に曰、味淸甜、之を雪竹と謂ふ。○大和本草に云、和品、

寒竹冬筍を生ず。又孟宗竹とも云ふ。色黒く細し。（是らの説猶考ふべし。）

【年浪草】和漢三才圖會に曰、鳳尾竹高さ五六尺に過ぎず。葉細く三分許り、其の笋、冬月生ず。故に俗呼びて孟宗竹と曰ふ。（）又一種、丈け高く太さ凡そ尺餘に及ぶもの有り。薩州に出づ。茶人好みて花器と爲す。其の笋、冬月生ず。是、眞の孟宗竹乎。孟宗の名は孟宗が事に起る。蒙求及び孝子傳に出づ。

季題解説 寒竹は通常庭園生垣などに栽培する小形の竹である。高さ五六尺から一丈位、莖の太さは大抵二三分、風致のある竹である。それが寒中に筍を生ずる、取つて食用にするがこれまた風味が多い。〔季題〕夏―筍

例句 寒竹の子

掃き寄せや寒竹の子の横ざまに　公羽（ホトトギス）

參考 かんちく（Chimonobambusa marmorea, Makino.）（禾本科）

通常庭園に生垣等に栽植する小竹なり、稈高さ五六尺、莖太さ大抵直徑三分許あり、節間は其の脚は二三寸許、上部四五寸許にして、表皮は紫褐色を帯ぶ、枝繁く葉密にして、十月頃筍を生ず、故に寒竹の名あり、其の籜に斑紋あり。

雪折

季題解説 雪が積もつた爲めに竹や木が折れるのは屢々見る處であるが、大きな竹が折れる場合など其の豪快な音と共に雪煙が四方に飛散して男性的の美しさを見せる。城の石壁のはなにさし出てゐる松の一抱へもある枝が折れ落ちることなどを想像しただけでも勇ましい。〔季題〕天文―雪

例句 雪折

雪折や雪を湯に焚く釜の下　蕪村（蕪村句集）
雪折やよしのゝ夢のさむる時　同（同）
雪折も聞えて暗き夜なりけり　同（蕪村遺稿）
雪折や下はかすかに水の音　路鳥（三晴志）
朝詣雪折竹をかいくゞり　闌下（ホトトギス）
お庭松雪折したる雪見かな　花蓑（同）
雪折の藪穂ひたれる紙屋川　一水（同）
雪折の竹をくゞれば光悦寺　播水（同）
雪折の松かつぎゆく漁師かな　自籠洞（續ホトトギス）
雪折のある門内を見て過ぎし　耕人（同）
雪折や大雪樹も降りやまず　凡二（同）
雪折の松かゝるなり谷むかふ　青邨（同）

冬枯

季題解説 冬も闌けて來るとなつて草も木も枯れ果てゝ、雑木はその枝葉がまば

らになり、葎は蔦が落ち、雜草は折れ伏し、唯一面の枯色になつたといつたやうな荒涼たる光景を言ふのである。［參照］霜枯（カレ）　枯草（カレグサ）　秋　末枯（ウラガレ）

例句

冬枯

冬がれや世は一色に風のおと　芭蕉（もとの水）
冬枯や平等院の庭の面　鬼貫（鬼貫句選）
冬がれの木の間覗ん賣屋敷　去來（去來發句集）
かれ〳〵てもの寂れたる冬の園　杉風（杉風句集）
冬枯や雀のありく戸樋の中　太祇（太祇句選）
冬がれの里を見おろす峠かな　召波（春泥發句集）
冬枯や飛〳〵青き八百屋町　也有（蘿の落葉）
ふゆがれや寺門かすかに人を呼ぶ　曉臺（曉臺句集）
何おもふ冬枯川のはなれ牛　同（同）
冬枯のなつかしき名や蓮台野　巢兆（曾波可理）
冬枯や鹿の見て居る桶の豆　一茶（旅日記）
冬枯や神馬の漆はげて立　同（一茶句帖）
冬枯や在所の雨が横にふる　同（同）
冬がれに問ず語りや須磨の僧　蒼虬（蒼虬翁發句集）
冬枯や垣に干菜の風の音　樂和（恒誠）

偉

冬枯や山詠めても野を見ても　乙由（麥林集）

發作

冬枯の中に家居や村一つ　子規（子規句集）
冬枯や蛸ぶら下る煮賣茶屋　同（同）
冬枯や繪の島山の貝屏風　同（同）
冬枯や巡査に吠ゆる里の犬　同（同）

雪膓に贈る

はらわたの冬枯れてたゞ發句かな　同（同）

皇太后崩御

冬枯に漏れたまはぬぞ是非もなき　同（同）
冬枯の様や芭蕉も義仲も　同（同）
冬枯や熊祭る子の蝦夷錦　同（同）
冬枯れて竹の根岸となりにけり　左衛門（新俳句）
我村は都の西に冬枯れぬ　同（同）
冬枯のあらはに淋し我庵　同（春夏秋冬）
冬枯や皮をむきたる棕櫚青き　一果（同人）
冬枯や垣の内より焚埃　長船（ホトトギス）
冬枯や卷葉ながらの大芭蕉　ゐの吉（同）

唐招提寺

境内へ冬枯の道つゞきけり　王城（同）

冬枯のあちらこちらやとぶ鴉　石鼎（ホトトギス）
冬枯や垣もあらはに雨隣　正夫（同）
枯るゝもの枯れつくしたり百花園　柿紅（續ホトトギス）
　百花園
枯果てゝ老女の姿ばかりかな　かなめ（同）
冬枯の幹うつくしき櫻かな　半炭（同）
そこゝに水の音あり冬枯るゝ　耕雪（同）
冬枯の道二筋に別れけり　虚子（句集虚子）

霜枯（しもがれ）

季題解説　草や木や垣根の蔓草などが、霜ごとに枯れて行つて、その蕾も落ち荒れ寂びてゆく。冬枯といふ季題がどちらかと言へば大觀であり、幾分觀念的な感じであるに比べて、これは部分的觀照であり具體的な感じであると言へる。〔[illegible]〕冬枯。〔天文〕霜。

例句

霜枯

霜がれの外や別れのおもひ草　也有（蘿葉集）
霜枯に鳶の居る野の朝ぐもり　曉臺（曉臺句集）
霜がれや東海道の道入口　一茶（享和句帖）
霜がれの中を元三大師哉　同（七番日記）
霜枯や新吉原も小藪並　同（同）
霜がれや鷺通を食に笠かさん　同（同）
霜がれや壁のうしろは越後山　同（同）
霜がれの笠にてけふと出かけたり　同（同）
霜枯や胡粉の兀し土團子　同（一茶句帖）
としどに霜がれにけりいろは茶屋　同（同）
霜がれや鍋のすみかく小傾城　同（發句集）
霜がれやおれを見かけて鉦叩く　同（嘉永板發句集）
人足も霜がれ時や王子道　同（同）
霜枯や狂女に吠ゆる村の犬　子規（子規句集）
霜枯れの網代にかゝる芥かな　芹涯（懸葵）
霜枯や寺に住みつく[illegible]八[illegible]　公圭（ホトトギス）
霜枯の芝生に頭を見る日かな　雨瀞（同）
霜枯れて押し倒しある芭蕉かな　靜雲（續ホトトギス）
霜枯の萩をあはれと思ひつゝ　俊子（同）

殘菊（[illegible]）

季題解説　寒さがだんだんと厳しくなる、末枯は早いてくる、庭の草花もいつかみんなすがれてしまふ、さうした中に霜に耐い一株・二株の菊がなほ殘つ

て咲いてゐる、色に纏せてはゐる、葉も蕭颯としてはゐる、然しなほ菊の色と香とをただよはせてゐる　東田萬閑の詩人でなくてもそのあはれに詩情をそゝるであらう。

昔は重陽以後の菊を殘菊といつた、その場合は秋である。［參照］寒菊（冬）

秋―菊（秋）　殘菊（秋）

例句

殘　菊

うらめしき葉や跡に殘る菊　也有（蘿葉集）
我ためのひとよは菊の殘あり　曉臺（曉臺句集）
殘菊や朝々の日のよく當る　雨六（懸葵）
菊殘るよき宿にゐて旅愁かな　暮情（ホトトギス）
殘菊や荒繩かけて一からげ　花骨（同）
殘菊や迷ひ入りたる山の家　よりに（同）
殘菊の黄菊なりしが枯るゝかや　鬼雨（續ホトトギス）
殘菊のいやしからざる白さかな　九二緒（同）

寒菊（かんぎく）

冬菊（ふゆぎく）　霜菊（しもぎく）　霜見草（しもみぐさ）　初見草（はつみぐさ）

古書校註

【滑稽雜談】篤信が花譜に云、寒菊、葉も花も常の菊より細か也。十月に黄花を開きて臘月に至る。京都は寒き故に、其の葉紅葉してみるにたえたり。○私に云、冬菊といふ者にや。近年紅葉を出せり。

【年浪草】和漢三才圖會に曰、寒菊、莖葉共に秋菊に同じ。花は單葉、黄色、丁子心と、云々。○大和本草に曰、冬菊を寒菊と云ふ。寒菊は京師最もよし。其の葉照つて紅となる。茶人別して愛觀す。

【栞草】初見草。冬菊の異名なり。［藏玉］しぐれふる庭にけふしも初見草花さきにけり霜やおくらん。

季題解説　菊の種類で冬季に咲く、秋季に咲くものと違つて花輪も極く小さく色は黄色である。

寒菊は冬菊とも言ひ、「菊の原種である一しまかんぎく」と稱するものゝ一變種であつて、四國・九州地方に多く自生してゐる。そして其名のやうに、秋期菊花の盛を過ぎた頃から花蕾を出して冬季に至つて開花し、色は淡黄色を呈してゐる。土地によつては、雪中開花の樣が頗る美觀を呈するものである。活花に使用して雅致があり、又鉢植としても面白い、茶人などの最も好むところである。［參照］殘菊（秋）　秋―菊（秋）

例句

寒　菊

寒菊や粉糠のかゝる臼の端　芭蕉（炭俵）
寒菊の氣隨にさくや藪の中　來山（續いま宮艸）
十一月十二・初戸忌
泣中に寒菊ひとり耐（コタ）へたり　嵐雪（玄峰集）

甚だ多い。總じて西洋種である。其の中、冬咲く一種を冬薔薇といふのである。寒薔薇ともいふ。【参照】夏　薔薇(夏)　野茨(夏)

例句

冬薔薇

大輪のあと蕾なし冬の薔薇　みさ子（ホトトギス）
強き刺もちて冬薔薇咲きにけり　野風呂（同）
ひとつ咲いてすがれて居りぬ冬薔薇　青邨（續ホトトギス）
[illegible]
濯ぎ場や冬ばら咲いてをりにけり　一路（同）

冬牡丹(ふゆぼたん)　寒牡丹(かんぼたん)

古書校註

【滑稽雑談】大和本草に云、今又冬牡丹あり。八月より葉出で、十月より花咲く。臘寒の時も花有り。凡そ此くの如くなるは、人功を以て、天地造化の力を盗んで之を成す。良に怪むべきもの也。○按ずるに、牡丹の冬日に花開く者、中華にも其の種多し。冬日牡丹の古詩おほく見え侍る。

季題解說

寒中に開花するもので、花は普通の牡丹よりも小さく、その徑凡そ二寸乃至三寸ばかりで、普通の牡丹の如くに白色・紫色などいろいろある。寒中であるから葉は伸びない。牡丹を作るところではよく見られる。關西では攝津の池田地方、其他初瀨寺・染寺などで見られる。鉢、活花などに珍重される。【参照】夏　牡丹(夏)

例句

冬牡丹

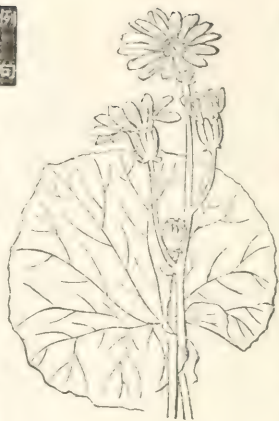
冬牡丹千鳥か雪のほととぎす　芭蕉（笈日記）
ひう〳〵と風は空行冬牡丹　鬼貫（俳諧七車）
世の格に居らで冬咲ふかみ草　同（同）
白玉も紙燭よせけり冬牡丹　言水（俳諧五子稿）
山中の相雪中のぼたん哉　蕪村（蕪村句集）
芍薬の贋も叶はず冬牡丹　也有（蘿葉集）
萎をく柴のあみ戸や冬ぼたん　蓼太（蓼太句集）
富りとはこゝをいふらん冬牡丹　同（同）
わが庵ににほひあまるや冬牡丹　几董（井華集）
君が代の松風添ぬ冬牡丹　蒼虬（蒼虬翁發句集）
貧乏な日にあたりけり冬牡丹　貫古（類題發句集）
冬枯の庭に久照る牡丹哉　卜我（新選）
隱れ家の藏の高さや冬牡丹　魚齋（三晴志）
日暮の里の舊家や冬牡丹　子規（子規句集）
月兎新婚に
君がために冬牡丹かく祝かな　同（同）
晨朝の鐘撞き憩ふ冬牡丹　菰舉窟（懸葵）

蒼天より雪遊び來る牡丹かな　村家（ホトトギス）
客と對して波打かむや寒牡丹　桃孫（同）
霜よけの中に蕾みし冬牡丹　花蓑（續ホトトギス）

槖吾(つは)の花(はな)　石蕗(いしぶき)　いしぶき

古書校註

【滑稽雜談】　大和本草に曰、槖吾、莖葉款冬に似たり、款冬よりも葉厚し。秋黄花をひらく。冬は其の實房をなして一莖に數顆有り。其の莖を食するに味款冬の如し。一切の毒を消す。就中魚毒を殺す。鰒の毒も能く解す。これを款冬と云ふ人あり、誤也。稍若水曰、急就章に曰ふ槖吾、是っぱならんといへり。本草款冬花の異名をも槖吾と稱す。然れども款冬と同じからざる也。○按ずるに、俗名石蕗の二字を用ゆ。未た詳ならず。

【年浪草】本草綱目に、款冬花の條下に曰、一名、槖吾。（略）（庖厨本草に曰、倭名抄に云、款冬、山ふゞき、又やまぶき、萬葉集に云ふ山吹の花と書きたるを引きたり。本草集解は、ふきを云ふに似て又やまぶきを云ふに似たり。故に、和名山吹と云ひ、或はふきと云ふ人の惑ひもこゝに在り。余案ずるに、山ぶきは正名なるべし。今俗に云ふつはぶき是也。ふきとつはと、莖葉相似て、二種共に冬月霜雪の中に花莖を生ず。

季題解説　菊科の常緑多年生の植物である。莖葉ともに蕗に似て少し硬くて光澤がある。莖を抽き出して十月頃から黄色の花を開く。海邊に自生するが、庭園に栽培して雅致がある。伊勢の二見浦の岩壁にも生えてゐるし、相州江の島にも生えてゐるのを知つてゐる。

若い葉柄は蕗の如く食用に供するし、又藥用にもする。

例句

槖吾の花

引かへて白い毛になるつはの花　鬼貫（鬼貫句選）
咲べくもおもはであるを石蕗花　蕪村（蕪村句集）
さびしさの眼の行方や石蕗の花　蓼太（蓼太句集）
春秋をぬしなき家や石蕗花　几董（井華集）
ちま〳〵とした海もちぬ石蕗の花　一茶（七番日記）
珍らしき月夜も見たし石蕗の花　青虹（[illegible]）
石蕗さくや旭嬉しき手水鉢　風台（古今句鑑）
石舐めて歩く蝸ありつはの花　露舐（同人）

石蕗の花

時雨きて石なまめきぬ石蕗の花　白　貧（ホトトギス）
竹箸に拾ふ枯葉や石蕗の花　同（同）
厠より泣出づる妻や石蕗晴し　左衛門（同）
死ぬるまでもの食ふ鶏や石蕗の花　呂　杣（同）
厠のみ瓦屋根なる石蕗の宿　雪之家（同）
石蕗の雨じやのひげぞひに流れけり　村　家（同）
しばらくは石蕗咲く宿に籠りけり　せん女（同）
石蕗の井や聲響かせて鐘の如し　四　楓（同）
つくばひを越しゐる水や石蕗の花　行々子（續ホトトギス）
椎花庵
絲よりも細き水落つ石蕗の花　青　邨（同）
石蕗の葉のぬれてばかりの牡丹雪　諾　人（同）
傾いてしぐれ寂びたり石蕗の花　波留女（同）
古庭のところどころの石蕗の花　虚　子（同）

参考　つはぶき Ligularia tussilaginea, Makino.（きく科）海邊の地に自生する、常緑多年生草本なり、長柄の根生葉を叢生し、圓狀腎臓形にし質厚く深緑色にして光澤あり、十月頃莖を抽くこと二尺内外、上部多く分枝して黄色の頭狀花をつく、葉柄を食用とす、通常觀賞用として植ゑらる、一種オホツハブキあり、葉頗る大なり。

冬葵（ふゆあふひ）

季題解説　冬葵は錦葵科の植物で莖葉ともに錦葵（ぜにあふひ）に酷似してゐるが、花は小形で大さ三四分ばかり、白色である。冬季開花し庭園に培養せられる。時には高さ二三尺に達することがある。專ら觀賞用として庭園や鉢植などにして愛玩せられる。［参照］夏―葵アフヒ

例句　冬葵
こぼるゝ花にあと葉の雄々し冬葵　若　沙（ホトトギス）

参考　ふゆあふひ Malva verticillata, L.（あふひ科）庭園に培養せらるる二年生草本にして、舊世界の北温帯及亜熱帯地に廣く生ず、莖の高さ二三尺に達す、葉は互生し長柄に毛茸を有す、花は冬より春にかけて葉腋に簇生し、小形淡白にして紫暈を有す、直徑凡四分許なり、葉を蔬となし、子を藥用とす、アフヒの本品にて、其葉にて日光を遮ぎり、根を保護すると謂はるゝものなり。此一種にヲカノリありてその葉を食用に供す。

杜衡（かんあふひ）

季題解説　馬兜鈴（うまのすずくさ）科の植物である。山中の蔭地に生ずる多年生の草本で、地下に根莖をもつて居り、それから長い柄を持つ葉を二

三枚生ずる。葉の形は大體心臟形で先端稍尖り、葉質幾分厚くて、通常大なる葉脈上に白條斑を有してゐる。冬期、根際の葉間に、暗紫色で三裂して花被を有する小さい花を開く。根莖は藥用に供する。觀賞用として栽培せられる。本種には、まるばかんあふひ・しろみやくかんあふひ（一名ふいりかんあふひ）・いさはかんあふひ・うんもんかんあふひ・あつばかんあふひ・おほばかんあふひなどの種類がある。

【参考】 かんあふひ Asarum Blumei, Duch.（うまのすゞくさ科）山中の陰地に生ずる多年生草本なり、地下に根莖を有し、下に太き鬚根を發出す、長柄の葉は、心臟形全邊にして先端稍尖り、其脚部上に深く凹入す、葉面に白斑あるもの多し、冬より春にかけ根際に暗紫色の小花を開き、三裂せる花被を有す、其筒底に雌雄蕋あり。草全體に一種の香あり。

雪の下（ゆきのした）

【古書校註】

【滑稽雜談】 按ずるに、諸の生植類、皆花或は實を以て季を押す。此の者、冬に賦する事、只、冬月植物まれ也、此の者幸に寒を凌ぎて緑葉有り。名づくるに又雪の下を以てす。故に花時を拘かずして、古書冬季に押す。花を結ぶは夏也。

【年浪草】 時珍曰、虎耳草は陰濕の處に生ず。人も亦石山上に栽う。高さ五六寸、細なる毛有り。一莖一葉荷蓋の狀の如し。葉の大さ錢の形の如く、初生は小葵の葉及び虎の耳の形に似たり。夏小花を開く、淡紅色。○和漢三才圖會に曰、一名石荷葉、俗に云ふ雪下草。葉地に布きて生ず。其の花白く、淡紅を帶ぶ。微に秋海棠の態に似たり。

【栞草】 わくかせわ 一名きじん草 花は四月也。雪の下と云ふ名に付いて、冬季とするや。【参照】夏 虎耳草

甘蔗の花（かんしよのはな）

【季題解説】 臺灣では甘蔗が成熟期に入ると芒の穗のやうな花をつける、それは十二月初旬に始まり二月頃に至るのであるが、新穗は淡紫色を帶びて美しい、そして次第に白けてゆくこと芒と同樣である、穗莖はかなり長いので甘蔗の上に高く抽出し、大甘蔗原が一せいに穗を出した景はなか〳〵盛觀である。

水仙（すいせん） 〔水仙花（すいせんくわ） 雪中花（せつちゆうくわ）〕

【古書校註】

【山之井】 霜がれの草の中に、いさぎよく咲出でたるを、菊より末のをとうとゝもてはやし、[illegible]花に[illegible]て、いかにすゐせんとわきかぬる心

をもつらね、又、萬もて作るすゐせんにもそへ、(一)花瓶、口をすゐせんくわなどもいへり。

【滑稽雜談】　時珍曰、水仙、此の物卑濕の所に宜し。水を缺く可からず。故に水仙と名づく。金盞・銀臺は、花の形也。莖頭花を開くこと數朶、大さ簪頭の如し。狀酒盃の如し。五尖上承、黄心宛然として盞樣なり。其の花瑩韻、其の香淸幽なり。(略)○和漢多くは說の如し。流水の上に肥壤を厚く敷いて種く時は、秋月花をひらくと云ふ。考ふ可し。其の紅花いまだ見ず。

註　(一) 本文の末尾に、可歡の句、「した葉もや花瓶の口をすゐせん花」がある。

季題解說　石蒜科(ヒガンバナ)の植物で、多年生草本である。觀賞用として庭園に培養せられる。葉は狹く長く、平行脈を有して叢生する。冬期高さ七八寸乃至一尺許の花莖を抽き、莖頂の總苞から數花を著ける。花蓋は白色で內に濃黄色杯狀の副冠を有する。球根は藥用に供せられる。

實作注意　黄水仙は春である。［參照］春・黄水仙(キズイセン)

例句

水仙

共にほひ桃より白し水仙花　芭蕉　(笈日記)
水仙や白き障子のとも移り　同　(同)
かけものや水僊のぼる花のかげ　浪化　(浪化上人發句集)
水仙に猶分行くや星月夜　其角　(五元集)
水仙や鉋ついでの小島臺　同　(同)
水仙の花のみだれや藪屋敷　惟然　(惟然坊句集)
水仙や門を出れば江の月夜　支考　(蓮二吟集)
水仙の香やこぼれても雪の上　千代女　(千代尼發句集)
水仙は名さへつめたう覺えけり　同　(同)
水仙や美人かうへをいたむらし　蕪村　(蕪村句集)
水仙や鵙の草莖花咲ぬ　同　(同)
水仙や寒き都のこゝかしこ　同　(同)
水仙に狐遊ぶや宵月夜　同　(五車反古)
水仙や疊の上に橫たをし　太祇　(太祇句選)
水仙を生しや藥先枯る迄　同　(同)
水仙や莖みじかくと己が園　同　(同)
水仙や胞衣を出たる花の數　同　(同)

水せんや幸あたりに草もなき　同　（同）
水仙や引きさき紙に珍重す　召波　（春泥發句集）
すゐせんや先揚屋から生ケそむる　同　（同）
水仙や藥の御園守あたり　同　（同）
水仙や室町殿の五間床　同　（同）
水仙や庭に待せて藪にさく　也有　（蘿葉集）
水せんや一重を八重に霜の花　同　（同）
水仙や梅まつ人をうつむかせ　同　（同）
水仙や寒さは梅をうしろ楯　同　（同）
水仙や見送る菊のうしろ影　同　（同）
水仙やたけの子ほどは盜まれず　同　（同）
水仙や使に茶見せてやる　同　（蘿の落葉）
水仙や折葉もさらに濱あらし　白雄　（白雄句集）
水仙や屋根が出來たと啼鳥　巢兆　（曾波可理）
水仙は葱つきはにて咲にけり　成美　（成美家集）
水僊に霜の白さをつたへけり　同　（同）
水仙や江戸の辰巳のかじけ坊　一茶　（七番日記）
御侍御傘忘れな水仙花　同　（同）
水仙や垣に結こむ筑波山　同　（發句集）
水仙や商呆買ふ心あすになる　乙二　（松のゝえ草稿）
水仙に花なき里の小鴨哉　同　（同）
しら魚のとれる噂や水仙花　同　（同）
水仙やまだ葉斗の手向草　同　（蒼虬翁發句集）
水仙の名所らしき月夜かな　同　（同）
水仙や背戶は月夜の水たまり　同　（同）
水仙や倚の工夫に日のくるゝ　同　（同）
水仙や田へ行水のもる垣根　同　（同）
水仙の花の高さの日影哉　智月　（小文庫）
水仙や練塀われし日の透間　曲翠　（續猿蓑）
煤堂の中から白し水仙花　露川　（類題發句集）
藪陰や一本手折水仙花　寐丸子　（蕉門古人眞蹟）
水仙を切る音の齒に障りたり　上芝　（新選）
水仙や素足で通ふ長廊下　以樂　（同）
水仙の花を見て居る別れ哉　定雅　（時雨笛）
古寺や大日如來水仙花　子規　（子規句集）
[illegible]
水仙も處を得たり庭の隅　同　（同）
水仙や晋山の僧黃衣なり　同　（同）

水仙

琅玕樹移占
軸の前支那水仙の鉢もなし　子規（子規句集）
裏庭や竹の根に咲く水仙花　墨水（新俳句）
指鉢に水仙咲くや貧の家　把栗（同）
畝にして水仙つくる小家かな　青々（春夏秋冬）
水仙や布團の裾に日の當る　狂村（同人）
ぬかるみを水仙賣の來りけり　清瘦（同）
水仙や聞き耳立つる竦み鶏　九萬里（懸葵）
落葉掃きし庭の廣さよ水仙花　撫泉（同）
水仙や珠數をかけたる床柱　檮陵（同）
水仙や日の當りたる寒暖計　はじめ（ホトトギス）
水仙を活けて忘れし水を注ぐ　濟軒（同）
水仙の山に蘂ちり花屋かな　蝶六（同）
雪分けて水仙剪るや御命日　月歩（同）
水仙の花のうしろの蕾かな　立子（同）
水仙を葱のごとくに賣れるかな　一我（同）
水仙のはげしき雨に堪へてあり　綾女（同）
水仙に來る客ありて茶のけむり　秋櫻子（同）
河豚の座に水仙活けてありにけり　秋史（同）
水仙にいたく染んだるこの子かな　あい染（續ホトトギス）
水仙や古鏡の如く花をかゝぐ　たかし（同）
花よりも濃き水仙のうてなかな　房枝（同）
水仙を剪ればうつむく花のあり　巨鹿（同）
水仙を霙のひまに切りにけり　虚子（句集 虚子）

参考　すゐせん Narcissus Tazetta L. var. chinensis, Roem.（ひがんばな科）暖地の海岸に近く野生ありと雖も、通常觀賞用として庭園に培養せらるゝ多年生草本なり、襲重鱗莖は卵狀球形をなし外皮黑く下に白色の鬚根を出せり、葉は狹長にして線狀を呈し、鈍頭をなす　帶白綠色にして厚し、春時葉中より高さ七八寸乃至一尺内外の花莖を抽き、莖頂に膜苞ありて白色數花を出す、花は六片に分れ、下は長き筒をなす、喉口に濃黄色の副冠を有す、子房は下位にして、花後通常成熟せず、故に果實を見ず。

花泊夫藍（はなさふらん）　咀夫藍（さふらん）　番紅花（ばんこうくわ）

季題解說　小亞細亞原產の鳶尾科球根宿根草で、培養される、花は秋に咲く。色は紫が普通であるが稀れに白がある。花と共に絲のやうな細い葉を出し花後に大に長くなる、花は二三寸程の梗をぬき出して、梗頭に一花を開く。花は六花蓋片、三雄蕊で、中央に三岐せる鮮紅の長い花柱がある、これを乾して藥用に供する。藥用のサフランは健胃鎭痙に用ひ、又中將湯・

實母散などに古來用ひられたものである。尙このサフランの蕊は芳香と美麗な色素をもつので、芳香阿片酒を製したり、お菓子や食品の染料にも使用される。春に花さく品は同屬中の別種で此れに數種がある。

【參考】さふらん Crocus sativus, L.（あやめ科）歐洲の原産にして園圃に培養せらるゝ多年生草本なり、球莖は褐色の皮を被ぶり、葉は松葉狀を呈して長く十月頃初めて萌出し花後十分に成長す、十、十一月短き新葉間より花を出す、花は六花蓋片、六雄蕋にして中央に黃赤色の花柱枝三條を有す、淡紫色にして極めて優美なり、芳香愛すべし、花柱枝を藥用に供す。

龍の鬚の實　蛇の鬚の實　龍の玉

【季題解說】蘭科の植物で龍の鬚・蛇の鬚ともいふ。その實は龍の玉（京阪）・はづみ玉（東京）などと呼ばれてゐる。冬、色づいて綺麗な色を見せる。

【例句】
龍の鬚の實　龍の鬚に龍の玉見え初めにけり　旭川（ホトトギス誌）

冬の草　冬草　秋無草

【古書校註】【栞草】枯れたるにても、八、枯殘りたるをもいふべし。〔同書〕秋無草（アキナゲクサ）はなへ草　冬草の惣名なり、云々と〔藏玉〕花ちりてその名ばかりに秋無草かたみに置けるけさの白露。

【季題解說】元來冬草といへば枯れ果てた草・枯れ殘つた草・冬尙ほ生育しつゝある草の總稱であるべきだが、俳句では「枯草」といふ季題が別にあり、冬枯の草と呼稱することになつてゐるから、冬草といふのは枯れ殘つた草、冬尙ほ生育しつゝある草をいふやうである。【季語】枯草（カレクサ）名の草枯る（ナノクサカル）

【例句】
冬の草
冬艸やはしごかけ置岡の家　乙二（をのゝえ草稿）
敷藁に冬草青し蜜柑畑　青蛾（同人）
冬草の踏まれながらに青きかな　俳小星（ホトトギス）
冬草の土にもちたる蕾かな　しげる（同）
出外れし行德町や冬の草　三平（續ホトトギス）

枯草　草枯

【季題解說】冬になつて草の枯れたのをいふのである。冬草といふ方は冬尙ほ生色を保つてゐる草で、枯草とは自ら區別さるべきである。【季語】冬枯　冬の草（フユノクサ）　名の草枯る（ナノクサカル）

例句

枯草

花みな枯れて哀をこぼす草の種　芭蕉（泊船集）
日あたりの草しほらしく枯にけり　蕪村（蕪村遺句集）
草枯て狐の飛脚通りけり　同（蓮華會集）
枯くさや藪根の椿落る迄　太祇（太祇句選）
いさゝかな草も枯けり石の間　召波（春泥發句集）
死なば今野に枯たがる草の連　也有（蘿葉集）
草かれや鶴の居りたる濱庇　白雄（白雄句集）
艸かれや風空ざまに背戸の山　同（同）
艸枯に雑炊すゝる樵夫かな　同（同）
草かれて深谷の霜にあへりけり　曉臺（曉臺句集）
かれ〳〵や竹の中なる草の蔓　闌更（半化坊發句集）
人をさす草もへたへた枯にけり　一茶（七番日記）
思ひ草おもはぬ草も枯にけり　同（一茶句帖）
がむしやらの辨慶草も枯にけり　同（九番日記）

悼芭蕉翁

枯草に頭入て鳴く男鹿哉　乍木（枯尾花）
草枯や馬の飛脚替る夕日影　新雨（三崎志）
水草や水ある方に枯れ殘る　子規（子規句集）
おそろしや武藏野の草枯れ盡す　把栗（新俳句）
枯草の一叢黄なり腰おろす　具圓（同人）

須原村長男を喪ふに

草枯のそこらに我子居るやうな　月斗（同）
枯草にどろ一塊の乾きかな　禪丈（ホトトギス）
同じ方へ二度の使や草枯るゝ　安里（同）
草枯や人を見て鳴く牧の牛　茶泊（同）
草枯の月夜に見えていちじるし　花蓑（同）
草枯や水城の跡はこゝとのみ　月哉（同）
草枯や徑できたる飛鳥川　三山（同）
草枯れて風の上りぬ鴨川原　漾人（同）
猶じやらし枯れてあたりも枯れにけり　千止（續ホトトギス）

奈良公園

ひろ〳〵と草枯れてゐる寢鹿かな　秋濤（同）
眞青なおほばこの葉や枯堤　東子房（同）
草の王棒のごとくに枯れにけり　壽泉洞（同）
草枯るゝ暖き日でありにけり　すゝむ（同）

歸省

草じらみ八につかんと立ち枯るゝ　青郁（同）
まだ見ゆる門かへり見る枯堤　風生（同）

枯草の厚きしとねに腰おろす　虚子（同　）

名の草枯る
枯荻　枯葭　枯葱　枯菊　枯芒　枯尾花　枯蘆　枯蔦　枯蓮　枯鶏頭　枯葛

古書校註

【御傘】草枯に花の残る、嫌也。枯野にも同じ。惣別名草のかるゝは冬なれ共、花の字・色の字・露などもむすべば嫌なり。萩・芦もかるゝといへば、穂の字あれば嫌也。

かつ〳〵かるゝ葛の葉、などいひても冬也。かつ落葉するには替るべし。

【滑稽雑談】按ずるに、名の草とは荻・蘆・薄・菊・葛等の類也。名を言はずして、うら枯・草枯と計は秋也。此の義、師説を請うて弁ずべし。大やうにはまぎらはしき事也。寒草・寒蘆など云ふ句皆冬也。歌にはまた此の分別[illegible]に有るまじ。只草枯と讀みても冬に成るべし。宗于朝臣が古今の（一）山里の歌など、名の草にあらねど、歌は詞つゞきにて聞ゆる也。俳諧は又心得違ふ所侍る也。

【年浪草】「枯蘆」芦の形狀、春秋の部處々之を注す。今枯芦とは、芦既に成長して四五尺より丈許に至りて、其の葉老衰し、纖莖皆白色を帯び、竹に似て弱き也。蘆・ヨシ・アシ、兩訓、俗に與之と云ふ。

【栞草】「枯尾花」貞享式　此の名は、古今に論ありて、秋ともいひ、冬ともいへれど、枯の字を結びては、冬と定むべし。

註（一）「山里は冬ぞさびしさまさりける人目も草も枯れぬと思へば」（古今集）

季題解説　菊・芒・尾花・蘆・蔦・蓮・荻・葭・葱・女郎花・鶏頭・葛・夕顔・葵など凡そ名のある植物が冬になつて枯れるのをいふのである。

【[illegible]】冬の草、[illegible]　枯草[illegible]

例句

名の草枯る

ともかくもならでや雪のかれ尾花　芭蕉（北の山）
[illegible]これら二[illegible]ただに　鬼貫（俳諧七車）
枯蘆や難波入江のさゞら波　同（同　）
なきがらを笠にかくすや枯尾花　其角（五元集拾遺）
枯芦や朝日に氷る鮎の顔　惟然（[illegible]）
さればとてはかなきもの也枯れ薄　杉風（[illegible]）
巻つきし其草ともに枯かづら　同（同　）
上下の枝引しめしかれかづら　同（同　）
立ながら木にまとはれたる枯かづら　同（同　）
菊刈や冬たく蒋の置どころ　同（同　）
根は切て[illegible]畑にあり枯尾花　千代女（[illegible]）
[illegible]かれ尾花　同（同　）

名の草枯る

我も死して碑に邊せむ枯尾花　蕪村（蕪村句集）
千葉どのゝ假家引ケたり枯尾花　同（同）
狐火の燃えつくばかり枯尾花　同（同）
枯尾花野守が鬢にさはりけり　同（蕪村遺稿）
秋去ていく日になりぬ枯尾花　同（同）
かれ芦や鴨見なくせし鷹の聲　太祇（太祇句選）
菊好や切らで枯行花の數　同（同）

病中吟

鏡とらば雨の鬢や枯尾花　召波（春泥發句集）
枯尾花醜き小町臥りけり　几董（井華集）
舟繋ふ淀野の犬やかれ尾花　同（同）
炭屑に小野の枯菊にほひけり　同（同）
枯〳〵て光をはなつ尾花哉　同（同）
いちはやく枯てや折る芦のふし　白雄（白雄句集）
けふの今いまより後のかれ尾花　曉臺（曉臺句集）
中〳〵に根つよく成ぬかれを花　同（同）
芥火の烟の中に枯尾花　同（同）
水際の日に〳〵遠しかれを花　同（同）
枯蘆やしるべして行雨の聲　同（同）
蒼天に河邊の蘆のかれは哉　同（同）
人目も恥もしどろに葛の枯葉哉　同（同）
雉さへ枯て出ぬる戸莭かな　同（同）
枯芦の日に〳〵折て流れけり　闌更（半坊化發句集）
泣は父なかるゝは子よかれ尾花　士朗（枇杷園句集）
鴛鴨がなければ枯たつ芦邊哉　同（同）
旅笠をつひのやどりやかれ尾花　成美（成美家集）
枯芒昔婆鬼あつたとさ　一茶（七番日記）
濱荻のあこぎに枯て仕廻けり　同（同）
六道の辻に立けり枯尾花　同（一茶句帖）
何が氣に入らで枯たぞ女郎花　同（九番日記）
女郎花なんの因果で枯かねる　同（一茶發句集）
作らるゝ菊から先に枯にけり　同（發句題叢）
かれ荻かなぐり捨もせざりけり　同（享和句帖）
枯蘆の笹相にあける月夜哉　乙二（をのゝえ草稿）
萩すゝき徃弟のやうに枯にけり　同（同）
さびしさをはなれて久し枯尾花　蒼虬（蒼虬翁發句集）
蔦かれて浮世に近し庵の壁　同（同）
空也寺や町から見ゆる枯尾花　梅室（梅室家集）

名の草枯る

枯菊になほ愛憎や紅と黄と　より江（ホトトギス）
袖の内枯菊焚きし燐寸かな　巽（同）
青天に枯菊を焚く煙かな　煤六（同）
枯菊や二三日高き浪の音　虞公（同）
日もすがら日當り枯れし芭蕉かな　草千（同）
近づきてどこやら青し枯芭蕉　躑躅（同）
鐵楞や萱の枯みち海に落つ　誓子（同）
雨にへり風にへりたる枯葎　爽舟（同）
月光に枯れてうつろの葎かな　漾人（同）
朝顔の垣枯れはてゝ日本晴　青史（同）
枯葉吹きころがれる河原かな　泊月（同）
枯蘆に火かけて漁るもおもしろし　若灯（同）
枯眞菰枯れ伏すまゝに入江かな　歌村（同）
いろ〳〵の草も交りて枯菖蒲　立子（同）
蓮の葉の完きも枯れてしまひけり　鬼城（同）
枯蓮や日はありながら玉霰　青塔人（同）
枯蓮やたま〳〵浮きし龜一つ　泊雲（同）
枯蓮のなくなりにつゝありにけり　夜半（同）
枯蓮に入日の空の何んとなく　あふひ（同）
枯蔦をあげて一字を讀みにけり　供子（同）
枯蔓の消え〳〵わたる籬かな　泊月（同）
好晴やほと〳〵枯れし野路の蔓　秋櫻子（同）
尼となりて身まかりしとなむ枯葱　暮情（同）
温室のまはりの芝の枯れにけり　雨城（同）
床の菊枯れて心にかけしまゝ　長（同）
枯菊と言捨んには情あり　たかし（同）
二三日菊のはげしく枯るゝかな　木國（同）
枯菊にあたり來し日をなつかしむ　楞童（同）
枯芭蕉ほとりの木々にかゝりけり　十雨（同）
枯芭蕉日をかへすことなくなりぬ　有風（同）
枯薊心頭の花燃えにけり　茅舍（同）
濱芒砂に埋れて枯れにけり　鴻乙（同）
好晴やなびきしまゝの枯芒　奄美人（同）
萱枯れて弱きひかりをもてるかな　月士（同）
青き葉に集まる露や枯葎　素風郎（同）
枯れそめし鉢朝顔や草の中　稲村（同）
授かれる俳句もなくて鶏頭枯る　裸骨（同）
枯れてゐて其面影は藤袴　長（同）

眞野の浦蘆美しく枯れにけり　野呂子（同）
蘆は立ち藺は伏して皆枯れ果てぬ　ゝ石（同）
橋板のかたノヽ動く枯あやめ　香飯（同）
あけくれの法鼓に枯るゝ蓮かな　草餅（同）
枯蓮の水のへりつゝありにけり　すゝむ（同）
枯蔓の網の中なる落葉かな　凡秋（同）
一とすぢの大まはりなる蔓枯るゝ　素十（同）
枯蔓をかぶらぬはなし山椿　たかし（同）
枯蓮にわれ等が佇てば里の子も　風生（同）
鷄頭の枯れはてたれど紅すこし　青邨（同）
枯葎搖がせゐる・は鷦かな　朝帆（同）
燃え上る枯蔓の種燃えて落つ　同（同）
菊枯れて寒き日向となりにけり　虚子（句集虚子）
枯れノヽて蔦いへりたる葎かな　同（同）
枯菊のすてゝあるなり船著場　同（續ホトトギス）
破芭蕉枯芭蕉とぞ日を經ける　同（同）
枯芒葉ぶ蟲さへも居らずなり　同（同）

冬蔦（ふゆづた）

〔季題解說〕 常春藤（ときはづた）　木蔦（きづた）　いつまでぐさ　かべづた

一名きづた（常春藤）と稱し、常綠の攀登灌木で、五加科（うこぎ）に屬し、多くは山野に自生するが、移植して木石や墻壁などに纏繞せしめて風趣を添へる用とする。古木になり蔓性幹が長大となつて、普通の木の如く直立するものもある。葉は深綠色で、形はいろいろある。秋冬の頃、綠色で五瓣の小花を繖形に綴り、花後、南天の實に似て紫黑色を呈する漿果を結

ふゆ　[illegible]　夏　[illegible]　蔦

〔[illegible]〕 きづた Hedera rhombea, Sieb. et Zucc. 一名 ふゆづた[illegible]これは山野に普通なる常綠の攀援灌木なり、木石に屬きて時に高さ數丈に達することあり、又古き者に在りては其幹直立となり、多數の氣根を出だし、葉は互生有柄にして、深綠色にして厚く、其形種々あり、[illegible]裂片[illegible]、或は[illegible]、[illegible]黄綠色の小花を繖形に綴

る、花後黒實を結ぶ。

寒獨活（かんうど）

季題解說　獨活は五加科の植物である。栽培は軟化法即ちもやし法によるので、此の法によると莖は柔かで且つ相當に長くなる。温室で促成栽培して寒中に得たものを寒獨活と言つて食膳に上す。參照　春・獨活

葉牡丹（はぼたん）

季題解說　甘藍（キャベツ）の種類であるが、黄白、淡紫色の縮緬のやうな廣葉が相重つて牡丹のやうにも見える、さういふところからこの名が由來したものである。觀賞用に栽培せられる、主に正月の挿花・鉢植などである。參照　夏―キャベツ

例句　葉牡丹

梅と挿されて葉牡丹低しおのづから　温亭（ホトトギス）
葉牡丹のつゝむ鉢のへりを飼ふ　茅花女（同）
葉牡丹の一枚壺にゆるみたれ　蘇甫（續ホトトギス）

冬菜（ふゆな）

小松菜（こまつな）　白菜（はくさい）　冬菜畑（ふゆなばた）　冬菜飯（ふゆなめし）　冬菜賣（ふゆなうり）

季題解說　冬菜といふのは冬季畑に生育する菜の謂である。漬菜も畑で越年させるものも少くなく、冬菜と稱し得るものであるが別に之を記載してある關係上區別して置かう。

（漬菜といつてゐるものは今日葉菜類の優良品種に屬するもので、もと支那から輸入されて白菜と稱するものは皆之である。たゞ三河島菜は東京三河島だけで出來る特産品であつて他の地で培ふと品質が劣るのである。）

冬菜といふのは古來內地に點在するもので、白菜のやうに結球するやうな改良種とは趣を異にして居り、何れかといへば原始的色彩をもち夫々地方色を帶びたものがある。栽培には、元より耐寒性の強いものであるから、畑に藁茅又は常盤木の枝又は篠等を立て、簡單な防霜をする位で足りるのである。種類が多い。

例句　冬菜

さし籠る葎の友やふゆなうり　芭蕉（鹿島紀行附錄）
あられなし閑俳の折敷に冬菜哉　其角（五元集拾遺）
師走菜を召にや山を出る佛　乙二（をのゝえ草稿）
水切れば金のさやさや縮緬菜　夏山（ホトトギス）
日暮れねば歸らぬ父や冬菜飯　默禪（同）
白菜の山にさしある庖刀かな　青眼子（同）
白菜の山東戎克來はじめぬ　双松（同）

[illegible]

野鼠を打て住しけり蕪引　勁草（[illegible]）

板の間に置きよろげたる蕪かな　不彩（ホトトギス）

祇王寺の蕪に[illegible]置かれあり　いはほ（[illegible]）

参考 かぶ Brassica Rapa L. 一名かぶら 一十字花科一廣く栽培せらる丶越年生草本なり、其根は多肉にして、扁圓或は稍長形をなす、葉は叢生し倒披針状長楕圓形にして低平なる不齊の齒あり、莖には葉を抱く、春日總狀花序をなして黄色の十字花を開き、四長二短雄蕊を有し、果實は長角をなし、種子は褐色を呈す、根を食用に供す、變種頗る多し、通常白色なれども亦紅紫色のものあり。

莖菁（くきな）　莖菜（くきな）

季題解説 莖漬にする菜をいふ。［參照］人事―莖漬（ケキ）

葱（ねぎ）　根深（ねぶか）　葱（き）　ひともじ　葱白（ねぎしろ）　冬葱（ふゆねぎ）　葱畑（ねぎばたけ）　根深汁（ねぶかじる）　葱汁（ねぎじる）　葱雑炊（ねぎざふすい）

古書校註【滑稽雜談】順の和名に曰、葱、和名、記。○和訓義解に云、紀とはきたなしの略也。其の臭きたなき也。總べて葱の類をきと云ふ。胡葱・あさつき・漢葱・かりきの類也。葱を只きと云ふ。故に俗に葱を呼びて一文じと也。○按ずるに、和俗根深と云ふ。葱の類にて此の種其の根ふかし。東國に産する物青き所二分、白き所八分なる物有り。京畿にいまだ見ず。【菜草】［大和本草］大葱は五月に實を植ゑ、八月・九月苗を分け栽う　冬春さかんなり。肥地にふかくうゑて、漸々に培へば白根長大、云々。故に根ぶかと稱す。又曰、和名抄に、和名、紀と云ふ　紀の一字を名くる故に、一名一文字と云ふ。

季題解説 あまりにも人の知るところである。百合科の植物で畑地に栽培する多年生草本である。普通、高さ二尺許りに達し、葉は中空の筒狀をなし、先端が尖り、その地下にある部分は多數相重つて一本となり、白色を呈する、俗に白根と稱する部分である。白根の基部に堅く短縮した地下莖があり、こゝに多數の鬚根を生ずる。晩春、葉間に葉に似た花軸を抽き、澤山の白色の花の集まつた球をつける、之が葱坊主である。小花は熟して黑色の實になる。千住葱・岩槻葱・下仁田葱・秋田葱などが有名である。

［參照］春―葱の花（ネギ）、葱の擬寶（ギボ）　夏―刈葱（カリ）

例句

葱　根深ひく婆の草苗やあやめ草　其角（五元集拾遺）

冬苺（ふゆいちご）　寒苺（かんいちご）　きんいちご

季題解説　夏、白い花を開き、冬實が熟して赤くなる野生の灌木狀をした草本植物である。

莖は一尺位に伸び、長い葉柄の先に一葉をつけて、葉の表裏は粗糙な觸感かし裏には毛が生えてゐる。草苺のやうな長い蔓枝が出て繁殖する。山間各地に見かける植物であるが、特に多く集團して生育するやうなところはなく、喬木の下陰などに時偶見受ける程度のものである。味は山苺の如く、食べることが出來る。

參考事項　ふゆいちご Rubus Buergeri, Miq.（いばら科）山地に生ずる常綠の蔓性小灌木なり、莖は通常地に平臥し、往々諸所に根を出す。葉は稍圓形を呈せる掌狀葉にして、長柄を有し、邊緣は波狀樣をなせる淺き缺刻をなし、細齒牙を有す、莖葉共に毛茸を密生して粗糙なり、秋日葉腋に三四箇づつの白色花を開く、五瓣にして其實は冬日に至りて赤熟す。〔參照〕夏　懸鉤子（きいちご）

雪茸（はきたけ）　雪下茸（ゆきのした）

季題解説　朝鮮や東北・北海道などで雪中に採る茸である。未開農耕地の野地、椴（たも）の伐り株、又は枯損木に初雪後生するのである。傘開く水色で美味である。

えのきたけ　なめたけ　なめすゝき

季題解説　なめたけ・なめすゝき・なめこともいふ、冬季榎の朽ちた樹に叢生する。蓋の表面は粘性強く、莖の基部は黑色の密毛を以て被はれてゐる。寒中食用菌に乏しい時季に生ずるので生椎茸の代用品として珍重される。

あをさ　をさ　ちさのり　穴（あな）あをさ　葉廣（はひろ）あをさ　蟹（かに）あをさ

季題解説　俗に「石蓴（アヲサ）は寒で立つ」と云ひ、十一月下旬頃少し強い寒が始まると、淺海の岩石を覆つた鮮綠色のあをさが頓に目に立つて來る。形は不整圓形の薄い葉狀をしてゐる。關東地方のものは大型で質堅く、伊豆地方のは少し苦味があるといふことで何れも食用としない。九州の瀨詰、瀨戸附近には廣さ五・六分位の柔かい良質のものが澤山採れる。「あをさ汁」と云つて味噌汁などに入れて甚だ風味が佳い。採取期は立ちそめてから三月上旬頃までであるが、早期のものほどよい。なまくらの刄物などで岩石を掻いて採るのである。

石蓴はあをさ・をさ・ちさのりなどとも稱ばれてゐる。種類も穴あをさ・葉廣あをさ・蟹あをさなどがあり、蟹あをさは有毒である。

昭和八年十月十八日印刷
昭和八年十月廿二日發行

俳諧歳時記（冬の部）

編者　山本三生

發行者　山本三生
東京市芝區新橋七丁目十二番地

印刷者　村尾一雄
東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二

發兌　改造社
東京市芝區新橋七丁目十二番地
振替東京八四〇二番
電話芝(43)一一三一―一一二四

（株式會社秀英舍印刷）

（長谷部製本）